

OpenShift Container Platform 4.12

ネットワーク

クラスターネットワークの設定および管理

Last Updated: 2024-07-06

クラスターネットワークの設定および管理

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux [®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java [®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS [®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL [®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js [®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack [®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

この文書では、DNS、ingress および Pod ネットワークを含む、OpenShift Container Platform の クラスターネットワークを設定し、管理する方法を説明します。

目次

第1章 ネットワークの概要	. 7
第2章 ネットワークについて 2.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM DNS	. 8 8
2.2. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM INGRESS OPERATOR	8
2.3. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM ネットワーキングの一般用語集	9
第3章 ホストへのアクセス 3.1. インストーラーでプロビジョニングされるインフラストラクチャークラスターでの AMAZON WEB SERVIC のホストへのアクセス	12 CES 12
 第4章 ネットワーキング OPERATOR の概要 4.1. CLUSTER NETWORK OPERATOR 4.2. DNS OPERATOR 4.3. INGRESS OPERATOR 4.4. 外部 DNS OPERATOR 4.5. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR 4.6. NETWORK OBSERVABILITY OPERATOR 	13 13 13 13 13 13 13 13
 第5章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM における CLUSTER NETWORK OPERATOR 5.1. CLUSTER NETWORK OPERATOR 5.2. クラスターネットワーク設定の表示 5.3. CLUSTER NETWORK OPERATOR のステータス表示 5.4. CLUSTER NETWORK OPERATOR ログの表示 5.5. CLUSTER NETWORK OPERATOR (CNO) の設定 5.6. 関連情報 	14 14 15 15 15 24
 第6章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORMのDNS OPERATOR 6.1. DNS OPERATOR 6.2. DNS OPERATOR MANAGEMENTSTATE の変更 6.3. DNS POD 配置の制御 6.4. デフォルト DNS の表示 6.5. DNS 転送の使用 6.6. DNS OPERATOR のステータス 6.7. DNS OPERATOR のステータス 6.7. DNS OPERATOR ログ 6.8. COREDNS ログレベルの設定 6.9. COREDNS OPERATOR のログレベルの設定 6.10. COREDNS キャッシュのチューニング 	25 25 26 27 28 31 32 32 33 33
 第7章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM Ø INGRESS OPERATOR 7.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM INGRESS OPERATOR 7.2. INGRESS 設定アセット 7.3. INGRESS CONTROLLER 設定パラメーター 7.4. デフォルト INGRESS CONTROLLER の表示 7.5. INGRESS OPERATOR ステータスの表示 7.6. INGRESS CONTROLLER ログの表示 7.7. INGRESS CONTROLLER ステータスの表示 7.8. INGRESS CONTROLLER の設定 7.9. 関連情報 	 35 35 35 51 51 51 51 52 80
第8章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM での INGRESS シャーディング 8.1. INGRESS CONTROLLER のシャード化 8.2. INGRESS CONTROLLER シャーディングのルート作成	81 81 87

 第9章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORMのINGRESS NODE FIREWALL OPERATOR 9.1. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR 9.2. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR のインストール 9.3. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR のデプロイ 9.4. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR ルールの表示 9.5. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR のトラブルシューティング 	90 90 93 98 98
 第10章 手動 DNS 管理のための INGRESS CONTROLLER の設定 10.1. MANAGED DNS 管理ポリシー 10.2. UNMANAGED DNS 管理ポリシー 10.3. UNMANAGED DNS 管理ポリシーを使用したカスタム INGRESS CONTROLLER の作成 10.4. 既存の INGRESS CONTROLLER の変更 10.5. 関連情報 	100 100 100 100 101 102
第11章 INGRESS CONTROLLER エンドポイント公開戦略の設定 11.1. INGRESS CONTROLLER エンドポイントの公開ストラテジー 11.2. 関連情報	103 103 107
 第12章 エンドポイントへの接続の確認 12.1. 実行する接続ヘルスチェック 12.2. 接続ヘルスチェックの実装 12.3. PODNETWORKCONNECTIVITYCHECK オブジェクトフィールド 12.4. エンドポイントのネットワーク接続の確認 	108 108 108 108 111
第13章 クラスターネットワークの MTU 変更 13.1. クラスター MTU について 13.2. クラスター MTU の変更 13.3. 関連情報	116 116 118 124
第14章 ノードポートサービス範囲の設定 14.1. 前提条件 14.2. ノードのポート範囲の拡張 14.3. 関連情報	126 126 126 127
 第15章 IP フェイルオーバーの設定 15.1. IP フェイルオーバーの環境変数 15.2. クラスター内の IP フェイルオーバーの設定 15.3. CHECK スクリプトおよび NOTIFY スクリプトの設定 15.4. VRRP プリエンプションの設定 15.5. 複数の IP フェイルオーバーインスタンスのデプロイ 15.6. 254 を超えるアドレスについての IP フェイルオーバーの設定 15.7. EXTERNALIP の高可用性 15.8. IP フェイルオーバーの削除 	128 129 130 134 136 137 137 138 138
第16章 インターフェイスレベルのネットワーク SYSCTL の設定	141 141 144
 第17章 ベアメタルクラスターでの SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL)の使用 17.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM での SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL) のポート 17.2. SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL)の有効化 17.3. SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL)が有効になっていることの確認 第18章 PTP ハードウェアの使用	145 のサ 145 146 147 147 150

18.2. PTP について	150
18.3. CLI を使用した PTP OPERATOR のインストール	151
18.4. WEB コンソールを使用した PTP OPERATOR のインストール	153
18.5. PTP デバイスの設定	154
18.6. 一般的な PTP OPERATOR の問題のトラブルシューティング	175
18.7. PTP ハードウェアの高速イベント通知フレームワーク	177
第19章 外部 DNS OPERATOR	192
19.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM の外部 DNS OPERATOR	192
19.2. クラウドプロバイダーへの外部 DNS OPERATOR のインストール	193
19.3. 外部 DNS OPERATOR 設定パラメーター	194
19.4. AWS での DNS レコードの作成	197
19.5. AZURE での DNS レコードの作成	198
19.6. GCP での DNS レコードの作成	200
19.7. INFOBLOX での DNS レコードの作成	202
19.8. 外部 DNS OPERATOR でのクラスター全体のプロキシーの設定	204
第20章 ネットワークボリシー	206
	206
20.2. ネットワークホリシーの作成	211
20.3. ネットワークホリシーの表示	221
20.4. ネットワークホリシーの編集	223
20.5. ネットワークホリシーの削除 a = a = a = b = b = b = b = b = b = b =	225
20.6. ノロジェクトのテノオルトネットワークホリシーの定義	226
20.7. ネットワークホリシーを使用したマルナテナント分離の設定	229
第21章 CIDR 範囲の定義	233
21.1. MACHINE CIDR	233
21.2. SERVICE CIDR	233
21.3. POD CIDR	233
21.4. ホスト接頭辞	233
第22章 AWS LOAD BALANCER OPERATOR	234
22.1. AWS LOAD BALANCER OPERATOR リリースノート	234
22.2. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM $\mathcal O$ AWS LOAD BALANCER OPERATOR	235
22.3. AWS LOAD BALANCER OPERATOR のインストール	236
22.4. AWS SECURITY TOKEN SERVICE を使用したクラスター上の AWS LOAD BALANCER OPERATOR の ³	単備
	239
22.5. AWS LOAD BALANCER CONTROLLER のインスタンスを作成する	243
22.6.1つのAWS ロードハランサーを介して複数のINGRESS リソースを提供する	246
22.7. ILS TERMINATION の追加 22.9. カニスター会体のプロセン・の部分	249
22.8. クラスター全体のプロキシーの設定	251
第23章 複数ネットワーク	253
23.1. 複数ネットワークについて	253
23.2. 追加のネットワークの設定	254
23.3. 仮想ルーティングおよび転送について	268
23.4. マルチネットワークポリシーの設定	269
23.5. POD の追加のネットワークへの割り当て	284
23.6. 追加ネットワークからの POD の削除	289
23.7. 追加ネットワークの編集	290
23.8. 追加ネットワークの削除	291
23.9. VRF へのセカンタリーネットワークの割り当て	291
第24章 ハードウェアネットワーク	296

24	4.1. SINGLE ROOT I/O VIRTUALIZATION (SR-IOV) ハードウェアネットワークについて	296
24	4.2. SR-IOV NETWORK OPERATOR のインストール	303
24	4.3. SR-IOV NETWORK OPERATOR の設定	306
24	4.4. SR-IOV ネットワークデバイスの設定	313
24	4.5. SR-IOV イーサネットネットワーク割り当ての設定	322
24	4.6. SR-IOV INFINIBAND ネットワーク割り当ての設定	330
24	4.7. POD の SR-IOV の追加ネットワークへの追加	336
24	4.8. SR-IOV ネットワークのインターフェイスレベルのネットワーク SYSCTL 設定の設定	343
24	4.9. 高パフォーマンスのマルチキャストの使用	356
24	4.10. DPDK および RDMA の使用	358
24	4.11. POD レベルのボンディングの使用	376
24	4.12. ハードウェアオフロードの設定	379
24	4.13. BLUEFIELD-2 の DPU から NIC への切り替え	385
24	4.14. SR-IOV NETWORK OPERATOR のインストール	387
第2!	5章 OVN-KUBERNETES ネットワークプラグイン	389
25	5.1. OVN-KUBERNETES ネットワークプラグインについて	389
25	5.2. OVN-KUBERNETES のアーキテクチャー	392
2	5.3. OVN-KUBERNETES のトラブルシューティング	410
2	5.4. OVNKUBE-TRACE を使用した OPENFLOW のトレース	417
2	5.5. OPENSHIFT SDN ネットワークプラグインからの移行	424
25	5.6. OPENSHIFT SDN ネットワークプロバイダーへのロールバック	436
2	5.7. IPV4/IPV6 デュアルスタックネットワークへの変換	442
25	5.8. EGRESS ファイアウォールとネットワークポリシールールのロギング	444
25	5.9. IPSEC 暗号化の設定	452
2	5.10. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの設定	456
25	5.11. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの表示	461
25	5.12. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの編集	462
25	5.13. プロジェクトからの EGRESS ファイアウォールの削除	463
2	5.14. EGRESS IP アドレスの設定	463
2	5.15. EGRESS IP アドレスの割り当て	472
2	5.16. EGRESS ルーター POD の使用についての考慮事項	473
2	5.17. リダイレクトモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ	476
2	5.18. プロジェクトのマルチキャストの有効化	481
2	5.19. プロジェクトのマルチキャストの無効化	483
25	5.20. ネットワークフローの追跡	484
2	5.21. ハイブリッドネットワークの設定	488
第20	6章 OPENSHIFT SDN ネットワークプラグイン	491
20	6.1. OPENSHIFT SDN ネットワークプラグインについて	491
20	6.2. OPENSHIFT SDN ネットワークプラグインへの移行	492
26	6.3. OVN-KUBERNETES ネットワークプラグインへのロールバック	498
26	6.4. プロジェクトの EGRESS IP の設定	505
26	6.5. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの設定	513
26	6.6. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの編集	519
26	6.7. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの編集	520
20	6.8. プロジェクトからの EGRESS ファイアウォールの削除	521
20	6.9. EGRESS ルーター POD の使用についての考慮事項	521
20	6.10. リダイレクトモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ	524
20	6.11. HTTP プロキシーモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ	527
20	6.12. DNS プロキシーモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ	530
20	6.13. CONFIG MAP からの EGRESS ルーター POD 宛先一覧の設定	532
20	6.14. プロジェクトのマルチキャストの有効化	534

26.15. プロジェクトのマルチキャストの無効化	537
26.16. OPENSHIFT SDN を使用したネットワーク分離の設定	537
26.17. KUBE-PROXY の設定	539
第27章 ルートの作成	542
27.1. ルート設定	542
27.2. セキュリティー保護されたルート	569
 第28章 INGRESS クラスタートラフィックの設定の概要 28.1. INGRESS クラスタートラフィックの設定の概要 28.2. サービスの EXTERNALIP の設定 28.3. INGRESS CONTROLLER を使用した INGRESS クラスターの設定 28.4. ロードバランサーを使用した INGRESS クラスターの設定 28.5. AWS での INGRESS クラスタートラフィックの設定 28.6. サービスの外部 IP を使用した INGRESS クラスタートラフィックの設定 28.7. NODEPORT を使用した INGRESS クラスタートラフィックの設定 28.8. ロードバランサーの許可された送信元範囲を使用した INGRESS クラスタートラフィックの設定 第29章 KUBERNETES NMSTATE 	574 575 581 589 593 601 603 606 609
29.1. KUBERNETES NMSTATE OPERATOR について	609
29.2. ノードのネットワーク状態と設定の監視と更新	612
29.3. ノードのネットワーク設定のトラブルシューティング	626
第30章 クラスター全体のプロキシーの設定	631
30.1. 前提条件	631
30.2. クラスター全体のプロキシーの有効化	631
30.3. クラスター全体のプロキシーの削除	633
第31章 カスタム PKI の設定	635
31.1. インストール時のクラスター全体のプロキシーの設定	635
31.2. クラスター全体のプロキシーの有効化	637
31.3. OPERATOR を使用した証明書の挿入	639
 第32章 RHOSPでの負荷分散 32.1. ロードバランサーサービスの制限 32.2. KURYR SDN を使用した OCTAVIA OVN ロードバランサープロバイダードライバーの使用 32.3. OCTAVIA を使用したアプリケーショントラフィック用のクラスターのスケーリング 32.4. RHOSP OCTAVIA を使用した INGRESS トラフィックのスケーリング 32.5. 外部ロードバランサー用のサービス 	642 642 642 644 647 649
 第33章 METALLB を使用した負荷分散 33.1. METALLB および METALLB OPERATOR について 33.2. METALLB OPERATOR のインストール 33.3. METALLB のアップグレード 33.4. METALLB アドレスプールの設定 33.5. IP アドレスプールのアドバタイズメントについて 33.6. METALLB BGP ピアの設定 33.7. コミュニティーエイリアスの設定 33.8. METALLB BFD プロファイルの設定 33.9. METALLB を使用するためのサービスの設定 33.10. METALLB のロギング、トラブルシューティング、サポート 	658 657 676 681 684 699 701 703 708
第34章 セカンダリーインターフェイスメトリクスのネットワーク割り当てへの関連付け	718

34.1. モニタリングのためのセカンダリーネットワークメトリックの拡張

目次

718

第1章 ネットワークの概要

Red Hat OpenShift Networking は、1つまたは複数のハイブリッドクラスターのネットワークトラ フィックを管理するためにクラスターが必要とする高度なネットワーク関連機能で Kubernetes ネット ワーキングを拡張する機能、プラグイン、高度なネットワーク機能のエコシステムです。このネット ワーキング機能のエコシステムは、ingress、egress、ロードバランシング、高性能スループット、セ キュリティー、クラスター間およびクラスター内のトラフィック管理を統合し、ロールベースの可観測 性ツールを提供して複雑さを軽減します。

以下のリストは、クラスターで利用可能な最も一般的に使用される Red Hat OpenShift Networking 機能の一部を強調しています。

- 次の Container Network Interface (CNI) プラグインのいずれかによって提供されるプライマ リークラスターネットワーク:
 - OVN-Kubernetes ネットワークプラグイン (デフォルトのプラグイン)
 - OpenShift SDN ネットワークプラグイン
- 認定されたサードパーティーの代替プライマリーネットワークプラグイン
- ネットワークプラグイン管理用の Cluster Network Operator
- TLS 暗号化 Web トラフィックの Ingress Operator
- 名前割り当てのための DNS Operator
- ベアメタルクラスターでのトラフィック負荷分散用の MetalLB Operator
- 高可用性のための IP フェイルオーバーのサポート
- macvlan、ipvlan、SR-IOV ハードウェアネットワークなど、複数の CNI プラグインによる追加のハードウェアネットワークサポート
- IPv4、IPv6、およびデュアルスタックアドレッシング
- Windows ベースのワークロード用のハイブリッド Linux-Windows ホストクラスター
- サービスのディスカバリー、ロードバランシング、サービス間認証、障害リカバリー、メトリクス、およびモニター用の Red Hat OpenShift Service Mesh
- シングルノード OpenShift
- ネットワークのデバッグと洞察のための Network Observability Operator
- クラスター間ネットワーク用の Submariner
- レイヤー7クラスター間ネットワーク用の Red Hat Service Interconnect

第2章 ネットワークについて

クラスター管理者は、クラスターで実行されるアプリケーションを外部トラフィックに公開し、ネット ワーク接続のセキュリティーを保護するための複数のオプションがあります。

- ノードポートやロードバランサーなどのサービスタイプ
- Ingress や Route などの API リソース

デフォルトで、Kubernetes は各 Pod に、Pod 内で実行しているアプリケーションの内部 IP アドレス を割り当てます。Pod とそのコンテナーはネットワーク接続が可能ですが、クラスター外のクライアン トにはネットワークアクセスがありません。アプリケーションを外部トラフィックに公開する場合、各 Pod に IP アドレスを割り当てると、ポートの割り当て、ネットワーク、名前の指定、サービス検出、 負荷分散、アプリケーション設定、移行などの点で、Pod を物理ホストや仮想マシンのように扱うこと ができます。

注記

ー部のクラウドプラットフォームでは、169.254.169.254 IP アドレスでリッスンするメタ データ API があります。これは、IPv4 **169.254.0.0**/16 CIDR ブロックのリンクローカル IP アドレスです。

この CIDR ブロックは Pod ネットワークから到達できません。これらの IP アドレスへの アクセスを必要とする Pod には、Pod 仕様の **spec.hostNetwork** フィールドを **true** に 設定して、ホストのネットワークアクセスが付与される必要があります。

Pod ホストのネットワークアクセスを許可する場合、Pod に基礎となるネットワークインフラストラクチャーへの特権アクセスを付与します。

2.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM DNS

フロントエンドサービスやバックエンドサービスなど、複数のサービスを実行して複数の Pod で使用 している場合、フロントエンド Pod がバックエンドサービスと通信できるように、ユーザー名、サー ビス IP などの環境変数を作成します。サービスが削除され、再作成される場合には、新規の IP アドレ スがそのサービスに割り当てられるので、フロントエンド Pod がサービス IP の環境変数の更新された 値を取得するには、これを再作成する必要があります。さらに、バックエンドサービスは、フロントエ ンド Pod を作成する前に作成し、サービス IP が正しく生成され、フロントエンド Pod に環境変数とし て提供できるようにする必要があります。

そのため、OpenShift Container Platform には DNS が組み込まれており、これにより、サービスは、 サービス IP/ポートと共にサービス DNS によって到達可能になります。

2.2. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM INGRESS OPERATOR

OpenShift Container Platform クラスターを作成すると、クラスターで実行している Pod およびサービ スにはそれぞれ独自の IP アドレスが割り当てられます。IP アドレスは、近くで実行されている他の Pod やサービスからアクセスできますが、外部クライアントの外部からはアクセスできません。Ingress Operator は **IngressController** API を実装し、OpenShift Container Platform クラスターサービスへの 外部アクセスを可能にするコンポーネントです。

Ingress Operator を使用すると、ルーティングを処理する1つ以上の HAProxy ベースの Ingress Controller をデプロイおよび管理することにより、外部クライアントがサービスにアクセスできるよう になります。OpenShift Container Platform **Route** および Kubernetes **Ingress** リソースを指定して、ト ラフィックをルーティングするために Ingress Operator を使用します。**endpointPublishingStrategy** タイプおよび内部負荷分散を定義する機能などの Ingress Controller 内の設定は、Ingress Controller エ ンドポイントを公開する方法を提供します。

2.2.1. ルートと Ingress の比較

OpenShift Container Platform の Kubernetes Ingress リソースは、クラスター内で Pod として実行され る共有ルーターサービスと共に Ingress Controller を実装します。Ingress トラフィックを管理する最も 一般的な方法は Ingress Controller を使用することです。他の通常の Pod と同様にこの Pod をスケーリ ングし、複製できます。このルーターサービスは、オープンソースのロードバランサーソリューション である HAProxy をベースとしています。

OpenShift Container Platform ルートは、クラスターのサービスに Ingress トラフィックを提供しま す。ルートは、Blue-Green デプロイメント向けに TLS 再暗号化、TLS パススルー、分割トラフィック などの標準の Kubernetes Ingress Controller でサポートされない可能性のある高度な機能を提供しま す。

Ingress トラフィックは、ルートを介してクラスターのサービスにアクセスします。ルートおよび Ingress は、Ingress トラフィックを処理する主要なリソースです。Ingress は、外部要求を受け入れ、 ルートに基づいてそれらを委譲するなどのルートと同様の機能を提供します。ただし、Ingress では、 特定タイプの接続 (HTTP/2、HTTPS およびサーバー名 ID(SNI)、ならび証明書を使用した TLS のみを 許可できます。OpenShift Container Platform では、ルートは、Ingress リソースで指定される各種の条 件を満たすために生成されます。

2.3. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM ネットワーキングの一般用語 集

この用語集では、ネットワーキングコンテンツで使用される一般的な用語を定義します。

authentication

OpenShift Container Platform クラスターへのアクセスを制御するために、クラスター管理者はユー ザー認証を設定し、承認されたユーザーのみがクラスターにアクセスできます。OpenShift Container Platform クラスターと対話するには、OpenShift Container Platform API に対して認証す る必要があります。OpenShift Container Platform API へのリクエストで、OAuth アクセストークン または X.509 クライアント証明書を提供することで認証できます。

AWS Load Balancer Operator

AWS Load Balancer (ALB) Operator は、**aws-load-balancer-controller** のインスタンスをデプロイ および管理します。

Cluster Network Operator

Cluster Network Operator (CNO) は、OpenShift Container Platform クラスター内のクラスター ネットワークコンポーネントをデプロイおよび管理します。これには、インストール時にクラス ター用に選択された Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインのデプロイが含ま れます。

config map

config map は、設定データを Pod に注入する方法を提供します。タイプ **ConfigMap** のボリューム 内の config map に格納されたデータを参照できます。Pod で実行しているアプリケーションは、こ のデータを使用できます。

カスタムリソース (CR)

CR は Kubernetes API の拡張です。カスタムリソースを作成できます。

DNS

クラスター DNS は、Kubernetes サービスの DNS レコードを提供する DNS サーバーです。 Kubernetes により開始したコンテナーは、DNS 検索にこの DNS サーバーを自動的に含めます。

DNS Operator

DNS Operator は、CoreDNS をデプロイして管理し、Pod に名前解決サービスを提供します。これ により、OpenShift Container Platform で DNS ベースの Kubernetes サービス検出が可能になりま す。

deployment

アプリケーションのライフサイクルを維持する Kubernetes リソースオブジェクト。

domain

ドメインは、Ingress Controller によってサービスされる DNS 名です。

egress

Pod からのネットワークのアウトバウンドトラフィックを介して外部とデータを共有するプロセス。

外部 DNS Operator

外部 DNS Operator は、ExternalDNS をデプロイして管理し、外部 DNS プロバイダーから OpenShift Container Platform へのサービスおよびルートの名前解決を提供します。

HTTP ベースのルート

HTTP ベースのルートとは、セキュアではないルートで、基本的な HTTP ルーティングプロトコル を使用してセキュリティー保護されていないアプリケーションポートでサービスを公開します。

Ingress

OpenShift Container Platform の Kubernetes Ingress リソースは、クラスター内で Pod として実行 される共有ルーターサービスと共に Ingress Controller を実装します。

Ingress Controller

Ingress Operator は Ingress Controller を管理します。Ingress Controller の使用は、最も一般的な、 OpenShift Container Platform クラスターへの外部アクセスを許可する方法です。

インストーラーでプロビジョニングされるインフラストラクチャー

インストールプログラムは、クラスターが実行されるインフラストラクチャーをデプロイして設定 します。

kubelet

コンテナーが Pod で実行されていることを確認するために、クラスター内の各ノードで実行される プライマリーノードエージェント。

Kubernetes NMState Operator

Kubernetes NMState Operator は、NMState の OpenShift Container Platform クラスターのノード 間でステートドリブンのネットワーク設定を実行するための Kubernetes API を提供します。

kube-proxy

Kube-proxy は、各ノードで実行するプロキシーサービスであり、外部ホストがサービスを利用でき るようにするのに役立ちます。リクエストを正しいコンテナーに転送するのに役立ち、基本的な負 荷分散を実行できます。

ロードバランサー

OpenShift Container Platform は、ロードバランサーを使用して、クラスターの外部からクラスター で実行されているサービスと通信します。

MetalLB Operator

クラスター管理者は、MetalLB Operator をクラスターに追加し、タイプ **LoadBalancer** のサービス がクラスターに追加されると、MetalLB はサービスの外部 IP アドレスを追加できます。

multicast

IP マルチキャストを使用すると、データが多数の IP アドレスに同時に配信されます。

namespace

namespace は、すべてのプロセスから見える特定のシステムリソースを分離します。namespace 内 では、その namespace のメンバーであるプロセスのみがそれらのリソースを参照できます。

networking

OpenShift Container Platform クラスターのネットワーク情報。

node

OpenShift Container Platform クラスター内のワーカーマシン。ノードは、仮想マシン (VM) または 物理マシンのいずれかです。

OpenShift Container Platform Ingress Operator

Ingress Operator は **IngressController** API を実装し、OpenShift Container Platform サービスへの 外部アクセスを可能にするコンポーネントです。

Pod

OpenShift Container Platform クラスターで実行されている、ボリュームや IP アドレスなどの共有 リソースを持つ1つ以上のコンテナー。Pod は、定義、デプロイ、および管理される最小のコン ピュート単位です。

PTP Operator

PTP Operator は、linuxptp サービスを作成し、管理します。

route

OpenShift Container Platform ルートは、クラスターのサービスに Ingress トラフィックを提供しま す。ルートは、Blue-Green デプロイメント向けに TLS 再暗号化、TLS パススルー、分割トラ フィックなどの標準の Kubernetes Ingress Controller でサポートされない可能性のある高度な機能を 提供します。

スケーリング

リソース容量の増減。

サービス

ー連の Pod で実行中のアプリケーションを公開します。

シングルルート I/O 仮想化 (SR-IOV) Network Operator

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ネットワーク Operator は、クラスターで SR-IOV ネット ワークデバイスおよびネットワーク割り当てを管理します。

ソフトウェア定義ネットワーク (SDN)

OpenShift Container Platform は、Software Defined Networking (SDN) アプローチを使用して、ク ラスターのネットワークを統合し、OpenShift Container Platform クラスターの Pod 間の通信を可 能にします。

SCTP (Stream Control Transmission Protocol)

SCTP は、IP ネットワークの上部で実行される信頼できるメッセージベースのプロトコルです。

taint

テイントと容認により、Pod が適切なノードに確実にスケジュールされます。ノードに1つ以上の テイントを適用できます。

容認

Pod に容認を適用できます。Tolerations を使用すると、スケジューラーは、テイントが一致する Pod をスケジュールできます。

Web コンソール

OpenShift Container Platform を管理するためのユーザーインターフェイス (UI)。

第3章 ホストへのアクセス

OpenShift Container Platform インスタンスにアクセスして、セキュアシェル (SSH) アクセスでコント ロールプレーンノードにアクセスするために bastion ホストを作成する方法を学びます。

3.1. インストーラーでプロビジョニングされるインフラストラクチャークラ スターでの AMAZON WEB SERVICES のホストへのアクセス

OpenShift Container Platform インストーラーは、OpenShift Container Platform クラスターにプロビ ジョニングされる Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスのパブリック IP アドレ スを作成しません。OpenShift Container Platform ホストに対して SSH を実行できるようにするには、 以下の手順を実行する必要があります。

手順

- 1. **openshift-install** コマンドで作成される仮想プライベートクラウド (VPC) に対する SSH アク セスを可能にするセキュリティーグループを作成します。
- 2. インストーラーが作成したパブリックサブネットのいずれかに Amazon EC2 インスタンスを作成します。
- パブリック IP アドレスを、作成した Amazon EC2 インスタンスに関連付けます。
 OpenShift Container Platform のインストールとは異なり、作成した Amazon EC2 インスタン スを SSH キーペアに関連付ける必要があります。これにはインターネットを OpenShift Container Platform クラスターの VPC にブリッジ接続するための SSH bastion としてのみの単 純な機能しかないため、このインスタンスにどのオペレーティングシステムを選択しても問題 ありません。どの Amazon Machine Image (AMI) を使用するかについては、注意が必要です。 たとえば、Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS) では、インストーラーと同様に、 Ignition でキーを指定することができます。
- Amazon EC2 インスタンスをプロビジョニングし、これに対して SSH を実行した後に、 OpenShift Container Platform インストールに関連付けた SSH キーを追加する必要がありま す。このキーは bastion インスタンスのキーとは異なる場合がありますが、異なるキーにしな ければならない訳ではありません。



注記

直接の SSH アクセスは、障害復旧を目的とする場合にのみ推奨されます。 Kubernetes API が応答する場合、特権付き Pod を代わりに実行します。

- 5. oc get nodes を実行し、出力を検査し、マスターであるノードのいずれかを選択します。ホス ト名は ip-10-0-1-163.ec2.internal に類似したものになります。
- 6. Amazon EC2 に手動でデプロイした bastion SSH ホストから、そのコントロールプレーンホス トに SSH を実行します。インストール時に指定したものと同じ SSH キーを使用するようにし ます。

\$ ssh -i <ssh-key-path> core@<master-hostname>

第4章 ネットワーキング OPERATOR の概要

OpenShift Container Platform は、複数のタイプのネットワーキング Operator をサポートします。こ れらのネットワーク Operator を使用して、クラスターネットワークを管理できます。

4.1. CLUSTER NETWORK OPERATOR

Cluster Network Operator (CNO) は、OpenShift Container Platform クラスター内のクラスターネット ワークコンポーネントをデプロイおよび管理します。これには、インストール時にクラスター用に選択 された Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインのデプロイが含まれます。詳細 は、OpenShift Container Platform における Cluster Network Operator を参照してください。

4.2. DNS OPERATOR

DNS Operator は、CoreDNS をデプロイして管理し、Pod に名前解決サービスを提供します。これに より、OpenShift Container Platform で DNS ベースの Kubernetes サービス検出が可能になります。詳 細は、OpenShift Container Platform の DNS Operator を参照してください。

4.3. INGRESS OPERATOR

OpenShift Container Platform クラスターを作成すると、クラスターで実行している Pod およびサービ スにはそれぞれの IP アドレスが割り当てられます。IP アドレスは、近くで実行されている他の Pod や サービスからアクセスできますが、外部クライアントの外部からはアクセスできません。Ingress Operator は Ingress Controller API を実装し、OpenShift Container Platform クラスターサービスへの 外部アクセスを可能にします。詳細は、OpenShift Container Platform の Ingress Operator を参照して ください。

4.4. 外部 DNS OPERATOR

外部 DNS Operator は、ExternalDNS をデプロイして管理し、外部 DNS プロバイダーから OpenShift Container Platform へのサービスおよびルートの名前解決を提供します。詳細は、Understanding the External DNS Operator を参照してください。

4.5. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR

Ingress Node Firewall Operator は、拡張された Berkley Packet Filter (eBPF) と eXpress Data Path (XDP) プラグインを使用して、ノードファイアウォールルールを処理し、統計を更新し、ドロップされ たトラフィックのイベントを生成します。Operator は、Ingress ノードファイアウォールリソースを管 理し、ファイアウォール設定を検証し、クラスターアクセスを妨げる可能性がある誤設定されたルール を許可せず、ルールのオブジェクトで選択されたインターフェイスに Ingress ノードファイアウォール XDP プログラムをロードします。詳細は、Ingress Node Firewall Operator についてを参照してくださ い。

4.6. NETWORK OBSERVABILITY OPERATOR

Network Observability Operator は、クラスター管理者が OpenShift Container Platform クラスターの ネットワークトラフィックを観察するために使用できるオプションの Operator です。Network Observability Operator は、eBPF テクノロジーを使用してネットワークフローを作成します。その後、 ネットワークフローは OpenShift Container Platform 情報で強化され、Loki に保存されます。保存され たネットワークフロー情報を OpenShift Container Platform コンソールで表示および分析して、さらな る洞察とトラブルシューティングを行うことができます。詳細は、Network Observability Operator に ついて を参照してください。

第5章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM における CLUSTER NETWORK OPERATOR

Cluster Network Operator (CNO) は、インストール時にクラスター用に選択される Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインを含む、OpenShift Container Platform クラスターの各種のク ラスターネットワークコンポーネントをデプロイし、これらを管理します。

5.1. CLUSTER NETWORK OPERATOR

Cluster Network Operator は、**operator.openshift.io** API グループから **network** API を実装します。 Operator は、デーモンセットを使用して、クラスターのインストール中に選択した OVN-Kubernetes ネットワークプラグインまたはネットワークプロバイダープラグインをデプロイします。

手順

Cluster Network Operator は、インストール時に Kubernetes **Deployment** としてデプロイされます。

1. 以下のコマンドを実行して Deployment のステータスを表示します。

\$ oc get -n openshift-network-operator deployment/network-operator

出力例

NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE network-operator 1/1 1 1 56m

2. 以下のコマンドを実行して、Cluster Network Operator の状態を表示します。

\$ oc get clusteroperator/network

出力例

NAME VERSION AVAILABLE PROGRESSING DEGRADED SINCE network 4.5.4 True False False 50m

以下のフィールドは、Operator のステータス (**AVAILABLE、PROGRESSING**、および **DEGRADED**) についての情報を提供します。**AVAILABLE** フィールドは、Cluster Network Operator が Available ステータス条件を報告する場合に **True** になります。

5.2. クラスターネットワーク設定の表示

すべての新規 OpenShift Container Platform インストールには、**cluster** という名前の **network.config** オブジェクトがあります。

手順

• oc describe コマンドを使用して、クラスターネットワーク設定を表示します。

\$ oc describe network.config/cluster

出力例

Name: cluster Namespace: Labels: <none> Annotations: <none> API Version: config.openshift.io/v1 Kind: Network Metadata: Self Link: /apis/config.openshift.io/v1/networks/cluster Spec: 1 Cluster Network: Cidr: 10.128.0.0/14 Host Prefix: 23 Network Type: OpenShiftSDN Service Network: 172.30.0.0/16 Status: 2 Cluster Network: Cidr: 10.128.0.0/14 Host Prefix: 23 Cluster Network MTU: 8951 Network Type: OpenShiftSDN Service Network: 172.30.0.0/16 Events: <none> Spec フィールドは、クラスターネットワークの設定済みの状態を表示します。 Status フィールドは、クラスターネットワークの現在の状態を表示します。

5.3. CLUSTER NETWORK OPERATOR のステータス表示

oc describe コマンドを使用して、Cluster Network Operator のステータスを検査し、その詳細を表示 することができます。

手順

• 以下のコマンドを実行して、Cluster Network Operator のステータスを表示します。

\$ oc describe clusteroperators/network

5.4. CLUSTER NETWORK OPERATOR ログの表示

oc logs コマンドを使用して、Cluster Network Operator ログを表示できます。

手順

• 以下のコマンドを実行して、Cluster Network Operator のログを表示します。

\$ oc logs --namespace=openshift-network-operator deployment/network-operator

5.5. CLUSTER NETWORK OPERATOR (CNO)の設定

クラスターネットワークの設定は、Cluster Network Operator (CNO) 設定の一部として指定され、cluster という名前のカスタムリソース (CR) オブジェクトに保存されます。CR は operator.openshift.io API グループの Network API のフィールドを指定します。

CNO 設定は、**Network.config.openshift.io** API グループの **Network** API からクラスターのインストール時に以下のフィールドを継承し、これらのフィールドは変更できません。

clusterNetwork

Pod IP アドレスの割り当てに使用する IP アドレスプール。

serviceNetwork

サービスの IP アドレスプール。

defaultNetwork.type

OpenShift SDN や OVN-Kubernetes などのクラスターネットワークプラグイン。



注記

クラスターのインストール後に、直前のセクションで一覧表示されているフィールドを 変更することはできません。

defaultNetwork オブジェクトのフィールドを **cluster** という名前の CNO オブジェクトに設定すること により、クラスターのクラスターネットワークプラグイン設定を指定できます。

5.5.1. Cluster Network Operator 設定オブジェクト

Cluster Network Operator (CNO) のフィールドは以下の表で説明されています。

表5.1 Cluster Network Operator 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
metadata.name	string	CNO オブジェクトの名前。この名前は常に cluster です。
spec.clusterNet work	array	Pod ID アドレスの割り当て、サブネット接頭辞の長さのクラス ター内の個別ノードへの割り当てに使用される IP アドレスのブ ロックを指定するリストです。以下に例を示します。 spec: clusterNetwork: - cidr: 10.128.0.0/19 hostPrefix: 23 - cidr: 10.128.32.0/19 hostPrefix: 23
		クトから継承されます。

フィールド	型	説明
spec.serviceNet work	array	サービスの IP アドレスのブロック。OpenShift SDN および OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、サービスネット ワークの単一 IP アドレスブロックのみをサポートします。以下 に例を示します。 spec: serviceNetwork: - 172.30.0.0/14 この値は読み取り専用であり、クラスターのインストール時に cluster という名前の Network.config.openshift.io オブジェ クトから継承されます。
spec.defaultNet work	object	クラスターネットワークのネットワークプラグインを設定しま す。
spec.kubeProxy Config	object	このオブジェクトのフィールドは、kube-proxy 設定を指定しま す。OVN-Kubernetes クラスターネットワークプラグインを使 用している場合、kube-proxy 設定は機能しません。

defaultNetwork オブジェクト設定 defaultNetwork オブジェクトの値は、以下の表で定義されます。

表5.2 defaultNetwork オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	OpenShiftSDN または OVNKubernetes のいずれか。Red Hat OpenShift Networking ネットワークプラグインは、インストール中に選択されます。この値は、クラスターのインストール後は変更できません。
openshiftSDNConfig	object	このオブジェクトは、OpenShift SDN ネットワーク プラグインに対してのみ有効です。
ovnKubernetesConfig	object	このオブジェクトは、OVN-Kubernetes ネットワー クプラグインに対してのみ有効です。

OpenShift SDN ネットワークプラグインの設定

以下の表では、OpenShift SDN ネットワークプラグインの設定フィールドについて説明します。

表5.3 openshiftSDNConfig オブジェクト

フィールド	型	説明
mode	string	OpenShiftSDN のネットワーク分離モード。
mtu	integer	VXLAN オーバーレイネットワークの最大転送単位 (MTU)。通 常、この値は自動的に設定されます。
vxlanPort	integer	すべての VXLAN パケットに使用するポート。デフォルト値は 4789 です。



注記

クラスターのインストール時にのみクラスターネットワークプラグインの設定を変更す ることができます。

OpenShift SDN 設定の例

defaultNetwork: type: OpenShiftSDN openshiftSDNConfig: mode: NetworkPolicy mtu: 1450 vxlanPort: 4789

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインの設定

次の表では、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインの設定フィールドについて説明します。

表5.4 ovnKubernetesConfig オブジェクト

フィールド	型	説明
mtu	integer	Geneve (Generic Network Virtualization Encapsulation) オー バーレイネットワークの MTU (maximum transmission unit)。通 常、この値は自動的に設定されます。
genevePort	integer	Geneve オーバーレイネットワークの UDP ポート。
ipsecConfig	object	フィールドがある場合、IPsec はクラスターに対して有効にされ ます。
policyAuditConf ig	object	ネットワークポリシー監査ロギングをカスタマイズする設定オ ブジェクトを指定します。指定されていない場合は、デフォル トの監査ログ設定が使用されます。

フィールド	型	説明	
gatewayConfig	object	オプション: ec 方法をカスタ ^ー す。	gress トラフィックのノードゲートウェイへの送信 マイズするための設定オブジェクトを指定しま
			注記 egress トラフィックの移行中は、Cluster Network Operator (CNO) が変更を正常にロー ルアウトするまで、ワークロードとサービスト ラフィックに多少の中断が発生することが予想 されます。

フィールド	型	説明
v4InternalSubne t	 既存のネットワークインフラストラクチャーが 100.64.0.0/16 IPv4 サブネットと重複している場合は、OVN- Kubernetes による内部のために別のIPアドレス範囲のために別のIPアドレス範囲が、OpenShift Container Platform インストールの切して、シストーンの切した。 Platform インストールででガネいよります。 IP クラスタントンス IP クラスタントンス IP クラスタントンス ID 128.0.0/14 Container ClusterNetwork.hostPrefix ID 128.0.0/14 Container ID 128.0.0/14 ID 128.0.0/14 ID 128.0.0/14 ID 128.0.0.0	デフォルト値は 100.64.0.0/16 です。

フィールド	型	説明
v6InternalSubne t	既存のネットワー クインラストラ クチャーが fd98::/48 IPv6 サ ブる場合では、のVN- Kubernetes による 内別囲すにしていたいでは のを1P アででレス範 囲のを1P アででレス 1P プででレス 1P プででレス 1P つのを1P アででレス 1P つのを1P アででレス 1P つのを1P プででしていたいで 1P つのを1P クロンス トるとにすすのに、追ののすう。 はにのする。はにのする。 リードきます。 クードきます。 のフィンスできましい たいできません。	デフォルト値は fd98::/48 です。

表5.5 policyAuditConfig オブジェクト

フィールド	型	説明
rateLimit	integer	ノードごとに毎秒生成されるメッセージの最大数。デフォルト 値は、1秒あたり 20 メッセージです。
maxFileSize	integer	監査ログの最大サイズ (バイト単位)。デフォルト値は 50000000 (50MB) です。

フィールド	型	説明
destination	string	以下の追加の監査ログターゲットのいずれかになります。
		<pre>libc ホスト上の journald プロセスの libc syslog() 関数。 udp:<host>:<port> syslog サーバー。<host>:<port> を syslog サーバーのホス トおよびポートに置き換えます。 unix:<file> <file> で指定された Unix ドメインソケットファイル。 null 監査ログを追加のターゲットに送信しないでください。</file></file></port></host></port></host></pre>
syslogFacility	string	RFC5424 で定義される kern などの syslog ファシリティー。デ フォルト値は local0 です。

表5.6 gatewayConfig オブジェクト

フィールド	型	説明
routingViaHost	boolean	Pod からホストネットワークスタックへの egress トラフィック を送信するには、このフィールドを true に設定します。インス トールおよびアプリケーションがカーネルルーティングテーブ ルに手動設定されたルートに依存するなど非常に特化されてい る場合には、egress トラフィックをホストネットワークスタッ クにルーティングすることを推奨します。デフォルトでは、 egress トラフィックは OVN で処理され、クラスターを終了する ために処理され、トラフィックはカーネルルーティングテーブ ルの特殊なルートによる影響を受けません。デフォルト値は false です。
		このフィールドで、Open vSwitch ハードウェアオフロード機能 との対話が可能になりました。このフィールドを true に設定す ると、egress トラフィックがホストネットワークスタックで処 理されるため、パフォーマンス的に、オフロードによる利点は 得られません。



注記

クラスターのインストール中にのみクラスターネットワークプラグインの設定を変更で きます。ただし、インストール後のアクティビティーとして実行時に変更でき るgatewayConfigフィールドは除きます。

IPsec が有効な OVN-Kubernetes 設定の例

defaultNetwork: type: OVNKubernetes ovnKubernetesConfig: mtu: 1400 genevePort: 6081 ipsecConfig: {}

kubeProxyConfig オブジェクト設定 kubeProxyConfig オブジェクトの値は以下の表で定義されます。

表5.7 kubeProxyConfig オブジェクト

フィールド	型	説明
iptablesSyncPeriod	string	 iptables ルールの更新期間。デフォルト値は 30s です。有効な接尾辞には、s、m、およびh などが含まれ、これらについては、Go time パッケージドキュメントで説明されています。 注記 OpenShift Container Platform 4.3 以降で強化されたパフォーマンスの向上により、iptablesSyncPeriod パラメーターを調整する必要はなくなりました。
proxyArguments.iptables- min-sync-period	array	iptables ルールを更新する前の最小期間。この フィールドにより、更新の頻度が高くなり過ぎない ようにできます。有効な接尾辞には、 s、m 、および h などが含まれ、これらについては、Go time パッ ケージ で説明されています。デフォルト値: kubeProxyConfig: proxyArguments: iptables-min-sync-period: - 0s

5.5.2. Cluster Network Operator の設定例

以下の例では、詳細な CNO 設定が指定されています。

Cluster Network Operator オブジェクトのサンプル

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
clusterNetwork: 1
- cidr: 10.128.0.0/14
hostPrefix: 23
serviceNetwork: 2
- 172.30.0.0/16
defaultNetwork: 3

type: OpenShiftSDN openshiftSDNConfig: mode: NetworkPolicy mtu: 1450 vxlanPort: 4789 kubeProxyConfig: iptablesSyncPeriod: 30s proxyArguments: iptables-min-sync-period: - 0s



5.6. 関連情報

• operator.openshift.io API グループの Network API

第6章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM の DNS OPERATOR

DNS Operator は、Pod に対して名前解決サービスを提供するために CoreDNS をデプロイし、これを 管理し、OpenShift Container Platform での DNS ベースの Kubernetes サービス検出を可能にします。

6.1. DNS OPERATOR

DNS Operator は、**operator.openshift.io** API グループから **dns** API を実装します。この Operator は、デーモンセットを使用して CoreDNS をデプロイし、デーモンセットのサービスを作成し、kubelet を Pod に対して名前解決に CoreDNS サービス IP を使用するように指示するように設定します。

手順

DNS Operator は、インストール時に **Deployment** オブジェクトを使用してデプロイされます。

1. oc get コマンドを使用してデプロイメントのステータスを表示します。

\$ oc get -n openshift-dns-operator deployment/dns-operator

出力例

```
NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE dns-operator 1/1 1 1 23h
```

2. oc get コマンドを使用して DNS Operator の状態を表示します。

\$ oc get clusteroperator/dns

出力例

NAME VERSION AVAILABLE PROGRESSING DEGRADED SINCE dns 4.1.0-0.11 True False False 92m

AVAILABLE、PROGRESSING および **DEGRADED** は、Operator のステータスについての情報を提供します。**AVAILABLE** は、CoreDNS デーモンセットからの1つ以上の Pod が **Available** ステータス条件を報告する場合は **True** になります。

6.2. DNS OPERATOR MANAGEMENTSTATE の変更

DNS は CoreDNS コンポーネントを管理し、クラスター内の Pod およびサービスの名前解決サービス を提供します。DNS Operator の managementState はデフォルトで Managed に設定されます。これ は、DNS Operator がそのリソースをアクティブに管理できることを意味します。これを Unmanaged に変更できます。つまり、DNS Operator がそのリソースを管理していないことを意味します。

以下は、DNS Operator managementState を変更するためのユースケースです。

 開発者であり、CoreDNSの問題が修正されているかどうかを確認するために設定変更をテスト する必要があります。managementState を Unmanaged に設定すると、DNS Operator によ り修正が上書きされないようにできます。

. . .

クラスター管理者であり、CoreDNSの問題が報告されていますが、問題が修正されるまで回避
 策を適用する必要があります。DNS Operator の managementState フィールドを
 Unmanaged に設定して、回避策を適用できます。

手順

• managementState DNS Operator を変更します。

oc patch dns.operator.openshift.io default --type merge --patch '{"spec": {"managementState":"Unmanaged"}}'

6.3. DNS POD 配置の制御

DNS Operator には、CoreDNS 用と /etc/hosts ファイルを管理するための 2 つのデーモンセットがあ ります。/etc/hosts に設定されたデーモンは、イメージのプルをサポートするクラスターイメージレジ ストリーのエントリーを追加するために、すべてのノードホストで実行する必要があります。セキュリ ティーポリシーにより、ノードのペア間の通信が禁止され、CoreDNS のデーモンセットがすべての ノードで実行できなくなります。

クラスター管理者は、カスタムノードセレクターを使用して、CoreDNS のデーモンセットを特定の ノードで実行するか、実行しないように設定できます。

前提条件

- oc CLI がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。

手順

- 特定のノード間の通信を防ぐには、spec.nodePlacement.nodeSelector API フィールドを設定 します。
 - 1. default という名前の DNS Operator オブジェクトを変更します。

\$ oc edit dns.operator/default

2. **spec.nodePlacement.nodeSelector** API フィールドにコントロールプレーンノードのみが 含まれるノードセレクターを指定します。

spec: nodePlacement: nodeSelector: node-role.kubernetes.io/worker: ""

- CoreDNSのデーモンセットをノードで実行されるようにするには、テイントおよび容認を設定します。
 - 1. default という名前の DNS Operator オブジェクトを変更します。



2. テイントのテイントキーおよび容認を指定します。

	spec: nodePlacement: tolerations: - effect: NoExecute key: "dns-only" operators: Equal value: abc tolerationSeconds: 3600
ſ	テイントが dns-only である場合、それは無制限に許容できます。tolerationSeconds は省略できます。

6.4. デフォルト DNS の表示

すべての新規 OpenShift Container Platform インストールには、**default** という名前の **dns.operator** が あります。

手順

1. oc describe コマンドを使用してデフォルトの dns を表示します。

\$ oc describe dns.operator/default

出力例

Name:	default
Namespac	ce:
Labels:	<none></none>
Annotatior	is: <none></none>
API Versio	n: operator.openshift.io/v1
Kind:	DNS
Status:	
Cluster D	omain: cluster.local 1
Cluster IF	P: 172.30.0.10 2
	_

Cluster Domain フィールドは、完全修飾 Pod およびサービスドメイン名を作成するため に使用されるベース DNS ドメインです。



クラスター IP は、Pod が名前解決のためにクエリーするアドレスです。IP は、サービス CIDR 範囲の 10 番目のアドレスで定義されます。

2. クラスターのサービス CIDR を見つけるには、oc get コマンドを使用します。

\$ oc get networks.config/cluster -o jsonpath='{\$.status.serviceNetwork}'

出力例

[172.30.0.0/16]

6.5. DNS 転送の使用

DNS 転送を使用して、次の方法で/etc/resolv.confファイルのデフォルトの転送設定を上書きできます。

- すべてのゾーンにネームサーバーを指定します。転送されるゾーンが OpenShift Container Platform によって管理される Ingress ドメインである場合、アップストリームネームサーバー がドメインについて認証される必要があります。
- アップストリーム DNS サーバーのリストを指定します。
- デフォルトの転送ポリシーを変更します。



注記

デフォルトドメインの DNS 転送設定には、/**etc/resolv.conf** ファイルおよびアップスト リーム DNS サーバーで指定されたデフォルトのサーバーの両方を設定できます。

手順

1. default という名前の DNS Operator オブジェクトを変更します。

\$ oc edit dns.operator/default

以前のコマンドを実行した後に、Operator は **Server** に基づく追加のサーバー設定ブロックを 使用して **dns-default** という名前の config map を作成して更新します。クエリーに一致する ゾーンがサーバーにない場合には、名前解決はアップストリーム DNS サーバーにフォールバッ クします。

DNS 転送の設定





rfc1123 サービス名構文のサブドメインの定義に準拠する必要があります。クラスタード メインの cluster.local は、zones フィールドの無効なサブドメインです。



アップストリームリゾルバーを選択するためのポリシーを定義します。デフォルト値 はRandomです。RoundRobin および Sequential の値を使用することもできます。



5

forwardPlugin ごとに最大15の upstreams が許可されます。

rfc6335 サービス名の構文に準拠する必要があります。

オプション: これを使用して、デフォルトポリシーを上書きし、デフォルトドメインで指 定された DNS リゾルバー (アップストリームリゾルバー) に DNS 解決を転送できます。 アップストリームリゾルバーを指定しない場合に、DNS 名のクエリーは /**etc/resolv.conf** のサーバーに送信されます。



クエリー用にアップストリームサーバーが選択される順序を決定しま す。Random、RoundRobin、またはSequential のいずれかの値を指定できます。デフォ ルト値はSequentialです。

🗩 オプション: これを使用して、アップストリームリゾルバーを指定できます。

SystemResolvConfとNetworkの2種類のアップストリームを指定できま す。SystemResolvConfで、アップストリームが /etc/resolv.conf を使用するように設定 して、Network で Networkresolver を定義します。1つまたは両方を指定できます。



8

指定したタイプが**Network**の場合には、IP アドレスを指定する必要があります。address フィールドは、有効な IPv4 または IPv6 アドレスである必要があります。

- 10 指定したタイプが Network の場合、必要に応じてポートを指定できます。port フィール ドの値は 1 ~ 65535 である必要があります。アップストリームのポートを指定しない場 合、デフォルトでポート 853 が試行されます。
- 2. 任意: 高度に規制された環境で作業する場合は、要求をアップストリームリゾルバーに転送する 際に DNS トラフィックのセキュリティーを確保して、追加の DNS トラフィックおよびデータ のプライバシーを確保できるようにする必要がある場合があります。クラスター管理者は、転 送された DNS クエリーに Transport Layer Security (TLS) を設定できるようになりました。

TLS を使用した DNS 転送の設定

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: DNS metadata: name: default spec: servers: - name: example-server 1 zones: 2 - example.com forwardPlugin: transportConfig: transport: TLS 3 tls: caBundle: name: mycacert serverName: dnstls.example.com 4

policy: Random 5
upstreams: 6
- 1.1.1.1
- 2.2.2.2:5353
upstreamResolvers: 7
transportConfig:
transport: TLS
tls:
caBundle:
name: mycacert
serverName: dnstls.example.com
upstreams:
- type: Network 8
address: 1.2.3.4 9
port: 53 10
-

1

2

rfc6335 サービス名の構文に準拠する必要があります。

- rfc1123 サービス名構文のサブドメインの定義に準拠する必要があります。クラスタード メインの cluster.local は、zones フィールドの無効なサブドメインです。クラスタード メインの cluster.local は、zones の無効な subdomain です。
- 3

転送された DNS クエリーの TLS を設定する場合、**transport** フィールドの値を **TLS** に設 定します。デフォルトでは、CoreDNS は転送された接続を 10 秒間キャッシュします。要 求が発行されない場合、CoreDNS はその 10 秒間、TCP 接続を開いたままにします。大規 模なクラスターでは、ノードごとに接続を開始できるため、DNS サーバーが多くの新しい 接続を開いたまま保持する可能性があることを認識しているか確認してください。パ フォーマンスの問題を回避するために、それに応じて DNS 階層を設定します。

4 転送された DNS クエリー用に TLS を設定する場合、これは、アップストリーム TLS サーバー証明書を検証するための Server Name Indication (SNI)の一部として使用される必須のサーバー名です。



アップストリームリゾルバーを選択するためのポリシーを定義します。デフォルト値 はRandomです。RoundRobin および Sequential の値を使用することもできます。



必須。これを使用して、アップストリームリゾルバーを指定できます。forwardPlugin エ ントリーごとに最大 15 の upstreams エントリーが許可されます。





Network タイプは、このアップストリームリゾルバーが /etc/resolv.conf にリストされて いるアップストリームリゾルバーとは別に転送されたリクエストを処理する必要があるこ とを示します。TLS を使用する場合、Network タイプのみが許可され、IP アドレスを指 定する必要があります。



address フィールドは、有効な IPv4 または IPv6 アドレスである必要があります。



オプションでポートを指定できます。portの値は 1 ~ 65535 である必要があります。 アップストリームのポートを指定しない場合、デフォルトでポート 853 が試行されます。



注記

servers が定義されていないか無効な場合、config map にはデフォルトサーバーのみが含まれます。

検証

1. config map を表示します。

\$ oc get configmap/dns-default -n openshift-dns -o yaml

以前のサンプル DNS に基づく DNS ConfigMap の例

```
apiVersion: v1
data:
 Corefile: |
  example.com:5353 {
    forward . 1.1.1.1 2.2.2.2:5353
  }
  bar.com:5353 example.com:5353 {
    forward . 3.3.3.3 4.4.4.4:5454 1
  }
  .:5353 {
    errors
    health
    kubernetes cluster.local in-addr.arpa ip6.arpa {
       pods insecure
       upstream
       fallthrough in-addr.arpa ip6.arpa
    }
    prometheus :9153
    forward . /etc/resolv.conf 1.2.3.4:53 {
       policy Random
     }
    cache 30
     reload
  }
kind: ConfigMap
metadata:
 labels:
  dns.operator.openshift.io/owning-dns: default
 name: dns-default
 namespace: openshift-dns
```



forwardPlugin への変更により、CoreDNS デーモンセットのローリング更新がトリガー されます。

関連情報

• DNS 転送の詳細は、CoreDNS forward のドキュメント を参照してください。

6.6. DNS OPERATOR のステータス

oc describe コマンドを使用して、DNS Operator のステータスを検査し、その詳細を表示することができます。

手順

DNS Operator のステータスを表示します。

\$ oc describe clusteroperators/dns

6.7. DNS OPERATOR ログ

oc logs コマンドを使用して、DNS Operator ログを表示できます。

手順

DNS Operator のログを表示します。

\$ oc logs -n openshift-dns-operator deployment/dns-operator -c dns-operator

6.8. COREDNS ログレベルの設定

CoreDNS ログレベルを設定して、ログに記録されたエラーメッセージの情報量を決定できます。 CoreDNS ログレベルの有効な値は、Normal、Debug、および Trace です。デフォルトの logLevel は Normal です。



注記

エラープラグインは常に有効になっています。次の logLevel 設定は、さまざまなエラー 応答を報告します。

- logLevel: Normalは "errors" class: log. { class error } を有効にします。
- logLevel: Debugは "denial" class: log. { class denial error } を有効にします。
- logLevel: Traceは "all" class: log. { class all } を有効にします。

手順

• logLevel を Debug に設定するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch dnses.operator.openshift.io/default -p '{"spec":{"logLevel":"Debug"}}' --type=merge

• logLevel を Trace に設定するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch dnses.operator.openshift.io/default -p '{"spec":{"logLevel":"Trace"}}' --type=merge

検証

• 目的のログレベルが設定されていることを確認するには、config map を確認します。

\$ oc get configmap/dns-default -n openshift-dns -o yaml
6.9. COREDNS OPERATOR のログレベルの設定

クラスター管理者は、Operator ログレベルを設定して、OpenShift DNS の問題をより迅速に追跡でき ます。operatorLogLevel の有効な値は、Normal、Debug、およびTraceです。Trace には最も詳細に わたる情報が含まれます。デフォルトのoperatorlogLevelはNormalです。問題のログレベルには、 Trace、Debug、Info、Warning、Error、Fatal および Panic の7つがあります。ログレベルの設定後 に、その重大度またはそれを超える重大度のログエントリーがログに記録されます。

- operatorLogLevel: "Normal" は logrus.SetLogLevel("Info") を設定します。
- operatorLogLevel: "Debug" は logrus.SetLogLevel("Debug") を設定します。
- operatorLogLevel: "Trace" は logrus.SetLogLevel("Trace") を設定します。

手順

• operatorLogLevelをDebugに設定するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch dnses.operator.openshift.io/default -p '{"spec":{"operatorLogLevel":"Debug"}}' -type=merge

• operatorLogLevelをTraceに設定するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch dnses.operator.openshift.io/default -p '{"spec":{"operatorLogLevel":"Trace"}}' -- type=merge

6.10. COREDNS キャッシュのチューニング

CoreDNS によって実行される成功または失敗したキャッシュ (それぞれポジティブキャッシュまたはネ ガティブキャッシュとも呼ばれます)の最大期間を設定できます。DNS クエリー応答のキャッシュ期間 を調整すると、上流の DNS リゾルバーの負荷を軽減できます。

手順

1. 次のコマンドを実行して、**default**という名前の DNS Operator オブジェクトを編集します。



2. Time-to-Live (TTL) キャッシュ値を変更します。

DNS キャッシングの設定

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: DNS
metadata:
name: default
spec:
cache:
positiveTTL: 1h 🚺
negativeTTL: 0.5h10m 2



文字列値 **1h** は、CoreDNS によってそれぞれの秒数に変換されます。このフィールドを省 略した場合、値は0と見なされ、クラスターはフォールバックとして内部デフォルト値の



2 文字列値は、**0.5h10m** などの単位の組み合わせにすることができ、CoreDNS によってそ れぞれの秒数に変換されます。このフィールドを省略した場合、値は0と見なされ、クラ スターはフォールバックとして内部デフォルト値の30を使用します。



第7章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM の INGRESS OPERATOR

7.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM INGRESS OPERATOR

OpenShift Container Platform クラスターを作成すると、クラスターで実行している Pod およびサービ スにはそれぞれ独自の IP アドレスが割り当てられます。IP アドレスは、近くで実行されている他の Pod やサービスからアクセスできますが、外部クライアントの外部からはアクセスできません。Ingress Operator は **IngressController** API を実装し、OpenShift Container Platform クラスターサービスへの 外部アクセスを可能にするコンポーネントです。

Ingress Operator を使用すると、ルーティングを処理する1つ以上の HAProxy ベースの Ingress Controller をデプロイおよび管理することにより、外部クライアントがサービスにアクセスできるよう になります。OpenShift Container Platform **Route** および Kubernetes **Ingress** リソースを指定して、ト ラフィックをルーティングするために Ingress Operator を使用します。**endpointPublishingStrategy** タイプおよび内部負荷分散を定義する機能などの Ingress Controller 内の設定は、Ingress Controller エ ンドポイントを公開する方法を提供します。

7.2. INGRESS 設定アセット

インストールプログラムでは、**config.openshift.io** API グループの **Ingress** リソースでアセットを生成 します (**cluster-ingress-02-config.yml**)。

Ingress リソースの YAML 定義

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Ingress metadata: name: cluster spec: domain: apps.openshiftdemos.com

インストールプログラムは、このアセットを manifests/ディレクトリーの cluster-ingress-02config.yml ファイルに保存します。この Ingress リソースは、Ingress のクラスター全体の設定を定義 します。この Ingress 設定は、以下のように使用されます。

- Ingress Operator は、クラスター Ingress 設定のドメインを、デフォルト Ingress Controller の ドメインとして使用します。
- OpenShift API Server Operator は、クラスター Ingress 設定からのドメインを使用します。このドメインは、明示的なホストを指定しない Route リソースのデフォルトホストを生成する際にも使用されます。

7.3. INGRESS CONTROLLER 設定パラメーター

ingresscontrollers.operator.openshift.io リソースには、組織の特定のニーズを満たすように設定できる任意の設定パラメーターが含まれます。

パラメーター 説明

パラメーター	説明
domain	domain は Ingress Controller によって提供される DNS 名で、複数の機能を設 定するために使用されます。
	 LoadBalancerService エンドポイント公開ストラテジーの場合、domain は DNS レコードを設定するために使用されます。endpointPublishingStrategy を参照してください。
	 生成されるデフォルト証明書を使用する場合、証明書は domain およびその subdomains で有効です。defaultCertificate を参照してください。
	● この値は個別の Route ステータスに公開され、ユーザーは外部 DNS レコードのターゲット先を認識できるようにします。
	domain 値はすべての Ingress Controller の中でも固有の値であり、更新でき ません。
	空の場合、デフォルト値は ingress.config.openshift.io/cluster .spec.domain です。
replicas	レプリカ は、Ingress コントローラーレプリカの数です。設定されていない場 合、デフォルト値は 2 になります。

パラメーター	説明
endpointPublishingStr ategy	endpointPublishingStrategy は Ingress Controller エンドポイントを他の ネットワークに公開し、ロードバランサーの統合を有効にし、他のシステムへ のアクセスを提供するために使用されます。
	クラウド環境では、 loadBalancer フィールドを使用して、Ingress コント ローラーのエンドポイント公開ストラテジーを設定します。
	GCP、AWS、および Azure では、次の endpointPublishingStrategy フィールドを設定できます。
	IoadBalancer.scope
	 loadBalancer.allowedSourceRanges
	設定されていない場合、デフォルト値は infrastructure.config.openshift.io/cluster .status.platform をベースと します。
	 Amazon Web Services (AWS): LoadBalancerService (外部スコープ あり)
	● Azure: LoadBalancerService (外部スコープあり)
	 Google Cloud Platform (GCP): LoadBalancerService (外部スコー プあり)
	ほとんどのプラットフォームでは、 endpointPublishingStrategy 値は更新 できます。GCP では、次の endpointPublishingStrategy フィールドを設定 できます。
	IoadBalancer.scope
	Ioadbalancer.providerParameters.gcp.clientAccess
	ベアメタルプラットフォームなどのクラウド環境で は、 NodePortService、HostNetwork 、または Private フィールドを使用 して、Ingress コントローラーのエンドポイント公開ストラテジーを設定しま す。
	これらのフィールドの1つに値を設定しない場合、デフォルト値は infrastructure.config.openshift.io/cluster .status.platform リソースで 指定されたバインディングポートに基づいています。
	クラスターのデプロイ後に endpointPublishingStrategy 値を更新する必要 がある場合は、次の endpointPublishingStrategy フィールドを設定できま す。
	 hostNetwork.protocol
	nodePort.protocol
	 private.protocol

パラメーター	説明
defaultCertificate	defaultCertificate 値は、Ingress Controller によって提供されるデフォルト証 明書が含まれるシークレットへの参照です。ルートが独自の証明書を指定しな い場合、 defaultCertificate が使用されます。
	シークレットには以下のキーおよびデータが含まれる必要があります: * tls.crt : 証明書ファイルコンテンツ * tls.key : キーファイルコンテンツ
	設定されていない場合、ワイルドカード証明書は自動的に生成され、使用され ます。証明書は Ingress コントーラーの domain および subdomains で有効 であり、生成された証明書 CA はクラスターの信頼ストアに自動的に統合され ます。
	使用中の証明書 (生成されるか、ユーザー指定の場合かを問わない) は OpenShift Container Platform のビルトイン OAuth サーバーに自動的に統合さ れます。
namespaceSelector	namespaceSelector は、Ingress Controller によって提供される namespace セットをフィルターするために使用されます。これはシャードの実装に役立ち ます。
routeSelector	routeSelector は、Ingress Controller によって提供される Routes のセットを フィルターするために使用されます。これはシャードの実装に役立ちます。
nodePlacement	nodePlacement は、Ingress Controller のスケジュールに対する明示的な制御を有効にします。 設定されていない場合は、デフォルト値が使用されます。 注記 nodePlacement パラメーターには、nodeSelector とtolerations の2つの部分が含まれます。以下に例を示します。 nodePlacement: nodePlacement: nodePlacement: nodePlacement: effect: nodePlacement: nodeSelector: matchLabels: kubernetes.io/os: linux tolerations: effect: NoSchedule operator: Exists

パラメーター	説明
tlsSecurityProfile	tlsSecurityProfile は、Ingress Controller の TLS 接続の設定を指定します。
	これが設定されていない場合、デフォルト値は apiservers.config.openshift.io/cluster リソースをベースとして設定され ます。
	Old、Intermediate、および Modern のプロファイルタイプを使用する場合、有効なプロファイル設定はリリース間で変更される可能性があります。たとえば、リリース X.Y.Z にデプロイされた Intermediate プロファイルを使用する仕様がある場合、リリース X.Y.Z+1 へのアップグレードにより、新規のプロファイル設定が Ingress Controller に適用され、ロールアウトが生じる可能性があります。
	Ingress Controller の最小 TLS バージョンは 1.1 で、最大 TLS バージョンは 1.3 です。
	注記
	設定されたセキュリティープロファイルの暗号および最小 TLS バージョンが TLSProfile ステータスに反映されます。
	重要 Ingress Operator は TLS 1.0 の Old または Custom プロファ イルを 1.1 に変換します。
clientTLS	clientTLS は、クラスターおよびサービスへのクライアントアクセスを認証し ます。その結果、相互 TLS 認証が有効になります。設定されていない場合、ク ライアント TLS は有効になっていません。
	clientTLS には、必要なサブフィールド spec.clientTLS.clientCertificatePolicy および spec.clientTLS.ClientCA があります。
	ClientCertificatePolicy サブフィールドは、 Required または Optional の 2 つの値のいずれかを受け入れます。 ClientCA サブフィールドは、openshift- config namespace にある config map を指定します。config map には CA 証明 書バンドルが含まれている必要があります。
	AllowedSubjectPatterns は、要求をフィルターするために有効なクライア ント証明書の識別名と照合される正規表現のリストを指定する任意の値です。 正規表現は PCRE 構文を使用する必要があります。1つ以上のパターンがクラ イアント証明書の識別名と一致している必要があります。一致しない場合、 Ingress Controller は証明書を拒否し、接続を拒否します。指定しないと、 Ingress Controller は識別名に基づいて証明書を拒否しません。

パラメーター	説明
routeAdmission	routeAdmission は、複数の namespace での要求の許可または拒否など、新 規ルート要求を処理するためのポリシーを定義します。
	namespaceOwnership は、namespace 間でホスト名の要求を処理する方法 を記述します。デフォルトは Strict です。
	 Strict: ルートが複数の namespace 間で同じホスト名を要求すること を許可しません。
	 InterNamespaceAllowed: ルートが複数の namespace 間で同じホ スト名の異なるパスを要求することを許可します。
	wildcardPolicy は、ワイルドカードポリシーを使用するルートが Ingress Controller によって処理される方法を記述します。
	 WildcardsAllowed: ワイルドカードポリシーと共にルートが Ingress Controller によって許可されていることを示します。
	 WildcardsDisallowed: ワイルドカードポリシーの None を持つ ルートのみが Ingress Controller によって許可されることを示しま す。wildcardPolicy を WildcardsAllowed から WildcardsDisallowed に更新すると、ワイルドカードポリシーの Subdomain を持つ許可されたルートが機能を停止します。これらの ルートは、Ingress Controller によって許可されるように None のワイ ルドカードポリシーに対して再作成される必要がありま す。WildcardsDisallowed はデフォルト設定です。

パラメーター	説明
IngressControllerLoggi ng	logging はログに記録される内容および場所のパラメーターを定義します。こ のフィールドが空の場合、操作ログは有効になりますが、アクセスログは無効 になります。
	 accessは、クライアント要求をログに記録する方法を記述します。 このフィールドが空の場合、アクセスロギングは無効になります。
	o destination はログメッセージの宛先を記述します。
	■ type はログの宛先のタイプです。
	 Containerは、ログがサイドカーコンテナーに移動する ことを指定します。Ingress OperatorはIngress Controller Podでlogsという名前のコンテナーを設定 し、Ingress Controller がログをコンテナーに書き込むように設定します。管理者がこのコンテナーからログを読み取るカスタムロギングソリューションを設定すること が予想されます。コンテナーログを使用すると、ログの 割合がコンテナーランタイムの容量やカスタムロギング ソリューションの容量を超えるとログがドロップされる ことがあります。
	 Syslog は、ログが Syslog エンドポイントに送信される ことを指定します。管理者は、Syslog メッセージを受信 できるエンドポイントを指定する必要があります。管理 者がカスタム Syslog インスタンスを設定していること が予想されます。
	 containerは Container ロギング宛先タイプのパラメー ターを記述します。現在、コンテナーロギングのパラメー ターはないため、このフィールドは空である必要がありま す。
	 syslog は、Syslog ロギング宛先タイプのパラメーターを 記述します。
	 address は、ログメッセージを受信する syslog エンド ポイントの IP アドレスです。
	● port は、ログメッセージを受信する syslog エンドポイ ントの UDP ポート番号です。
	 maxLengthは、syslog メッセージの最大長です。サイズは 480 から 4096 バイトである必要があります。このフィールドが空の場合には、最大長はデフォルト値の1024バイトに設定されます。
	 facility はログメッセージの syslog ファシリティーを指定します。このフィールドが空の場合、ファシリティーは local1 になります。それ以外の場合、有効な syslog ファシリティー (kern、user、mail、daemon、auth、syslog、lpr、news、uucp、cron、auth2、ftp、ntp、audit、al ert、cron2、local0、local1、local2、local3)を指定する必要があります。local4、local5、local6、または local7。
	 httpLogFormatは、HTTP要求のログメッセージの形式を指定します。このフィールドが空の場合、ログメッセージは実装のデフォルトHTTPログ形式を使用します。HAProxyのデフォルトのHTTPログ形式については、HAProxyドキュメントを参照してください。

パラメ<i>ー</i>ター	
httpHeaders	httpHeaders は HTTP ヘッダーのポリシーを定義します。
	IngressControllerHTTPHeaders のforwardedHeaderPolicyを設定する ことで、Ingress Controller が Forwarded、X-Forwarded-For、X- Forwarded-Host、X-Forwarded-Port、X-Forwarded-Proto、および X- Forwarded-Proto-Version HTTP ヘッダーをいつどのように設定するか指定 します。
	デフォルトでは、ポリシーは Append に設定されます。
	 Append は、Ingress Controller がヘッダーを追加するように指定し、既存のヘッダーを保持します。
	 Replace は、Ingress Controller がヘッダーを設定するように指定し、既存のヘッダーを削除します。
	 IfNoneは、ヘッダーがまだ設定されていない場合に、Ingress Controller がヘッダーを設定するように指定します。
	 Never は、Ingress Controller がヘッダーを設定しないように指定し、既存のヘッダーを保持します。
	headerNameCaseAdjustments を設定して、HTTP ヘッダー名に適用でき るケースの調整を指定できます。それぞれの調整は、必要な大文字化を指定し てHTTP ヘッダー名として指定されます。たとえば、X-Forwarded-For を指 定すると、指定された大文字化を有効にするために x-forwarded-for HTTP ヘッダーを調整する必要があることを示唆できます。
	これらの調整は、クリアテキスト、edge terminationd、および re-encrypt ルートにのみ適用され、HTTP/1を使用する場合にのみ適用されます。
	要求ヘッダーの場合、これらの調整は haproxy.router.openshift.io/h1- adjust-case=true アノテーションを持つルートについてのみ適用されます。 応答ヘッダーの場合、これらの調整はすべての HTTP 応答に適用されます。こ のフィールドが空の場合、要求ヘッダーは調整されません。
httpCompression	httpCompression は、HTTP トラフィック圧縮のポリシーを定義します。
	 mimeTypes は、圧縮を適用する必要がある MIME タイプのリストを 定義します。(例: text/css; charset=utf-8, text/html, text/*, image/svg+xml, application/octet-stream, X- custom/customsub, using the format pattern, type/subtype; [;attribute=value])types は、アプリケーション、イメージ、メッ セージ、マルチパート、テキスト、ビデオ、または X- で始まるカス タムタイプ。例: MIME タイプとサブタイプの完全な表記を確認するに は、RFC1341 を参照してください。
httpErrorCodePages	httpErrorCodePages は、カスタムの HTTP エラーコードの応答ページを指定します。デフォルトで、IngressController は IngressController イメージにビルドされたエラーページを使用します。

パラメーター	説明
httpCaptureCookies	httpCaptureCookies は、アクセスログにキャプチャーする HTTP Cookie を 指定します。 httpCaptureCookies フィールドが空の場合、アクセスログは Cookie をキャプチャーしません。
	キャプチャーするすべての Cookie について、次のパラメーターが IngressController 設定に含まれている必要があります。
	● name は、Cookie の名前を指定します。
	● maxLength は、Cookie の最大長を指定します。
	 matchType は、Cookie のフィールドの name が、キャプチャー Cookie 設定と完全に一致するか、キャプチャー Cookie 設定の接頭辞 であるかを指定します。matchType フィールドは Exact および Prefix パラメーターを使用します。
	以下に例を示します。
	httpCaptureCookies: - matchType: Exact maxLength: 128 name: MYCOOKIE
httpCaptureHeaders	httpCaptureHeaders は、アクセスログにキャプチャーする HTTP ヘッダー を指定します。 httpCaptureHeaders フィールドが空の場合、アクセスログ はヘッダーをキャプチャーしません。
	httpCaptureHeaders には、アクセスログにキャプチャーするヘッダーの2 つのリストが含まれています。ヘッダーフィールドの2つのリストは request と response です。どちらのリストでも、name フィールドはヘッダー名を 指定し、maxlength フィールドはヘッダーの最大長を指定する必要がありま す。以下に例を示します。
	httpCaptureHeaders: request: - maxLength: 256 name: Connection - maxLength: 128 name: User-Agent response: - maxLength: 256 name: Content-Type - maxLength: 256 name: Content-Length
tuningOptions	tuningOptions は、Ingress Controller Pod のパフォーマンスを調整するため のオプションを指定します。
	 clientFinTimeout は、クライアントの応答が接続を閉じるのを待機 している間に接続が開かれる期間を指定します。デフォルトのタイム アウトは 1s です。
	 clientTimeoutは、クライアント応答の待機中に接続が開かれる期間 を指定します。デフォルトのタイムアウトは 30s です。

パラメーター	説明	headerBufferBytes は、Ingress Controller 接続セッション用に予約 されるメモリーの量をバイト単位で指定します。Ingress Controller で HTTP / 2 が有効になっている場合。この値は少なくとも 16384 であ
		る必要があります。設定されていない場合、デフォルト値は 32768 バイトになります。このフィールドを設定することは推奨しませ ん。 headerBufferBytes 値が小さすぎると Ingress Controller が破損 する可能性があり、 headerBufferBytes 値が大きすぎると、Ingress Controller が必要以上のメモリーを使用する可能性があるためです。
	•	 headerBufferMaxRewriteBytesは、HTTP ヘッダーの書き換えと Ingress Controller 接続セッションの追加のために headerBufferBytes から予約するメモリーの量をバイト単位で指定 します。headerBufferMaxRewriteBytesの最小値は4096です。 受信 HTTP 要求には、headerBufferBytesは headerBufferMaxRewriteBytesよりも大きくなければなりません。設定されていない場合、デフォルト値は8192 バイトになります。このフィールドを設定することは推奨しません。headerBufferMaxRewriteBytes値が小さすぎると Ingress Controller が破損する可能性があり、headerBufferMaxRewriteBytes 値が大きすぎると、Ingress Controller が必要以上のメモリーを使用する可能性があるためです。
	•	healthCheckInterval は、ルーターがヘルスチェックの間隔として 待機する時間を指定します。デフォルトは 5s です。
	•	serverFinTimeout は、接続を閉じるクライアントへの応答を待つ 間、接続が開かれる期間を指定します。デフォルトのタイムアウトは 1s です。
	•	serverTimeout は、サーバーの応答を待機している間に接続が開か れる期間を指定します。デフォルトのタイムアウトは 30s です。
	•	threadCount は、HAProxy プロセスごとに作成するスレッドの数を 指定します。より多くのスレッドを作成すると、使用されるシステム リソースを増やすことで、各 Ingress Controller Pod がより多くの接続 を処理できるようになります。HAProxy は最大 64 のスレッドをサ ポートします。このフィールドが空の場合、Ingress Controller はデ フォルト値の4スレッドを使用します。デフォルト値は、将来のリ リースで変更される可能性があります。このフィールドを設定するこ とは推奨しません。HAProxy スレッドの数を増やすと、Ingress Controller Pod が負荷時に CPU 時間をより多く使用できるようにな り、他の Pod が実行に必要な CPU リソースを受け取れないようにな るためです。スレッドの数を減らすと、Ingress Controller のパフォー マンスが低下する可能性があります。
	•	tlsInspectDelay は、一致するルートを見つけるためにルーターが データを保持する期間を指定します。この値の設定が短すぎると、よ り一致する証明書を使用している場合でも、ルーターがエッジ終端、 再暗号化された、またはパススルーのルートのデフォルトの証明書に フォールバックする可能性があります。デフォルトの検査遅延は5s です。
	•	tunnelTimeout は、トンネルがアイドル状態の間、websocket など のトンネル接続期間を開いた期間を指定します。デフォルトのタイム アウトは 1h です。
	•	maxConnections は、HAProxyプロセスごとに確立できる同時接続の最大数を指定します。この値を増やすと、追加のシステムリソースで各 Ingress Controller Pod がより多くの接続を処理できるようになります。0、-1、2000から200000の範囲内の任意の値を使用でき、フィールドを空にすることも可能です。
		 cのフィールドが空のままであるか、値が0の場合、Ingress Controller はデフォルト値の50000を使用します。この値は、今後のリリースで変更される可能性があります。

パラメーター	 フィールド値が-1の場合、HAProxyは、実行中のコンテナーで 説明 使用可能な ulimit に基づき最大値を動的に計算します。このプロ セスにより、計算値が大きくなり、現在のデフォルト値である
	50000と比較してかなり大きなメモリー使用量が発生します。
	 フィールドの値が現在のオペレーティングシステムの制限よりも 大きい場合、HAProxy プロセスは開始されません。
	 個別の値を選択し、ルーター Pod が新しいノードに移行された場合、新しいノードに同一の ulimit が設定されていない可能性があります。このような場合、Pod は起動に失敗します。
	 異なる ulimit を持つノードが設定されていて、離散値を選択する 場合は、実行時に接続の最大数が計算されるように、このフィー ルドに -1 の値を使用することを推奨します。
logEmptyRequests	logEmptyRequests は、リクエストを受け取らず、ログに記録されない接続 を指定します。これらの空の要求は、ロードバランサーヘルスプローブまたは Web ブラウザーの投機的接続 (事前接続)から送信され、これらの要求をログ に記録することは望ましくない場合があります。ただし、これらの要求はネッ トワークエラーによって引き起こされる可能性があります。この場合は、空の 要求をログに記録すると、エラーの診断に役立ちます。これらの要求はポート スキャンによって引き起こされ、空の要求をログに記録すると、侵入の試行が 検出されなくなります。このフィールドに使用できる値は Log および Ignore です。デフォルト値は Log です。
	LoggingPolicy タイプは、以下のいずれかの値を受け入れます。
	 ログ:この値をLogに設定すると、イベントがログに記録される必要があることを示します。
	 Ignore: この値を Ignore に設定すると、HAproxy 設定の dontlognull オプションを設定します。

パラメーター	説明
HTTPEmptyRequestsP olicy	HTTPEmptyRequestsPolicy は、リクエストを受け取る前に接続がタイム アウトした場合に HTTP 接続を処理する方法を記述します。このフィールドに 使用できる値は Respond および Ignore です。デフォルト値は Respond で す。
	HTTPEmptyRequestsPolicy タイプは、以下のいずれかの値を受け入れま す。
	 応答: フィールドが Respond に設定されている場合、Ingress Controller は HTTP 400 または 408 応答を送信する場合、アクセスロ グが有効な場合に接続をログに記録し、適切なメトリックで接続をカ ウントします。
	 ignore: このオプションを Ignore に設定すると HAproxy 設定に http-ignore-probes パラメーターが追加されます。フィールドが Ignore に設定されている場合、Ingress Controller は応答を送信せず に接続を閉じると、接続をログに記録するか、メトリックを増分しま す。
	これらの接続は、ロードバランサーのヘルスプローブまたは Web ブラウザー の投機的接続 (事前接続) から取得され、無視しても問題はありません。ただ し、これらの要求はネットワークエラーによって引き起こされる可能性があり ます。そのため、このフィールドを Ignore に設定すると問題の検出と診断が 妨げられる可能性があります。これらの要求はポートスキャンによって引き起 こされ、空の要求をログに記録すると、侵入の試行が検出されなくなります。

7.3.1. Ingress Controller の TLS セキュリティープロファイル

TLS セキュリティープロファイルは、サーバーに接続する際に接続クライアントが使用できる暗号を規 制する方法をサーバーに提供します。

7.3.1.1. TLS セキュリティープロファイルについて

TLS (Transport Layer Security) セキュリティープロファイルを使用して、さまざまな OpenShift Container Platform コンポーネントに必要な TLS 暗号を定義できます。OpenShift Container Platform の TLS セキュリティープロファイルは、Mozilla が推奨する設定 に基づいています。

コンポーネントごとに、以下の TLS セキュリティープロファイルのいずれかを指定できます。

表7.1 TLS セキュリティープロファイル

• • •		
プロファイル	説明	

プロファイル	説明	
Old	このプロファイルは、レガシークライアントまたはライブラリーでの使 用を目的としています。このプロファイルは、Old 後方互換性の推奨設 定に基づいています。 Old プロファイルには、最小 TLS バージョン 1.0 が必要です。 注記 Ingress Controller の場合、TLS の最小バージョンは 1.0 から 1.1 に変換されます。	
Intermediate	このプロファイルは、大多数のクライアントに推奨される設定です。こ れは、Ingress Controller、kubelet、およびコントロールプレーンのデ フォルトの TLS セキュリティープロファイルです。このプロファイル は、Intermediate 互換性の推奨設定に基づいています。 Intermediate プロファイルには、最小 TLS バージョン 1.2 が必要で す。	
Modern	このプロファイルは、後方互換性を必要としない Modern のクライアン トでの使用を目的としています。このプロファイルは、Modern 互換性 の推奨設定に基づいています。 Modern プロファイルには、最小 TLS バージョン 1.3 が必要です。	
カスタム	このプロファイルを使用すると、使用する TLS バージョンと暗号を定義 できます。	
	警告 無効な設定により問題が発生する可能性があるため、Customプロファイルを使用する際には注意してください。	



注記

事前定義されたプロファイルタイプのいずれかを使用する場合、有効なプロファイル設定はリリース間で変更される可能性があります。たとえば、リリース X.Y.Z にデプロイ された Intermediate プロファイルを使用する仕様がある場合、リリース X.Y.Z+1への アップグレードにより、新規のプロファイル設定が適用され、ロールアウトが生じる可能性があります。

7.3.1.2. Ingress Controller の TLS セキュリティープロファイルの設定

Ingress Controller の TLS セキュリティープロファイルを設定するには、IngressController カスタムリ ソース (CR) を編集して、事前定義済みまたはカスタムの TLS セキュリティープロファイルを指定しま す。TLS セキュリティープロファイルが設定されていない場合、デフォルト値は API サーバーに設定さ れた TLS セキュリティープロファイルに基づいています。

Old TLS のセキュリティープロファイルを設定するサンプル IngressController CR

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController
spec:
tlsSecurityProfile:
old: {}
type: Old

TLS セキュリティープロファイルは、Ingress Controller の TLS 接続の最小 TLS バージョンと TLS 暗 号を定義します。

設定された TLS セキュリティープロファイルの暗号と最小 TLS バージョンは、Status.Tls Profile 配下 の IngressController カスタムリソース (CR) と Spec.Tls Security Profile 配下の設定された TLS セ キュリティープロファイルで確認できます。Custom TLS セキュリティープロファイルの場合、特定の 暗号と最小 TLS バージョンは両方のパラメーターの下に一覧表示されます。



注記

HAProxy Ingress Controller イメージは、TLS**1.3** と **Modern** プロファイルをサポートしています。

また、Ingress Operator は TLS **1.0**の **Old** または **Custom** プロファイルを **1.1** に変換します。

前提条件

• cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

 openshift-ingress-operator プロジェクトの IngressController CR を編集して、TLS セキュ リティープロファイルを設定します。

\$ oc edit IngressController default -n openshift-ingress-operator

2. spec.tlsSecurityProfile フィールドを追加します。

Custom プロファイルのサンプル IngressController CR

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
...
spec:
tlsSecurityProfile:
type: Custom 1
custom: 2
ciphers: 3
- ECDHE-ECDSA-CHACHA20-POLY1305
```

- ECDHE-RSA-CHACHA20-POLY1305 - ECDHE-RSA-AES128-GCM-SHA256 - ECDHE-ECDSA-AES128-GCM-SHA256 minTLSVersion: VersionTLS11 TLS セキュリティープロファイルタイプ (**Old、1**

1

TLS セキュリティープロファイルタイプ (**Old、Intermediate、**または **Custom**) を指定し ます。デフォルトは **Intermediate** です。

選択したタイプに適切なフィールドを指定します。

- old: {}
- intermediate: {}
- custom:

custom タイプには、TLS 暗号のリストと最小許容 TLS バージョンを指定します。

3. 変更を適用するためにファイルを保存します。

検証

• IngressController CR にプロファイルが設定されていることを確認します。

\$ oc describe IngressController default -n openshift-ingress-operator

出力例

Name: default Namespace: openshift-ingress-operator Labels: <none> Annotations: <none> API Version: operator.openshift.io/v1 Kind: IngressController ... Spec: ... TIs Security Profile: Custom: Ciphers: ECDHE-ECDSA-CHACHA20-POLY1305 ECDHE-RSA-CHACHA20-POLY1305 ECDHE-RSA-AES128-GCM-SHA256 ECDHE-ECDSA-AES128-GCM-SHA256 Min TLS Version: VersionTLS11 Type: Custom

7.3.1.3. 相互 TLS 認証の設定

spec.clientTLS 値を設定して、相互 TLS (mTLS) 認証を有効にするように Ingress Controller を設定で きます。**clientTLS** 値は、クライアント証明書を検証するように Ingress Controller を設定します。この 設定には、config map の参照である **clientCA** 値の設定が含まれます。config map には、クライアント の証明書を検証するために使用される PEM でエンコードされた CA 証明書バンドルが含まれます。必要に応じて、証明書サブジェクトフィルターのリストも設定できます。

clientCA 値が X509v3 証明書失効リスト (CRL) ディストリビューションポイントを指定している場合、Ingress Operator は、提供された各証明書で指定されている HTTP URI X509v3 **CRL Distribution Point** に基づいて CRL config map をダウンロードおよび管理します。Ingress Controller は、 mTLS/TLS ネゴシエーション中にこの config map を使用します。有効な証明書を提供しない要求は拒 否されます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- PEM でエンコードされた CA 証明書バンドルがある。
- CA バンドルが CRL ディストリビューションポイントを参照する場合は、エンドエンティ ティーまたはリーフ証明書もクライアント CA バンドルに含める必要があります。この証明書 には、RFC 5280 で説明されているとおり、この証明書の CRL Distribution Points に HTTP URI が含まれている必要があります。以下に例を示します。

Issuer: C=US, O=Example Inc, CN=Example Global G2 TLS RSA SHA256 2020 CA1 Subject: SOME SIGNED CERT X509v3 CRL Distribution Points: Full Name: URI:http://crl.example.com/example.crl

手順

- 1. openshift-config namespace で、CA バンドルから config map を作成します。
 - \$ oc create configmap \
 router-ca-certs-default \
 --from-file=ca-bundle.pem=client-ca.crt \
 1

-n openshift-config



config map データキーは **ca-bundle.pem** で、data の値は PEM 形式の CA 証明書である 必要があります。

2. openshift-ingress-operator プロジェクトで IngressController リソースを編集します。

\$ oc edit IngressController default -n openshift-ingress-operator

3. spec.clientTLS フィールドおよびサブフィールドを追加して相互 TLS を設定します。

フィルタリングパターンを指定する clientTLS プロファイルのサンプル IngressController CR

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: clientTLS: clientCertificatePolicy: Required clientCA: name: router-ca-certs-default allowedSubjectPatterns: - "^/CN=example.com/ST=NC/C=US/O=Security/OU=OpenShift\$"

4. オプションで、次のコマンドを入力して、**allowedSubjectPatterns**の識別名 (DN) を取得しま す。

\$ openssl x509 -in custom-cert.pem -noout -subject subject= /CN=example.com/ST=NC/C=US/O=Security/OU=OpenShift

7.4. デフォルト INGRESS CONTROLLER の表示

Ingress Operator は、OpenShift Container Platform の中核となる機能であり、追加の設定なしに有効にできます。

すべての新規 OpenShift Container Platform インストールには、**ingresscontroller** の名前付きのデフォルトがあります。これは、追加の Ingress Controller で補足できます。デフォルトの **ingresscontroller** が削除される場合、Ingress Operator は1分以内にこれを自動的に再作成します。

手順

• デフォルト Ingress Controller を表示します。

\$ oc describe --namespace=openshift-ingress-operator ingresscontroller/default

7.5. INGRESS OPERATOR ステータスの表示

Ingress Operator のステータスを表示し、検査することができます。

手順

Ingress Operator ステータスを表示します。

\$ oc describe clusteroperators/ingress

7.6. INGRESS CONTROLLER ログの表示

Ingress Controller ログを表示できます。

手順

• Ingress Controller ログを表示します。

\$ oc logs --namespace=openshift-ingress-operator deployments/ingress-operator -c <container_name>

7.7. INGRESS CONTROLLER ステータスの表示

特定の Ingress Controller のステータスを表示できます。

手順

• Ingress Controller のステータスを表示します。

\$ oc describe --namespace=openshift-ingress-operator ingresscontroller/<name>

7.8. INGRESS CONTROLLER の設定

7.8.1. カスタムデフォルト証明書の設定

管理者として、Secret リソースを作成し、**IngressController** カスタムリソース (CR) を編集して Ingress Controller がカスタム証明書を使用するように設定できます。

前提条件

- PEM エンコードされたファイルに証明書/キーのペアがなければなりません。ここで、証明書は信頼される認証局またはカスタム PKI で設定されたプライベートの信頼される認証局で署名されます。
- 証明書が以下の要件を満たしている必要があります。
 - 証明書が Ingress ドメインに対して有効化されている必要があります。
 - 証明書は拡張を使用して、subjectAltName 拡張を使用して、*.apps.ocp4.example.com などのワイルドカードドメインを指定します。
- IngressController CR がなければなりません。デフォルトの CR を使用できます。

\$ oc --namespace openshift-ingress-operator get ingresscontrollers

出力例

NAME AGE default 10m



注記

Intermediate 証明書がある場合、それらはカスタムデフォルト証明書が含まれるシーク レットの **tls.crt** ファイルに組み込まれる必要があります。証明書を指定する際の順序は 重要になります。サーバー証明書の後に Intermediate 証明書をリスト表示します。

手順

以下では、カスタム証明書とキーのペアが、現在の作業ディレクトリーの **tls.crt** および **tls.key** ファイ ルにあることを前提とします。**tls.crt** および **tls.key** を実際のパス名に置き換えます。さらに、Secret リソースを作成し、これを IngressController CR で参照する際に、**custom-certs-default** を別の名前に 置き換えます。



注記

このアクションにより、Ingress Controller はデプロイメントストラテジーを使用して再 デプロイされます。 1. **tls.crt** および **tls.key** ファイルを使用して、カスタム証明書を含む Secret リソースを **openshift-ingress** namespace に作成します。

\$ oc --namespace openshift-ingress create secret tls custom-certs-default --cert=tls.crt -- key=tls.key

2. IngressController CR を、新規証明書シークレットを参照するように更新します。

\$ oc patch --type=merge --namespace openshift-ingress-operator ingresscontrollers/default \ --patch '{"spec":{"defaultCertificate":{"name":"custom-certs-default"}}}'

3. 更新が正常に行われていることを確認します。

\$ echo Q |\
openssl s_client -connect console-openshift-console.apps.<domain>:443 -showcerts
2>/dev/null |\
openssl x509 -noout -subject -issuer -enddate

ここでは、以下のようになります。

<domain>

クラスターのベースドメイン名を指定します。

出力例

subject=C = US, ST = NC, L = Raleigh, O = RH, OU = OCP4, CN = *.apps.example.com issuer=C = US, ST = NC, L = Raleigh, O = RH, OU = OCP4, CN = example.com notAfter=May 10 08:32:45 2022 GM

ヒント

または、以下の YAML を適用してカスタムのデフォルト証明書を設定できます。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
defaultCertificate:
name: custom-certs-default
```

証明書シークレットの名前は、CR を更新するために使用された値に一致する必要があります。

IngressController CR が変更された後に、Ingress Operator はカスタム証明書を使用できるように Ingress Controller のデプロイメントを更新します。

7.8.2. カスタムデフォルト証明書の削除

管理者は、使用する Ingress Controller を設定したカスタム証明書を削除できます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- Ingress Controller のカスタムデフォルト証明書を設定している。

手順

• カスタム証明書を削除し、OpenShift Container Platform に同梱されている証明書を復元する には、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch -n openshift-ingress-operator ingresscontrollers/default \
 --type json -p \$'- op: remove\n path: /spec/defaultCertificate'

クラスターが新しい証明書設定を調整している間、遅延が発生する可能性があります。

検証

• 元のクラスター証明書が復元されたことを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ echo Q | \
    openssl s_client -connect console-openshift-console.apps.<domain>:443 -showcerts
2>/dev/null | \
    openssl x509 -noout -subject -issuer -enddate
```

ここでは、以下のようになります。

<domain>

クラスターのベースドメイン名を指定します。

出力例

subject=CN = *.apps.<domain> issuer=CN = ingress-operator@1620633373 notAfter=May 10 10:44:36 2023 GMT

7.8.3. Ingress Controller の自動スケーリング

Ingress Controller は、スループットを増大させるための要件を含む、ルーティングのパフォーマンスや 可用性に関する各種要件に動的に対応するために自動でスケーリングできます。以下の手順では、デ フォルトの IngressController をスケールアップする例を示します。

前提条件

1. OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

._ .

- 2. **cluster-admin** ロールを持つユーザーとして OpenShift Container Platform クラスターにアク セスできる。
- 3. Custom Metrics Autoscaler Operator がインストールされている。

手順

以下のコマンドを実行して、openshift-ingress-operator namespace にプロジェクトを作成します。

\$ oc project openshift-ingress-operator

- 2. ConfigMap を作成し、適用してユーザー定義プロジェクトのモニタリングを有効にします。
 - a. 新規 ConfigMap オブジェクト cluster-monitoring-config.yaml を作成します。

cluster-monitoring-config.yaml

```
apiVersion: v1
kind: ConfigMap
metadata:
name: cluster-monitoring-config
namespace: openshift-monitoring
data:
config.yaml: |
enableUserWorkload: true 1
```



trueに設定すると、**enableUserWorkload**パラメーターはクラスター内のユーザー定 義プロジェクトのモニタリングを有効にします。

b. 以下のコマンドを実行して ConfigMap を適用します。

\$ oc apply -f cluster-monitoring-config.yaml

3. 以下のコマンドを実行して、Thanos で認証するためのサービスアカウントを作成します。

\$ oc create serviceaccount thanos && oc describe serviceaccount thanos

出力例

Name:thanosNamespace:openshift-ingress-operatorLabels:<none>Annotations:<none>Image pull secrets:thanos-dockercfg-b4l9sMountable secrets:thanos-dockercfg-b4l9sTokens:thanos-token-c422qEvents:<none>

- 4. サービスアカウントのトークンを使用して、**openshift-ingress-operator** namespace 内で **TriggerAuthentication** オブジェクトを定義します。
 - a. 以下のコマンドを実行して、シークレットを含む変数 secret を定義します。

\$ secret=\$(oc get secret | grep thanos-token | head -n 1 | awk '{ print \$1 }')

b. **TriggerAuthentication** オブジェクトを作成し、**secret** 変数の値を **TOKEN** パラメーター に渡します。

\$ oc process TOKEN="\$secret" -f - <<EOF | oc apply -f -

apiVersion: template.openshift.io/v1 kind: Template parameters: - name: TOKEN objects: - apiVersion: keda.sh/v1alpha1 kind: TriggerAuthentication metadata: name: keda-trigger-auth-prometheus spec: secretTargetRef: - parameter: bearerToken name: \\${TOKEN} key: token - parameter: ca name: \\${TOKEN} key: ca.crt EOF

- 5. Thanos からメトリクスを読み取るためのロールを作成して適用します。
 - a. Pod およびノードからメトリクスを読み取る新規ロール **thanos-metrics-reader.yaml** を作成します。

thanos-metrics-reader.yaml

apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1 kind: Role metadata: name: thanos-metrics-reader rules: - apiGroups: - ""
resources:
- pods
- nodes
verbs:
- get
- apiGroups:
- metrics.k8s.io
resources:
- pods
verbs:
- gei
- IISI
- apiGroups:
- ""
resources:
- namespaces
verbs:
- get
-

b. 以下のコマンドを実行して新規ロールを適用します。



6. 以下のコマンドを入力して、新しいロールをサービスアカウントに追加します。

\$ oc adm policy add-role-to-user thanos-metrics-reader -z thanos -role=namespace=openshift-ingress-operator

\$ oc adm policy -n openshift-ingress-operator add-cluster-role-to-user cluster-monitoring-view -z thanos



注記

引数 add-cluster-role-to-user は、namespace 間のクエリーを使用する場合に のみ必要になります。以下の手順では、この引数を必要とする kube-metrics namespace からのクエリーを使用します。

7. デフォルトの Ingress Controller デプロイメントをターゲットにする新しい ScaledObject YAML ファイル ingress-autoscaler.yaml を作成します。

ScaledObject 定義の例





オプション: レプリカの最大数。このフィールドを省略すると、デフォルトの最大値は100 レプリカに設定されます。





Ingress Operator namespace。



この式は、デプロイされたクラスターに存在するワーカーノードの数に対して評価されます。



重要

namespace 間クエリーを使用している場合は、**serverAddress** フィールドの ポート 9092 ではなくポート 9091 をターゲットにする必要があります。また、 このポートからメトリクスを読み取るには、昇格した権限が必要です。

8. 以下のコマンドを実行してカスタムリソース定義を適用します。

\$ oc apply -f ingress-autoscaler.yaml

検証

- 以下のコマンドを実行して、デフォルトの Ingress Controller が kube-state-metrics クエリー によって返される値に一致するようにスケールアウトされていることを確認します。
 - grep コマンドを使用して、Ingress Controller の YAML ファイルでレプリカを検索します。

\$ oc get ingresscontroller/default -o yaml | grep replicas:

出力例

replicas: 3

• openshift-ingress プロジェクトで Pod を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ingress

出力例

NAMEREADYSTATUSRESTARTSAGErouter-default-7b5df44ff-l9pmm2/2Running017hrouter-default-7b5df44ff-s5sl52/2Running03d22hrouter-default-7b5df44ff-wwsth2/2Running066s

関連情報

- ユーザー定義プロジェクトのモニタリングの有効化
- カスタムメトリクスオートスケーラーのインストール
- カスタムメトリクスオートスケーラートリガー認証について
- Configuring the custom metrics autoscaler to use OpenShift Container Platform monitoring

カスタムメトリクスオートスケーラーの追加方法について

7.8.4. Ingress Controller のスケーリング

Ingress Controller は、スループットを増大させるための要件を含む、ルーティングのパフォーマンスや 可用性に関する各種要件に対応するために手動でスケーリングできます。oc コマンド は、IngressController リソースのスケーリングに使用されます。以下の手順では、デフォルトの IngressController をスケールアップする例を示します。



注記

スケーリングは、必要な数のレプリカを作成するのに時間がかかるため、すぐに実行で きるアクションではありません。

手順

1. デフォルト IngressController の現在の利用可能なレプリカ数を表示します。

\$ oc get -n openshift-ingress-operator ingresscontrollers/default -o jsonpath='{\$.status.availableReplicas}'

出力例



 oc patch コマンドを使用して、デフォルトの IngressController を必要なレプリカ数にスケー リングします。以下の例では、デフォルトの IngressController を3つのレプリカにスケーリ ングしています。

\$ oc patch -n openshift-ingress-operator ingresscontroller/default --patch '{"spec":{"replicas":
3}' --type=merge

出力例

ingresscontroller.operator.openshift.io/default patched

3. デフォルトの **IngressController** が指定したレプリカ数にスケーリングされていることを確認 します。

\$ oc get -n openshift-ingress-operator ingresscontrollers/default -o jsonpath='{\$.status.availableReplicas}'

出力例

3

ヒント

または、以下の YAML を適用して Ingress Controller を 3 つのレプリカにスケーリングすることもできます。



異なる数のレプリカが必要な場合は replicas 値を変更します。

7.8.5. Ingress アクセスロギングの設定

アクセスログを有効にするように Ingress Controller を設定できます。大量のトラフィックを受信しな いクラスターがある場合、サイドカーにログインできます。クラスターのトラフィックが多い場合、ロ ギングスタックの容量を超えないようにしたり、OpenShift Container Platform 外のロギングインフラ ストラクチャーと統合したりするために、ログをカスタム syslog エンドポイントに転送することができ ます。アクセスログの形式を指定することもできます。

コンテナーロギングは、既存の Syslog ロギングインフラストラクチャーがない場合や、Ingress Controller で問題を診断する際に短期間使用する場合に、低トラフィックのクラスターのアクセスログ を有効にするのに役立ちます。

アクセスログが OpenShift Logging スタックの容量を超える可能性があるトラフィックの多いクラス ターや、ロギングソリューションが既存の Syslog ロギングインフラストラクチャーと統合する必要の ある環境では、syslog が必要です。Syslog のユースケースは重複する可能性があります。

前提条件

• cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

サイドカーへの Ingress アクセスロギングを設定します。

 Ingress アクセスロギングを設定するには、spec.logging.access.destination を使用して宛先 を指定する必要があります。サイドカーコンテナーへのロギングを指定するには、Container spec.logging.access.destination.type を指定する必要があります。以下の例は、コンテナー Container の宛先に対してログ記録する Ingress Controller 定義です。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
replicas: 2
logging:
```

access: destination: type: Container

 Ingress Controller をサイドカーに対してログを記録するように設定すると、Operator は Ingress Controller Pod 内に logs という名前のコンテナーを作成します。

\$ oc -n openshift-ingress logs deployment.apps/router-default -c logs

出力例

2020-05-11T19:11:50.135710+00:00 router-default-57dfc6cd95-bpmk6 router-default-57dfc6cd95-bpmk6 haproxy[108]: 174.19.21.82:39654 [11/May/2020:19:11:50.133] public be_http:hello-openshift:hello-openshift/pod:hello-openshift:hello-openshift:10.128.2.12:8080 0/0/1/0/1 200 142 - --NI 1/1/0/00 0/0 "GET / HTTP/1.1"

Syslog エンドポイントへの Ingress アクセスロギングを設定します。

 Ingress アクセスロギングを設定するには、spec.logging.access.destination を使用して宛先 を指定する必要があります。Syslog エンドポイント宛先へのロギングを指定するに は、spec.logging.access.destination.type に Syslog を指定する必要があります。宛先タイ プが Syslog の場合、spec.logging.access.destination.syslog.endpoint を使用して宛先エン ドポイントも指定する必要があります。ま

た、**spec.logging.access.destination.syslog.facility** を使用してファシリティーを指定できま す。以下の例は、**Syslog** 宛先に対してログを記録する Ingress Controller の定義です。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: replicas: 2 logging: access: destination: type: Syslog syslog: address: 1.2.3.4 port: 10514

注記

syslog 宛先ポートは UDP である必要があります。

特定のログ形式で Ingress アクセスロギングを設定します。

 spec.logging.access.httpLogFormat を指定して、ログ形式をカスタマイズできます。以下の 例は、IP アドレスが 1.2.3.4 およびポート 10514 の syslog エンドポイントに対してログを記録 する Ingress Controller の定義です。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: replicas: 2 logging: access: destination: type: Syslog syslog: address: 1.2.3.4 port: 10514 httpLogFormat: '%ci:%cp [%t] %ft %b/%s %B %bq %HM %HU %HV'

Ingress アクセスロギングを無効にします。

Ingress アクセスロギングを無効にするには、spec.logging または spec.logging.access を空のままにします。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: replicas: 2 logging: access: null

7.8.6. Ingress コントローラースレッド数の設定

注記

クラスター管理者は、スレッド数を設定して、クラスターが処理できる受信接続の量を増やすことができます。既存の Ingress Controller にパッチを適用して、スレッドの数を増やすことができます。

前提条件

• 以下では、Ingress Controller がすでに作成されていることを前提とします。

手順

• Ingress Controller を更新して、スレッド数を増やします。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default --type=merge -p '{"spec": {"tuningOptions": {"threadCount": 8}}}'



大量のリソースを実行できるノードがある場 合、**spec.nodePlacement.nodeSelector** を、意図されているノードの容量に一 致するラベルで設定し、**spec.tuningOptions.threadCount** を随時高い値に設定 します。

7.8.7. 内部ロードバランサーを使用するための Ingress Controller の設定

クラウドプラットフォームで Ingress Controller を作成する場合、Ingress Controller はデフォルトでパ ブリッククラウドロードバランサーによって公開されます。管理者は、内部クラウドロードバランサー を使用する Ingress Controller を作成できます。



警告

クラウドプロバイダーが Microsoft Azure の場合、ノードを参照するパブリック ロードバランサーが少なくとも1つ必要です。これがない場合、すべてのノードが インターネットへの egress 接続を失います。



重要

IngressController の scopeを変更する場合は、カスタムリソース (CR) の作成後に .spec.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.scope パラメーターを変更します。

図7.1 LoadBalancerの図



202_OpenShift_0222

前述の図では、OpenShift Container Platform Ingress LoadBalancerService エンドポイントの公開戦略 に関する以下のような概念を示しています。

- 負荷は、外部からクラウドプロバイダーのロードバランサーを使用するか、内部から OpenShift Ingress Controller Load Balancer を使用して、分散できます。
- ロードバランサーのシングル IP アドレスと、図にあるクラスターのように、8080 や 4200 といった馴染みのあるポートを使用することができます。
- 外部のロードバランサーからのトラフィックは、ダウンしたノードのインスタンスで記載されているように、Podの方向に進められ、ロードバランサーが管理します。実装の詳細については、Kubernetesサービスドキュメントを参照してください。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下の例のように、<name>-ingress-controller.yaml という名前のファイルに IngressController カスタムリソース (CR) を作成します。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: namespace: openshift-ingress-operator name: <name> 1 spec: domain: <domain> 2 endpointPublishingStrategy: type: LoadBalancerService loadBalancer: scope: Internal 3</domain></name>	
1 <name> を IngressController オブジェクトの名前に置き換えます。</name>	
2 コントローラーによって公開されるアプリケーションのドメインを指定します。	
3 内部ロードバランサーを使用するために Internal の値を指定します。	
2. 以下のコマンドを実行して、直前の手順で定義された Ingress Controller を作成します。	
\$ oc create -f <name>-ingress-controller.yaml</name>	
1 <name> を IngressController オブジェクトの名前に置き換えます。</name>	
3. オプション: 以下のコマンドを実行して Ingress Controller が作成されていることを確認 す。	しま
\$ ocall-namespaces=true get ingresscontrollers	

7.8.8. GCP での Ingress Controller のグローバルアクセスの設定

内部ロードバランサーで GCP で作成された Ingress Controller は、サービスの内部 IP アドレスを生成 します。クラスター管理者は、グローバルアクセスオプションを指定できます。これにより、同じ VPC ネットワーク内の任意のリージョンでクラスターを有効にし、ロードバランサーとしてコンピュート リージョンを有効にして、クラスターで実行されるワークロードに到達できるようにできます。

詳細情報は、GCP ドキュメントの グローバルアクセス について参照してください。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターを GCP インフラストラクチャーにデプロイしている。
- 内部ロードバランサーを使用するように Ingress Controller を設定している。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. グローバルアクセスを許可するように Ingress Controller リソースを設定します。



注記

Ingress Controller を作成し、グローバルアクセスのオプションを指定すること もできます。

a. Ingress Controller リソースを設定します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator edit ingresscontroller/default

- b. YAML ファイルを編集します。
 - サンプル clientAccess 設定を Global に設定します。

spec:	
endpointPublishingStrategy:	
loadBalancer:	
providerParameters:	
gcp:	
clientAccess: Global 1	
type: GCP	
scope: Internal	
type: LoadBalancerService	

- gcp.clientAccess を Global に設定します。
- c. 変更を適用するためにファイルを保存します。
- 2. 以下のコマンドを実行して、サービスがグローバルアクセスを許可することを確認します。

\$ oc -n openshift-ingress edit svc/router-default -o yaml

この出力では、グローバルアクセスがアノテーション networking.gke.io/internal-loadbalancer-allow-global-access で GCP について有効にされていることを示しています。

7.8.9. Ingress Controller のヘルスチェック間隔の設定

クラスター管理者は、ヘルスチェックの間隔を設定して、ルーターが連続する2回のヘルスチェックの 間で待機する時間を定義できます。この値は、すべてのルートのデフォルトとしてグローバルに適用さ れます。デフォルト値は5秒です。

前提条件

• 以下では、Ingress Controller がすでに作成されていることを前提とします。

手順

● Ingress Controller を更新して、バックエンドヘルスチェックの間隔を変更します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default --type=merge -p '{"spec": {"tuningOptions": {"healthCheckInterval": "8s"}}}'



注記

単一ルートの healthCheckInterval をオーバーライドするには、ルートアノテー ション router.openshift.io/haproxy.health.check.interval を使用します

7.8.10. クラスターを内部に配置するためのデフォルト Ingress Controller の設定

削除や再作成を実行して、クラスターを内部に配置するように **default** Ingress Controller を設定できま す。



警告

クラウドプロバイダーが Microsoft Azure の場合、ノードを参照するパブリック ロードバランサーが少なくとも1つ必要です。これがない場合、すべてのノードが インターネットへの egress 接続を失います。



重要

IngressController の scope を変更する場合は、カスタムリソース (CR) の作成後に .spec.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.scope パラメーターを変更します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 削除や再作成を実行して、クラスターを内部に配置するように **default** Ingress Controller を設 定します。 \$ oc replace --force --wait --filename - <<EOF
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
 namespace: openshift-ingress-operator
 name: default
spec:
 endpointPublishingStrategy:
 type: LoadBalancerService
 loadBalancer:
 scope: Internal
EOF</pre>

7.8.11. ルートの受付ポリシーの設定

管理者およびアプリケーション開発者は、同じドメイン名を持つ複数の namespace でアプリケーショ ンを実行できます。これは、複数のチームが同じホスト名で公開されるマイクロサービスを開発する組 織を対象としています。



複数の namespace での要求の許可は、namespace 間の信頼のあるクラスターに対 してのみ有効にする必要があります。有効にしないと、悪意のあるユーザーがホス ト名を乗っ取る可能性があります。このため、デフォルトの受付ポリシーは複数の namespace 間でのホスト名の要求を許可しません。

前提条件

• クラスター管理者の権限。

手順

 以下のコマンドを使用して、ingresscontroller リソース変数の .spec.routeAdmission フィー ルドを編集します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default --patch '{"spec": {"routeAdmission":{"namespaceOwnership":"InterNamespaceAllowed"}}}' --type=merge

イメージコントローラー設定例

spec: routeAdmission: namespaceOwnership: InterNamespaceAllowed

ヒント

または、以下の YAML を適用してルートの受付ポリシーを設定できます。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: routeAdmission: namespaceOwnership: InterNamespaceAllowed

7.8.12. ワイルドカードルートの使用

HAProxy Ingress Controller にはワイルドカードルートのサポートがあります。Ingress Operator は **wildcardPolicy** を使用して、Ingress Controller の **ROUTER_ALLOW_WILDCARD_ROUTES** 環境変数 を設定します。

Ingress Controller のデフォルトの動作では、ワイルドカードポリシーの None (既存の IngressController リソースとの後方互換性がある)を持つルートを許可します。

手順

- 1. ワイルドカードポリシーを設定します。
 - a. 以下のコマンドを使用して IngressController リソースを編集します。



b. spec の下で、wildcardPolicy フィールドを WildcardsDisallowed または WildcardsAllowed に設定します。

spec:
routeAdmission:
wildcardPolicy: WildcardsDisallowed # or WildcardsAllowed

7.8.13. X-Forwarded ヘッダーの使用

Forwarded および **X-Forwarded-For** を含む HTTP ヘッダーの処理方法についてのポリシーを指定する ように HAProxy Ingress Controller を設定します。Ingress Operator は **HTTPHeaders** フィールドを使 用して、Ingress Controller の **ROUTER_SET_FORWARDED_HEADERS** 環境変数を設定します。

手順

- 1. Ingress Controller 用に HTTPHeaders フィールドを設定します。
 - a. 以下のコマンドを使用して IngressController リソースを編集します。

\$ oc edit IngressController

b. spec の下で、HTTPHeaders ポリシーフィールドを Append、Replace、IfNone、または Never に設定します。
apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: httpHeaders: forwardedHeaderPolicy: Append

使用例

クラスター管理者として、以下を実行できます。

- Ingress Controller に転送する前に、X-Forwarded-For ヘッダーを各リクエストに挿入する外部 プロキシーを設定します。
 ヘッダーを変更せずに渡すように Ingress Controller を設定するには、never ポリシーを指定し ます。これにより、Ingress Controller はヘッダーを設定しなくなり、アプリケーションは外部 プロキシーが提供するヘッダーのみを受信します。
- 外部プロキシーが外部クラスター要求を設定する X-Forwarded-For ヘッダーを変更せずに渡す ように Ingress Controller を設定します。
 外部プロキシーを通過しない内部クラスター要求に X-Forwarded-For ヘッダーを設定するよう に Ingress Controller を設定するには、if-none ポリシーを指定します。外部プロキシー経由で HTTP 要求にヘッダーがすでに設定されている場合、Ingress Controller はこれを保持します。
 要求がプロキシーを通過していないためにヘッダーがない場合、Ingress Controller はヘッダー を追加します。

アプリケーション開発者として、以下を実行できます。

 X-Forwarded-For ヘッダーを挿入するアプリケーション固有の外部プロキシーを設定します。 他の Route のポリシーに影響を与えずに、アプリケーションの Route 用にヘッダーを変更せず に渡すように Ingress Controller を設定するには、アプリケーションの Route にアノテーション haproxy.router.openshift.io/set-forwarded-headers: if-none または haproxy.router.openshift.io/set-forwarded-headers: never を追加します。



注記

Ingress Controller のグローバルに設定された値とは別 に、haproxy.router.openshift.io/set-forwarded-headers アノテーションを ルートごとに設定できます。

7.8.14. HTTP/2 Ingress 接続の有効化

HAProxy で透過的なエンドツーエンド HTTP/2 接続を有効にすることができます。これにより、アプリケーションの所有者は、単一接続、ヘッダー圧縮、バイナリーストリームなど、HTTP/2 プロトコル 機能を使用できます。

個別の Ingress Controller またはクラスター全体について、HTTP/2 接続を有効にすることができます。

クライアントから HAProxy への接続について HTTP/2 の使用を有効にするために、ルートはカスタム 証明書を指定する必要があります。デフォルトの証明書を使用するルートは HTTP/2 を使用することが できません。この制限は、クライアントが同じ証明書を使用する複数の異なるルートに接続を再使用す るなどの、接続の結合 (coalescing) の問題を回避するために必要です。

HAProxy からアプリケーション Pod への接続は、re-encrypt ルートのみに HTTP/2 を使用でき、edge

termination ルートまたは非セキュアなルートには使用しません。この制限は、HAProxy が TLS 拡張で ある Application-Level Protocol Negotiation (ALPN) を使用してバックエンドで HTTP/2 の使用をネゴ シエートするためにあります。そのため、エンドツーエンドの HTTP/2 はパススルーおよび re-encrypt 使用できますが、非セキュアなルートまたは edge termination ルートでは使用できません。



警告

再暗号化ルートで WebSocket を使用し、Ingress Controller で HTTP/2 を有効にす るには、HTTP/2 を介した WebSocket のサポートが必要です。HTTP/2 上の WebSockets は HAProxy 2.4 の機能であり、現時点では OpenShift Container Platform ではサポートされていません。



重要

パススルー以外のルートの場合、Ingress Controller はクライアントからの接続とは独立 してアプリケーションへの接続をネゴシエートします。つまり、クライアントが Ingress Controller に接続して HTTP/1.1 をネゴシエートし、Ingress Controller は次にアプリケー ションに接続して HTTP/2 をネゴシエートし、アプリケーションへの HTTP/2 接続を使 用してクライアント HTTP/1.1 接続からの要求の転送を実行できます。Ingress Controller は WebSocket を HTTP/2 に転送できず、その HTTP/2 接続を WebSocket に対してアッ プグレードできないため、クライアントが後に HTTP/1.1 から WebSocket に対してアッ プグレードできないため、クライアントが後に HTTP/1.1 から WebSocket プロトコルに 接続をアップグレードしようとすると問題が発生します。そのため、WebSocket 接続を 受け入れることが意図されたアプリケーションがある場合、これは HTTP/2 プロトコル のネゴシエートを許可できないようにする必要があります。そうしないと、クライアン トは WebSocket プロトコルへのアップグレードに失敗します。

手順

単一 Ingress Controller で HTTP/2 を有効にします。

• Ingress Controller で HTTP/2 を有効にするには、oc annotate コマンドを入力します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator annotate ingresscontrollers/<ingresscontroller_name> ingress.operator.openshift.io/default-enable-http2=true

<ingresscontroller_name> をアノテーションを付ける Ingress Controller の名前に置き換えます。

クラスター全体で HTTP/2 を有効にします。

• クラスター全体で HTTP/2 を有効にするには、oc annotate コマンドを入力します。

\$ oc annotate ingresses.config/cluster ingress.operator.openshift.io/default-enable-http2=true

ヒント

または、以下の YAML を適用してアノテーションを追加できます。

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Ingress metadata: name: cluster annotations: ingress.operator.openshift.io/default-enable-http2: "true"

7.8.15. Ingress Controller の PROXY プロトコルの設定

クラスター管理者は、Ingress Controller が **HostNetwork** または **NodePortService** エンドポイントの 公開ストラテジータイプのいずれかを使用する際に PROXY プロトコル を設定できます。PROXY プロ トコルにより、ロードバランサーは Ingress Controller が受信する接続の元のクライアントアドレスを 保持することができます。元のクライアントアドレスは、HTTP ヘッダーのロギング、フィルタリン グ、および挿入を実行する場合に便利です。デフォルト設定では、Ingress Controller が受信する接続に は、ロードバランサーに関連付けられるソースアドレスのみが含まれます。

この機能は、クラウドデプロイメントではサポートされていません。この制限があるのは、OpenShift Container Platform がクラウドプラットフォームで実行され、IngressController がサービスロードバラ ンサーを使用するように指定している場合に、Ingress Operator がロードバランサーサービスを設定 し、ソースアドレスを保持するプラットフォーム要件に基づいて PROXY プロトコルを有効にするため です。



重要

PROXY プロトコルまたは TCP を使用するには、OpenShift Container Platform と外部 ロードバランサーの両方を設定する必要があります。



警告

PROXY プロトコルは、Keepalived Ingress VIP を使用するクラウド以外のプラット フォーム上のインストーラーによってプロビジョニングされたクラスターを使用す るデフォルトの Ingress Controller ではサポートされていません。

前提条件

Ingress Controller を作成している。

手順

1. Ingress Controller リソースを編集します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator edit ingresscontroller/default

2. PROXY 設定を設定します。

 Ingress Controller が hostNetwork エンドポイント公開ストラテジータイプを使用する場合 は、spec.endpointPublishingStrategy.nodePort.protocol サブフィールドを PROXY に 設定します。

PROXY への hostNetwork の設定例

spec: endpointPublishingStrategy: hostNetwork: protocol: PROXY type: HostNetwork

 Ingress Controller が NodePortService エンドポイント公開ストラテジータイプを使用する 場合は、spec.endpointPublishingStrategy.nodePort.protocol サブフィールドを PROXY に設定します。

PROXY へのサンプル nodePort 設定

spec: endpointPublishingStrategy: nodePort: protocol: PROXY type: NodePortService

7.8.16. appsDomain オプションを使用した代替クラスタードメインの指定

クラスター管理者は、appsDomain フィールドを設定して、ユーザーが作成したルートのデフォルトの クラスタードメインの代わりとなるものを指定できます。appsDomain フィールドは、domain フィー ルドで指定されているデフォルトの代わりに使用する OpenShift Container Platform のオプションのド メインです。代替ドメインを指定する場合、これは新規ルートのデフォルトホストを判別できるように する目的でデフォルトのクラスタードメインを上書きします。

たとえば、所属企業の DNS ドメインを、クラスター上で実行されるアプリケーションのルートおよび ingress のデフォルトドメインとして使用できます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターをデプロイしていること。
- oc コマンドラインインターフェイスがインストールされている。

手順

- 1. ユーザーが作成するルートに代替のデフォルトドメインを指定して **appsDomain** フィールドを 設定します。
 - a. Ingress **cluster** リソースを編集します。

\$ oc edit ingresses.config/cluster -o yaml

b. YAML ファイルを編集します。

test.example.com への appsDomain の設定例

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Ingress metadata: name: cluster spec: domain: apps.example.com appsDomain: <test.example.com> 2

デフォルトドメインを指定します。インストール後にデフォルトドメインを変更する ことはできません。

2

オプション: アプリケーションルートに使用する OpenShift Container Platform インフ ラストラクチャーのドメイン。デフォルトの接頭辞である **apps** の代わりに、**test** の ような別の接頭辞を使用できます。

2. ルートを公開し、ルートドメインの変更を確認して、既存のルートに、**appsDomain** フィール ドで指定したドメイン名が含まれていることを確認します。



注記

ルートを公開する前に **openshift-apiserver** がローリング更新を終了するのを待 機します。

a. ルートを公開します。

\$ oc expose service hello-openshift
route.route.openshift.io/hello-openshift exposed

出力例:

\$ oc get routes NAME HOST/PORT PATH SERVICES PORT TERMINATION WILDCARD hello-openshift hello_openshift-<my_project>.test.example.com hello-openshift 8080-tcp None

7.8.17. HTTP ヘッダーケースの変換

HAProxy 2.2 では、デフォルトで HTTP ヘッダー名を小文字化します。たとえば、Host: xyz.com を host: xyz.com に変更します。レガシーアプリケーションが HTTP ヘッダー名の大文字を認識する場 合、Ingress Controller の spec.httpHeaders.headerNameCaseAdjustments API フィールドを、修正 されるまでレガシーアプリケーションに対応するソリューションに使用します。



重要

OpenShift Container Platform には HAProxy 2.2 が含まれるため、アップグレードする前 に **spec.httpHeaders.headerNameCaseAdjustments** を使用して必要な設定を追加する ようにしてください。

前提条件

• OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

• cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

クラスター管理者は、oc patch コマンドを入力するか、Ingress Controller YAML ファイルの HeaderNameCaseAdjustments フィールドを設定して HTTP ヘッダーのケースを変換できます。

- oc patch コマンドを入力して、HTTP ヘッダーの大文字化を指定します。
 - 1. oc patch コマンドを入力して、HTTP host ヘッダーを Host に変更します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontrollers/default --type=merge -patch='{"spec":{"httpHeaders":{"headerNameCaseAdjustments":["Host"]}}}'

2. アプリケーションのルートにアノテーションを付けます。

\$ oc annotate routes/my-application haproxy.router.openshift.io/h1-adjust-case=true

次に、Ingress Controller は host 要求ヘッダーを指定どおりに調整します。

- Ingress Controller の YAML ファイルを設定し、HeaderNameCaseAdjustments フィールドを 使用して調整を指定します。
 - 以下のサンプル Ingress Controller YAML は、適切にアノテーションが付けられたルートへのHTTP/1要求について host ヘッダーを Host に調整します。

Ingress Controller YAML のサンプル

- apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: httpHeaders: headerNameCaseAdjustments: - Host
- 2. 以下のサンプルルートでは、haproxy.router.openshift.io/h1-adjust-case アノテーション を使用して HTTP 応答ヘッダー名のケース調整を有効にします。

ルート YAML のサンプル

apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
annotations:
haproxy.router.openshift.io/h1-adjust-case: true 1
name: my-application
namespace: my-application
spec:
to:
kind: Service
name: my-application



haproxy.router.openshift.io/h1-adjust-case を true に設定します。

7.8.18. ルーター圧縮の使用

特定の MIME タイプに対してルーター圧縮をグローバルに指定するように HAProxy Ingress Controller を設定します。mimeTypes変数を使用して、圧縮が適用される MIME タイプの形式を定義できます。 タイプは、アプリケーション、イメージ、メッセージ、マルチパート、テキスト、ビデオ、または "X-" で始まるカスタムタイプです。MIME タイプとサブタイプの完全な表記を確認するには、RFC1341を参 照してください。



注記

圧縮用に割り当てられたメモリーは、最大接続数に影響を与える可能性があります。さらに、大きなバッファーを圧縮すると、正規表現による負荷が多い場合や正規表現のリストが長い場合など、レイテンシーが発生する可能性があります。

すべての MIME タイプが圧縮から利点を得るわけではありませんが、HAProxy は、指示 された場合でもリソースを使用して圧縮を試みます。一般に、html、css、js などのテキ スト形式は圧縮から利点を得ますが、イメージ、音声、ビデオなどのすでに圧縮済みの 形式は、圧縮に時間とリソースが費やされるわりに利点はほぼありません。

手順

- 1. Ingress Controller のhttpCompressionフィールドを設定します。
 - a. 以下のコマンドを使用して IngressController リソースを編集します。

\$ oc edit -n openshift-ingress-operator ingresscontrollers/default

 b. specで、httpCompression ポリシーフィールドをmimeTypes に設定し、圧縮を適用する 必要がある MIME タイプのリストを指定します。

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
httpCompression:
mimeTypes:
- "text/html"
 "text/css; charset=utf-8"
- "application/json"

7.8.19. ルーターメトリクスの公開

デフォルトで、HAProxy ルーターメトリクスをデフォルトの stats ポート (1936) に Prometheus 形式 で公開できます。Prometheus などの外部メトリクス収集および集約システムは、HAProxy ルーターメ メトリクスにアクセスできます。HAProxy ルーターメトリクスは、HTML およびコンマ区切り値 (CSV) 形式でブラウザーに表示できます。

前提条件

ファイアウォールを、デフォルトの stats ポート (1936) にアクセスするように設定している。

手順

1. 次のコマンドを実行して、ルーター Pod 名を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ingress

出力例

NAMEREADYSTATUSRESTARTSAGErouter-default-76bfffb66c-46qwp1/1Running011h

- ルーター Pod が /var/lib/haproxy/conf/metrics-auth/statsUsername および /var/lib/haproxy/conf/metrics-auth/statsPassword ファイルに保存しているルーターのユー ザー名およびパスワードを取得します。
 - a. 次のコマンドを実行して、ユーザー名を取得します。

\$ oc rsh <router_pod_name> cat metrics-auth/statsUsername

b. 次のコマンドを実行して、パスワードを取得します。

\$ oc rsh <router_pod_name> cat metrics-auth/statsPassword

3. 次のコマンドを実行して、ルーター IP およびメトリクス証明書を取得します。

\$ oc describe pod <router_pod>

4. つぎのコマンドを実行して、Prometheus 形式で未加工の統計情報を取得します。

\$ curl -u <user>:<password> http://<router_IP>:<stats_port>/metrics

5. 次のコマンドを実行して、安全にメトリクスにアクセスします。

\$ curl -u user:password https://<router_IP>:<stats_port>/metrics -k

6. 次のコマンドを実行して、デフォルトの stats ポート (1936) にアクセスします。

\$ curl -u <user>:<password> http://<router_IP>:<stats_port>/metrics

例7.1出力例

HELP haproxy_backend_connections_total Total number of connections.
TYPE haproxy_backend_connections_total gauge
haproxy_backend_connections_total{backend="http",namespace="default",route="helloroute"} 0
haproxy_backend_connections_total{backend="http",namespace="default",route="helloroute-alt"} 0
haproxy_backend_connections_total{backend="http",namespace="default",route="helloroute-alt"} 0

haproxy_backend_connections_total{backend="http",namespace="default",route="hello-route01"} 0

HELP haproxy_exporter_server_threshold Number of servers tracked and the current threshold value. # TYPE haproxy exporter server threshold gauge haproxy exporter server threshold{type="current"} 11 haproxy_exporter_server_threshold{type="limit"} 500 # HELP haproxy frontend bytes in total Current total of incoming bytes. # TYPE haproxy frontend bytes in total gauge haproxy frontend bytes in total{frontend="fe no sni"} 0 haproxy frontend bytes in total{frontend="fe sni"} 0 haproxy frontend bytes in total{frontend="public"} 119070 ... # HELP haproxy_server_bytes_in_total Current total of incoming bytes. # TYPE haproxy_server_bytes_in_total gauge haproxy_server_bytes_in_total{namespace="",pod="",route="",server="fe_no_sni",service=" "} 0 haproxy_server_bytes_in_total{namespace="",pod="",route="",server="fe_sni",service=""} 0 haproxy server bytes in total{namespace="default",pod="docker-registry-5nk5fz",route="docker-registry",server="10.130.0.89:5000",service="docker-registry"} 0 haproxy server bytes in total{namespace="default",pod="hello-rc-vkjqx",route="helloroute",server="10.130.0.90:8080",service="hello-svc-1"} 0 . . .

7. ブラウザーで以下の URL を入力して、stats ウィンドウを起動します。

http://<user>:<password>@<router_IP>:<stats_port>

8. オプション: ブラウザーに次の URL を入力して、CSV 形式で統計情報を取得します。



7.8.20. HAProxy エラーコードの応答ページのカスタマイズ

クラスター管理者は、503、404、またはその両方のエラーページにカスタムのエラーコード応答ペー ジを指定できます。HAProxy ルーターは、アプリケーション Pod が実行していない場合や、要求され た URL が存在しない場合に 404 エラーページを提供する 503 エラーページを提供します。たとえば、 503 エラーコードの応答ページをカスタマイズする場合は、アプリケーション Pod が実行していない ときにページが提供されます。また、デフォルトの 404 エラーコード HTTP 応答ページは、誤った ルートまたは存在しないルートについて HAProxy ルーターによって提供されます。

カスタムエラーコードの応答ページは config map に指定し、Ingress Controller にパッチを適用されま す。config map キーには、**error-page-503.http** と **error-page-404.http** の 2 つの利用可能なファイル 名があります。

カスタムの HTTP エラーコードの応答ページは、HAProxy HTTP エラーページ設定のガイドライン に 従う必要があります。以下は、デフォルトの OpenShift Container Platform HAProxy ルーターの http 503 エラーコード応答ページ の例です。デフォルトのコンテンツを、独自のカスタムページを作成す るためのテンプレートとして使用できます。

デフォルトで、HAProxy ルーターは、アプリケーションが実行していない場合や、ルートが正しくない または存在しない場合に 503 エラーページのみを提供します。このデフォルトの動作は、OpenShift Container Platform 4.8 以前の動作と同じです。HTTP エラーコード応答をカスタマイズするための config map が提供されておらず、カスタム HTTP エラーコード応答ページを使用している場合、ルー ターはデフォルトの 404 または 503 エラーコード応答ページを提供します。



注記

OpenShift Container Platform のデフォルトの 503 エラーコードページをカスタマイズ のテンプレートとして使用する場合、ファイル内のヘッダーで CRLF 改行コードを使用 できるエディターが必要になります。

手順

1. openshift-config に my-custom-error-code-pages という名前の config map を作成します。

\$ oc -n openshift-config create configmap my-custom-error-code-pages \ --from-file=error-page-503.http \ --from-file=error-page-404.http



重要

カスタムエラーコードの応答ページに適した形式を指定しない場合は、ルーター Pod が停止します。この停止を解決するには、config map を削除するか、修正 し、影響を受けるルーター Pod を削除して、正しい情報で再作成できるように します。

2. Ingress Controller にパッチを適用し、名前を指定して **my-custom-error-code-pages** config map を参照します。

\$ oc patch -n openshift-ingress-operator ingresscontroller/default --patch '{"spec": {"httpErrorCodePages":{"name":"my-custom-error-code-pages"}}}' --type=merge

Ingress Operator は、**openshift-config** namespace から **openshift-ingress** namespace に **my-custom-error-code-pages** config map をコピーします。Operator は、**openshift-ingress** namespace のパターン <**your_ingresscontroller_name>-errorpages** に従って config map に 名前を付けます。

3. コピーを表示します。

\$ oc get cm default-errorpages -n openshift-ingress

出力例

NAME	DATA	AGE	
default-errorpages	2	25s	0



default の Ingress Controller カスタムリソース (CR) にパッチが適用されているため、 config map 名の例は **default-errorpages** です。

- 4. カスタムエラー応答ページを含む config map がルーターボリュームにマウントされることを確認します。config map キーは、カスタム HTTP エラーコード応答を持つファイル名です。
 - 503 カスタム HTTP カスタムエラーコード応答の場合:

\$ oc -n openshift-ingress rsh <router_pod> cat /var/lib/haproxy/conf/error_code_pages/error-page-503.http

• 404 カスタム HTTP カスタムエラーコード応答の場合:

\$ oc -n openshift-ingress rsh <router_pod> cat /var/lib/haproxy/conf/error_code_pages/error-page-404.http

検証

カスタムエラーコード HTTP 応答を確認します。

1. テストプロジェクトおよびアプリケーションを作成します。

\$ oc new-project test-ingress

\$ oc new-app django-psql-example

- 2. 503 カスタム http エラーコード応答の場合:
 - a. アプリケーションのすべての Pod を停止します。
 - b. 以下の curl コマンドを実行するか、ブラウザーでルートのホスト名にアクセスします。

\$ curl -vk <route_hostname>

- 3. 404 カスタム http エラーコード応答の場合:
 - a. 存在しないルートまたは正しくないルートにアクセスします。
 - b. 以下の curl コマンドを実行するか、ブラウザーでルートのホスト名にアクセスします。

\$ curl -vk <route_hostname>

4. errorfile 属性が haproxy.config ファイルで適切にあるかどうかを確認します。

\$ oc -n openshift-ingress rsh <router> cat /var/lib/haproxy/conf/haproxy.config | grep errorfile

7.8.21. Ingress Controller の最大接続数の設定

クラスター管理者は、OpenShift ルーターデプロイメントの同時接続の最大数を設定できます。既存の Ingress Controller にパッチを適用して、接続の最大数を増やすことができます。

前提条件

以下では、Ingress Controller が作成済みであることを前提とします。

手順

Ingress Controller を更新して、HAProxyの最大接続数を変更します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default --type=merge -p '{"spec": {"tuningOptions": {"maxConnections": 7500}}}'



警告

spec.tuningOptions.maxConnectionsの値を現在のオペレーティングシステムの制限よりも大きく設定すると、HAProxy プロセスは開始しません。このパラメーターの詳細は、"Ingress Controller 設定パラメーター" セクションの表を参照してください。

7.9. 関連情報

• カスタム PKI の設定

第8章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM での INGRESS シャーディング

OpenShift Container Platform では、Ingress Controller はすべてのルートを提供することも、ルートの サブセットを提供することもできます。デフォルトでは、Ingress Controller は、クラスター内の任意の namespace で作成されたすべてのルートを提供します。別の Ingress Controller をクラスターに追加し て、選択した特性に基づくルートのサブセットである シャード を作成することにより、ルーティング を最適化できます。ルートをシャードのメンバーとしてマークするには、ルートまたは namespace の メタデータ フィールドでラベルを使用します。Ingress Controller は、選択式 とも呼ばれる セレクター を使用して、ルートのプール全体からルートのサブセットを選択し、サービスを提供します。

Ingress シャーディングは、受信トラフィックを複数の Ingress Controller 間で負荷分散する場合に、ト ラフィックを分離して特定の Ingress Controller にルーティングする場合、または次のセクションで説 明する他のさまざまな理由で役立ちます。

デフォルトでは、各ルートはクラスターのデフォルトドメインを使用します。ただし、代わりにルー ターのドメインを使用するようにルートを設定できます。詳細は、Ingress Controller シャーディングの ルートの作成 を参照してください。

8.1. INGRESS CONTROLLER のシャード化

Ingress シャーディング (ルーターシャーディングとも呼ばれます)を使用して、ルート、namespace、 またはその両方にラベルを追加することで、一連のルートを複数のルーターに分散できます。Ingress Controller は、対応する一連のセレクターを使用して、指定されたラベルが含まれるルートのみを許可 します。各 Ingress シャードは、特定の選択式を使用してフィルタリングされたルートで設定されま す。

トラフィックがクラスターに送信される主要なメカニズムとして、Ingress Controller への要求が大きく なる可能性があります。クラスター管理者は、以下を実行するためにルートをシャード化できます。

- Ingress Controller またはルーターを複数のルートに分散し、変更に対する応答を加速します。
- 特定のルートを他のルートとは異なる信頼性の保証を持つように割り当てます。
- 特定の Ingress Controller に異なるポリシーを定義することを許可します。
- 特定のルートのみが追加機能を使用することを許可します。
- たとえば、異なるアドレスで異なるルートを公開し、内部ユーザーおよび外部ユーザーが異なるルートを認識できるようにします。
- blue green デプロイ中に、アプリケーションの別のバージョンにトラフィックを転送します。

Ingress Controller がシャーディングされると、特定のルートがグループ内の0個以上のIngress Controller に受け入れられます。ルートのステータスは、Ingress Controller がルートを受け入れたかど うかを示します。Ingress Controller は、ルートがそのシャードに固有である場合にのみルートを受け入 れます。

Ingress Controller は、次の3つのシャーディング方法を使用できます。

- namespace セレクターとラベルが同じ namespace 内のすべてのルートが Ingress シャードに 含まれるように、namespace セレクターのみを Ingress Controller に追加します。
- Ingress Controller にルートセレクターのみを追加して、ルートセレクターとラベルが同じ全 ルートが Ingress シャードに含まれるようにします。

 namespace セレクターとラベルが同じ namespace 内のルートセレクターのラベルがルートと 同じ場合に、Ingress シャード内に含まれるように、namespace セレクターとルートセレク ターの両方を Ingress Controller に追加します。

シャーディングを使用すると、ルートのサブセットを複数の Ingress Controller に分散できます。これ らのサブセットは、重複なし (**従来** のシャーディングとも呼ばれる) にすることも、重複 (**重複** シャー ディングとも呼ばれる) にすることもできます。

8.1.1. 従来のシャーディングの例

Ingress Controller の finops-router は、ラベルセレクター spec.namespaceSelector.matchLabels.name を finance および ops に指定して設定されます。

finops-router の YAML 定義の例

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: finops-router
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
namespaceSelector:
matchLabels:
name:
- finance
- ops

2番目の Ingress Controller **dev-router** は、ラベルセレクター **spec.namespaceSelector.matchLabels.name** を **dev** に指定して設定されます。

dev-router の YAML 定義の例

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: dev-router
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
namespaceSelector:
matchLabels:
name: dev

すべてのアプリケーションルートが個別の namespace にあり、それぞれに

name:finance、name:ops、および **name:dev** というラベルが付けられている場合、この設定は2つの Ingress Controller 間でルートを効果的に分散します。コンソール、認証、およびその他の目的の OpenShift Container Platform ルートは処理しないでください。

上記のシナリオでは、シャード化は重複するセットを持たないパーティション設定の特別なケースとなります。ルートは複数のルーターシャード間で分割されます。



デフォルトの Ingress Controller は、namespaceSelector または routeSelector フィールドに除外対象のルートが含まれていない限り、引き続きすべてのルートを 提供します。デフォルトの Ingress Controller からルートを除外する方法の詳細 は、この Red Hat ナレッジベースのソリューション と「デフォルトの Ingress Controller のシャーディング」のセクションを参照してください。

8.1.2. 重複シャーディングの例

警告

上記の例の finops-router と dev-router に加えて、ラベルセレクター spec.namespaceSelector.matchLabels.name を dev と ops に指定して設定された devops-router もあります。

Devops-router の YAML 定義の例

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController
metadata:
name: devops-router
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
namespaceSelector:
matchLabels:
name:
- dev
- ops

name:dev および **name:ops という** 名前の namespace のルートは、2 つの異なる Ingress Controller によって処理されるようになりました。この設定では、ルートのサブセットが重複しています。

重複するルートのサブセットを使用すると、より複雑なルーティングルールを作成できます。たとえ ば、優先度の低いトラフィックを devops-router に送信しながら、優先度の高いトラフィックを専用の finops-router に迂回させることができます。

8.1.3. デフォルトの Ingress Controller のシャーディング

新しい Ingress シャードを作成した後に、デフォルトの Ingress Controller と、新しい Ingress シャード の両方により許可されるルートが存在する場合があります。これは、デフォルトの Ingress Controller にセレクターがなく、デフォルトですべてのルートを許可するためです。

namespace セレクターまたはルートセレクターを使用して、Ingress Controller が特定のラベルが割り 当てられたルートの処理を制限できます。次の手順では、namespace セレクターを使用して、デフォ ルトの Ingress Controller が新しく分割された finance、ops、および dev ルートにサービスを提供しな いように制限します。これにより、Ingress シャードがさらに分離されます。



重要

OpenShift Container Platform のすべての管理ルートを同じ Ingress Controller で保持す る必要があります。したがって、これらの重要なルートを除外するセレクターをデフォ ルトの Ingress Controller に追加することは避けてください。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- プロジェクト管理者としてログインしている。

手順

1. 次のコマンドを実行して、デフォルトの Ingress Controller を変更します。

\$ oc edit ingresscontroller -n openshift-ingress-operator default

2. Ingress Controller を編集して、**finance**、**ops**、および **dev** ラベルのいずれかを持つルートを 除外する **namespaceSelector** を含めます。

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
namespaceSelector:
matchExpressions:
- key: type
operator: NotIn
values:
- finance
- ops
- dev

デフォルトの Ingress Controller では、**name:finance、name:ops**、および **name:dev** という名前の namespace が提供されなくなります。

8.1.4. Ingress シャーディングと DNS

クラスター管理者は、プロジェクト内のルーターごとに個別の DNS エントリーを作成します。ルーターは不明なルートを別のルーターに転送することはありません。

以下の例を考慮してください。

- Router A はホスト 192.168.0.5 にあり、*.foo.com のルートを持つ。
- Router B はホスト 192.168.1.9 にあり、*.example.com のルートを持つ。

個別の DNS エントリーは、*.foo.com をルーター A をホストするノードに解決し、*.example.com を ルーター B をホストするノードに解決する必要があります。

• *.foo.com A IN 192.168.0.5

• *.example.com A IN 192.168.1.9

8.1.5. ルートラベルを使用した Ingress Controller のシャード化の設定

ルートラベルを使用した Ingress Controller のシャード化とは、Ingress Controller がルートセレクター によって選択される任意 namespace の任意のルートを提供することを意味します。

図8.1ルートラベルを使用した Ingress シャーディング



301_OpenShift_0123

Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

手順

1. router-internal.yaml ファイルを編集します。

cat router-internal.yaml apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: sharded
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
domain: <apps-sharded.basedomain.example.net> 1</apps-sharded.basedomain.example.net>
nodePlacement:
nodeSelector:
matchLabels:
node-role.kubernetes.io/worker: ""

routeSelector: matchLabels: type: sharded



Ingress Controller が使用するドメインを指定します。このドメインは、デフォルトの Ingress Controller ドメインとは異なる必要があります。

2. Ingress Controller の router-internal.yaml ファイルを適用します。

oc apply -f router-internal.yaml

Ingress Controller は、type: sharded というラベルのある namespace のルートを選択します。

3. router-internal.yaml で設定されたドメインを使用して新しいルートを作成します。

\$ oc expose svc <service-name> --hostname <route-name>.appssharded.basedomain.example.net

8.1.6. namespace ラベルを使用した Ingress Controller のシャード化の設定

namespace ラベルを使用した Ingress Controller のシャード化とは、Ingress Controller が namespace セレクターによって選択される任意の namespace の任意のルートを提供することを意味します。

図8.2 namespace ラベルを使用した Ingress シャーディング



301_OpenShift_0123

Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

手順

1. router-internal.yaml ファイルを編集します。

cat router-internal.yaml

出力例



Ingress Controller が使用するドメインを指定します。このドメインは、デフォルトの Ingress Controller ドメインとは異なる必要があります。

2. Ingress Controller の router-internal.yaml ファイルを適用します。

oc apply -f router-internal.yaml

Ingress Controller は、**type: sharded** というラベルのある namespace セレクターによって選択 される namespace のルートを選択します。

3. router-internal.yaml で設定されたドメインを使用して新しいルートを作成します。

\$ oc expose svc <service-name> --hostname <route-name>.appssharded.basedomain.example.net

8.2. INGRESS CONTROLLER シャーディングのルート作成

ルートを使用すると、URL でアプリケーションをホストできます。この場合、ホスト名は設定されず、 ルートは代わりにサブドメインを使用します。サブドメインを指定すると、ルートを公開する Ingress Controller のドメインが自動的に使用されます。ルートが複数の Ingress Controller によって公開されて いる状況では、ルートは複数の URL でホストされます。

以下の手順では、例として **hello-openshift** アプリケーションを使用して、Ingress Controller シャー ディングのルートを作成する方法について説明します。

Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

前提条件

• OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

- プロジェクト管理者としてログインしている。
- あるポートを公開する Web アプリケーションと、そのポートでトラフィックをリッスンする HTTP または TCP エンドポイントがある。
- シャーディング用に Ingress Controller を設定している。

手順

1. 次のコマンドを実行して、hello-openshift というプロジェクトを作成します。

\$ oc new-project hello-openshift

2. 以下のコマンドを実行してプロジェクトに Pod を作成します。

\$ oc create -f https://raw.githubusercontent.com/openshift/origin/master/examples/helloopenshift/hello-pod.json

3. 以下のコマンドを実行して、hello-openshift というサービスを作成します。

\$ oc expose pod/hello-openshift

4. hello-openshift-route.yaml というルート定義を作成します。

シャーディング用に作成されたルートの YAML 定義:

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata: labels: type: sharded 1 name: hello-openshift-edge namespace: hello-openshift spec: subdomain: hello-openshift 2 tls: termination: edge to: kind: Service name: hello-openshift



ラベルキーとそれに対応するラベル値の両方が、Ingress Controller で指定されたものと一致する必要があります。この例では、Ingress Controller にはラベルキーと値 **type:** sharded があります。



ルートは、**subdomain** フィールドの値を使用して公開されます。**subdomain** フィールド を指定するときは、ホスト名を未設定のままにしておく必要があります。**host** フィールド と **subdomain** フィールドの両方を指定すると、ルートは **host** フィールドの値を使用 し、**subdomain** フィールドを無視します。

5. 次のコマンドを実行し、hello-openshift-route.yaml を使用して hello-openshift アプリケー ションへのルートを作成します。 \$ oc -n hello-openshift create -f hello-openshift-route.yaml

検証

- 次のコマンドを使用して、ルートのステータスを取得します。
 - \$ oc -n hello-openshift get routes/hello-openshift-edge -o yaml

結果の Route リソースは次のようになります。

出力例

```
apiVersion: route.openshift.io/v1
  kind: Route
  metadata:
   labels:
    type: sharded
   name: hello-openshift-edge
   namespace: hello-openshift
  spec:
   subdomain: hello-openshift
   tls:
    termination: edge
   to:
    kind: Service
    name: hello-openshift
  status:
   ingress:
   - host: hello-openshift.<apps-sharded.basedomain.example.net> (1)
    routerCanonicalHostname: router-sharded.<apps-sharded.basedomain.example.net> 2
    routerName: sharded 3
    Ingress Controller またはルーターがルートを公開するために使用するホスト名。host
    フィールドの値は、Ingress Controller によって自動的に決定され、そのドメインを使用し
    ます。この例では、Ingress Controller のドメインは <apps-
    sharded.basedomain.example.net> です。
    Ingress Controller のホスト名。
    Ingress Controller の名前。この例では、Ingress Controller の名前は sharded です。
3
```

関連情報

ベースライン Ingress Controller (ルーター)のパフォーマンス

第9章 OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM の INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR

Ingress Node Firewall Operator を使用すると、管理者はノードレベルでファイアウォール設定を管理できます。

9.1. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR

Ingress Node Firewall Operator は、ファイアウォール設定で指定および管理するノードにデーモンセットをデプロイすることにより、ノードレベルで ingress ファイアウォールルールを提供します。デーモンセットをデプロイするには、IngressNodeFirewallConfig カスタムリソース (CR) を作成します。 Operator は IngressNodeFirewallConfig CR を適用して、nodeSelector に一致するすべてのノードで実行される ingress ノードファイアウォールデーモンセット (daemon) を作成します。

IngressNodeFirewall CR の **rule** を設定し、**nodeSelector** を使用して値を "true" に設定してクラス ターに適用します。



重要

Ingress Node Firewall Operator は、ステートレスファイアウォールルールのみをサポートします。

最大転送単位 (MTU) パラメーターは、OpenShift Container Platform 4.12 では 4Kb (キロ バイト) です。

ネイティブ XDP ドライバーをサポートしないネットワークインターフェイスコントロー ラー (NIC) は、より低いパフォーマンスで実行されます。

Ingress Node Firewall Operator は、デフォルトの OpenShift インストールを備えた Amazon Web Services (AWS) または Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA) ではサ ポートされていません。Red Hat OpenShift Service on AWS のサポートと Ingress の詳 細は、Red Hat OpenShift Service on AWS の Ingress Operator を参照してください。

9.2. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR のインストール

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform CLI または Web コンソールを使用して Ingress Node Firewall Operator をインストールできます。

9.2.1. CLI を使用した Ingress Node Firewall Operator のインストール

クラスター管理者は、CLIを使用して Operator をインストールできます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- 管理者権限を持つアカウントを持っています。

手順

1. openshift-ingress-node-firewall namespace を作成するには、次のコマンドを入力します。

\$ cat << EOF| oc create -f -

apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: labels: pod-security.kubernetes.io/enforce: privileged pod-security.kubernetes.io/enforce-version: v1.24 name: openshift-ingress-node-firewall EOF

2. OperatorGroup CR を作成するには、以下のコマンドを実行します。

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
    name: ingress-node-firewall-operators
    namespace: openshift-ingress-node-firewall
EOF</pre>
```

- 3. Ingress Node Firewall Operator にサブスクライブします。
 - a. Ingress Node Firewall Operator の **Subscription** CR を作成するには、次のコマンドを入力します。

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
    name: ingress-node-firewall-sub
    namespace: openshift-ingress-node-firewall
spec:
    name: ingress-node-firewall
    channel: stable
    source: redhat-operators
    sourceNamespace: openshift-marketplace
EOF</pre>
```

4. Operator がインストールされていることを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get ip -n openshift-ingress-node-firewall

出力例

NAME CSV APPROVAL APPROVED install-5cvnz ingress-node-firewall.4.12.0-202211122336 Automatic true

5. Operator のバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc get csv -n openshift-ingress-node-firewall

出力例

NAME

DISPLAY

VERSION

REPLACES

PHASE

ingress-node-firewall.4.12.0-202211122336 Ingress Node Firewall Operator 4.12.0-202211122336 ingress-node-firewall.4.12.0-202211102047 Succeeded

9.2.2. Web コンソールを使用した Ingress Node Firewall Operator のインストール

クラスター管理者は、Web コンソールを使用して Operator をインストールできます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- 管理者権限を持つアカウントを持っています。

手順

- 1. Ingress Node Firewall Operator をインストールします。
 - a. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators → OperatorHub** をクリック します。
 - b. 利用可能な Operator のリストから Ingress Node Firewall Operator を選択し、Install をク リックします。
 - c. Install Operator ページの Installed Namespace で、Operator recommend Namespace を選択します。
 - d. Install をクリックします。
- 2. Ingress Node Firewall Operator が正常にインストールされていることを確認します。
 - a. Operators → Installed Operators ページに移動します。
 - b. Ingress Node Firewall Operator が openshift-ingress-node-firewall プロジェクトにリストされ、Status が InstallSucceeded であることを確認します。



注記

インストール時に、Operator は Failed ステータスを表示する可能性があり ます。インストールが後に InstallSucceeded メッセージを出して正常に実 行される場合は、Failed メッセージを無視できます。

Operator の **Status** が **InstallSucceeded** でない場合は、次の手順を使用してトラブル シューティングを行います。

- Operator Subscriptions および Install Plans タブで、Status の下の失敗またはエラーの有無を確認します。
- Workloads → Pods ページに移動し、openshift-ingress-node-firewall プロジェクトの Pod のログを確認します。
- YAML ファイルの namespace を確認してください。アノテーションが抜けている場合 は、次のコマンドを使用して、アノテーショ ンworkload.openshift.io/allowed=management を Operator namespace に追加でき ます。

\$ oc annotate ns/openshift-ingress-node-firewall workload.openshift.io/allowed=management



注記

単一ノードの OpenShift クラスターの場合、**openshift-ingress-nodefirewall** namespace には **workload.openshift.io/allowed=management** アノテーションが必要です。

9.3. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR のデプロイ

前提条件

• Ingress Node Firewall Operator がインストールされます。

手順

Ingress Node Firewall Operator をデプロイするには、Operator のデーモンセットをデプロイする IngressNodeFirewallConfig カスタムリソースを作成します。ファイアウォールルールを適用すること で、1つまたは複数の IngressNodeFirewall CRD をノードにデプロイできます。

- 1. ingressnodefirewallconfig という名前の openshift-ingress-node-firewall namespace 内に IngressNodeFirewallConfig を作成します。
- 2. 次のコマンドを実行して、Ingress Node Firewall Operator ルールをデプロイします。

\$ oc apply -f rule.yaml

9.3.1. ingress ノードファイアウォール設定オブジェクト

Ingress Node Firewall 設定オブジェクトのフィールドについて、次の表で説明します。

表9.1 ingress ノードファイアウォール設定オブジェクト

フィールド	型	説明
metadata.name	string	CR オブジェクトの名前。ファイアウォールルールオブジェクト の名前は ingressnodefirewallconfig である必要がありま す。
metadata.name space	string	Ingress Firewall Operator CR オブジェクトの namespace。 IngressNodeFirewallConfig CR は、 openshift-ingress-node-firewall namespace 内に作成 する必要があります。

フィールド	型	説明	
spec.nodeSelec tor	string	指定されたノードラベルを介してノードをターゲットにするた めに使用されるノード選択制約。以下に例を示します。	
		spec: nodeSelector: node-role.kubernetes.io/worker: ""	
		注記 デーモンセットを開始するに は、nodeSelector で使用される1つのラベル がノードのラベルと一致する必要があります。 たとえば、ノードラベル node- role.kubernetes.io/worker および node- type.kubernetes.io/vm がノードに適用され る場合、デーモンセットを開始するに は、nodeSelector を使用して少なくとも1つ のラベルを設定する必要があります。	



注記

Operator は CR を使用し、**nodeSelector** に一致するすべてのノード上に Ingress ノード ファイアウォールデーモンセットを作成します。

Ingress Node Firewall Operator の設定例

次の例では、完全な Ingress ノードファイアウォール設定が指定されています。

ingress ノードファイアウォール設定オブジェクトの例

apiVersion: ingressnodefirewall.openshift.io/v1alpha1 kind: IngressNodeFirewallConfig metadata: name: ingressnodefirewallconfig namespace: openshift-ingress-node-firewall spec: nodeSelector: node-role.kubernetes.io/worker: ""



注記

Operator は CR を使用し、**nodeSelector** に一致するすべてのノード上に Ingress ノード ファイアウォールデーモンセットを作成します。

9.3.2. ingress ノードファイアウォールルールオブジェクト

ingress ノードファイアウォールルールオブジェクトのフィールドについて、次の表で説明します。

表9.2 ingress ノードファイアウォールルールオブジェクト

フィールド	型	説明
metadata.name	string	CR オブジェクトの名前。
interfaces	array	このオブジェクトのフィールドは、ファイアウォールルールを 適用するインターフェイスを指定します。たとえば、 -en0 と - en1 です。
nodeSelector	array	nodeSelector を使用して、ファイアウォールルールを適用す るノードを選択できます。名前付き nodeselector ラベルの値 を true に設定して、ルールを適用します。
ingress	object	ingress を使用すると、クラスター上のサービスへの外部アク セスを許可するルールを設定できます。

Ingress オブジェクトの設定

Ingress オブジェクトの値は、次の表で定義されています。

表9.3 ingress オブジェクト

フィールド	型	説明
sourceCIDRs	array	CIDR ブロックを設定できます。異なるアドレスファ ミリーから複数の CIDR を設定できます。
		注記 異なる CIDR を使用すると、同じ順 序ルールを使用できます。CIDR が 重複する同じノードおよびインター フェイスに対して複数の IngressNodeFirewall オブジェク トがある場合、order フィールドは 最初に適用されるルールを指定しま す。ルールは昇順で適用されます。

フィールド	型	説明
rules	array	Ingress ファイアウォール rules.order オブジェクト は、 source.CIDR ごとに 1 から順に並べられ、 CIDR ごとに最大 100 のルールがあります。低次ルー ルが最初に実行されます。
		rules.protocolConfig.protocol は次のプロトコル をサポートします: TCP、UDP、SCTP、ICMP、およ び ICMPv6。ICMP および ICMPv6 ルールは、ICMP および ICMPv6 のタイプまたはコードと照合できま す。TCP、UDP、および SCTP ルールは、 <start: end-1> 形式を使用して、単一の宛先ポートまたは ポートの範囲に対して照合できます。</start:
		rules.action を設定してルールの適用を allow する か、 deny してルールを禁止します。
		注記 ingress ファイアウォールルールは、 無効な設定をブロックする検証 Webhook を使用して検証されます。 検証 Webhook は、API サーバーや SSH などの重要なクラスターサービ スをブロックすることを防ぎます。

ingress ノードファイアウォールルールオブジェクトの例 次の例では、完全な Ingress ノードファイアウォール設定が指定されています。

Ingress ノードファイアウォールの設定例

apiVersion: ingressnodefirewall.openshift.io/v1alpha1 kind: IngressNodeFirewall
matadata:
name: ingressnodefirewall
spec:
interfaces:
- eth0
nodeSelector:
matchLabels:
<ingress_firewall_label_name>: <label_value> 1</label_value></ingress_firewall_label_name>
ingress:
- sourceCIDRs:
- 172.16.0.0/12
rules:
- order: 10
protocolConfig:
protocol: ICMP
icmo.
icmnTyne: 8 #ICMP Echo request
action: Deny
action. Deny

```
protocolConfig:

protocol: TCP

tcp:

ports: "8000-9000"

action: Deny

- sourceCIDRs:

- fc00:f853:ccd:e793::0/64

rules:

- order: 10

protocolConfig:

protocolConfig:

protocol: ICMPv6

icmpv6:

icmpType: 128 #ICMPV6 Echo request

action: Deny
```

1

<label_name>と <label_value>はノード上に存在する必要があり、ingressfirewallconfig CR を実行するノードに適用される nodeselector ラベルと値に一致する必要があります。<label_value> は、true または false です。nodeSelector ラベルを使用すると、ノードのグループを個別にター ゲットにして、ingressfirewallconfig CR の使用に異なるルールを適用できます。

ゼロトラスト Ingress ノードファイアウォールルールオブジェクトの例

ゼロトラストの Ingress ノードファイアウォールルールは、マルチインターフェイスクラスターに追加 のセキュリティーを提供できます。たとえば、ゼロトラストの Ingress ノードファイアウォールルール を使用して、SSH を除く特定のインターフェイス上のすべてのトラフィックをドロップできます。

次の例では、ゼロトラスト Ingress ノードファイアウォールルールセットの完全な設定が指定されてい ます。



重要

次の場合、ユーザーはアプリケーションが使用するすべてのポートを許可リストに追加 して、適切な機能を確保する必要があります。

ゼロトラストの Ingress ノードファイアウォールルールの例

```
apiVersion: ingressnodefirewall.openshift.io/v1alpha1
kind: IngressNodeFirewall
metadata:
name: ingressnodefirewall-zero-trust
spec:
interfaces:
- eth1 🚺
nodeSelector:
 matchLabels:
   <ingress_firewall_label_name>: <label_value> (2)
ingress:
- sourceCIDRs:
   - 0.0.0.0/0 3
 rules:
 - order: 10
   protocolConfig:
    protocol: TCP
    tcp:
     ports: 22
```



9.4. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR ルールの表示

手順

1. 次のコマンドを実行して、現在のルールをすべて表示します。



2. 返された **<resource>**名のいずれかを選択し、次のコマンドを実行してルールまたは設定を表示します。

\$ oc get <resource> <name> -o yaml

9.5. INGRESS NODE FIREWALL OPERATOR のトラブルシューティング

次のコマンドを実行して、インストールされている Ingress ノードファイアウォールのカスタムリソース定義 (CRD) を一覧表示します。

\$ oc get crds | grep ingressnodefirewall

出力例

NAMEREADYUP-TO-DATEAVAILABLEAGEingressnodefirewallconfigs.ingressnodefirewall.openshift.io2022-08-25T10:03:01Zingressnodefirewallnodestates.ingressnodefirewall.openshift.io2022-08-25T10:03:00Zingressnodefirewalls.ingressnodefirewall.openshift.io2022-08-25T10:03:00Z

● 次のコマンドを実行して、Ingress Node Firewall Operator の状態を表示します。

\$ oc get pods -n openshift-ingress-node-firewall

出力例

NAME	READY	ST	ATU	S I	RESTARTS	AGE
ingress-node-firewall-controller	r-manage	er 2	2/2	Runnin	g 0	5d21h
ingress-node-firewall-daemon-	pqx56	3	3/3	Runnin	g 0	5d21h

次のフィールドは、Operator のステータスに関する情報を提供します: **READY、STATUS、AGE、**および **RESTARTS**。Ingress Node Firewall Operator が割り当てら れたノードに設定されたデーモンをデプロイしている場合、**STATUS** フィールドは **Running** になります。

次のコマンドを実行して、すべての ingress ファイアウォールノード Pod のログを収集します。

\$ oc adm must-gather - gather_ingress_node_firewall

ログは、/**sos_commands/ebpf** にある eBPF **bpftool** 出力を含む sos ノードのレポートで利用 できます。これらのレポートには、Ingress ファイアウォール XDP がパケット処理を処理し、 統計を更新し、イベントを発行するときに使用または更新されたルックアップテーブルが含ま れます。

第10章 手動 DNS 管理のための INGRESS CONTROLLER の設定

クラスター管理者として Ingress Controller を作成すると、Operator は DNS レコードを自動的に管理 します。必要な DNS ゾーンがクラスター DNS ゾーンと異なる場合、または DNS ゾーンがクラウドプ ロバイダーの外部でホストされている場合、これにはいくつかの制限があります。

クラスター管理者は、Ingress Controller を設定して、自動 DNS 管理を停止し、手動 DNS 管理を開始 することができます。dnsManagementPolicy を設定して、いつ自動または手動で管理するかを指定し ます。

Ingress Controller を **Managed** から **Unmanaged** DNS 管理ポリシーに変更すると、Operator はクラウ ドでプロビジョニングされた以前のワイルドカード DNS レコードをクリーンアップしません。Ingress Controller を **Unmanaged** から **Managed** DNS 管理ポリシーに変更すると、Operator は、クラウドプ ロバイダーに DNS レコードが存在しない場合は作成を試み、DNS レコードがすでに存在する場合は更 新を試みます。



重要

dnsManagementPolicy を **unmanaged** に設定すると、クラウドプロバイダーでワイル ドカード DNS レコードのライフサイクルを手動で管理する必要があります。

10.1. MANAGED DNS 管理ポリシー

Ingress Controller の **Managed** DNS 管理ポリシーにより、クラウドプロバイダーのワイルドカード DNS レコードのライフサイクルが Operator によって自動的に管理されるようになります。

10.2. UNMANAGED DNS 管理ポリシー

Ingress Controller の **Unmanaged** DNS 管理ポリシーにより、クラウドプロバイダーのワイルドカード DNS レコードのライフサイクルが自動的に管理されず、代わりにクラスター管理者の責任になります。



注記

AWS クラウドプラットフォームでは、Ingress Controller のドメインが dnsConfig.Spec.BaseDomain と一致しない場合、DNS 管理ポリシーは自動的に Unmanaged に設定されます。

10.3. UNMANAGED DNS管理ポリシーを使用したカスタム **INGRESS** CONTROLLER の作成

クラスター管理者は、**Unmanaged** DNS 管理ポリシーを使用して、新しいカスタム Ingress Controller を作成できます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下を含む **sample-ingress.yaml** という名前のカスタムリソース (CR) ファイルを作成しま す。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
namespace: openshift-ingress-operator
name: <name> 1
spec:
domain: <domain> 2
endpointPublishingStrategy:
 type: LoadBalancerService
 loadBalancer:
  scope: External 3
  dnsManagementPolicy: Unmanaged 4
 IngressController オブジェクトの名前で <name> を指定します。
 前提として作成した DNS レコードをもとに domain を指定します。
 scope を External として指定して、ロードバランサーを外部に公開します。
 dnsManagementPolicy は、Ingress Controller がロードバランサーに関連付けられたワイ
 ルドカード DNS レコードのライフサイクルを管理しているかどうかを示します。有効な
 値は Managed および Unmanaged です。デフォルト値は Managed です。
```

2. 変更を適用するためにファイルを保存します。



10.4. 既存の INGRESS CONTROLLER の変更

クラスター管理者は、既存の Ingress Controller を変更して、DNS レコードのライフサイクルを手動で 管理できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 選択した IngressController を変更して dnsManagementPolicy を設定します。

SCOPE=\$(oc -n openshift-ingress-operator get ingresscontroller <name> -o=jsonpath=" {.status.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.scope}")

oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontrollers/<name> --type=merge -patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy":{"type":"LoadBalancerService","loadBalancer": {"dnsManagementPolicy":"Unmanaged", "scope":"\${SCOPE}"}}}'

2. オプション: クラウドプロバイダーで関連付けられている DNS レコードを削除できます。

10.5. 関連情報

● Ingress Controller 設定パラメーター

第11章 INGRESS CONTROLLER エンドポイント公開戦略の設定

endpointPublishingStrategy は Ingress コントローラーエンドポイントを他のネットワークに公開 し、ロードバランサーの統合を有効にし、他のシステムへのアクセスを提供するために使用されます。



重要

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) では、クラウドプロバイダーがヘルスモニター を作成するように設定されている場合にのみ、**LoadBalancerService** エンドポイントの 公開ストラテジーがサポートされます。RHOSP 16.2 の場合、このストラテジーは Amphora Octavia プロバイダーを使用する場合にのみ可能です。

詳細は、RHOSP インストールドキュメントの RHOSP Cloud Controller Manager オプ ションの設定セクションを参照してください。

11.1. INGRESS CONTROLLER エンドポイントの公開ストラテジー

NodePortService エンドポイントの公開ストラテジー

NodePortService エンドポイントの公開ストラテジーは、Kubernetes NodePort サービスを使用して Ingress Controller を公開します。

この設定では、Ingress Controller のデプロイメントはコンテナーのネットワークを使用しま す。**NodePortService** はデプロイメントを公開するために作成されます。特定のノードポートは OpenShift Container Platform によって動的に割り当てられますが、静的ポートの割り当てをサポート するために、管理される **NodePortService** のノードポートフィールドへの変更が保持されます。

図11.1 NodePortServiceの図



202_OpenShift_0222

前述の図では、OpenShift Container Platform Ingress NodePort エンドポイントの公開戦略に関する以下のような概念を示しています。

- クラスターで利用可能なノードにはすべて、外部からアクセス可能な独自の IP アドレスが割り 当てられています。クラスター内で動作するサービスは、全ノードに固有の NodePort にバイ ンドされます。
- たとえば、クライアントが図中の IP アドレス 10.0.128.4 に接続してダウンしているノードに 接続した場合に、ノードポートは、サービスを実行中で利用可能なノードにクライアントを直 接接続します。このシナリオでは、ロードバランシングは必要ありません。イメージが示すよ うに、10.0.128.4 アドレスがダウンしており、代わりに別の IP アドレスを使用する必要があり ます。

注記

Ingress Operator は、サービスの **.spec.ports[].nodePort** フィールドへの更新を無視します。

デフォルトで、ポートは自動的に割り当てられ、各種の統合用のポート割り当てにアク セスできます。ただし、既存のインフラストラクチャーと統合するために静的ポートの 割り当てが必要になることがありますが、これは動的ポートに対応して簡単に再設定で きない場合があります。静的ノードポートとの統合を実行するには、マネージドのサー ビスリソースを直接更新できます。
詳細は、NodePort についての Kubernetes サービスについてのドキュメント を参照してください。

HostNetwork エンドポイントの公開ストラテジー

HostNetwork エンドポイントの公開ストラテジーは、Ingress Controller がデプロイされるノードポー トで Ingress Controller を公開します。

HostNetwork エンドポイント公開ストラテジーを持つ Ingress Controller には、ノードごとに単一の Pod レプリカのみを設定できます。nのレプリカを使用する場合、それらのレプリカをスケジュールで きる n 以上のノードを使用する必要があります。各 Pod はスケジュールされるノードホストでポート 80 および 443 を要求するので、同じノードで別の Pod がそれらのポートを使用している場合、レプリ カをノードにスケジュールすることはできません。

HostNetwork オブジェクトには、オプションのバインディングポートのデフォルト値を持つ hostNetwork フィールドがあります: httpPort: 80、httpsPort: 443、および statsPort: 1936。ネット ワークに異なるバインディングポートを指定すると、HostNetwork ストラテジーの同じノードに複数 の Ingress コントローラーをデプロイできます。

例

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController
metadata:
name: internal
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
domain: example.com
endpointPublishingStrategy:
type: HostNetwork
hostNetwork:
httpPort: 80
httpsPort: 443
statsPort: 1936

11.1.1. Ingress Controller エンドポイント公開スコープの内部への設定

クラスター管理者がクラスターをプライベートに指定せずに新しいクラスターをインストールする と、**scope**が**External**に設定されたデフォルトの Ingress Controller が作成されます。クラスター管理者 は、**External** スコープの Ingress Controller を **Internal**に変更できます。

前提条件

• oc CLI がインストールされている。

手順

Externalスコープの Ingress Controller を Internal に変更するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontrollers/default --type=merge -patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy":{"type":"LoadBalancerService","loadBalancer": {"scope":"Internal"}}}

● Ingress Controller のステータスを確認するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator get ingresscontrollers/default -o yaml

 ステータス状態が Progressing の場合は、さらにアクションを実行する必要があるかどう かを示します。たとえば、ステータスの状態によっては、次のコマンドを入力して、サー ビスを削除する必要があることを示している可能性があります。

\$ oc -n openshift-ingress delete services/router-default

サービスを削除すると、Ingress Operator はサービスをInternalとして再作成します。

11.1.2. Ingress Controller エンドポイント公開スコープの外部への設定

クラスター管理者がクラスターをプライベートに指定せずに新しいクラスターをインストールする と、**scope**が**External**に設定されたデフォルトの Ingress Controller が作成されます。

Ingress Controller のスコープは、インストール中またはインストール後に**Internal**になるように設定でき、クラスター管理者は**Internal**の Ingress Controller を**External**に変更できます。



重要

一部のプラットフォームでは、サービスを削除して再作成する必要があります。

スコープを変更すると、場合によっては数分間、Ingress トラフィックが中断される可能 性があります。これが該当するのは、サービスを削除して再作成する必要があるプラッ トフォームです。理由は、この手順により、OpenShift Container Platform が既存のサー ビスロードバランサーのプロビジョニングを解除して新しいサービスロードバランサー をプロビジョニングし、DNS を更新する可能性があるためです。

前提条件

• oc CLI がインストールされている。

手順

Internalスコープの入力コントローラーをExternalに変更するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontrollers/private --type=merge -patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy":{"type":"LoadBalancerService","loadBalancer": {"scope":"External"}}}'

● Ingress Controller のステータスを確認するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator get ingresscontrollers/default -o yaml

 ステータス状態が Progressing の場合は、さらにアクションを実行する必要があるかどう かを示します。たとえば、ステータスの状態によっては、次のコマンドを入力して、サー ビスを削除する必要があることを示している可能性があります。

\$ oc -n openshift-ingress delete services/router-default

サービスを削除すると、Ingress Operator はサービスをExternalとして再作成します。

11.2. 関連情報

- Ingress コントローラー設定パラメーター。
- RHOSP Cloud Controller Manager オプションの設定

第12章 エンドポイントへの接続の確認

Cluster Network Operator (CNO) は、クラスター内のリソース間の接続ヘルスチェックを実行するコントローラーである接続性チェックコントローラーを実行します。ヘルスチェックの結果を確認して、調査している問題が原因で生じる接続の問題を診断したり、ネットワーク接続を削除したりできます。

12.1. 実行する接続ヘルスチェック

クラスターリソースにアクセスできることを確認するには、以下のクラスター API サービスのそれぞれ に対して TCP 接続が行われます。

- Kubernetes API サーバーサービス
- Kubernetes API サーバーエンドポイント
- OpenShift API サーバーサービス
- OpenShift API サーバーエンドポイント
- ロードバランサー

サービスおよびサービスエンドポイントがクラスター内のすべてのノードで到達可能であることを確認 するには、以下の各ターゲットに対して TCP 接続が行われます。

- ヘルスチェックターゲットサービス
- ヘルスチェックターゲットエンドポイント

12.2. 接続ヘルスチェックの実装

接続チェックコントローラーは、クラスター内の接続検証チェックをオーケストレーションします。接続テストの結果は、openshift-network-diagnostics namespace の PodNetworkConnectivity オブジェクトに保存されます。接続テストは、1分ごとに並行して実行されます。

Cluster Network Operator (CNO) は、接続性ヘルスチェックを送受信するためにいくつかのリソースを クラスターにデプロイします。

ヘルスチェックのソース

このプログラムは、**Deployment** オブジェクトで管理される単一の Pod レプリカセットにデプロイ します。このプログラムは **PodNetworkConnectivity** オブジェクトを消費し、各オブジェクトで指 定される **spec.targetEndpoint** に接続されます。

ヘルスチェックのターゲット

クラスターのすべてのノードにデーモンセットの一部としてデプロイされた Pod。Pod はインバウ ンドのヘルスチェックをリッスンします。すべてのノードにこの Pod が存在すると、各ノードへの 接続をテストすることができます。

12.3. PODNETWORKCONNECTIVITYCHECK オブジェクトフィールド

PodNetworkConnectivityCheck オブジェクトフィールドについては、以下の表で説明されています。

表12.1 PodNetworkConnectivityCheck オブジェクトフィールド

フィールド	型	説明
metadata.name	string	以下の形式のオブジェクトの名前: <source/>-to- <target><target></target></target> で記述される宛先には、以下の いずれかの文字列が含まれます。
		load-balancer-api-external
		 load-balancer-api-internal
		kubernetes-apiserver-endpoint
		kubernetes-apiserver-service-cluster
		network-check-target
		openshift-apiserver-endpoint
		• opensnitt-apiserver-service-cluster
metadata.namespace	string	オブジェクトが関連付けられる namespace。この値 は、常に openshift-network-diagnostics になり ます。
spec.sourcePod	string	接続チェックの起点となる Pod の名前 (例: network-check-source-596b4c6566-rgh92)。
spec.targetEndpoint	string	api.devcluster.example.com:6443 などの接続 チェックのターゲット。
spec.tlsClientCert	object	使用する TLS 証明書の設定。
spec.tlsClientCert.name	string	使用される TLS 証明書の名前 (ある場合)。デフォル ト値は空の文字列です。
status	object	接続テストの状態を表す、および最近の接続の成功 および失敗についてのログ。
status.conditions	array	接続チェックと最新のステータスと以前のステータ ス。
status.failures	array	試行に失敗した接続テストのログ。
status.outages	array	停止が生じた期間が含まれる接続テストのログ。
status.successes	array	試行に成功した接続テストのログ。

以下の表は、**status.conditions** 配列内のオブジェクトのフィールドについて説明しています。

表12.2 status.conditions

フィールド	型	説明
lastTransitionTime	string	接続の条件がある状態から別の状態に移行した時 間。
message	string	人が判読できる形式の最後の移行についての詳細。
reason	string	マシンの読み取り可能な形式での移行の最後のス テータス。
status	string	状態のテータス。
type	string	状態のタイプ。

以下の表は、status.conditions 配列内のオブジェクトのフィールドについて説明しています。

表12.3 status.outages

フィールド	型	説明
end	string	接続の障害が解決された時点からのタイムスタン プ。
endLogs	array	接続ログエントリー (停止の正常な終了に関連するロ グエントリーを含む)。
message	string	人が判読できる形式の停止について詳細情報の要 約。
start	string	接続の障害が最初に検知された時点からのタイムス タンプ。
startLogs	array	元の障害を含む接続ログのエントリー。

接続ログフィールド

接続ログエントリーのフィールドの説明は以下の表で説明されています。オブジェクトは以下のフィー ルドで使用されます。

- status.failures[]
- status.successes[]
- status.outages[].startLogs[]
- status.outages[].endLogs[]

表12.4 接続ログオブジェクト

フィールド	型	説明
latency	string	アクションの期間を記録します。
message	string	ステータスを人が判読できる形式で提供します。
reason	string	ステータスの理由をマシンが判読できる形式で提供 します。値は TCPConnect、TCPConnectError、DNSResol ve、DNSError のいずれかになります。
success	boolean	ログエントリーが成功または失敗であるかを示しま す。
time	string	接続チェックの開始時間。

12.4. エンドポイントのネットワーク接続の確認

クラスター管理者は、API サーバー、ロードバランサー、サービス、または Pod などのエンドポイント の接続を確認できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

1. 現在の PodNetworkConnectivityCheck オブジェクトをリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc get podnetworkconnectivitycheck -n openshift-network-diagnostics

出力例

NAME AGE network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-kubernetes-apiserverendpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-kubernetes-apiserverendpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-1 73m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-kubernetes-apiserverendpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-2 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-kubernetes-apiserverservice-cluster 75m network-check-source-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-kubernetes-defaultservice-cluster 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-load-balancer-apiexternal 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-load-balancer-apiinternal 75m

network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-target-ciln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0 75m network-check-source-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-target-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-1 75m network-check-source-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-target-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-2 75m network-check-source-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-target-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh 74m network-check-source-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-target-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-c-n8mbf 74m network-check-source-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-target-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-d-4hnrz 74m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-network-check-targetservice-cluster 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-openshift-apiserverendpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-openshift-apiserverendpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-1 75m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-openshift-apiserverendpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-2 74m network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-openshift-apiserverservice-cluster 75m

- 2. 接続テストログを表示します。
 - a. 直前のコマンドの出力から、接続ログを確認するエンドポイントを特定します。
 - b. オブジェクトを表示するには、以下のコマンドを入力します。

ここで、<name> は PodNetworkConnectivityCheck オブジェクトの名前を指定します。

出力例

```
apiVersion: controlplane.operator.openshift.io/v1alpha1
kind: PodNetworkConnectivityCheck
metadata:
 name: network-check-source-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-worker-b-6xdmh-to-kubernetes-
apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0
 namespace: openshift-network-diagnostics
 ...
spec:
 sourcePod: network-check-source-7c88f6d9f-hmg2f
 targetEndpoint: 10.0.0.4:6443
 tlsClientCert:
  name: ""
status:
 conditions:
 - lastTransitionTime: "2021-01-13T20:11:34Z"
  message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp
   connection to 10.0.0.4:6443 succeeded'
  reason: TCPConnectSuccess
  status: "True"
  type: Reachable
```

failures: - latency: 2.241775ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:10:34Z" - latency: 2.582129ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:09:34Z" - latency: 3.483578ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:08:34Z" outages: - end: "2021-01-13T20:11:34Z" endLogs: - latency: 2.032018ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T20:11:34Z" - latency: 2.241775ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:10:34Z" - latency: 2.582129ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:09:34Z" - latency: 3.483578ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:08:34Z" message: Connectivity restored after 2m59.999789186s start: "2021-01-13T20:08:34Z" startLogs: - latency: 3.483578ms

message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: failed to establish a TCP connection to 10.0.0.4:6443: dial tcp 10.0.0.4:6443: connect: connection refused' reason: TCPConnectError success: false time: "2021-01-13T20:08:34Z" successes: - latency: 2.845865ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-In-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:14:34Z" - latency: 2.926345ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:13:34Z" - latency: 2.895796ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:12:34Z" - latency: 2.696844ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:11:34Z" - latency: 1.502064ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:10:34Z" - latency: 1.388857ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:09:34Z" - latency: 1.906383ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:08:34Z" - latency: 2.089073ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded' reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:07:34Z" - latency: 2.156994ms

message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded'
reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:06:34Z"
latency: 1.777043ms message: 'kubernetes-apiserver-endpoint-ci-ln-x5sv9rb-f76d1-4rzrp-master-0: tcp connection to 10.0.0.4:6443 succeeded'
reason: TCPConnect success: true time: "2021-01-13T21:05:34Z"

第13章 クラスターネットワークの MTU 変更

クラスター管理者は、クラスターのインストール後にクラスターネットワークの MTU を変更できま す。MTU 変更の適用には、クラスターノードを再起動する必要があるため、変更により致命的な問題 が発生する可能性があります。OVN-Kubernetes または OpenShift SDN ネットワークプラグインを使 用して、クラスターの MTU のみを変更できます。

13.1. クラスター MTU について

インストール中に、クラスターネットワークの最大伝送ユニット (MTU) は、クラスター内のノードの プライマリーネットワークインターフェイスの MTU をもとに、自動的に検出されます。通常、検出さ れた MTU を上書きする必要はありません。

以下のような理由でクラスターネットワークの MTU を変更する場合があります。

- クラスターのインストール中に検出された MTU が使用中のインフラストラクチャーに適して いない
- クラスターインフラストラクチャーに異なる MTU が必要となった (例: パフォーマンスの最適 化にさまざまな MTU を必要とするノードが追加された)。

OVN-Kubernetes および OpenShift SDN クラスターネットワークプラグインに対してのみ、クラス ター MTU を変更できます。

13.1.1. サービス中断に関する考慮事項

クラスターで MTU の変更を開始すると、次の動作が原因でサービスの可用性に影響を与える可能性があります。

- 新しい MTU への移行を完了するには、少なくとも 2 回のローリングリブートが必要です。この間、一部のノードは再起動するため使用できません。
- 特定のアプリケーションに、絶対 TCP タイムアウト間隔よりもタイムアウトの間隔が短いクラ スターにデプロイされた場合など、MTU の変更中に中断が発生する可能性があります。

13.1.2. MTU 値の選択

MTU の移行を計画するときは、関連しているが異なる MTU 値を2つ考慮する必要があります。

- ハードウェア MTU: この MTU 値は、ネットワークインフラストラクチャーの詳細に基づいて設定されます。
- クラスターネットワーク MTU: この MTU 値は、クラスターネットワークオーバーレイのオーバーヘッドを考慮して、常にハードウェア MTU よりも小さくなります。特定のオーバーヘッドは、ネットワークプラグインによって決まります。
 - OVN-Kubernetes: 100バイト
 - OpenShift SDN: 50バイト

クラスターがノードごとに異なる MTU 値を必要とする場合は、クラスター内の任意のノードで使用される最小の MTU 値から、ネットワークプラグインのオーバーヘッド値を差し引く必要があります。たとえば、クラスター内の一部のノードでは MTU が 9001 であり、MTU が 1500 のクラスターもある場合には、この値を 1400 に設定する必要があります。



重要

ノードが受け入れられない MTU 値の選択を回避するには、**ip -d link** コマンドを使用して、ネットワークインターフェイスが受け入れる最大 MTU 値 (**maxmtu**) を確認します。

13.1.3.移行プロセスの仕組み

以下の表は、プロセスのユーザーが開始する手順と、移行が応答として実行するアクション間を区分し て移行プロセスを要約しています。

表13.1 クラスター MTU のライブマイグレーション

ユーザーが開始する手順	OpenShift Container Platform アクティビティー
Cluster Network Operator 設定で次の値を指定しま す。	Cluster Network Operator (CNO) 各フィールドが 有効な値に設定されていることを確認します。
 spec.migration.mtu.machine.to spec.migration.mtu.network.from spec.migration.mtu.network.to 	 mtu.machine.toは、新しいハードウェア MTU、またはハードウェアの MTU が変更 されていない場合は、現在のハードウェア MTU のいずれかに設定する必要がありま す。この値は一時的なものであり、移行プ ロセスの一部として使用されます。これと は別に、既存のハードウェア MTU 値とは異 なるハードウェア MTU を指定する場合は、 マシン設定、DHCP 設定、Linux カーネルコ マンドラインなどの他の方法で永続化する ように MTU を手動で設定する必要がありま す。
	 mtu.network.from フィールドは、クラス ターネットワークの現在の MTU である network.status.clusterNetworkMTU フィールドと同じである必要があります。 mtu.network.toフィールドは、ターゲッ トクラスターネットワーク MTU に設定する 必要があり、ネットワークプラグインの オーバーレイオーバーヘッドを考慮して、 ハードウェア MTU よりも低くする必要があ ります。OVN-Kubernetes の場合、オー バーヘッドは100バイトで、OpenShift SDN の場合のオーバーヘッドは50バイトです。 指定の値が有効な場合に、CNO は、クラスターネッ トワークの MTU がmtu.network.toフィールドの値 に設定された新しい一時設定を書き出します。 Machine Config Operator (MCO) クラスター内の 各ノードのローリングリブートを実行します。

ユーザーが開始する手順	OpenShift Container Platform アクティビティー
クラスター上のノードのプライマリーネットワーク インターフェイスの MTU を再設定します。これを実 現するには、次のようなさまざまな方法を使用でき ます。	該当なし
● MTU を変更した新しい NetworkManager 接 続プロファイルのデプロイ	
● DHCP サーバー設定による MTU の変更	
● ブートパラメーターによる MTU の変更	
ネットワークプラグインの CNO 設定で mtu 値を設 定し、 spec.migration を null に設定します。	Machine Config Operator (MCO) 新しい MTU 設定 を使用して、クラスター内の各ノードのローリング リブートを実行します。

13.2. クラスター MTU の変更

クラスター管理者は、クラスターの最大転送単位 (MTU) を変更できます。移行には中断を伴い、MTU 更新が公開されると、クラスター内のノードが一時的に利用できなくなる可能性があります。

次の手順では、マシン設定、DHCP、または ISO のいずれかを使用してクラスター MTU を変更する方 法について説明します。DHCP または ISO アプローチを使用する場合は、クラスターのインストール後 に保持した設定アーティファクトを参照して、手順を完了する必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- クラスターのターゲット MTU を特定している。正しい MTU は、クラスターが使用するネット ワークプラグインによって異なります。
 - OVN-Kubernetes: クラスター MTU は、クラスター内の最小のハードウェア MTU 値から 100を引いた数に設定する必要があります。
 - OpenShift SDN: クラスター MTU は、クラスター内の最小ハードウェア MTU 値から 50 を 引いた値に設定する必要があります。

手順

クラスターネットワークの MTU を増減するには、次の手順を実行します。

1. クラスターネットワークの現在の MTU を取得するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc describe network.config cluster

出力例

. . .

118

```
Status:
Cluster Network:
Cidr: 10.217.0.0/22
Host Prefix: 23
Cluster Network MTU: 1400
Network Type: OpenShiftSDN
Service Network:
10.217.4.0/23
```

- 2. ハードウェア MTU の設定を準備します。
 - ハードウェア MTU が DHCP で指定されている場合は、次の dnsmasq 設定などで DHCP 設定を更新します。

dhcp-option-force=26,<mtu>

ここでは、以下のようになります。

<mtu>

DHCP サーバーがアドバタイズするハードウェア MTU を指定します。

- ハードウェア MTU が PXE を使用したカーネルコマンドラインで指定されている場合は、 それに応じてその設定を更新します。
- ハードウェア MTU が NetworkManager 接続設定で指定されている場合は、以下のステップを実行します。OpenShift Container Platform では、これは、DHCP、カーネルコマンドラインなどの方法でネットワーク設定を明示的に指定していない場合のデフォルトのアプローチです。変更なしで次の手順を機能させるには、全クラスターノードで、同じ基盤となるネットワーク設定を使用する必要があります。
 - i. プライマリーネットワークインターフェイスを見つけます。
 - OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用している場合は、次のコマンドを 入力します。

\$ oc debug node/<node_name> -- chroot /host ip route list match 0.0.0/0 | awk
'{print \$5 }'

ここでは、以下のようになります。

<node_name>

クラスター内のノードの名前を指定します。

 OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用している場合は、次のコマンドを 入力します。

\$ oc debug node/<node_name> -- chroot /host nmcli -g connection.interfacename c show ovs-if-phys0

ここでは、以下のようになります。

<node_name>

クラスター内のノードの名前を指定します。

ii. <interface>-mtu.conf ファイルに次の NetworkManager 設定を作成します。

NetworkManager 接続設定の例

[connection-<interface>-mtu] match-device=interface-name:<interface> ethernet.mtu=<mtu>

ここでは、以下のようになります。

<mtu>

新しいハードウェア MTU 値を指定します。

<interface>

2

プライマリーネットワークインターフェイス名を指定します。

- iii. 1つはコントロールプレーンノード用、もう1つはクラスター内のワーカーノード用 に、2つの**MachineConfig**オブジェクトを作成します。
 - A. control-plane-interface.bu ファイルに次の Butane 設定を作成します。

variant: openshift version: 4.12.0	
metadata:	
name: 01-control-plane-interface	
labels:	
machineconfiguration.openshift.io/role: master	
storage:	
files:	
- path: /etc/NetworkManager/conf.d/99- <interface>-mtu.conf 1</interface>	
contents:	
local: <interface>-mtu.conf 2</interface>	
mode: 0600	



前の手順で更新された NetworkManager 設定ファイルのローカルファイル名 を指定します。

B. worker-interface.bu ファイルに次の Butane 設定を作成します。

```
variant: openshift
version: 4.12.0
metadata:
    name: 01-worker-interface
    labels:
    machineconfiguration.openshift.io/role: worker
storage:
    files:
        - path: /etc/NetworkManager/conf.d/99-<interface>-mtu.conf 1
        contents:
        local: <interface>-mtu.conf 2
        mode: 0600
```

- プライマリーネットワークインターフェイスの NetworkManager 接続名を指定します。
- 2 前の手順で更新された NetworkManager 設定ファイルのローカルファイル名 を指定します。
- C. 次のコマンドを実行して、Butane 設定から MachineConfig オブジェクトを作成 します。

\$ for manifest in control-plane-interface worker-interface; do
 butane --files-dir . \$manifest.bu > \$manifest.yaml
 done

3. MTU 移行を開始するには、次のコマンドを入力して移行設定を指定します。Machine Config Operator は、MTU の変更に備えて、クラスター内のノードをローリングリブートします。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge --patch \
 '{"spec": { "migration": { "mtu": { "network": { "from": <overlay_from>, "to": <overlay_to> } ,
 "machine": { "to" : <machine_to> } } } }'

ここでは、以下のようになります。

<overlay_from>

現在のクラスターネットワークの MTU 値を指定します。

<overlay_to>

クラスターネットワークのターゲット MTU を指定します。この値は、 **<machine_to>**の値 を基準にして設定され、それぞれ、OVN-Kubernetes の場合は**100** を、OpenShift SDN の 場合は**50** を引いた値に指定します。

<machine_to>

基盤となるホストネットワークのプライマリーネットワークインターフェイスの MTU を指 定します。

クラスター MTU を増やす例

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge --patch \
 '{"spec": { "migration": { "mtu": { "network": { "from": 1400, "to": 9000 } , "machine": { "to" :
 9100} } } }'

MCO がそれぞれのマシン設定プールのマシンを更新すると、各ノードが1つずつ再起動します。すべてのノードが更新されるまで待機する必要があります。以下のコマンドを実行してマシン設定プールのステータスを確認します。

\$ oc get mcp

正常に更新されたノードには、UPDATED=true、UPDATING=false、DEGRADED=falseのス テータスがあります。



注記

デフォルトで、MCOはプールごとに一度に1つのマシンを更新するため、移行 にかかる合計時間がクラスターのサイズと共に増加します。

- 5. ホスト上の新規マシン設定のステータスを確認します。
 - a. マシン設定の状態と適用されたマシン設定の名前をリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc describe node | egrep "hostname|machineconfig"

出力例

kubernetes.io/hostname=master-0 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/reason: machineconfiguration.openshift.io/state: Done

以下のステートメントが true であることを確認します。

- machineconfiguration.openshift.io/state フィールドの値は Done です。
- machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドの値 は、machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig フィールドの値と等しくなり ます。
- b. マシン設定が正しいことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get machineconfig <config_name> -o yaml | grep ExecStart

<config_name>は machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドのマシン設定の名前です。

マシン設定には、systemd 設定に以下の更新を含める必要があります。

ExecStart=/usr/local/bin/mtu-migration.sh

- 6. 基盤となるネットワークインターフェイスの MTU 値を更新します。
 - NetworkManager 接続設定で新しい MTU を指定する場合は、次のコマンドを入力します。 MachineConfig Operator は、クラスター内のノードのローリングリブートを自動的に実行 します。

\$ for manifest in control-plane-interface worker-interface; do
 oc create -f \$manifest.yaml
 done

- DHCP サーバーオプションまたはカーネルコマンドラインと PXE を使用して新しい MTU を指定する場合は、インフラストラクチャーに必要な変更を加えます。
- 7. MCO がそれぞれのマシン設定プールのマシンを更新すると、各ノードが1つずつ再起動します。すべてのノードが更新されるまで待機する必要があります。以下のコマンドを実行してマシン設定プールのステータスを確認します。

\$ oc get mcp

正常に更新されたノードには、**UPDATED=true、UPDATING=false、DEGRADED=false**のス テータスがあります。



注記

デフォルトで、MCOはプールごとに一度に1つのマシンを更新するため、移行 にかかる合計時間がクラスターのサイズと共に増加します。

- 8. ホスト上の新規マシン設定のステータスを確認します。
 - a. マシン設定の状態と適用されたマシン設定の名前をリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc describe node | egrep "hostname|machineconfig"

出力例

kubernetes.io/hostname=master-0 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/reason: machineconfiguration.openshift.io/state: Done

以下のステートメントが true であることを確認します。

- machineconfiguration.openshift.io/state フィールドの値は Done です。
- machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドの値 は、machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig フィールドの値と等しくなり ます。
- b. マシン設定が正しいことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get machineconfig <config_name> -o yaml | grep path:

<config_name> は machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドのマシン設定の名前です。

マシン設定が正常にデプロイされた場合、前の出力には /etc/NetworkManager/conf.d/99-<interface>-mtu.conf ファイルパスと ExecStart=/usr/local/bin/mtu-migration.sh 行が含まれます。

- 9. MTU 移行を完了するには、次のいずれかのコマンドを入力します。
 - OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用している場合:

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge --patch \
 '{"spec": { "migration": null, "defaultNetwork":{ "ovnKubernetesConfig": { "mtu": <mtu>
}}}'

ここでは、以下のようになります。

<mtu>

<overlay_to> で指定した新しいクラスターネットワーク MTU を指定します。

• OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用している場合:

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge --patch \
 '{"spec": { "migration": null, "defaultNetwork":{ "openshiftSDNConfig": { "mtu": <mtu> }}}}'

ここでは、以下のようになります。

<mtu>

<overlay_to> で指定した新しいクラスターネットワーク MTU を指定します。

MTUの移行が完了すると、各MCPノードが1つずつ再起動します。すべてのノードが更新されるまで待機する必要があります。以下のコマンドを実行してマシン設定プールのステータスを確認します。

\$ oc get mcp

正常に更新されたノードには、**UPDATED=true**、**UPDATING=false**、**DEGRADED=false**のス テータスがあります。

検証

- クラスター内のノードで、前の手順で指定した MTU が使用されていることを確認できます。
 - 1. クラスターネットワークの現在の MTU を取得するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc describe network.config cluster

- 2. ノードのプライマリーネットワークインターフェイスの現在の MTU を取得します。
 - a. クラスター内のノードをリスト表示するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc get nodes

b. ノードのプライマリーネットワークインターフェイスの現在の MTU 設定を取得するには、
 次のコマンドを入力します。

\$ oc debug node/<node> -- chroot /host ip address show <interface>

ここでは、以下のようになります。

<node>

前のステップの出力をもとに、ノードを指定します。

<interface>

ノードのプライマリーネットワークインターフェイス名を指定します。

出力例

ens3: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP> mtu 8051

13.3. 関連情報

- PXE および ISO インストールの高度なネットワークオプションの使用
- 鍵ファイル形式で NetworkManager プロファイルの手動による作成
- nmcli で動的イーサネット接続の設定

第14章 ノードポートサービス範囲の設定

クラスター管理者は、利用可能なノードのポート範囲を拡張できます。クラスターで多数のノードポー トが使用される場合、利用可能なポートの数を増やす必要がある場合があります。

デフォルトのポート範囲は **30000-32767** です。最初にデフォルト範囲を超えて拡張した場合でも、 ポート範囲を縮小することはできません。

14.1. 前提条件

クラスターインフラストラクチャーは、拡張された範囲内で指定するポートへのアクセスを許可する必要があります。たとえば、ノードのポート範囲を 30000-32900 に拡張する場合、ファイアウォールまたはパケットフィルタリングの設定によりこれに含まれるポート範囲 32768-32900 を許可する必要があります。

14.2. ノードのポート範囲の拡張

クラスターのノードポート範囲を拡張できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。

手順

1. ノードのポート範囲を拡張するには、以下のコマンドを入力します。<port> を、新規の範囲内 で最大のポート番号に置き換えます。

```
$ oc patch network.config.openshift.io cluster --type=merge -p \
'{
    "spec":
    { "serviceNodePortRange": "30000-<port>" }
}'
```

ヒント

または、以下の YAML を適用してノードのポート範囲を更新することもできます。

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
serviceNodePortRange: "30000-<port>"
```

出力例

network.config.openshift.io/cluster patched

設定がアクティブであることを確認するには、以下のコマンドを入力します。更新が適用されるまでに数分の時間がかかることがあります。

\$ oc get configmaps -n openshift-kube-apiserver config \
 -o jsonpath="{.data['config\.yaml']}" | \
 grep -Eo ""service-node-port-range":["[[:digit:]]+-[[:digit:]]+"]'

出力例

"service-node-port-range":["30000-33000"]

14.3. 関連情報

- NodePortを使用した ingress クラスタートラフィックの設定
- Network [config.openshift.io/v1]
- Service [core/v1]

第15章 IP フェイルオーバーの設定

このトピックでは、OpenShift Container Platform クラスターの Pod およびサービスの IP フェイル オーバーの設定について説明します。

IP フェイルオーバーは Keepalived を使用して、一連のホストで外部からアクセスできる仮想 IP (VIP) アドレスのセットをホストします。各仮想 IP アドレスは、一度に1つのホストによってのみサービスさ れます。Keepalived は Virtual Router Redundancy Protocol (VRRP) を使用して、(一連のホストの) ど のホストがどの VIP を提供するかを判別します。ホストが利用不可の場合や Keepalived が監視してい るサービスが応答しない場合は、VIP は一連のホストの別のホストに切り換えられます。したがって、 VIP はホストが利用可能である限り常に提供されます。

セットのすべての VIP はセットから選択されるノードによって提供されます。単一のノードが使用可能 な場合は、仮想 IP が提供されます。ノード上で VIP を明示的に配布する方法がないため、VIP のない ノードがある可能性も、多数の VIP を持つノードがある可能性もあります。ノードが1つのみ存在する 場合は、すべての VIP がそのノードに配置されます。

管理者は、すべての仮想 IP アドレスが次の要件を満たしていることを確認する必要があります。

- 設定されたホストでクラスター外からアクセスできる。
- クラスター内でこれ以外の目的で使用されていない。

各ノードの Keepalived は、必要とされるサービスが実行中であるかどうかを判別します。実行中の場 合、VIP がサポートされ、Keepalived はネゴシエーションに参加してどのノードが VIP を提供するかを 決定します。これに参加するノードについては、このサービスが VIP の監視ポートでリッスンしてい る、またはチェックが無効にされている必要があります。



注記

セット内の各仮想 IP は、異なるノードによってサービスされる可能性があります。

IP フェイルオーバーは各 VIP のポートをモニターし、ポートがノードで到達可能かどうかを判別しま す。ポートが到達不能な場合、VIP はノードに割り当てられません。ポートが 0 に設定されている場 合、このチェックは抑制されます。check スクリプトは必要なテストを実行します。

Keepalived を実行するノードが check スクリプトを渡す場合、ノードの VIP はプリエンプションスト ラテジーに応じて、その優先順位および現在のマスターの優先順位に基づいて **master** 状態になること ができます。

クラスター管理者は **OPENSHIFT_HA_NOTIFY_SCRIPT** 変数を介してスクリプトを提供できます。このスクリプトは、ノードの VIP の状態が変更されるたびに呼び出されます。Keepalived は VIP を提供 する場合は **master** 状態を、別のノードが VIP を提供する場合は **backup** 状態を、または check スクリ プトが失敗する場合は **fault** 状態を使用します。notify スクリプトは、状態が変更されるたびに新規の 状態で呼び出されます。

OpenShift Container Platform で IP フェイルオーバーのデプロイメント設定を作成できます。IP フェ イルオーバーのデプロイメント設定は VIP アドレスのセットを指定し、それらの提供先となるノードの セットを指定します。クラスターには複数の IP フェイルオーバーのデプロイメント設定を持たせるこ とができ、それぞれが固有な VIP アドレスの独自のセットを管理します。IP フェイルオーバー設定の各 ノードは IP フェイルオーバー Pod として実行され、この Pod は Keepalived を実行します。

VIP を使用してホストネットワークを持つ Pod にアクセスする場合、アプリケーション Pod は IP フェ イルオーバー Pod を実行しているすべてのノードで実行されます。これにより、いずれの IP フェイル オーバーノードもマスターになり、必要時に VIP を提供することができます。アプリケーション Pod が IP フェイルオーバーのすべてのノードで実行されていない場合、一部の IP フェイルオーバーノード が VIP を提供できないか、一部のアプリケーション Pod がトラフィックを受信できなくなります。こ の不一致を防ぐために、IP フェイルオーバーとアプリケーション Pod の両方に同じセレクターとレプ リケーション数を使用します。

VIP を使用してサービスにアクセスしている間は、アプリケーション Pod が実行されている場所に関係 なく、すべてのノードでサービスに到達できるため、任意のノードをノードの IP フェイルオーバー セットに含めることができます。いずれの IP フェイルオーバーノードも、いつでもマスターにするこ とができます。サービスは外部 IP およびサービスポートを使用するか、NodePort を使用することがで きます。NodePort のセットアップは特権付きの操作で実行されます。

サービス定義で外部 IP を使用する場合、VIP は外部 IP に設定され、IP フェイルオーバーのモニタリン グポートはサービスポートに設定されます。ノードポートを使用する場合、ポートはクラスター内のす べてのノードで開かれ、サービスは、現在 VIP にサービスを提供しているあらゆるノードからのトラ フィックの負荷を分散します。この場合、IP フェイルオーバーのモニタリングポートはサービス定義で NodePort に設定されます。



重要

サービス VIP の可用性が高い場合でも、パフォーマンスに影響が出る可能性がありま す。Keepalived は、各 VIP が設定内の一部のノードによってサービスされることを確認 し、他のノードに VIP がない場合でも、複数の VIP が同じノードに配置される可能性が あります。IP フェイルオーバーによって複数の VIP が同じノードに配置されると、VIP のセット全体で外部から負荷分散される戦略が妨げられる可能性があります。

ExternallP を使用する場合は、ExternallP 範囲と同じ仮想 IP 範囲を持つように IP フェイルオーバーを 設定できます。また、モニタリングポートを無効にすることもできます。この場合、すべての VIP がク ラスター内の同じノードに表示されます。どのユーザーでも、ExternallP を使用してサービスをセット アップし、高可用性を実現できます。



重要

クラスター内の VIP の最大数は 254 です。

15.1. IP フェイルオーバーの環境変数

以下の表は、IPフェイルオーバーの設定に使用される変数を示しています。

表15.1 IP フェイルオーバーの環境変数

変数名	デフォル ト	説明
OPENSHIFT_HA_MONITOR_POR T	80	IP フェイルオーバー Pod は、各仮想 IP (VIP) のこの ポートに対して TCP 接続を開こうとします。接続が 設定されると、サービスは実行中であると見なされ ます。このポートが 0 に設定される場合、テストは 常にパスします。
OPENSHIFT_HA_NETWORK_INT ERFACE		IP フェイルオーバーが Virtual Router Redundancy Protocol (VRRP) トラフィックの送信に使用するイ ンターフェイス名。デフォルト値は eth0 です。

変数名	デフォル ト	説明
OPENSHIFT_HA_REPLICA_COU NT	2	作成するレプリカの数です。これは、IP フェイル オーバーデプロイメント設定の spec.replicas 値に 一致する必要があります。
OPENSHIFT_HA_VIRTUAL_IPS		レプリケートする IP アドレス範囲のリストです。こ れは指定する必要があります。例: 1.2.3.4-6,1.2.3.9
OPENSHIFT_HA_VRRP_ID_OFFS ET	0	仮想ルーター ID の設定に使用されるオフセット値。 異なるオフセット値を使用すると、複数の IP フェイ ルオーバー設定が同じクラスター内に存在できるよ うになります。デフォルトのオフセットは0で、許 可される範囲は0から255までです。
OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS		VRRP に作成するグループの数です。これが設定さ れていない場合、グループは OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS 変数で指定され ている仮想 IP 範囲ごとに作成されます。
OPENSHIFT_HA_IPTABLES_CHA IN	INPUT	iptables チェーンの名前であり、 iptables ルールを 自動的に追加し、VRRP トラフィックをオンにする ことを許可するために使用されます。この値が設定 されていない場合、 iptables ルールは追加されませ ん。チェーンが存在しない場合は作成されません。
OPENSHIFT_HA_CHECK_SCRIP T		アプリケーションが動作していることを確認するた めに定期的に実行されるスクリプトの Pod ファイル システム内の完全パス名です。
OPENSHIFT_HA_CHECK_INTER VAL	2	check スクリプトが実行される期間 (秒単位) です。
OPENSHIFT_HA_NOTIFY_SCRIP T		状態が変更されるたびに実行されるスクリプトの Pod ファイルシステム内の完全パス名です。
OPENSHIFT_HA_PREEMPTION	preempt _nodelay 300	新たな優先度の高いホストを処理するためのストラ テジーです。 nopreempt ストラテジーでは、マス ターを優先度の低いホストから優先度の高いホスト に移動しません。

15.2. クラスター内の IP フェイルオーバーの設定

クラスター管理者は、クラスター全体にIPフェイルオーバーを設定することも、ラベルセレクターの 定義に基づいてノードのサブセットにIPフェイルオーバーを設定することもできます。また、複数の IPフェイルオーバーのデプロイメント設定をクラスター内に設定することもでき、それぞれの設定をク ラスター内で相互に切り離すことができます。 IP フェイルオーバーのデプロイメント設定により、フェイルオーバー Pod は、制約または使用される ラベルに一致する各ノードで確実に実行されます。

この Pod は Keepalived を実行します。これは、最初のノードがサービスまたはエンドポイントに到達 できない場合に、エンドポイントを監視し、Virtual Router Redundancy Protocol (VRRP) を使用して仮 想 IP (VIP) を別のノードにフェイルオーバーできます。

実稼働環境で使用する場合は、少なくとも2つのノードを選択し、選択したノードの数に相当する replicas を設定する selector を設定します。

前提条件

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- プルシークレットを作成している。

手順

1. IP フェイルオーバーのサービスアカウントを作成します。

\$ oc create sa ipfailover

2. hostNetwork の SCC (Security Context Constraints) を更新します。

\$ oc adm policy add-scc-to-user privileged -z ipfailover

\$ oc adm policy add-scc-to-user hostnetwork -z ipfailover

- 3. デプロイメント YAML ファイルを作成して IP フェイルオーバーを設定します。
 - IP フェイルオーバー設定のデプロイメント YAML の例

apiVersion: apps/v1 kind: Deployment metadata: name: ipfailover-keepalived labels: ipfailover: hello-openshift spec: strategy: type: Recreate replicas: 2 selector: matchLabels: ipfailover: hello-openshift template: metadata: labels: ipfailover: hello-openshift spec: serviceAccountName: ipfailover privileged: true hostNetwork: true nodeSelector:

node-role.kubernetes.io/worker: "" containers: - name: openshift-ipfailover image: quay.io/openshift/origin-keepalived-ipfailover ports: - containerPort: 63000 hostPort: 63000 imagePullPolicy: IfNotPresent securityContext: privileged: true volumeMounts: - name: lib-modules mountPath: /lib/modules readOnly: true - name: host-slash mountPath: /host readOnly: true mountPropagation: HostToContainer - name: etc-sysconfig mountPath: /etc/sysconfig readOnly: true - name: config-volume mountPath: /etc/keepalive env: - name: OPENSHIFT HA CONFIG NAME value: "ipfailover" - name: OPENSHIFT_HA_VIRTUAL_IPS (2) value: "1.1.1.1-2" - name: OPENSHIFT HA VIP GROUPS 3 value: "10" - name: OPENSHIFT_HA_NETWORK_INTERFACE 4 value: "ens3" #The host interface to assign the VIPs - name: OPENSHIFT_HA_MONITOR_PORT 5 value: "30060" - name: OPENSHIFT_HA_VRRP_ID_OFFSET 6 value: "0" - name: OPENSHIFT HA REPLICA COUNT 7 value: "2" #Must match the number of replicas in the deployment - name: OPENSHIFT HA USE UNICAST value: "false" #- name: OPENSHIFT_HA_UNICAST_PEERS #value: "10.0.148.40,10.0.160.234,10.0.199.110" - name: OPENSHIFT_HA_IPTABLES_CHAIN (8) value: "INPUT" #- name: OPENSHIFT HA NOTIFY SCRIPT 9 # value: /etc/keepalive/mynotifyscript.sh - name: OPENSHIFT HA CHECK SCRIPT 10 value: "/etc/keepalive/mycheckscript.sh" - name: OPENSHIFT HA PREEMPTION 11 value: "preempt_delay 300" - name: OPENSHIFT_HA_CHECK_INTERVAL 12 value: "2" livenessProbe: initialDelaySeconds: 10 exec:

command: - pgrep - keepalived volumes: - name: lib-modules hostPath: path: /lib/modules - name: host-slash hostPath: path: / - name: etc-sysconfig hostPath: path: /etc/sysconfig *# config-volume contains the check script* # created with `oc create configmap keepalived-checkscript --from-file=mycheckscript.sh` - configMap: defaultMode: 0755 name: keepalived-checkscript name: config-volume imagePullSecrets: - name: openshift-pull-secret (13) IP フェイルオーバーデプロイメントの名前。 レプリケートする IP アドレス範囲のリストです。これは指定する必要があります。例: 2 1.2.3.4-6,1.2.3.9 VRRP に作成するグループの数です。これが設定されていない場合、グループは **OPENSHIFT HA VIP GROUPS** 変数で指定されている仮想 IP 範囲ごとに作成されま す。 IP フェイルオーバーが VRRP トラフィックの送信に使用するインターフェイス名。デフォ 4 ルトで eth0 が使用されます。 IP フェイルオーバー Pod は、各 VIP のこのポートに対して TCP 接続を開こうとします。 5 接続が設定されると、サービスは実行中であると見なされます。このポートが0に設定さ れる場合、テストは常にパスします。デフォルト値は80です。 仮想ルーター ID の設定に使用されるオフセット値。異なるオフセット値を使用すると、 6 複数の IP フェイルオーバー設定が同じクラスター内に存在できるようになります。デ フォルトのオフセットは0で、許可される範囲は0から255までです。 作成するレプリカの数です。これは、IP フェイルオーバーデプロイメント設定の 7 spec.replicas 値に一致する必要があります。デフォルト値は2です。 iptables チェーンの名前であり、iptables ルールを自動的に追加し、VRRP トラフィック 8 をオンにすることを許可するために使用されます。この値が設定されていない場 合、iptables ルールは追加されません。チェーンが存在しない場合は作成されず、 Keepalived はユニキャストモードで動作します。デフォルトは **INPUT** です。 状態が変更されるたびに実行されるスクリプトの Pod ファイルシステム内の完全パス名で 9 す。



アプリケーションが動作していることを確認するために定期的に実行されるスクリプトの Pod ファイルシステム内の完全パス名です。



新たな優先度の高いホストを処理するためのストラテジーです。デフォルト値は preempt_delay 300 で、優先順位の低いマスターが VIP を保持する場合に、Keepalived



check スクリプトが実行される期間 (秒単位) です。デフォルト値は **2** です。

13 デプロイメントを作成する前にプルシークレットを作成します。作成しない場合には、デ プロイメントの作成時にエラーが発生します。

15.3. CHECK スクリプトおよび NOTIFY スクリプトの設定

Keepalived は、オプションのユーザー指定のチェックスクリプトを定期的に実行してアプリケーション の正常性をモニターします。たとえば、このスクリプトは要求を発行し、応答を検証することで web サーバーをテストします。クラスター管理者は、オプションの notify スクリプトを提供できます。この スクリプトは状態が変更されるたびに呼び出されます。

check および notify スクリプトは、IP フェイルオーバー Pod で実行され、ホストファイルシステムで はなく Pod ファイルシステムを使用します。ただし、IP フェイルオーバー Pod はホストファイルシス テムが /hosts マウントパスで利用可能にします。check または notify スクリプトを設定する場合は、 スクリプトへの完全パスを指定する必要があります。スクリプトを提供する方法として、ConfigMap オブジェクトの使用が推奨されます。

check および notify スクリプトの完全パス名は、Keepalived 設定ファイル (_/etc/keepalived/keepalived.conf) に追加されます。このファイルは、Keepalived が起動するたびに ロードされます。次の方法で説明するように、ConfigMap オブジェクトを使用してスクリプトを Pod に追加できます。

Check script

チェックスクリプトが指定されない場合、TCP 接続をテストする単純なデフォルトスクリプトが実行されます。このデフォルトテストは、モニターポートが**0**の場合は抑制されます。

各 IP フェイルオーバー Pod は、Pod が実行されているノードで1つ以上の仮想 IP (VIP) アドレスを管理する Keepalived デーモンを管理します。Keepalived デーモンは、ノードの各 VIP の状態を維持します。特定のノード上の特定の VIP は、master、backup、または fault 状態にある可能性があります。

チェックスクリプトがゼロ以外を返す場合、ノードは **backup** 状態になり、保持されている仮想 IP は 再割り当てされます。

Notify script

Keepalived は、次の3つのパラメーターを通知スクリプトに渡します。

- **\$1** group または instance
- \$2: group または instance の名前です。
- \$3: 新規の状態: master、backup、または fault

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。

手順

 必要なスクリプトを作成し、それを保持する ConfigMap オブジェクトを作成します。スクリ プトには入力引数は指定されず、OK の場合は 0 を、fail の場合は 1 を返す必要があります。 check スクリプト mycheckscript.sh:

#!/bin/bash
 # Whatever tests are needed
 # E.g., send request and verify response
exit 0

2. ConfigMap オブジェクトを作成します。

\$ oc create configmap mycustomcheck --from-file=mycheckscript.sh

 スクリプトを Pod に追加します。マウントされた ConfigMap オブジェクトファイルの defaultMode は、oc コマンドを使用するか、デプロイメント設定を編集することで実行できる 必要があります。通常は、0755、493 (10 進数)の値が使用されます。

\$ oc set volume deploy/ipfailover-keepalived --add --overwrite \
 --name=config-volume \
 --mount-path=/etc/keepalive \
 --source='{"configMap": { "name": "mycustomcheck", "defaultMode": 493}}'



注記

oc set env コマンドは空白を区別します。=記号の両側に空白を入れることはできません。

ヒント または、ipfailover-keepalived デプロイメント設定を編集することもできます。 \$ oc edit deploy ipfailover-keepalived spec: containers: - env: - name: OPENSHIFT_HA_CHECK_SCRIPT 1 value: /etc/keepalive/mycheckscript.sh volumeMounts: 2 - mountPath: /etc/keepalive name: config-volume dnsPolicy: ClusterFirst volumes: 3 - configMap: defaultMode: 0755 4 name: customrouter name: config-volume spec.container.env フィールドで、マウントされたスクリプトファイルを参照する **OPENSHIFT HA CHECK SCRIPT**環境変数を追加します。 spec.container.volumeMounts フィールドを追加してマウントポイントを作成します。 新規の spec.volumes フィールドを追加して config map に言及します。 これはファイルの実行パーミッションを設定します。読み取られる場合は10進数(493)で 表示されます。 変更を保存し、エディターを終了します。これにより ipfailover-keepalived が再起動されま す。

15.4. VRRP プリエンプションの設定

ノードの仮想 IP (VIP) が check スクリプトを渡すことで fault 状態を終了すると、ノードの VIP は、現 在 master 状態にあるノードの VIP よりも優先度が低い場合は backup 状態になります。nopreempt ストラテジーは master をホスト上の優先度の低いホストからホスト上の優先度の高い VIP に移動しま せん。デフォルトの preempt_delay 300 の場合、Keepalived は指定された 300 秒の間待機 し、master をホスト上の優先度の高い VIP に移動します。

手順

プリエンプションを指定するには、oc edit deploy ipfailover-keepalived を入力し、ルーターのデプロイメント設定を編集します。

\$ oc edit deploy ipfailover-keepalived

```
...
spec:
containers:
- env:
```



OPENSHIFT_HA_PREEMPTIONの値を設定します。

- preempt_delay 300: Keepalived は、指定された 300 秒の間待機し、master をホスト上の優先度の高い VIP に移動します。これはデフォルト値です。
- nopreempt: master をホスト上の優先度の低い VIP からホスト上の優先度の高い VIP に移動しません。

15.5. 複数の IP フェイルオーバーインスタンスのデプロイ

IP フェイルオーバーのデプロイメント設定で管理される各 IP フェイルオーバー Pod (ノード/レプリカ あたり 1 Pod) は Keepalived デーモンを実行します。設定される IP フェイルオーバーのデプロイメン ト設定が多くなると、作成される Pod も多くなり、共通の Virtual Router Redundancy Protocol (VRRP) ネゴシエーションに参加するデーモンも多くなります。このネゴシエーションはすべての Keepalived デーモンによって実行され、これはどのノードがどの仮想 IP (VIP) を提供するかを決定しま す。

Keepalived は内部で固有の vrrp-id を各 VIP に割り当てます。ネゴシエーションはこの vrrp-ids セット を使用し、決定後には優先される vrrp-id に対応する VIP が優先されるノードで提供されます。

したがって、IP フェイルオーバーのデプロイメント設定で定義されるすべての VIP について、IP フェ イルオーバー Pod は対応する vrrp-id を割り当てる必要があります。これ は、OPENSHIFT_HA_VRRP_ID_OFFSET から開始し、順序に従って vrrp-ids を VIP のリストに割り 当てることによって実行されます。vrrp-ids には範囲 1..255 の値を設定できます。

複数の IP フェイルオーバーのデプロイメント設定がある場合 は、OPENSHIFT_HA_VRRP_ID_OFFSET を指定して、デプロイメント設定内の VIP 数を増やす余地 があり、vrrp-id 範囲が重複しないようにする必要があります。

15.6.254 を超えるアドレスについての IP フェイルオーバーの設定

IP フェイルオーバー管理は、仮想 IP (VIP) アドレスの 254 グループに制限されています。デフォルト では、OpenShift Container Platform は各グループに1つの IP アドレスを割り当てま す。**OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS** 変数を使用してこれを変更し、複数の IP アドレスが各グループ に含まれるようにして、IP フェイルオーバーを設定するときに各 Virtual Router Redundancy Protocol (VRRP) インスタンスで使用可能な VIP グループの数を定義できます。

VIP の作成により、VRRP フェイルオーバーの発生時の広範囲の VRRP の割り当てが作成され、これは クラスター内のすべてのホストがローカルにサービスにアクセスする場合に役立ちます。たとえば、 サービスが **ExternallP** で公開されている場合などがこれに含まれます。



注記

フェイルオーバーのルールとして、ルーターなどのサービスは特定の1つのホストに制限しません。代わりに、サービスは、IPフェイルオーバーの発生時にサービスが新規ホストに再作成されないように各ホストに複製可能な状態にする必要があります。



注記

OpenShift Container Platform のヘルスチェックを使用している場合、IP フェイルオー バーおよびグループの性質上、グループ内のすべてのインスタンスはチェックされません。そのため、Kubernetes ヘルスチェック を使用してサービスが有効であることを確認 する必要があります。

前提条件

• cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。

手順

 各グループに割り当てられた IP アドレスの数を変更するに は、OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS 変数の値を変更します。次に例を示します。



snoo:
spec.
env:
- name: OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS 1
value: "3"

たとえば、7つの VIP のある環境で **OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS** が **3** に設定されてい る場合、これは3つのグループを作成し、3つの VIP を最初のグループに、2つの VIP を 2つの残りのグループにそれぞれ割り当てます。



注記

OPENSHIFT_HA_VIP_GROUPS で設定されたグループの数が、フェイルオーバーに設定された IP アドレスの数より少ない場合、グループには複数の IP アドレスが含まれ、 すべてのアドレスが1つのユニットとして移動します。

15.7. EXTERNALIP の高可用性

非クラウドクラスターでは、IP フェイルオーバーとサービスへの **ExternalIP** を組み合わせることがで きます。結果として、**ExternalIP** を使用してサービスを作成するユーザーに高可用サービスが提供され ます。

このアプローチでは、クラスターネットワーク設定の **spec.ExternallP.autoAssignClDRs** 範囲を指定し、同じ範囲を使用して IP フェイルオーバー設定を作成します。

IP フェイルオーバーはクラスター全体で最大 255 個の仮想 IP をサポートできるため、spec.ExternalIP.autoAssignCIDRs は /24 以下にする必要があります。

15.8. IP フェイルオーバーの削除

IP フェイルオーバーが最初に設定されている場合、クラスターのワーカーノードは、Keepalived 用に 224.0.0.18 のマルチキャストパケットを明示的に許可する iptables ルールを使用して変更されます。 ノードが変更されるため、IP フェイルオーバーを削除するには、ジョブを実行して iptables ルールを 削除し、Keepalived が使用する仮想 IP アドレスを削除する必要があります。

手順

- オプション: config map として保存されるチェックおよび通知スクリプトを特定し、削除します。
 - a. IP フェイルオーバーの Pod が config map をボリュームとして使用するかどうかを決定します。

\$ oc get pod -l ipfailover \
 -o jsonpath="\
{range .items[?(@.spec.volumes[*].configMap)]}
{'Namespace: '}{.metadata.namespace}
{'Pod: '}{.metadata.name}
{'Volumes that use config maps:'}
{range .spec.volumes[?(@.configMap)]} {'volume: '}{.name}
{'configMap: '}{.configMap.name}{'\n'}{end}
{end}"

出力例

Namespace: default Pod: keepalived-worker-59df45db9c-2x9mn Volumes that use config maps: volume: config-volume configMap: mycustomcheck

b. 前述の手順でボリュームとして使用される config map の名前が提供されている場合は、 config map を削除します。

\$ oc delete configmap <configmap_name>

2. IP フェイルオーバーの既存デプロイメントを特定します。



出力例

NAMESPACE NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE default ipfailover 2/2 2 2 105d

3. デプロイメントを削除します。

\$ oc delete deployment <ipfailover_deployment_name>

4. ipfailover サービスアカウントを削除します。

\$ oc delete sa ipfailover

- 5. IP フェイルオーバーの設定時に追加された IP テーブルルールを削除するジョブを実行します。
 - a. 以下の例のような内容で remove-ipfailover-job.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: batch/v1

kind: Job metadata: generateName: remove-ipfailoverlabels: app: remove-ipfailover spec: template: metadata: name: remove-ipfailover spec: containers: - name: remove-ipfailover image: quay.io/openshift/origin-keepalived-ipfailover:4.12 command: ["/var/lib/ipfailover/keepalived/remove-failover.sh"] nodeSelector: 1 kubernetes.io/hostname: <host_name> (2) restartPolicy: Never



nodeSelector は、古い IP フェイルオーバーデプロイメントで使用されていたセレク ターと同じである可能性があります。



IP フェイルオーバー用に設定されたクラスター内の各ノードのジョブを実行し、毎回ホスト名を置き換えます。

b. ジョブを実行します。

\$ oc create -f remove-ipfailover-job.yaml

出力例

job.batch/remove-ipfailover-2h8dm created

検証

• ジョブが IP フェイルオーバーの初期設定を削除していることを確認します。

\$ oc logs job/remove-ipfailover-2h8dm

出力例

- remove-failover.sh: OpenShift IP Failover service terminating.
 - Removing ip_vs module ...
 - Cleaning up ...
 - Releasing VIPs (interface eth0) ...
第16章 インターフェイスレベルのネットワーク SYSCTL の設定

Linux では、管理者は sysctl を使用してランタイム時にカーネルパラメーターを変更できます。チュー ニング Container Network Interface (CNI) メタプラグインを使用して、インターフェイスレベルのネッ トワーク sysctl を変更できます。チューニング CNI メタプラグインは、図に示すように、メインの CNI プラグインとチェーンで動作します。



メインの CNI プラグインはインターフェイスを割り当て、これをランタイム時にチューニング CNI メ タプラグインに渡します。チューニング CNI メタプラグインを使用して、ネットワーク namespace の 一部の sysctl といくつかのインターフェイス属性 (プロミスキャスモード、オールマルチキャストモー ド、MTU、および MAC アドレス)を変更できます。チューニング CNI メタプラグイン設定では、イン ターフェイス名は IFNAME トークンで表され、ランタイム時にインターフェイスの実際の名前に置き 換えられます。



注記

OpenShift Container Platform では、チューニング CNI メタプラグインはインターフェ イスレベルのネットワーク sysctl の変更のみをサポートします。

16.1. チューニング CNI の設定

次の手順では、チューニング CNI を設定し、インターフェイスレベルのネットワーク net.ipv4.conf.IFNAME.accept_redirects sysctl を変更します。この例では、ICMP リダイレクトパケッ トの受け入れと送信を有効にします。

手順

1. 次の内容で、tuning-example.yaml などのネットワーク接続定義を作成します。

apiVersion: "k8s.cni.cncf.io/v1" kind: NetworkAttachmentDefinition
metadata:
name: <name> 1</name>
namespace: default 2
spec:
config: '{
"cniVersion": "0.4.0", 3
"name": " <name>", 4</name>
"plugins": [{
"type": " <main_cni_plugin>" 5</main_cni_plugin>
},
{



```
name: tuningnad
 namespace: default
spec:
 config: '{
  "cniVersion": "0.4.0",
  "name": "tuningnad",
  "plugins": [{
    "type": "bridge"
   },
    "type": "tuning",
    "sysctl": {
      "net.ipv4.conf.IFNAME.accept_redirects": "1"
     }
  }
 1
}'
```

2. 以下のコマンドを実行して yaml を適用します。

\$ oc apply -f tuning-example.yaml

出力例

networkattachmentdefinition.k8.cni.cncf.io/tuningnad created

3. 次のようなネットワーク接続定義を使用して、examplepod.yaml などの Pod を作成します。

api kin me na ai spe co - i i o s s s f s f s	Version: v1 d: Pod etadata: ame: tunepod amespace: default nnotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: tuningnad 1 ec: ontainers: name: podexample mage: centos command: ["/bin/bash", "-c", "sleep INF"] securityContext: runAsUser: 2000 2 runAsGroup: 3000 3 allowPrivilegeEscalation: false 4 capabilities: 5 drop: ["ALL"] ecurityContext: runAsNonRoot: true 6 seccompProfile: 7 type: RuntimeDefault
-	没定済みの NetworkAttachmentDefinition の名前を指定します。
2 r	unAsUser は、コンテナーが実行されるユーザー ID を制御します。
3 r	unAsGroup は、コンテナーが実行されるプライマリーグループ ID を制御します。
4 a 炭 は 3	l lowPrivilegeEscalation は、Pod が特権の昇格を許可するように要求できるかどうかを 快定します。指定しない場合、デフォルトで true に設定されます。このブール値 は、 no_new_privs フラグがコンテナープロセスに設定されるかどうかを直接制御しま す。
5 C	apabilities は、完全なルートアクセスを許可せずに権限操作を許可します。このポリ シーにより、すべての機能が Pod から削除されます。
6 r	unAsNonRoot: true は、コンテナーが 0 以外の任意の UID を持つユーザーで実行される ことを要求します。
7 F	RuntimeDefault は、Pod またはコンテナーワークロードのデフォルトの seccomp プロ ファイルを有効にします。
4. 以下の	コマンドを実行して yaml を適用します。
\$ o	oc apply -f examplepod.yaml
5. 次のコ	Iマンドを実行して、Pod が作成されていることを確認します。

\$ oc get pod

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE tunepod 1/1 Running 0 47s

6. 次のコマンドを実行して、Pod にログインします。

\$ oc rsh tunepod

7. 設定された sysctl フラグの値を確認します。たとえば、次のコマンドを実行して、値 net.ipv4.conf.net1.accept_redirects を見つけます。

sh-4.4# sysctl net.ipv4.conf.net1.accept_redirects

予想される出力

net.ipv4.conf.net1.accept_redirects = 1

16.2. 関連情報

• コンテナーでの sysctl の使用

第17章 ベアメタルクラスターでの SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL) の使用

クラスター管理者は、クラスターで SCTP (Stream Control Transmission Protocol) を使用できます。

17.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM での SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL) のサポート

クラスター管理者は、クラスターのホストで SCTP を有効にできます。Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS) で、SCTP モジュールはデフォルトで無効にされています。

SCTP は、IP ネットワークの上部で実行される信頼できるメッセージベースのプロトコルです。

これを有効にすると、SCTP を Pod、サービス、およびネットワークポリシーでプロトコルとして使用 できます。Service オブジェクトは、type パラメーターを ClusterIP または NodePort のいずれかの値 に設定して定義する必要があります。

17.1.1. SCTP プロトコルを使用した設定例

protocol パラメーターを Pod またはサービスリソース定義の **SCTP** 値に設定して、Pod またはサービスを SCTP を使用するように設定できます。

以下の例では、Pod は SCTP を使用するように設定されています。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: namespace: project1 name: example-pod spec: containers: - name: example-pod ... ports: - containerPort: 30100 name: sctpserver protocol: SCTP

以下の例では、サービスは SCTP を使用するように設定されています。

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
namespace: project1
name: sctpserver
spec:
...
ports:
- name: sctpserver
protocol: SCTP
port: 30100
targetPort: 30100
type: ClusterIP
```

以下の例では、**NetworkPolicy** オブジェクトは、特定のラベルの付いた Pod からポート **80** の SCTP ネットワークトラフィックに適用するように設定されます。

```
kind: NetworkPolicy
apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
name: allow-sctp-on-http
spec:
podSelector:
matchLabels:
role: web
ingress:
- ports:
- protocol: SCTP
port: 80
```

17.2. SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL)の有効化

クラスター管理者は、クラスターのワーカーノードでブラックリストに指定した SCTP カーネルモ ジュールを読み込み、有効にできます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

1. 以下の YAML 定義が含まれる load-sctp-module.yaml という名前のファイルを作成します。

```
apiVersion: machineconfiguration.openshift.io/v1
kind: MachineConfig
metadata:
 name: load-sctp-module
 labels:
  machineconfiguration.openshift.io/role: worker
spec:
 config:
  ignition:
   version: 3.2.0
  storage:
   files:
     - path: /etc/modprobe.d/sctp-blacklist.conf
      mode: 0644
      overwrite: true
      contents:
       source: data:,
     - path: /etc/modules-load.d/sctp-load.conf
      mode: 0644
      overwrite: true
      contents:
       source: data:,sctp
```

2. MachineConfig オブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc create -f load-sctp-module.yaml

オプション: MachineConfig Operator が設定変更を適用している間にノードのステータスを確認するには、以下のコマンドを入力します。ノードのステータスが Ready に移行すると、設定の更新が適用されます。

\$ oc get nodes

17.3. SCTP (STREAM CONTROL TRANSMISSION PROTOCOL) が有効に なっていることの確認

SCTP がクラスターで機能することを確認するには、SCTP トラフィックをリッスンするアプリケーションで Pod を作成し、これをサービスに関連付け、公開されたサービスに接続します。

前提条件

- クラスターからインターネットにアクセスし、nc パッケージをインストールすること。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

- 1. SCTP リスナーを起動する Pod を作成します。
 - a. 以下の YAML で Pod を定義する sctp-server.yaml という名前のファイルを作成します。

apiVersion: v1	
kind: Pod	
metadata:	
name: sctpserver	
labels:	
app: sctpserver	
spec:	
containers:	
- name: sctpserver	
image: registry.access.redhat.com/ubi8	/ubi
command: ["/bin/sh", "-c"]	
args:	
["dnf install -y nc && sleep inf"]	
ports:	
- containerPort: 30102	
name: sctpserver	
protocol: SCTP	

b. 以下のコマンドを入力して Pod を作成します。

\$ oc create -f sctp-server.yaml

2. SCTP リスナー Pod のサービスを作成します。

a. 以下の YAML でサービスを定義する **sctp-service.yaml** という名前のファイルを作成しま す。

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: sctpservice
labels:
app: sctpserver
spec:
type: NodePort
selector:
app: sctpserver
ports:
- name: sctpserver
protocol: SCTP
port: 30102
targetPort: 30102
```

b. サービスを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc create -f sctp-service.yaml

- 3. SCTP クライアントの Pod を作成します。
 - a. 以下の YAML で sctp-client.yaml という名前のファイルを作成します。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: sctpclient labels: app: sctpclient spec: containers: - name: sctpclient image: registry.access.redhat.com/ubi8/ubi command: ["/bin/sh", "-c"] args: ["dnf install -y nc && sleep inf"]

b. **Pod** オブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc apply -f sctp-client.yaml

- 4. サーバーで SCTP リスナーを実行します。
 - a. サーバー Pod に接続するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc rsh sctpserver

b. SCTP リスナーを起動するには、以下のコマンドを入力します。

\$ nc -I 30102 --sctp

- 5. サーバーの SCTP リスナーに接続します。
 - a. ターミナルプログラムで新規のターミナルウィンドウまたはタブを開きます。
 - b. sctpservice サービスの IP アドレスを取得します。以下のコマンドを入力します。

\$ oc get services sctpservice -o go-template='{{.spec.clusterIP}}{{"\n"}}'

c. クライアント Pod に接続するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc rsh sctpclient

d. SCTP クライアントを起動するには、以下のコマンドを入力します。<cluster_IP> を sctpservice サービスのクラスター IP アドレスに置き換えます。

nc <cluster_IP> 30102 --sctp

第18章 PTP ハードウェアの使用

OpenShift Container Platform クラスターノードで**linuxptp** サービスを設定し、PTP 対応ハードウェア を使用できます。

18.1. PTP ハードウェアについて

PTP Operator をデプロイし、OpenShift Container Platform コンソールまたは OpenShift CLI (**oc**) を 使用して PTP をインストールできます。PTP Operator は **linuxptp** サービスを作成し、管理し、以下 の機能を提供します。

- クラスター内の PTP 対応デバイスの検出。
- **linuxptp** サービスの設定の管理。
- PTP Operator cloud-event-proxy サイドカーによるアプリケーションのパフォーマンスおよび 信頼性に悪影響を与える PTP クロックイベントの通知。



注記

PTP Operator は、ベアメタルインフラストラクチャーでのみプロビジョニングされるクラスターの PTP 対応デバイスと連携します。

18.2. PTP について

Precision Time Protocol (PTP) は、ネットワーク内のクロックを同期するのに使用されます。ハード ウェアサポートと併用する場合、PTP はマイクロ秒以下の正確性があり、Network Time Protocol (NTP) よりも正確になります。

linuxptp パッケージには、クロック同期用の ptp4l および phc2sys プログラムが含まれていま す。ptp4l は、PTP 境界クロックと通常のクロックを実装します。ptp4l は PTP ハードウェアクロック をハードウェアのタイムスタンプにソースクロックに同期し、システムクロックをソフトウェアタイム スタンプとクロックに同期します。phc2sys は、ネットワークインターフェイスコントローラー (NIC) 上の PTP ハードウェアクロックに同期するために、ハードウェアタイムスタンプに使用されます。

18.2.1. PTP ドメインの要素

PTP は、ネットワークに接続された複数のノードを各ノードのクロックと同期するために使用されま す。PTP で同期するクロックは、同期元と同期先の階層で整理されています。この階層は、best master clock (BMC) アルゴリズムで作成され、自動的に更新されます。宛先のクロックは、ソースとな るクロックに同期され、宛先クロック自体が他のダウンストリームクロックのソースになることができ ます。以下のタイプのクロックを設定に追加できます。

グランドマスタークロック

グランドマスタークロックは、ネットワーク全体の他のクロックに標準時間情報を提供し、正確で 安定した同期を保証します。タイムスタンプを書き込み、他のクロックからの時間の要求に応答し ます。グランドマスタークロックは、全地球測位システム (GPS) の時刻源に同期させることができ ます。

通常のクロック

通常のクロックには、ネットワーク内の位置に応じて、送信元クロックまたは宛先クロックのロー ルを果たすことができる単一のポート接続があります。通常のクロックは、タイムスタンプの読み 取りおよび書き込みが可能です。

境界クロック

境界クロックには、2つ以上の通信パスにあるポートがあり、ソースと宛先の宛先を同時に他の宛先 クロックに指定できます。境界クロックは、宛先クロックアップストリームとして機能します。宛 先クロックはタイミングメッセージを受け取り、遅延に合わせて調整し、ネットワークを渡す新し いソースタイムシグナルを作成します。境界クロックは、ソースクロックと正しく同期され、ソー スクロックに直接レポートする接続されたデバイスの数を減らすことができる新しいタイミングパ ケットを生成します。

18.2.2. NTP 上の PTP の利点

PTP が NTP を経由した主な利点の1つは、さまざまなネットワークインターフェイスコントローラー (NIC) およびネットワークスイッチにあるハードウェアサポートです。この特化されたハードウェアに より、PTP はメッセージ送信の遅れを説明でき、時間同期の精度を高められます。可能な限りの精度を 実現するには、PTP クロック間の全ネットワークコンポーネントが PTP ハードウェアを有効にするこ とが推奨されます。

NIC は PTP パケットを送受信した瞬間にタイムスタンプを付けることができるため、ハードウェア ベースの PTP は最適な精度を提供します。これをソフトウェアベースの PTP と比較します。これに は、オペレーティングシステムによる PTP パケットの追加処理が必要になります。



重要

PTP を有効にする前に、必要なノードについて NTP が無効になっていることを確認しま す。MachineConfig カスタムリソースを使用して chrony タイムサービス (chronyd) を 無効にすることができます。詳細は、chrony タイムサービスの無効化 を参照してくださ い。

18.2.3. デュアル NIC ハードウェアでの PTP の使用

OpenShift Container Platform は、クラスター内の正確な PTP タイミングのためにシングルおよびデュ アル NIC ハードウェアをサポートします。

ミッドバンドスペクトルカバレッジを提供する 5G 電話会社ネットワークの場合、各仮想分散ユニット (vDU)には6つの無線ユニット (RU)への接続が必要です。これらの接続を確立するには、各 vDU ホス トに境界クロックとして設定された2つの NIC が必要です。

デュアル NIC ハードウェアを使用すると、各 NIC を同じアップストリームリーダークロックに接続 し、NIC ごとに個別の **ptp4I** インスタンスをダウンストリームクロックに供給することができます。

18.3. CLI を使用した PTP OPERATOR のインストール

クラスター管理者は、CLIを使用して Operator をインストールできます。

前提条件

- PTP に対応するハードウェアを持つノードでベアメタルハードウェアにインストールされたクラスター。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. PTP Operator の namespace を作成します。

a. 次の YAML をptp-namespace.yaml ファイルに保存します。

- apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: openshift-ptp annotations: workload.openshift.io/allowed: management labels: name: openshift-ptp openshift.io/cluster-monitoring: "true"
- b. namespace CR を作成します。

\$ oc create -f ptp-namespace.yaml

- 2. PTP Operator の Operator グループを作成します。
 - a. 次の YAML をptp-operatorgroup.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: operators.coreos.com/v1 kind: OperatorGroup metadata: name: ptp-operators namespace: openshift-ptp spec: targetNamespaces: - openshift-ptp

b. OperatorGroup CR を作成します。

\$ oc create -f ptp-operatorgroup.yaml

- 3. PTP Operator にサブスクライブします。
 - a. 次の YAML を**ptp-sub.yaml**ファイルに保存します。

apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1 kind: Subscription metadata: name: ptp-operator-subscription namespace: openshift-ptp spec: channel: "stable" name: ptp-operator source: redhat-operators sourceNamespace: openshift-marketplace

b. Subscription CR を作成します。

\$ oc create -f ptp-sub.yaml

4. Operator がインストールされていることを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get csv -n openshift-ptp -o customcolumns=Name:.metadata.name,Phase:.status.phase

出力例

NamePhase4.12.0-202301261535Succeeded

18.4. WEB コンソールを使用した PTP OPERATOR のインストール

クラスター管理者は、Web コンソールを使用して PTP Operator をインストールできます。



注記

先のセクションで説明されているように namespace および Operator グループを作成す る必要があります。

手順

- 1. OpenShift Container Platform Web コンソールを使用して PTP Operator をインストールします。
 - a. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators → OperatorHub** をクリック します。
 - b. 利用可能な Operator のリストから **PTP Operator** を選択してから **Install** をクリックしま す。
 - c. Install Operator ページの A specific namespace on the clusterの下で openshift-ptp を 選択します。次に、Install をクリックします。
- 2. オプション: PTP Operator が正常にインストールされていることを確認します。
 - a. Operators → Installed Operators ページに切り替えます。
 - b. **PTP Operator** が Status が InstallSucceeded の状態で openshift-ptp プロジェクトにリ スト表示されていることを確認します。



注記

インストール時に、Operator は Failed ステータスを表示する可能性があり ます。インストールが後に InstallSucceeded メッセージを出して正常に実 行される場合は、Failed メッセージを無視できます。

Operator がインストール済みとして表示されない場合に、さらにトラブルシューティング を実行します。

- Operators → Installed Operators ページに移動し、Operator Subscriptions および Install Plans タブで Status にエラーがあるかどうかを検査します。
- Workloads → Pods ページに移動し、openshift-ptp プロジェクトで Pod のログを確認 します。

18.5. PTP デバイスの設定

PTP Operator は **NodePtpDevice.ptp.openshift.io** カスタムリソース定義 (CRD) を OpenShift Container Platform に追加します。

インストールが完了すると、PTP Operator はクラスターを検索して各ノードで PTP 対応のネットワー クデバイスを検索します。これは、互換性のある PTP 対応のネットワークデバイスを提供する各ノー ドの NodePtpDevice カスタムリソース (CR) オブジェクトを作成し、更新します。

18.5.1. クラスター内の PTP 対応ネットワークデバイスの検出

クラスター内の PTP 対応ネットワークデバイスの一覧を返すには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get NodePtpDevice -n openshift-ptp -o yaml

出力例

apiVersion: v1
items:
 apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: NodePtpDevice
metadata:
creationTimestamp: "2022-01-27T15:16:28Z"
generation: 1
name: dev-worker-0 1
namespace: openshift-ptp
resourceVersion: "6538103"
uid: d42fc9ad-bcbf-4590-b6d8-b676c642781a
spec: {}
status:
devices: 2
- name: eno1
- name: eno2
- name: eno3
- name: eno4
- name: enp5s0f0
- name: enp5s0f1
name パラメーターの値は、親ノードの名前と同じです。

デバイスコレクションには、PTP Operator がノードに対して検出した PTP 対応デバイスのリストが含まれています。

18.5.2. linuxptp サービスをグランドマスタークロックとして設定する

ホスト NIC を設定する **PtpConfig** カスタムリソース (CR) を作成することで、 **linuxptp** サービス (**ptp4l、phc2sys、ts2phc**) をグランドマスタークロックとして設定できます。

ts2phc ユーティリティーを使用すると、システムクロックを PTP グランドマスタークロックと同期で きるため、ノードは高精度クロック信号をダウンストリームの PTP 通常クロックおよび境界クロック にストリーミングできます。

注記

次の **PtpConfig** CR の例をベースとして使用して、**linuxptp** サービスを特定のハード ウェアおよび環境のグランドマスタークロックとして設定します。この例の CR は PTP 高速イベントを設定しません。PTP 高速イベントを設定するに

は、ptp4lOpts、ptp4lConf、ptpClockThreshold に適切な値を設定しま す。ptpClockThreshold は、イベントが有効になっている場合にのみ使用されます。詳 細は、「PTP 高速イベント通知パブリッシャーの設定」を参照してください。

前提条件

- Intel Westport Channel ネットワークインターフェイスをベアメタルクラスターホストにインストールします。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP Operator をインストールします。

手順

- 1. PtpConfig リソースを作成します。以下に例を示します。
 - a. 次の YAML を grandmaster-clock-ptp-config.yaml ファイルに保存します。

PTP グランドマスタークロック設定の例

```
apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: PtpConfig
metadata:
 name: grandmaster-clock
 namespace: openshift-ptp
 annotations: {}
spec:
 profile:
  - name: grandmaster-clock
   # The interface name is hardware-specific
   interface: $interface
   ptp4lOpts: "-2"
   phc2sysOpts: "-a -r -r -n 24"
   ptpSchedulingPolicy: SCHED_FIFO
   ptpSchedulingPriority: 10
   ptpSettings:
    logReduce: "true"
   ptp4lConf: |
    [global]
    #
    # Default Data Set
    #
    twoStepFlag 1
    slaveOnly 0
    priority1 128
    priority2 128
    domainNumber 24
    #utc_offset 37
```

clockClass 255 clockAccuracy 0xFE offsetScaledLogVariance 0xFFFF free_running 0 freq_est_interval 1 dscp_event 0 dscp general 0 dataset_comparison G.8275.x G.8275.defaultDS.localPriority 128 # # Port Data Set # logAnnounceInterval -3 logSyncInterval -4 logMinDelayReqInterval -4 logMinPdelayReqInterval -4 announceReceiptTimeout 3 syncReceiptTimeout 0 delayAsymmetry 0 fault reset interval -4 neighborPropDelayThresh 20000000 masterOnly 0 G.8275.portDS.localPriority 128 # # Run time options # assume_two_step 0 logging_level 6 path_trace_enabled 0 follow_up_info 0 hybrid_e2e 0 inhibit_multicast_service 0 net_sync_monitor 0 tc spanning tree 0 tx_timestamp_timeout 50 unicast_listen 0 unicast_master_table 0 unicast_req_duration 3600 use_syslog 1 verbose 0 summary_interval 0 kernel_leap 1 check_fup_sync 0 clock_class_threshold 7 # # Servo Options # pi_proportional_const 0.0 pi_integral_const 0.0 pi proportional scale 0.0 pi_proportional_exponent -0.3 pi_proportional_norm_max 0.7 pi_integral_scale 0.0 pi_integral_exponent 0.4 pi_integral_norm_max 0.3 step_threshold 2.0



b. 以下のコマンドを実行して CR を作成します。

\$ oc create -f grandmaster-clock-ptp-config.yaml

検証

- 1. PtpConfig プロファイルがノードに適用されていることを確認します。
 - a. 以下のコマンドを実行して、openshift-ptp namespace の Pod の一覧を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE IP NODE linuxptp-daemon-74m2g 3/3 Running 3 4d15h 10.16.230.7 compute-1.example.com ptp-operator-5f4f48d7c-x7zkf 1/1 Running 1 4d15h 10.128.1.145 compute-1.example.com

b. プロファイルが正しいことを確認します。**PtpConfig** プロファイルで指定したノードに対応する **linuxptp** デーモンのログを検査します。以下のコマンドを実行します。

\$ oc logs linuxptp-daemon-74m2g -n openshift-ptp -c linuxptp-daemon-container

出力例

ts2phc[94980.334]: [ts2phc.0.config] nmea delay: 98690975 ns ts2phc[94980.334]: [ts2phc.0.config] ens3f0 extts index 0 at 1676577329.9999999999 corr 0 src 1676577330.901342528 diff -1 ts2phc[94980.334]: [ts2phc.0.config] ens3f0 master offset -1 s2 freq -1 ts2phc[94980.441]: [ts2phc.0.config] nmea sentence: GNRMC,195453.00,A,4233.24427,N,07126.64420,W,0.008,,160223,,,A,V phc2sys[94980.450]: [ptp4I.0.config] CLOCK_REALTIME phc offset 943 s2 freq -89604 delay 504 phc2sys[94980.512]: [ptp4I.0.config] CLOCK_REALTIME phc offset 1000 s2 freq -89264 delay 474

18.5.3. linuxptp サービスを通常のクロックとして設定

PtpConfig カスタムリソース (CR) オブジェクトを作成して、 **linuxptp**サービス (**ptp4l、phc2sys**) を通常のクロックとして設定できます。



注記

次の例の **PtpConfig** CR を、特定のハードウェアおよび環境の通常クロックとして **linuxptp** サービスを設定する基礎として使用します。この例の CR は PTP 高速イベント を設定しません。PTP 高速イベントを設定するに

は、ptp4lOpts、ptp4lConf、ptpClockThreshold に適切な値を設定しま

す。**ptpClockThreshold** は、イベントが有効な場合にのみ必要です。詳細は、「PTP 高 速イベント通知パブリッシャーの設定」を参照してください。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP Operator をインストールします。

手順

1. 以下の **PtpConfig** CR を作成してから、YAML を **ordinary-clock-ptp-config.yaml** ファイルに 保存します。

PTP 通常クロックの設定例

apiVersion: ptp.openshift.io/v1 kind: PtpConfig metadata: name: ordinary-clock namespace: openshift-ptp annotations: {} spec: profile: - name: ordinary-clock # The interface name is hardware-specific interface: \$interface ptp4lOpts: "-2 -s" phc2sysOpts: "-a -r -n 24" ptpSchedulingPolicy: SCHED FIFO ptpSchedulingPriority: 10 ptpSettings: logReduce: "true" ptp4lConf: | [global] # # Default Data Set # twoStepFlag 1 slaveOnly 1 priority1 128 priority2 128 domainNumber 24 #utc offset 37 clockClass 255 clockAccuracy 0xFE offsetScaledLogVariance 0xFFFF free running 0 freq_est_interval 1 dscp_event 0 dscp_general 0 dataset_comparison G.8275.x G.8275.defaultDS.localPriority 128 # # Port Data Set # logAnnounceInterval -3 logSyncInterval -4 logMinDelayReqInterval -4 logMinPdelayReqInterval -4 announceReceiptTimeout 3 syncReceiptTimeout 0 delayAsymmetry 0 fault_reset_interval -4 neighborPropDelayThresh 20000000 masterOnly 0 G.8275.portDS.localPriority 128 # # Run time options # assume_two_step 0 logging_level 6

path_trace_enabled 0 follow_up_info 0 hybrid_e2e 0 inhibit_multicast_service 0 net_sync_monitor 0 tc_spanning_tree 0 tx_timestamp_timeout 50 unicast_listen 0 unicast_master_table 0 unicast_req_duration 3600 use_syslog 1 verbose 0 summary_interval 0 kernel_leap 1 check_fup_sync 0 clock_class_threshold 7 # # Servo Options # pi proportional const 0.0 pi_integral_const 0.0 pi_proportional_scale 0.0 pi_proportional_exponent -0.3 pi proportional norm max 0.7 pi_integral_scale 0.0 pi_integral_exponent 0.4 pi_integral_norm_max 0.3 step_threshold 2.0 first_step_threshold 0.00002 max_frequency 90000000 clock_servo pi sanity_freq_limit 20000000 ntpshm segment 0 # # Transport options # transportSpecific 0x0 ptp_dst_mac 01:1B:19:00:00:00 p2p_dst_mac 01:80:C2:00:00:0E udp_ttl 1 udp6_scope 0x0E uds_address /var/run/ptp4l # # Default interface options # clock_type OC network_transport L2 delay_mechanism E2E time_stamping hardware tsproc mode filter delay_filter moving_median delay_filter_length 10 egressLatency 0 ingressLatency 0 boundary_clock_jbod 0 #

Clock description
#
productDescription ;;
revisionData ;;
manufacturerIdentity 00:00:00
userDescription ;
timeSource 0xA0
recommend:
- profile: ordinary-clock
priority: 4
match:
- nodeLabel: "node-role.kubernetes.io/\$mcp"

表18.1 PTP 通常クロック CR 設定のオプション

カスタムリソース フィールド	説明
name	PtpConfig CR の名前。
profile	1つ以上の profile オブジェクトの配列を指定します。各プロファイルの名 前は一意である必要があります。
interface	ptp4l サービスで使用するネットワークインターフェイスを指定します (例: ens787f1)。
ptp4lOpts	ptp4l サービスのシステム設定オプションを指定します。たとえば、-2 で IEEE 802.3 ネットワークトランスポートを選択します。ネットワークイン ターフェイス名とサービス設定ファイルが自動的に追加されるため、オプ ションには、ネットワークインターフェイス名 -i <interface> およびサー ビス設定ファイル -f /etc/ptp4l.conf を含めないでください。このイン ターフェイスで PTP 高速イベントを使用するには、 summary_interval -4 を追加します。</interface>
phc2sysOpts	phc2sys サービスのシステム設定オプションを指定します。このフィー ルドが空の場合、PTP Operator は phc2sys サービスを開始しません。 Intel Columbiaville 800 Series NIC の場合、 phc2sysOpts オプションを- a -r -m -n 24 -N 8 -R 16 に設定します。-m はメッセージを stdout に出 力します。 linuxptp-daemon DaemonSet はログを解析し、 Prometheus メトリックを生成します。
ptp4lConf	デフォルトの / etc/ptp4l.conf ファイルを置き換える設定が含まれる文字 列を指定します。デフォルト設定を使用するには、フィールドを空のまま にします。
tx_timestamp_time out	Intel Columbiaville 800 Series NIC の場合、 tx_timestamp_timeout を 50 に設定します。
boundary_clock_jb od	Intel Columbiaville 800 Series NIC の場合、 boundary_clock_jbod を 0 に設定します。

カスタムリソース フィールド	説明
ptpSchedulingPoli cy	ptp4l と phc2sys プロセスのスケジューリングポリシー。デフォルト値 は SCHED_OTHER です。FIFO スケジューリングをサポートするシステ ムでは、 SCHED_FIFO を使用してください。
ptpSchedulingPrio rity	ptpSchedulingPolicy が SCHED_FIFO に設定されている場合 に、 ptp4l および phc2sys プロセスの FIFO の優先度を設定するために使 用される 1-65 の整数値。 ptpSchedulingPriority フィールド は、 ptpSchedulingPolicy が SCHED_OTHER に設定されている場合 は使用されません。
ptpClockThreshold	オプション: ptpClockThreshold が存在しない場 合、ptpClockThreshold フィールドにはデフォルト値が使用されま す。ptpClockThreshold は、PTP マスタークロックが切断されてから PTP イベントが発生するまでの時間を設定します。holdOverTimeout は、PTP マスタークロックが切断されたときに、PTP クロックイベントの 状態が FREERUN に変わるまでの時間値 (秒単位) で す。maxOffsetThreshold および minOffsetThreshold 設定 は、CLOCK_REALTIME (phc2sys) またはマスターオフセット (ptp4I) の値と比較するナノ秒単位のオフセット値を設定します。ptp4I または phc2sys のオフセット値がこの範囲外の場合、PTP クロックの状態が FREERUN に設定されます。オフセット値がこの範囲内にある場合、PTP クロックの状態が LOCKED に設定されます。
recommend	profile がノードに適用される方法を定義する1つ以上の recommend オ ブジェクトの配列を指定します。
.recommend.profil e	profile セクションで定義される .recommend.profile オブジェクト名を 指定します。
.recommend.priorit y	通常クロックの .recommend.priority を 0 に設定します。
.recommend.matc h	.recommend.match ルールを nodeLabel または nodeName の値に指 定します。
.recommend.matc h.nodeLabel	oc get Nodesshow-labels コマンドを使用して、ノードオブジェク トの node.Labels フィールドの key で nodeLabel を設定します。例: node-role.kubernetes.io/worker。
.recommend.matc h.nodeName	oc get nodes コマンドを使用して、nodeName をノードオブジェクト の node.Name フィールドの値に設定します。compute- 1.example.com はその例です。

2. 次のコマンドを実行して、**PtpConfig** CR を作成します。

\$ oc create -f ordinary-clock-ptp-config.yaml

検証

- 1. PtpConfig プロファイルがノードに適用されていることを確認します。
 - a. 以下のコマンドを実行して、openshift-ptp namespace の Pod の一覧を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE IP NODE linuxptp-daemon-4xkbb 1/1 Running 0 43m 10.1.196.24 compute-0.example.com linuxptp-daemon-tdspf 1/1 Running 0 43m 10.1.196.25 compute-1.example.com ptp-operator-657bbb64c8-2f8sj 1/1 Running 0 43m 10.129.0.61 controlplane-1.example.com

b. プロファイルが正しいことを確認します。**PtpConfig** プロファイルで指定したノードに対応する **linuxptp** デーモンのログを検査します。以下のコマンドを実行します。

\$ oc logs linuxptp-daemon-4xkbb -n openshift-ptp -c linuxptp-daemon-container

出力例

I1115 09:41:17.117596 4143292 daemon.go:107] in applyNodePTPProfile I1115 09:41:17.117604 4143292 daemon.go:109] updating NodePTPProfile to: I1115 09:41:17.117607 4143292 daemon.go:110] -------I1115 09:41:17.117612 4143292 daemon.go:102] Profile Name: profile1 I1115 09:41:17.117616 4143292 daemon.go:102] Interface: ens787f1 I1115 09:41:17.117620 4143292 daemon.go:102] Ptp4lOpts: -2 -s I1115 09:41:17.117623 4143292 daemon.go:102] Phc2sysOpts: -a -r -n 24 I1115 09:41:17.117626 4143292 daemon.go:116] ------

関連情報

- PTP ハードウェアでの FIFO 優先度スケジューリングの詳細については、PTP ハードウェアの FIFO 優先度スケジューリングの設定 を参照してください。
- PTP 高速イベントの設定の詳細は、PTP 高速イベント通知パブリッシャーの設定 を参照してく ださい。

18.5.4. linuxptp サービスを境界クロックとして設定

PtpConfig カスタムリソース (CR) オブジェクトを作成して、 **linuxptp** サービス (**ptp4l、phc2sys** を設 定できます。

注記

次の例の PtpConfig CR を、特定のハードウェアおよび環境の境界クロックとして linuxptp サービスを設定する基礎として使用します。この例の CR は PTP 高速イベント を設定しません。PTP 高速イベントを設定するに は、ptp4lOpts、ptp4lConf、ptpClockThreshold に適切な値を設定しま

す。**ptpClockThreshold**は、イベントが有効になっている場合にのみ使用されます。詳細は、「PTP 高速イベント通知パブリッシャーの設定」を参照してください。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP Operator をインストールします。

手順

1. 以下の **PtpConfig** CR を作成してから、YAML を **boundary-clock-ptp-config.yaml** ファイル に保存します。

PTP 境界クロックの設定例

```
apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: PtpConfig
metadata:
 name: boundary-clock
 namespace: openshift-ptp
 annotations: {}
spec:
 profile:
  - name: boundary-clock
   ptp4lOpts: "-2"
   phc2sysOpts: "-a -r -n 24"
   ptpSchedulingPolicy: SCHED FIFO
   ptpSchedulingPriority: 10
   ptpSettings:
    logReduce: "true"
   ptp4lConf: |
     # The interface name is hardware-specific
    [$iface_slave]
     masterOnly 0
     [$iface master 1]
     masterOnly 1
    [$iface_master_2]
     masterOnly 1
     [$iface master 3]
     masterOnly 1
     [global]
     #
     # Default Data Set
     #
     twoStepFlag 1
     slaveOnly 0
     priority1 128
```

priority2 128 domainNumber 24 #utc offset 37 clockClass 248 clockAccuracy 0xFE offsetScaledLogVariance 0xFFFF free_running 0 freq_est_interval 1 dscp_event 0 dscp_general 0 dataset_comparison G.8275.x G.8275.defaultDS.localPriority 128 # # Port Data Set # logAnnounceInterval -3 logSyncInterval -4 logMinDelayReqInterval -4 logMinPdelayReqInterval -4 announceReceiptTimeout 3 syncReceiptTimeout 0 delayAsymmetry 0 fault_reset_interval -4 neighborPropDelayThresh 2000000 masterOnly 0 G.8275.portDS.localPriority 128 # # Run time options # assume_two_step 0 logging_level 6 path_trace_enabled 0 follow_up_info 0 hybrid e2e 0 inhibit_multicast_service 0 net_sync_monitor 0 tc_spanning_tree 0 tx_timestamp_timeout 50 unicast_listen 0 unicast_master_table 0 unicast_req_duration 3600 use_syslog 1 verbose 0 summary_interval 0 kernel_leap 1 check_fup_sync 0 clock_class_threshold 135 # # Servo Options # pi_proportional_const 0.0 pi_integral_const 0.0 pi_proportional_scale 0.0 pi_proportional_exponent -0.3 pi_proportional_norm_max 0.7 pi_integral_scale 0.0

pi_integral_exponent 0.4 pi_integral_norm_max 0.3 step_threshold 2.0 first_step_threshold 0.00002 max_frequency 900000000 clock_servo pi sanity_freq_limit 20000000 ntpshm_segment 0 # # Transport options # transportSpecific 0x0 ptp_dst_mac 01:1B:19:00:00:00 p2p_dst_mac 01:80:C2:00:00:0E udp_ttl 1 udp6_scope 0x0E uds_address /var/run/ptp4l # # Default interface options # clock_type BC network_transport L2 delay_mechanism E2E time stamping hardware tsproc_mode filter delay_filter moving_median delay_filter_length 10 egressLatency 0 ingressLatency 0 boundary_clock_jbod 0 # # Clock description # productDescription ;; revisionData ;; manufacturerIdentity 00:00:00 userDescription; timeSource 0xA0 recommend: - profile: boundary-clock priority: 4 match: - nodeLabel: "node-role.kubernetes.io/\$mcp"

表18.2 PTP 境界クロックの CR 設定オプション

カスタムリソース フィールド	説明
name	PtpConfig CR の名前。
profile	1つ以上の profile オブジェクトの配列を指定します。

カスタムリソース フィールド	説明
name	プロファイルオブジェクトを一意に識別するプロファイルオブジェクトの 名前を指定します。
ptp4lOpts	ptp4l サービスのシステム設定オプションを指定します。ネットワークイ ンターフェイス名とサービス設定ファイルが自動的に追加されるため、オ プションには、ネットワークインターフェイス名 -i <interface> および サービス設定ファイル -f /etc/ptp4l.conf を含めないでください。</interface>
ptp4lConf	ptp4l を境界クロックとして起動するために必要な設定を指定します。た とえば、 ens1f0 はグランドマスタークロックから同期し、 ens1f3 は接続 されたデバイスを同期します。
<interface_1></interface_1>	同期クロックを受信するインターフェイス。
<interface_2></interface_2>	Synchronization クロックを送信するインターフェイス。
tx_timestamp_time out	Intel Columbiaville 800 Series NIC の場合、 tx_timestamp_timeout を 50 に設定します。
boundary_clock_jb od	Intel Columbiaville 800 Series NIC の場合、 boundary_clock_jbod が 0 に設定されていることを確認します。Intel Fortville X710 シリーズ NIC の 場合、 boundary_clock_jbod が 1 に設定されていることを確認しま す。
phc2sysOpts	phc2sys サービスのシステム設定オプションを指定します。このフィー ルドが空の場合、PTP Operator は phc2sys サービスを開始しません。
ptpSchedulingPoli cy	ptp4l と phc2sys プロセスのスケジューリングポリシー。デフォルト値は SCHED_OTHER です。FIFO スケジューリングをサポートするシステム では、 SCHED_FIFO を使用してください。
ptpSchedulingPrio rity	ptpSchedulingPolicy が SCHED_FIFO に設定されている場合 に、 ptp4l および phc2sys プロセスの FIFO の優先度を設定するために使 用される 1-65 の整数値。 ptpSchedulingPriority フィールド は、 ptpSchedulingPolicy が SCHED_OTHER に設定されている場合 は使用されません。

カスタムリソース フィールド	説明
ptpClockThreshold	オプション: ptpClockThreshold が存在しない場 合、ptpClockThreshold フィールドにはデフォルト値が使用されま す。ptpClockThreshold は、PTP マスタークロックが切断されてから PTP イベントが発生するまでの時間を設定します。holdOverTimeout は、PTP マスタークロックが切断されたときに、PTP クロックイベントの 状態が FREERUN に変わるまでの時間値 (秒単位) で す。maxOffsetThreshold および minOffsetThreshold 設定 は、CLOCK_REALTIME (phc2sys) またはマスターオフセット (ptp4l) の値と比較するナノ秒単位のオフセット値を設定します。ptp4l または phc2sys のオフセット値がこの範囲外の場合、PTP クロックの状態が FREERUN に設定されます。オフセット値がこの範囲内にある場合、PTP クロックの状態が LOCKED に設定されます。
recommend	profile がノードに適用される方法を定義する1つ以上の recommend オ ブジェクトの配列を指定します。
.recommend.profil e	profile セクションで定義される .recommend.profile オブジェクト名を 指定します。
.recommend.priorit y	0 から 99 までの整数値で priority を指定します。数値が大きいほど優先 度が低くなるため、99 の優先度は 10 よりも低くなります。ノードが match フィールドで定義されるルールに基づいて複数のプロファイルに一 致する場合、優先順位の高いプロファイルがそのノードに適用されます。
.recommend.matc h	.recommend.match ルールを nodeLabel または nodeName の値に指 定します。
.recommend.matc h.nodeLabel	oc get Nodesshow-labels コマンドを使用して、ノードオブジェク トの node.Labels フィールドの key で nodeLabel を設定します。例: node-role.kubernetes.io/worker。
.recommend.matc h.nodeName	oc get nodes コマンドを使用して、nodeName をノードオブジェクト の node.Name フィールドの値に設定します。compute- 1.example.com はその例です。

2. 以下のコマンドを実行して CR を作成します。

\$ oc create -f boundary-clock-ptp-config.yaml

検証

- 1. PtpConfig プロファイルがノードに適用されていることを確認します。
 - a. 以下のコマンドを実行して、**openshift-ptp** namespace の Pod の一覧を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE IP NODE linuxptp-daemon-4xkbb 1/1 Running 0 43m 10.1.196.24 compute-0.example.com linuxptp-daemon-tdspf 1/1 Running 0 43m 10.1.196.25 compute-1.example.com ptp-operator-657bbb64c8-2f8sj 1/1 Running 0 43m 10.129.0.61 controlplane-1.example.com

b. プロファイルが正しいことを確認します。**PtpConfig** プロファイルで指定したノードに対応する **linuxptp** デーモンのログを検査します。以下のコマンドを実行します。

\$ oc logs linuxptp-daemon-4xkbb -n openshift-ptp -c linuxptp-daemon-container

出力例

I1115 09:41:17.117596 4143292 daemon.go:107] in applyNodePTPProfile I1115 09:41:17.117604 4143292 daemon.go:109] updating NodePTPProfile to: I1115 09:41:17.117607 4143292 daemon.go:110] -------I1115 09:41:17.117612 4143292 daemon.go:102] Profile Name: profile1 I1115 09:41:17.117616 4143292 daemon.go:102] Interface: I1115 09:41:17.117620 4143292 daemon.go:102] Ptp4lOpts: -2 I1115 09:41:17.117623 4143292 daemon.go:102] Phc2sysOpts: -a -r -n 24 I1115 09:41:17.117626 4143292 daemon.go:116] ------

関連情報

- PTP ハードウェアでの FIFO 優先度スケジューリングの詳細については、PTP ハードウェアの FIFO 優先度スケジューリングの設定 を参照してください。
- PTP 高速イベントの設定の詳細は、PTP 高速イベント通知パブリッシャーの設定 を参照してく ださい。

18.5.5. linuxptp サービスをデュアル NIC ハードウェアの境界クロックとして設定



重要

デュアル NIC で境界クロックとして設定した PTP (Precision Time Protocol) ハードウェ アは、テクノロジープレビュー機能としてのみ提供されています。テクノロジープレ ビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレベルアグリーメント (SLA) の対象外 であり、機能的に完全ではない場合があります。Red Hat は、実稼働環境でこれらを使 用することを推奨していません。テクノロジープレビュー機能は、最新の製品機能をい ち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィードバックを提供していただくこ とを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

NIC ごとに PtpConfig カスタムリソース (CR) オブジェクトを作成することにより、 linuxptp サービス (ptp4l、phc2sys) をデュアル NIC ハードウェアの境界クロックとして設定できます。

デュアル NIC ハードウェアを使用すると、各 NIC を同じアップストリームリーダークロックに接続 し、NIC ごとに個別の **ptp4l** インスタンスをダウンストリームクロックに供給することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP Operator をインストールします。

手順

- "linuxptp サービスを境界クロックとして設定"の参照 CR を各 CR の基礎として使用して、NIC ごとに1つずつ、2つの個別の PtpConfigCR を作成します。以下に例を示します。
 - a. phc2sysOpts の値を指定して、boundary-clock-ptp-config-nic1.yaml を作成します。

apiVersion: ptp.openshift.io/v1 kind: PtpConfig metadata: name: boundary-clock-ptp-config-nic1 namespace: openshift-ptp spec: profile: - name: "profile1" ptp4lOpts: "-2 --summary_interval -4" ptp4lConf: | 1 [ens5f1] masterOnly 1 [ens5f0] masterOnly 0 phc2sysOpts: "-a -r -m -n 24 -N 8 -R 16" (2)

- ptp4l を境界クロックとして開始するために必要なインターフェイスを指定します。
 たとえば、ens5f0 はグランドマスタークロックから同期し、ens5f1 は接続された機器から同期します。
- **phc2sysOpts** の値が必要です。-m はメッセージを stdout に出力します。linuxptpdaemon DaemonSet はログを解析し、Prometheus メトリックを生成します。
- b. **boundary-clock-ptp-config-nic2.yaml** を作成し、**phc2sysOpts** フィールドを完全に削除 して、2 番目の NIC の **phc2sys** サービスを無効にします。

```
apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: PtpConfig
metadata:
name: boundary-clock-ptp-config-nic2
namespace: openshift-ptp
spec:
profile:
- name: "profile2"
ptp4lOpts: "-2 --summary_interval -4"
ptp4lConf:
```

2

[ens7f1] masterOnly 1 [ens7f0] masterOnly 0



2 番目の NIC の境界クロックとして **ptp4l** を開始するために必要なインターフェイス を指定します。

XX	\sim	
~	\sim	
X	∞	
\times	SZ.	

注記

2 番目の NIC で **phc2sys** サービスを無効にするには、2 番目の **PtpConfig** CR から **phc2sysOpts** フィールドを完全に削除する必要があります。

- 2. 次のコマンドを実行して、デュアル NIC PtpConfigCR を作成します。
 - a. 1番目の NIC の PTP を設定する CR を作成します。

\$ oc create -f boundary-clock-ptp-config-nic1.yaml

b. 2 番目の NIC の PTP を設定する CR を作成します。

\$ oc create -f boundary-clock-ptp-config-nic2.yaml

検証

 PTP Operator が両方の NIC に PtpConfigCR を適用していることを確認してください。デュア ル NIC ハードウェアがインストールされているノードに対応する linuxptp デーモンのログを調 べます。たとえば、以下のコマンドを実行します。

\$ oc logs linuxptp-daemon-cvgr6 -n openshift-ptp -c linuxptp-daemon-container

出力例

ptp4l[80828.335]: [ptp4l.1.config] master offset 5 s2 freq -5727 path delay 519 ptp4l[80828.343]: [ptp4l.0.config] master offset -5 s2 freq -10607 path delay 533 phc2sys[80828.390]: [ptp4l.0.config] CLOCK_REALTIME phc offset 1 s2 freq -87239 delay 539

18.5.6. PTP 通常クロックの参照としての IntelColumbiavilleE800 シリーズ NIC

次の表に、Intel Columbiaville E800 シリーズ NIC を通常のクロックとして使用するために参照 PTP 設 定に加える必要のある変更を示します。クラスターに適用する **PtpConfig** カスタムリソース (CR) に変 更を加えます。

表18.3 Intel Columbiaville NIC の推奨 PTP 設定

PTP 設定	推奨設定
phc2sysOpts	-a -r -m -n 24 -N 8 -R 16

PTP 設定	推奨設定
tx_timestamp_timeout	50
boundary_clock_jbod	0

注記

phc2sysOpts の場合、**-m** はメッセージを **stdout** に出力します。**linuxptp-daemon DaemonSet** はログを解析し、Prometheus メトリックを生成します。

関連情報

• **linuxptp** サービスを PTP 高速イベントを使用して通常クロックとして設定する CR の完全な例 については、Configuring linuxptp services as ordinary clock を参照してください。

18.5.7. PTP ハードウェアの FIFO 優先スケジューリングの設定

低遅延のパフォーマンスを確保する必要のある通信業者や他のデプロイメント設定では、PTP デーモン スレッドは、制約された CPU フットプリントで、残りのインフラストラクチャーのコンポーネントと 一緒に、実行されます。デフォルトでは、PTP スレッドは SCHED_OTHER ポリシーで実行されます。 負荷が高いと、エラーなしで運用する必要のある、これらのスレッドのスケジューリングでレイテン シーが発生する可能性があります。

スケジューリングのレイテンシーでエラーが発生する可能性を軽減するために、SCHED_FIFO ポリ シーでスレッドを実行できるように、PTP Operator の linuxptp サービスを設定できま す。PtpConfigCR に SCHED_FIFO が設定されている場合には、ptp4I と phc2sys は、PtpConfig CR の ptpSchedulingPriority フィールドで設定された優先順位で、chrt の下の親コンテナーで実行されま す。



注記

ptpScheduling Policy の設定はオプションで、レイテンシーエラーが発生している場合 にのみ必要となります。

手順

1. PtpConfig CR プロファイルを編集します。

\$ oc edit PtpConfig -n openshift-ptp

2. ptpSchedulingPolicy と ptpSchedulingPriority フィールドを変更します。

```
apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: PtpConfig
metadata:
name: <ptp_config_name>
namespace: openshift-ptp
...
spec:
profile:
- name: "profile1"
```

ptpSchedulingPolicy: SCHED_FIFO 1 ptpSchedulingPriority: 10 2



ptp4lと **phc2sys** プロセスのスケジューリングポリシー。FIFO スケジューリングをサポートするシステムでは、**SCHED_FIFO** を使用してください。



必須。**ptp4l** および **phc2sys** プロセスの FIFO 優先度の設定に使用する 1~65 の整数値を 設定します。

3. 保存して終了すると、PtpConfigCR に変更が適用されます。

検証

1. PtpConfigCR が適用された linuxptp-daemon Pod と対応するノードの名前を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAMEREADYSTATUSRESTARTSAGEIPNODElinuxptp-daemon-gmv2n3/3Running01d17h10.1.196.24compute-0.example.com1d17h10.1.196.25compute-1.example.com1d17h10.1.196.25compute-1.example.com1d7h10.129.0.61control-plane-1.example.com1d7h10.129.0.61control-plane-

2. ptp4l プロセスが、更新された chrtFIFO 優先度で実行されていることを確認します。

\$ oc -n openshift-ptp logs linuxptp-daemon-lgm55 -c linuxptp-daemon-container|grep chrt

出力例

I1216 19:24:57.091872 1600715 daemon.go:285] /bin/chrt -f 65 /usr/sbin/ptp4l -f /var/run/ptp4l.0.config -2 --summary_interval -4 -m

18.5.8. linuxptp サービスのログフィルタリングの設定

linuxptp デーモンは、デバッグに使用できるログを生成します。ストレージ容量が制限されている通信 またはその他のデプロイメント設定では、これらのログはストレージ需要に追加できます。

ログメッセージの数を減らすために、**PtpConfig** カスタムリソース (CR) を設定して、**master offset** 値 をレポートするログメッセージを除外できます。**master offset** ログメッセージは、現在のノードのク ロックとマスタークロックの違いをナノ秒単位でレポートします。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

• PTP Operator をインストールします。

手順

1. PtpConfig CR を編集します。

\$ oc edit PtpConfig -n openshift-ptp

2. spec.profile で、ptpSettings.logReduce 仕様を追加し、値を true に設定します。

```
apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: PtpConfig
metadata:
    name: <ptp_config_name>
    namespace: openshift-ptp
...
spec:
    profile:
    - name: "profile1"
...
    ptpSettings:
    logReduce: "true"
```

注記

デバッグの目的で、この仕様を **False** に戻すと、マスターオフセットメッセージ を含めることができます。

3. 保存して終了すると、PtpConfigCR に変更が適用されます。

検証

1. PtpConfigCR が適用された linuxptp-daemon Pod と対応するノードの名前を取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE IP NODE linuxptp-daemon-gmv2n Running 0 1d17h 10.1.196.24 compute-3/3 0.example.com linuxptp-daemon-lgm55 3/3 Running 0 1d17h 10.1.196.25 compute-1.example.com ptp-operator-3r4dcvf7f4-zndk7 1/1 Running 0 1d7h 10.129.0.61 control-plane-1.example.com

次のコマンドを実行して、マスターオフセットメッセージがログから除外されていることを確認します。

\$ oc -n openshift-ptp logs <linux_daemon_container> -c linuxptp-daemon-container | grep "master offset"



linux_daemon_container> は linuxptp-daemon Pod の名前です (例: linuxptp-daemongmv2n)。

logReduce 仕様を設定する場合、このコマンドは **linuxptp** デーモンのログに **master offset** の インスタンスを報告しません。

18.6. 一般的な PTP OPERATOR の問題のトラブルシューティング

以下の手順を実行して、PTP Operator で典型的な問題のトラブルシューティングを行います。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (**oc**) をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP をサポートするホストを使用して、PTP Operator をベアメタルクラスターにインストー ルします。

手順

1. Operator およびオペランドが、設定されたノードについてクラスターに正常にデプロイされて いることを確認します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAMEREADY STATUSRESTARTSAGEIPNODElinuxptp-daemon-lmvgn3/3Running4d17h10.1.196.24compute-0.example.cominuxptp-daemon-qhfg73/3Running4d17h10.1.196.25compute-1.example.comptp-operator-6b8dcbf7f4-zndk71/1Running05d7h10.129.0.61control-plane-1.example.com



注記

PTP 高速イベントバスが有効な場合には、準備できた **linuxptp-daemon** Pod の 数は **3/3** になります。PTP 高速イベントバスが有効になっていない場合、**2/2** が 表示されます。

2. サポートされているハードウェアがクラスターにあることを確認します。

\$ oc -n openshift-ptp get nodeptpdevices.ptp.openshift.io

出力例

NAME	AGE	
control-plane-0.example	e.com 10d	l
control-plane-1.example	e.com 10d	

compute-0.example.com	10d
compute-1.example.com	10d
compute-2.example.com	10d

3. ノードで利用可能な PTP ネットワークインターフェイスを確認します。

\$ oc -n openshift-ptp get nodeptpdevices.ptp.openshift.io <node_name> -o yaml

ここでは、以下のようになります。

<node_name>

問い合わせるノードを指定します (例: compute-0.example.com)。

出力例

```
apiVersion: ptp.openshift.io/v1
kind: NodePtpDevice
metadata:
 creationTimestamp: "2021-09-14T16:52:33Z"
 generation: 1
 name: compute-0.example.com
 namespace: openshift-ptp
 resourceVersion: "177400"
 uid: 30413db0-4d8d-46da-9bef-737bacd548fd
spec: {}
status:
 devices:
 - name: eno1
 - name: eno2
 - name: eno3
 - name: eno4
 - name: enp5s0f0
 - name: enp5s0f1
```

- 4. 対応するノードの **linuxptp-daemon** Pod にアクセスし、PTP インターフェイスがプライマ リークロックに正常に同期されていることを確認します。
 - a. 以下のコマンドを実行して、**linuxptp-daemon** Pod の名前と、トラブルシューティングに 使用するノードを取得します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp -o wide

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE IP NODE linuxptp-daemon-lmvgn 3/3 Running 0 4d17h 10.1.196.24 compute-0.example.com linuxptp-daemon-qhfg7 3/3 Running 0 4d17h 10.1.196.25 compute-1.example.com ptp-operator-6b8dcbf7f4-zndk7 1/1 Running 0 5d7h 10.129.0.61 controlplane-1.example.com

b. リモートシェルが必要な linuxptp-daemon コンテナーへのリモートシェルです。
\$ oc rsh -n openshift-ptp -c linuxptp-daemon-container <linux_daemon_container>

ここでは、以下のようになります。

linux_daemon_container>

診断するコンテナーです (例: linuxptp-daemon-lmvgn)。

c. **linuxptp-daemon** コンテナーへのリモートシェル接続では、PTP 管理クライアント (**pmc**) ツールを使用して、ネットワークインターフェイスを診断します。以下の **pmc** コマンドを 実行して、PTP デバイスの同期ステータスを確認します (例: **ptp4l**)。

pmc -u -f /var/run/ptp4I.0.config -b 0 'GET PORT_DATA_SET'

ノードがプライマリークロックに正常に同期されたときの出力例

sending: GET PORT DATA SET 40a6b7.fffe.166ef0-1 seq 0 RESPONSE MANAGEMENT PORT DATA SET 40a6b7.fffe.166ef0-1 portIdentity portState SLAVE logMinDelayRegInterval -4 peerMeanPathDelay 0 logAnnounceInterval -3 announceReceiptTimeout 3 logSyncInterval -4 delayMechanism 1 logMinPdelayRegInterval -4 versionNumber 2

18.6.1. Precision Time Protocol (PTP) Operator データの収集

oc adm must-gather CLI コマンドを使用して、クラスターに関する情報を収集できます。これには、 Precision Time Protocol (PTP) Operator に関連する機能およびオブジェクトが含まれます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- PTP Operator がインストールされている。

手順

 must-gather を使用して PTP Operator データを収集するには、PTP Operator must-gather イ メージを指定する必要があります。

\$ oc adm must-gather --image=registry.redhat.io/openshift4/ptp-must-gather-rhel8:v4.12

18.7. PTP ハードウェアの高速イベント通知フレームワーク

仮想 RAN (vRAN) などのクラウドネイティブアプリケーションでは、ネットワーク全体の機能に重要な ハードウェアタイミングイベントに関する通知へのアクセスが必要です。PTP クロック同期エラーは、 分散ユニット (DU) で実行している vRAN アプリケーションなど、低レイテンシーアプリケーションの パフォーマンスおよび信頼性に悪影響を及ぼす可能性があります。

18.7.1. PTP およびクロック同期エラーイベントについて

PTP 同期の損失は、RAN ネットワークでは重大なエラーです。ノードで同期が失われると、無線が シャットダウンされ、ネットワークの OTA(Over the Air) トラフィックがワイヤレスネットワーク内の 別のノードにシフトされる可能性があります。高速のイベント通知は、クラスターノードが DU で実行 している vRAN アプリケーションに対して PTP クロック同期ステータスと通信できるようにすること で、ワークロードのエラーを軽減します。

イベント通知は、同じ DU ノード上で実行されている vRAN アプリケーションで利用できます。パブ リッシュ/サブスクライブ REST API は、イベント通知をメッセージングバスに渡します。パブリッ シュ/サブスクライブメッセージング (パブリッシュ/サブスクライブメッセージング) は、トピックにパ ブリッシュされたメッセージがそのトピックのすべてのサブスクライバーによって即座に受信される、 非同期のサービス間通信アーキテクチャーです。

PTP オペレーターは、すべての PTP 対応ネットワークインターフェイスに対して高速イベント通知を 生成します。イベントには、HTTP またはアドバンストメッセージキュープロトコル (AMQP) メッセー ジバス経由で cloud-event-proxy サイドカーコンテナーを使用してアクセスできます。



注記

PTP 高速イベント通知は、PTP 通常クロックまたは PTP 境界クロックを使用するよう に設定されたネットワークインターフェイスで使用できます。

注記

HTTP トランスポートは、PTP およびベアメタルイベントのデフォルトのトランスポートです。可能な場合、PTP およびベアメタルイベントには AMQP ではなく HTTP トランスポートを使用してください。AMQ Interconnect は、2024 年 6 月 30 日で EOL になります。AMQ Interconnect の延長ライフサイクルサポート (ELS) は 2029 年 11 月 29 日に終了します。詳細は、Red Hat AMQ Interconnect のサポートステータス を参照してください。

18.7.2. PTP 高速イベント通知フレームワークについて

Precision Time Protocol (PTP) 高速イベント通知フレームワークを使用して、ベアメタルクラスター ノードが生成する PTP イベントにクラスターアプリケーションをサブスクライブします。



注記

高速イベント通知フレームワークは、通信に REST API を使用します。REST API は、O-RAN ALLIANCE 仕様 から入手できる O-RAN O-Cloud Notification API Specification for Event Consumers 3.0 に基づいています。

このフレームワークは、パブリッシャー、サブスクライバー、および AMQ または HTTP メッセージン グプロトコルで構成され、パブリッシャーとサブスクライバーのアプリケーション間の通信を処理しま す。アプリケーションは、cloud-event-proxy コンテナーをサイドカーパターンで実行して、PTP イベ ントをサブスクライブします。cloud-event-proxy サイドカーコンテナーは、プライマリーアプリケー ションのリソースをまったく使用せずに、大幅な待機時間なしで、プライマリーアプリケーションコン テナーと同じリソースにアクセスできます。



注記

HTTP トランスポートは、PTP およびベアメタルイベントのデフォルトのトランスポートです。可能な場合、PTP およびベアメタルイベントには AMQP ではなく HTTP トランスポートを使用してください。AMQ Interconnect は、2024 年 6 月 30 日で EOL になります。AMQ Interconnect の延長ライフサイクルサポート (ELS) は 2029 年 11 月 29 日に終了します。詳細は、Red Hat AMQ Interconnect のサポートステータス を参照してください。

図18.1 PTP 高速イベントの概要



319_OpenShift_0323

しイベントはクラスターホストで生成されます。

PTP Operator が管理する Pod の **linuxptp-daemon は**、Kubernetes **DaemonSet** として実行され、 さまざまな **linuxptp** プロセス (**ptp4l、phc2sys、**およびオプションでグランドマスタークロック用 の **ts2phc**) を管理します。**linuxptp-daemon** は、イベントを UNIX ドメインソケットに渡します。

2イベントが cloud-event-proxy サイドカーに渡されます。

PTP プラグインは、UNIX ドメインソケットからイベントを読み取り、PTP Operator が管理する Pod 内の **cloud-event-proxy** サイドカーに渡します。**cloud-event-proxy** は、イベントを Kubernetes インフラストラクチャーから Cloud-Native Network Functions (CNF) に低レイテンシー で配信します。

3 イベントが永続化される

PTP Operator が管理する Pod 内の **cloud-event-proxy** サイドカーは、REST API を使用してイベントを処理し、クラウドネイティブイベントを発行します。

チッセージはトランスポートされます。

メッセージトランスポーターは、HTTP または AMQP 1.0 QPID を介して、アプリケーション Pod 内の cloud-event-proxy サイドカーにイベントを転送します。

5 イベントは REST API から入手できます。

アプリケーション Pod の **cloud-event-proxy** サイドカーはイベントを処理し、REST API を使用して利用できるようにします。

コンシューマーアプリケーションは、API 要求をアプリケーション Pod の cloud-event-proxy サイ ドカーに送信して、PTP イベントサブスクリプションを作成します。cloud-event-proxy サイド カーは、サブスクリプションで指定されたリソースの AMQ または HTTP メッセージングリスナー プロトコルを作成します。

アプリケーション Pod の **cloud-event-proxy** サイドカーは、PTP Operator が管理する Pod からイベ ントを受信し、クラウドイベントオブジェクトをラッピング解除してデータを取得し、イベントをコン シューマーアプリケーションにポストします。コンシューマーアプリケーションは、リソース修飾子で 指定されたアドレスをリッスンし、PTP イベントを受信して処理します。

18.7.3. PTP 高速イベント通知パブリッシャーの設定

クラスター内のネットワークインターフェイスの PTP 高速イベント通知の使用を開始するには、PTP Operator **PtpOperatorConfig** カスタムリソース (CR) で高速イベントパブリッシャーを有効にし、作成 する **PtpConfig** CR に **ptpClockThreshold** 値を設定する必要があります。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP Operator がインストールされている。

手順

- 1. デフォルトの PTP Operator 設定を変更して、PTP 高速イベントを有効にします。
 - a. 次の YAML をptp-operatorconfig.yamlファイルに保存します。

apiVersion: ptp.openshift.io/v1	
metadata:	
name: default	
namespace: openshift-ptp	
spec:	
daemonNodeSelector:	
node-role.kubernetes.io/worke	er: ""
ptpEventConfig:	
enableEventPublisher: true 1	

enableEventPublisher を true に設定して、PTP 高速イベント通知を有効にします。



注記

OpenShift Container Platform 4.12 以降では、PTP イベントに HTTP トラン スポートを使用するときに、**PtpOperatorConfig** リソースの **spec.ptpEventConfig.transportHost** フィールドを設定する必要はありませ ん。PTP イベントに AMQP トランスポートを使用する場合にの み、**transportHost** を設定します。

b. PtpOperatorConfig CR を更新します。



 PTP 対応インターフェイスの PtpConfig カスタムリソースを作成し、ptpClockThreshold お よび ptp4lOpts に必要な値を設定します。次の YAML は、PtpConfig CR で設定する必要のあ る値 (必須) を示しています。

spec:
profile:
- name: "profile1"
interface: "enp5s0f0"
ptp4lOpts: "-2 -ssummary_interval -4" 1
phc2sysOpts: "-a -r -m -n 24 -N 8 -R 16" 2
ptp4lConf: "" 3
ptpClockThreshold: 4
holdOverTimeout: 5
maxOffsetThreshold: 100
minOffsetThreshold: -100
summary interval -4を追加して、PTP 高速イベントを使用します。
phc2sysOpts の値が必要です。-m はメッセージを stdout に出力します。linuxptp-
daemon DaemonSet はログを解析し、Prometheus メトリックを生成します。
テフォルトの /etc/ptp4l.conf ファイルを直さ換える設定か含まれる文字列を指定します。
テノオルト設定を使用するには、ノイールトを空のままにします。
オプション: ntnClockThreshold スタンザが存在しない場合は、 ntnClockThreshold
フィールドにデフォルト値が使用されます。スタンザは、デフォルトの
ptpClockThreshold 値を示します。ptpClockThreshold 値は、PTP マスタークロックが
PTP イベントが発生する前に切断されてからの期間を設定します。holdOverTimeout
は、PTP マスタークロックが切断されたときに、PTP クロックイベントの状態が
FREERUN に変わるまでの時間値 (秒単位)です。maxOffsetThreshold および
minOffsetThreshold 設定は、CLOCK_REALTIME (phc2sys) またはマスターオフセット
(ptp4I) の値と比較するナノ秒単位のオフセット値を設定します。ptp4I または phc2sys
のオフセット値がこの範囲外の場合、PTP クロックの状態が FREERUN に設定されま
す。オフセット値がこの範囲内にある場合、PTP クロックの状態が LOCKED に設定され
ます。

関連情報

3

• **linuxptp** サービスを PTP 高速イベントを使用して通常クロックとして設定する CR の完全な例 については、Configuring linuxptp services as ordinary clock を参照してください。

18.7.4. PTP またはベアメタルイベントに HTTP トランスポートを使用するためのコン シューマーアプリケーションの移行

以前に PTP またはベアメタルイベントのコンシューマーアプリケーションをデプロイしている場合 は、HTTP メッセージトランスポートを使用するようにアプリケーションを更新する必要があります。

前提条件

• OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP Operator または Bare Metal Event Relay を、デフォルトで HTTP トランスポートを使用するバージョン 4.12 以降に更新している。

手順

HTTP トランスポートを使用するようにイベントコンシューマーアプリケーションを更新します。クラウドイベントサイドカーデプロイメントの http-event-publishers 変数を設定します。

たとえば、PTP イベントが設定されているクラスターでは、以下の YAML スニペットはクラウ ドイベントサイドカーデプロイメントを示しています。

containers: - name: cloud-event-sidecar image: cloud-event-sidecar ards: - "--metrics-addr=127.0.0.1:9091" - "--store-path=/store" - "--transport-host=consumer-events-subscription-service.cloudevents.svc.cluster.local:9043" - "--http-event-publishers=ptp-event-publisher-service-NODE_NAME.openshiftptp.svc.cluster.local:9043" - "--api-port=8089"

PTP Operator は、PTP イベントを生成するホストに対して **NODE_NAME** を自動的に解 決します。**compute-1.example.com** はその例です。

ベアメタルイベントが設定されているクラスターでは、クラウドイベントサイドカーデプロイ メント CR で http-event-publishers フィールドを hw-event-publisher-service.openshiftbare-metal-events.svc.cluster.local:9043 に設定します。

2. consumer-events-subscription-service サービスをイベントコンシューマーアプリケーション と併せてデプロイします。以下に例を示します。

apiVersion: v1 kind: Service metadata: annotations: prometheus.io/scrape: "true" service.alpha.openshift.io/serving-cert-secret-name: sidecar-consumer-secret name: consumer-events-subscription-service namespace: cloud-events labels: app: consumer-service spec: ports: - name: sub-port port: 9043 selector: app: consumer clusterIP: None sessionAffinity: None type: ClusterIP

18.7.5. AMQ メッセージングバスのインストール

ノードのパブリッシャーとサブスクライバー間で PTP 高速イベント通知を渡すには、ノードでローカ ルに実行するように AMQ メッセージングバスをインストールおよび設定する必要があります。AMQ メッセージングを使用するには、AMQ Interconnect Operator をインストールする必要があります。



注記

HTTP トランスポートは、PTP およびベアメタルイベントのデフォルトのトランスポートです。可能な場合、PTP およびベアメタルイベントには AMQP ではなく HTTP トランスポートを使用してください。AMQ Interconnect は、2024 年 6 月 30 日で EOL になります。AMQ Interconnect の延長ライフサイクルサポート (ELS) は 2029 年 11 月 29 日に終了します。詳細は、Red Hat AMQ Interconnect のサポートステータス を参照してください。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

 AMQ Interconnect Operator を独自の amq-interconnect namespace にインストールしま す。Red Hat Integration - AMQ Interconnect Operator の追加 を参照してください。

検証

1. AMQ Interconnect Operator が利用可能で、必要な Pod が実行していることを確認します。

\$ oc get pods -n amq-interconnect

出力例

NAMEREADYSTATUSRESTARTSAGEamq-interconnect-645db76c76-k8ghs1/1Running023hinterconnect-operator-5cb5fc7cc-4v7qm1/1Running023h

2. 必要な **linuxptp-daemon** PTP イベントプロデューサー Pod が **openshift-ptp** namespace で実 行していることを確認します。

\$ oc get pods -n openshift-ptp

出力例

NAME	READ	DY S	STATUS	RES	TARTS	AGE
linuxptp-daemon-21	78p	3/3	Running	0	12h	
linuxptp-daemon-k8	3n88	3/3	Running	0	12h	

18.7.6. DU アプリケーションを PTP イベントにサブスクライブする RESTAPI リファレンス

PTP イベント通知 REST API を使用して、分散ユニット (DU) アプリケーションを親ノードで生成され る PTP イベントにサブスクライブします。

リソースアドレス/**cluster/node/<node_name>/ptp**を使用して、アプリケーションを PTP イベントに サブスクライブします。ここで、**<node_name>** は、DU アプリケーションを実行しているクラスター ノードです。

cloud-event-consumer DU アプリケーションコンテナーと **cloud-event-proxy** サイドカーコンテナー を別々の DU アプリケーション Pod にデプロイします。**cloud-event-consumer** DU アプリケーション は、アプリケーション Pod の**cloud-event-proxy**コンテナーにサブスクライブします。

次の API エンドポイントを使用して、DU アプリケーション Pod の http://localhost:8089/api/ocloudNotifications/v1/ にある cloud-event-proxy コンテナーによってポス トされた PTP イベントに cloud-event-consumer DU アプリケーションをサブスクライブします。

- /api/ocloudNotifications/v1/subscriptions
 - **POST**: 新しいサブスクリプションを作成します。
 - GET: サブスクリプションの一覧を取得します。
- /api/ocloudNotifications/v1/subscriptions/<subscription_id>
 - GET: 指定されたサブスクリプション ID の詳細を返します。
- /api/ocloudNotifications/v1/health
 - 。 GET: ocloudNotifications API の正常性ステータスを返します
- api/ocloudNotifications/v1/publishers
 - GET: クラスターノードの os-clock-sync-state、ptp-clock-class-change、および lockstate メッセージの配列を返します
- /api/ocloudnotifications/v1/<resource_address>/CurrentState
 - GET: 次のいずれかのイベントタイプの現在の状態を返します: os-clock-sync-state、ptpclock-class-change、または lock-state イベント



注記

9089は、アプリケーション Pod にデプロイされた **cloud-event-consumer** コンテナー のデフォルトポートです。必要に応じて、DU アプリケーションに別のポートを設定でき ます。

18.7.6.1. api/ocloudNotifications/v1/subscriptions

HTTP メソッド GET api/ocloudNotifications/v1/subscriptions

説明

サブスクリプションのリストを返します。サブスクリプションが存在する場合は、サブスクリプションの一覧とともに **200 OK** のステータスコードが返されます。

API 応答の例

```
{
    "id": "75b1ad8f-c807-4c23-acf5-56f4b7ee3826",
    "endpointUri": "http://localhost:9089/event",
    "uriLocation": "http://localhost:8089/api/ocloudNotifications/v1/subscriptions/75b1ad8f-c807-4c23-
acf5-56f4b7ee3826",
    "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/ptp"
    }
]
```

HTTPメソッド POST api/ocloudNotifications/v1/subscriptions

説明

新しいサブスクリプションを作成します。サブスクリプションが正常に作成されるか、すでに存在する 場合は、**201 Created** ステータスコードが返されます。

表18.4 クエリーパラメーター

パラメーター	型
subscription	data

ペイロードの例

"uriLocation": "http://localhost:8089/api/ocloudNotifications/v1/subscriptions",
"resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/ptp"
}

18.7.6.2. api/ocloudNotifications/v1/subscriptions/<subscription_id>

HTTPメソッド GET api/ocloudNotifications/v1/subscriptions/<subscription_id>

説明

ID が <subscription_id>のサブスクリプションの詳細を返します。

表18.5 クエリーパラメーター

パラメーター	型
<subscription_id></subscription_id>	string

API 応答の例

```
{
    "id":"48210fb3-45be-4ce0-aa9b-41a0e58730ab",
    "endpointUri": "http://localhost:9089/event",
    "uriLocation":"http://localhost:8089/api/ocloudNotifications/v1/subscriptions/48210fb3-45be-4ce0-
aa9b-41a0e58730ab",
    "resource":"/cluster/node/compute-1.example.com/ptp"
}
```

18.7.6.3. api/ocloudNotifications/v1/health/

HTTP メソッド GET api/ocloudNotifications/v1/health/

説明

ocloudNotifications REST API の正常性ステータスを返します。

API 応答の例

OK

18.7.6.4. api/ocloudNotifications/v1/publishers

HTTP メソッド

GET api/ocloudNotifications/v1/publishers

説明

```
クラスターノードの os-clock-sync-state、ptp-clock-class-change、および lock-state の 詳細の配列 を返します。関連する機器の状態が変化すると、システムは通知を生成します。
```

- os-clock-sync-state 通知は、ホストオペレーティングシステムのクロック同期状態を示します。LOCKED または FREERUN 状態になります。
- ptp-clock-class-change 通知は、PTP クロッククラスの現在の状態を示します。
- lock-state 通知は、PTP 機器のロック状態の現在のステータスを示します。LOCKED、HOLDOVER、または FREERUN 状態になります。

API 応答の例

```
[
  "id": "0fa415ae-a3cf-4299-876a-589438bacf75",
  "endpointUri": "http://localhost:9085/api/ocloudNotifications/v1/dummy",
  "uriLocation": "http://localhost:9085/api/ocloudNotifications/v1/publishers/0fa415ae-a3cf-4299-
876a-589438bacf75",
  "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/sync-status/os-clock-sync-state"
 },
  "id": "28cd82df-8436-4f50-bbd9-7a9742828a71",
  "endpointUri": "http://localhost:9085/api/ocloudNotifications/v1/dummy",
  "uriLocation": "http://localhost:9085/api/ocloudNotifications/v1/publishers/28cd82df-8436-4f50-
bbd9-7a9742828a71",
  "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/ptp-status/ptp-clock-class-change"
 },
  "id": "44aa480d-7347-48b0-a5b0-e0af01fa9677",
  "endpointUri": "http://localhost:9085/api/ocloudNotifications/v1/dummy",
  "uriLocation": "http://localhost:9085/api/ocloudNotifications/v1/publishers/44aa480d-7347-48b0-
a5b0-e0af01fa9677",
  "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/ptp-status/lock-state"
 }
]
```

cloud-event-proxy コンテナーのログで、os-clock-sync-state、ptp-clock-class-change、および lock-state イベントを見つけることができます。以下に例を示します。

\$ oc logs -f linuxptp-daemon-cvgr6 -n openshift-ptp -c cloud-event-proxy

os-clock-sync-state イベントの例

```
"id":"c8a784d1-5f4a-4c16-9a81-a3b4313affe5",
"type":"event.sync.sync-status.os-clock-sync-state-change",
"source":"/cluster/compute-1.example.com/ptp/CLOCK REALTIME",
"dataContentType":"application/json",
"time":"2022-05-06T15:31:23.906277159Z",
"data":{
 "version":"v1",
 "values":[
   {
     "resource":"/sync/sync-status/os-clock-sync-state",
     "dataType":"notification",
     "valueType":"enumeration",
     "value":"LOCKED"
   },
   {
     "resource":"/sync/sync-status/os-clock-sync-state",
     "dataType":"metric",
     "valueType":"decimal64.3",
     "value":"-53"
   }
 ]
}
```

ptp-clock-class-change イベントの例

```
{
    "id":"69eddb52-1650-4e56-b325-86d44688d02b",
    "type":"event.sync.ptp-status.ptp-clock-class-change",
    "source":"/cluster/compute-1.example.com/ptp/ens2fx/master",
    "dataContentType":"application/json",
    "time":"2022-05-06T15:31:23.147100033Z",
    "data":{
        "version":"v1",
        "values":[
        {
            "resource":"/sync/ptp-status/ptp-clock-class-change",
            "dataType":"metric",
            "valueType":"decimal64.3",
            "value":"135"
        }
    }
}
```

ロック状態イベントの例

```
"id":"305ec18b-1472-47b3-aadd-8f37933249a9",
 "type":"event.sync.ptp-status.ptp-state-change",
 "source":"/cluster/compute-1.example.com/ptp/ens2fx/master",
 "dataContentType":"application/json",
 "time":"2022-05-06T15:31:23.467684081Z",
 "data":{
   "version":"v1",
   "values":[
     ł
       "resource":"/sync/ptp-status/lock-state",
       "dataType":"notification",
       "valueType":"enumeration",
       "value":"LOCKED"
     },
     {
       "resource":"/sync/ptp-status/lock-state",
       "dataType":"metric",
       "valueType":"decimal64.3",
       "value":"62"
     }
   ]
 }
}
```

18.7.6.5. /api/ocloudnotifications/v1/<resource_address>/CurrentState

HTTP メソッド

GET api/ocloudNotifications/v1/cluster/node/<node_name>/sync/ptp-status/lock-state/CurrentState

GET api/ocloudNotifications/v1/cluster/node/<node_name>/sync/sync-status/os-clock-sync-state/CurrentState

GET api/ocloudNotifications/v1/cluster/node/<node_name>/sync/ptp-status/ptp-clock-classchange/CurrentState

説明

クラスターノードの os-clock-sync-state、ptp-clock-class-change、または lock-state イベントの現 在の状態を返すように CurrentState API エンドポイントを設定します。

- os-clock-sync-state 通知は、ホストオペレーティングシステムのクロック同期状態を示します。LOCKED または FREERUN 状態になります。
- ptp-clock-class-change 通知は、PTP クロッククラスの現在の状態を示します。
- lock-state 通知は、PTP 機器のロック状態の現在のステータスを示します。LOCKED、HOLDOVER、または FREERUN 状態になります。

表18.6 クエリーパラメーター

パラメーター	塑
<resource_address></resource_address>	string

ロック状態 API レスポンスの例

```
"id": "c1ac3aa5-1195-4786-84f8-da0ea4462921",
 "type": "event.sync.ptp-status.ptp-state-change",
 "source": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/ptp-status/lock-state",
 "dataContentType": "application/json",
 "time": "2023-01-10T02:41:57.094981478Z",
 "data": {
  "version": "v1",
  "values": [
   {
     "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/ens5fx/master",
     "dataType": "notification",
     "valueType": "enumeration",
     "value": "LOCKED"
   },
   {
     "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/ens5fx/master",
     "dataType": "metric",
     "valueType": "decimal64.3",
     "value": "29"
   }
  ]
 }
}
```

os-clock-sync-state API レスポンスの例

```
"specversion": "0.3",
"id": "4f51fe99-feaa-4e66-9112-66c5c9b9afcb",
"source": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/sync-status/os-clock-sync-state",
"type": "event.sync.sync-status.os-clock-sync-state-change",
"subject": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/sync-status/os-clock-sync-state",
"datacontenttype": "application/json",
"time": "2022-11-29T17:44:22.202Z",
"data": {
 "version": "v1",
 "values": [
  ł
   "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/CLOCK_REALTIME",
   "dataType": "notification",
   "valueType": "enumeration",
   "value": "LOCKED"
  },
   "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/CLOCK REALTIME",
   "dataType": "metric",
   "valueType": "decimal64.3",
   "value": "27"
  }
 ]
}
```

ptp-clock-class-change API レスポンスの例

```
{
  "id": "064c9e67-5ad4-4afb-98ff-189c6aa9c205",
  "type": "event.sync.ptp-status.ptp-clock-class-change",
  "source": "/cluster/node/compute-1.example.com/sync/ptp-status/ptp-clock-class-change",
  "dataContentType": "application/json",
  "time": "2023-01-10T02:41:56.785673989Z",
  "data": {
      "version": "v1",
      "values": [
        {
            "resource": "/cluster/node/compute-1.example.com/ens5fx/master",
            "dataType": "metric",
            "valueType": "decimal64.3",
            "value": "165"
        }
    }
}
```

18.7.7. PTP 高速イベントメトリックのモニタリング

linuxptp-daemon が実行されているクラスターノードから PTP 高速イベントメトリクスを監視できま す。事前に設定された自己更新型の Prometheus モニタリングスタックを使用して、OpenShift Container Platform Web コンソールで PTP 高速イベントメトリクスをモニタリングできます。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- PTP 対応ハードウェアを搭載したノードに PTP Operator をインストールし、設定します。

手順

1. **linuxptp-daemon** が実行されている任意のノードで公開される PTP メトリクスを確認しま す。たとえば、以下のコマンドを実行します。

\$ curl http://<node_name>:9091/metrics

```
出力例
```

```
# HELP openshift_ptp_clock_state 0 = FREERUN, 1 = LOCKED, 2 = HOLDOVER
# TYPE openshift_ptp_clock_state gauge
openshift_ptp_clock_state{iface="ens1fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"}
1
openshift_ptp_clock_state{iface="ens3fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"}
1
openshift_ptp_clock_state{iface="ens5fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"}
1
openshift_ptp_clock_state{iface="ens5fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"}
```

HELP openshift_ptp_delay_ns # TYPE openshift_ptp_delay_ns gauge openshift_ptp_delay_ns{from="master",iface="ens1fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} 842 openshift_ptp_delay_ns{from="master",iface="ens3fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} 480 openshift ptp delay ns{from="master",iface="ens5fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} 584 openshift ptp delay ns{from="master",iface="ens7fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} 482 openshift_ptp_delay_ns{from="phc",iface="CLOCK_REALTIME",node="compute-1.example.com",process="phc2sys"} 547 # HELP openshift_ptp_offset_ns # TYPE openshift_ptp_offset_ns gauge openshift_ptp_offset_ns{from="master",iface="ens1fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} -2 openshift_ptp_offset_ns{from="master",iface="ens3fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} -44 openshift_ptp_offset_ns{from="master",iface="ens5fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} -8 openshift ptp offset ns{from="master",iface="ens7fx",node="compute-1.example.com",process="ptp4l"} 3 openshift_ptp_offset_ns{from="phc",iface="CLOCK_REALTIME",node="compute-1.example.com",process="phc2sys"} 12

- 2. OpenShift Container Platform Web コンソールで PTP イベントを表示するには、クエリーする PTP メトリクスの名前 (例: **openshift_ptp_offset_ns**) をコピーします。
- 3. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Observe** → **Metrics** をクリックします。
- 4. PTP メトリクスを Expression フィールドに貼り付け、Run queries をクリックします。

関連情報

メトリクスの管理

第19章 外部 DNS OPERATOR

19.1. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM の外部 DNS OPERATOR

外部 DNS Operator は、**ExternalDNS** をデプロイして管理し、外部 DNS プロバイダーから OpenShift Container Platform へのサービスおよびルートの名前解決を提供します。

19.1.1. 外部 DNS Operator

外部 DNS Operator は、**olm.openshift.io** API グループから外部 DNS API を実装します。外部 DNS Operator は、サービス、ルート、外部 DNS プロバイダーを更新します。

前提条件

• yq CLI ツールがインストールされている。

手順

OperatorHub からオンデマンドで外部 DNS Operator をデプロイできます。外部 DNS Operator をデプロイすると、**Subscription** オブジェクトが作成されます。

1. 次のコマンドを実行して、インストールプランの名前を確認します。

\$ oc -n external-dns-operator get sub external-dns-operator -o yaml | yq '.status.installplan.name'

出力例

install-zcvlr

2. 次のコマンドを実行して、インストールプランのステータスが **Complete** になっているか確認 します。

\$ oc -n external-dns-operator get ip <install_plan_name> -o yaml | yq '.status.phase'

出力例

Complete

3. 次のコマンドを実行して、external-dns-operator デプロイメントのステータスを表示します。

\$ oc get -n external-dns-operator deployment/external-dns-operator

出力例

NAMEREADYUP-TO-DATEAVAILABLEAGEexternal-dns-operator1/11123h

19.1.2. 外部 DNS Operator ログ

oc logs コマンドを使用して、外部 DNS Operator のログを表示できます。

手順

1. 次のコマンドを実行して、外部 DNS Operator のログを表示します。

\$ oc logs -n external-dns-operator deployment/external-dns-operator -c external-dns-operator

19.1.2.1. 外部 DNS Operator のドメイン名の制限

外部 DNS Operator は、TXT レコードの接頭辞を追加する TXT レジストリーを使用します。これによ り、TXT レコードのドメイン名の最大長が短くなります。DNS レコードは対応する TXT レコードなし では存在できないため、DNS レコードのドメイン名は TXT レコードと同じ制限に従う必要がありま す。たとえば、DNS レコードが <domain_name_from_source> の場合、TXT レコードは externaldns-<record_type>-<domain_name_from_source> になります。

外部 DNS Operator によって生成される DNS レコードのドメイン名には、次の制限があります。

レコードの種類	文字数
CNAME	44
AzureDNS のワイルドカー ド CNAME レコード	42
А	48
AzureDNS のワイルドカー ドAレコード	46

生成されたドメイン名がドメイン名の制限を超える場合、外部 DNS Operator のログに次のエラーが表 示されます。

time="2022-09-02T08:53:57Z" level=error msg="Failure in zone test.example.io. [Id: /hostedzone/Z06988883Q0H0RL6UMXXX]"

19.2. クラウドプロバイダーへの外部 DNS OPERATOR のインストール

AWS、Azure、GCP などのクラウドプロバイダーに外部 DNS Operator をインストールできます。

19.2.1. External DNS Operator のインストール

OpenShift Container Platform OperatorHub を使用して、外部 DNS Operator をインストールできます。

手順

1. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators → OperatorHub** をクリックします。

- 2. **外部 DNS Operator**をクリックします。**Filter by keyword** のテキストボックスまたはフィル ターリストを使用して、Operator のリストから外部 DNS Operator を検索できます。
- 3. external-dns-operator namespace を選択します。
- 4. External DNS Operator ページで Install をクリックします。
- 5. Install Operator ページで、次のオプションを選択していることを確認してください。
 - a. チャネルを stable-v1.0 として更新している。
 - b. インストールモードに A specific name on the clusterを選択している。
 - c. namespace を**external-dns-operator**としてインストールしている。namespace **external-dns-operator** が存在しない場合は、Operator のインストール中に作成されます。
 - d. **承認ストラテジー** を Automatic または Manual として選択している。承認ストラテジーは デフォルトで Automatic に設定されます。
 - e. Install をクリックします。

Automatic (自動) 更新を選択した場合、Operator Lifecycle Manager (OLM) は介入なしに、Operator の実行中のインスタンスを自動的にアップグレードします。

Manual 更新を選択した場合、OLM は更新要求を作成します。クラスター管理者は、Operator が新規 バージョンに更新されるように更新要求を手動で承認する必要があります。

検証

外部 DNS Operator で、**Installed Operators** ダッシュボードの **Status** が **Succeeded** と表示されることを確認します。

19.3. 外部 DNS OPERATOR 設定パラメーター

外部 DNS Operator には、次の設定パラメーターが含まれています。

19.3.1. 外部 DNS Operator 設定パラメーター

外部 DNS Operator には、次の設定パラメーターが含まれています。

パラメーター 説明

パラメーター	説明
spec	 クラウドプロバイダーのタイプを有効にします。 spec: <pre>provider: type: AWS 1 aws: credentials: name: aws-access-key 2</pre> AWS、GCP、Azure、Infoblox などの利用可能なオプションを定義しま f. クラウドプロバイダーのシークレット名を定義します。
zones	ドメインごとに DNS ゾーンを指定できます。ゾーンを指定しない場 合、ExternalDNS リソースはクラウドプロバイダーアカウントに存在するす べてのゾーンを検出します。 zones: - "myzoneid" 1 DNS ゾーンの名前を指定します。
domains	 ドメインごとに AWS ゾーンを指定できます。ドメインを指定しない場合、ExternalDNS リソースはクラウドプロバイダーアカウントに存在するすべてのゾーンを検出します。 domains: filterType: Include 1 matchType: Exact 2 name: "myzonedomain1.com" 3 filterType: Include 1 matchType: Pattern 4 pattern: ".*\\.otherzonedomain\\.com" 5 1 ExternalDNS リソースにドメイン名が含まれていることを確認します。 2 ドメインは、正規表現での照合ではなく、完全に一致する必要があることを、ExtrnalDNSに指示します。 3 ドメインの名前を定義します。 4 ExternalDNS リソースに regex-domain-filter フラグを設定します。 正規表現フィルターを使用して、使用できるドメインに限定します。 5 ターゲットゾーンのドメインをフィルタリングするために ExternalDNS リソースが使用する正規表現パターンを定義します。



パラメーター

ソースタイプが **OpenShiftRoute** の場合は、Ingress Controller 名を指 説明 定できます。**ExternalDNS** リソースは、CNAME レコードのターゲット

19.4. AWS での DNS レコードの作成

外部 DNS Operator を使用して、AWS および AWS GovCloud で DNS レコードを作成できます。

19.4.1. Red Hat 外部 DNS Operator を使用した AWS のパブリックホストゾーンへの DNS レコードの作成

Red Hat 外部 DNS Operator を使用して、AWS のパブリックホストゾーンに DNS レコードを作成できます。同じ手順を使用して、AWS GovCloud のホストゾーンに DNS レコードを作成できます。

手順

 ユーザーを確認してください。ユーザーは、kube-system namespace にアクセスできる必要 があります。クレデンシャルがない場合は、kube-system namespace からクレデンシャルを 取得すると、クラウドプロバイダークライアントを使用できます。

\$ oc whoami

出力例

system:admin

2. **kube-system**namespace に存在する aws-creds シークレットから値を取得します。

\$ export AWS_ACCESS_KEY_ID=\$(oc get secrets aws-creds -n kube-system --template= {{.data.aws_access_key_id}} | base64 -d) \$ export AWS_SECRET_ACCESS_KEY=\$(oc get secrets aws-creds -n kube-system -template={{.data.aws_secret_access_key}} | base64 -d)

3. ルートを取得して、ドメインを確認します。

\$ oc get routes --all-namespaces | grep console

出力例

openshift-console console-openshiftconsole console.apps.testextdnsoperator.apacshift.support console https reencrypt/Redirect None openshift-console downloads downloads-openshiftconsole.apps.testextdnsoperator.apacshift.support downloads http edge/Redirect None

4. DNS ゾーンのリストを取得して、以前に検出されたルートのドメインに対応するものを検索し ます。

\$ aws route53 list-hosted-zones | grep testextdnsoperator.apacshift.support

出力例

	HOSTEDZONES terraform /hostedzone/Z02355203TNN1XXXX1J6O testextdnsoperator.apacshift.support. 5
5. ro	oute ソースの ExternalDNS リソースを作成します。
	<pre>\$ cat <<eof -<br="" -f="" create="" oc="" ="">apiVersion: externaldns.olm.openshift.io/v1beta1 kind: ExternalDNS metadata: name: sample-aws 1 spec: domains: filterType: Include 2 matchType: Exact 3 name: testextdnsoperator.apacshift.support 4 provider: type: AWS 5 source: 6 type: OpenShiftRoute 7 openshiftRouteOptions: routerName: default 3 EOF</eof></pre>
1	外部 DNS リソースの名前を定義します。
2	デフォルトでは、すべてのホストゾーンがターゲット候補として選択されます。必要なホ ストゾーンを追加できます。
3	ターゲットゾーンのドメインは、(正規表現の一致とは対照的に)完全一致である必要があ ります。
4	更新するゾーンのドメインを正確に指定します。ルートのホスト名は、指定されたドメインのサブドメインである必要があります。
5	AWS Route53DNSプロバイダーを定義します。
6	DNS レコードのソースのオプションを定義します。
7	以前に指定された DNS プロバイダーで作成される DNS レコードのソースとして OpenShift route リソースを定義します。
8	ソースが OpenShiftRoute の場合に、OpenShift Ingress Controller 名を指定できます。外 部 DNS Operator は、CNAME レコードの作成時に、そのルーターの正規のホスト名を ターゲットとして選択します。
6. 次	のコマンドを使用して、OCP ルート用に作成されたレコードを確認します。

\$ aws route53 list-resource-record-sets --hosted-zone-id Z02355203TNN1XXXX1J6O -query "ResourceRecordSets[?Type == 'CNAME']" | grep console

19.5. AZURE での DNS レコードの作成

外部 DNS Operator を使用して、Azure 上に DNS レコードを作成できます。

19.5.1. Azure のパブリック DNS ゾーン上で DNS レコードを作成する

Red Hat 外部 DNS Operator を使用して、Azure のパブリック DNS ゾーンに DNS レコードを作成できます。

前提条件

- 管理者権限を持っている。
- admin ユーザーの場合、kube-system namespace にアクセスできる。

手順

1. クラウドプロバイダークライアントを使用するために、次のコマンドを実行して **kube-system** namespace から認証情報を取得します。

\$ CLIENT_ID=\$(oc get secrets azure-credentials -n kube-system --template=
{{.data.azure_client_id}} | base64 -d)
\$ CLIENT_SECRET=\$(oc get secrets azure-credentials -n kube-system --template=
{{.data.azure_client_secret}} | base64 -d)
\$ RESOURCE_GROUP=\$(oc get secrets azure-credentials -n kube-system --template=
{{.data.azure_resourcegroup}} | base64 -d)
\$ SUBSCRIPTION_ID=\$(oc get secrets azure-credentials -n kube-system --template=
{{.data.azure_subscription_id}} | base64 -d)
\$ TENANT_ID=\$(oc get secrets azure-credentials -n kube-system --template=
{{.data.azure_subscription_id}} | base64 -d)
\$ TENANT_ID=\$(oc get secrets azure-credentials -n kube-system --template=
{{.data.azure_subscription_id}} | base64 -d)

2. 次のコマンドを実行して、Azure にログインします。

\$ az login --service-principal -u "\${CLIENT_ID}" -p "\${CLIENT_SECRET}" --tenant "\${TENANT_ID}"

3. 次のコマンドを実行して、ルートのリストを取得します。

\$ oc get routes --all-namespaces | grep console

出力例

openshift-console console console-openshiftconsole.apps.test.azure.example.com console https reencrypt/Redirect None openshift-console downloads downloads-openshiftconsole.apps.test.azure.example.com downloads http edge/Redirect None

4. 次のコマンドを実行して、DNS ゾーンのリストを取得します。

\$ az network dns zone list --resource-group "\${RESOURCE_GROUP}"

5. ExternalDNS オブジェクトを定義する YAML ファイル (例: external-dns-sample-azure.yaml) を作成します。

external-dns-sample-azure.yaml ファイルの例

	apiVersion: externaldns.olm.openshift.io/v1beta1 kind: ExternalDNS metadata: name: sample-azure 1 spec: zones: - "/subscriptions/1234567890/resourceGroups/test-azure-xxxxx- rg/providers/Microsoft.Network/dnszones/test.azure.example.com" 2 provider: type: Azure 3 source: openshiftRouteOptions: 4 routerName: default 5 type: OpenShiftRoute 6
1	外部 DNS 名を指定します。
2	ン ゾーン ID を定義します。
3	プロバイダータイプを定義します。
2	DNS レコードのソースのオプションを定義できます。
5	ソースタイプが OpenShiftRoute の場合、OpenShift Ingress Controller 名を渡すことができます。外部 DNS は、CNAME レコードの作成時に、そのルーターの正規のホスト名をターゲットとして選択します。

route リソースを Azure DNS レコードのソースとして定義します。

6. 次のコマンドを実行して、OpenShift Container Platform ルートに対して作成された DNS レ コードを確認します。

\$ az network dns record-set list -g "\${RESOURCE_GROUP}" -z test.azure.example.com | grep console



6

注記

プライベート Azure DNS のホストされたプライベートゾーンにレコードを作成 するには、**zones** フィールドの下にプライベートゾーンを指定する必要がありま す。これにより、プロバイダータイプが **ExternalDNS** 引数の **azure-privatedns** に入力されます。

19.6. GCP での DNS レコードの作成

外部 DNS Operator を使用して、GCP 上に DNS レコードを作成できます。

19.6.1. GCP のパブリックマネージドゾーン上で DNS レコードを作成する

外部 DNS Operator を使用して、GCP のパブリックマネージドゾーンに DNS レコードを作成できます。

前提条件

• 管理者権限を持っている。

手順

 次のコマンドを実行して、encoded-gcloud.json ファイル内の gcp-credentials シークレット をコピーします。

\$ oc get secret gcp-credentials -n kube-system --template='{{\$v := index .data
"service_account.json"}}{{\$v}}' | base64 -d -> decoded-gcloud.json

2. 次のコマンドを実行して、Googleの認証情報をエクスポートします。

\$ export GOOGLE_CREDENTIALS=decoded-gcloud.json

3. 次のコマンドを使用して、アカウントをアクティブ化します。

\$ gcloud auth activate-service-account <client_email as per decoded-gcloud.json> --key-file=decoded-gcloud.json

4. 次のコマンドを実行して、プロジェクトを設定します。

\$ gcloud config set project <project_id as per decoded-gcloud.json>

5. 次のコマンドを実行して、ルートのリストを取得します。

\$ oc get routes --all-namespaces | grep console

出力例

openshift-console console console-openshiftconsole.apps.test.gcp.example.com console https reencrypt/Redirect None openshift-console downloads downloads-openshiftconsole.apps.test.gcp.example.com downloads http edge/Redirect None

6. 次のコマンドを実行して、マネージドゾーンのリストを取得します。

\$ gcloud dns managed-zones list | grep test.gcp.example.com

出力例

qe-cvs4g-private-zone test.gcp.example.com

7. ExternalDNS オブジェクトを定義する YAML ファイル (例: external-dns-sample-gcp.yaml) を作成します。

external-dns-sample-gcp.yaml ファイルの例

apiVersion: externaldns.olm.openshift.io/v1beta1 kind: ExternalDNS metadata:

name: sample-gcp 1 spec: domains: - filterType: Include 2 matchType: Exact 3 name: test.gcp.example.com 4 provider: type: GCP 5 source: openshiftRouteOptions: 6 routerName: default 7 type: OpenShiftRoute 8
 外部 DNS 名を指定します。
2 デフォルトでは、すべてのホストされたゾーンがターゲット候補として選択されます。ホ ストされたゾーンを含めることができます。
3 ターゲットのドメインは、nameキーで定義された文字列と一致する必要があります。
④ 更新するゾーンのドメインを正確に指定します。ルートのホスト名は、指定されたドメインのサブドメインである必要があります。
5 プロバイダータイプを定義します。
6 DNS レコードのソースのオプションを定義できます。
ソースタイプが OpenShiftRoute の場合、OpenShift Ingress Controller 名を渡すことがで きます。外部 DNS は、CNAME レコードの作成時に、そのルーターの正規のホスト名を ターゲットとして選択します。
8 route リソースを GCP DNS レコードのソースとして定義します。

8. 次のコマンドを実行して、OpenShift Container Platform ルートに対して作成された DNS レ コードを確認します。

\$ gcloud dns record-sets list --zone=qe-cvs4g-private-zone | grep console

19.7. INFOBLOX での DNS レコードの作成

外部 DNS Operator を使用して、Infoblox に DNS レコードを作成できます。

19.7.1. Infoblox のパブリック DNS ゾーンでの DNS レコードの作成

外部 DNS Operator を使用して、Infoblox のパブリック DNS ゾーンに DNS レコードを作成できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) にアクセスできる。
- Infoblox UI にアクセスできる。

手順

1. 次のコマンドを実行して、Infoblox クレデンシャルを使用して **secret** オブジェクトを作成しま す。

\$ oc -n external-dns-operator create secret generic infoblox-credentials --fromliteral=EXTERNAL_DNS_INFOBLOX_WAPI_USERNAME=<infoblox_username> --fromliteral=EXTERNAL_DNS_INFOBLOX_WAPI_PASSWORD=<infoblox_password>

2. 次のコマンドを実行して、ルートのリストを取得します。

\$ oc get routes --all-namespaces | grep console

出力例

openshift-console console console-openshift-console.apps.test.example.com console https reencrypt/Redirect None openshift-console downloads downloads-openshiftconsole.apps.test.example.com downloads http edge/Redirect None

3. ExternalDNS オブジェクトを定義する YAML ファイル (例: external-dns-sampleinfoblox.yaml) を作成します。

external-dns-sample-infoblox.yaml ファイルの例





ソースタイプが **OpenShiftRoute** の場合、OpenShift Ingress Controller 名を渡すことがで きます。外部 DNS は、CNAME レコードの作成時に、そのルーターの正規のホスト名を ターゲットとして選択します。

4. 次のコマンドを実行して、Infoblox に ExternalDNS リソースを作成します。

\$ oc create -f external-dns-sample-infoblox.yaml

- 5. Infoblox UI から、console ルート用に作成された DNS レコードを確認します。
 - a. Data Management → DNS → Zones をクリックします。
 - b. ゾーン名を選択します。

19.8. 外部 DNS OPERATOR でのクラスター全体のプロキシーの設定

クラスター全体のプロキシーを設定した後、Operator Lifecycle Manager (OLM) はデプロイされたすべ ての Operator に対して、**HTTP_PROXY、HTTPS_PROXY**、および **NO_PROXY** 環境変数の新しい内 容の自動更新をトリガーします。

19.8.1. クラスター全体のプロキシーの認証局を信頼する

外部 DNS Operator を設定して、クラスター全体のプロキシーの認証局を信頼できます。

手順

1. 次のコマンドを実行して、**external-dns-operator** namespace に CA バンドルを含める config map を作成します。

\$ oc -n external-dns-operator create configmap trusted-ca

信頼できる CA バンドルを config map に挿入するには、次のコマンドを実行して、config.openshift.io/inject-trusted-cabundle=true ラベルを config map に追加します。

\$ oc -n external-dns-operator label cm trusted-ca config.openshift.io/inject-trusted-cabundle=true

3. 次のコマンドを実行して、外部 DNS Operator のサブスクリプションを更新します。

\$ oc -n external-dns-operator patch subscription external-dns-operator --type='json' p='[{"op": "add", "path": "/spec/config", "value":{"env": [{"name":"TRUSTED_CA_CONFIGMAP_NAME","value":"trusted-ca"}]}}]'

検証

 外部 DNS Operator のデプロイ後、次のコマンドを実行して、信頼できる CA 環境変数が external-dns-operator デプロイメントに追加されていることを確認します。

\$ oc -n external-dns-operator exec deploy/external-dns-operator -c external-dns-operator -printenv TRUSTED_CA_CONFIGMAP_NAME

出力例

trusted-ca

I

第20章 ネットワークポリシー

20.1. ネットワークポリシーについて

クラスター管理者は、トラフィックをクラスター内の Pod に制限するネットワークポリシーを定義できます。

20.1.1. ネットワークポリシーについて

Kubernetes ネットワークポリシーをサポートするネットワークプラグインを使用するクラスターで は、ネットワーク分離は **NetworkPolicy** オブジェクトによって完全に制御されます。OpenShift Container Platform 4.12 では、OpenShift SDN はデフォルトのネットワーク分離モードでのネットワー クポリシーの使用をサポートしています。



警告

ネットワークポリシーは、ホストのネットワーク namespace には適用されません。ホストネットワークが有効にされている Pod はネットワークポリシールール による影響を受けません。ただし、ホストネットワークの Pod に接続する Pod は ネットワークポリシールールの影響を受ける可能性があります。

ネットワークポリシーは、ローカルホストまたは常駐ノードからのトラフィックを ブロックすることはできません。

デフォルトで、プロジェクトのすべての Pod は他の Pod およびネットワークのエンドポイントからア クセスできます。プロジェクトで1つ以上の Pod を分離するには、そのプロジェクトで NetworkPolicy オブジェクトを作成し、許可する着信接続を指定します。プロジェクト管理者は独自の プロジェクト内で NetworkPolicy オブジェクトの作成および削除を実行できます。

Pod が1つ以上の **NetworkPolicy** オブジェクトのセレクターで一致する場合、Pod はそれらの1つ以上の **NetworkPolicy** オブジェクトで許可される接続のみを受け入れます。**NetworkPolicy** オブジェクト によって選択されていない Pod は完全にアクセス可能です。

ネットワークポリシーは、TCP、UDP、ICMP、および SCTP プロトコルにのみ適用されます。他のプロトコルは影響を受けません。

以下のサンプル **NetworkPolicy** オブジェクトは、複数の異なるシナリオをサポートすることを示しています。

 すべてのトラフィックを拒否します。 プロジェクトに deny by default (デフォルトで拒否)を実行させるには、すべての Pod に一致 するが、トラフィックを一切許可しない NetworkPolicy オブジェクトを追加します。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: deny-by-default spec: podSelector: {} ingress: []

• OpenShift Container Platform Ingress Controller からの接続のみを許可します。

プロジェクトで OpenShift Container Platform Ingress Controller からの接続のみを許可するに は、以下の **NetworkPolicy** オブジェクトを追加します。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: allow-from-openshift-ingress
spec:
ingress:
- from:
- namespaceSelector:
matchLabels:
network.openshift.io/policy-group: ingress
podSelector: {}
policyTypes:
- Ingress
```

プロジェクト内の Pod からの接続のみを受け入れます。
 Pod が同じプロジェクト内の他の Pod からの接続を受け入れるが、他のプロジェクトの Pod からの接続を拒否するように設定するには、以下の NetworkPolicy オブジェクトを追加しま

```
kind: NetworkPolicy
apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
name: allow-same-namespace
spec:
podSelector: {}
ingress:
- from:
- podSelector: {}
```

す。

 Pod ラベルに基づいて HTTP および HTTPS トラフィックのみを許可します。
 特定のラベル (以下の例の role=frontend) の付いた Pod への HTTP および HTTPS アクセスの みを有効にするには、以下と同様の NetworkPolicy オブジェクトを追加します。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-http-and-https spec: podSelector: matchLabels: role: frontend ingress: - ports: - protocol: TCP port: 80 - protocol: TCP port: 443

namespace および Pod セレクターの両方を使用して接続を受け入れます。
 namespace と Pod セレクターを組み合わせてネットワークトラフィックのマッチングをする
 には、以下と同様の NetworkPolicy オブジェクトを使用できます。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-pod-and-namespace-both spec: podSelector: matchLabels: name: test-pods ingress: - from: - namespaceSelector: matchLabels: project: project name podSelector: matchLabels: name: test-pods

NetworkPolicy オブジェクトは加算されるものです。 つまり、複数の NetworkPolicy オブジェクトを 組み合わせて複雑なネットワーク要件を満すことができます。

たとえば、先の例で定義された NetworkPolicy オブジェクトの場合、同じプロジェト内に allowsame-namespace と allow-http-and-https ポリシーの両方を定義することができます。これにより、 ラベル role=frontend の付いた Pod は各ポリシーで許可されるすべての接続を受け入れます。つま り、同じ namespace の Pod からのすべてのポート、およびすべての namespace の Pod からのポート 80 および 443 での接続を受け入れます。

20.1.1.1. allow-from-router ネットワークポリシーの使用

次の NetworkPolicy を使用して、ルーターの設定に関係なく外部トラフィックを許可します。

apiVersion: networking.k8s.io/v1 kind: NetworkPolicy
metadata:
name: allow-from-router
spec:
ingress:
- from:
- namespaceSelector:
matchLabels:
policy-group.network.openshift.io/ingress: ""
podSelector: {}
policyTypes:
- Ingress
5

policy-group.network.openshift.io/ingress:"ラベルは、OpenShift-SDN と OVN-Kubernetes の両方をサポートします。

20.1.1.2. allow-from-hostnetwork ネットワークポリシーの使用

次の allow-from-hostnetwork NetworkPolicy オブジェクトを追加して、ホストネットワーク Pod からのトラフィックを転送します。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: allow-from-hostnetwork
spec:
ingress:
- from:
- namespaceSelector:
matchLabels:
policy-group.network.openshift.io/host-network: ""
podSelector: {}
policyTypes:
- Ingress
```

20.1.2. OpenShift SDN を使用したネットワークポリシー最適化

ネットワークポリシーを使用して、namespace 内でラベルで相互に区別される Pod を分離します。

NetworkPolicy オブジェクトを単一 namespace 内の多数の個別 Pod に適用することは効率的ではあり ません。Pod ラベルは IP レベルには存在しないため、ネットワークポリシーは、podSelector で選択 されるすべての Pod 間のすべてのリンクについての別個の Open vSwitch (OVS) フロールールを生成し ます。

たとえば、仕様の **podSelector** および **NetworkPolicy** オブジェクト内の ingress **podSelector** のそれ ぞれが 200 Pod に一致する場合、40,000 (200*200) OVS フロールールが生成されます。これによ り、ノードの速度が低下する可能性があります。

ネットワークポリシーを設計する場合は、以下のガイドラインを参照してください。

- namespace を使用して分離する必要のある Pod のグループを組み込み、OVS フロールールの 数を減らします。
 namespace 全体を選択する NetworkPolicy オブジェクトは、namespaceSelectors または空の podSelectors を使用して、namespaceの VXLAN 仮想ネットワーク ID に一致する単一の OVS フロールールのみを生成します。
- 分離する必要のない Pod は元の namespace に維持し、分離する必要のある Pod は1つ以上の 異なる namespace に移します。
- 追加のターゲット設定された namespace 間のネットワークポリシーを作成し、分離された Pod から許可する必要のある特定のトラフィックを可能にします。

20.1.3. OVN-Kubernetes ネットワークプラグインによるネットワークポリシーの最適 化

ネットワークポリシーを設計する場合は、以下のガイドラインを参照してください。

 同じ spec.podSelector 仕様を持つネットワークポリシーの場合、ingress ルールまたは egress ルールを持つ複数のネットワークポリシーを使用するよりも、複数の Ingress ルールまたは たは egress ルールを持つ1つのネットワークポリシーを使用する方が効率的です。 podSelector または namespaceSelector 仕様に基づくすべての Ingress または egress ルー ルは、number of pods selected by network policy + number of pods selected by ingress or egress rule に比例する数の OVS フローを生成します。そのため、Pod ごとに個別のルール を作成するのではなく、1つのルールで必要な数の Pod を選択できる podSelector または namespaceSelector 仕様を使用することが推奨されます。 たとえば、以下のポリシーには2つのルールが含まれています。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: test-network-policy
spec:
podSelector: {}
ingress:
- from:
- podSelector:
matchLabels:
role: frontend
- from:
- podSelector:
matchLabels:
role: podSelector:
matchLabels:
role: backend
```

以下のポリシーは、上記と同じ2つのルールを1つのルールとして表現しています。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: test-network-policy
spec:
podSelector: {}
ingress:
- from:
- podSelector:
matchExpressions:
- {key: role, operator: In, values: [frontend, backend]}
```

同じガイドラインが spec.podSelector 仕様に適用されます。異なるネットワークポリシーに 同じ ingress ルールまたは egress ルールがある場合、共通の spec.podSelector 仕様で1つの ネットワークポリシーを作成する方が効率的な場合があります。たとえば、以下の2つのポリ シーには異なるルールがあります。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: policy1
spec:
podSelector:
matchLabels:
role: db
ingress:
- from:
- podSelector:
matchLabels:
role: frontend
```

apiVersion: networking.k8s.io/v1 kind: NetworkPolicy metadata: name: policy2 spec: podSelector: matchLabels: role: client ingress: - from: - podSelector: matchLabels: role: frontend

以下のネットワークポリシーは、上記と同じ2つのルールを1つのルールとして表現しています。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: policy3
spec:
podSelector:
matchExpressions:
- {key: role, operator: In, values: [db, client]}
ingress:
- from:
- podSelector:
matchLabels:
role: frontend
```

この最適化は、複数のセレクターを1つのセレクターとして表現する場合に限り適用できま す。セレクターが異なるラベルに基づいている場合、この最適化は適用できない可能性があり ます。その場合は、ネットワークポリシーの最適化に特化して新規ラベルをいくつか適用する ことを検討してください。

20.1.4. 次のステップ

- ネットワークポリシーの作成
- オプション: デフォルトネットワークポリシーの定義

20.1.5. 関連情報

- プロジェクトおよび namespace
- マルチテナントネットワークポリシーの設定
- NetworkPolicy API

20.2. ネットワークポリシーの作成

admin ロールを持つユーザーは、namespace のネットワークポリシーを作成できます。

20.2.1. サンプル NetworkPolicy オブジェクト

以下は、サンプル NetworkPolicy オブジェクトにアノテーションを付けます。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-27107 1 spec: podSelector: 2 matchLabels: app: mongodb ingress: - from: - podSelector: 3 matchLabels: app: app ports: 4 - protocol: TCP port: 27017

- 1 NetworkPolicy オブジェクトの名前。
- 2 ポリシーが適用される Pod を説明するセレクター。ポリシーオブジェクトは NetworkPolicy オブ ジェクトが定義されるプロジェクトの Pod のみを選択できます。
- 3 ポリシーオブジェクトが入力トラフィックを許可する Pod に一致するセレクター。セレクター は、NetworkPolicy と同じ namaspace にある Pod を照合して検索します。

4 トラフィックを受け入れる1つ以上の宛先ポートのリスト。

20.2.2. CLIを使用したネットワークポリシーの作成

クラスターの namespace に許可される Ingress または egress ネットワークトラフィックを記述する詳細なルールを定義するには、ネットワークポリシーを作成できます。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが適用される namespace で作業している。
手順

- 1. ポリシールールを作成します。
 - a. <policy_name>.yaml ファイルを作成します。

\$ touch <policy_name>.yaml

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

ネットワークポリシーファイル名を指定します。

b. 作成したばかりのファイルで、以下の例のようなネットワークポリシーを定義します。

すべての namespace のすべての Pod から ingress を拒否します。

これは基本的なポリシーであり、他のネットワークポリシーの設定によって許可されたクロス Pod トラフィック以外のすべてのクロス Pod ネットワーキングをブロックします。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: deny-by-default spec: podSelector: ingress: []

同じ namespace のすべての Pod から ingress を許可します。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-same-namespace spec: podSelector: ingress: - from: - podSelector: {}

特定の namespace から1つの Pod への上りトラフィックを許可する

このポリシーは、**namespace-y** で実行されている Pod から **pod-a** というラベルの付いた Pod へのトラフィックを許可します。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-traffic-pod spec: podSelector: matchLabels: pod: pod-a policyTypes:

- Ingress
 ingress:
 from:
 namespaceSelector:
 matchLabels:
 kubernetes.io/metadata.name: namespace-y
- 2. ネットワークポリシーオブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc apply -f <policy_name>.yaml -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

ネットワークポリシーファイル名を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/deny-by-default created



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールのフォームから、クラスターの任意の namespace でネットワークポリシーを直 接作成できます。

20.2.3. デフォルトの全拒否ネットワークポリシーの作成

これは基本的なポリシーであり、他のデプロイメントされたネットワークポリシーの設定によって許可 されたネットワークトラフィック以外のすべてのクロス Pod ネットワークをブロックします。この手 順では、デフォルトの deny-by-default ポリシーを適用します。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが適用される namespace で作業している。

壬順

ᆺᄱ

 すべての namespace におけるすべての Pod からの ingress を拒否する deny-by-default ポリ シーを定義する次の YAML を作成します。YAML を deny-by-default.yaml ファイルに保存し ます。

kind: NetworkPolicy
apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
name: deny-by-default
namespace: default 1
spec:
podSelector: {} 2
ingress: [] 3

namespace: default は、このポリシーを default namespace にデプロイします。

podSelector: は空です。これは、すべての Pod に一致することを意味します。したがって、ポリシーはデフォルト namespace のすべての Pod に適用されます。

3

指定された **ingress** ルールはありません。これにより、着信トラフィックがすべての Pod にドロップされます。

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。



出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/deny-by-default created

20.2.4. 外部クライアントからのトラフィックを許可するネットワークポリシーの作成

deny-by-default ポリシーを設定すると、外部クライアントからラベル **app=web** を持つ Pod へのトラ フィックを許可するポリシーの設定に進むことができます。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

この手順に従って、パブリックインターネットから直接、またはロードバランサーを使用して Pod に アクセスすることにより、外部サービスを許可するポリシーを設定します。トラフィックは、ラベル **app=web** を持つ Pod にのみ許可されます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが適用される namespace で作業している。

手順

 パブリックインターネットからのトラフィックが直接、またはロードバランサーを使用して Pod にアクセスできるようにするポリシーを作成します。YAML を web-allow-external.yaml ファイルに保存します。

kind: NetworkPolicy
apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
name: web-allow-external
namespace: default
spec:
policyTypes:
- Ingress
podSelector:
matchLabels:
app: web
ingress:
- {}

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f web-allow-external.yaml

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/web-allow-external created

このポリシーは、次の図に示すように、外部トラフィックを含むすべてのリソースからのトラフィック を許可します。



292_OpenShift_1122

20.2.5. すべての namespace からアプリケーションへのトラフィックを許可するネット ワークポリシーを作成する

注記



cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

この手順に従って、すべての namespace 内のすべての Pod から特定のアプリケーションへのトラフィックを許可するポリシーを設定します。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが適用される namespace で作業している。

手順

1. すべての namespace のすべての Pod から特定のアプリケーションへのトラフィックを許可す るポリシーを作成します。YAML を **web-allow-all-namespaces.yaml** ファイルに保存します。



- デフォルトの namespace の app:web Pod にのみポリシーを適用します。
- すべての namespace のすべての Pod を選択します。



注記

デフォルトでは、**namespaceSelector**の指定を省略した場合、namespace は選 択されません。つまり、ポリシーは、ネットワークポリシーがデプロイされてい る namespace からのトラフィックのみを許可します。

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f web-allow-all-namespaces.yaml

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/web-allow-all-namespaces created

検証

1. 次のコマンドを入力して、default namespace で Web サービスを開始します。

\$ oc run web --namespace=default --image=nginx --labels="app=web" --expose --port=80

 次のコマンドを実行して、alpine イメージを secondary namespace にデプロイし、シェルを 開始します。

\$ oc run test-\$RANDOM --namespace=secondary --rm -i -t --image=alpine -- sh

- 3. シェルで次のコマンドを実行し、リクエストが許可されていることを確認します。
 - # wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

html <html></html>
<head> <title>Welcome to nginx!</title> <style></style></head>

nginx.com.

Thank you for using nginx. </body> </html>

20.2.6. namespace からアプリケーションへのトラフィックを許可するネットワークポリシーの作成



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

特定の namespace からラベル **app=web** を持つ Pod へのトラフィックを許可するポリシーを設定する には、次の手順に従います。以下の場合にこれを行うことができます。

- 運用データベースへのトラフィックを、運用ワークロードがデプロイされている namespace の みに制限します。
- 特定の namespace にデプロイされた監視ツールを有効にして、現在の namespace からメトリ クスをスクレイピングします。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが適用される namespace で作業している。

手順

1. ラベルが **purpose=production** の特定の namespace 内にあるすべての Pod からのトラフィックを許可するポリシーを作成します。YAML を **web-allow-prod.yaml** ファイルに保存します。

	kind: NetworkPolicy
	apiVersion: networking.k8s.io/v1
	metadata:
	name: web-allow-prod
	namespace: default
	spec:
	podSelector:
	matchLabels:
	app: web 1
	policyTypes:
	- Ingress
	ingress:
	- from:
	- namespaceSelector:
	matchLabels:
	purpose: production 2
(1 デフォルトの namespace の app:web Pod にのみポリシーを適用します。
	っ ラベルが purpose=production の namespace 内にある Pod のみにトラフィックを制限し
	ます。
_	
2.	次のコマンドを人力して、ホリシーを適用します。
	¢ as apply fixed allow prediversi
	φ oc apply -i web-allow-plou.yalli

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/web-allow-prod created

検証

1. 次のコマンドを入力して、default namespace で Web サービスを開始します。

\$ oc run web --namespace=default --image=nginx --labels="app=web" --expose --port=80

2. 次のコマンドを実行して、prod namespace を作成します。

\$ oc create namespace prod

3. 次のコマンドを実行して、prod namespace にラベルを付けます。

\$ oc label namespace/prod purpose=production

4. 次のコマンドを実行して、dev namespace を作成します。

\$ oc create namespace dev

5. 次のコマンドを実行して、dev namespace にラベルを付けます。

\$ oc label namespace/dev purpose=testing

6. 次のコマンドを実行して、**alpine** イメージを **dev** namespace にデプロイし、シェルを開始し ます。

\$ oc run test-\$RANDOM --namespace=dev --rm -i -t --image=alpine -- sh

7. シェルで次のコマンドを実行し、リクエストがブロックされていることを確認します。

wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

wget: download timed out

8. 次のコマンドを実行して、**alpine** イメージを **prod** namespace にデプロイし、シェルを開始し ます。

\$ oc run test-\$RANDOM --namespace=prod --rm -i -t --image=alpine -- sh

9. シェルで次のコマンドを実行し、リクエストが許可されていることを確認します。

wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

<!DOCTYPE html> <html> <head> <title>Welcome to nginx!</title> <style> html { color-scheme: light dark; } body { width: 35em; margin: 0 auto; font-family: Tahoma, Verdana, Arial, sans-serif; } </style> </head> <body> <h1>Welcome to nginx!</h1> If you see this page, the nginx web server is successfully installed and working. Further configuration is required.

For online documentation and support please refer to nginx.org.
Commercial support is available at nginx.com.

Thank you for using nginx. </body> </html>

20.2.7. 関連情報

- Web コンソールへのアクセス
- Egress ファイアウォールとネットワークポリシールールのロギング

20.3. ネットワークポリシーの表示

admin ロールを持つユーザーは、namespace のネットワークポリシーを表示できます。

20.3.1. サンプル NetworkPolicy オブジェクト

以下は、サンプル NetworkPolicy オブジェクトにアノテーションを付けます。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-27107 1 spec: podSelector: 2 matchLabels: app: mongodb ingress: - from: - podSelector: 3 matchLabels: app: app ports: 4 - protocol: TCP port: 27017

- 1 NetworkPolicy オブジェクトの名前。
- 2 ポリシーが適用される Pod を説明するセレクター。ポリシーオブジェクトは NetworkPolicy オブ ジェクトが定義されるプロジェクトの Pod のみを選択できます。
- 3 ポリシーオブジェクトが入力トラフィックを許可する Pod に一致するセレクター。セレクターは、NetworkPolicy と同じ namaspace にある Pod を照合して検索します。

20.3.2. CLI を使用したネットワークポリシーの表示

namespace のネットワークポリシーを検査できます。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の ネットワークポリシーを表示できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが存在する namespace で作業している。

手順

- namespace のネットワークポリシーを一覧表示します。
 - namespace で定義されたネットワークポリシーオブジェクトを表示するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get networkpolicy

○ オプション:特定のネットワークポリシーを検査するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc describe networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

検査するネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

以下に例を示します。

\$ oc describe networkpolicy allow-same-namespace

⁴ トラフィックを受け入れる1つ以上の宛先ポートのリスト。

oc describe コマンドの出力

Name: allow-same-namespace Namespace: ns1 Created on: 2021-05-24 22:28:56 -0400 EDT Labels: <none> Annotations: <none> Spec: PodSelector: <none> (Allowing the specific traffic to all pods in this namespace) Allowing ingress traffic: To Port: <any> (traffic allowed to all ports) From: PodSelector: <none> Not affecting egress traffic Policy Types: Ingress



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールのフォームから、クラスターの任意の namespace でネットワークポリシーを直 接表示できます。

20.4. ネットワークポリシーの編集

admin ロールを持つユーザーは、namespace の既存のネットワークポリシーを編集できます。

20.4.1. ネットワークポリシーの編集

namespace のネットワークポリシーを編集できます。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを編集できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが存在する namespace で作業している。

手順

1. オプション: namespace のネットワークポリシーオブジェクトをリスト表示するには、以下の コマンドを入力します。

\$ oc get networkpolicy

ここでは、以下のようになります。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

- 2. ネットワークポリシーオブジェクトを編集します。
 - ネットワークポリシーの定義をファイルに保存した場合は、ファイルを編集して必要な変更を加えてから、以下のコマンドを入力します。

\$ oc apply -n <namespace> -f <policy_file>.yaml

ここでは、以下のようになります。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

<policy_file>

ネットワークポリシーを含むファイルの名前を指定します。

ネットワークポリシーオブジェクトを直接更新する必要がある場合、以下のコマンドを入力できます。

\$ oc edit networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

ネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

3. ネットワークポリシーオブジェクトが更新されていることを確認します。

\$ oc describe networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

ネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールの Actions メニューのポリシーから、クラスターの任意の namespace でネット ワークポリシーを直接編集できます。

20.4.2. サンプル NetworkPolicy オブジェクト

以下は、サンプル NetworkPolicy オブジェクトにアノテーションを付けます。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: allow-27107 1 spec: podSelector: 2 matchLabels: app: mongodb ingress: - from: - podSelector: 3 matchLabels: app: app ports: 4 - protocol: TCP port: 27017

- NetworkPolicy オブジェクトの名前。
- 2 ポリシーが適用される Pod を説明するセレクター。ポリシーオブジェクトは NetworkPolicy オブ ジェクトが定義されるプロジェクトの Pod のみを選択できます。
- 3 ポリシーオブジェクトが入力トラフィックを許可する Pod に一致するセレクター。セレクター は、NetworkPolicy と同じ namaspace にある Pod を照合して検索します。

4 トラフィックを受け入れる1つ以上の宛先ポートのリスト。

20.4.3. 関連情報

ネットワークポリシーの作成

20.5. ネットワークポリシーの削除

admin ロールを持つユーザーは、namespace からネットワークポリシーを削除できます。

20.5.1. CLI を使用したネットワークポリシーの削除

namespace のネットワークポリシーを削除できます。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の ネットワークポリシーを削除できます。

前提条件

 クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークポリシーが存在する namespace で作業している。

手順

ネットワークポリシーオブジェクトを削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc delete networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

ネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/default-deny deleted



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールの Actions メニューのポリシーから、クラスターの任意の namespace でネット ワークポリシーを直接削除できます。

20.6. プロジェクトのデフォルトネットワークポリシーの定義

クラスター管理者は、新規プロジェクトの作成時にネットワークポリシーを自動的に含めるように新規 プロジェクトテンプレートを変更できます。新規プロジェクトのカスタマイズされたテンプレートがま だない場合には、まずテンプレートを作成する必要があります。

20.6.1. 新規プロジェクトのテンプレートの変更

クラスター管理者は、デフォルトのプロジェクトテンプレートを変更し、新規プロジェクトをカスタム 要件に基づいて作成することができます。

独自のカスタムプロジェクトテンプレートを作成するには、以下を実行します。

手順

- 1. cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- 2. デフォルトのプロジェクトテンプレートを生成します。

\$ oc adm create-bootstrap-project-template -o yaml > template.yaml

- 3. オブジェクトを追加するか、既存オブジェクトを変更することにより、テキストエディターで 生成される template.yaml ファイルを変更します。
- 4. プロジェクトテンプレートは、**openshift-config** namespace に作成される必要があります。変更したテンプレートを読み込みます。

\$ oc create -f template.yaml -n openshift-config

- 5. Web コンソールまたは CLI を使用し、プロジェクト設定リソースを編集します。
 - Web コンソールの使用
 - i. Administration → Cluster Settings ページに移動します。
 - ii. Configuration をクリックし、すべての設定リソースを表示します。
 - iii. Project のエントリーを見つけ、Edit YAML をクリックします。
 - CLIの使用
 - i. project.config.openshift.io/cluster リソースを編集します。



\$ oc edit project.config.openshift.io/cluster

- spec セクションを、projectRequestTemplate および name パラメーターを組み込むように更新し、アップロードされたプロジェクトテンプレートの名前を設定します。デフォルト名は project-request です。
 - カスタムプロジェクトテンプレートを含むプロジェクト設定リソース

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Project
metadata:
# ...
spec:
projectRequestTemplate:
name: <template_name>
# ...
```

7. 変更を保存した後、変更が正常に適用されたことを確認するために、新しいプロジェクトを作 成します。

20.6.2. 新規プロジェクトへのネットワークポリシーの追加

クラスター管理者は、ネットワークポリシーを新規プロジェクトのデフォルトテンプレートに追加でき ます。OpenShift Container Platform は、プロジェクトのテンプレートに指定されたすべての **NetworkPolicy** オブジェクトを自動的に作成します。

前提条件

- クラスターは、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするデフォルトの CNI ネットワークプロバイダーを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。
- 新規プロジェクトのカスタムデフォルトプロジェクトテンプレートを作成している。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、新規プロジェクトのデフォルトテンプレートを編集します。

\$ oc edit template <project_template> -n openshift-config

<project_template> を、クラスターに設定したデフォルトテンプレートの名前に置き換えます。デフォルトのテンプレート名は project-request です。

 テンプレートでは、各 NetworkPolicy オブジェクトを要素として objects パラメーターに追加 します。objects パラメーターは、1つ以上のオブジェクトのコレクションを受け入れます。 以下の例では、objects パラメーターのコレクションにいくつかの NetworkPolicy オブジェク トが含まれます。

```
objects:
- apiVersion: networking.k8s.io/v1
 kind: NetworkPolicy
 metadata:
  name: allow-from-same-namespace
 spec:
  podSelector: {}
  ingress:
  - from:
   - podSelector: {}
- apiVersion: networking.k8s.io/v1
 kind: NetworkPolicy
 metadata:
  name: allow-from-openshift-ingress
 spec:
  ingress:
  - from:
   - namespaceSelector:
      matchLabels:
       network.openshift.io/policy-group: ingress
  podSelector: {}
  policyTypes:
  - Ingress
- apiVersion: networking.k8s.io/v1
 kind: NetworkPolicy
 metadata:
  name: allow-from-kube-apiserver-operator
 spec:
  ingress:
  - from:
   - namespaceSelector:
      matchLabels:
       kubernetes.io/metadata.name: openshift-kube-apiserver-operator
    podSelector:
      matchLabels:
       app: kube-apiserver-operator
```



3. オプション:以下のコマンドを実行して、新規プロジェクトを作成し、ネットワークポリシーオ ブジェクトが正常に作成されることを確認します。

a. 新規プロジェクトを作成します。





<project>を、作成しているプロジェクトの名前に置き換えます。

 b. 新規プロジェクトテンプレートのネットワークポリシーオブジェクトが新規プロジェクト に存在することを確認します。

\$ oc get networkpolicy NAME POD-SELECTOR AGE allow-from-openshift-ingress <none> 7s allow-from-same-namespace <none> 7s

20.7. ネットワークポリシーを使用したマルチテナント分離の設定

クラスター管理者は、マルチテナントネットワークの分離を実行するようにネットワークポリシーを設 定できます。



注記

OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用している場合、本セクションで説明され ているようにネットワークポリシーを設定すると、マルチテナントモードと同様のネッ トワーク分離が行われますが、ネットワークポリシーモードが設定されます。

20.7.1. ネットワークポリシーを使用したマルチテナント分離の設定

他のプロジェクト namespace の Pod およびサービスから分離できるようにプロジェクトを設定できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。

手順

- 1. 以下の NetworkPolicy オブジェクトを作成します。
 - a. allow-from-openshift-ingress という名前のポリシー:

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
    name: allow-from-openshift-ingress
spec:
    ingress:
    - from:
        - namespaceSelector:
        matchLabels:
        policy-group.network.openshift.io/ingress: ""
podSelector: {}
policyTypes:
        - Ingress
EOF</pre>
```



注記

policy-group.network.openshift.io/ingress: ""は、OpenShift SDN の推奨 の namespace セレクターラベルです。**network.openshift.io/policy-group: ingress** namespace セレクターラベルを使用できますが、これはレガシーラ ベルです。

b. allow-from-openshift-monitoring という名前のポリシー。

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
    name: allow-from-openshift-monitoring
spec:
    ingress:
        - from:
            - namespaceSelector:
                matchLabels:
                network.openshift.io/policy-group: monitoring
podSelector: {}
    policyTypes:
        - Ingress
EOF</pre>
```

c. allow-same-namespace という名前のポリシー:

```
$ cat << EOF| oc create -f -
kind: NetworkPolicy
apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
    name: allow-same-namespace
spec:
    podSelector:
    ingress:
    - from:
        - podSelector: {}
EOF</pre>
```

d. allow-from-kube-apiserver-operator という名前のポリシー:

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
 name: allow-from-kube-apiserver-operator
spec:
 ingress:
 - from:
  - namespaceSelector:
    matchLabels:
     kubernetes.io/metadata.name: openshift-kube-apiserver-operator
   podSelector:
    matchLabels:
      app: kube-apiserver-operator
 policyTypes:
 - Ingress
EOF
```

詳細は、新規の New **kube-apiserver-operator** webhook controller validating health of webhook を参照してください。

オプション:以下のコマンドを実行し、ネットワークポリシーオブジェクトが現在のプロジェクトに存在することを確認します。

\$ oc describe networkpolicy

出力例

Name: allow-from-openshift-ingress Namespace: example1 Created on: 2020-06-09 00:28:17 -0400 EDT Labels: <none> Annotations: <none> Spec: PodSelector: <none> (Allowing the specific traffic to all pods in this namespace) Allowing ingress traffic: To Port: <any> (traffic allowed to all ports) From: NamespaceSelector: network.openshift.io/policy-group: ingress Not affecting egress traffic Policy Types: Ingress Name: allow-from-openshift-monitoring Namespace: example1 Created on: 2020-06-09 00:29:57 -0400 EDT Labels: <none> Annotations: <none> Spec: PodSelector: (Allowing the specific traffic to all pods in this namespace) Allowing ingress traffic: To Port: <any> (traffic allowed to all ports) From:

NamespaceSelector: network.openshift.io/policy-group: monitoring Not affecting egress traffic Policy Types: Ingress

20.7.2. 次のステップ

デフォルトのネットワークポリシーの定義

20.7.3. 関連情報

• OpenShift SDN ネットワーク分離モード

第21章 CIDR 範囲の定義

次の CIDR 範囲には、重複しない範囲を指定する必要があります。



注記

クラスターの作成後にマシンの CIDR 範囲を変更することはできません。



重要

OpenShift Container Platform 4.11 から 4.13 のデフォルトのネットワークプロバイダーで ある OVN-Kubernetes は、次の IP アドレス範囲を内部的に使用します: **100.64.0**.0/16、**169.254.169.0/29、fd98**::/64 および **fd69::/125**。クラスターで OVN-Kubernetes を使用している場合は、クラスター内の他の CIDR 定義に IP アドレス範囲を 含めないでください。

21.1. MACHINE CIDR

マシンの Classless Inter-Domain Routing (CIDR) フィールドでは、マシンまたはクラスターノードの IP アドレス範囲を指定する必要があります。

デフォルトは **10.0.0.0/16** です。この範囲は、接続されているネットワークと競合しないようにする必 要があります。

21.2. SERVICE CIDR

Service CIDR フィールドで、サービスの IP アドレス範囲を指定する必要があります。範囲は、ワーク ロードに対応するのに十分な大きさである必要があります。アドレスブロックは、クラスター内からア クセスする外部サービスと重複してはいけません。デフォルトは **172.30.0.0/16** です。

21.3. POD CIDR

Pod CIDR フィールドで、Pod の IP アドレス範囲を指定する必要があります。

Pod CIDR は、**clusterNetwork** CIDR およびクラスター CIDR と同じです。範囲は、ワークロードに対応するのに十分な大きさである必要があります。アドレスブロックは、クラスター内からアクセスする 外部サービスと重複してはいけません。デフォルトは **10.128.0.0**/14 です。クラスターをインストール した後に、範囲を拡張できます。

関連情報

Cluster Network Operator の設定

21.4. ホスト接頭辞

Host Prefix フィールドで、個々のマシンにスケジュールされた Pod に割り当てられたサブネット接頭 辞の長さを指定する必要があります。ホスト接頭辞は、各マシンの Pod IP アドレスプールを決定しま す。

例えば、ホスト接頭辞を /23 に設定した場合、各マシンには Pod CIDR アドレス範囲から /23 のサブ ネットが割り当てられます。デフォルトは /23 で、510 台のクラスターノードと、ノードごとに 510 個 の Pod IP アドレスを許可します。

第22章 AWS LOAD BALANCER OPERATOR

22.1. AWS LOAD BALANCER OPERATOR リリースノート

AWS Load Balancer (ALB) Operator は、**AWSLoadBalancerController** リソースのインスタンスをデ プロイおよび管理します。

これらのリリースノートは、OpenShift Container Platform での AWS Load Balancer Operator の開発 を追跡します。

AWS Load Balancer Operator の概要は、OpenShift Container Platform の AWS Load Balancer Operator を参照してください。



注記

AWS Load Balancer Operator は現在、AWS GovCloud をサポートしていません。

22.1.1. AWS Load Balancer Operator 1.0.0

このリリースで、AWS Load Balancer Operator の一般提供が開始されました。AWS Load Balancer Operator バージョン 1.0.0 は、AWS Load Balancer Controller バージョン 2.4.4 をサポートします。

AWS Load Balancer Operator バージョン 1.0.0 では、以下のアドバイザリーを利用できます。

• RHEA-2023:1954 Release of AWS Load Balancer Operator on OperatorHub Enhancement Advisory Update

22.1.1.1. 大きな変更

• このリリースでは、新しい **v1** API バージョンを使用しています。

22.1.1.2. バグ修正

 以前のバージョンでは、AWS Load Balancer Operator によってプロビジョニングされたコント ローラーは、クラスター全体のプロキシー設定を適切に使用しませんでした。これらの設定 は、コントローラーに正しく適用されるようになりました。(OCPBUGS-4052、OCPBUGS-5295)

22.1.2. 以前のバージョン

AWS Load Balancer Operator の最初の2つのバージョンは、テクノロジープレビュー機能として利用 できます。これらのバージョンは、実稼働クラスターで使用しないでください。Red Hat のテクノロ ジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジープレビュー機能のサポート範囲 を参 照してください。

AWS Load Balancer Operator バージョン 0.2.0 では、以下のアドバイザリーを利用できます。

• RHEA-2022:9084 Release of AWS Load Balancer Operator on OperatorHub Enhancement Advisory Update

AWS Load Balancer Operator バージョン 0.0.1 では、以下のアドバイザリーを利用できます。

• RHEA-2022:5780 Release of AWS Load Balancer Operator on OperatorHub Enhancement Advisory Update

22.2. OPENSHIFT CONTAINER PLATFORM \mathcal{O} AWS LOAD BALANCER OPERATOR

AWS Load Balancer Operator は、AWS Load Balancer Controller をデプロイおよび管理します。 OpenShift Container Platform Web コンソールまたは CLI を使用して、OperatorHub から AWS Load Balancer Operator をインストールできます。

22.2.1. AWS Load Balancer Operator に関する考慮事項

AWS Load Balancer Operator をインストールして使用する前に、次の制限事項を確認してください。

- IP トラフィックモードは、AWS Elastic Kubernetes Service (EKS) でのみ機能します。AWS Load Balancer Operator は、AWS Load Balancer Controller の IP トラフィックモードを無効に します。IP トラフィックモードを無効にすると、AWS Load Balancer Controller は Pod readiness ゲートを使用できません。
- AWS Load Balancer Operator は --disable-ingress-class-annotation や --disable-ingressgroup-name-annotation などのコマンドラインフラグを AWS Load Balancer Controller に追加 します。したがって、AWS Load Balancer Operator では、Ingress リソースで kubernetes.io/ingress.class および alb.ingress.kubernetes.io/group.name アノテーション を使用できません。

22.2.2. AWS Load Balancer Operator

AWS Load Balancer Operator は **kubernetes.io/role/elb** タグがない場合に、パブリックサブネットに タグを付けることができます。また、AWS Load Balancer Operator は、基盤となる AWS クラウドから 次の情報を検出します。

- Operator をホストするクラスターがデプロイされる仮想プライベートクラウド (VPC) の ID。
- 検出された VPC のパブリックおよびプライベートサブネット。

AWS Load Balancer Operator は、**インスタンス** ターゲットタイプのみで Network Load Balancer (NLB) を使用することにより、タイプ **LoadBalancer** の Kubernetes サービスリソースをサポートしま す。

前提条件

 AWS 認証情報シークレットが必要です。認証情報は、サブネットのタグ付けおよび VPC 検出 機能を提供するために使用されます。

手順

1. 次のコマンドを実行して **Subscription** オブジェクトを作成することにより、OperatorHub からオンデマンドで AWS Load Balancer Operator をデプロイできます。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator get sub aws-load-balancer-operator -- template='{{.status.installplan.name}}{{"\n"}}'

出力例

install-zlfbt

2. 次のコマンドを実行して、インストールプランのステータスが **Complete** になっているか確認 します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator get ip <install_plan_name> --template='{{.status.phase}}
{{"\n"}}'

出力例

Complete

3. 次のコマンドを実行して、**aws-load-balancer-operator-controller-manager** デプロイメント のステータスを表示します。

\$ oc get -n aws-load-balancer-operator deployment/aws-load-balancer-operator-controllermanager

出力例

NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE aws-load-balancer-operator-controller-manager 1/1 1 1 23h

22.2.3. AWS Load Balancer Operator ログ

oc logs コマンドを使用して、AWS Load Balancer Operator のログを表示できます。

手順

• 次のコマンドを実行して、AWS Load Balancer Operator のログを表示します。

\$ oc logs -n aws-load-balancer-operator deployment/aws-load-balancer-operator-controllermanager -c manager

22.3. AWS LOAD BALANCER OPERATOR のインストール

AWS Load Balancer Operator は、AWS Load Balancer Controller をデプロイおよび管理します。 OpenShift Container Platform Web コンソールまたは CLI を使用して、OperatorHub から AWS Load Balancer Operator をインストールできます。

22.3.1. Web コンソールを使用した AWS Load Balancer Operator のインストール

Web コンソールを使用して、AWS Load Balancer Operator をインストールできます。

前提条件

- **cluster-admin** パーミッションのあるユーザーとして OpenShift Container Platform Web コン ソールにログインしていること。
- クラスターのプラットフォームタイプとクラウドプロバイダーが AWS に設定されている。
- セキュリティートークンサービス (STS) または user-provisioned infrastructure を使用している 場合は、関連する準備手順に従います。たとえば、AWS Security Token Service を使用してい る場合は、"AWS Security Token Service (STS) を使用してクラスター上で AWS Load Balancer

Operator を準備する" を参照してください。

手順

- 1. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators → OperatorHub** に移動しま す。
- AWS Load Balancer Operator を選択します。Filter by keyword テキストボックスを使用する か、フィルターリストを使用して、Operator のリストから AWS Load Balancer Operator を検 索できます。
- 3. aws-load-balancer-operator namespace を選択します。
- 4. Install Operator ページで、次のオプションを選択します。
 - a. Update the channel で stable-v1 を選択します。
 - b. Installation mode で All namespaces on the cluster (default)を選択します。
 - c. Installed Namespace で aws-load-balancer-operator を選択します。aws-load-balanceroperator namespace が存在しない場合は、Operator のインストール中に作成されます。
 - d. Update approvalで Automatic または Manual を選択します。デフォルトでは、Update approval は Automatic に設定されています。Automatic (自動) 更新を選択した場合、 Operator Lifecycle Manager (OLM) は介入なしに、Operator の実行中のインスタンスを自動的にアップグレードします。手動更新を選択した場合、OLM は更新要求を作成します。 クラスター管理者は、Operator を新規バージョンに更新できるように更新要求を手動で承認する必要があります。
- 5. Install をクリックします。

検証

 AWS Load Balancer Operator で、インストール済み Operator ダッシュボードの Status が Succeeded と表示されることを確認します。

22.3.2. CLI を使用した AWS Load Balancer Operator のインストール

CLI を使用して AWS Load Balancer Operator をインストールできます。

前提条件

- cluster-admin 権限を持つユーザーとして OpenShift Container Platform Web コンソールにロ グインしている。
- クラスターのプラットフォームタイプとクラウドプロバイダーが AWS に設定されている。
- OpenShift CLI (oc) にログイン済みである。

手順

- 1. Namespace オブジェクトを作成します。
 - a. Namespace オブジェクトを定義する YAML ファイルを作成します。

namespace.yaml ファイルの例

apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: aws-load-balancer-operator

b. 次のコマンドを実行して、Namespace オブジェクトを作成します。

\$ oc apply -f namespace.yaml

- 2. CredentialsRequest オブジェクトを作成します。
 - a. CredentialsRequest オブジェクトを定義する YAML ファイルを作成します。

credentialsrequest.yaml ファイルの例

apiVersion: cloudcredential.openshift.io/v1 kind: CredentialsRequest metadata: name: aws-load-balancer-operator namespace: openshift-cloud-credential-operator spec: providerSpec: apiVersion: cloudcredential.openshift.io/v1 kind: AWSProviderSpec statementEntries: - action: - ec2:DescribeSubnets effect: Allow resource: "*" - action: - ec2:CreateTags ec2:DeleteTags effect: Allow resource: arn:aws:ec2:*:*:subnet/* - action: - ec2:DescribeVpcs effect: Allow resource: "*" secretRef: name: aws-load-balancer-operator namespace: aws-load-balancer-operator serviceAccountNames: - aws-load-balancer-operator-controller-manager

b. 次のコマンドを実行して、CredentialsRequest オブジェクトを作成します。

\$ oc apply -f credentialsrequest.yaml

- 3. OperatorGroup オブジェクトを作成します。
 - a. OperatorGroup オブジェクトを定義する YAML ファイルを作成します。

```
operatorgroup.yaml ファイルの例
```

apiVersion: operators.coreos.com/v1 kind: OperatorGroup metadata: name: aws-lb-operatorgroup namespace: aws-load-balancer-operator spec: upgradeStrategy: Default

b. 以下のコマンドを実行して OperatorGroup オブジェクトを作成します。

\$ oc apply -f operatorgroup.yaml

- 4. Subscription オブジェクトを作成します。
 - a. Subscription オブジェクトを定義する YAML ファイルを作成します。



- apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1 kind: Subscription metadata: name: aws-load-balancer-operator namespace: aws-load-balancer-operator spec: channel: stable-v1 installPlanApproval: Automatic name: aws-load-balancer-operator source: redhat-operators source: openshift-marketplace
- b. 以下のコマンドを実行して Subscription オブジェクトを作成します。

\$ oc apply -f subscription.yaml

検証

1. サブスクリプションからインストールプランの名前を取得します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator \
 get subscription aws-load-balancer-operator \
 --template='{{.status.installplan.name}}{{"\n"}}'

2. インストールプランのステータスを確認します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator \
 get ip <install_plan_name> \
 --template='{{.status.phase}}{{"\n"}}'

出力は Complete でなければなりません。

22.4. AWS SECURITY TOKEN SERVICE を使用したクラスター上の AWS LOAD BALANCER OPERATOR の準備

STS を使用するクラスターに AWS Load Balancer Operator をインストールできます。Operator をイン ストールする前に、次の手順に従ってクラスターを準備します。

AWS Load Balancer Operator は、**CredentialsRequest** オブジェクトに依存して Operator と AWS Load Balancer Controller をブートストラップします。AWS Load Balancer Operator は、必要なシークレットが作成されて利用可能になるまで待機します。Cloud Credential Operator は、STS クラスターでシークレットを自動的にプロビジョニングしません。ccoctl バイナリーを使用して、クレデンシャルシークレットを手動で設定する必要があります。

Cloud Credential Operator を使用して認証情報シークレットをプロビジョニングしたくない場合は、 AWS ロードバランサーコントローラーのカスタムリソース (CR) で認証情報シークレットを指定するこ とにより、STS クラスターで **AWSLoadBalancerController** インスタンスを設定できます。

22.4.1. Security Token Service クラスターでの AWS Load Balancer Operator のブー トストラップ

前提条件

• ccoctl バイナリーを抽出して準備する必要があります。

手順

1. 次のコマンドを実行して、aws-load-balancer-operator namespace を作成します。

\$ oc create namespace aws-load-balancer-operator

2. AWS Load Balancer Operator の **CredentialsRequest** カスタムリソース (CR) をダウンロード し、次のコマンドを実行して格納するディレクトリーを作成します。

\$ curl --create-dirs -o <path-to-credrequests-dir>/cr.yaml https://raw.githubusercontent.com/openshift/aws-load-balancer-operator/main/hack/operatorcredentials-request.yaml

3. 次のコマンドを実行して、**ccoctl** ツールを使用して AWS Load Balancer Operator の **CredentialsRequest** オブジェクトを処理します。

\$ ccoctl aws create-iam-roles \
 --name <name> --region=<aws_region> \
 --credentials-requests-dir=<path-to-credrequests-dir> \
 --identity-provider-arn <oidc-arn>

次のコマンドを実行して、クラスターのマニフェストディレクトリーに生成されたシークレットを適用します。

\$ Is manifests/*-credentials.yaml | xargs -I{} oc apply -f {}

5. 次のコマンドを実行して、AWS Load Balancer Operator の認証情報シークレットが作成されて いることを確認します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator get secret aws-load-balancer-operator -- template='{{index .data "credentials"}}' | base64 -d

出力例

[default] sts_regional_endpoints = regional role_arn = arn:aws:iam::9999999999999:role/aws-load-balancer-operator-aws-load-balanceroperator web identity token file = /var/run/secrets/openshift/serviceaccount/token

22.4.2. 管理された CredentialsRequest オブジェクトを使用して、Security Token Service クラスターで AWS Load Balancer Operator を設定する

前提条件

• ccoctl バイナリーを抽出して準備する必要があります。

手順

 AWS Load Balancer Operator は、各 AWSLoadBalancerController カスタムリソース (CR) の openshift-cloud-credential-operator namespaceに CredentialsRequest オブジェクトを作成 します。次のコマンドを実行すると、作成された CredentialsRequest オブジェクトを抽出し てディレクトリーに保存できます。

\$ oc get credentialsrequest -n openshift-cloud-credential-operator \
 aws-load-balancer-controller-<cr-name> -o yaml > <path-to-credrequests-dir>/cr.yaml

- aws-load-balancer-controller-<cr-name> パラメーターは、AWS Load Balancer Operator によって作成された認証情報リクエスト名を指定します。cr-name は、AWS Load Balancer Controller インスタンスの名前を指定します。
- 2. 次のコマンドを実行し、ccoctl ツールを使用して credrequests ディレクトリー内のすべての CredentialsRequest オブジェクトを処理します。

\$ ccoctl aws create-iam-roles \
 --name <name> --region=<aws_region> \
 --credentials-requests-dir=<path-to-credrequests-dir> \
 --identity-provider-arn <oidc-arn>

 次のコマンドを実行して、マニフェストディレクトリーで生成されたシークレットをクラス ターに適用します。

\$ Is manifests/*-credentials.yaml | xargs -I{} oc apply -f {}

4. aws-load-balancer-controller Pod が作成されたことを確認します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator get pods NAME READY STATUS RESTARTS AGE aws-load-balancer-controller-cluster-9b766d6-gg82c 1/1 Running 0 137m aws-load-balancer-operator-controller-manager-b55ff68cc-85jzg 2/2 Running 0 3h26m

22.4.3. 特定の認証情報を使用して Security Token Service クラスターで AWS Load Balancer Operator を設定する

認証情報シークレットは、AWS Load Balancer Controller カスタムリソース (CR) の **spec.credentials** フィールドを使用して指定できます。コントローラーの定義済みの **CredentialsRequest** オブジェクト を使用して、必要なロールを知ることができます。

前提条件

• ccoctl バイナリーを抽出して準備する必要があります。

手順

1. AWS Load Balancer Controller の CredentialsRequest カスタムリソース (CR) をダウンロード し、次のコマンドを実行して格納するディレクトリーを作成します。

\$ curl --create-dirs -o <path-to-credrequests-dir>/cr.yaml https://raw.githubusercontent.com/openshift/aws-load-balanceroperator/main/hack/controller/controller-credentials-request.yaml

2. ccoctl ツールを使用して、コントローラーの CredentialsRequest オブジェクトを処理します。

\$ ccoctl aws create-iam-roles \
 --name <name> --region=<aws_region> \
 --credentials-requests-dir=<path-to-credrequests-dir> \
 --identity-provider-arn <oidc-arn>

3. クラスターにシークレットを適用します。

\$ Is manifests/*-credentials.yaml | xargs -I{} oc apply -f {}

4. コントローラーで使用するためにクレデンシャルシークレットが作成されていることを確認し ます。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator get secret aws-load-balancer-controller-manual-cluster -- template='{{index .data "credentials"}}' | base64 -d

出力例

[default]
 sts_regional_endpoints = regional
 role_arn = arn:aws:iam::99999999999:role/aws-load-balancer-operator-aws-loadbalancer-controller
 web identity token file = /var/run/secrets/openshift/serviceaccount/token

5. AWSLoadBalancerController リソース YAML ファイル (例: sample-aws-lb-manualcreds.yaml) を次のように作成します。

apiVersion: networking.olm.openshift.io/v1 kind: AWSLoadBalancerController 1 metadata: name: cluster 2 spec: credentials: name: <secret-name> 3



AWSLoadBalancerController リソースを定義します。

- AWS Load Balancer コントローラーインスタンスの名前を定義します。このインスタンス 名は、関連するすべてのリソースの接尾辞として追加されます。
- コントローラーが使用する AWS 認証情報を含むシークレット名を指定します。

22.4.4. 関連情報

• Cloud Credential Operator ユーティリティーの設定

22.5. AWS LOAD BALANCER CONTROLLER のインスタンスを作成する

AWS Load Balancer Operator をインストールしたら、AWS Load Balancer Controller を作成できます。

22.5.1. AWS Load Balancer Controller の作成

クラスターにインストールできる **AWSLoadBalancerController** オブジェクトのインスタンスは1つだ けです。CLI を使用して AWS Load Balancer Controller を作成できます。AWS Load Balancer Operator は、**cluster** という名前のリソースのみを調整します。

前提条件

- echoserver namespace を作成している。
- OpenShift CLI (oc) にアクセスできる。

手順

1. AWSLoadBalancerController オブジェクトを定義する YAML ファイルを作成します。

sample-aws-Ib.yaml ファイルの例



AWSLoadBalancerController オブジェクトを定義します。

AWS Load Balancer Controller 名を定義します。このインスタンス名は、関連するすべてのリソーフの逆尾柱として追加されます

ツリノ―ヘツ女戌年日として担加されより。



AWS Load Balancer Controller のサブネットのタグ付け方法を設定します。次の値が有効 です。

- Auto: AWS Load Balancer Operator は、クラスターに属するサブネットを決定し、適切にタグ付けします。内部サブネットタグが内部サブネットに存在しない場合、 Operator はロールを正しく判別できません。
- Manual: クラスターに属するサブネットに適切なロールタグを手動でタグ付けします。ユーザー提供のインフラストラクチャーにクラスターをインストールした場合は、このオプションを使用します。



7

8

AWS Load Balancer Controller が AWS リソースをプロビジョニングするときに使用する タグを定義します。

5 Ingress クラス名を定義します。デフォルト値は **alb** です。



AWS Load Balancer Controller のアドオンとしてアノテーションを指定します。

alb.ingress.kubernetes.io/wafv2-acl-arn アノテーションを有効にします。

2. 次のコマンドを実行して、AWSLoadBalancerController オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f sample-aws-lb.yaml

3. Deployment リソースを定義する YAML ファイルを作成します。

sample-aws-Ib.yaml ファイルの例





4. Service リソースを定義する YAML ファイルを作成します。

service-albo.yaml ファイルの例:

apiVersion: v1 kind: Service 1 metadata:
name: <echoserver> 2</echoserver>
namespace: echoserver
spec:
ports:
- port: 80
targetPort: 8080
protocol: TCP
type: NodePort
selector:
app: echoserver



サービスリソースを定義します。



5. Ingress リソースを定義する YAML ファイルを作成します。

Ingress-albo.yaml ファイルの例:

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: Ingress
metadata:
 name: <name> 1
 namespace: echoserver
 annotations:
  alb.ingress.kubernetes.io/scheme: internet-facing
  alb.ingress.kubernetes.io/target-type: instance
spec:
 ingressClassName: alb
 rules:
  - http:
    paths:
     - path: /
       pathType: Exact
       backend:
        service:
```



検証

• 次のコマンドを実行して、Ingress リソースのステータスを HOST 変数に保存します。

\$ HOST=\$(oc get ingress -n echoserver echoserver --template='{{(index .status.loadBalancer.ingress 0).hostname}}')

• 次のコマンドを実行して、Ingress リソースのステータスを確認します。

\$ curl \$HOST

22.6.1つの AWS ロードバランサーを介して複数の INGRESS リソースを提供する

1つの AWS Load Balancer を介して、1つのドメインに含まれるさまざまなサービスにトラフィックを ルーティングできます。各 Ingress リソースは、ドメインの異なるエンドポイントを提供します。

22.6.1.1つの AWS ロードバランサーを介して複数の Ingress リソースを作成する

CLI を使用すると、1つの AWS ロードバランサーを介して複数の Ingress リソースにトラフィックを ルーティングできます。

前提条件

• OpenShift CLI (oc) にアクセスできる。

手順

1. 次のように、IngressClassParams リソースの YAML ファイル (例: sample-single-lb-params.yaml) を作成します。

	apiVersion: elbv2.k8s.aws/v1beta1 1 kind: IngressClassParams metadata: name: single-lb-params 2 spec: group: name: single-lb 3
	IngressClassParams リソースの API グループとバージョンを定義します。
6	IngressClassParams リソース名を指定します。



-

IngressGroup リソース名を指定します。このクラスのすべての **Ingress** リソースは、この **IngressGroup** に属します。

2. 次のコマンドを実行して、IngressClassParams リソースを作成します。

\$ oc create -f sample-single-lb-params.yaml

3. 次のように、IngressClass リソースの YAML ファイル (例: sample-single-lb-class.yaml) を 作成します。

		apiVersion: networking.k8s.io/v1 1 kind: IngressClass metadata: name: single-lb 2 spec: controller: ingress.k8s.aws/alb 3 parameters: apiGroup: elbv2.k8s.aws 4 kind: IngressClassParams 5 name: single-lb-params 6
(1	API グループと IngressClass リソースのバージョンを定義します。
	2	Ingress クラス名を指定します。
	3	コントローラー名を定義します。 ingress.k8s.aws/alb という値は、このクラスのすべて の Ingress リソースを AWS Load Balancer Controller によって管理することを意味しま す。
	4	IngressClassParams リソースの API グループを定義します。
(5	IngressClassParams リソースのリソースタイプを定義します。
	6	IngressClassParams リソース名を定義します。
4.	次の	Dコマンドを実行して IngressClass リソースを作成します。
		\$ oc create -f sample-single-lb-class.yaml
5.	次の Ib.y	Dように、AWSLoadBalancerController リソース YAML ファイル (例: sample-single- raml) を作成します。
		apiVersion: networking.olm.openshift.io/v1 kind: AWSLoadBalancerController metadata: name: cluster spec: subnetTagging: Auto ingressClass: single-lb



6. 次のコマンドを実行して、AWSLoadBalancerController リソースを作成します。

\$ oc create -f sample-single-lb.yaml

7. 次のように、Ingress リソースの YAML ファイル (例: sample-multiple-ingress.yaml) を作成 します。

```
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: Ingress
metadata:
 name: example-1
 annotations:
  alb.ingress.kubernetes.io/scheme: internet-facing 2
  alb.ingress.kubernetes.io/group.order: "1" 3
  alb.ingress.kubernetes.io/target-type: instance 4
spec:
 ingressClassName: single-lb 5
 rules:
 - host: example.com 6
  http:
    paths:
    - path: /blog 7
      pathType: Prefix
      backend:
       service:
        name: example-1 (8)
        port:
         number: 80 9
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: Ingress
metadata:
 name: example-2
 annotations:
  alb.ingress.kubernetes.io/scheme: internet-facing
  alb.ingress.kubernetes.io/group.order: "2"
  alb.ingress.kubernetes.io/target-type: instance
spec:
 ingressClassName: single-lb
 rules:
 - host: example.com
  http:
    paths:
    - path: /store
      pathType: Prefix
      backend:
       service:
        name: example-2
        port:
         number: 80
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: Ingress
metadata:
```
name: example-3 annotations: alb.ingress.kubernetes.io/scheme: internet-facing alb.ingress.kubernetes.io/group.order: "3" alb.ingress.kubernetes.io/target-type: instance spec: ingressClassName: single-lb rules: - host: example.com http: paths: - path: / pathType: Prefix backend: service: name: example-3 port: number: 80 Ingress 名を指定します。 インターネットにアクセスするためにパブリックサブネットにプロビジョニングするロー

3

ドバランサーを示します。 ロードバランサーで要求を受信したときに、複数の Ingress リソースからのルールをマッ

- 4 ロードバランサーがサービスに到達するために OpenShift Container Platform ノードを ターゲットにすることを示します。
- 😙 この Ingress に属する Ingress クラスを指定します。

チする順序を指定します。

- 🙃 要求のルーティングに使用するドメイン名を定義します。
- 7 サービスにルーティングする必要があるパスを定義します。
- 8 Ingress リソースで設定されたエンドポイントを提供するサービス名を定義します。
- エンドポイントにサービスを提供するサービスのポートを定義します。
- 8. 次のコマンドを実行して Ingress リソースを作成します。

\$ oc create -f sample-multiple-ingress.yaml

22.7. TLS TERMINATION の追加

AWS Load Balancer に TLS Termination を追加できます。

22.7.1. AWS Load Balancer への TLS Termination の追加

ドメインのトラフィックをサービスの Pod にルーティングし、AWS Load Balancer に TLS Termination を追加できます。

前提条件

• OpenShift CLI (**oc**) にアクセスできる。

手順

1. AWSLoadBalancerController リソースを定義する YAML ファイルを作成します。

add-tls-termination-albc.yaml ファイルの例

- apiVersion: networking.olm.openshift.io/v1 kind: AWSLoadBalancerController metadata: name: cluster spec: subnetTagging: Auto ingressClass: tls-termination
- Ingress クラス名を定義します。クラスター内に Ingress クラスが存在しない場合は、AWS Load Balancer Controller によって作成されます。**spec.controller** が **ingress.k8s.aws/alb** に設定されている場合、AWS Load Balancer Controller は追加の Ingress クラス値を調整します。
- 2. Ingress リソースを定義する YAML ファイルを作成します。

add-tls-termination-ingress.yaml ファイルの例

apiVersion: networking.k8s.io/v1 kind: Ingress metadata: name: <example> 1 annotations: alb.ingress.kubernetes.io/scheme: internet-facing 2 alb.ingress.kubernetes.io/certificate-arn: arn:aws:acm:us-west-2:xxxxx 3 spec: ingressClassName: tls-termination 4 rules: - host: <example.com> 5 http: paths: - path: / pathType: Exact backend: service: name: <example-service> 6 port: number: 80 Ingress 名を指定します。 コントローラーは、パブリックサブネット内の Ingress のロードバランサーをプロビジョ ニングし、インターネット経由でロードバランサーにアクセスします。 ロードバランサーに割り当てる証明書の Amazon Resource Name (ARN)。

Ingress クラス名を定義します。

- トラフィックルーティングのドメインを定義します。
- 6 トラフィックルーティングのサービスを定義します。

22.8. クラスター全体のプロキシーの設定

AWS Load Balancer Operator でクラスター全体のプロキシーを設定できます。クラスター全体のプロ キシーを設定すると、Operator Lifecycle Manager (OLM)

が、**HTTP_PROXY、HTTPS_PROXY、NO_PROXY** などの環境変数を使用して、Operator のすべての デプロイメントを自動的に更新します。これらの変数は、AWS Load Balancer Operator によってマ ネージドコントローラーに入力されます。

22.8.1. クラスター全体のプロキシーの認証局を信頼する

1. 次のコマンドを実行して、**aws-load-balancer-operator** namespace に認証局 (CA) バンドルを 含める config map を作成します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator create configmap trusted-ca

信頼できる CA バンドルを config map に挿入するには、次のコマンドを実行して、config.openshift.io/inject-trusted-cabundle=true ラベルを config map に追加します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator label cm trusted-ca config.openshift.io/inject-trusted-cabundle=true

3. 次のコマンドを実行して、AWS Load Balancer Operator デプロイメントの config map にアク セスできるように AWS Load Balancer Operator サブスクリプションを更新します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator patch subscription aws-load-balancer-operator -type='merge' -p '{"spec":{"config":{"env":
[{"name":"TRUSTED_CA_CONFIGMAP_NAME","value":"trusted-ca"}],"volumes":
[{"name":"trusted-ca","configMap":{"name":"trusted-ca"}],"volumeMounts":[{"name":"trusted-ca","configMap":{"name":"trusted-ca"}],"volumeMounts":[{"name":"trusted-ca","configMap":{"trusted-ca"}],"volumeMounts":[{"name":"trusted-ca","configMap":{"trusted-ca"}],"volumeMounts":[{"name":"trusted-ca","configMap":{"trusted-ca","subPath":"ca-bundle.crt","subPath":"ca

 AWS Load Balancer Operator がデプロイされたら、次のコマンドを実行して、CA バンドルが aws-load-balancer-operator-controller-manager デプロイメントに追加されていることを確 認します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator exec deploy/aws-load-balancer-operator-controllermanager -c manager -- bash -c "ls -l /etc/pki/tls/certs/albo-tls-ca-bundle.crt; printenv TRUSTED_CA_CONFIGMAP_NAME"

出力例

-rw-r--r-. 1 root 1000690000 5875 Jan 11 12:25 /etc/pki/tls/certs/albo-tls-ca-bundle.crt trusted-ca

5. オプション: config-map が変更されるたびに、次のコマンドを実行して、AWS Load Balancer Operator のデプロイを再開します。

\$ oc -n aws-load-balancer-operator rollout restart deployment/aws-load-balancer-operatorcontroller-manager

22.8.2. 関連情報

• Operator を使用した証明書の挿入

第23章 複数ネットワーク

23.1. 複数ネットワークについて

Kubernetes では、コンテナーネットワークは Container Network Interface (CNI) を実装するネット ワークプラグインに委任されます。

OpenShift Container Platform は、Multus CNI プラグインを使用して CNI プラグインのチェーンを許可 します。クラスターのインストール時に、デフォルト の Pod ネットワークを設定します。デフォルト のネットワークは、クラスターのすべての通常のネットワークトラフィックを処理します。利用可能な CNI プラグインに基づいて additional network を定義し、1つまたは複数のネットワークを Pod に割り 当てることができます。必要に応じて、クラスターの複数のネットワークを追加で定義することができ ます。これにより、スイッチングやルーティングなどのネットワーク機能を提供する Pod を設定する 際に柔軟性が得られます。

23.1.1. 追加ネットワークの使用シナリオ

データプレーンとコントロールプレーンの分離など、ネットワークの分離が必要な状況で追加のネット ワークを使用できます。トラフィックの分離は、以下のようなパフォーマンスおよびセキュリティー関 連の理由で必要になります。

パフォーマンス

各プレーンのトラフィック量を管理するために、2つの異なるプレーンにトラフィックを送信できます。

セキュリティー

機密トラフィックは、セキュリティー上の考慮に基づいて管理されているネットワークに送信で き、テナントまたはカスタマー間で共有できないプライベートを分離することができます。

クラスターのすべての Pod はクラスター全体のデフォルトネットワークを依然として使用し、クラス ター全体での接続性を維持します。すべての Pod には、クラスター全体の Pod ネットワークに割り当 てられる eth0 インターフェイスがあります。Pod のインターフェイスは、oc exec -it <pod_name> -ip a コマンドを使用して表示できます。Multus CNI を使用するネットワークを追加する場合、それらの 名前は net1、net2、…、netN になります。

追加のネットワークを Pod に割り当てるには、インターフェイスの割り当て方法を定義する設定を作成する必要があります。それぞれのインターフェイスは、NetworkAttachmentDefinition カスタムリソース (CR)を使用して指定します。これらの CR のそれぞれにある CNI 設定は、インターフェイスの作成方法を定義します。

23.1.2. OpenShift Container Platform の追加ネットワーク

OpenShift Container Platform は、クラスターに追加のネットワークを作成するために使用する以下の CNI プラグインを提供します。

- bridge: ブリッジベースの追加ネットワークを設定することで、同じホストにある Pod が相互に、かつホストと通信できます。
- host-device:ホストデバイスの追加ネットワークを設定することで、Pod がホストシステム上の物理イーサネットネットワークデバイスにアクセスすることができます。
- ipvlan: ipvlan ベースの追加ネットワークを設定する ことで、macvlan ベースの追加ネットワー クと同様に、ホスト上の Pod が他のホストやそれらのホストの Pod と通信できます。macvlan ベースの追加のネットワークとは異なり、各 Pod は親の物理ネットワークインターフェイスと 同じ MAC アドレスを共有します。

- macvlan: macvlan ベースの追加ネットワークを作成することで、ホスト上のPodが物理ネットワークインターフェイスを使用して他のホストやそれらのホストのPodと通信できます。 macvlan ベースの追加ネットワークに割り当てられる各Podには固有のMACアドレスが割り当てられます。
- SR-IOV: SR-IOV ベースの追加ネットワークを設定することで、Podをホストシステム上の SR-IOV 対応ハードウェアの Virtual Function (VF) インターフェイスに割り当てることができます。

23.2. 追加のネットワークの設定

クラスター管理者は、クラスターの追加のネットワークを設定できます。以下のネットワークタイプに 対応しています。

- ブリッジ
- ホストデバイス
- IPVLAN
- MACVLAN

23.2.1. 追加のネットワークを管理するためのアプローチ

追加したネットワークのライフサイクルを管理するには、2 つのアプローチがあります。各アプローチ は同時に使用できず、追加のネットワークを管理する場合に1つのアプローチしか使用できません。い ずれの方法でも、追加のネットワークは、お客様が設定した Container Network Interface (CNI) プラグ インで管理します。

追加ネットワークの場合には、IP アドレスは、追加ネットワークの一部として設定する IPAM(IP Address Management)CNI プラグインでプロビジョニングされます。IPAM プラグインは、DHCP や静 的割り当てなど、さまざまな IP アドレス割り当ての方法をサポートしています。

- Cluster Network Operator (CNO)の設定を変更する: CNO は自動的に
 NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成し、管理します。CNO は、オブジェクトのライフサイクル管理に加えて、DHCP で割り当てられた IP アドレスを使用する追加のネットワークで確実に DHCP が利用できるようにします。
- YAML マニフェストを適用する: NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成することで、追加のネットワークを直接管理できます。この方法では、CNI プラグインを連鎖させることができます。



注記

OVN SDN を使用して、Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) に複数のネットワークイ ンターフェイスを持つ OpenShift Container Platform ノードをデプロイすると、セカン ダリーインターフェイスの DNS 設定がプライマリーインターフェイスの DNS 設定より も優先される場合があります。この場合は、セカンダリーインターフェイスに接続され ているサブネット ID の DNS ネームサーバーを削除します。

\$ openstack subnet set --dns-nameserver 0.0.0.0 <subnet_id>

23.2.2. ネットワーク追加割り当ての設定

追加のネットワークは、**k8s.cni.cncf.io** API グループの **NetworkAttachmentDefinition** API を使用し て設定されます。



重要

NetworkAttachmentDefinition オブジェクトには、プロジェクト管理ユーザーがアクセ スできるので、機密情報やシークレットを保存しないでください。

APIの設定については、以下の表で説明されています。

表23.1 Network Attachment Definition API フィールド

フィールド	型	説明
metadata.name	string	追加のネットワークの名前です。
metadata.namespace	string	オブジェクトが関連付けられる namespace。
spec.config	string	JSON 形式の CNI プラグイン設定。

23.2.2.1. Cluster Network Operator による追加ネットワークの設定

追加のネットワーク割り当ての設定は、Cluster Network Operator (CNO)の設定の一部として指定します。

以下の YAML は、CNO で追加のネットワークを管理するための設定パラメーターを記述しています。

Cluster Network Operator (CNO)の設定

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
#
additionalNetworks: 1
- name: <name> 2</name>
namespace: <namespace> 3</namespace>
rawCNIConfig: - 4
{
}
type: Raw



2

1つまたは複数の追加ネットワーク設定の配列。

作成している追加ネットワーク割り当ての名前。名前は指定された **namespace** 内で一意である必 要があります。

3 ネットワークの割り当てを作成する namespace。値を指定しない場合、default の namespace が 使用されます。 JSON 形式の CNI プラグイン設定。

4

23.2.2.2. YAML マニフェストからの追加ネットワークの設定

追加ネットワークの設定は、以下の例のように YAML 設定ファイルから指定します。



23.2.3. 追加のネットワークタイプの設定

次のセクションでは、追加のネットワークの具体的な設定フィールドについて説明します。

23.2.3.1. ブリッジネットワークの追加設定

以下のオブジェクトは、ブリッジ CNI プラグインの設定パラメーターについて説明しています。

表23.2 Bridge CNI プラグイン JSON 設定オブジェクト

フィールド	型	
cniVersion	string	CNI 仕様のバージョン。値 0.3.1 が必要です。
name	string	CNO 設定に以前に指定した name パラメーターの値。
type	string	設定する CNI プラグインの名前: bridge 。
ipam	object	IPAM CNI プラグインの設定オブジェクト。プラグインは、割り 当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。
bridge	string	オプション: 使用する仮想ブリッジの名前を指定します。ブリッ ジインターフェイスがホストに存在しない場合は、これが作成 されます。デフォルト値は cni0 です。
ipMasq	boolean	オプション: 仮想ネットワークから外すトラフィックの IP マスカ レードを有効にするには、 true に設定します。すべてのトラ フィックのソース IP アドレスは、ブリッジの IP アドレスに書き 換えられます。ブリッジに IP アドレスがない場合は、この設定 は影響を与えません。デフォルト値は false です。

フィールド	型	説明
isGateway	boolean	オプション: IP アドレスをブリッジに割り当てるには true に設 定します。デフォルト値は false です。
isDefaultGatewa y	boolean	オプション: ブリッジを仮想ネットワークのデフォルトゲート ウェイとして設定するには、true に設定します。デフォルト値 は false です。isDefaultGateway が true に設定される場 合、isGateway も自動的に true に設定されます。
forceAddress	boolean	オプション: 仮想ブリッジの事前に割り当てられた IP アドレスの 割り当てを許可するには、 true に設定します。 false に設定さ れる場合、重複サブセットの IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレ スが仮想ブリッジに割り当てられるとエラーが発生します。デ フォルト値は false です。
hairpinMode	boolean	オプション: 仮想ブリッジが受信時に使用した仮想ポートでイー サネットフレームを送信できるようにするには、 true に設定し ます。このモードは、Reflective Relay (リフレクティブリレー) としても知られています。デフォルト値は false です。
promiscMode	boolean	オプション: ブリッジで無作為検出モード (Promiscuous Mode) を有効にするには、 true に設定します。デフォルト値は false です。
vlan	string	オプション: 仮想 LAN (VLAN) タグを整数値として指定します。 デフォルトで、VLAN タグは割り当てません。
preserveDefault Vlan	string	オプション: デフォルトの VLAN をブリッジに接続されている veth 側で保持する必要があるか示します。デフォルトは true です。
vlanTrunk	list	オプション: VLAN トランクタグを割り当てます。デフォルト値 は none です。
mtu	string	オプション: 最大転送単位 (MTU) を指定された値に設定しま す。デフォルト値はカーネルによって自動的に設定されます。
enabledad	boolean	オプション: コンテナー側の veth の重複アドレス検出を有効に します。デフォルト値は false です。
macspoofchk	boolean	オプション: MAC スプーフィングチェックを有効にして、コン テナーから発信されるトラフィックをインターフェイスの MAC アドレスに制限します。デフォルト値は false です。



注記

VLAN パラメーターは、**veth** のホスト側に VLAN タグを設定し、ブリッジインターフェ イスで **vlan_filtering** 機能を有効にします。 注記

L2 ネットワークのアップリンクを設定するには、以下のコマンドを使用してアップリン クインターフェイスで vlan を許可する必要があります。

\$ bridge vlan add vid VLAN_ID dev DEV

23.2.3.1.1. ブリッジ設定の例

以下の例では、bridge-net という名前の追加のネットワークを設定します。

{
"cniVersion": "0.3.1",
"name": "bridge-net",
"type": "bridge",
"isGateway": true,
"vlan": 2,
"ipam": {
"type": "dhcp"
}
}

23.2.3.2. ホストデバイスの追加ネットワークの設定



注記

device、hwaddr、kernelpath、または **pciBusID** のいずれかのパラメーターを設定して ネットワークデバイスを指定します。

以下のオブジェクトは、ホストデバイス CNI プラグインの設定パラメーターについて説明しています。

表23.3 ホストデバイ	゙ス CNI プラグイン	JSON 設定オブジェクト
--------------	--------------	---------------

フィールド	型	
cniVersion	string	CNI 仕様のバージョン。値 0.3.1 が必要です。
name	string	CNO 設定に以前に指定した name パラメーターの値。
type	string	設定する CNI プラグインの名前: host-device
device	string	オプション: eth0 などのデバイスの名前。
hwaddr	string	オプション: デバイスハードウェアの MAC アドレス。
kernelpath	string	オプション: / sys/devices/pci0000:00/0000:00:1f.6 などの Linux カーネルデバイス。
pciBusID	string	オプション: 0000:00:1f.6 などのネットワークデバイスの PCI アドレスを指定します。

23.2.3.2.1. ホストデバイス設定例

以下の例では、hostdev-net という名前の追加のネットワークを設定します。

```
{
  "cniVersion": "0.3.1",
  "name": "hostdev-net",
  "type": "host-device",
  "device": "eth1"
}
```

23.2.3.3. IPVLAN 追加ネットワークの設定

以下のオブジェクトは、IPVLAN CNI プラグインの設定パラメーターについて説明しています。

表23.4 IPVLAN CNI プラグイン JSON 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
cniVersion	string	CNI 仕様のバージョン。値 0.3.1 が必要です。
name	string	CNO 設定に以前に指定した name パラメーターの値。
type	string	設定する CNI プラグインの名前: ipvlan 。
ipam	object	IPAM CNI プラグインの設定オブジェクト。プラグインは、割り 当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。これ は、プラグインが連鎖している場合を除き必要です。
mode	string	オプション: 仮想ネットワークの操作モードを指定します。この 値は、 I2、I3、 または I3s である必要があります。デフォルト値 は I2 です。
master	string	オプション: ネットワーク割り当てに関連付けるイーサネットイ ンターフェイスを指定します。 master が指定されない場合、 デフォルトのネットワークルートのインターフェイスが使用さ れます。
mtu	integer	オプション: 最大転送単位 (MTU) を指定された値に設定しま す。デフォルト値はカーネルによって自動的に設定されます。

注記

- ipvlan オブジェクトは、仮想インターフェイスが master インターフェイスと通信することを許可しません。したがって、コンテナーは ipvlan インターフェイスを使用してホストに到達できなくなります。コンテナーが、Precision Time Protocol (PTP)をサポートするネットワークなど、ホストへの接続を提供するネットワークに参加していることを確認してください。
- 1つのの master インターフェイスを、macvlan と ipvlan の両方を使用するよう に同時に設定することはできません。
- インターフェイスに依存できない IP 割り当てスキームの場合、ipvlan プラグインは、このロジックを処理する以前のプラグインと連鎖させることができます。master が省略された場合、前の結果にはスレーブにする ipvlan プラグインのインターフェイス名が1つ含まれていなければなりません。ipam が省略された場合、ipvlan インターフェイスの設定には前の結果が使用されます。

23.2.3.3.1. IPVLAN 設定例

以下の例では、ipvlan-net という名前の追加のネットワークを設定します。



23.2.3.4. MACVLAN 追加ネットワークの設定

以下のオブジェクトは、macvlan CNI プラグインの設定パラメーターについて説明しています。

表23.5 MACVLAN CNI プラグイン JSON 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
cniVersion	string	CNI 仕様のバージョン。値 0.3.1 が必要です。
name	string	CNO 設定に以前に指定した name パラメーターの値。
type	string	設定する CNI プラグインの名前: macvlan 。
ipam	object	IPAM CNI プラグインの設定オブジェクト。プラグインは、割り 当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。

フィールド	<u>型</u>	説明
mode	string	オプション: 仮想ネットワークのトラフィックの可視性を設定し ます。 bridge、passthru、private、 または vepa のいずれか である必要があります。値が指定されない場合、デフォルト値 は bridge になります。
master	string	オプション: 新しく作成された macvlan インターフェイスに関連 付けるホストネットワークインターフェイス。値が指定されて いない場合は、デフォルトのルートインターフェイスが使用さ れます。
mtu	string	オプション: 指定された値への最大転送単位 (MTU)。デフォルト 値はカーネルによって自動的に設定されます。



注記

プラグイン設定の master キーを指定する場合は、競合の可能性を回避するために、プ ライマリーネットワークプラグインに関連付けられているものとは異なる物理ネット ワークインターフェイスを使用してください。

23.2.3.4.1. macvlan 設定の例

以下の例では、macvlan-net という名前の追加のネットワークを設定します。

```
{
    "cniVersion": "0.3.1",
    "name": "macvlan-net",
    "type": "macvlan",
    "master": "eth1",
    "mode": "bridge",
    "ipam": {
        "type": "dhcp"
        }
}
```

23.2.4. 追加ネットワークの IP アドレス割り当ての設定

IPAM (IP アドレス管理) Container Network Interface (CNI) プラグインは、他の CNI プラグインの IP ア ドレスを提供します。

以下の IP アドレスの割り当てタイプを使用できます。

- 静的割り当て。
- DHCP サーバーを使用した動的割り当て。指定する DHCP サーバーは、追加のネットワークか ら到達可能である必要があります。
- Whereabouts IPAM CNI プラグインを使用した動的割り当て。

23.2.4.1. 静的 IP アドレス割り当ての設定

以下の表は、静的 IP アドレスの割り当ての設定について説明しています。

表23.6 ipam 静的設定オブジェクト

フィールド	型 型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 static が必要です。
addresses	array	仮想インターフェイスに割り当てる IP アドレスを指定するオブ ジェクトの配列。IPv4 と IPv6 の IP アドレスの両方がサポート されます。
routes	array	Pod 内で設定するルートを指定するオブジェクトの配列です。
dns	array	オプション: DNS の設定を指定するオブジェクトの配列です。

addressesの配列には、以下のフィールドのあるオブジェクトが必要です。

表23.7 ipam.addresses[] 配列

フィールド	型	説明
address	string	指定する IP アドレスおよびネットワーク接頭辞。たとえ ば、10.10.21.10/24 を指定すると、追加のネットワークに IP アドレスの 10.10.21.10 が割り当てられ、ネットマスクは 255.255.255.0 になります。
gateway	string	egress ネットワークトラフィックをルーティングするデフォル トのゲートウェイ。

表23.8 ipam.routes[] 配列

フィールド	型	説明
dst	string	CIDR 形式の IP アドレス範囲 (192.168.17.0/24 、またはデフォ ルトルートの 0.0.0.0/0)。
gw	string	ネットワークトラフィックがルーティングされるゲートウェ イ。

表23.9 ipam.dns オブジェクト

フィールド	型	
nameservers	array	DNS クエリーの送信先となる1つ以上の IP アドレスの配列。

フィールド	型	説明
domain	array	ホスト名に追加するデフォルトのドメイン。たとえば、ドメイ ンが example.com に設定されている場合、 example-host の DNS ルックアップクエリーは example-host.example.com として書き換えられます。
search	array	DNS ルックアップのクエリー時に非修飾ホスト名に追加される ドメイン名の配列 (例: example-host)。

静的 IP アドレス割り当ての設定例



23.2.4.2. 動的 IP アドレス (DHCP) 割り当ての設定

以下の JSON は、DHCP を使用した動的 IP アドレスの割り当ての設定について説明しています。

DHCP リースの更新

Pod は、作成時に元の DHCP リースを取得します。リースは、クラスターで実行している最小限の DHCP サーバーデプロイメントで定期的に更新する必要があります。

DHCP サーバーのデプロイメントをトリガーするには、以下の例にあるように Cluster Network Operator 設定を編集して shim ネットワーク割り当てを作成する必要があります。

shim ネットワーク割り当ての定義例

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: additionalNetworks: - name: dhcp-shim namespace: default type: Raw rawCNIConfig: |-{ "name": "dhcp-shim", "cniVersion": "0.3.1", "type": "bridge", "ipam": { "type": "dhcp" } } # ...

表23.10 ipam DHCP 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 dhcp が必要です。

動的 IP アドレス (DHCP) 割り当ての設定例

```
{
"ipam": {
"type": "dhcp"
}
}
```

23.2.4.3. Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定

Whereabouts CNI プラグインにより、DHCP サーバーを使用せずに IP アドレスを追加のネットワーク に動的に割り当てることができます。

以下の表は、Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定について説明しています。

表23.11 ipam where abouts 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 whereabouts が必要です。
range	string	IP アドレスと範囲を CIDR 表記。IP アドレスは、この範囲内の アドレスから割り当てられます。
exclude	array	オプション: CIDR 表記の IP アドレスと範囲 (0 個以上) のリス ト。除外されたアドレス範囲内の IP アドレスは割り当てられま せん。

Whereabouts を使用する動的 IP アドレス割り当ての設定例

{
"ipam": {
"type": "whereabouts",
"range": "192.0.2.192/27",
"exclude": [
"192.0.2.192/30",
"192.0.2.196/32"
]
}
}

23.2.4.4. Whereabouts reconciler デーモンセットの作成

Whereabouts reconciler は、Whereabouts IP アドレス管理 (IPAM) ソリューションを使用して、クラス ター内の Pod の動的 IP アドレス割り当てを管理します。これにより、各 Pod が指定された IP アドレ ス範囲から一意の IP アドレスを確実に取得します。また、Pod が削除またはスケールダウンされた場 合の IP アドレスの解放も処理します。



注記

NetworkAttachmentDefinition カスタムリソースを使用して動的 IP アドレスを割り当て ることもできます。

Whereabouts reconciler デーモンセットは、Cluster Network Operator を通じて追加のネットワークを 設定するときに自動的に作成されます。YAML マニフェストから追加のネットワークを設定する場合、 これは自動的には作成されません。

Whereabouts reconciler デーモンセットのデプロイメントをトリガーするには、Cluster Network Operator のカスタムリソースファイルを編集して、**Whereabouts-shim** ネットワーク割り当てを手動 で作成する必要があります。

Whereabouts reconciler デーモンセットをデプロイするには、次の手順を使用します。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、**Network.operator.openshift.io** カスタムリソース (CR) を編集します。

\$ oc edit network.operator.openshift.io cluster

2. CRの AdditionalNetworks パラメーターを変更して、whereabouts-shim ネットワーク割り当 て定義を追加します。以下に例を示します。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
 name: cluster
spec:
 additionalNetworks:
 - name: whereabouts-shim
  namespace: default
  rawCNIConfig: |-
   ł
    "name": "whereabouts-shim",
    "cniVersion": "0.3.1",
    "type": "bridge",
    "ipam": {
     "type": "whereabouts"
    }
   }
  type: Raw
```

- 3. ファイルを保存し、テキストエディターを編集します。
- 4. 次のコマンドを実行して、whereabouts-reconciler デーモンセットが正常にデプロイされたことを確認します。

\$ oc get all -n openshift-multus | grep whereabouts-reconciler

出力例

pod/whereabouts-reconciler-jnp6g 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-k76gg 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-k86t9 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-p4sxw 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-rvfdv 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-svzw9 1/1 Running 0 6s daemonset.apps/whereabouts-reconciler 6 6 6 6 6 kubernetes.io/os=linux 6s

23.2.5. Cluster Network Operator による追加ネットワーク割り当ての作成

Cluster Network Operator (CNO) は追加ネットワークの定義を管理します。作成する追加ネットワーク を指定する場合、CNO は **NetworkAttachmentDefinition** オブジェクトを自動的に作成します。



重要

Cluster Network Operator が管理する **NetworkAttachmentDefinition** オブジェクトは編 集しないでください。これを実行すると、追加ネットワークのネットワークトラフィッ クが中断する可能性があります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. オプション: 追加のネットワークの namespace を作成します。

```
$ oc create namespace <namespace_name>
```

2. CNO 設定を編集するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc edit networks.operator.openshift.io cluster

3. 以下のサンプル CR のように、作成される追加ネットワークの設定を追加して、作成している CR を変更します。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
 name: cluster
spec:
 # ...
 additionalNetworks:
 - name: tertiary-net
  namespace: namespace2
  type: Raw
  rawCNIConfig: |-
     "cniVersion": "0.3.1",
     "name": "tertiary-net",
     "type": "ipvlan",
     "master": "eth1",
     "mode": "l2",
     "ipam": {
      "type": "static",
      "addresses": [
         "address": "192.168.1.23/24"
       }
      ]
     }
   }
```

4. 変更を保存し、テキストエディターを終了して、変更をコミットします。

検証

以下のコマンドを実行して、CNO が NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成していることを確認します。CNO がオブジェクトを作成するまでに遅延が生じる可能性があります。

\$ oc get network-attachment-definitions -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<namespace>

CNO の設定に追加したネットワーク割り当ての namespace を指定します。

出力例

NAME AGE test-network-1 14m

23.2.6. YAML マニフェストを適用した追加のネットワーク割り当ての作成

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下の例のように、追加のネットワーク設定を含む YAML ファイルを作成します。

```
apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1
kind: NetworkAttachmentDefinition
metadata:
    name: next-net
spec:
    config: |-
    {
        "cniVersion": "0.3.1",
        "name": "work-network",
        "type": "host-device",
        "device": "eth1",
        "ipam": {
            "type": "dhcp"
        }
    }
}
```

2. 追加のネットワークを作成するには、次のコマンドを入力します。

```
$ oc apply -f <file>.yaml
```

ここでは、以下のようになります。

<file>

YAMLマニフェストを含むファイルの名前を指定します。

23.3. 仮想ルーティングおよび転送について

23.3.1. 仮想ルーティングおよび転送について

VRF (Virtual Routing and Forwarding) デバイスは IP ルールとの組み合わせにより、仮想ルーティング

と転送ドメインを作成する機能を提供します。VRF は、CNF で必要なパーミッションの数を減らし、 セカンダリーネットワークのネットワークトポロジーの可視性を強化します。VRF はマルチテナンシー 機能を提供するために使用されます。たとえば、この場合、各テナントには固有のルーティングテーブ ルがあり、異なるデフォルトゲートウェイが必要です。

プロセスは、ソケットを VRF デバイスにバインドできます。バインドされたソケット経由のパケット は、VRF デバイスに関連付けられたルーティングテーブルを使用します。VRF の重要な機能として、 これは OSI モデルレイヤー3以上にのみ影響を与えるため、LLDP などのL2ツールは影響を受けませ ん。これにより、ポリシーベースのルーティングなどの優先度の高い IP ルールが、特定のトラフィッ クを転送する VRF デバイスルールよりも優先されます。

23.3.1.1. Telecommunications Operator についての Pod のセカンダリーネットワークの利点

通信のユースケースでは、各 CNF が同じアドレス空間を共有する複数の異なるネットワークに接続さ れる可能性があります。これらのセカンダリーネットワークは、クラスターのメインネットワーク CIDR と競合する可能性があります。CNI VRF プラグインを使用すると、ネットワーク機能は、同じ IP アドレスを使用して異なるユーザーのインフラストラクチャーに接続でき、複数の異なるお客様の分離 された状態を維持します。IP アドレスは OpenShift Container Platform の IP スペースと重複します。 CNI VRF プラグインは、CNF で必要なパーミッションの数も減らし、セカンダリーネットワークの ネットワークトポロジーの可視性を高めます。

23.4. マルチネットワークポリシーの設定

クラスター管理者は、追加のネットワーク用にマルチネットワークを設定できます。SR-IOV および macvlan 追加ネットワークのマルチネットワークポリシーを指定できます。Macvlan 追加ネットワーク は完全にサポートされています。ipvlan などの他の追加のネットワークタイプはサポートされていません。

重要

SR-IOV 追加ネットワークのマルチネットワークポリシー設定のサポートはテクノロジー プレビュー機能であり、カーネルネットワークインターフェイスカード (NIC) でのみサ ポートされます。SR-IOV は、データプレーン開発キット (DPDK) アプリケーションでは サポートされていません。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。



注記

設定されたネットワークポリシーは、IPv6 ネットワークでは無視されます。

23.4.1. マルチネットワークポリシーとネットワークポリシーの違い

MultiNetworkPolicy API は、**NetworkPolicy** API を実装していますが、いくつかの重要な違いがあります。

以下の場合は、MultiNetworkPolicy API を使用する必要があります。

apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1 kind: MultiNetworkPolicy

• CLIを使用してマルチネットワークポリシーと対話する場合は、multi-networkpolicy リソース 名を使用する必要があります。たとえば、oc get multi-networkpolicy <name> コマンドを使 用してマルチネットワークポリシーオブジェクトを表示できます。ここで、**<name>** はマルチ ネットワークポリシーの名前になります。

 macvlan または SR-IOV 追加ネットワークを定義するネットワーク割り当て定義の名前でアノ テーションを指定する必要があります。

apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1 kind: MultiNetworkPolicy metadata: annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/policy-for: <network_name>

ここでは、以下のようになります。

<network_name>

ネットワーク割り当て定義の名前を指定します。

23.4.2. クラスターのマルチネットワークポリシーの有効化

クラスター管理者は、クラスターでマルチネットワークポリシーのサポートを有効にすることができま す。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。

手順

1. 以下の YAML で multinetwork-enable-patch.yaml ファイルを作成します。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
useMultiNetworkPolicy: true
```

2. マルチネットワークポリシーを有効にするようにクラスターを設定します。

\$ oc patch network.operator.openshift.io cluster --type=merge --patch-file=multinetworkenable-patch.yaml

出力例

network.operator.openshift.io/cluster patched

23.4.3. マルチネットワークポリシーの使用

クラスター管理者は、マルチネットワークポリシーを作成、編集、表示、および削除することができま す。

23.4.3.1. 前提条件

クラスターのマルチネットワークポリシーサポートを有効にしている。

23.4.3.2. CLIを使用したマルチネットワークポリシーの作成

マルチネットワークポリシーを作成し、クラスターの namespace に許可される Ingress または egress ネットワークトラフィックを記述する詳細なルールを定義することができます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが適用される namespace で作業していること。

手順

- 1. ポリシールールを作成します。
 - a. <policy_name>.yaml ファイルを作成します。

\$ touch <policy name>.yaml

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

マルチネットワークポリシーのファイル名を指定します。

b. 作成したばかりのファイルで、以下の例のようなマルチネットワークポリシーを定義します。

すべての namespace のすべての Pod から ingress を拒否します。

これは基本的なポリシーであり、他のネットワークポリシーの設定によって許可されたクロス Pod トラフィック以外のすべてのクロス Pod ネットワーキングをブロックします。

```
apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1
kind: MultiNetworkPolicy
metadata:
    name: deny-by-default
    annotations:
    k8s.v1.cni.cncf.io/policy-for: <network_name>
spec:
    podSelector:
    ingress: []
```

ここでは、以下のようになります。

<network_name>

ネットワーク割り当て定義の名前を指定します。

同じ namespace のすべての Pod から ingress を許可します。

```
apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1
kind: MultiNetworkPolicy
metadata:
    name: allow-same-namespace
    annotations:
        k8s.v1.cni.cncf.io/policy-for: <network_name>
spec:
    podSelector:
    ingress:
    - from:
        - podSelector: {}
```

ここでは、以下のようになります。

<network_name>

ネットワーク割り当て定義の名前を指定します。

特定の namespace から1つの Pod への上りトラフィックを許可する

このポリシーは、**namespace-y** で実行されている Pod から **pod-a** というラベルの付いた Pod へのトラフィックを許可します。



ここでは、以下のようになります。

<network_name>

ネットワーク割り当て定義の名前を指定します。

サービスへのトラフィックを制限する

このポリシーを適用すると、app=bookstore と role=apiの両方のラベルを持つすべての Pod に、app=bookstore というラベルを持つ Pod のみがアクセスできるようになりま す。この例では、アプリケーションは、ラベル app=bookstore および role=api でマーク された REST API サーバーである可能性があります。

この例では、次のユースケースに対応します。

- サービスへのトラフィックを、それを使用する必要がある他のマイクロサービスのみに 制限します。
- データベースへの接続を制限して、それを使用するアプリケーションのみを許可します。

```
apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1
kind: MultiNetworkPolicy
metadata:
name: api-allow
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/policy-for: <network_name>
spec:
 podSelector:
  matchLabels:
   app: bookstore
   role: api
 ingress:
 - from:
   - podSelector:
      matchLabels:
       app: bookstore
```

ここでは、以下のようになります。

<network_name>

ネットワーク割り当て定義の名前を指定します。

2. マルチネットワークポリシーオブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc apply -f <policy_name>.yaml -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

マルチネットワークポリシーのファイル名を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

出力例

multinetworkpolicy.k8s.cni.cncf.io/deny-by-default created



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールのフォームから、クラスターの任意の namespace でネットワークポリシーを直 接作成できます。

23.4.3.3. マルチネットワークポリシーの編集

namespace のマルチネットワークポリシーを編集できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが存在する namespace で作業している。

手順

1. オプション: namespace のマルチネットワークポリシーオブジェクトをリスト表示するには、 以下のコマンドを入力します。



ここでは、以下のようになります。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

- 2. マルチネットワークポリシーオブジェクトを編集します。
 - マルチネットワークポリシーの定義をファイルに保存した場合は、ファイルを編集して必要な変更を加えてから、以下のコマンドを入力します。

\$ oc apply -n <namespace> -f <policy_file>.yaml

ここでは、以下のようになります。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

<policy_file>

ネットワークポリシーを含むファイルの名前を指定します。

マルチネットワークポリシーオブジェクトを直接更新する必要がある場合、以下のコマンドを入力できます。

\$ oc edit multi-networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

ネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

3. マルチネットワークポリシーオブジェクトが更新されていることを確認します。

\$ oc describe multi-networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

マルチネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールの Actions メニューのポリシーから、クラスターの任意の namespace でネット ワークポリシーを直接編集できます。

23.4.3.4. CLIを使用したマルチネットワークポリシーの表示

namespace のマルチネットワークポリシーを検査できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが存在する namespace で作業している。

手順

- namespace のマルチネットワークポリシーをリスト表示します。
 - namespace で定義されたマルチネットワークポリシーオブジェクトを表示するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get multi-networkpolicy

オプション:特定のマルチネットワークポリシーを検査するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc describe multi-networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

検査するマルチネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールのフォームから、クラスターの任意の namespace でネットワークポリシーを直 接表示できます。

23.4.3.5. CLI を使用したマルチネットワークポリシーの削除

namespace のマルチネットワークポリシーを削除できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが存在する namespace で作業している。

手順

• マルチネットワークポリシーオブジェクトを削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc delete multi-networkpolicy <policy_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

<policy_name>

マルチネットワークポリシーの名前を指定します。

<namespace>

オプション: オブジェクトが現在の namespace 以外の namespace に定義されている場合は namespace を指定します。

出力例

multinetworkpolicy.k8s.cni.cncf.io/default-deny deleted



注記

cluster-admin 権限で Web コンソールにログインする場合、YAML で、または Web コ ンソールの Actions メニューのポリシーから、クラスターの任意の namespace でネット ワークポリシーを直接削除できます。

23.4.3.6. デフォルトのすべてのマルチネットワーク拒否ポリシーの作成

これは基本的なポリシーであり、他のデプロイメントされたネットワークポリシーの設定によって許可 されたネットワークトラフィック以外のすべてのクロス Pod ネットワークをブロックします。この手 順では、デフォルトの deny-by-default ポリシーを適用します。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが適用される namespace で作業していること。

手順

 すべての namespace におけるすべての Pod からの ingress を拒否する deny-by-default ポリ シーを定義する次の YAML を作成します。YAML を deny-by-default.yaml ファイルに保存し ます。



- network_name: ネットワーク割り当て定義の名前を指定します。
- **podSelector:** は空です。これは、すべての Pod に一致することを意味します。したがっ
- . て、ポリシーはデフォルト namespace のすべての Pod に適用されます。



3

指定された **ingress** ルールはありません。これにより、着信トラフィックがすべての Pod にドロップされます。

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f deny-by-default.yaml

出力例

multinetworkpolicy.k8s.cni.cncf.io/deny-by-default created

23.4.3.7. 外部クライアントからのトラフィックを許可するマルチネットワークポリシーの作成

deny-by-default ポリシーを設定すると、外部クライアントからラベル **app=web** を持つ Pod へのトラフィックを許可するポリシーの設定に進むことができます。



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

この手順に従って、パブリックインターネットから直接、またはロードバランサーを使用して Pod に アクセスすることにより、外部サービスを許可するポリシーを設定します。トラフィックは、ラベル **app=web** を持つ Pod にのみ許可されます。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが適用される namespace で作業していること。

手順

 パブリックインターネットからのトラフィックが直接、またはロードバランサーを使用して Pod にアクセスできるようにするポリシーを作成します。YAML を web-allow-external.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1 kind: MultiNetworkPolicy metadata: name: web-allow-external namespace: default annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/policy-for: <network_name> spec: policyTypes: - Ingress podSelector: matchLabels: app: web ingress: - {}

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f web-allow-external.yaml

出力例

multinetworkpolicy.k8s.cni.cncf.io/web-allow-external created

このポリシーは、次の図に示すように、外部トラフィックを含むすべてのリソースからのトラフィック を許可します。



292_OpenShift_1122

23.4.3.8. すべての namespace からアプリケーションへのトラフィックを許可するマルチネッ トワークポリシーの作成



注記

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

この手順に従って、すべての namespace 内のすべての Pod から特定のアプリケーションへのトラフィックを許可するポリシーを設定します。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが適用される namespace で作業していること。

手順

1. すべての namespace のすべての Pod から特定のアプリケーションへのトラフィックを許可す るポリシーを作成します。YAML を web-allow-all-namespaces.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1 kind: MultiNetworkPolicy metadata: name: web-allow-all-namespaces namespace: default annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/policy-for: <network_name> spec: podSelector: matchLabels: app: web 1 policyTypes: - Ingress ingress: - from: - namespaceSelector: {} 2 デフォルトの namespace の app:web Pod にのみポリシーを適用します。 すべての namespace のすべての Pod を選択します。



注記

デフォルトでは、**namespaceSelector**の指定を省略した場合、namespace は選 択されません。つまり、ポリシーは、ネットワークポリシーがデプロイされてい る namespace からのトラフィックのみを許可します。

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f web-allow-all-namespaces.yaml

出力例

multinetworkpolicy.k8s.cni.cncf.io/web-allow-all-namespaces created

検証

1. 次のコマンドを入力して、default namespace で Web サービスを開始します。

\$ oc run web --namespace=default --image=nginx --labels="app=web" --expose --port=80

 次のコマンドを実行して、alpine イメージを secondary namespace にデプロイし、シェルを 開始します。

\$ oc run test-\$RANDOM --namespace=secondary --rm -i -t --image=alpine -- sh

3. シェルで次のコマンドを実行し、リクエストが許可されていることを確認します。

wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

<!DOCTYPE html>

<html> <head> <title>Welcome to nginx!</title> <style> html { color-scheme: light dark; } body { width: 35em; margin: 0 auto; font-family: Tahoma, Verdana, Arial, sans-serif; } </style> </head> <body> <h1>Welcome to nginx!</h1> If you see this page, the nginx web server is successfully installed and working. Further configuration is required. For online documentation and support please refer to nginx.org.
 Commercial support is available at nginx.com. Thank you for using nginx. </body>

23.4.3.9. namespace からアプリケーションへのトラフィックを許可するマルチネットワーク ポリシーの作成



注記

</html>

cluster-admin ロールを持つユーザーでログインしている場合、クラスター内の任意の namespace でネットワークポリシーを作成できます。

特定の namespace からラベル **app=web** を持つ Pod へのトラフィックを許可するポリシーを設定する には、次の手順に従います。以下の場合にこれを行うことができます。

- 運用データベースへのトラフィックを、運用ワークロードがデプロイされている namespace の みに制限します。
- 特定の namespace にデプロイされた監視ツールを有効にして、現在の namespace からメトリ クスをスクレイピングします。

前提条件

- クラスターが、NetworkPolicy オブジェクトをサポートするネットワークプラグインを使用している (例: mode: NetworkPolicy が設定された OpenShift SDN ネットワークプロバイダー)。 このモードは OpenShiftSDN のデフォルトです。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- マルチネットワークポリシーが適用される namespace で作業していること。

1. ラベルが **purpose=production** の特定の namespace 内にあるすべての Pod からのトラフィッ クを許可するポリシーを作成します。YAML を **web-allow-prod.yaml** ファイルに保存します。

ap kir	viVersion: k8s.cni.cncf.io/v1beta1 nd: MultiNetworkPolicy
me	etadata:
n	ame: web-allow-prod
n	amespace: default
a	Innotations:
00	K8S.VI.cnl.cnct.lo/policy-tor: <network_name></network_name>
sp	ec.
ρ	matchl abols:
	app: web
	app. web
μ -	Ingress
ir	ngress.
-	from:
	- namespaceSelector:
	matchLabels:
	purpose: production 2
1	デフォルトの namespace の app:web Pod にのみポリシーを適用します。
2	ラベルが purpose=production の namespace 内にある Pod のみにトラフィックを制限し ます。

- 2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。
 - \$ oc apply -f web-allow-prod.yaml

出力例

multinetworkpolicy.k8s.cni.cncf.io/web-allow-prod created

検証

1. 次のコマンドを入力して、default namespace で Web サービスを開始します。

\$ oc run web --namespace=default --image=nginx --labels="app=web" --expose --port=80

2. 次のコマンドを実行して、prod namespace を作成します。

\$ oc create namespace prod

3. 次のコマンドを実行して、prod namespace にラベルを付けます。

\$ oc label namespace/prod purpose=production

4. 次のコマンドを実行して、dev namespace を作成します。

\$ oc create namespace dev

5. 次のコマンドを実行して、dev namespace にラベルを付けます。

\$ oc label namespace/dev purpose=testing

6. 次のコマンドを実行して、**alpine** イメージを **dev** namespace にデプロイし、シェルを開始し ます。

\$ oc run test-\$RANDOM --namespace=dev --rm -i -t --image=alpine -- sh

7. シェルで次のコマンドを実行し、リクエストがブロックされていることを確認します。

wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

wget: download timed out

8. 次のコマンドを実行して、**alpine** イメージを **prod** namespace にデプロイし、シェルを開始し ます。

\$ oc run test-\$RANDOM --namespace=prod --rm -i -t --image=alpine -- sh

9. シェルで次のコマンドを実行し、リクエストが許可されていることを確認します。

wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

html
<html></html>
<head></head>
<title>Welcome to nginx!</title>
<style></td></tr><tr><td>html { color-scheme: light dark; }</td></tr><tr><td>body { width: 35em; margin: 0 auto;</td></tr><tr><td>font-family: Tahoma, Verdana, Arial, sans-serif; }</td></tr><tr><td></style>
<body></body>
<pre></pre>
working Further configuration is required
working. Further corrigulation is required.
For online documentation and support please refer to
nginx.org .
Commercial support is available at
nginx.com .
nginx.com .
nginx.com . Thank you for using nginx.
nginx.com . Thank you for using nginx.
nginx.com . Thank you for using nginx.

23.4.4. 関連情報

- ネットワークポリシーについて
- 複数ネットワークについて
- macvlan ネットワークの設定
- SR-IOV ネットワークデバイスの設定

23.5. POD の追加のネットワークへの割り当て

クラスターユーザーとして、Pod を追加のネットワークに割り当てることができます。

23.5.1. Pod の追加ネットワークへの追加

Pod を追加のネットワークに追加できます。Pod は、デフォルトネットワークで通常のクラスター関連のネットワークトラフィックを継続的に送信します。

Pod が作成されると、追加のネットワークが割り当てられます。ただし、Pod がすでに存在する場合は、追加のネットワークをこれに割り当てることはできません。

Pod が追加ネットワークと同じ namespace にあること。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- クラスターにログインする。

手順

- 1. アノテーションを **Pod** オブジェクトに追加します。以下のアノテーション形式のいずれかのみ を使用できます。
 - a. カスタマイズせずに追加ネットワークを割り当てるには、以下の形式でアノテーションを 追加します。<**network**> を、Pod に関連付ける追加ネットワークの名前に置き換えます。

metadata: annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: <network>[,<network>,...]

- 複数の追加ネットワークを指定するには、各ネットワークをコンマで区切ります。コンマの間にはスペースを入れないでください。同じ追加ネットワークを複数回指定した場合、Pod は複数のネットワークインターフェイスをそのネットワークに割り当てます。
- b. カスタマイズして追加のネットワークを割り当てるには、以下の形式でアノテーションを 追加します。

metadata: annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: |-




NetworkAttachmentDefinition オブジェクトによって定義される追加のネットワークの名前を指定します。



NetworkAttachmentDefinition オブジェクトが定義される namespace を指定します。



オプション: 192.168.17.1 などのデフォルトルートのオーバーライドを指定します。

2. Pod を作成するには、以下のコマンドを入力します。<name> を Pod の名前に置き換えます。



3. オプション: アノテーションが **Pod** CR に存在することを確認するには、 **<name>** を Pod の名 前に置き換えて、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pod <name> -o yaml

以下の例では、example-pod Pod が追加ネットワークの net1 に割り当てられています。

```
$ oc get pod example-pod -o yaml
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks: macvlan-bridge
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks-status: |- 1
   [{
      "name": "openshift-sdn",
      "interface": "eth0",
      "ips": [
         "10.128.2.14"
      ],
      "default": true,
      "dns": {}
   },{
      "name": "macvlan-bridge",
      "interface": "net1",
      "ips": [
        "20.2.2.100"
      ],
      "mac": "22:2f:60:a5:f8:00",
      "dns": {}
   }]
 name: example-pod
 namespace: default
spec:
```



k8s.v1.cni.cncf.io/networks-status パラメーターは、オブジェクトの JSON 配列です。 各オブジェクトは、Pod に割り当てられる追加のネットワークのステータスについて説明 します。アノテーションの値はプレーンテキストの値として保存されます。

23.5.1.1. Pod 固有のアドレスおよびルーティングオプションの指定

Pod を追加のネットワークに割り当てる場合、特定の Pod でそのネットワークに関するその他のプロ パティーを指定する必要がある場合があります。これにより、ルーティングの一部を変更することがで き、静的 IP アドレスおよび MAC アドレスを指定できます。これを実行するには、JSON 形式のアノ テーションを使用できます。

前提条件

- Pod が追加ネットワークと同じ namespace にあること。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- クラスターにログインすること。

手順

アドレスおよび/またはルーティングオプションを指定する間に Pod を追加のネットワークに追加する には、以下の手順を実行します。

1. Pod リソース定義を編集します。既存の Pod リソースを編集する場合は、以下のコマンドを実行してデフォルトエディターでその定義を編集します。<name> を、編集する Pod リソースの 名前に置き換えます。

\$ oc edit pod <name>

 Pod リソース定義で、k8s.v1.cni.cncf.io/networks パラメーターを Pod の metadata マッピン グに追加します。k8s.v1.cni.cncf.io/networks は、追加のプロパティーを指定するだけでな く、NetworkAttachmentDefinition カスタムリソース (CR) 名を参照するオブジェクト一覧の JSON 文字列を受け入れます。

metadata: annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: '[<network>[,<network>,...]]'



<network> を、以下の例にあるように JSON オブジェクトに置き換えます。一重引用符が必要です。

3. 以下の例では、アノテーションで default-route パラメーターを使用して、デフォルトルートを 持つネットワーク割り当てを指定します。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: example-pod

annotations:
k8s.v1.cni.cncf.io/networks: '[
{
"name": "net1"
},
{
"name": "net2", 1
"default-route": ["192.0.2.1"] 2
}]'
spec:
containers:
- name: example-pod
command: ["/bin/bash", "-c", "sleep 2000000000000"]
image: centos/tools
name キーは、Pod に関連付ける追加ネットワークの名前です。

default-route キーは、ルーティングテーブルに他のルーティングテーブルがない場合に、 ルーティングされるトラフィックに使用されるゲートウェイ値を指定します。複数の **default-route** キーを指定すると、Pod がアクティブでなくなります。

デフォルトのルートにより、他のルートに指定されていないトラフィックがゲートウェイにルーティン グされます。



重要

OpenShift Container Platform のデフォルトのネットワークインターフェイス以外のイン ターフェイスへのデフォルトのルートを設定すると、Pod 間のトラフィックについて予 想されるトラフィックが別のインターフェイスでルーティングされる可能性がありま す。

Pod のルーティングプロパティーを確認する場合、oc コマンドを Pod 内で ip コマンドを実行するために使用できます。

\$ oc exec -it <pod_name> -- ip route



注記

また、Pod の **k8s.v1.cni.cncf.io/networks-status** を参照して、JSON 形式の一覧のオ ブジェクトで **default-route** キーの有無を確認し、デフォルトルートが割り当てられてい る追加ネットワークを確認することができます。

Pod に静的 IP アドレスまたは MAC アドレスを設定するには、JSON 形式のアノテーションを使用でき ます。これには、この機能をとくに許可するネットワークを作成する必要があります。これは、CNO の rawCNIConfig で指定できます。

1. 以下のコマンドを実行して CNO CR を編集します。



\$ oc edit networks.operator.openshift.io cluster

以下の YAML は、CNO の設定パラメーターについて説明しています。

Cluster Network Operator YAML の設定

name: <name> 1 namespace: <namespace> 2 rawCNIConfig: '{ 3 ... }' type: Raw



作成している追加ネットワーク割り当ての名前を指定します。名前は指定された **namespace** 内で 一意である必要があります。



ネットワークの割り当てを作成する namespace を指定します。値を指定しない場合、**default** の namespace が使用されます。

3 以下のテンプレートに基づく CNI プラグイン設定を JSON 形式で指定します。

以下のオブジェクトは、macvlan CNI プラグインを使用して静的 MAC アドレスと IP アドレスを使用す るための設定パラメーターについて説明しています。

静的 IP および MAC アドレスを使用した macvlan CNI プラグイン JSON 設定オブジェクト

{
"cniVersion": "0.3.1",
"name": " <name>", 1</name>
"plugins": [{ 2
"type": "macvlan",
"capabilities": { "ips": true }, 3
"master": "eth0", 4
"mode": "bridge",
"ipam": {
"type": "static"
}
}, {
"capabilities": { "mac": true }, 5
"type": "tuning"
}]
}

1 作成する追加のネットワーク割り当ての名前を指定します。名前は指定された namespace 内で一 意である必要があります。

2 CNI プラグイン設定の配列を指定します。1つ目のオブジェクトは、macvlan プラグイン設定を指定し、2つ目のオブジェクトはチューニングプラグイン設定を指定します。

3 CNI プラグインのランタイム設定機能の静的 IP 機能を有効にするために要求が実行されるように 指定します。

👩 macvlan プラグインが使用するインターフェイスを指定します。

5 CNI プラグインの静的 MAC アドレス機能を有効にするために要求が実行されるように指定します。

上記のネットワーク割り当ては、特定の Pod に割り当てられる静的 IP アドレスと MAC アドレスを指 定するキーと共に、JSON 形式のアノテーションで参照できます。

以下を使用して Pod を編集します。

\$ oc edit pod <name>

静的 IP および MAC アドレスを使用した macvlan CNI プラグイン JSON 設定オブジェクト



▲ 上記の rawCNIConfig を作成するときに指定された <name> を使用します。

クサブネットマスクを含む IP アドレスを指定します。

MAC アドレスを指定します。



注記

静的 IP アドレスおよび MAC アドレスを同時に使用することはできません。これらは個別に使用することも、一緒に使用することもできます。

追加のネットワークを持つ Pod の IP アドレスと MAC プロパティーを検証するには、**oc** コマンドを使用して Pod 内で ip コマンドを実行します。

\$ oc exec -it <pod_name> -- ip a

23.6. 追加ネットワークからの POD の削除

クラスターユーザーとして、追加のネットワークから Pod を削除できます。

23.6.1. 追加ネットワークからの Pod の削除

Pod を削除するだけで、追加のネットワークから Pod を削除できます。

前提条件

- 追加のネットワークが Pod に割り当てられている。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

• クラスターにログインする。

手順

- Pod を削除するには、以下のコマンドを入力します。
 - \$ oc delete pod <name> -n <namespace>
 - <name> は Pod の名前です。
 - **<namespace>** は Pod が含まれる namespace です。

23.7. 追加ネットワークの編集

クラスター管理者は、既存の追加ネットワークの設定を変更することができます。

23.7.1. 追加ネットワーク割り当て定義の変更

クラスター管理者は、既存の追加ネットワークに変更を加えることができます。追加ネットワークに割り当てられる既存の Pod は更新されません。

前提条件

- クラスター用に追加のネットワークを設定している。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

クラスターの追加ネットワークを編集するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のコマンドを実行し、デフォルトのテキストエディターで Cluster Network Operator (CNO) CR を編集します。

\$ oc edit networks.operator.openshift.io cluster

- 2. additionalNetworksコレクションで、追加ネットワークを変更内容で更新します。
- 3. 変更を保存し、テキストエディターを終了して、変更をコミットします。
- オプション:以下のコマンドを実行して、CNO が NetworkAttachmentDefinition オブジェクト を更新していることを確認します。<network-name> を表示する追加ネットワークの名前に置 き換えます。CNO が NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを更新して変更内容が反映 されるまでに遅延が生じる可能性があります。

\$ oc get network-attachment-definitions <network-name> -o yaml

たとえば、以下のコンソールの出力は net1 という名前の NetworkAttachmentDefinition オブ ジェクトを表示します。

\$ oc get network-attachment-definitions net1 -o go-template='{{printf "%s\n" .spec.config}}' { "cniVersion": "0.3.1", "type": "macvlan",

"master": "ens5", "mode": "bridge", {"type":"static","routes":[{"dst":"0.0.0.0/0","gw":"10.128.2.1"}],"addresses": "ipam": [{"address":"10.128.2.100/23","gateway":"10.128.2.1"}],"dns":{"nameservers": ["172.30.0.10"],"domain":"us-west-2.compute.internal","search":["us-west-2.compute.internal"]}} }

23.8. 追加ネットワークの削除

クラスター管理者は、追加のネットワーク割り当てを削除できます。

23.8.1. 追加ネットワーク割り当て定義の削除

クラスター管理者は、追加ネットワークを OpenShift Container Platform クラスターから削除できま す。追加ネットワークは、割り当てられている Pod から削除されません。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

クラスターから追加ネットワークを削除するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のコマンドを実行して、デフォルトのテキストエディターで Cluster Network Operator (CNO)を編集します。

\$ oc edit networks.operator.openshift.io cluster

2. 削除しているネットワーク割り当て定義の additionalNetworks コレクションから設定を削除 し、CR を変更します。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: additionalNetworks: []

additionalNetworks コレクションの追加ネットワーク割り当てのみの設定マッピングを 削除する場合、空のコレクションを指定する必要があります。

- 3. 変更を保存し、テキストエディターを終了して、変更をコミットします。
- 4. オプション: 以下のコマンドを実行して、追加ネットワーク CR が削除されていることを確認し ます。

\$ oc get network-attachment-definition --all-namespaces

23.9. VRF へのセカンダリーネットワークの割り当て

クラスター管理者は、CNI VRF プラグインを使用して、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) ドメイン の追加ネットワークを設定できます。このプラグインが作成する仮想ネットワークは、指定した物理イ ンターフェイスに関連付けられます。

VRF インスタンスでセカンダリーネットワークを使用すると、次の利点があります。

ワークロードの分離

追加のネットワークの VRF インスタンスを設定して、ワークロードトラフィックを分離します。

セキュリティーの向上

VRF ドメイン内の分離されたネットワークパスを通じて、セキュリティーを向上させます。

マルチテナンシーのサポート

各テナントの VRF ドメイン内で、一意のルーティングテーブルを使用したネットワークセグメン テーションを通じて、マルチテナントをサポートします。

注記

VRF を使用するアプリケーションは、特定のデバイスに対してバインドする必要があり ます。一般的な使用方法として、ソケットに **SO_BINDTODEVICE** オプションを使用で きます。SO_BINDTODEVICE オプションは、渡されたインターフェイス名 (例: **eth1**) で 指定されたデバイスにソケットをバインドします。SO_BINDTODEVICE オプションを使 用するには、アプリケーションに CAP_NET_RAW 機能が必要です。

ip vrf exec コマンドを使用した VRF の使用は、OpenShift Container Platform Pod では サポートされません。VRF を使用するには、アプリケーションを VRF インターフェイス に直接バインドします。

関連情報

仮想ルーティングおよび転送について

23.9.1. CNI VRF プラグインを使用した追加のネットワーク割り当ての作成

Cluster Network Operator (CNO) は追加ネットワークの定義を管理します。作成する追加ネットワーク を指定する場合、CNO は **NetworkAttachmentDefinition** カスタムリソース (CR) を自動的に作成しま す。



注記

Cluster Network Operator が管理する **NetworkAttachmentDefinition** CR は編集しない でください。これを実行すると、追加ネットワークのネットワークトラフィックが中断 する可能性があります。

CNI VRF プラグインで追加のネットワーク割り当てを作成するには、以下の手順を実行します。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとして OpenShift クラスターにログインします。

手順

 以下のサンプル CR のように、追加のネットワーク割り当て用の Network カスタムリソース (CR)を作成し、追加ネットワークの rawCNIConfig 設定を挿入します。YAML を additionalnetwork-attachment.yaml ファイルとして保存します。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
 name: cluster
spec:
 additionalNetworks:
  - name: test-network-1
   namespace: additional-network-1
   type: Raw
   rawCNIConfig: '{
     "cniVersion": "0.3.1".
     "name": "macvlan-vrf",
     "plugins": [ 1
     {
      "type": "macylan",
      "master": "eth1",
      "ipam": {
        "type": "static",
        "addresses": [
        ł
           "address": "191.168.1.23/24"
        }
        1
      }
     },
      "type": "vrf", 2
      "vrfname": "vrf-1", 3
      "table": 1001 4
    }]
   }'
```

- plugins は一覧である必要があります。リストの最初の項目は、VRF ネットワークのベー スとなるセカンダリーネットワークである必要があります。一覧の2つ目の項目は、VRF プラグイン設定です。
- 2

type は vrf に設定する必要があります。

3

vrfname は、インターフェイスが割り当てられた VRF の名前です。これが Pod に存在しない場合は作成されます。

4

オプション: **table** はルーティングテーブル ID です。デフォルトで、 **tableid** パラメーター が使用されます。これが指定されていない場合、CNI は空のルーティングテーブル ID を VRF に割り当てます。

注記

VRF は、リソースが netdevice タイプの場合にのみ正常に機能します。

2. Network リソースを作成します。

\$ oc create -f additional-network-attachment.yaml

 以下のコマンドを実行して、CNO が NetworkAttachmentDefinition CR を作成していること を確認します。<namespace> を、ネットワーク割り当ての設定時に指定した namespace に置 き換えます (例: additional-network-1)。

\$ oc get network-attachment-definitions -n <namespace>

出力例





注記

CNO が CR を作成するまでに遅延が生じる可能性があります。

検証

- 1. Pod を作成し、VRF インスタンスを使用して追加のネットワークに割り当てます。
 - a. Pod リソースを定義する YAML ファイルを作成します。

pod-additional-net.yam ファイルの例

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: pod-additional-net
annotations:
k8s.v1.cni.cncf.io/networks: '[
{
"name": "test-network-1"
}
]'
spec:
containers:
- name: example-pod-1
command: ["/bin/bash", "-c", "sleep 9000000"]
image: centos:8
```

VRF インスタンスを使用する追加ネットワークの名前を指定します。

b. 次のコマンドを実行して、**Pod** リソースを作成します。

\$ oc create -f pod-additional-net.yaml

出力例

pod/test-pod created

Pod のネットワーク割り当てが VRF の追加ネットワークに接続されていることを確認します。
 Pod とのリモートセッションを開始し、次のコマンドを実行します。

\$ ip vrf show

出力例

 Name
 Table

 ----- vrf-1
 1001

3. VRF インターフェイスが追加インターフェイスのコントローラーであることを確認します。

\$ ip link

出力例

5: net1: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP> mtu 1500 qdisc noqueue master red state UP mode

第24章 ハードウェアネットワーク

24.1. SINGLE ROOT I/O VIRTUALIZATION (SR-IOV) ハードウェアネット ワークについて

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) 仕様は、単一デバイスを複数の Pod で共有できる PCI デバイス 割り当てタイプの標準です。

SR-IOV を使用すると、準拠したネットワークデバイス (ホストノードで物理機能 (PF) として認識される) を複数の Virtual Function (VF) にセグメント化することができます。VF は他のネットワークデバイスと同様に使用されます。デバイスの SR-IOV ネットワークデバイスドライバーは、VF がコンテナーで公開される方法を判別します。

- netdevice ドライバー: コンテナーの netns 内の通常のカーネルネットワークデバイス
- vfio-pci ドライバー: コンテナーにマウントされるキャラクターデバイス

SR-IOV ネットワークデバイスは、ベアメタルまたは Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) インフラ 上にインストールされた OpenShift Container Platform クラスターにネットワークを追加して、高帯域 または低遅延を確保する必要のあるアプリケーションに使用できます。

SR-IOV ネットワークのマルチネットワークポリシーを設定できます。これのサポートはテクノロジー プレビューであり、SR-IOV 追加ネットワークはカーネル NIC でのみサポートされます。データプレー ン開発キット (DPDK) アプリケーションではサポートされていません。



注記

SR-IOV ネットワークでマルチネットワークポリシーを作成しても、マルチネットワーク ポリシーが設定されていない SR-IOV ネットワークと比較して、アプリケーションに同 じパフォーマンスが提供されない場合があります。



重要

SR-IOV ネットワークのマルチネットワークポリシーは、テクノロジープレビュー機能の みです。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレベルアグ リーメント (SLA) の対象外であり、機能的に完全ではない場合があります。Red Hat は、実稼働環境でこれらを使用することを推奨していません。テクノロジープレビュー 機能は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィード バックを提供していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

次のコマンドを使用して、ノードで SR-IOV を有効にできます。

\$ oc label node <node_name> feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable="true"

24.1.1. SR-IOV ネットワークデバイスを管理するコンポーネント

SR-IOV Network Operator は SR-IOV スタックのコンポーネントを作成し、管理します。以下の機能を 実行します。

• SR-IOV ネットワークデバイスの検出および管理のオーケストレーション

- SR-IOV Container Network Interface (CNI)のNetworkAttachmentDefinitionカスタムリソー スの生成
- SR-IOV ネットワークデバイスプラグインの設定の作成および更新
- ノード固有の SriovNetworkNodeState カスタムリソースの作成
- 各 SriovNetworkNodeState カスタムリソースの spec.interfaces フィールドの更新

Operator は以下のコンポーネントをプロビジョニングします。

SR-IOV ネットワーク設定デーモン

SR-IOV Network Operator の起動時にワーカーノードにデプロイされるデーモンセット。デーモン は、クラスターで SR-IOV ネットワークデバイスを検出し、初期化します。

SR-IOV Network Operator Webhook

Operator カスタムリソースを検証し、未設定フィールドに適切なデフォルト値を設定する動的受付 コントローラー Webhook。

SR-IOV Network Resources Injector

SR-IOV VF などのカスタムネットワークリソースの要求および制限のある Kubernetes Pod 仕様の パッチを適用するための機能を提供する動的受付コントローラー Webhook。SR-IOV ネットワーク リソースインジェクターは、 Pod 内の最初のコンテナーのみに **resource** フィールドを自動的に追 加します。

SR-IOV ネットワークデバイスプラグイン

SR-IOV ネットワーク Virtual Function (VF) リソースの検出、公開、割り当てを実行するデバイスプ ラグイン。デバイスプラグインは、とりわけ物理デバイスでの制限されたリソースの使用を有効に するために Kubernetes で使用されます。デバイスプラグインは Kubernetes スケジューラーにリ ソースの可用性を認識させるため、スケジューラーはリソースが十分にあるノードで Pod をスケ ジュールできます。

SR-IOV CNI プラグイン

SR-IOV ネットワークデバイスプラグインから割り当てられる VF インターフェイスを直接 Pod に 割り当てる CNI プラグイン。

SR-IOV InfiniBand CNI プラグイン

SR-IOV ネットワークデバイスプラグインから割り当てられる InfiniBand (IB) VF インターフェイス を直接 Pod に割り当てる CNI プラグイン。



注記

SR-IOV Network Resources Injector および SR-IOV Network Operator Webhook は、デフォルトで有効にされ、**default** の **SriovOperatorConfig** CR を編集して無効にできます。SR-IOV Network Operator Admission Controller Webhook を無効にする場合は注意してください。トラブルシューティングなどの特定の状況下や、サポートされていないデバイスを使用する場合は、Webhook を無効にすることができます。

24.1.1.1. サポート対象のプラットフォーム

SR-IOV Network Operator は、以下のプラットフォームに対応しています。

- ベアメタル
- Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)

24.1.1.2. サポートされるデバイス

以下のネットワークインターフェイスコントローラーは、OpenShift Container Platform でサポートされています。

表24.1サポート対象のネットワークインターフェイスコントローラー

製造元	モデル	ベンダー ID	デバイス ID	
Broadcom	BCM57414	14e4	16d7	
Broadcom	BCM57508	14e4	1750	
Broadcom	BCM57504	14e4	1751	
Intel	X710	8086	1572	
Intel	XL710	8086	1583	
Intel	X710 Base T	8086	15ff	
Intel	XXV710	8086	158b	
Intel	E810-CQDA2	8086	1592	
Intel	E810-2CQDA2	8086	1592	
Intel	E810-XXVDA2	8086	159b	
Intel	E810-XXVDA4	8086	1593	
Mellanox	MT27700 Family [ConnectX-4]	15b3	1013	
Mellanox	MT27710 Family [ConnectX-4 Lx]	15b3	1015	
Mellanox	MT27800 Family [ConnectX-5]	15b3	1017	
Mellanox	MT28880 Family [ConnectX-5 Ex]	15b3	1019	
Mellanox	MT28908 Family [ConnectX-6]	15b3	101b	
Mellanox	MT2892 Family [ConnectX-6 Dx]	15b3	101d	
Mellanox	MT2894 Family [ConnectX-6 Lx]	15b3	101f	
Mellanox	ConnectX-6 NIC モードの MT42822 BlueField-2	15b3	a2d6	
Pensando ^[1]	lonic ドライバー用 DSC-25 デュアルポー ト 25G 分散サービスカード	0x1dd8	0x1002	

製造元	モデル	ベンダー ID	デバイス ID
Pensando ^[1]	lonic ドライバー用 DSC-100 デュアル ポート 100G 分散サービスカード	0x1dd8	0x1003
Silicom	STS ファミリー	8086	1591

 OpenShift SR-IOV はサポートされますが、SR-IOV を使用する際に SR-IOV CNI config ファイ ルを使用して静的な Virtual Function (VF) メディアアクセス制御 (MAC) アドレスを設定する必 要があります。



注記

サポートされているカードの最新リストおよび利用可能な互換性のある OpenShift Container Platform バージョンについては、Openshift Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) and PTP hardware networks Support Matrix を参照してください。

24.1.1.3. SR-IOV ネットワークデバイスの自動検出

SR-IOV Network Operator は、クラスターでワーカーノード上の SR-IOV 対応ネットワークデバイスを 検索します。Operator は、互換性のある SR-IOV ネットワークデバイスを提供する各ワーカーノード の SriovNetworkNodeState カスタムリソース (CR) を作成し、更新します。

CRにはワーカーノードと同じ名前が割り当てられます。status.interfaces 一覧は、ノード上のネット ワークデバイスについての情報を提供します。



重要

SriovNetworkNodeState オブジェクトは変更しないでください。Operator はこれらの リソースを自動的に作成し、管理します。

24.1.1.3.1. SriovNetworkNodeState オブジェクトの例

以下の YAML は、SR-IOV Network Operator によって作成される **SriovNetworkNodeState** オブジェクトの例です。

SriovNetworkNodeState オブジェクト

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetworkNodeState metadata: name: node-25 **1** namespace: openshift-sriov-network-operator ownerReferences: - apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 blockOwnerDeletion: true controller: true kind: SriovNetworkNodePolicy name: default spec: dpConfigVersion: "39824" interfaces: 2 - deviceID: "1017" driver: mlx5 core mtu: 1500 name: ens785f0 pciAddress: "0000:18:00.0" totalvfs: 8 vendor: 15b3 - deviceID: "1017" driver: mlx5_core mtu: 1500 name: ens785f1 pciAddress: "0000:18:00.1" totalvfs: 8 vendor: 15b3 - deviceID: 158b driver: i40e mtu: 1500 name: ens817f0 pciAddress: 0000:81:00.0 totalvfs: 64 vendor: "8086" - deviceID: 158b driver: i40e mtu: 1500 name: ens817f1 pciAddress: 0000:81:00.1 totalvfs: 64 vendor: "8086" - deviceID: 158b driver: i40e mtu: 1500 name: ens803f0 pciAddress: 0000:86:00.0 totalvfs: 64 vendor: "8086" syncStatus: Succeeded

name フィールドの値はワーカーノードの名前と同じです。

interfaces スタンザには、ワーカーノード上の Operator によって検出されるすべての SR-IOV デバイスの一覧が含まれます。

24.1.1.4. Pod での Virtual Function (VF)の使用例

SR-IOV VF が割り当てられている Pod で、Remote Direct Memory Access (RDMA) または Data Plane Development Kit (DPDK) アプリケーションを実行できます。

以下の例では、RDMA モードで Virtual Function (VF) を使用する Pod を示しています。

RDMA モードを使用する Pod 仕様

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: rdma-app annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: sriov-rdma-mlnx spec: containers: - name: testpmd image: <RDMA_image> imagePullPolicy: IfNotPresent securityContext: runAsUser: 0 capabilities: add: ["IPC_LOCK","SYS_RESOURCE","NET_RAW"] command: ["sleep", "infinity"]

以下の例は、DPDK モードの VF のある Pod を示しています。

DPDK モードを使用する Pod 仕様

apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: dpdk-app
annotations:
k8s.v1.cni.cncf.io/networks: sriov-dpdk-net
spec:
containers:
- name: testpmd
image: <dpdk_image></dpdk_image>
securityContext:
runAsUser: 0
capabilities:
add: ["IPC_LOCK","SYS_RESOURCE","NET_RAW"]
volumeMounts:
 mountPath: /dev/hugepages
name: hugepage
resources:
limits:
memory: "1Gi"
cpu: "2"
hugepages-1Gi: "4Gi"
requests:
memory: "1Gi"
cpu: "2"
hugepages-1Gi: "4Gi"
command: ["sleep", "infinity"]
volumes:
- name: hugepage
emptyDir:
medium: HugePages

24.1.1.5. コンテナーアプリケーションで使用する DPDK ライブラリー

オプションライブラリー の **app-netutil** は、その Pod 内で実行されるコンテナーから Pod についての ネットワーク情報を収集するための複数の API メソッドを提供します。 このライブラリーは、DPDK (Data Plane Development Kit) モードの SR-IOV Virtual Function (VF) のコ ンテナーへの統合を支援します。このライブラリーは Golang API と C API の両方を提供します。

現時点で3つの API メソッドが実装されています。

GetCPUInfo()

この機能は、コンテナーで利用可能な CPU を判別し、リストを返します。

GetHugepages()

この機能は、各コンテナーの **Pod** 仕様で要求される huge page メモリーの量を判別し、値を返します。

GetInterfaces()

この機能は、コンテナーのインターフェイスセットを判別し、インターフェイスタイプとタイプ固 有のデータと共にリストを返します。戻り値には、インターフェイスのタイプと、各インターフェ イスのタイプ固有のデータが含まれます。

ライブラリーのリポジトリーには、コンテナーイメージ dpdk-app-centos をビルドするためのサンプ ル Dockerfile が含まれます。コンテナーイメージは、Pod 仕様の環境変数に応じて、l2fwd、l3wd また は testpmd の DPDK サンプルアプリケーションのいずれかを実行できます。コンテナーイメージ は、app-netutil ライブラリーをコンテナーイメージ自体に統合する例を提供します。ライブラリーを init コンテナーに統合することもできます。init コンテナーは必要なデータを収集し、データを既存の DPDK ワークロードに渡すことができます。

24.1.1.6. Downward APIの Huge Page リソースの挿入

Pod 仕様に Huge Page のリソース要求または制限が含まれる場合、Network Resources Injector は Downward API フィールドを Pod 仕様に自動的に追加し、Huge Page 情報をコンテナーに提供しま す。

Network Resources Injector は、**podnetinfo** という名前のボリュームを追加し、Pod の各コンテナー用 に /**etc/podnetinfo** にマウントされます。ボリュームは Downward API を使用し、Huge Page の要求お よび制限についてのファイルを追加します。ファイルの命名規則は以下のとおりです。

- /etc/podnetinfo/hugepages_1G_request_<container-name>
- /etc/podnetinfo/hugepages_1G_limit_<container-name>
- /etc/podnetinfo/hugepages_2M_request_<container-name>
- /etc/podnetinfo/hugepages_2M_limit_<container-name>

直前の一覧で指定されているパスは、**app-netutil** ライブラリーと互換性があります。デフォルトで、 ライブラリーは、/**etc/podnetinfo** ディレクトリーのリソース情報を検索するように設定されます。 Downward API パス項目を手動で指定する選択をする場合、**app-netutil** ライブラリーは前述の一覧のパ スに加えて以下のパスを検索します。

- /etc/podnetinfo/hugepages_request
- /etc/podnetinfo/hugepages_limit
- /etc/podnetinfo/hugepages_1G_request
- /etc/podnetinfo/hugepages_1G_limit
- /etc/podnetinfo/hugepages_2M_request

• /etc/podnetinfo/hugepages_2M_limit

Network Resources Injector が作成できるパスと同様に、前述の一覧のパスの末尾にはオプションで_<**container-name>** 接尾辞を付けることができます。

24.1.2. 関連情報

マルチネットワークポリシーの設定

24.1.3. 次のステップ

- SR-IOV Network Operator のインストール
- オプション: SR-IOV Network Operator の設定
- SR-IOV ネットワークデバイスの設定
- OpenShift Virtualization を使用する場合: 仮想マシンの SR-IOV ネットワークへの接続
- SR-IOV ネットワーク割り当ての設定
- Pod の SR-IOV の追加ネットワークへの追加

24.2. SR-IOV NETWORK OPERATOR のインストール

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ネットワーク Operator をクラスターにインストールし、SR-IOV ネットワークデバイスとネットワークの割り当てを管理できます。

24.2.1. SR-IOV Network Operator のインストール

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform CLI または Web コンソールを使用して SR-IOV Network Operator をインストールできます。

24.2.1.1. CLI: SR-IOV Network Operator のインストール

クラスター管理者は、CLIを使用して Operator をインストールできます。

前提条件

- SR-IOV に対応するハードウェアを持つノードでベアメタルハードウェアにインストールされ たクラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- **cluster-admin** 権限を持つアカウント。

手順

1. **openshift-sriov-network-operator** namespace を作成するには、以下のコマンドを入力しま す。

\$ cat << EOF| oc create -f apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: openshift-sriov-network-operator annotations: workload.openshift.io/allowed: management EOF

2. OperatorGroup CR を作成するには、以下のコマンドを実行します。

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
    name: sriov-network-operators
    namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
    targetNamespaces:
    - openshift-sriov-network-operator
EOF</pre>
```

- 3. SR-IOV Network Operator にサブスクライブします。
 - a. 以下のコマンドを実行して OpenShift Container Platform のメジャーおよびマイナーバー ジョンを取得します。これは、次の手順の **channel** の値に必要です。

\$ OC_VERSION=\$(oc version -o yaml | grep openshiftVersion | \
grep -o '[0-9]*[.][0-9]*' | head -1)

b. SR-IOV Network Operator の Subscription CR を作成するには、以下のコマンドを入力します。

```
$ cat << EOF| oc create -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
    name: sriov-network-operator-subscription
    namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
    channel: "${OC_VERSION}"
    name: sriov-network-operator
    source: redhat-operators
    sourceNamespace: openshift-marketplace
EOF</pre>
```

4. Operator がインストールされていることを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get csv -n openshift-sriov-network-operator \
 -o custom-columns=Name:.metadata.name,Phase:.status.phase

出力例

Name Phase sriov-network-operator.4.12.0-202310121402 Succeeded

24.2.1.2. Web コンソール: SR-IOV Network Operator のインストール

クラスター管理者は、Web コンソールを使用して Operator をインストールできます。

前提条件

- SR-IOV に対応するハードウェアを持つノードでベアメタルハードウェアにインストールされ たクラスター。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つアカウント。

手順

- 1. SR-IOV Network Operator をインストールします。
 - a. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators** → **OperatorHub** をクリックします。
 - b. 利用可能な Operator の一覧から SR-IOV Network Operator を選択してから Install をク リックします。
 - c. Install Operator ページの Installed Namespace で、Operator recommended Namespace を選択します。
 - d. Install をクリックします。
- 2. SR-IOV Network Operator が正常にインストールされていることを確認します。
 - a. Operators → Installed Operators ページに移動します。
 - b. Status が InstallSucceeded の状態で、SR-IOV Network Operator が openshift-sriovnetwork-operator プロジェクトに一覧表示されていることを確認します。



注記

インストール時に、 Operator は Failed ステータスを表示する可能性があり ます。インストールが後に InstallSucceeded メッセージを出して正常に実 行される場合は、Failed メッセージを無視できます。

Operator がインストール済みとして表示されない場合に、さらにトラブルシューティング を実行します。

- Operator Subscriptions および Install Plans タブで、Status の下の失敗またはエラーの有無を確認します。
- Workloads → Pods ページに移動し、openshift-sriov-network-operator プロジェクト で Pod のログを確認します。
- YAML ファイルの namespace を確認してください。アノテーションが抜けている場合 は、次のコマンドを使用して、アノテーショ ンworkload.openshift.io/allowed=management を Operator namespace に追加でき ます。

\$ oc annotate ns/openshift-sriov-network-operator workload.openshift.io/allowed=management



注記

シングルノード OpenShift クラスターの場合は、namespace にアノ テーション **workload.openshift.io/allowed=management** が必要で す。

24.2.2. 次のステップ

• オプション: SR-IOV Network Operator の設定

24.3. SR-IOV NETWORK OPERATOR の設定

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ネットワーク Operator は、クラスターで SR-IOV ネットワー クデバイスおよびネットワーク割り当てを管理します。

24.3.1. SR-IOV Network Operator の設定



重要

通常、SR-IOV Network Operator 設定を変更する必要はありません。デフォルト設定 は、ほとんどのユースケースで推奨されます。Operator のデフォルト動作がユースケー スと互換性がない場合にのみ、関連する設定を変更する手順を実行します。

SR-IOV Network Operator は **SriovOperatorConfig.sriovnetwork.openshift.io** CustomResourceDefinition リソースを追加します。Operator は、**openshift-sriov-network-operator** namespace に **default** という名前の SriovOperatorConfig カスタムリソース (CR) を自動的に作成しま す。



注記

default CR には、クラスターの SR-IOV Network Operator 設定が含まれます。Operator 設定を変更するには、この CR を変更する必要があります。

24.3.1.1. SR-IOV Network Operator config カスタムリソース

sriovoperatorconfig カスタムリソースのフィールドは、以下の表で説明されています。

表24.2 SR-IOV Network Operator config カスタムリソース

フィールド	型	説明
metadata.name	string	SR-IOV Network Operator インスタンスの名前を指定します。 デフォルト値は default です。別の値を設定しないでくださ い。
metadata.name space	string	SR-IOV Network Operator インスタンスの namespace を指定し ます。デフォルト値は openshift-sriov-network-operator です。別の値を設定しないでください。

フィールド	型	説明
spec.configDae monNodeSelect or	string	選択されたノードで SR-IOV Network Config Daemon のスケ ジューリングを制御するノードの選択オプションを指定しま す。デフォルトでは、このフィールドは設定されておらず、 Operator はワーカーノードに SR-IOV Network Config デーモン セットを配置します。
spec.disableDra in	boolean	新しいポリシーを適用してノードに NIC を設定する時に、ノー ドドレインプロセスを無効にするか、有効にするかを指定しま す。このフィールドを true に設定すると、ソフトウェアの開発 や OpenShift Container Platform の単一ノードへのインストー ルが容易になります。デフォルトでは、このフィールドは設定 されていません。 シングルノードクラスターの場合は、Operator のインストール 後にこのフィールドを true に設定します。このフィールドは必 ず true に設定してください。
spec.enablelnje ctor	boolean	Network Resources Injector デーモンセットを有効にするか無効 にするかを指定します。デフォルトでは、このフィールドは true に設定されています。
spec.enableOpe ratorWebhook	boolean	Operator Admission Controller の Webhook デーモンセットを有 効にするか無効にするかを指定します。デフォルトでは、この フィールドは true に設定されています。
spec.logLevel	integer	Operator のログの冗長度を指定します。 0 に設定すると、基本 的なログのみを表示します。 2 に設定すると、利用可能なすべ てのログが表示されます。デフォルトでは、このフィールドは 2 に設定されています。

24.3.1.2. Network Resources Injector について

Network Resources Injector は Kubernetes Dynamic Admission Controller アプリケーションです。これ は、以下の機能を提供します。

- SR-IOV リソース名を SR-IOV ネットワーク割り当て定義アノテーションに従って追加するための、Pod 仕様でのリソース要求および制限の変更。
- Pod のアノテーション、ラベル、および Huge Page の要求および制限を公開するための Downward API ボリュームでの Pod 仕様の変更。Pod で実行されるコンテナーは、公開される 情報に /etc/podnetinfo パスでファイルとしてアクセスできます。

デフォルトで、Network Resources Injector は SR-IOV Network Operator によって有効にされ、すべて のコントロールプレーンノードでデーモンセットとして実行されます。以下は、3 つのコントロールプ レーンノードを持つクラスターで実行される Network Resources Injector Pod の例です。

\$ oc get pods -n openshift-sriov-network-operator

出力例

NAME	READY	STA	TUS	RES	STARTS	AGE
network-resources-injector-5c	z5p	1/1	Runn	ing	0	10m
network-resources-injector-dw	vqpx	1/1	Runr	ning	0	10m
network-resources-injector-lkt	z5 1	1/1	Runnir	ng () 1	0m

24.3.1.3. SR-IOV Network Operator Admission Controller Webhook について

SR-IOV Network Operator Admission Controller Webbook は Kubernetes Dynamic Admission Controller アプリケーションです。これは、以下の機能を提供します。

- 作成時または更新時の SriovNetworkNodePolicy CR の検証
- CRの作成または更新時の priority および deviceType フィールドのデフォルト値の設定による SriovNetworkNodePolicy CRの変更

デフォルトで、SR-IOV Network Operator Admission Controller Webhook は Operator によって有効に され、すべてのコントロールプレーンノードでデーモンセットとして実行されます。



注記

SR-IOV Network Operator Admission Controller Webhook を無効にする場合は注意して ください。トラブルシューティングなどの特定の状況下や、サポートされていないデバ イスを使用する場合は、Webhook を無効にすることができます。サポート対象外のデバ イスの設定については、サポート対象外の NIC を使用するための SR-IOV Network Operator の設定 を参照してください。

以下は、3 つのコントロールプレーンノードを持つクラスターで実行される Operator Admission Controller Webhook Pod の例です。

\$ oc get pods -n openshift-sriov-network-operator

出力例

NAME	READY STATUS RESTARTS AG	Е
operator-webhook-9jkw6	1/1 Running 0 16m	
operator-webhook-kbr5p	1/1 Running 0 16m	
operator-webhook-rpfrl	1/1 Running 0 16m	

24.3.1.4. カスタムノードセレクターについて

SR-IOV Network Config デーモンは、クラスターノード上の SR-IOV ネットワークデバイスを検出し、 設定します。デフォルトで、これはクラスター内のすべての **worker** ノードにデプロイされます。ノー ドラベルを使用して、SR-IOV Network Config デーモンが実行するノードを指定できます。

24.3.1.5. Network Resources Injector の無効化または有効化

デフォルトで有効にされている Network Resources Injector を無効にするか、有効にするには、以下の 手順を実行します。

前提条件

• OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- SR-IOV Network Operator がインストールされていること。

手順

- enableInjector フィールドを設定します。<value> を false に置き換えて機能を無効にする か、true に置き換えて機能を有効にします。
 - \$ oc patch sriovoperatorconfig default \
 --type=merge -n openshift-sriov-network-operator \
 --patch '{ "spec": { "enableInjector": <value> } }'

ヒント

または、以下の YAML を適用して Operator を更新することもできます。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovOperatorConfig metadata: name: default namespace: openshift-sriov-network-operator spec: enableInjector: <value>

24.3.1.6. SR-IOV Network Operator Admission Controller Webhook の無効化または有効化

デフォルトで有効化されている受付コントローラー Webhook を無効化または有効化するには、以下の 手順を実行します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- SR-IOV Network Operator がインストールされていること。

手順

- enableOperatorWebhook フィールドを設定します。<value> を false に置き換えて機能を無効するか、true に置き換えて機能を有効にします。
 - \$ oc patch sriovoperatorconfig default --type=merge \
 -n openshift-sriov-network-operator \
 --patch '{ "spec": { "enableOperatorWebhook": <value> } }'

ヒント

または、以下の YAML を適用して Operator を更新することもできます。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovOperatorConfig metadata: name: default namespace: openshift-sriov-network-operator spec: enableOperatorWebhook: <value>

24.3.1.7. SRIOV Network Config Daemon のカスタム NodeSelector の設定

SR-IOV Network Config デーモンは、クラスターノード上の SR-IOV ネットワークデバイスを検出し、 設定します。デフォルトで、これはクラスター内のすべての **worker** ノードにデプロイされます。ノー ドラベルを使用して、SR-IOV Network Config デーモンが実行するノードを指定できます。

SR-IOV Network Config デーモンがデプロイされるノードを指定するには、以下の手順を実行します。



重要

configDaemonNodeSelector フィールドを更新する際に、SR-IOV Network Config デー モンがそれぞれの選択されたノードに再作成されます。デーモンが再作成されている 間、クラスターのユーザーは新規の SR-IOV Network ノードポリシーを適用したり、新 規の SR-IOV Pod を作成したりできません。

手順

• Operator のノードセレクターを更新するには、以下のコマンドを入力します。

```
$ oc patch sriovoperatorconfig default --type=json \
-n openshift-sriov-network-operator \
--patch '[{
    "op": "replace",
    "path": "/spec/configDaemonNodeSelector",
    "value": {<node_label>}
  }]'
```

<node_label> を適用するラベルに置き換えます (例: "node-role.kubernetes.io/worker": "")。

ヒント

または、以下の YAML を適用して Operator を更新することもできます。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovOperatorConfig
metadata:
name: default
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
configDaemonNodeSelector:
<node_label>
```

24.3.1.8. 単一ノードのインストール用の SR-IOV Network Operator の設定

デフォルトでは、SR-IOV Network Operator は、ポリシーを変更するたびに、ノードからワークロード をドレイン (解放) します。Operator は、このアクションを実行して、再設定する前に Virtual Function を使用しているワークロードがないことを確認します。

1つのノードにインストールする場合には、ワークロードを受信するノードは他にありません。そのため、Operator は、単一のノードからワークロードがドレインされないように設定する必要があります。



重要

以下の手順を実行してワークロードのドレインを無効にした後に、SR-IOV ネットワーク インターフェイスを使用しているワークロードを削除してから SR-IOV ネットワーク ノードのポリシーを変更する必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- SR-IOV Network Operator がインストールされていること。

手順

• disable Drain フィールドを true に設定するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch sriovoperatorconfig default --type=merge \
 -n openshift-sriov-network-operator \
 --patch '{ "spec": { "disableDrain": true } }'

ヒント

または、以下の YAML を適用して Operator を更新することもできます。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovOperatorConfig metadata: name: default namespace: openshift-sriov-network-operator spec: disableDrain: true

24.3.1.9. ホステッドコントロールプレーン用の SR-IOV Operator のデプロイ



重要

ホストされたコントロールプレーンは、テクノロジープレビュー機能としてのみ利用で きます。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレベルアグ リーメント (SLA)の対象外であり、機能的に完全ではない場合があります。Red Hat は、実稼働環境でこれらを使用することを推奨していません。テクノロジープレビュー 機能は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィード バックを提供していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

ホスティングサービスクラスターを設定してデプロイすると、ホストされたクラスターで SR-IOV Operator へのサブスクリプションを作成できます。SR-IOV Pod は、コントロールプレーンではなく ワーカーマシンで実行されます。

前提条件

ホストされたクラスターを 設定してデプロイ した。

手順

1. namespace と Operator グループを作成します。

```
apiVersion: v1
kind: Namespace
metadata:
name: openshift-sriov-network-operator
---
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
name: sriov-network-operators
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
targetNamespaces:
- openshift-sriov-network-operator
```

2. SR-IOV Operator へのサブスクリプションを作成します。

```
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
name: sriov-network-operator-subsription
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
channel: "4.12"
name: sriov-network-operator
config:
nodeSelector:
node-role.kubernetes.io/worker: ""
source: s/qe-app-registry/redhat-operators
sourceNamespace: openshift-marketplace
```

ТХШ

1. SR-IOV Operator の準備ができていることを確認するには、次のコマンドを実行し、結果の出 力を表示します。

\$ oc get csv -n openshift-sriov-network-operator

出力例

NAMEDISPLAYVERSIONREPLACESPHASEsriov-network-operator.4.12.0-202211021237SR-IOV Network Operator4.12.0-202211021237sriov-network-operator.4.12.0-202210290517Succeeded

2. SR-IOV Pod がデプロイされていることを確認するには、次のコマンドを実行します。

\$ oc get pods -n openshift-sriov-network-operator

24.3.2. 次のステップ

• SR-IOV ネットワークデバイスの設定

24.4. SR-IOV ネットワークデバイスの設定

クラスターで Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) デバイスを設定できます。

24.4.1. SR-IOV ネットワークノード設定オブジェクト

SR-IOV ネットワークノードポリシーを作成して、ノードの SR-IOV ネットワークデバイス設定を指定 します。ポリシーの API オブジェクトは **sriovnetwork.openshift.io** API グループの一部です。

以下の YAML は SR-IOV ネットワークノードポリシーについて説明しています。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetworkNodePolicy metadata: name: <name> 1 namespace: openshift-sriov-network-operator 2 spec: resourceName: < sriov resource name > 3 nodeSelector: feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true" 4 priority: <priority> 5 mtu: <mtu> 6 needVhostNet: false 7 numVfs: <num> 8 nicSelector: 9 vendor: "<vendor code>" 10 deviceID: "<device_id>" 11 pfNames: ["<pf_name>", ...] 12 rootDevices: ["<pci_bus_id>", ...] 13 netFilter: "<filter string>" 14

deviceType: <device_type> 15 isRdma: false 16 linkType: <link_type> 17 eSwitchMode: <mode> 18

1

カスタムリソースオブジェクトの名前。

SR-IOV Network Operator がインストールされている namespace。

3 SR-IOV ネットワークデバイスプラグインのリソース名。1つのリソース名に複数の SR-IOV ネットワークポリシーを作成できます。

名前を指定するときは、resourceName で使用できる構文式 **^a-zA-Z0-9_+\$** を必ず使用してくだ さい。

4 ノードセレクターは設定するノードを指定します。選択したノード上の SR-IOV ネットワークデバ イスのみが設定されます。SR-IOV Container Network Interface (CNI) プラグインおよびデバイス プラグインは、選択したノードにのみデプロイされます。



重要

SR-IOV Network Operator は、ノードネットワーク設定ポリシーを順番にノードに 適用します。ノードネットワーク設定ポリシーを適用する前に、SR-IOV Network Operator は、ノードのマシン設定プール (MCP) が **Degraded** または **Updating** な どの正常ではない状態にないか確認します。ノード正常ではない MCP にある場 合、ノードネットワーク設定ポリシーをクラスター内のすべての対象ノードに適用 するプロセスは、MCP が正常な状態に戻るまで一時停止します。

正常でない MCP 内にあるノードが、他のノード (他の MCP 内のノードを含む) に ノードネットワーク設定ポリシーを適用することを阻害しないようにするには、 MCP ごとに別のノードネットワーク設定ポリシーを作成する必要があります。

- 5 オプション: 優先度は 0 から 99 までの整数値で指定されます。値が小さいほど優先度が高くなり ます。たとえば、10 の優先度は 99 よりも高くなります。デフォルト値は 99 です。
- 6 オプション: Virtual Function (VF)の最大転送単位 (MTU)。MTUの最大値は、複数の異なるネット ワークインターフェイスコントローラー (NIC)に応じて異なります。

重要

デフォルトのネットワークインターフェイス上に仮想機能を作成する場合は、MTU がクラスター MTU と一致する値に設定されていることを確認してください。

- オプション: /dev/vhost-net デバイスを Pod にマウントするには、 needVhostNet を true に設定 します。Data Plane Development Kit(DPDK) と共にマウントされた /dev/vhost-net デバイスを使 用して、トラフィックをカーネルネットワークスタックに転送します。
- 8 SR-IOV 物理ネットワークデバイス用に作成する Virtual Function (VF)の数。Intel ネットワークインターフェイスコントローラー (NIC)の場合、VFの数はデバイスがサポートする VFの合計よりも大きくすることはできません。Mellanox NICの場合、VFの数は 128 よりも大きくすることはできません。
- 9 NIC セレクターは、Operator が設定するデバイスを特定します。すべてのパラメーターの値を指定する必要はありません。意図せずにデバイスを選択しないように、ネットワークデバイスを極めて正確に特定することが推奨されます。

rootDevices を指定する場合、vendor、deviceID、または pfName の値も指定する必要がありま す。pfNames および rootDevices の両方を同時に指定する場合、それらが同一のデバイスを参照 していることを確認します。netFilter の値を指定する場合、ネットワーク ID は一意の ID である ためにその他のパラメーターを指定する必要はありません。

- 10 オプション: SR-IOV ネットワークデバイスのベンダーの 16 進数コード。許可される値は 8086 お よび 15b3 のみになります。
- 11 オプション: SR-IOV ネットワークデバイスのデバイスの 16 進数コード。たとえば、**101b** は Mellanox ConnectX-6 デバイスのデバイス ID です。

p オプション:1つ以上のデバイスの物理機能 (PF) 名の配列。

- 13 オプション: デバイスの PF 用の1つ以上の PCI バスアドレスの配列。0000:02:00.1 という形式で アドレスを指定します。
- 14 オプション: プラットフォーム固有のネットワークフィルター。サポートされるプラットフォーム は Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) のみです。許可される値

 - を、/var/config/openstack/latest/network_data.json メタデータファイルの値に置き換えます。
- 15 オプション: Virtual Function (VF) のドライバータイプ。許可される値は **netdevice** および **vfiopci** のみです。デフォルト値は **netdevice** です。

Mellanox NIC をベアメタルノードの DPDK モードで機能させるには、**netdevice** ドライバータイ プを使用し、**isRdma** を **true** に設定します。

16 オプション: Remote Direct Memory Access (RDMA) モードを有効にするかどうかを設定します。 デフォルト値は **false** です。

isRdma パラメーターが **true** に設定される場合、引き続き RDMA 対応の VF を通常のネットワー クデバイスとして使用できます。デバイスはどちらのモードでも使用できます。

isRdma を **true** に設定し、追加の **needVhostNet** を **true** に設定して、Fast Datapath DPDK アプ リケーションで使用する Mellanox NIC を設定します。

17 オプション: VF のリンクタイプ。イーサネットのデフォルト値は **eth** です。InfiniBand の場合、この値を ib に変更します。

linkType が **ib** に設定されている場合、SR-IOV Network Operator Webhook によって **isRdma** は **true** に自動的に設定されます。**linkType** が **ib** に設定されている場合、**deviceType** は **vfio-pci** に 設定できません。

SriovNetworkNodePolicy の linkType を eth に設定しないでください。デバイスプラグインによって報告される使用可能なデバイスの数が正しくなくなる可能性があります。

18 オプション: NIC デバイスモード。許可される値は、legacy または switchdev のみです。

eSwitchMode を legacy に設定すると、デフォルトの SR-IOV 動作が有効になります。

eSwitchMode を switchdev に設定すると、ハードウェアオフロードが有効になります。

24.4.1.1. SR-IOV ネットワークノードの設定例

以下の例では、InfiniBand デバイスの設定について説明します。

InfiniBand デバイスの設定例

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
 name: policy-ib-net-1
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 resourceName: ibnic1
 nodeSelector:
  feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true"
 numVfs: 4
 nicSelector:
  vendor: "15b3"
  deviceID: "101b"
  rootDevices:
   - "0000:19:00.0"
 linkType: ib
 isRdma: true
```

以下の例では、RHOSP 仮想マシンの SR-IOV ネットワークデバイスの設定について説明します。

仮想マシンの SR-IOV デバイスの設定例

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
name: policy-sriov-net-openstack-1
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
resourceName: sriovnic1
nodeSelector:
feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true"
numVfs: 1 1
nicSelector:
vendor: "15b3"
deviceID: "101b"
netFilter: "openstack/NetworkID:ea24bd04-8674-4f69-b0ee-fa0b3bd20509" 2
```

仮想マシンのノードネットワークポリシーを設定する際に、numVfs フィールドは常に1に設定されます。

2 netFilter フィールドは、仮想マシンが RHOSP にデプロイされる際にネットワーク ID を参照する 必要があります。netFilter の有効な値は、SriovNetworkNodeState オブジェクトから選択できま す。

24.4.1.2. SR-IOV デバイスの Virtual Function (VF) パーティション設定

Virtual Function (VF) を同じ物理機能 (PF) から複数のリソースプールに分割する必要がある場合があり ます。たとえば、VF の一部をデフォルトドライバーで読み込み、残りの VF を **vfio-pci** ドライバーで 読み込む必要がある場合などです。このようなデプロイメントでは、SriovNetworkNodePolicy カスタ ムリソース (CR) の **pfNames** セレクターは、**<pfname>#<first_vf>-<last_vf>** という形式を使用して プールの VF の範囲を指定するために使用できます。

たとえば、以下の YAML は、VF が 2 から 7 まである netpf0 という名前のインターフェイスのセレク ターを示します。

pfNames: ["netpf0#2-7"]

- **netpf0**は PF インターフェイス名です。
- 2は、範囲に含まれる最初の VF インデックス (0 ベース) です。
- 7は、範囲に含まれる最後の VF インデックス (0 ベース) です。

以下の要件を満たす場合、異なるポリシー CR を使用して同じ PF から VF を選択できます。

- numVfsの値は、同じ PF を選択するポリシーで同一である必要があります。
- VF インデックスは、0から <numVfs>-1 の範囲にある必要があります。たとえば、numVfs が 8 に設定されているポリシーがある場合、<first_vf>の値は0よりも小さくすることはできず、
 <last_vf> は7よりも大きくすることはできません。
- 異なるポリシーの VF の範囲は重複しないようにしてください。
- <first_vf> は <last_vf> よりも大きくすることはできません。

以下の例は、SR-IOV デバイスの NIC パーティション設定を示しています。

ポリシー policy-net-1 は、デフォルトの VF ドライバーと共に PF netpf0 の VF 0 が含まれるリソース プール net-1 を定義します。ポリシー policy-net-1-dpdk は、vfio VF ドライバーと共に PF netpf0 の VF 8 から 15 までが含まれるリソースプール net-1-dpdk を定義します。

ポリシー policy-net-1:

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
name: policy-net-1
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
resourceName: net1
nodeSelector:
feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true"
numVfs: 16
nicSelector:
pfNames: ["netpf0#0-0"]
deviceType: netdevice
```

ポリシー policy-net-1-dpdk:

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
name: policy-net-1-dpdk
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
```

resourceName: net1dpdk nodeSelector: feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true" numVfs: 16 nicSelector: pfNames: ["netpf0#8-15"] deviceType: vfio-pci

インターフェイスが正常にパーティショニングされていることを確認します

次のコマンドを実行して、インターフェイスが SR-IOV デバイスの Virtual Function (VF) にパーティ ショニングされていることを確認します。

\$ ip link show <interface> 1

<interface> を、SR-IOV デバイスの VF にパーティショニングするときに指定したインターフェ イス (例: ens3f1) に置き換えます。

出力例

5: ens3f1: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP> mtu 1500 qdisc mq state UP mode DEFAULT group default qlen 1000 link/ether 3c;fd;fe;d1:bc;01 brd ff;ff;ff;ff;ff

- vf 3 link/ether 5e:91:cf:88:d1:38 brd ff:ff:ff:ff:ff:ff:ff;ff, spoof checking on, link-state auto, trust off
- vf 4 link/ether e6:06:a1:96:2f:de brd ff:ff:ff:ff:ff:ff;ff;ff, spoof checking on, link-state auto, trust off

24.4.2. SR-IOV ネットワークデバイスの設定

SR-IOV Network Operator は **SriovNetworkNodePolicy.sriovnetwork.openshift.io** CustomResourceDefinition を OpenShift Container Platform に追加します。SR-IOV ネットワークデバ イスは、SriovNetworkNodePolicy カスタムリソース (CR) を作成して設定できます。

注記

SriovNetworkNodePolicy オブジェクトで指定された設定を適用する際に、SR-IOV Operator はノードをドレイン (解放) する可能性があり、場合によってはノードの再起動 を行う場合があります。

設定の変更が適用されるまでに数分かかる場合があります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- SR-IOV Network Operator がインストールされている。

- ドレイン (解放) されたノードからエビクトされたワークロードを処理するために、クラスター 内に利用可能な十分なノードがあること。
- SR-IOV ネットワークデバイス設定についてコントロールプレーンノードを選択していないこと。

手順

- 1. SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成してから、YAML を <name>-sriov-nodenetwork.yaml ファイルに保存します。<name> をこの設定の名前に置き換えます。
- オプション: SR-IOV 対応のクラスターノードにまだラベルが付いていない場合 は、SriovNetworkNodePolicy.Spec.NodeSelector でラベルを付けます。ノードのラベル付け について、詳しくは「ノードのラベルを更新する方法について」を参照してください。
- 3. SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f <name>-sriov-node-network.yaml

ここで、<name>はこの設定の名前を指定します。

設定の更新が適用された後に、**sriov-network-operator** namespace のすべての Pod が **Running** ステータスに移行します。

SR-IOV ネットワークデバイスが設定されていることを確認するには、以下のコマンドを実行します。<node_name> を、設定したばかりの SR-IOV ネットワークデバイスを持つノードの名前に置き換えます。

\$ oc get sriovnetworknodestates -n openshift-sriov-network-operator <node_name> -o jsonpath='{.status.syncStatus}'

関連情報

● ノードでラベルを更新する方法について

24.4.3. SR-IOV 設定のトラブルシューティング

SR-IOV ネットワークデバイスの設定の手順を実行した後に、以下のセクションではエラー状態の一部 に対応します。

ノードの状態を表示するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get sriovnetworknodestates -n openshift-sriov-network-operator <node_name>

ここで、<node_name> は SR-IOV ネットワークデバイスを持つノードの名前を指定します。

エラー出力: Cannot allocate memory

"lastSyncError": "write /sys/bus/pci/devices/0000:3b:00.1/sriov_numvfs: cannot allocate memory"

ノードがメモリーを割り当てることができないことを示す場合は、以下の項目を確認します。

● ノードの BIOS でグローバル SR-IOV 設定が有効になっていることを確認します。

• ノードの BIOS で VT-d が有効であることを確認します。

24.4.4. SR-IOV ネットワークの VRF への割り当て

クラスター管理者は、CNI VRF プラグインを使用して、SR-IOV ネットワークインターフェイスを VRF ドメインに割り当てることができます。

これを実行するには、VRF 設定を **SriovNetwork** リソースのオプションの **metaPlugins** パラメーター に追加します。



注記

VRF を使用するアプリケーションを特定のデバイスにバインドする必要があります。 般的な使用方法として、ソケットに SO_BINDTODEVICE オプションを使用できま す。SO_BINDTODEVICE は、渡されるインターフェイス名で指定されているデバイス にソケットをバインドします (例: eth1)。SO_BINDTODEVICE を使用するには、アプリ ケーションに CAP_NET_RAW 機能がある必要があります。

ip vrf exec コマンドを使用した VRF の使用は、OpenShift Container Platform Pod では サポートされません。VRF を使用するには、アプリケーションを VRF インターフェイス に直接バインドします。

24.4.4.1. CNI VRF プラグインを使用した追加 SR-IOV ネットワーク割り当ての作成

SR-IOV Network Operator は追加ネットワークの定義を管理します。作成する追加ネットワークを指定 する場合、SR-IOV Network Operator は **NetworkAttachmentDefinition** カスタムリソース (CR) を自動 的に作成します。



注記

SR-IOV Network Operator が管理する **NetworkAttachmentDefinition** カスタムリソース は編集しないでください。これを実行すると、追加ネットワークのネットワークトラ フィックが中断する可能性があります。

CNI VRF プラグインで追加の SR-IOV ネットワーク割り当てを作成するには、以下の手順を実行します。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとして OpenShift Container Platform クラスターにログイン します。

手順

 追加の SR-IOV ネットワーク割り当て用の SriovNetwork カスタムリソース (CR) を作成し、以下のサンプル CR のように metaPlugins 設定を挿入します。YAML を sriov-networkattachment.yaml ファイルとして保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetwork metadata: name: example-network


vrfname は、インターフェイスが割り当てられた VRF の名前です。これが Pod に存在し ない場合は作成されます。

2. SriovNetwork リソースを作成します。

\$ oc create -f sriov-network-attachment.yaml

NetworkAttachmentDefinition CR が正常に作成されることの確認

 以下のコマンドを実行して、SR-IOV Network Operator が NetworkAttachmentDefinition CR を作成していることを確認します。

\$ oc get network-attachment-definitions -n <namespace> 1

<namespace> を、ネットワーク割り当ての設定時に指定した namespace に置き換えます (例: additional-sriov-network-1)。

出力例





注記

SR-IOV Network Operator が CR を作成するまでに遅延が生じる可能性があります。

追加の SR-IOV ネットワーク割り当てが正常であることの確認

VRF CNI が正しく設定され、追加の SR-IOV ネットワーク割り当てが接続されていることを確認するには、以下を実行します。

- 1. VRF CNI を使用する SR-IOV ネットワークを作成します。
- 2. ネットワークを Pod に割り当てます。
- Pod のネットワーク割り当てが SR-IOV の追加ネットワークに接続されていることを確認します。Pod にリモートシェルを実行し、以下のコマンドを実行します。

\$ ip vrf show

出力例

Name Table ----red 10

4. VRF インターフェイスがセカンダリーインターフェイスのマスターであることを確認します。

\$ ip link

出力例

5: net1: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP> mtu 1500 qdisc noqueue master red state UP mode ...

24.4.5. 次のステップ

• SR-IOV ネットワーク割り当ての設定

24.5. SR-IOV イーサネットネットワーク割り当ての設定

クラスター内の Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) デバイスのイーサネットネットワーク割り当てを設定できます。

24.5.1. イーサネットデバイス設定オブジェクト

イーサネットネットワークデバイスは、SriovNetwork オブジェクトを定義して設定できます。

以下の YAML は SriovNetwork オブジェクトについて説明しています。

networkNamespace: <target_namespace> 4
vlan: <vlan> 5
spoofChk: "<spoof_check>" 6
ipam: |- 7
{}
linkState: <link_state> 8
maxTxRate: <max_tx_rate> 9
minTxRate: <min_tx_rate> 10
vlanQoS: <vlan_qos> 11
trust: "<trust_vf>" 12
capabilities: <capabilities> 13

- オブジェクトの名前。SR-IOV Network Operator は、同じ名前を持つ NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成します。
- SR-IOV Network Operator がインストールされている namespace。
 - この追加ネットワークの SR-IOV ハードウェアを定義する **SriovNetworkNodePolicy** オブジェク トの **spec.resourceName** パラメーターの値。

A SriovNetwork オブジェクトのターゲット namespace。ターゲット namespace の Pod のみを追加ネットワークに割り当てることができます。

- 5 オプション: 追加ネットワークの仮想 LAN (VLAN) ID。整数値は **0** から **4095** である必要がありま す。デフォルト値は **0** です。
- 6 オプション: VF の spoof チェックモード。許可される値は、文字列の "**on**" および "**off**" です。

3

重要

指定する値は引用符で囲む必要があります。引用符で囲まないと、オブジェクトが SR-IOV Network Operator によって拒否されます。

- YAML ブロックスケーラーとしての IPAM CNI プラグインの設定オブジェクトプラグインは、割り 当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。
- 8 オプション: Virtual Function (VF) のリンク状態。許可される値は、**enable、disable、**および auto です。
- 9 オプション: VF の最大伝送レート (Mbps)。
- 10 オプション: VF の最小伝送レート (Mbps)。この値は、最大伝送レート以下である必要があります。



注記

Intel NIC は **minTxRate** パラメーターをサポートしません。詳細は、BZ#1772847 を参照してください。

- 11 オプション: VF の IEEE 802.1p 優先度レベル。デフォルト値は **0** です。
- 12 オプション: VF の信頼モード。許可される値は、文字列の "on" および "off" です。

重要



指定する値を引用符で囲む必要があります。囲まないと、SR-IOV Network Operator はオブジェクトを拒否します。



オプション: この追加ネットワークに設定する機能。IP アドレスのサポートを有効にするには、"**{** "ips": true }" を指定できます。または、MAC アドレスのサポートを有効にするには "**{ "mac":** true }" を指定します。

24.5.1.1. 追加ネットワークの IP アドレス割り当ての設定

IPAM (IP アドレス管理) Container Network Interface (CNI) プラグインは、他の CNI プラグインの IP ア ドレスを提供します。

以下の IP アドレスの割り当てタイプを使用できます。

- 静的割り当て。
- DHCP サーバーを使用した動的割り当て。指定する DHCP サーバーは、追加のネットワークか ら到達可能である必要があります。
- Whereabouts IPAM CNI プラグインを使用した動的割り当て。

24.5.1.1.1 静的 IP アドレス割り当ての設定

以下の表は、静的 IP アドレスの割り当ての設定について説明しています。

表24.3 ipam 静的設定オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 static が必要です。
addresses	array	仮想インターフェイスに割り当てる IP アドレスを指定するオブ ジェクトの配列。IPv4 と IPv6 の IP アドレスの両方がサポート されます。
routes	array	Pod 内で設定するルートを指定するオブジェクトの配列です。
dns	array	オプション: DNS の設定を指定するオブジェクトの配列です。

addressesの配列には、以下のフィールドのあるオブジェクトが必要です。

表24.4 ipam.addresses[] 配列

フィールド	型	説明
address	string	指定する IP アドレスおよびネットワーク接頭辞。たとえ ば、10.10.21.10/24 を指定すると、追加のネットワークに IP アドレスの 10.10.21.10 が割り当てられ、ネットマスクは 255.255.255.0 になります。

フィールド	型	説明
gateway	string	egress ネットワークトラフィックをルーティングするデフォル トのゲートウェイ。

表24.5 ipam.routes[] 配列

フィールド	型	説明
dst	string	CIDR 形式の IP アドレス範囲 (192.168.17.0/24 、またはデフォ ルトルートの 0.0.0.0/0)。
gw	string	ネットワークトラフィックがルーティングされるゲートウェ イ。

表24.6 ipam.dns オブジェクト

フィールド	型 型	説明
nameservers	array	DNS クエリーの送信先となる 1 つ以上の IP アドレスの配列。
domain	array	ホスト名に追加するデフォルトのドメイン。たとえば、ドメイ ンが example.com に設定されている場合、 example-host の DNS ルックアップクエリーは example-host.example.com として書き換えられます。
search	array	DNS ルックアップのクエリー時に非修飾ホスト名に追加される ドメイン名の配列 (例: example-host)。

静的 IP アドレス割り当ての設定例

```
{
    "ipam": {
    "type": "static",
    "addresses": [
        {
            "addresses": "191.168.1.7/24"
        }
    ]
    }
}
```

24.5.1.1.2. 動的 IP アドレス (DHCP) 割り当ての設定

以下の JSON は、DHCP を使用した動的 IP アドレスの割り当ての設定について説明しています。

DHCP リースの更新

Pod は、作成時に元の DHCP リースを取得します。リースは、クラスターで実行してい る最小限の DHCP サーバーデプロイメントで定期的に更新する必要があります。

SR-IOV Network Operator は DHCP サーバーデプロイメントを作成しません。Cluster Network Operator は最小限の DHCP サーバーデプロイメントを作成します。

DHCP サーバーのデプロイメントをトリガーするには、以下の例にあるように Cluster Network Operator 設定を編集して shim ネットワーク割り当てを作成する必要があります。

shim ネットワーク割り当ての定義例



表24.7 ipam DHCP 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 dhcp が必要です。

動的 IP アドレス (DHCP) 割り当ての設定例

'ipam": { "type": "dhcp"

24.5.1.1.3. Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定

Whereabouts CNI プラグインにより、DHCP サーバーを使用せずに IP アドレスを追加のネットワーク に動的に割り当てることができます。

以下の表は、Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定について説明しています。

表24.8 ipam whereabouts 設定オブジェクト

フィールド	型 	
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 whereabouts が必要です。
range	string	IP アドレスと範囲を CIDR 表記。IP アドレスは、この範囲内の アドレスから割り当てられます。
exclude	array	オプション: CIDR 表記の IP アドレスと範囲 (0 個以上) のリス ト。除外されたアドレス範囲内の IP アドレスは割り当てられま せん。

Whereabouts を使用する動的 IP アドレス割り当ての設定例

"ipam": { "type": "whereabouts", "range": "192.0.2.192/27", "exclude": ["192.0.2.192/30". "192.0.2.196/32"] } }

24.5.1.1.4. Whereabouts reconciler デーモンセットの作成

Whereabouts reconciler は、Whereabouts IP アドレス管理 (IPAM) ソリューションを使用して、クラス ター内の Pod の動的 IP アドレス割り当てを管理します。これにより、各 Pod が指定された IP アドレ ス範囲から一意の IP アドレスを確実に取得します。また、Pod が削除またはスケールダウンされた場 合の IP アドレスの解放も処理します。



注記

NetworkAttachmentDefinition カスタムリソースを使用して動的 IP アドレスを割り当て ることもできます。

Whereabouts reconciler デーモンセットは、Cluster Network Operator を通じて追加のネットワークを 設定するときに自動的に作成されます。YAML マニフェストから追加のネットワークを設定する場合、 これは自動的には作成されません。

Whereabouts reconciler デーモンセットのデプロイメントをトリガーするには、Cluster Network Operator のカスタムリソースファイルを編集して、**Whereabouts-shim** ネットワークアタッチメント を手動で作成する必要があります。

Whereabouts reconciler デーモンセットをデプロイするには、次の手順を使用します。

1. 以下のコマンドを実行して、**Network.operator.openshift.io** カスタムリソース (CR) を編集します。

\$ oc edit network.operator.openshift.io cluster

2. CRの AdditionalNetworks パラメーターを変更して、whereabouts-shim ネットワーク割り当 て定義を追加します。以下に例を示します。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
 name: cluster
spec:
 additionalNetworks:
 - name: whereabouts-shim
  namespace: default
  rawCNIConfig: |-
    "name": "whereabouts-shim",
    "cniVersion": "0.3.1",
    "type": "bridge",
    "ipam": {
     "type": "whereabouts"
    }
   }
  type: Raw
```

- 3. ファイルを保存し、テキストエディターを編集します。
- 4. 次のコマンドを実行して、whereabouts-reconciler デーモンセットが正常にデプロイされたことを確認します。

\$ oc get all -n openshift-multus | grep whereabouts-reconciler

出力例

pod/whereabouts-reconciler-jnp6g 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-k76gg 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-k86t9 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-p4sxw 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-rvfdv 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-svzw9 1/1 Running 0 6s daemonset.apps/whereabouts-reconciler 6 6 6 6 6 kubernetes.io/os=linux 6s

24.5.2. SR-IOV の追加ネットワークの設定

SriovNetwork オブジェクトを作成して、SR-IOV ハードウェアを使用する追加のネットワークを設定 できます。**SriovNetwork** オブジェクトの作成時に、SR-IOV Network Operator は **NetworkAttachmentDefinition** オブジェクトを自動的に作成します。

注記



SriovNetwork オブジェクトが **running** 状態の Pod に割り当てられている場合、これを 変更したり、削除したりしないでください。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

 SriovNetwork オブジェクトを作成してから、YAML を <name>.yaml ファイルに保存しま す。<name> はこの追加ネットワークの名前になります。オブジェクト仕様は以下の例のよう になります。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetwork metadata: name: attach1 namespace: openshift-sriov-network-operator spec: resourceName: net1 networkNamespace: project2 ipam: |-{ "type": "host-local", "subnet": "10.56.217.0/24", "rangeStart": "10.56.217.171", "rangeEnd": "10.56.217.181", "gateway": "10.56.217.1" }

2. オブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc create -f <name>.yaml

ここで、<name>は追加ネットワークの名前を指定します。

 オプション:以下のコマンドを実行して、直前の手順で作成した SriovNetwork オブジェクトに 関連付けられた NetworkAttachmentDefinition オブジェクトが存在することを確認するには、 以下のコマンドを入力します。<namespace> を SriovNetwork オブジェクトで指定した networkNamespace に置き換えます。



\$ oc get net-attach-def -n <namespace>

24.5.3. 次のステップ

● Pod の SR-IOV の追加ネットワークへの追加

24.5.4. 関連情報

• SR-IOV ネットワークデバイスの設定

24.6. SR-IOV INFINIBAND ネットワーク割り当ての設定

クラスター内の Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) デバイスの InfiniBand (IB) ネットワーク割り当 てを設定できます。

24.6.1. InfiniBand デバイス設定オブジェクト

SriovIBNetwork オブジェクトを定義することで、InfiniBand (IB) ネットワークデバイスを設定できま す。

以下の YAML は、SriovIBNetwork オブジェクトについて説明しています。

	apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovIBNetwork metadata: name: <name> 1 namespace: openshift-sriov-network-operator 2 spec: resourceName: <sriov_resource_name> 3 networkNamespace: <target_namespace> 4 ipam: - 5 {} linkState: <link_state> 6 capabilities: <capabilities> 7</capabilities></link_state></target_namespace></sriov_resource_name></name>
	オブジェクトの名前。SR-IOV Network Operator は、同じ名前を持つ NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成します。
	2 SR-IOV Operator がインストールされている namespace。
	3 この追加ネットワークの SR-IOV ハードウェアを定義する SriovNetworkNodePolicy オブジェクトの spec.resourceName パラメーターの値。
	A SriovIBNetwork オブジェクトのターゲット namespace。ターゲット namespace の Pod のみを ネットワークデバイスに割り当てることができます。
	オプション: YAML ブロックスケーラーとしての IPAM CNI プラグインの設定オブジェクト。プラ グインは、割り当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。
	6 オプション: Virtual Function (VF) のリンク状態。許可される値は、enable、disable、および auto です。
6	オプション: このネットワークに設定する機能。"{ "ips": true }" を指定して IP アドレスのサポートを有効にするか、"{ "infinibandGUID": true }" を指定して IB Global Unique Identifier (GUID) サポートを有効にします。

24.6.1.1. 追加ネットワークの IP アドレス割り当ての設定

IPAM (IP アドレス管理) Container Network Interface (CNI) プラグインは、他の CNI プラグインの IP ア ドレスを提供します。

以下の IP アドレスの割り当てタイプを使用できます。

静的割り当て。

- DHCP サーバーを使用した動的割り当て。指定する DHCP サーバーは、追加のネットワークから到達可能である必要があります。
- Whereabouts IPAM CNI プラグインを使用した動的割り当て。

24.6.1.1.1. 静的 IP アドレス割り当ての設定

以下の表は、静的 IP アドレスの割り当ての設定について説明しています。

表24.9 ipam 静的設定オブジェクト

フィールド	型 	
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 static が必要です。
addresses	array	仮想インターフェイスに割り当てる IP アドレスを指定するオブ ジェクトの配列。IPv4 と IPv6 の IP アドレスの両方がサポート されます。
routes	array	Pod 内で設定するルートを指定するオブジェクトの配列です。
dns	array	オプション: DNS の設定を指定するオブジェクトの配列です。

addressesの配列には、以下のフィールドのあるオブジェクトが必要です。

表24.10 ipam.addresses[] 配列

フィールド	型	説明
address	string	指定する IP アドレスおよびネットワーク接頭辞。たとえ ば、10.10.21.10/24 を指定すると、追加のネットワークに IP アドレスの 10.10.21.10 が割り当てられ、ネットマスクは 255.255.255.0 になります。
gateway	string	egress ネットワークトラフィックをルーティングするデフォル トのゲートウェイ。

表24.11 ipam.routes[] 配列

フィールド	型	説明
dst	string	CIDR 形式の IP アドレス範囲 (192.168.17.0/24 、またはデフォ ルトルートの 0.0.0.0/0)。
gw	string	ネットワークトラフィックがルーティングされるゲートウェ イ。

表24.12 ipam.dns オブジェクト

フィールド	型	説明
nameservers	array	DNS クエリーの送信先となる1つ以上の IP アドレスの配列。
domain	array	ホスト名に追加するデフォルトのドメイン。たとえば、ドメイ ンが example.com に設定されている場合、 example-host の DNS ルックアップクエリーは example-host.example.com として書き換えられます。
search	array	DNS ルックアップのクエリー時に非修飾ホスト名に追加される ドメイン名の配列 (例: example-host)。

静的 IP アドレス割り当ての設定例

{ "ipam": { "type": "static", "addresses": [{ "address": "191.168.1.7/24" }] } }

24.6.1.1.2. 動的 IP アドレス (DHCP) 割り当ての設定

以下の JSON は、DHCP を使用した動的 IP アドレスの割り当ての設定について説明しています。

DHCP リースの更新

Pod は、作成時に元の DHCP リースを取得します。リースは、クラスターで実行している最小限の DHCP サーバーデプロイメントで定期的に更新する必要があります。

DHCP サーバーのデプロイメントをトリガーするには、以下の例にあるように Cluster Network Operator 設定を編集して shim ネットワーク割り当てを作成する必要があります。

shim ネットワーク割り当ての定義例

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: additionalNetworks: - name: dhcp-shim namespace: default type: Raw rawCNIConfig: |ł "name": "dhcp-shim", "cniVersion": "0.3.1", "type": "bridge", "ipam": { "type": "dhcp" } # ...

表24.13 ipam DHCP 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 dhcp が必要です。

動的 IP アドレス (DHCP) 割り当ての設定例

```
{
"ipam": {
"type": "dhcp"
}
}
```

24.6.1.1.3. Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定

Whereabouts CNI プラグインにより、DHCP サーバーを使用せずに IP アドレスを追加のネットワーク に動的に割り当てることができます。

以下の表は、Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定について説明しています。

表24.14 ipam whereabouts 設定オブジェクト

フィールド	型	説明
type	string	IPAM のアドレスタイプ。値 whereabouts が必要です。
range	string	IP アドレスと範囲を CIDR 表記。IP アドレスは、この範囲内の アドレスから割り当てられます。
exclude	array	オプション: CIDR 表記の IP アドレスと範囲 (0 個以上) のリス ト。除外されたアドレス範囲内の IP アドレスは割り当てられま せん。

Whereabouts を使用する動的 IP アドレス割り当ての設定例

"ipam": { "type": "whereabouts", "range": "192.0.2.192/27", "exclude": ["192.0.2.192/30", "192.0.2.196/32"] } }

24.6.1.1.4. Whereabouts reconciler デーモンセットの作成

Whereabouts reconciler は、Whereabouts IP アドレス管理 (IPAM) ソリューションを使用して、クラス ター内の Pod の動的 IP アドレス割り当てを管理します。これにより、各 Pod が指定された IP アドレ ス範囲から一意の IP アドレスを確実に取得します。また、Pod が削除またはスケールダウンされた場 合の IP アドレスの解放も処理します。



注記

NetworkAttachmentDefinition カスタムリソースを使用して動的 IP アドレスを割り当て ることもできます。

Whereabouts reconciler デーモンセットは、Cluster Network Operator を通じて追加のネットワークを 設定するときに自動的に作成されます。YAML マニフェストから追加のネットワークを設定する場合、 これは自動的には作成されません。

Whereabouts reconciler デーモンセットのデプロイメントをトリガーするには、Cluster Network Operator のカスタムリソースファイルを編集して、**Whereabouts-shim** ネットワークアタッチメント を手動で作成する必要があります。

Whereabouts reconciler デーモンセットをデプロイするには、次の手順を使用します。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、**Network.operator.openshift.io** カスタムリソース (CR) を編集します。



2. CRの AdditionalNetworks パラメーターを変更して、whereabouts-shim ネットワーク割り当 て定義を追加します。以下に例を示します。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
 name: cluster
spec:
 additionalNetworks:
 - name: whereabouts-shim
  namespace: default
  rawCNIConfig: |-
   {
    "name": "whereabouts-shim",
    "cniVersion": "0.3.1",
    "type": "bridge",
    "ipam": {
     "type": "whereabouts"
    }
   }
  type: Raw
```

- 3. ファイルを保存し、テキストエディターを編集します。
- 4. 次のコマンドを実行して、whereabouts-reconciler デーモンセットが正常にデプロイされたことを確認します。

\$ oc get all -n openshift-multus | grep whereabouts-reconciler

出力例

pod/whereabouts-reconciler-jnp6g 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-k76gg 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-k86t9 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-p4sxw 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-rvfdv 1/1 Running 0 6s pod/whereabouts-reconciler-svzw9 1/1 Running 0 6s daemonset.apps/whereabouts-reconciler 6 6 6 6 6 kubernetes.io/os=linux 6s

24.6.2. SR-IOV の追加ネットワークの設定

SriovIBNetwork オブジェクトを作成して、SR-IOV ハードウェアを使用する追加のネットワークを設 定できます。**SriovIBNetwork** オブジェクトの作成時に、SR-IOV Operator は **NetworkAttachmentDefinition** オブジェクトを自動的に作成します。



注記

SriovIBNetwork オブジェクトが、running 状態の Pod に割り当てられている場合、これを変更したり、削除したりしないでください。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

 SriovIBNetwork CR を作成してから、YAML を <name>.yaml ファイルに保存しま す。<name> は、この追加ネットワークの名前になります。オブジェクト仕様は以下の例のようになります。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovIBNetwork
metadata:
 name: attach1
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 resourceName: net1
 networkNamespace: project2
 ipam: |-
  {
    "type": "host-local",
   "subnet": "10.56.217.0/24",
   "rangeStart": "10.56.217.171",
   "rangeEnd": "10.56.217.181",
   "gateway": "10.56.217.1"
  }
```

2. オブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc create -f <name>.yaml

ここで、<name>は追加ネットワークの名前を指定します。

 オプション:以下のコマンドを実行して、直前の手順で作成した SriovIBNetwork オブジェクト に関連付けられた NetworkAttachmentDefinition オブジェクトが存在することを確認しま す。<namespace> を SriovIBNetwork オブジェクトで指定した networkNamespace に置き換 えます。

\$ oc get net-attach-def -n <namespace>

24.6.3. 次のステップ

- Pod の SR-IOV の追加ネットワークへの追加
- 24.6.4. 関連情報
 - SR-IOV ネットワークデバイスの設定

24.7. POD の SR-IOV の追加ネットワークへの追加

Pod を既存の Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ネットワークに追加できます。

24.7.1. ネットワーク割り当てのランタイム設定

Pod を追加のネットワークに割り当てる場合、ランタイム設定を指定して Pod の特定のカスタマイズ を行うことができます。たとえば、特定の MAC ハードウェアアドレスを要求できます。

Pod 仕様にアノテーションを設定して、ランタイム設定を指定します。アノテーションキーは **k8s.v1.cni.cncf.io/networks** で、ランタイム設定を記述する JSON オブジェクトを受け入れます。

24.7.1.1. イーサネットベースの SR-IOV 割り当てのランタイム設定

以下の JSON は、イーサネットベースの SR-IOV ネットワーク割り当て用のランタイム設定オプション を説明しています。



SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR の名前。

- 2 オプション: SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り当てられる SR-IOV デバイスの MAC アドレス。この機能を使用するには、SriovNetwork オブジェクトで { "mac": true } も指定する必要があります。
- 3 オプション: SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り当てら れる SR-IOV デバイスの IP アドレス。IPv4 と IPv6 アドレスの両方がサポートされます。この機 能を使用するには、SriovNetwork オブジェクトで { "ips": true } も指定する必要があります。

ランタイム設定の例

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: sample-pod
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks: |-
   ſ
     {
      "name": "net1",
      "mac": "20:04:0f:f1:88:01",
      "ips": ["192.168.10.1/24", "2001::1/64"]
    }
   1
spec:
 containers:
 - name: sample-container
  image: <image>
  imagePullPolicy: IfNotPresent
  command: ["sleep", "infinity"]
```

24.7.1.2. InfiniBand ベースの SR-IOV 割り当てのランタイム設定

以下の JSON は、InfiniBand ベースの SR-IOV ネットワーク割り当て用のランタイム設定オプションを 説明しています。



2 SR-IOV デバイスの InfiniBand GUIDこの機能を使用するには、SriovIBNetwork オブジェクトで { "infinibandGUID": true } も指定する必要があります。

3 SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り当てられる SR-IOV デバイスの IP アドレス。IPv4 と IPv6 アドレスの両方がサポートされます。この機能を使用する には、SriovIBNetwork オブジェクトで { "ips": true } も指定する必要があります。

ランタイム設定の例

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: sample-pod
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks: |-
   [
      "name": "ib1",
      "infiniband-guid": "c2:11:22:33:44:55:66:77",
      "ips": ["192.168.10.1/24", "2001::1/64"]
     }
   1
spec:
 containers:
 - name: sample-container
  image: <image>
  imagePullPolicy: IfNotPresent
  command: ["sleep", "infinity"]
```

24.7.2. Pod の追加ネットワークへの追加

Pod を追加のネットワークに追加できます。Pod は、デフォルトネットワークで通常のクラスター関連のネットワークトラフィックを継続的に送信します。

Pod が作成されると、追加のネットワークが割り当てられます。ただし、Pod がすでに存在する場合は、追加のネットワークをこれに割り当てることはできません。

Pod が追加ネットワークと同じ namespace にあること。

注記



SR-IOV Network Resource Injector は、Pod の最初のコンテナーに **resource** フィールド を自動的に追加します。

データプレーン開発キット (DPDK) モードでインテル製のネットワークインターフェイ スコントローラー (NIC) を使用している場合には、Pod 内の最初のコンテナーのみが NIC にアクセスできるように設定されています。SR-IOV 追加ネットワークは、Sriov Network Node Policy オブジェクトで device Type が vfio-pci に設定されてる場合は DPDK モードに設定されます。

この問題は、NIC にアクセスする必要のあるコンテナーが **Pod** オブジェクトで定義され た最初のコンテナーであることを確認するか、Network Resource Injector を無効にする ことで回避できます。詳細は、BZ#1990953 を参照してください。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- クラスターにログインする。
- SR-IOV Operator のインストール。
- Pod を割り当てる SriovNetwork オブジェクトまたは SriovIBNetwork オブジェクトのいずれ かを作成する。

手順

- 1. アノテーションを **Pod** オブジェクトに追加します。以下のアノテーション形式のいずれかのみ を使用できます。
 - a. カスタマイズせずに追加ネットワークを割り当てるには、以下の形式でアノテーションを 追加します。<**network**>を、Pod に関連付ける追加ネットワークの名前に置き換えます。

metadata: annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: <network>[,<network>,...]

1 複数の追加ネットワークを指定するには、各ネットワークをコンマで区切ります。コンマの間にはスペースを入れないでください。同じ追加ネットワークを複数回指定した場合、Pod は複数のネットワークインターフェイスをそのネットワークに割り当てます。

b. カスタマイズして追加のネットワークを割り当てるには、以下の形式でアノテーションを 追加します。

metadata:	c.
annotation	5.
k8s.v1.cn	i.cncf.io/networks: -
[
{	
"name	e": " <network>", 1</network>
"name	espace": " <namespace>", 2</namespace>

"default-route": ["<default-route>"] 3 }] NetworkAttachmentDefinition オブジェクトによって定義される追加のネットワーク の名前を指定します。 NetworkAttachmentDefinition オブジェクトが定義される namespace を指定しま す。 オプション: 192.168.17.1 などのデフォルトルートのオーバーライドを指定します。 ີ Pod を作成するには、以下のコマンドを入力します。<name> を Pod の名前に置き換えます。 \$ oc create -f <name>.yaml 3. オプション: アノテーションが Pod CR に存在することを確認するには、<name> を Pod の名 前に置き換えて、以下のコマンドを入力します。 \$ oc get pod <name> -o yaml 以下の例では、example-pod Pod が追加ネットワークの net1 に割り当てられています。 \$ oc get pod example-pod -o yaml apiVersion: v1 kind: Pod metadata: annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: macvlan-bridge k8s.v1.cni.cncf.io/networks-status: |- 1 [{ "name": "openshift-sdn", "interface": "eth0", "ips": ["10.128.2.14"], "default": true, "dns": {} },{ "name": "macvlan-bridge", "interface": "net1", "ips": ["20.2.2.100"], "mac": "22:2f:60:a5:f8:00", "dns": {} }] name: example-pod namespace: default spec: ...

status:



k8s.v1.cni.cncf.io/networks-status パラメーターは、オブジェクトの JSON 配列です。 各オブジェクトは、Pod に割り当てられる追加のネットワークのステータスについて説明

24.7.3. Non-Uniform Memory Access (NUMA) で配置された SR-IOV Pod の作成

NUMA で配置された SR-IOV Pod は、**restricted** または **single-numa-node** Topology Manager ポリ シーで同じ NUMA ノードから割り当てられる SR-IOV および CPU リソースを制限することによって作 成できます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- CPU マネージャーのポリシーを static に設定している。CPU マネージャーの詳細は、関連情報セクションを参照してください。
- Topology Manager ポリシーを **single-numa-node** に設定している。



注記

single-numa-node が要求を満たさない場合は、Topology Manager ポリシーを **restricted** にするように設定できます 。

手順

 以下の SR-IOV Pod 仕様を作成してから、YAML を <name>-sriov-pod.yaml ファイルに保存 します。<name> をこの Pod の名前に置き換えます。 以下の例は、SR-IOV Pod 仕様を示しています。

	apiVersion: v1
	kind: Pod
	metadata:
	name: sample-pod
	annotations:
	k8s.v1.cni.cncf.io/networks: <name> 1</name>
	spec:
	containers:
	- name: sample-container
	image: <image/> 2
	command: ["sleep", "infinity"]
	resources:
	limits:
	memory: "1Gi" 3
	cpu: "2" 4
	requests:
	memory: "1Gi"
	cpu: "2"
1	<name></name> を、SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR の名前に置き換えます。
2	<image/> を sample-pod イメージの名前に置き換えます。
3	Guaranteed QoS を指定して SR-IOV Pod を作成するには、 memory requests に等しい memory limits を設定します。



Guaranteed QoS を指定して SR-IOV Pod を作成するには、**cpu requests** に等しい **cpu limits** を設定します。

2. 以下のコマンドを実行して SR-IOV Pod のサンプルを作成します。



\$ oc create -f <filename> 1

<filename>を、先の手順で作成したファイルの名前に置き換えます。

3. sample-pod が Guaranteed QoS を指定して設定されていることを確認します。

\$ oc describe pod sample-pod

4. sample-pod が排他的 CPU を指定して割り当てられていることを確認します。

\$ oc exec sample-pod -- cat /sys/fs/cgroup/cpuset/cpuset.cpus

5. **sample-pod** に割り当てられる SR-IOV デバイスと CPU が同じ NUMA ノード上にあることを 確認します。

\$ oc exec sample-pod -- cat /sys/fs/cgroup/cpuset/cpuset.cpus

24.7.4. OpenStack で SR-IOV を使用するクラスター用のテスト Pod テンプレート

次の **testpmd** Pod では、ヒュージページ、予約済み CPU、および SR-IOV ポートを使用したコンテナーの作成を紹介します。

testpmd Pod の例

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: testpmd-sriov
 namespace: mynamespace
 annotations:
  cpu-load-balancing.crio.io: "disable"
  cpu-quota.crio.io: "disable"
# ...
spec:
 containers:
 - name: testpmd
  command: ["sleep", "99999"]
  image: registry.redhat.io/openshift4/dpdk-base-rhel8:v4.9
  securityContext:
   capabilities:
     add: ["IPC_LOCK","SYS_ADMIN"]
   privileged: true
   runAsUser: 0
  resources:
   requests:
```

memory: 1000Mi hugepages-1Gi: 1Gi cpu: '2' openshift.io/sriov1:1 limits: hugepages-1Gi: 1Gi cpu: '2' memory: 1000Mi openshift.io/sriov1:1 volumeMounts: - mountPath: /dev/hugepages name: hugepage readOnly: False runtimeClassName: performance-cnf-performanceprofile volumes: - name: hugepage emptyDir: medium: HugePages

この例では、パフォーマンスプロファイルの名前が cnf-performance profile であると想定しています。

24.7.5. 関連情報

- SR-IOV イーサネットネットワーク割り当ての設定
- SR-IOV InfiniBand ネットワーク割り当ての設定
- CPU マネージャーの使用

24.8. SR-IOV ネットワークのインターフェイスレベルのネットワーク SYSCTL 設定の設定

クラスター管理者は、SR-IOV ネットワークデバイスに接続された Pod の Container Network Interface (CNI) メタプラグインの調整を使用して、インターフェイスレベルのネットワーク sysctl を変更できま す。

24.8.1. SR-IOV 対応 NIC を使用したノードのラベル付け

SR-IOV 対応ノードのみで SR-IOV を有効にしたい場合は、いくつかの方法があります。

- Node Feature Discovery (NFD) Operator をインストールします。NFD は SR-IOV 対応の NIC の存在を検出し、ノードに node.alpha.kubernetes-incubator.io/nfd-network-sriov.capable = true ラベルを付けます。
- 各ノードの SriovNetworkNodeState CR を調べます。interfaces スタンザには、ワーカーノー ド上の SR-IOV Network Operator によって検出されるすべての SR-IOV デバイスの一覧が含ま れます。次のコマンドを使用して、各ノードに feature.node.kubernetes.io/networksriov.capable: "true" というラベルを付けます。

\$ oc label node <node_name> feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable="true"



注記

任意の名前でノードにラベルを付けることができます。

24.8.2.1つの sysctl フラグの設定

SR-IOV ネットワークデバイスに接続された Pod のインターフェイスレベルのネットワーク **sysctl** 設定を設定できます。

この例では、作成された仮想インターフェイスで **net.ipv4.conf.IFNAME.accept_redirects** が **1** に設定 されます。

sysctl-tuning-test は、この例で使用される namespace です。

• 次のコマンドを使用して、sysctl-tuning-test namespace を作成します。

\$ oc create namespace sysctl-tuning-test

24.8.2.1. SR-IOV ネットワークデバイスを持つノードで1つの sysctl フラグを設定する

SR-IOV Network Operator は **SriovNetworkNodePolicy.sriovnetwork.openshift.io** カスタムリソース 定義 (CRD) を OpenShift Container Platform に追加します。SR-IOV ネットワークデバイス は、**SriovNetworkNodePolicy** カスタムリソース (CR) を作成して設定できます。



注記

SriovNetworkNodePolicy オブジェクトで指定された設定を適用すると、SR-IOV Operator がノードをドレインして再起動する場合があります。

設定の変更が適用されるまでに数分の時間がかかる場合があります。

この手順に従って、SriovNetworkNodePolicy カスタムリソース (CR) を作成します。

手順

1. **SriovNetworkNodePolicy** カスタムリソース (CR) を作成します。たとえば、次の YAML を ファイル **policyoneflag-sriov-node-network.yaml** として保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetworkNodePolicy metadata:
name: policyoneflag 1
namespace: openshift-sriov-network-operator 2
spec:
resourceName: policyoneflag 3
nodeSelector: 4
feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable="true"
priority: 10 5
numVfs: 5 6
nicSelector: 7
pfNames: ["ens5"] 8
deviceType: "netdevice" 9
isRdma: false 10

1

カスタムリソースオブジェクトの名前。

6

SR-IOV Network Operator がインストールされている namespace。



SR-IOV ネットワークデバイスプラグインのリソース名。1つのリソース名に複数の SR-IOV ネットワークポリシーを作成できます。



ノードセレクターは設定するノードを指定します。選択したノード上の SR-IOV ネット ワークデバイスのみが設定されます。SR-IOV Container Network Interface (CNI) プラグイ ンおよびデバイスプラグインは、選択したノードにのみデプロイされます。

5

オプション: 優先度は 0 から 99 までの整数値で指定されます。値が小さいほど優先度が高 くなります。たとえば、10 の優先度は 99 よりも高くなります。デフォルト値は 99 で す。



SR-IOV 物理ネットワークデバイス用に作成する Virtual Function (VF) の数。Intel ネット ワークインターフェイスコントローラー (NIC) の場合、VF の数はデバイスがサポートす る VF の合計よりも大きくすることはできません。Mellanox NIC の場合、VF の数は **128** よりも大きくすることはできません。

NIC セレクターは、Operator が設定するデバイスを特定します。すべてのパラメーターの 値を指定する必要はありません。意図せずにデバイスを選択しないように、ネットワーク デバイスを極めて正確に特定することが推奨されます。rootDevices を指定する場 合、vendor、deviceID、または pfName の値も指定する必要があります。pfNames およ び rootDevices の両方を同時に指定する場合、それらが同一のデバイスを参照しているこ とを確認します。netFilter の値を指定する場合、ネットワーク ID は一意の ID であるため にその他のパラメーターを指定する必要はありません。

👩 オプション:1つ以上のデバイスの物理機能 (PF) 名の配列。

オプション: Virtual Function (VF)のドライバータイプ。許可される唯一の値は netdevice です。ベアメタルノードで Mellanox NIC を DPDK モードで動作させるには、isRdma を true に設定します。





注記

vfio-pci ドライバータイプはサポートされていません。

2. SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f policyoneflag-sriov-node-network.yaml

設定の更新が適用された後に、**sriov-network-operator** namespace のすべての Pod が **Running** ステータスに移行します。

3. SR-IOV ネットワークデバイスが設定されていることを確認するには、以下のコマンドを実行 します。<node_name> を、設定したばかりの SR-IOV ネットワークデバイスを持つノードの 名前に置き換えます。 \$ oc get sriovnetworknodestates -n openshift-sriov-network-operator <node_name> -o jsonpath='{.status.syncStatus}'

出力例

Succeeded

24.8.2.2. SR-IOV ネットワークでの sysctl の設定

SriovNetwork リソースのオプションの metaPlugins パラメーターにチューニング設定を追加すること で、SR-IOV により作成された仮想インターフェイスにインターフェイス固有の sysctl 設定を設定できます。

SR-IOV Network Operator は追加ネットワークの定義を管理します。作成する追加ネットワークを指定 する場合、SR-IOV Network Operator は **NetworkAttachmentDefinition** カスタムリソース (CR) を自動 的に作成します。



注記

SR-IOV Network Operator が管理する **NetworkAttachmentDefinition** カスタムリソース は編集しないでください。これを実行すると、追加ネットワークのネットワークトラ フィックが中断する可能性があります。

インターフェイスレベルのネットワーク **net.ipv4.conf.IFNAME.accept_redirects sysctl** 設定を変更す るには、Container Network Interface (CNI) チューニングプラグインを使用して追加の SR-IOV ネット ワークを作成します。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとして OpenShift Container Platform クラスターにログイン します。

手順

追加の SR-IOV ネットワーク割り当て用の SriovNetwork カスタムリソース (CR) を作成し、以下のサンプル CR のように metaPlugins 設定を挿入します。YAML を sriov-network-interface-sysctl.yaml ファイルとして保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetwork
metadata:
name: onevalidflag 1
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
resourceName: policyoneflag 3
networkNamespace: sysctl-tuning-test 4
ipam: '{ "type": "static" }' 5
capabilities: '{ "mac": true, "ips": true }' 6
metaPlugins : 7
{

"type": "tuning", "capabilities":{ "mac":true }, "sysctl":{ "net.ipv4.conf.IFNAME.accept redirects": "1" } } オブジェクトの名前。SR-IOV Network Operator は、同じ名前を持つ NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成します。 SR-IOV Network Operator がインストールされている namespace。 この追加ネットワークの SR-IOV ハードウェアを定義する SriovNetworkNodePolicy オ 3 ブジェクトの spec.resourceName パラメーターの値。 SriovNetwork オブジェクトのターゲット namespace。ターゲット namespace の Pod の みを追加ネットワークに割り当てることができます。 YAML ブロックスケーラーとしての IPAM CNI プラグインの設定オブジェクトプラグイン は、割り当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。 オプション: 追加のネットワークの機能を設定します。IP アドレスのサポートを有効にす 6 るには、"{ "ips": true }" を指定できます。または、MAC アドレスのサポートを有効にす るには "{ "mac": true }" を指定します。 オプション: metaPlugins パラメーターは、デバイスに機能を追加するために使用されま 7 す。このユースケースでは、type フィールドを tuning に設定します。設定したいイン ターフェイスレベルのネットワーク sysctl を sysctl フィールドに指定します。 2. SriovNetwork リソースを作成します。

\$ oc create -f sriov-network-interface-sysctl.yaml

NetworkAttachmentDefinition CR が正常に作成されることの確認

 以下のコマンドを実行して、SR-IOV Network Operator が NetworkAttachmentDefinition CR を作成していることを確認します。

\$ oc get network-attachment-definitions -n <namespace> 1

1

<namespace> を、SriovNetwork オブジェクトで指定した networkNamespace の値に 置き換えます。たとえば、sysctl-tuning-test です。

出力例

NAME AGE onevalidflag 14m



注記

SR-IOV Network Operator が CR を作成するまでに遅延が生じる可能性があります。

追加の SR-IOV ネットワーク割り当てが正常であることの確認

チューニング CNI が正しく設定され、追加の SR-IOV ネットワーク割り当てが接続されていることを確認するには、以下を実行します。

1. Pod CR を作成します。次の YAML を examplepod.yaml ファイルとして保存します。

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: tunepod
 namespace: sysctl-tuning-test
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks: |-
   ſ
     ł
      "name": "onevalidflag", 1
      "mac": "0a:56:0a:83:04:0c", 2
      "ips": ["10.100.100.200/24"] 3
    }
   ]
spec:
 containers:
 - name: podexample
  image: centos
  command: ["/bin/bash", "-c", "sleep INF"]
  securityContext:
   runAsUser: 2000
   runAsGroup: 3000
   allowPrivilegeEscalation: false
   capabilities:
     drop: ["ALL"]
 securityContext:
  runAsNonRoot: true
  seccompProfile:
   type: RuntimeDefault
```

SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR の名前。

オプション: SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り 当てられる SR-IOV デバイスの MAC アドレス。この機能を使用するには、SriovNetwork オブジェクトで **{ "mac": true }**も指定する必要があります。

3 オプション: SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り 当てられる SR-IOV デバイスの IP アドレス。IPv4 と IPv6 アドレスの両方がサポートされ ます。この機能を使用するには、SriovNetwork オブジェクトで { "ips": true } も指定す る必要があります。

2. Pod CR を作成します。

2

\$ oc apply -f examplepod.yaml
3. 次のコマンドを実行して、Pod が作成されていることを確認します。
\$ oc get pod -n sysctl-tuning-test
出力例
NAME READY STATUS RESTARTS AGE tunepod 1/1 Running 0 47s
4. 次のコマンドを実行して、Pod にログインします。
\$ oc rsh -n sysctl-tuning-test tunepod
5. 設定された sysctl フラグの値を確認します。次のコマンドを実行して、net.ipv4.conf.IFNAME.accept_redirectsの値を見つけます。
\$ sysctl net.ipv4.conf.net1.accept redirects

出力例

net.ipv4.conf.net1.accept_redirects = 1

24.8.3. ボンディングされた SR-IOV インターフェイスフラグに関連付けられた Pod の sysctl 設定の設定

ボンディングされた SR-IOV ネットワークデバイスに接続された Pod のインターフェイスレベルの ネットワーク **sysctl** 設定を設定できます。

この例では、設定可能な特定のネットワークインターフェイスレベルの sysctl 設定がボンドインター フェイスに設定されています。

sysctl-tuning-test は、この例で使用される namespace です。

次のコマンドを使用して、sysctl-tuning-test namespace を作成します。

\$ oc create namespace sysctl-tuning-test

24.8.3.1. SR-IOV ネットワークデバイスがボンドされたノードですべての sysctl フラグを設定 する

SR-IOV Network Operator は **SriovNetworkNodePolicy.sriovnetwork.openshift.io** カスタムリソース 定義 (CRD) を OpenShift Container Platform に追加します。SR-IOV ネットワークデバイス は、**SriovNetworkNodePolicy** カスタムリソース (CR) を作成して設定できます。



注記

SriovNetworkNodePolicy オブジェクトで指定された設定を適用する際に、SR-IOV Operator はノードをドレイン (解放) する可能性があり、場合によってはノードの再起動 を行う場合があります。

設定の変更が適用されるまでに数分かかる場合があります。

この手順に従って、SriovNetworkNodePolicy カスタムリソース (CR) を作成します。

手順

 SriovNetworkNodePolicy カスタムリソース (CR) を作成します。次の YAML を policyallflags-sriov-node-network.yaml ファイルとして保存します。policyallflags を設定の 名前に置き換えます。





カスタムリソースオブジェクトの名前。

SR-IOV Network Operator がインストールされている namespace。



ノードセレクターは設定するノードを指定します。選択したノード上の SR-IOV ネット ワークデバイスのみが設定されます。SR-IOV Container Network Interface (CNI) プラグイ ンおよびデバイスプラグインは、選択したノードにのみデプロイされます。



4

オプション: 優先度は 0 から 99 までの整数値で指定されます。値が小さいほど優先度が高 くなります。たとえば、10 の優先度は 99 よりも高くなります。デフォルト値は 99 で す。



NIC セレクターは、Operator が設定するデバイスを特定します。すべてのパラメーターの



オプション:1つ以上のデバイスの物理機能 (PF) 名の配列。



オプション: Virtual Function (VF) のドライバータイプ。許可される唯一の値は **netdevice** です。ベアメタルノードで Mellanox NIC を DPDK モードで動作させるには、**isRdma** を **true** に設定します。

オプション: Remote Direct Memory Access (RDMA) モードを有効にするかどうかを設定 します。デフォルト値は false です。isRdma パラメーターが true に設定される場合、引 き続き RDMA 対応の VF を通常のネットワークデバイスとして使用できます。デバイスは どちらのモードでも使用できます。isRdma を true に設定し、追加の needVhostNet を true に設定して、Fast Datapath DPDK アプリケーションで使用する Mellanox NIC を設定 します。



注記

vfio-pci ドライバータイプはサポートされていません。

2. SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f policyallflags-sriov-node-network.yaml

設定の更新が適用された後に、sriov-network-operator namespace のすべての Pod が **Running** ステータスに移行します。

3. SR-IOV ネットワークデバイスが設定されていることを確認するには、以下のコマンドを実行 します。<node_name> を、設定したばかりの SR-IOV ネットワークデバイスを持つノードの 名前に置き換えます。

\$ oc get sriovnetworknodestates -n openshift-sriov-network-operator <node_name> -o jsonpath='{.status.syncStatus}'

出力例

Succeeded

24.8.3.2. ボンディングされた SR-IOV ネットワークでの sysctl の設定

2 つの SR-IOV インターフェイスから作成されたボンドインターフェイスで、インターフェイス固有の sysctl 設定を設定できます。これを行うには、ボンドネットワーク接続定義のオプションの Plugins パ ラメーターにチューニング設定を追加します。



注記

SR-IOV Network Operator が管理する **NetworkAttachmentDefinition** カスタムリソース は編集しないでください。これを実行すると、追加ネットワークのネットワークトラ フィックが中断する可能性があります。

特定のインターフェイスレベルのネットワーク **sysctl** 設定を変更するには、次の手順を使用して、 Container Network Interface (CNI) チューニングプラグインを使用して、**SriovNetwork** カスタムリ ソース (CR) を作成します。

前提条件

- OpenShift Container Platform CLI (oc) をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとして OpenShift Container Platform クラスターにログイン します。

手順

 次の例の CR のように、ボンドされたインターフェイスの SriovNetwork カスタムリソース (CR) を作成します。YAML を sriov-network-attachment.yaml ファイルとして保存します。

	apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetwork metadata: name: allvalidflags 1 namespace: openshift-sriov-network-operator 2 spec: resourceName: policyallflags 3 networkNamespace: sysctl-tuning-test 4 capabilities: '{ "mac": true, "ips": true }' 5
G	オブジェクトの名前。SR-IOV Network Operator は、同じ名前を持つ NetworkAttachmentDefinition オブジェクトを作成します。
ę	2 SR-IOV Network Operator がインストールされている namespace。
	3 この追加ネットワークの SR-IOV ハードウェアを定義する SriovNetworkNodePolicy オ ブジェクトの spec.resourceName パラメーターの値。
2	SriovNetwork オブジェクトのターゲット namespace。ターゲット namespace の Pod の みを追加ネットワークに割り当てることができます。
	オプション: この追加ネットワークに設定する機能。IP アドレスのサポートを有効にするには、"{ "ips": true }" を指定できます。または、MAC アドレスのサポートを有効にするには "{ "mac": true }" を指定します。
S	SriovNetwork リソースを作成します。
	\$ oc create -f sriov-network-attachment.yaml
.); r	次の例の CR のように、ボンドネットワーク接続定義を作成します。YAML を sriov-bond- network-interface.yaml ファイルとして保存します。
	apiVersion: "k8s.cni.cncf.io/v1" kind: NetworkAttachmentDefinition metadata: name: bond-sysctl-network namespace: sysctl-tuning-test spec: config: '{ "cniVersion":"0.4.0", "name":"bound-net",

2.

З.

"plugins":[

"type":"bond", 1 "mode": "active-backup", 2 "failOverMac": 1, 3 "linksInContainer": true, 4 "miimon": "100", "links": [5 {"name": "net1"}, {"name": "net2"}], "ipam":{ 6 "type":"static" } }, "type":"tuning", 7 "capabilities":{ "mac":true }, "sysctl":{ "net.ipv4.conf.IFNAME.accept redirects": "0", "net.ipv4.conf.IFNAME.accept source route": "0", "net.ipv4.conf.IFNAME.disable policy": "1", "net.ipv4.conf.IFNAME.secure redirects": "0", "net.ipv4.conf.IFNAME.send_redirects": "0", "net.ipv6.conf.IFNAME.accept_redirects": "0", "net.ipv6.conf.IFNAME.accept_source_route": "1", "net.ipv6.neigh.IFNAME.base reachable time ms": "20000", "net.ipv6.neigh.IFNAME.retrans_time_ms": "2000" } } 1 タイプはbondです。



mode 属性は、ボンドモードを指定します。サポートされているボンドモードは次のとおりです。

- balance-rr 0
- active-backup 1
- balance-xor 2
 balance-rr または balance-xor モードの場合には、SR-IOV Virtual Functionの trust モードを on に設定する必要があります。



5

failover 属性は、active-backup モードでは必須です。

linksInContainer=true フラグは、必要なインターフェイスがコンテナー内にあることを ボンディング CNI に通知します。デフォルトでは、ボンディング CNI は、SRIOV および Multus との統合で機能しないホストで、このようなインターフェイスを検索します。 **links** セクションは、結合の作成に使用するインターフェイスを定義します。デフォルト では、Multus は接続されたインターフェイスに net と1から始まる連続した番号の名前を



YAML ブロックスケーラーとしての IPAM CNI プラグインの設定オブジェクトプラグイン は、割り当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。この Pod の例では、 IP アドレスは手動で設定されているため、この場合、**ipam** は static に設定されていま す。



デバイスに追加の機能を追加します。たとえば、**type** フィールドを **tuning** に設定しま す。設定したいインターフェイスレベルのネットワーク **sysctl** を sysctl フィールドに指定 します。この例では、設定可能なすべてのインターフェイスレベルのネットワーク **sysctl** 設定を設定します。

4. ボンドネットワーク接続リソースを作成します。

\$ oc create -f sriov-bond-network-interface.yaml

NetworkAttachmentDefinition CR が正常に作成されることの確認

 以下のコマンドを実行して、SR-IOV Network Operator が NetworkAttachmentDefinition CR を作成していることを確認します。

\$

\$ oc get network-attachment-definitions -n <namespace> 1

<namespace> を、ネットワークアタッチメントの設定時に指定した networkNamespace に置き換えます (例: **sysctl-tuning-test)**。

出力例

NAME AGE bond-sysctl-network 22m allvalidflags 47m



注記

SR-IOV Network Operator が CR を作成するまでに遅延が生じる可能性があります。

SR-IOV ネットワークリソースの追加が成功したことの確認

チューニング CNI が正しく設定され、追加の SR-IOV ネットワーク割り当てが接続されていることを確認するには、以下を実行します。

1. **Pod** CR を作成します。たとえば、次の YAML を **examplepod.yaml** ファイルとして保存しま す。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: tunepod namespace: sysctl-tuning-test annotations:



- SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR の名前。
- 2 オプション: SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り 当てられる SR-IOV デバイスの MAC アドレス。この機能を使用するには、SriovNetwork オブジェクトで { "mac": true } も指定する必要があります。
- 3
- オプション: SR-IOV ネットワーク割り当て定義 CR で定義されるリソースタイプから割り 当てられる SR-IOV デバイスの IP アドレス。IPv4 と IPv6 アドレスの両方がサポートされ ます。この機能を使用するには、SriovNetwork オブジェクトで { "ips": true } も指定す る必要があります。
- 2. YAML を適用します。

\$ oc apply -f examplepod.yaml

3. 次のコマンドを実行して、Pod が作成されていることを確認します。

\$ oc get pod -n sysctl-tuning-test

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE tunepod 1/1 Running 0 47s

4. 次のコマンドを実行して、Pod にログインします。

\$ oc rsh -n sysctl-tuning-test tunepod

5. 設定された sysctl フラグの値を確認します。次のコマンドを実行して、net.ipv6.neigh.IFNAME.base_reachable_time_msの値を見つけます。

\$ sysctl net.ipv6.neigh.bond0.base_reachable_time_ms

出力例

net.ipv6.neigh.bond0.base_reachable_time_ms = 20000

24.9. 高パフォーマンスのマルチキャストの使用

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ハードウェアネットワーク上でマルチキャストを使用できます。

24.9.1. 高パフォーマンスのマルチキャスト

OpenShift SDN ネットワークプラグインは、デフォルトネットワーク上の Pod 間のマルチキャストを サポートします。これは低帯域幅の調整またはサービスの検出での使用に最も適しており、高帯域幅の アプリケーションには適していません。インターネットプロトコルテレビ (IPTV) やマルチポイントビ デオ会議など、ストリーミングメディアなどのアプリケーションでは、Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ハードウェアを使用してネイティブに近いパフォーマンスを提供できます。

マルチキャストに追加の SR-IOV インターフェイスを使用する場合:

- マルチキャストパッケージは、追加の SR-IOV インターフェイス経由で Pod によって送受信される必要があります。
- SR-IOV インターフェイスに接続する物理ネットワークは、OpenShift Container Platform で制 御されないマルチキャストルーティングとトポロジーを判別します。

24.9.2. マルチキャストでの SR-IOV インターフェイスの設定

以下の手順では、サンプルのマルチキャスト用の SR-IOV インターフェイスを作成します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

1. SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetworkNodePolicy metadata: name: policy-example namespace: openshift-sriov-network-operator spec:
resourceName: example nodeSelector: feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true" numVfs: 4 nicSelector: vendor: "8086" pfNames: ['ens803f0'] rootDevices: ['0000:86:00.0']

2. SriovNetwork オブジェクトを作成します。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetwork
metadata:
 name: net-example
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 networkNamespace: default
 ipam: | 🚹
  {
   "type": "host-local", 2
   "subnet": "10.56.217.0/24",
   "rangeStart": "10.56.217.171",
   "rangeEnd": "10.56.217.181",
   "routes": [
    {"dst": "224.0.0.0/5"},
    {"dst": "232.0.0.0/5"}
   ],
   "gateway": "10.56.217.1"
  }
 resourceName: example
```

12 DHCP を IPAM として設定する選択をした場合は、DHCP サーバー経由でデフォルトルート (224.0.0.0/5 および 232.0.0.0/5) をプロビジョニングするようにしてください。これにより、デフォルトのネットワークプロバイダーによって設定された静的なマルチキャストルートが上書きされます。

3. マルチキャストアプリケーションで Pod を作成します。

apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: testpmd
namespace: default
annotations:
k8s.v1.cni.cncf.io/networks: nic1
spec:
containers:
- name: example
image: rhel7:latest
securityContext:
capabilities:
add: ["NET_ADMIN"] 1
command: ["sleep", "infinity"]



NET_ADMIN 機能は、アプリケーションがマルチキャスト IP アドレスを SR-IOV イン ターフェイスに割り当てる必要がある場合にのみ必要です。それ以外の場合は省略できま す。

24.10. DPDK および RDMA の使用

コンテナー化された Data Plane Development Kit (DPDK) アプリケーションは OpenShift Container Platform でサポートされています。Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ネットワークハードウェア は、Data Plane Development Kit (DPDK) および Remote Direct Memory Access (RDMA) で利用できま す。

対応しているデバイスの詳細は、Supported devices を参照してください。

24.10.1. NIC を使用した DPDK モードでの Virtual Function の使用

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- SR-IOV Network Operator をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下の SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成してから、YAML を intel-dpdk-nodepolicy.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetworkNodePolicy metadata: name: intel-dpdk-node-policy namespace: openshift-sriov-network-operator spec: resourceName: intelnics nodeSelector: feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true" priority: <priority> numVfs: <num> nicSelector: vendor: "8086" deviceID: "158b" pfNames: ["<pf_name>", ...] rootDevices: ["<pci_bus_id>", "..."] deviceType: vfio-pci



Virtual Function (VF)のドライバータイプをvfio-pciに指定します。



注記

SriovNetworkNodePolicy の各オプションに関する詳細は、Configuring SR-IOV network devices セクションを参照してください。

SriovNetworkNodePolicy オブジェクトで指定された設定を適用する際に、SR-IOV Operator はノードをドレイン (解放) する可能性があり、場合によっては ノードの再起動を行う場合があります。設定の変更が適用されるまでに数分の時 間がかかる場合があります。エビクトされたワークロードを処理するために、ク ラスター内に利用可能なノードが十分にあることを前もって確認します。

設定の更新が適用された後に、**openshift-sriov-network-operator** namespace のすべての Pod が **Running** ステータスに変更されます。

2. 以下のコマンドを実行して SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f intel-dpdk-node-policy.yaml

3. 以下の **SriovNetwork** オブジェクトを作成してから、YAML を **intel-dpdk-network.yaml** ファ イルに保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetwork
metadata:
name: intel-dpdk-network
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
networkNamespace: <target_namespace></target_namespace>
ipam: -
1
vlan: <vlan></vlan>
resourceName: intelnics



IPAM CNI プラグインの設定オブジェクトを YAML ブロックスケーラーとして指定しま す。プラグインは、割り当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。



注記

SriovNetworkの各オプションに関する詳細は、「SR-IOV の追加ネットワークの設定」セクションを参照してください。

オプションのライブラリー app-netutil は、コンテナーの親 Pod に関するネットワーク情報を 収集するための複数の API メソッドを提供します。

4. 以下のコマンドを実行して、**SriovNetwork** オブジェクトを作成します。



- 5. 以下の Pod 仕様を作成してから、YAML を intel-dpdk-pod.yaml ファイルに保存します。
 - apiVersion: v1 kind: Pod metadata:



CPU の数を指定します。DPDK Pod には通常、kubelet から排他的 CPU を割り当てる必



hugepage サイズ hugepages-1Gi または hugepages-2Mi を指定し、DPDK Pod に割り 当てられる hugepage の量を指定します。2Mi および 1Gi hugepage を別々に設定しま

6. 以下のコマンドを実行して DPDK Pod を作成します。



24.10.2. Mellanox NIC を使用した DPDK モードでの Virtual Function の使用

Mellanox NIC で DPDK モードの Virtual Function を使用して、ネットワークノードポリシーを作成し、 Data Plane Development Kit (DPDK) Pod を作成できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) Network Operator がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 次の SriovNetworkNodePolicy YAML 設定を mlx-dpdk-node-policy.yaml ファイルに保存します。



Virtual Function (VF) のドライバータイプを **netdevice** に指定します。Mellanox SR-IOV Virtual Function (VF) は、**vfio-pci** デバイスタイプを使用せずに DPDK モードで機能しま



リモートダイレクトメモリーアクセス (RDMA) モードを有効にします。これは、DPDK モードで機能させるために Mellanox カードで必要です。

注記



SriovNetworkNodePolicy オブジェクトの各オプションの詳細な説明について は SR-IOV ネットワークデバイスの設定 を参照してください。

SriovNetworkNodePolicy オブジェクトで指定された設定を適用する際に、SR-IOV Operator はノードをドレイン (解放) する可能性があり、場合によっては ノードの再起動を行う場合があります。設定の変更が適用されるまでに数分かか る場合があります。エビクトされたワークロードを処理するために、クラスター 内に利用可能なノードが十分にあることを前もって確認します。

設定の更新が適用された後に、**openshift-sriov-network-operator** namespace のすべての Pod が **Running** ステータスに変更されます。

2. 以下のコマンドを実行して SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f mlx-dpdk-node-policy.yaml

3. 次の SriovNetwork YAML 設定を mlx-dpdk-network.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetwork
metadata:
name: mlx-dpdk-network
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
networkNamespace: <target_namespace></target_namespace>
ipam: - 🚺
vlan: <vlan></vlan>
resourceName: mlxnics



IP アドレス管理 (IPAM) コンテナーネットワークインターフェイス (CNI) プラグインの設 定オブジェクトを YAML ブロックスカラーとして指定します。プラグインは、割り当て定 義についての IP アドレスの割り当てを管理します。



注記

SriovNetwork オブジェクトの各オプションの詳細な説明については SR-IOV ネットワークデバイスの設定 を参照してください。

app-netutil オプションライブラリーには、コンテナーの親 Pod に関するネットワーク情報を 収集するための API メソッドが複数あります。

4. 以下のコマンドを実行して、**SriovNetwork** オブジェクトを作成します。



5. 次の Pod YAML 設定を mlx-dpdk-pod.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata:



hugepage サイズ **hugepages-1Gi** または **hugepages-2Mi** を指定し、DPDK Pod に割り 当てられる hugepage の量を指定します。**2Mi** および **1Gi** hugepage を別々に設定しま

6. 以下のコマンドを実行して DPDK Pod を作成します。

\$ oc create -f mlx-dpdk-pod.yaml

24.10.3. 特定の DPDK ラインレート達成に関する概要

特定の Data Plane Development Kit (DPDK) ラインレートを実現するには、Node Tuning Operator をデ プロイし、Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) を設定します。次のリソースの DPDK 設定も調整す る必要があります。

- 分離された CPU
- hugepage
- トポロジースケジューラー



注記

OpenShift Container Platform の以前のバージョンでは、パフォーマンスアドオン Operator を使用して自動チューニングを実装し、OpenShift Container Platform アプリ ケーションの低レイテンシーパフォーマンスを実現していました。OpenShift Container Platform 4.11 以降では、この機能は Node Tuning Operator の一部です。

DPDK テスト環境

次の図は、トラフィックテスト環境のコンポーネントを示しています。



- トラフィックジェネレーター: 大量のパケットトラフィックを生成できるアプリケーション。
- SR-IOV 対応 NIC: SR-IOV に対応したネットワークインターフェイスカードです。カードは、 物理インターフェイス上で多数の Virtual Function を実行します。
- Physical Function (PF): SR-IOV インターフェイスをサポートするネットワークアダプターの PCI Express (PCIe) 機能。

- Virtual Function (VF): SR-IOV をサポートするネットワークアダプター上の軽量の PCle 機能。VF は、ネットワークアダプターの PCle PF に関連付けられています。VF は、ネットワークアダプターの仮想化されたインスタンスを表します。
- **スイッチ**: ネットワークスイッチ。ノードは中断なしに接続することもできます。
- testpmd: DPDK に含まれるサンプルアプリケーション。testpmd アプリケーションを使用して、パケット転送モードで DPDK をテストできます。testpmd アプリケーションは、DPDK ソフトウェア開発キット (SDK)を使用して本格的なアプリケーションを構築する方法の例でもあります。
- worker 0 および worker 1: OpenShift Container Platform $\mathcal{I} \mathbb{K}_{\circ}$

24.10.4. SR-IOV と Node Tuning Operator を使用した DPDK ラインレートの実現

Node Tuning Operator を使用して、分離された CPU、ヒュージページ、およびトポロジースケジュー ラーを設定できます。その後、Node Tuning Operator と Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) を使 用して、特定の Data Plane Development Kit (DPDK) ラインレートを実現できます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- SR-IOV Network Operator がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- スタンドアロン Node Tuning Operator をデプロイしている。



注記

OpenShift Container Platform の以前のバージョンでは、パフォーマンスアドオ ン Operator を使用して自動チューニングを実装し、OpenShift アプリケーショ ンの低レイテンシーパフォーマンスを実現していました。OpenShift Container Platform 4.11 以降では、この機能は Node Tuning Operator の一部です。

手順

1. 次の例に基づいて PerformanceProfile オブジェクトを作成します。

apiVersion: performance.openshift.io/v2
kind: PerformanceProfile
metadata:
name: performance
spec:
globallyDisableIrqLoadBalancing: true
cpu:
isolated: 21-51,73-103 1
reserved: 0-20,52-72 2
hugepages:
defaultHugepagesSize: 1G 3
pages:
- count: 32
size: 1G
net:

userLevelNetworking: true numa: topologyPolicy: "single-numa-node" nodeSelector: node-role.kubernetes.io/worker-cnf: ""

- システムでハイパースレッディングが有効になっている場合は、関連するシンボリックリ ンクを **isolated** および **reserved** の CPU グループに割り当てます。システムに複数の Non-Uniform Memory Access (NUMA) ノードが含まれている場合は、両方の NUMA から 両方のグループに CPU を割り当てます。このタスクには Performance Profile Creator を 使用することもできます。詳細は、コントロールプレーンプロファイルの作成 について参 照してください。
- 2

キューが予約済みの CPU 数に設定されているデバイスのリストを指定することもできま す。詳細については Node Tuning Operator を使用した NIC キューの削減</mark>を参照してく ださい。

- 3 必要なヒュージページの数とサイズを割り当てます。ヒュージページの NUMA 設定を指定できます。デフォルトでは、システムは、そのシステムにあるすべての NUMA ノードに偶数分を割り当てます。必要に応じて、ノードのリアルタイムカーネルの使用をリクエストできます。詳しくは、リアルタイム機能を備えたワーカーのプロビジョニングを参照してください。
- 2. yaml ファイルを mlx-dpdk-perfprofile-policy.yaml として保存します。
- 3. 次のコマンドを使用して、パフォーマンスプロファイルを適用します。

\$ oc create -f mlx-dpdk-perfprofile-policy.yaml

24.10.4.1. Virtual Functionの SR-IOV Network Operatorの例

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) ネットワーク Operator を使用して、ノード上の SR-IOV をサ ポートする Physical Function NIC から Virtual Function (VF) を割り当てて設定できます。

Operator のデプロイの詳細については、**SR-IOV Network Operator のインストール**を参照してくださ い。SR-IOV ネットワークデバイスの設定の詳細については、**SR-IOV ネットワークデバイスの設定** を 参照してください。

Intel VF と Mellanox VF での Data Plane Development Kit (DPDK) ワークロードの実行にはいくつかの 違いがあります。このセクションでは、両方の VF タイプのオブジェクト設定の例を示します。以下 は、Intel NIC で DPDK アプリケーションを実行するために使用される **sriovNetworkNodePolicy** オブ ジェクトの例です。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
name: dpdk-nic-1
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
deviceType: vfio-pci
needVhostNet: true
nicSelector:
pfNames: ["ens3f0"]
nodeSelector:
```

```
node-role.kubernetes.io/worker-cnf: ""
 numVfs: 10
 priority: 99
 resourceName: dpdk nic 1
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
 name: dpdk-nic-1
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 deviceType: vfio-pci
 needVhostNet: true
 nicSelector:
  pfNames: ["ens3f1"]
 nodeSelector:
 node-role.kubernetes.io/worker-cnf: ""
 numVfs: 10
 priority: 99
 resourceName: dpdk nic 2
```



Intel NIC の場合、deviceType は vfio-pci である必要があります。

DPDK ワークロードとのカーネル通信が必要な場合は、**needVhostNet: true** を追加します。これ により、/**dev/net/tun** および /**dev/vhost-net** デバイスがコンテナーにマウントされ、アプリケー ションがタップデバイスを作成し、タップデバイスを DPDK ワークロードに接続できるようにな ります。

以下は、Mellanox NIC の sriovNetworkNodePolicy オブジェクトの例です。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
 name: dpdk-nic-1
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 deviceType: netdevice 1
 isRdma: true 2
 nicSelector:
  rootDevices:
   - "0000:5e:00.1"
 nodeSelector:
  node-role.kubernetes.io/worker-cnf: ""
 numVfs: 5
 priority: 99
 resourceName: dpdk_nic_1
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
 name: dpdk-nic-2
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 deviceType: netdevice
 isRdma: true
```

nicSelector: rootDevices: - "0000:5e:00.0" nodeSelector: node-role.kubernetes.io/worker-cnf: "" numVfs: 5 priority: 99 resourceName: dpdk_nic_2

- Mellanox デバイスの場合、deviceType は netdevice である必要があります。
- 2 Mellanox デバイスの場合、isRdma は true である必要があります。Mellanox カードは、Flow Bifurcation を使用して DPDK アプリケーションに接続されます。このメカニズムは、Linux ユー ザー空間とカーネル空間の間でトラフィックを分割し、ラインレートの処理能力を高めることがで きます。

24.10.4.2. SR-IOV Network Operator の例

以下は、sriovNetwork オブジェクトの定義例です。この場合、Intel と Mellanox の設定は同じです。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
  kind: SriovNetwork
  metadata:
   name: dpdk-network-1
   namespace: openshift-sriov-network-operator
  spec:
   ipam: '{"type": "host-local","ranges": [[{"subnet": "10.0.1.0/24"}]],"dataDir":
    "/run/my-orchestrator/container-ipam-state-1"}
   networkNamespace: dpdk-test 2
   spoofChk: "off"
   trust: "on"
   resourceName: dpdk_nic_1 3
  apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
  kind: SriovNetwork
  metadata:
   name: dpdk-network-2
   namespace: openshift-sriov-network-operator
  spec:
   ipam: '{"type": "host-local", "ranges": [[{"subnet": "10.0.2.0/24"}]], "dataDir":
    "/run/my-orchestrator/container-ipam-state-1"}"
   networkNamespace: dpdk-test
   spoofChk: "off"
   trust: "on"
   resourceName: dpdk nic 2
    Whereabouts など、別の IP Address Management (IPAM) 実装を使用できます。詳細については
    Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定を参照してください。
    ネットワーク接続定義が作成される networkNamespace を要求する必要があります。openshift-
    sriov-network-operator namespace で sriovNetwork CR を作成する必要があります。
    resourceName の値は、sriovNetworkNodePolicy で作成された resourceName の値と一致する
3
    必要があります。
```

24.10.4.3. DPDK ベースワークロードの例

以下は、Data Plane Development Kit (DPDK) コンテナーの例です。

```
apiVersion: v1
kind: Namespace
metadata:
name: dpdk-test
---
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks: '[ 1
   "name": "dpdk-network-1",
   "namespace": "dpdk-test"
  },
   ł
   "name": "dpdk-network-2",
   "namespace": "dpdk-test"
  }
 ľ
  irq-load-balancing.crio.io: "disable" (2)
  cpu-load-balancing.crio.io: "disable"
  cpu-quota.crio.io: "disable"
 labels:
  app: dpdk
 name: testpmd
 namespace: dpdk-test
spec:
 runtimeClassName: performance-performance 3
 containers:
  - command:
    - /bin/bash
    - -C
    - sleep INF
   image: registry.redhat.io/openshift4/dpdk-base-rhel8
   imagePullPolicy: Always
   name: dpdk
   resources: 4
    limits:
      cpu: "16"
      hugepages-1Gi: 8Gi
      memory: 2Gi
    requests:
      cpu: "16"
      hugepages-1Gi: 8Gi
      memory: 2Gi
   securityContext:
    capabilities:
      add:
       - IPC_LOCK
       - SYS_RESOURCE
       - NET_RAW
```

- NET_ADMIN runAsUser: 0 volumeMounts: - mountPath: /mnt/huge name: hugepages terminationGracePeriodSeconds: 5 volumes: - emptyDir: medium: HugePages name: hugepages

必要な SR-IOV ネットワークをリクエストします。デバイスのリソースは自動挿入されます。

CPU と IRQ 負荷分散ベースを無効にします。詳しくは **個々の Pod の割り込み処理の無効化** を参照してください。

3 runtimeClass は performance-performance に設定します。runtimeClass は HostNetwork また は privileged に設定しないでください。

4 サービスの品質 (QoS) が **Guaranteed** さの Pod を開始するには、要求と制限に対して同じ数のリ ソースを要求します。



注記

SLEEP 状態の Pod を起動し、その Pod で exec 操作を実行して testpmd または DPDK ワークロードを開始しないでください。これにより、**exec** プロセスがどの CPU にも固定されていないため、割り込みが追加される可能性があります。

24.10.4.4. testpmd スクリプトの例

以下は、testpmd を実行するスクリプトの例です。

#!/bin/bash
set -ex
export CPU=\$(cat /sys/fs/cgroup/cpuset/cpuset.cpus)
echo \${CPU}

dpdk-testpmd -I \${CPU} -a \${PCIDEVICE_OPENSHIFT_IO_DPDK_NIC_1} -a \${PCIDEVICE_OPENSHIFT_IO_DPDK_NIC_2} -n 4 -- -i --nb-cores=15 --rxd=4096 -- rxq=7 --txq=7 --forward-mode=mac --eth-peer=0,50:00:00:00:00:01 --eth-peer=1,50:00:00:00:00:02

この例では、2 つの異なる **sriovNetwork** CR を使用しています。環境変数には、Pod に割り当てられ た Virtual Function (VF) PCI アドレスが含まれています。Pod 定義で同じネットワークを使用する場合 は、**pciAddress** を分割する必要があります。トラフィックジェネレータの正しい MAC アドレスを設 定することが重要です。この例では、カスタム MAC アドレスを使用しています。

24.10.5. Mellanox NIC を使用した RDMA モードでの Virtual Function の使用



重要

RoCE (RDMA over Converged Ethernet) はテクノロジープレビュー機能としてのみご利 用いただけます。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレ ベルアグリーメント (SLA) の対象外であり、機能的に完全ではない場合があります。 Red Hat は、実稼働環境でこれらを使用することを推奨していません。テクノロジープ レビュー機能は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行い フィードバックを提供していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

RoCE (RDMA over Converged Ethernet) は、OpenShift Container Platform で RDMA を使用する場合 に唯一サポートされているモードです。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- SR-IOV Network Operator をインストールします。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下の SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成してから、YAML を mlx-rdma-nodepolicy.yaml ファイルに保存します。



注記

SriovNetworkNodePolicy の各オプションに関する詳細は、Configuring SR-IOV network devices セクションを参照してください。

SriovNetworkNodePolicy オブジェクトで指定された設定を適用する際に、SR-IOV Operator はノードをドレイン (解放) する可能性があり、場合によっては ノードの再起動を行う場合があります。設定の変更が適用されるまでに数分の時 間がかかる場合があります。エビクトされたワークロードを処理するために、ク ラスター内に利用可能なノードが十分にあることを前もって確認します。

設定の更新が適用された後に、**openshift-sriov-network-operator** namespace のすべての Pod が **Running** ステータスに変更されます。

2. 以下のコマンドを実行して SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。



3. 以下の **SriovNetwork** オブジェクトを作成してから、YAML を **mlx-rdma-network.yaml** ファ イルに保存します。

apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1 kind: SriovNetwork
metadata:
name: mlx-rdma-network
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
networkNamespace: <target_namespace></target_namespace>
ipam: - 🚺
#
vlan: <vlan></vlan>
resourceName: mlxnics



IPAM CNI プラグインの設定オブジェクトを YAML ブロックスケーラーとして指定しま す。プラグインは、割り当て定義についての IP アドレスの割り当てを管理します。



注記

SriovNetwork の各オプションに関する詳細は、「SR-IOV の追加ネットワークの設定」セクションを参照してください。

オプションのライブラリー app-netutil は、コンテナーの親 Pod に関するネットワーク情報を 収集するための複数の API メソッドを提供します。

4. 以下のコマンドを実行して SriovNetworkNodePolicy オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f mlx-rdma-network.yaml

5. 以下の Pod 仕様を作成してから、YAML を mlx-rdma-pod.yaml ファイルに保存します。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata:



SriovNetwork オブジェクトの **mlx-rdma-network** が作成される同じ **target_namespace** を指定します。Pod を異なる namespace に作成する場合、**target_namespace** を **Pod** 仕様および **SriovNetwork** オブジェクトの両方で変更します。



アプリケーションとアプリケーションが使用する RDMA ライブラリーが含まれる RDMA イメージを指定します。



hugepageの割り当て、システムリソースの割り当て、およびネットワークインターフェ イスアクセス用のコンテナー内のアプリケーションに必要な追加機能を指定します。

4 hugepage ボリュームを /mnt/huge の下の RDMA Pod にマウントします。hugepage ボ リュームは、メディアが Hugepages に指定されている emptyDir ボリュームタイプでサ ポートされます。



CPU の数を指定します。RDMA Pod には通常、kubelet から排他的 CPU を割り当てる必要があります。これは、CPU マネージャーポリシーを **static** に設定し、**Guaranteed** QoS を持つ Pod を作成して実行されます。



hugepage サイズ **hugepages-1Gi** または **hugepages-2Mi** を指定し、RDMA Pod に割り 当てられる hugepage の量を指定します。2Mi および 1Gi hugepage を別々に設定しま す。1Gi hugepage を設定するには、カーネル引数をノードに追加する必要があります。

6. 以下のコマンドを実行して RDMA Pod を作成します。

\$ oc create -f mlx-rdma-pod.yaml

24.10.6. OpenStack で OVS-DPDK を使用するクラスター用のテスト Pod テンプレート

次の **testpmd** Pod では、ヒュージページ、予約済み CPU、および SR-IOV ポートを使用したコンテナーの作成を紹介します。

testpmd Pod の例

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: testpmd-dpdk
 namespace: mynamespace
 annotations:
  cpu-load-balancing.crio.io: "disable"
  cpu-quota.crio.io: "disable"
# ...
spec:
 containers:
 - name: testpmd
  command: ["sleep", "99999"]
  image: registry.redhat.io/openshift4/dpdk-base-rhel8:v4.9
  securityContext:
   capabilities:
     add: ["IPC_LOCK", "SYS_ADMIN"]
   privileged: true
   runAsUser: 0
  resources:
   requests:
     memory: 1000Mi
     hugepages-1Gi: 1Gi
    cpu: '2'
     openshift.io/dpdk1:1
   limits:
     hugepages-1Gi: 1Gi
     cpu: '2'
     memory: 1000Mi
     openshift.io/dpdk1: 1
  volumeMounts:
   - mountPath: /mnt/huge
     name: hugepage
     readOnly: False
 runtimeClassName: performance-cnf-performanceprofile 2
 volumes:
 - name: hugepage
  emptyDir:
   medium: HugePages
```

この例の **dpdk1** という名前は、ユーザーが作成した **SriovNetworkNodePolicy** リソースです。こ の名前は、作成したリソースの名前に置き換えることができます。

2 パフォーマンスプロファイルの名前が cnf-performance profile でない場合は、その文字列を正し いパフォーマンスプロファイル名に置き換えます。

24.10.7. OpenStack で OVS ハードウェアオフロードを使用するクラスター用のテスト Pod テンプレート

次の **testpmd** Pod は、Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) での Open vSwitch (OVS) ハードウェア オフロードを示しています。

testpmd Pod の例

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: testpmd-sriov
 namespace: mynamespace
 annotations:
  k8s.v1.cni.cncf.io/networks: hwoffload1
spec:
 runtimeClassName: performance-cnf-performanceprofile
 containers:
 - name: testpmd
  command: ["sleep", "99999"]
  image: registry.redhat.io/openshift4/dpdk-base-rhel8:v4.9
  securityContext:
   capabilities:
    add: ["IPC_LOCK","SYS_ADMIN"]
   privileged: true
   runAsUser: 0
  resources:
   requests:
    memory: 1000Mi
    hugepages-1Gi: 1Gi
    cpu: '2'
   limits:
    hugepages-1Gi: 1Gi
    cpu: '2'
    memory: 1000Mi
  volumeMounts:
   - mountPath: /mnt/huge
    name: hugepage
    readOnly: False
 volumes:
 - name: hugepage
  emptyDir:
   medium: HugePages
```



パフォーマンスプロファイルの名前が **cnf-performance profile** でない場合は、その文字列を正し いパフォーマンスプロファイル名に置き換えます。

24.10.8. 関連情報

- パフォーマンスプロファイルの作成
- Node Tuning Operator を使用した NIC キューの削減
- リアルタイム機能のあるワーカーのプロビジョニング

- SR-IOV Network Operator のインストール
- SR-IOV ネットワークデバイスの設定
- Whereabouts を使用した動的 IP アドレス割り当ての設定
- 個別の Pod の割り込み処理の無効化
- SR-IOV イーサネットネットワーク割り当ての設定
- app-netutil library ライブラリーは、コンテナーの親 Pod に関するネットワーク情報を収集する ための複数の API メソッドを提供します。

24.11. POD レベルのボンディングの使用

Pod レベルでのボンディングは、高可用性とスループットを必要とする Pod 内のワークロードを有効 にするために不可欠です。Pod レベルのボンディングでは、カーネルモードインターフェイスで複数の Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) Virtual Function インターフェイスからボンドインターフェイス を作成できます。SR-IOV Virtual Function は Pod に渡され、カーネルドライバーに割り当てられま す。

Pod レベルのボンディングが必要なシナリオには、異なる Physical Function 上の複数の SR-IOV Virtual Function からのボンディングインターフェイスの作成が含まれます。ホストの2つの異なる Physical Function からボンディングインターフェイスを作成して、Pod レベルで高可用性およびスルー プットを実現するために使用できます。

SR-IOV ネットワークの作成、ネットワークポリシー、ネットワーク接続定義、Pod などのタスクのガ イダンスはSR-IOV ネットワークデバイスの設定を参照してください。

24.11.1.2 つの SR-IOV インターフェイスからのボンドインターフェイスの設定

ボンディングを使用して、複数のネットワークインターフェイスを、1つの論理的なボンディングされ たインターフェイスに集約できます。Bond Container Network Interface (Bond-CNI) により、コンテ ナーでボンディング機能を使用できます。

Bond-CNI は、Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) Virtual Function を使用して作成し、それらをコ ンテナーネットワーク namespace に配置できます。

OpenShift Container Platform は、SR-IOV Virtual Functions を使用する Bond-CNI のみをサポートします。SR-IOV Network Operator は、Virtual Function の管理に必要な SR-IOV CNI プラグインを提供します。他の CNI またはインターフェイスのタイプはサポートされていません。

前提条件

- SR-IOV Network Operator をインストールおよび設定して、コンテナー内の Virtual Functions を取得する必要があります。
- SR-IOV インターフェイスを設定するには、インターフェイスごとに SR-IOV ネットワークと ポリシーを作成する必要があります。
- SR-IOV Network Operator は、定義された SR-IOV ネットワークとポリシーをもとに、各 SR-IOV インターフェイスのネットワーク接続定義を作成します。
- **linkState** は、SR-IOV Virtual Function のデフォルト値 **auto** に設定されます。

24.11.1.1. ボンドネットワーク接続定義の作成

SR-IOV Virtual Function が使用可能になったので、ボンドネットワーク接続定義を作成できます。

apiVersion: "k8s.cni.cncf.io/v1" kind: NetworkAttachmentDefinition metadata: name: bond-net1 namespace: demo spec: config: '{ "type": "bond", 1 "cniVersion": "0.3.1", "name": "bond-net1", "mode": "active-backup", 2 "failOverMac": 1, 3 "linksInContainer": true, 4 "miimon": "100", "mtu": 1500, "links": [5 {"name": "net1"}, {"name": "net2"}], "ipam": { "type": "host-local", "subnet": "10.56.217.0/24", "routes": [{ "dst": "0.0.0.0/0" }], "gateway": "10.56.217.1" } }' cni-type は常に **bond** に設定されます。 mode 属性は、ボンドモードを指定します。 注記 サポートされているボンドモードは次のとおりです。 • balance-rr - 0 active-backup - 1 balance-xor - 2

2

balance-rr または **balance-xor** モードの場合には、SR-IOV Virtual Function の **trust** モードを **on** に設定する必要があります。

active-backup モードでは フェイルオーバー 属性が必須であり、1 に設定する必要があります。

linksInContainer=true フラグは、必要なインターフェイスがコンテナー内にあることをボンディ ング CNI に通知します。デフォルトでは、ボンディング CNI は、SRIOV および Multus との統合 で機能しないホストで、このようなインターフェイスを検索します。 5

links セクションは、結合の作成に使用するインターフェイスを定義します。デフォルトでは、 Multus は接続されたインターフェイスに net と1から始まる連続した番号の名前を付けます。

24.11.1.2. ボンディングインターフェイスを使用した Pod の作成

1. **podbonding.yaml** などの名前の YAMLファイル以下の内容を追加して Pod を作成し、この設 定をテストします。

apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: bondpod1
namespace: demo
annotations:
k8s.v1.cni.cncf.io/networks: demo/sriovnet1, demo/sriovnet2, demo/bond-net1 1
spec:
containers:
- name: podexample
image: quay.io/openshift/origin-network-interface-bond-cni:4.11.0
command: ["/bin/bash", "-c", "sleep INF"]
ラットロークのアノテーションに注音 アノゼさい こわにけ CD IOV ラットローク

- ネットワークのアノテーションに注意してください。これには、SR-IOV ネットワーク割 り当てが 2 つとボンドネットワーク割り当てが 1 つ含まれています。ボンド割り当ては、 2 つの SR-IOV インターフェイスをボンドポートインターフェイスとして使用します。
- 2. 以下のコマンドを実行して yaml を適用します。



3. 次のコマンドを使用して Pod インターフェイスを検査します。

```
$ oc rsh -n demo bondpod1
sh-4.4#
sh-4.4# ip a
1: lo: <LOOPBACK,UP,LOWER UP> mtu 65536 gdisc noqueue state UNKNOWN glen 1000
link/loopback 00:00:00:00:00 brd 00:00:00:00:00:00
inet 127.0.0.1/8 scope host lo
valid Ift forever preferred Ift forever
3: eth0@if150: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER UP,M-DOWN> mtu 1450 qdisc
noqueue state UP
link/ether 62:b1:b5:c8:fb:7a brd ff:ff:ff:ff:ff:ff
inet 10.244.1.122/24 brd 10.244.1.255 scope global eth0
valid Ift forever preferred Ift forever
4: net3: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP400> mtu 1500 qdisc noqueue state
UP glen 1000
link/ether 9e:23:69:42:fb:8a brd ff:ff:ff:ff:ff:ff 1
inet 10.56.217.66/24 scope global bond0
valid Ift forever preferred Ift forever
43: net1: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP800> mtu 1500 qdisc mq master
bond0 state UP glen 1000
link/ether 9e:23:69:42:fb:8a brd ff:ff:ff:ff:ff:ff 2
```

44: net2: <BROADCAST,MULTICAST,UP,LOWER_UP800> mtu 1500 qdisc mq master bond0 state UP qlen 1000 link/ether 9e:23:69:42:fb:8a brd ff:ff:ff:ff:ff:ff 3

1

- 結合インターフェイスには、自動的に **net3** という名前が付けられます。特定のインター フェイス名を設定するには、Pod の **k8s.v1.cni.cncf.io/networks** アノテーションに **@name** 接尾辞を追加します。
- **net1**インターフェイスは、SR-IOV Virtual Function に基づいています。
- **net2**インターフェイスは、SR-IOV Virtual Function に基づいています。



注記

Pod アノテーションでインターフェイス名が設定されていない場合、インター フェイス名は net<n> として自動的に割り当てられます (<n> は 1 から始まりま す)。

 オプション: たとえば bond0 などの特定のインターフェイス名を設定する場合は、次のように k8s.v1.cni.cncf.io/networks アノテーションを編集し、bond0 をインターフェイス名として設 定します。

annotations: k8s.v1.cni.cncf.io/networks: demo/sriovnet1, demo/sriovnet2, demo/bond-net1@bond0

24.12. ハードウェアオフロードの設定

クラスター管理者は、互換性のあるノードでハードウェアオフロードを設定して、データ処理パフォーマンスを向上させ、ホスト CPU の負荷を軽減できます。

24.12.1. ハードウェアのオフロードについて

Open vSwitch ハードウェアオフロードは、ネットワークタスクを CPU から迂回させ、ネットワークイ ンターフェイスコントローラー上の専用プロセッサーにオフロードすることにより、ネットワークタス クを処理する方法です。その結果、クラスターは、データ転送速度の高速化、CPU ワークロードの削 減、およびコンピューティングコストの削減の恩恵を受けることができます。

この機能の重要な要素は、SmartNICと呼ばれる最新クラスのネットワークインターフェイスコント ローラーです。SmartNICは、計算量の多いネットワーク処理タスクを処理できるネットワークイン ターフェイスコントローラーです。専用のグラフィックカードがグラフィックパフォーマンスを向上さ せるのと同じように、SmartNICはネットワークパフォーマンスを向上させることができます。いずれ の場合も、専用プロセッサーにより、特定のタイプの処理タスクのパフォーマンスが向上します。

OpenShift Container Platform では、互換性のある SmartNIC を持つベアメタルノードのハードウェア オフロードを設定できます。ハードウェアオフロードは、SR-IOV Network Operator によって設定およ び有効化されます。

ハードウェアのオフロードは、すべてのワークロードまたはアプリケーションタイプと互換性があるわ けではありません。次の2つの通信タイプのみがサポートされています。

- pod-to-pod
- pod-to-service。サービスは通常の Pod に基づく ClusterIP サービスです。

すべての場合において、ハードウェアのオフロードは、それらの Pod とサービスが互換性のある SmartNIC を持つノードに割り当てられている場合にのみ行われます。たとえば、ハードウェアをオフ ロードしているノードの Pod が、通常のノードのサービスと通信しようとしているとします。通常の ノードでは、すべての処理がカーネルで行われるため、Pod からサービスへの通信の全体的なパフォー マンスは、その通常のノードの最大パフォーマンスに制限されます。ハードウェアオフロードは、 DPDK アプリケーションと互換性がありません。

ノードでのハードウェアのオフロードを有効にし、使用する Pod を設定しないと、Pod トラフィック のスループットパフォーマンスが低下する可能性があります。OpenShift Container Platform で管理さ れる Pod のハードウェアオフロードを設定することはできません。

24.12.2. サポートされるデバイス

ハードウェアオフロードは、次のネットワークインターフェイスコントローラーでサポートされています。

表24.15 サポート対象のネットワークインターフェイスコントローラー

製造元	モデル	ベンダー ID	デバイス ID
Mellanox	MT27800 Family [ConnectX-5]	15b3	1017
Mellanox	MT28880 Family [ConnectX-5 Ex]	15b3	1019

表24.16 テクノロジープレビューネットワークインターフェイスコントローラー

製造元	モデル	ベンダー ID	デバイス ID
Mellanox	MT2892 Family [ConnectX-6 Dx]	15b3	101d
Mellanox	MT2894 ファミリー [ConnectX-6 Lx]	15b3	101f
Mellanox	ConnectX-6 NIC モードの MT42822 BlueField-2	15b3	a2d6



重要

ConnectX-6 NIC モードデバイスでの ConnectX-6 Lx または BlueField-2 の使用は、テ クノロジープレビュー機能のみです。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サ ポートのサービスレベルアグリーメント (SLA)の対象外であり、機能的に完全ではない 場合があります。Red Hat は、実稼働環境でこれらを使用することを推奨していませ ん。テクノロジープレビュー機能は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で 機能のテストを行いフィードバックを提供していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

24.12.3. 前提条件

 クラスターに、ハードウェアのオフロードがサポートされているネットワークインターフェイ スコントローラーを備えたベアメタルマシンが少なくとも1台ある。

- SR-IOV Network Operator をインストール している。
- クラスターで OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用 している。
- OVN-Kubernetes ネットワークプラグイン設定 で、gatewayConfig.routingViaHost フィール ドが false に設定されています。

24.12.4. ハードウェアオフロード用のマシン設定プールの設定

ハードウェアオフロードを有効にするには、最初に専用のマシン設定プールを作成し、SR-IOV Network Operator と連携するように設定する必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

- 1. ハードウェアオフロードを使用するマシンのマシン設定プールを作成します。
 - a. 次の例のようなコンテンツを含む mcp-offloading.yaml などのファイルを作成します。



b. マシン設定プールの設定を適用します。

\$ oc create -f mcp-offloading.yaml

 マシン設定プールにノードを追加します。プールのノードロールラベルで各ノードにラベルを 付けます。

\$ oc label node worker-2 node-role.kubernetes.io/mcp-offloading=""

3. オプション:新しいプールが作成されたことを確認するには、次のコマンドを実行します。

\$ oc get nodes

出力例

NAME	STATU	S ROLES	A	GE	VERSION
master-0	Ready	master	2d	v1.25	5.0
master-1	Ready	master	2d	v1.25	5.0
master-2	Ready	master	2d	v1.25	5.0
worker-0	Ready	worker	2d	v1.25	.0
worker-1	Ready	worker	2d	v1.25	.0
worker-2	Ready	mcp-offloading	g,worker	47h	v1.25.0
worker-3	Ready	mcp-offloading	g,worker	47h	v1.25.0

- 4. このマシン設定プールを SriovNetworkPoolConfig カスタムリソースに追加します。
 - a. 次の例のようなコンテンツを含むファイル (sriov-pool-config.yamlなど)を作成します。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkPoolConfig
metadata:
name: sriovnetworkpoolconfig-offload
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
ovsHardwareOffloadConfig:
name: mcp-offloading 1
```

ハードウェアオフロード用のマシン設定プールの名前。

b. 設定を適用します。

\$ oc create -f <SriovNetworkPoolConfig_name>.yaml



iovNetworkPoolConfig オブジェ

SriovNetworkPoolConfigオブジェクトで指定された設定を適用すると、 SR-IOV Operator は、マシン設定プール内のノードをドレインして再起動し ます。

設定の変更が適用されるまでに数分かかる場合があります。

24.12.5. SR-IOV ネットワークノードポリシーの設定

注記

SR-IOV ネットワークノードポリシーを作成することにより、ノードの SR-IOV ネットワークデバイス 設定を作成できます。ハードウェアオフロードを有効にするには、値 "switchdev" を使用して .spec.eSwitchMode フィールドを定義する必要があります。

次の手順では、ハードウェアをオフロードするネットワークインターフェイスコントローラー用の SR-IOV インターフェイスを作成します。

前提条件

• OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

1. 次の例のようなコンテンツを含むファイル (sriov-node-policy.yamlなど)を作成します。

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
 name: sriov-node-policy <.>
 namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
 deviceType: netdevice <.>
 eSwitchMode: "switchdev" <.>
 nicSelector:
  deviceID: "1019"
  rootDevices:
  - 0000:d8:00.0
  vendor: "15b3"
  pfNames:
  - ens8f0
 nodeSelector:
  feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: "true"
 numVfs: 6
 priority: 5
 resourceName: mlxnics
```

<.> カスタムリソースオブジェクトの名前。<.> 必須。ハードウェアのオフロードは **vfio-pci** で はサポートされていません。<.> 必須。

2. ポリシーの設定を適用します。

\$ oc create -f sriov-node-policy.yaml



注記

SriovNetworkPoolConfig オブジェクトで指定された設定を適用すると、SR-IOV Operator は、マシン設定プール内のノードをドレインして再起動します。

設定の変更が適用されるまでに数分かかる場合があります。

24.12.5.1. OpenStack の SR-IOV ネットワークノードポリシーの例

次の例では、Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) でハードウェアオフロードを使用するネットワー クインターフェイスコントローラー (NIC) の SR-IOV インターフェイスについて説明します。

RHOSP でのハードウェアオフロードを備えた NIC の SR-IOV インターフェイス

```
apiVersion: sriovnetwork.openshift.io/v1
kind: SriovNetworkNodePolicy
metadata:
name: ${name}
namespace: openshift-sriov-network-operator
spec:
```

deviceType: switchdev
isRdma: true
nicSelector:
 netFilter: openstack/NetworkID:\${net_id}
nodeSelector:
 feature.node.kubernetes.io/network-sriov.capable: 'true'
numVfs: 1
priority: 99
resourceName: \${name}

24.12.6. ネットワーク接続定義の作成

マシン設定プールと SR-IOV ネットワークノードポリシーを定義した後、指定したネットワークイン ターフェイスカードのネットワーク接続定義を作成できます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

1. 次の例のようなコンテンツを含むファイル (net-attach-def.yamlなど)を作成します。

```
apiVersion: "k8s.cni.cncf.io/v1"
kind: NetworkAttachmentDefinition
metadata:
    name: net-attach-def <..>
    namespace: net-attach-def <..>
    annotations:
    k8s.v1.cni.cncf.io/resourceName: openshift.io/mlxnics <..>
spec:
    config: '{"cniVersion":"0.3.1","name":"ovn-kubernetes","type":"ovn-k8s-cni-overlay","ipam":
{},"dns":{}}'
```

<.> ネットワーク接続定義の名前。<.> ネットワーク接続定義の namespace。<.> これ は、**SriovNetworkNodePolicy** オブジェクトで指定した **spec.resourceName** フィールドの値 です。

2. ネットワーク接続定義の設定を適用します。

\$ oc create -f net-attach-def.yaml

検証

• 次のコマンドを実行して、新しい定義が存在するかどうかを確認します。

\$ oc get net-attach-def -A

出力例

NAMESPACE NAME AGE net-attach-def net-attach-def 43h

24.12.7. ネットワーク接続定義を Pod へ追加

マシン設定プール、SriovNetworkPoolConfig および SriovNetworkNodePolicy カスタムリソース、 およびネットワーク接続定義を作成した後、ネットワーク接続定義を Pod 仕様に追加することによ り、これらの設定を Pod に適用できます。

手順

Pod 仕様で、.metadata.annotations.k8s.v1.cni.cncf.io/networks フィールドを追加し、ハードウェアオフロード用に作成したネットワーク接続定義を指定します。

.... metadata: annotations: v1.multus-cni.io/default-network: net-attach-def/net-attach-def <.>

<.> 値は、ハードウェアオフロード用に作成したネットワーク接続定義の名前と namespace で ある必要があります。

24.13. BLUEFIELD-2の DPU から NIC への切り替え

Bluefield-2 ネットワークデバイスをデータ処理ユニット (DPU) モードからネットワークインターフェ イスコントローラー (NIC) モードに切り替えることができます。

\approx

重要

Bluefield-2のデータ処理ユニット (DPU) モードからネットワークインターフェイスコン トローラー (NIC) モードへの切り替えは、テクノロジープレビュー機能のみです。テク ノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレベルアグリーメント (SLA)の対象外であり、機能的に完全ではない場合があります。Red Hat は、実稼働環 境でこれらを使用することを推奨していません。テクノロジープレビュー機能は、最新 の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィードバックを提供 していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

24.13.1. Bluefield-2 を DPU モードから NIC モードに切り替える

以下の手順を使用して、Bluefield-2をデータ処理ユニット (DPU) モードからネットワークインター フェイスコントローラー (NIC) モードに切り替えます。



重要

現在、DPU から NIC モードへの Bluefield-2 の切り替えのみがサポートされています。 NIC モードから DPU モードへの切り替えはサポートされていません。

前提条件

- SR-IOV Network Operator がインストールされている。詳細については、SR-IOV Network Operator のインストールを参照してください。
- Bluefield-2 を最新のファームウェアに更新している。詳細は、 Firmware for NVIDIA BlueField-2 を参照してください。

手順

1. 次のコマンドを入力して、各ワーカーノードに次のラベルを追加します。

\$ oc label node <example_node_name_one> node-role.kubernetes.io/sriov=

\$ oc label node <example_node_name_two> node-role.kubernetes.io/sriov=

2. SR-IOV Operator のマシン設定プールを作成します。次に例を示します。

```
apiVersion: machineconfiguration.openshift.io/v1
kind: MachineConfigPool
metadata:
name: sriov
spec:
machineConfigSelector:
matchExpressions:
- {key: machineconfiguration.openshift.io/role, operator: In, values: [worker,sriov]}
nodeSelector:
matchLabels:
node-role.kubernetes.io/srioy: ""
```

3. 次の machineconfig.yaml ファイルをワーカーノードに適用します。

```
apiVersion: machineconfiguration.openshift.io/v1
kind: MachineConfig
metadata:
 labels:
  machineconfiguration.openshift.io/role: sriov
 name: 99-bf2-dpu
spec:
config:
  ignition:
   version: 3.2.0
  storage:
   files:
   - contents:
     source: data:text/plain;charset=utf-
8;base64,ZmluZF9jb250YWluZXloKSB7CiAgY3JpY3RsIHBzIC1vIGpzb24gfCBqcSAtciAnLmNv
bnRhaW5lcnNbXSB8IHNlbGVjdCgubWV0YWRhdGEubmFtZT09InNyaW92LW5ldHdvcmstY29
uZmlnLWRhZW1vbilpIHwgLmlkJwp9CnVudGlsIG91dHB1dD0kKGZpbmRfY29udGFpbmVyKT
sgW1sgLW4gliRvdXRwdXQiIF1dOyBkbwogIGVjaG8gIndhaXRpbmcgZm9yIGNvbnRhaW5lciB
0byBjb21IIHVwIgogIHNsZWVwIDE7CmRvbmUKISBzdWRvIGNyaWN0bCBleGVjICRvdXRwdX
QgL2JpbmRhdGEvc2NyaXB0cy9iZjltc3dpdGNoLW1vZGUuc2ggliRAlgo=
    mode: 0755
    overwrite: true
    path: /etc/default/switch_in_sriov_config_daemon.sh
  systemd:
   units:
```

 name: dpu-switch.service enabled: true contents: | [Unit] Description=Switch BlueField2 card to NIC/DPU mode RequiresMountsFor=%t/containers Wants=network.target After=network-online.target kubelet.service [Service] SuccessExitStatus=0 120 RemainAfterExit=True ExecStart=/bin/bash -c '/etc/default/switch_in_sriov_config_daemon.sh nic || shutdown -r now' Type=oneshot [Install] WantedBy=multi-user.target オプション: 特定のカードの PCI アドレスをオプションで指定できます (例: ExecStart=/bin/bash -c '/etc/default/switch in sriov config daemon.sh nic

0000:5e:00.0 || echo done')。デフォルトでは、最初のデバイスが選択されています。複数のデバイスがある場合は、使用する PCI アドレスを指定する必要があります。 Bluefield-2 を DPU モードから NIC モードに切り替えるすべてのノードで、PCI アドレスが同じである必要があります。

4. ワーカーノードが再起動するまで待ちます。再起動後、ワーカーノードの Bluefield-2 ネット ワークデバイスは NIC モードに切り替わります。

関連情報

SR-IOV Network Operator のインストール

24.14. SR-IOV NETWORK OPERATOR のインストール

SR-IOV Network Operator をアンインストールするには、実行中の SR-IOV ワークロードをすべて削除 し、Operator をアンインストールして、Operator が使用した Webhook を削除する必要があります。

24.14.1. SR-IOV Network Operator のインストール

クラスター管理者は、SR-IOV Network Operator をアンインストールできます。

前提条件

- cluster-admin パーミッションを持つアカウントを使用して OpenShift Container Platform クラスターにアクセスできる。
- SR-IOV Network Operator がインストールされている。

手順

1. すべての SR-IOV カスタムリソース (CR) を削除します。

\$ oc delete sriovnetwork -n openshift-sriov-network-operator --all

\$ oc delete sriovnetworknodepolicy -n openshift-sriov-network-operator --all

\$ oc delete sriovibnetwork -n openshift-sriov-network-operator --all

- 2. クラスターからの Operator の削除セクションに記載された手順に従い、クラスターから SR-IOV Network Operator を削除します。
- 3. SR-IOV Network Operator のアンインストール後にクラスターに残っている SR-IOV カスタム リソース定義を削除します。

\$ oc delete crd sriovibnetworks.sriovnetwork.openshift.io

\$ oc delete crd sriovnetworknodepolicies.sriovnetwork.openshift.io

\$ oc delete crd sriovnetworknodestates.sriovnetwork.openshift.io

\$ oc delete crd sriovnetworkpoolconfigs.sriovnetwork.openshift.io

\$ oc delete crd sriovnetworks.sriovnetwork.openshift.io

\$ oc delete crd sriovoperatorconfigs.sriovnetwork.openshift.io

4. SR-IOV Webhook を削除します。

\$ oc delete mutatingwebhookconfigurations network-resources-injector-config

\$ oc delete MutatingWebhookConfiguration sriov-operator-webhook-config

\$ oc delete ValidatingWebhookConfiguration sriov-operator-webhook-config

5. SR-IOV Network Operator の namespace を削除します。

\$ oc delete namespace openshift-sriov-network-operator

関連情報

クラスターからの Operator の削除

第25章 OVN-KUBERNETES ネットワークプラグイン

25.1. OVN-KUBERNETES ネットワークプラグインについて

OpenShift Container Platform クラスターは、Pod およびサービスネットワークに仮想化ネットワークを使用します。

Red Hat OpenShift Networking の一部である OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、OpenShift Container Platform のデフォルトのネットワークプロバイダーです。OVN-Kubernetes は Open Virtual Network (OVN) をベースとしており、オーバーレイベースのネットワーク実装を提供します。OVN-Kubernetes プラグインを使用するクラスターは、各ノードで Open vSwitch (OVS) も実行します。 OVN は、宣言ネットワーク設定を実装するように各ノードで OVS を設定します。



注記

OVN-Kubernetes は、OpenShift Container Platform および単一ノードの OpenShift デ プロイメントのデフォルトのネットワークソリューションです。

OVS プロジェクトから生まれた OVN-Kubernetes は、オープンフロールールなど、同じコンストラクトの多くを使用して、パケットがネットワークを通過する方法を決定します。詳細は、Open Virtual Network の Web サイト を参照してください。

OVN-Kubernetes は、仮想ネットワーク設定を **OpenFlow** ルールに変換する OVS 用の一連のデーモン です。**OpenFlow** は、ネットワークスイッチおよびルーターと通信するためのプロトコルであり、ネットワークデバイス上のネットワークトラフィックのフローをリモートで制御する手段を提供し、ネット ワーク管理者がネットワークトラフィックのフローを設定、管理、および監視できるようにします。

OVN-Kubernetes は、**OpenFlow** では利用できない高度な機能をさらに提供します。OVN は、分散仮 想ルーター、分散論理スイッチ、アクセス制御、DHCP および DNS をサポートします。OVN は、オー プンフローと同等のロジックフロー内に分散仮想ルーターを実装します。たとえば、ネットワーク上に DHCP リクエストを送信する Pod がある場合、Pod はそのブロードキャストを送信して DHCP アドレ スを探します。また、そのパケットに一致するロジックフロールールが存在し、応答としてゲートウェ イ、DNS サーバー、IP アドレスなどを提供します。

OVN-Kubernetes は、各ノードでデーモンを実行します。すべてのノードで実行されるデータベースお よび OVN コントローラー用のデーモンセットがあります。OVN コントローラーは、ネットワークプロ バイダーの機能 (egress IP、ファイアウォール、ルーター、ハイブリッドネットワーク、IPSEC 暗号 化、IPv6、ネットワークポリシー、ネットワークポリシーログ、ハードウェアオフロード、およびマル チキャスト)をサポートするために、ノード上で Open vSwitch デーモンをプログラムします。

25.1.1. OVN-Kubernetesの目的

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、Open Virtual Network (OVN) を使用してネットワーク トラフィックフローを管理する、オープンソースのフル機能の Kubernetes CNI プラグインです。OVN はコミュニティーで開発され、ベンダーに依存しないネットワーク仮想化ソリューションです。OVN-Kubernetes ネットワークプラグイン:

- Open Virtual Network (OVN)を使用してネットワークトラフィックフローを管理します。OVN はコミュニティーで開発され、ベンダーに依存しないネットワーク仮想化ソリューションで す。
- ingress および egress ルールを含む Kubernetes ネットワークポリシーのサポートを実装します。

ノード間にオーバーレイネットワークを作成するには、VXLAN ではなく GENEVE (Generic Network Virtualization Encapsulation) プロトコルを使用します。

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、OpenShift SDN よりも次の利点があります。

- サポートされているプラットフォームでの IPv6 シングルスタックおよび IPv4/IPv6 デュアルス タックネットワークの完全サポート
- Linux と Microsoft Windows の両方のワークロードによるハイブリッドクラスターのサポート
- クラスター内通信のオプションの IPsec 暗号化
- ホスト CPU から互換性のあるネットワークカードおよびデータ処理ユニット (DPU) へのネットワークデータ処理のオフロード

25.1.2. サポートされているネットワークプラグイン機能のマトリックス

Red Hat OpenShift Networking は、ネットワークプラグイン用に OpenShift SDN と OVN-Kubernetes の 2 つのオプションを提供します。以下の表は、両方のネットワークプラグインの現在の機能サポート をまとめたものです。

表25.1デフォルトの CNI ネットワークプラグイン機能の比較

機能	OVN-Kubernetes	OpenShift SDN
Egress IP	サポート対象	サポート対象
Egress ファイアウォール ^[1]	サポート対象	サポート対象
Egress ルーター	サポート対象 [2]	サポート対象
ハイブリッドネットワーク	サポート対象	サポート対象外
クラスター内通信の IPsec 暗号化	サポート対象	サポート対象外
IPv6	サポート対象 ^{[3][4]}	サポート対象外
Kubernetes ネットワークポリシー	サポート対象	サポート対象
Kubernetes ネットワークポリシーログ	サポート対象	サポート対象外
ハードウェアのオフロード	サポート対象	サポート対象外
マルチキャスト	サポート対象	サポート対象

- egress ファイアウォールは、OpenShift SDN では egress ネットワークポリシーとしても知られています。これはネットワークポリシーの egress とは異なります。
- 2. OVN-Kubernetes の egress ルーターはリダイレクトモードのみをサポートします。
- 3. IPv6 は、ベアメタル、IBM Power、および IBM Z クラスターでのみサポートされます。

4. IPv6 シングルスタックは、Kubernetes NMState をサポートしておらず、IBM Power および IBM Z クラスターでもサポートされていません。

25.1.3. OVN-Kubernetes IPv6 とデュアルスタックの制限

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインには、次の制限があります。

デュアルスタックネットワークに設定されたクラスターでは、IPv4 と IPv6 の両方のトラフィックがデフォルトゲートウェイとして同じネットワークインターフェイスを使用する必要があります。この要件が満たされない場合には、ovnkube-node デーモンセットのホストにある Pod は、CrashLoopBackOff 状態になります。oc get pod -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-node -o yaml のようなコマンドで Pod を表示すると、以下の出力のように、status フィールドにデフォルトゲートウェイに関する複数のメッセージが表示されます。

I1006 16:09:50.98585260651 helper_linux.go:73] Found default gateway interface br-ex192.168.127.1I1006 16:09:50.98592360651 helper_linux.go:73] Found default gateway interface ens4fe80::5054:ff:febe:bcd4F1006 16:09:50.98593960651 ovnkube.go:130] multiple gateway interfaces detected: br-exens4

唯一の解決策は、両方の IP ファミリーがデフォルトゲートウェイに同じネットワークインター フェイスを使用するように、ホストネットワークを再設定することです。

 デュアルスタックネットワーク用に設定されたクラスターの場合、IPv4 と IPv6 の両方のルー ティングテーブルにデフォルトゲートウェイが含まれている必要があります。この要件が満た されない場合には、ovnkube-node デーモンセットのホストにある Pod は、CrashLoopBackOff 状態になります。oc get pod -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-node -o yaml のようなコマンドで Pod を表示すると、以下の出力のよう に、status フィールドにデフォルトゲートウェイに関する複数のメッセージが表示されます。

I0512 19:07:17.589083 108432 helper_linux.go:74] Found default gateway interface br-ex 192.168.123.1

F0512 19:07:17.589141 108432 ovnkube.go:133] failed to get default gateway interface

唯一の解決策として、両方の IP ファミリーにデフォルトゲートウェイが含まれるようにホスト ネットワークを再設定できます。

25.1.4. セッションアフィニティー

セッションアフィニティーは、Kubernetes **Service** オブジェクトに適用される機能です。 <service_VIP>:<Port> に接続するたびに、トラフィックが常に同じバックエンドに負荷分散されるよう にする場合は、セッションアフィニティー を使用できます。クライアントの IP アドレスに基づいて セッションアフィニティーを設定する方法など、詳細は、セッションアフィニティー を参照してくださ い。

セッションアフィニティーのスティッキタイムアウト

OpenShift Container Platform の OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、最後のパケットに基づ いて、クライアントからのセッションのスティッキタイムアウトを計算します。たとえば、**curl** コマン ドを 10 回実行すると、スティッキーセッションタイマーは最初のパケットではなく 10 番目のパケット から開始します。その結果、クライアントが継続的にサービスに接続している場合でも、セッションが タイムアウトすることはありません。タイムアウトは、timeoutSeconds パラメーターで設定された時 間、サービスがパケットを受信しなかった場合に開始されます。

関連情報

- プロジェクトの egress ファイアウォールの設定
- ネットワークポリシーについて
- ネットワークポリシーイベントのロギング
- プロジェクトのマルチキャストの有効化
- IPsec 暗号化の設定
- Network [operator.openshift.io/v1]

25.2. OVN-KUBERNETES のアーキテクチャー

25.2.1. OVN-Kubernetes のアーキテクチャーの紹介

次の図は、OVN-Kubernetesのアーキテクチャーを示しています。
図25.1 OVN-Kubernetes のアーキテクチャー



主なコンポーネントは次のとおりです。

- Cloud Management System (CMS) OVN 統合用の CMS 固有のプラグインを提供する OVN 用のプラットフォーム固有のクライアント。このプラグインは、CMS 固有の形式で CMS 設定 データベースに格納されているクラウド管理システムの論理ネットワーク設定の概念を、OVN が理解できる中間表現に変換します。
- OVN ノースバウンドデータベース (nbdb) CMS プラグインによって渡された論理ネットワーク設定を格納します。
- OVN サウスバウンドデータベース (sbdb) 各ノードの OpenVswitch (OVS) システムの物理お よび論理ネットワーク設定状態を、それらをバインドするテーブルを含めて格納します。

- ovn-northd これは nbdb と sbdb の間の仲介クライアントです。これは、論理ネットワーク 設定を、nbdb から取得した従来のネットワーク概念の観点から、その下の sbdb の論理データ パスフローに変換します。コンテナー名は northd で、ovnkube-master Pod で実行されま す。
- ovn-controller sbdb に必要な情報または更新のために、OVS およびハイパーバイザーと対話 する OVN エージェントです。ovn-controller は sbdb から論理フローを読み取り、それらを OpenFlow フローに変換して、ノードの OVS デーモンに送信します。コンテナー名は ovncontroller で、ovnkube-node Pod で実行されます。

OVN ノースバウンドデータベースには、クラウド管理システム (CMS) によって渡された論理ネット ワーク設定があります。OVN ノースバウンドデータベースには、ネットワークの現在の望ましい状態 が含まれており、論理ポート、論理スイッチ、論理ルーターなどのコレクションとして提示されま す。ovn-northd (northd コンテナー) は、OVN ノースバウンドデータベースと OVN サウスバウンド データベースに接続します。これは、論理ネットワーク設定を、OVN ノースバウンドデータベースか ら取得した従来のネットワーク概念の観点から、OVN サウスバウンドデータベースの論理データパス フローに変換します。

OVN サウスバウンドデータベースには、ネットワークの物理的および論理的表現と、それらをリンク するバインディングテーブルがあります。クラスター内のすべてのノードはサウスバウンドデータベー スで表され、管理者はノードに接続されているポートを確認できます。また、サウスバウンドデータ ベースには、すべてのロジックフローが含まれています。ロジックフローは各ノードで実行される ovn-controller プロセスと共有され、ovn-controller はそれらを OpenvSwitch をプログラムする OpenFlow ルールに変換します。

Kubernetes コントロールプレーンノードにはそれぞれ、OVN のノースバウンドおよびサウスバウンド データベースのコンテナーをホストする ovnkube-master Pod が含まれています。すべての OVN ノー スバウンドデータベースは Raft クラスターを形成し、すべてのサウスバウンドデータベースは別個の Raft クラスターを形成します。常に1つの ovnkube-master Pod がリーダーとなり、他の ovnkubemaster Pod がフォロワーとなります。

25.2.2. OVN-Kubernetes プロジェクト内のすべてのリソースの一覧表示

OVN-Kubernetes プロジェクトで実行されるリソースとコンテナーを見つけることは、OVN-Kubernetes ネットワークの実装を理解するのに役立ちます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

次のコマンドを実行して、OVN-Kubernetes プロジェクト内のすべてのリソース、エンドポイント、および ConfigMap を取得します。

\$ oc get all,ep,cm -n openshift-ovn-kubernetes

出力例

NAMEREADYSTATUSRESTARTSAGEpod/ovnkube-master-9g7zt6/6Running1 (48m ago)57mpod/ovnkube-master-lqs4v6/6Running057m

Running 0 pod/ovnkube-master-vxhtq 6/6 57m pod/ovnkube-node-9k9kc 5/5 Running 0 57m pod/ovnkube-node-jg52r Running 0 51m 5/5 pod/ovnkube-node-k8wf7 5/5 Running 0 57m Running 0 47m pod/ovnkube-node-tlwk6 5/5 pod/ovnkube-node-xsvnk 5/5 Running 0 57m NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE service/ovn-kubernetes-master ClusterIP None 9102/TCP 57m <none> service/ovn-kubernetes-node ClusterIP None <none> 9103/TCP,9105/TCP 57m ClusterIP None service/ovnkube-db <none> 9641/TCP,9642/TCP 57m DESIRED CURRENT READY UP-TO-DATE AVAILABLE NAME NODE SELECTOR AGE 3 3 daemonset.apps/ovnkube-master 3 3 3 beta.kubernetes.io/os=linux,node-role.kubernetes.io/master= 57m daemonset.apps/ovnkube-node 5 5 5 5 5 beta.kubernetes.io/os=linux 57m NAME **ENDPOINTS** AGE endpoints/ovn-kubernetes-master 10.0.132.11:9102,10.0.151.18:9102,10.0.192.45:9102 57m endpoints/ovn-kubernetes-node 10.0.132.11:9105,10.0.143.72:9105,10.0.151.18:9105 + 7 more... 57m endpoints/ovnkube-db 10.0.132.11:9642,10.0.151.18:9642,10.0.192.45:9642 + 3 more... 57m NAME DATA AGE configmap/control-plane-status 1 55m configmap/kube-root-ca.crt 57m 1 configmap/openshift-service-ca.crt 1 57m configmap/ovn-ca 1 57m configmap/ovn-kubernetes-master 0 55m configmap/ovnkube-config 57m 1

コントロールプレーンノードで実行される 3 つの ovnkube-masters と、ovnkube-master お よび ovnkube-node Pod をデプロイするために使用される 2 つのデーモンセットがあります。 クラスター内の各ノードには、1 つの ovnkube-node Pod があります。この例では 5 つあり、 クラスター内のノードごとに 1 つの ovnkube-node があるため、クラスター内には 5 つのノー ドがあります。ovnkube-config ConfigMap には、オンラインマスターおよび ovnkube-node によって起動された OpenShift Container Platform OVN-Kubernetes 設定があります。ovnkubernetes-master ConfigMap には、現在のオンラインマスターリーダーの情報があります。

2. 次のコマンドを実行して、ovnkube-master Pod 内のすべてのコンテナーを一覧表示します。

\$ oc get pods ovnkube-master-9g7zt \ -o jsonpath='{.spec.containers[*].name}' -n openshift-ovn-kubernetes

1

57m

予想される出力

configmap/signer-ca

northd nbdb kube-rbac-proxy sbdb ovnkube-master ovn-dbchecker

ovnkube-master Pod は、複数のコンテナーで構成されています。ノースバウンドデータベース (nbdb コンテナー)、サウスバウンドデータベース (sbdb コンテナー)をホストし、Pod、 egressIP、namespace、サービス、エンドポイント、egress ファイアウォール、およびネット ワークポリシーのクラスターイベントを監視し、それらをノースバウンドデータベース (ovnkube-master Pod) に書き込みます。また、ノードへの Pod サブネット割り当てを管理し ます。

3. 次のコマンドを実行して、ovnkube-node Pod 内のすべてのコンテナーを一覧表示します。

\$ oc get pods ovnkube-node-jg52r \

-o jsonpath='{.spec.containers[*].name}' -n openshift-ovn-kubernetes

予想される出力

ovn-controller ovn-acl-logging kube-rbac-proxy kube-rbac-proxy-ovn-metrics ovnkube-node

ovnkube-node Pod には、各 OpenShift Container Platform ノードに常駐するコンテナー (**ovn-controller**) があります。各ノードの **ovn-controller** は、OVN ノースバウンドを OVN サ ウスバウンドデータベースに接続して、OVN 設定を把握します。**ovn-controller** は、サウスバ ウンドを OpenFlow コントローラーとして **ovs-vswitchd** に接続し、ネットワークトラフィッ クを制御します。また、サウスバウンドをローカルの **ovsdb-server** に接続して、Open vSwitch 設定を監視および制御できるようにします。

25.2.3. OVN-Kubernetes ノースバウンドデータベースの内容の一覧表示

ロジックフロールールを理解するには、ノースバウンドデータベースを調べて、そこにあるオブジェクトを理解して、それらがロジックフロールールにどのように変換されるかを確認する必要があります。 最新の情報は OVN Raft リーダーに存在します。この手順では、Raft リーダーを検索し、続いてクエリーを実行して OVN ノースバウンドデータベースの内容を一覧表示する方法について説明します。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. ノースバウンドデータベースの OVN Raft リーダーを見つけます。



注記

Raft リーダーは最新の情報を保存します。

a. 次のコマンドを実行して、Pod を一覧表示します。



\$ oc get po -n openshift-ovn-kubernetes

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE ovnkube-master-7j97q 6/6 Running 2 (148m ago) 149m

ovnkube-master-gt4ms	6/6	Running	1 (140r	n ago)	147m
ovnkube-master-mk6p6	6/6	Running	0	148r	n
ovnkube-node-8qvtr	5/5	Running 0)	149m	
ovnkube-node-fqdc9	5/5	Running (0	149m	
ovnkube-node-tlfwv 5	5/5	Running 0		149m	
ovnkube-node-wlwkn	5/5	Running	0	142m	

b. マスター Pod の1つをランダムに選択し、次のコマンドを実行します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes ovnkube-master-7j97q \

-- /usr/bin/ovn-appctl -t /var/run/ovn/ovnnb_db.ctl \

--timeout=3 cluster/status OVN_Northbound

出力例

Defaulted container "northd" out of: northd, nbdb, kube-rbac-proxy, sbdb, ovnkubemaster, ovn-dbchecker 1c57 Name: OVN Northbound Cluster ID: c48a (c48aa5c0-a704-4c77-a066-24fe99d9b338) Server ID: 1c57 (1c57b6fc-2849-49b7-8679-fbf18bafe339) Address: ssl:10.0.147.219:9643 Status: cluster member Role: follower Term: 5 Leader: 2b4f 2 Vote: unknown Election timer: 10000 Log: [2, 3018] Entries not yet committed: 0 Entries not yet applied: 0 Connections: ->0000 ->0000 <-8844 <-2b4f **Disconnections: 0** Servers: 1c57 (1c57 at ssl:10.0.147.219:9643) (self) 8844 (8844 at ssl:10.0.163.212:9643) last msg 8928047 ms ago 2b4f (2b4f at ssl:10.0.242.240:9643) last msg 620 ms ago 3 この Pod はフォロワーとして識別されます。 リーダーは **2b4f** として識別されます。 2b4f は IP アドレス 10.0.242.240 にあります。 ີ່

c. 次のコマンドを使用して、IP アドレス **10.0.242.240** で実行されている **ovnkube-master** Pod を見つけます。

\$ oc get po -o wide -n openshift-ovn-kubernetes | grep 10.0.242.240 | grep -v ovnkubenode

ovnkube-master-gt4ms 6/6 Running 1 (143m ago) 150m 10.0.242.240 ip-10-0-242-240.ec2.internal <none> <none>

ovnkube-master-gt4ms Pod は、IP アドレス 10.0.242.240 で実行されています。

次のコマンドを実行して、ノースバウンドデータベース内のすべてのオブジェクトを表示します。

 $c exec -n \ openshift-ovn-kubernetes -it \ ovnkube-master-gt4ms \ -c \ northd -- \ ovn-nbctl \ show$

出力は長すぎてここにリストできません。リストには、NAT ルール、論理スイッチ、ロードバランサーなどが含まれます。

次のコマンドを実行して、コマンド ovn-nbctl で使用可能なオプションを表示します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes -it ovnkube-master-mk6p6 \ -c northd ovn-nbctl --help

次のコマンドのいくつかを使用すると、特定のコンポーネントに絞り込むことができます。

3. 次のコマンドを実行して、論理ルーターのリストを表示します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes -it ovnkube-master-gt4ms \
-c northd -- ovn-nbctl Ir-list

出力例

f971f1f3-5112-402f-9d1e-48f1d091ff04 (GR_ip-10-0-145-205.ec2.internal) 69c992d8-a4cf-429e-81a3-5361209ffe44 (GR_ip-10-0-147-219.ec2.internal) 7d164271-af9e-4283-b84a-48f2a44851cd (GR_ip-10-0-163-212.ec2.internal) 111052e3-c395-408b-97b2-8dd0a20a29a5 (GR_ip-10-0-165-9.ec2.internal) ed50ce33-df5d-48e8-8862-2df6a59169a0 (GR_ip-10-0-209-170.ec2.internal) f44e2a96-8d1e-4a4d-abae-ed8728ac6851 (GR_ip-10-0-242-240.ec2.internal) ef3d0057-e557-4b1a-b3c6-fcc3463790b0 (ovn_cluster_router)



注記

この出力から、各ノードにルーターと ovn_cluster_router があることがわかり ます。

4. 次のコマンドを実行して、論理スイッチのリストを表示します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes -it ovnkube-master-gt4ms \ -c northd -- ovn-nbctl Is-list

出力例

82808c5c-b3bc-414a-bb59-8fec4b07eb14 (ext_ip-10-0-145-205.ec2.internal) 3d22444f-0272-4c51-afc6-de9e03db3291 (ext_ip-10-0-147-219.ec2.internal) bf73b9df-59ab-4c58-a456-ce8205b34ac5 (ext_ip-10-0-163-212.ec2.internal) bee1e8d0-ec87-45eb-b98b-63f9ec213e5e (ext_ip-10-0-165-9.ec2.internal) 812f08f2-6476-4abf-9a78-635f8516f95e (ext_ip-10-0-209-170.ec2.internal) f65e710b-32f9-482b-8eab-8d96a44799c1 (ext_ip-10-0-242-240.ec2.internal) 84dad700-afb8-4129-86f9-923a1ddeace9 (ip-10-0-145-205.ec2.internal) 1b7b448b-e36c-4ca3-9f38-4a2cf6814bfd (ip-10-0-147-219.ec2.internal) d92d1f56-2606-4f23-8b6a-4396a78951de (ip-10-0-163-212.ec2.internal) 6864a6b2-de15-4de3-92d8-f95014b6f28f (ip-10-0-165-9.ec2.internal) c26bf618-4d7e-4afd-804f-1a2cbc96ec6d (ip-10-0-209-170.ec2.internal) ab9a4526-44ed-4f82-ae1c-e20da04947d9 (ip-10-0-242-240.ec2.internal) a8588aba-21da-4276-ba0f-9d68e88911f0 (join)



注記

この出力から、各ノードの ext スイッチに加えて、ノード名自体を持つスイッチ と結合スイッチがあることがわかります。

5. 次のコマンドを実行して、ロードバランサーのリストを表示します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes -it ovnkube-master-gt4ms \
-c northd -- ovn-nbctl lb-list

UUID	LB	PROTO	VIP		IPs
f0fb50f9-4968-4b55	-908c-616bae4db0a2	Service_	_default/	tcp	172.30.0.1:443
10.0.147.219:6443,	10.0.163.212:6443,16	9.254.169.	2:6443		
0dc42012-4f5b-432	e-ae01-2cc4bfe81b00	Service_	_default/	tcp	172.30.0.1:443
10.0.147.219:6443,	169.254.169.2:6443,1	0.0.242.24	0:6443		
f7fff5d5-5eff-4a40-9	8b1-3a4ba8f7f69c S	Service_det	fault/ tcp	o 17	2.30.0.1:443
169.254.169.2:6443	3,10.0.163.212:6443,1	0.0.242.24	0:6443		
12fe57a0-50a4-4a1	b-ac10-5f288badee07	Service	_default/	tcp	172.30.0.1:443
10.0.147.219:6443,	10.0.163.212:6443,10	.0.242.240	:6443		
3f137fbf-0b78-4875	-ba44-fbf89f254cf7	Service_op	enshif to	cp ⁻	172.30.23.153:443
10.130.0.14:8443					
174199fe-0562-414	1-b410-12094db922a	7 Service	e_openshi	f tcp	172.30.69.51:50051
10.130.0.84:50051					
5ee2d4bd-c9e2-4d1	6-a6df-f54cd17c9ac3	Service_	_openshif	tcp	172.30.143.87:9001
10.0.145.205:9001,	10.0.147.219:9001,10	.0.163.212	:9001,10.0	0.165.9:	9001,10.0.209.170:9001,
10.0.242.240:9001					
a056ae3d-83f8-45b	c-9c80-ef89bce7b162	Service	_openshif	tcp	172.30.164.74:443
10.0.147.219:6443,	10.0.163.212:6443,10	.0.242.240	:6443		
bac51f3d-9a6f-4f5e	-ac02-28fd343a332a	Service_	openshif	tcp	172.30.0.10:53
10.131.0.6:5353					
	tcp	172.30).0.10:915	4 1	0.131.0.6:9154
48105bbc-51d7-417	'8-b975-417433f9c20a	a Service	_openshif	f tcp	172.30.26.159:2379
10.0.147.219:2379,	169.254.169.2:2379,1	0.0.242.24	0:2379		
	tcp	172.30).26.159:9	979	
10.0.147.219:9979,	169.254.169.2:9979,1	0.0.242.24	0:9979		
7de2b8fc-342a-415	f-ac13-1a493f4e39c0	Service_	openshif	tcp	172.30.53.219:443
10.128.0.7:8443					
	tcp	172.30).53.219:9	192	10.128.0.7:9192
2cef36bc-d720-4afb	-8d95-9350eff1d27a	Service_	openshif	tcp	172.30.81.66:443
10.128.0.23:8443					
365cb6fb-e15e-45a	4-a55b-21868b3cf513	Service	_openshif	tcp	172.30.96.51:50051

10.130.0.19:50051 41691cbb-ec55-4cdb-8431-afce679c5e8d Service_openshif tcp 172.30.98.218:9099 169.254.169.2:9099 82df10ba-8143-400b-977a-8f5f416a4541 Service openshif tcp 172.30.26.159:2379 10.0.147.219:2379,10.0.163.212:2379,169.254.169.2:2379 172.30.26.159:9979 tcp 10.0.147.219:9979,10.0.163.212:9979,169.254.169.2:9979 172.30.23.244:443 debe7f3a-39a8-490e-bc0a-ebbfafdffb16 Service openshif tcp 10.128.0.48:8443,10.129.0.27:8443,10.130.0.45:8443 8a749239-02d9-4dc2-8737-716528e0da7b Service openshif tcp 172.30.124.255:8443 10.128.0.14:8443 880c7c78-c790-403d-a3cb-9f06592717a3 Service openshif tcp 172.30.0.10:53 10.130.0.20:5353 172.30.0.10:9154 10.130.0.20:9154 tcp d2f39078-6751-4311-a161-815bbaf7f9c7 Service_openshif tcp 172.30.26.159:2379 169.254.169.2:2379,10.0.163.212:2379,10.0.242.240:2379 172.30.26.159:9979 tcp 169.254.169.2:9979,10.0.163.212:9979,10.0.242.240:9979 30948278-602b-455c-934a-28e64c46de12 Service openshif tcp 172.30.157.35:9443 10.130.0.43:9443 2cc7e376-7c02-4a82-89e8-dfa1e23fb003 Service_openshif tcp 172.30.159.212:17698 10.128.0.48:17698,10.129.0.27:17698,10.130.0.45:17698 e7d22d35-61c2-40c2-bc30-265cff8ed18d Service openshif tcp 172.30.143.87:9001 10.0.145.205:9001,10.0.147.219:9001,10.0.163.212:9001,10.0.165.9:9001,10.0.209.170:9001, 169.254.169.2:9001 75164e75-e0c5-40fb-9636-bfdbf4223a02 Service_openshif tcp 172.30.150.68:1936 10.129.4.8:1936,10.131.0.10:1936 tcp 172.30.150.68:443 10.129.4.8:443,10.131.0.10:443 172.30.150.68:80 tcp 10.129.4.8:80,10.131.0.10:80 7bc4ee74-dccf-47e9-9149-b011f09aff39 Service openshif tcp 172.30.164.74:443 10.0.147.219:6443,10.0.163.212:6443,169.254.169.2:6443 0db59e74-1cc6-470c-bf44-57c520e0aa8f Service openshif tcp 10.0.163.212:31460 10.0.163.212:32361 tcp c300e134-018c-49af-9f84-9deb1d0715f8 Service_openshif tcp 172.30.42.244:50051 10.130.0.47:50051 5e352773-429b-4881-afb3-a13b7ba8b081 Service openshif tcp 172.30.244.66:443 10.129.0.8:8443,10.130.0.8:8443 54b82d32-1939-4465-a87d-f26321442a7a Service_openshif tcp 172.30.12.9:8443 10.128.0.35:8443

注記

この出力 (一部省略あり) から、多くの OVN-Kubernetes ロードバランサーがあ ることがわかります。OVN-Kubernetes のロードバランサーはサービスの表現で す。

25.2.4. ノースバウンドデータベースの内容を調べるための ovn-nbctl のコマンドライン引数

次の表に、ノースバウンドデータベースの内容を調べるために **ovn-nbctl** で使用できるコマンドライン 引数を示します。

表25.2 ノースバウンドデータベースの内容を調べるためのコマンドライン引数

引数	説明
ovn-nbctl show	ノースバウンドデータベースの内容の概要。
ovn-nbctl show <switch_or_router></switch_or_router>	指定されたスイッチまたはルーターに関連付けられた詳細を表示します。
ovn-nbctl Ir-list	論理ルーターを表示します。
ovn-nbctl lrp-list <router></router>	ovn-nbctl lr-list からのルーター情報を使用して、ルーターポートを表示 します。
ovn-nbctl lr-nat-list <router></router>	指定されたルーターのネットワークアドレス変換の詳細を表示します。
ovn-nbctl Is-list	論理スイッチを表示します。
ovn-nbctl lsp-list <switch></switch>	ovn-nbctl ls-list からのスイッチ情報を使用して、スイッチポートを表示 します。
ovn-nbctl lsp-get-type <port></port>	論理ポートのタイプを取得します。
ovn-nbctl lb-list	ロードバランサーを表示します。

25.2.5. OVN-Kubernetes サウスバウンドデータベースの内容の一覧表示

ロジックフロールールは、インフラストラクチャーの表現であるサウスバウンドデータベースに格納されます。最新の情報は OVN Raft リーダーに存在します。この手順では、Raft リーダーを検索し、クエリーを実行して OVN サウスバウンドデータベースの内容を一覧表示する方法について説明します。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

手順

1. サウスバウンドデータベースの OVN Raft リーダーを見つけます。



注記 Raft リーダーは最新の情報を保存します。

a. 次のコマンドを実行して、Pod を一覧表示します。

\$ oc get po -n openshift-ovn-kubernetes

出力例

NAME	READY	STATUS	RESTAR	IS AGE
ovnkube-master-7	′j97q 6/6	Running	2 (134m	ago) 135m
ovnkube-master-g	t4ms 6/6	Running	1 (126m	133m (133m
ovnkube-master-n	nk6p6 6/6	6 Running	j 0	134m
ovnkube-node-8qv	vtr 5/5	Running	0	135m
ovnkube-node-bqz	ztb 5/5	Running	0	117m
ovnkube-node-fqd	lc9 5/5	Running	0	135m
ovnkube-node-tlfw	<i>ı</i> v 5/5	Running ()	135m
ovnkube-node-wlv	vkn 5/5	Running	0	128m

b. マスター Pod の1つをランダムに選択し、次のコマンドを実行して OVN サウスバウンド Raft リーダーを見つけます。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes ovnkube-master-7j97q \

-- /usr/bin/ovn-appctl -t /var/run/ovn/ovnsb_db.ctl \

--timeout=3 cluster/status OVN_Southbound

出力例



c. 次のコマンドを使用して、IP アドレス **10.0.163.212** で実行されている **ovnkube-master** Pod を見つけます。

\$ oc get po -o wide -n openshift-ovn-kubernetes | grep 10.0.163.212 | grep -v ovnkubenode

出力例

ovnkube-master-mk6p6 6/6 Running 0 212.ec2.internal <none>

<none>

136m 10.0.163.212 ip-10-0-163-

ovnkube-master-mk6p6 Pod は、IP アドレス 10.0.163.212 で実行されています。

2. 次のコマンドを実行して、サウスバウンドデータベースに保存されているすべての情報を表示 します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes -it ovnkube-master-mk6p6 \ -c northd -- ovn-sbctl show

出力例

Chassis "8ca57b28-9834-45f0-99b0-96486c22e1be" hostname: ip-10-0-156-16.ec2.internal Encap geneve ip: "10.0.156.16" options: {csum="true"} Port Binding k8s-ip-10-0-156-16.ec2.internal Port_Binding etor-GR_ip-10-0-156-16.ec2.internal Port Binding itor-GR ip-10-0-156-16.ec2.internal Port Binding openshift-ingress-canary ingress-canary-hsblx Port_Binding rtoj-GR_ip-10-0-156-16.ec2.internal Port_Binding openshift-monitoring_prometheus-adapter-658fc5967-9l46x Port_Binding rtoe-GR_ip-10-0-156-16.ec2.internal Port Binding openshift-multus network-metrics-daemon-77nvz Port Binding openshift-ingress router-default-64fd8c67c7-df598 Port_Binding openshift-dns_dns-default-ttpcq Port_Binding openshift-monitoring_alertmanager-main-0 Port Binding openshift-e2e-loki loki-promtail-g2pbh Port Binding openshift-network-diagnostics network-check-target-m6tn4 Port Binding openshift-monitoring thanos-querier-75b5cf8dcb-gf8gj Port Binding cr-rtos-ip-10-0-156-16.ec2.internal Port_Binding openshift-image-registry_image-registry-7b7bc44566-mp9b8

この詳細な出力は、シャーシとシャーシに接続されているポート (この場合、すべてのルーター ポートとホストネットワークのように動作するもの) を示しています。すべての Pod は、ソー スネットワークアドレス変換 (SNAT) を使用して、より広いネットワークと通信します。Pod の IP アドレスは、Pod が実行されているノードの IP アドレスに変換され、ネットワークに送 信されます。

シャーシ情報に加えて、サウスバウンドデータベースにはすべてのロジックフローがありま す。これらのロジックフローは各ノードで実行されている ovn-controller に送信されま す。ovn-controller は、ロジックフローをオープンフロールールに変換し、最終的に **OpenvSwitch** をプログラムして、Pod がオープンフロールールに従ってネットワークの外に 出られるようにします。

次のコマンドを実行して、コマンド ovn-sbctl で使用可能なオプションを表示します。

\$ oc exec -n openshift-ovn-kubernetes -it ovnkube-master-mk6p6 \ -c northd -- ovn-sbctl --help

25.2.6. サウスバウンドデータベースの内容を調べるための ovn-sbctl のコマンドライン引数

次の表に、サウスバウンドデータベースの内容を調べるために **ovn-sbctl** で使用できるコマンドライン 引数を示します。

表25.3 サウスバウンドデータベースの内容を調べるためのコマンドライン引数

引数	説明
ovn-sbctl show	サウスバウンドデータベースの内容の概要。
ovn-sbctl list Port_Binding <port></port>	指定されたポートのサウスバウンドデータベースの内容を一覧表示しま す。
ovn-sbctl dump-flows	論理フローを一覧表示します。

25.2.7. OVN-Kubernetes の論理アーキテクチャー

OVN はネットワーク仮想化ソリューションです。OVN は論理スイッチとルーターを作成します。これ らのスイッチとルーターは相互接続され、任意のネットワークトポロジーを作成します。ログレベルを 2 または 5 に設定して **ovnkube-trace** を実行すると、OVN-Kubernetes 論理コンポーネントが公開さ れます。以下の図は、ルーターとスイッチが OpenShift Container Platform でどのように接続されてい るかを示しています。

図25.2 OVN-Kubernetes のルーターおよびスイッチコンポーネント



299_OpenShift_0123

パケット処理に関係する主要なコンポーネントは次のとおりです。

ゲートウェイルーター

L3 ゲートウェイルーターとも呼ばれるゲートウェイルーターは、通常、分散ルーターと物理ネット ワークの間で使用されます。論理パッチポートを含むゲートウェイルーターは、(分散されていない) 物理的な場所またはシャーシにバインドされます。このルーターのパッチポートは、ovnsouthbound データベース (**ovn-sbdb**) では l3gateway ポートと呼ばれます。

分散論理ルーター

分散論理ルーターと、仮想マシンとコンテナーが接続されるその背後にある論理スイッチは、事実 上、各ハイパーバイザーに常駐します。

結合ローカルスイッチ

結合ローカルスイッチは、分散ルーターとゲートウェイルーターを接続するために使用されます。 これにより、分散ルーターで必要な IP アドレスの数が減ります。

パッチポートを備えた論理スイッチ

パッチポートを備えた論理スイッチは、ネットワークスタックを仮想化するために使用されます。 これらは、トンネルを介してリモート論理ポートを接続します。

localnet ポートを備えた論理スイッチ

localnet ポートを備えた論理スイッチは、OVN を物理ネットワークに接続するために使用されま す。これらは、localnet ポートを使用して直接接続された物理 L2 セグメントにパケットをブリッジ することにより、リモート論理ポートを接続します。

パッチポート

パッチポートは、論理スイッチと論理ルーターの間、およびピア論理ルーター間の接続を表しま す。1つの接続には、このような接続ポイントごとに、両側に1つずつ、1組のパッチポートがあり ます。

l3gateway ポート

l3gateway ポートは、ゲートウェイルーターで使用される論理パッチポートの **ovn-sbdb** 内のポート バインディングエントリーです。これらのポートは、ゲートウェイルーター本体と同様にシャーシ にバインドされているという事実を表すために、パッチポートではなく l3gateway ポートと呼ばれ ます。

localnet ポート

localnet ポートは、各 **ovn-controller** インスタンスからローカルにアクセス可能なネットワークへの接続を可能にするブリッジ論理スイッチに存在します。これは、論理スイッチから物理ネットワークへの直接接続をモデル化するのに役立ちます。論理スイッチに接続できる localnet ポートは1つだけです。

25.2.7.1. ローカルホストへの network-tools のインストール

ローカルホストに **network-tools** をインストールして、OpenShift Container Platform クラスターネットワークの問題をデバッグするための一連のツールを使用できるようにします。

手順

1. 次のコマンドを使用して、**network-tools** リポジトリーのクローンをワークステーションに作成します。

\$ git clone git@github.com:openshift/network-tools.git

2. クローン作成したリポジトリーのディレクトリーに移動します。

\$ cd network-tools

3. オプション: 使用可能なすべてのコマンドをリストします。

\$./debug-scripts/network-tools -h

25.2.7.2. network-tools の実行

network-tools を実行して、論理スイッチとルーターに関する情報を取得します。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ローカルホストに network-tools がインストールされている。

手順

1. 次のコマンドを実行して、ルーターを一覧表示します。

\$./debug-scripts/network-tools ovn-db-run-command ovn-nbctl Ir-list

出力例

Leader pod is ovnkube-master-vslqm 5351ddd1-f181-4e77-afc6-b48b0a9df953 (GR_helix13.lab.eng.tlv2.redhat.com) ccf9349e-1948-4df8-954e-39fb0c2d4d06 (GR_helix14.lab.eng.tlv2.redhat.com) e426b918-75a8-4220-9e76-20b7758f92b7 (GR_hlxcl7-master-0.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com) dded77c8-0cc3-4b99-8420-56cd2ae6a840 (GR_hlxcl7-master-1.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com) 4f6747e6-e7ba-4e0c-8dcd-94c8efa51798 (GR_hlxcl7-master-2.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com) 52232654-336e-4952-98b9-0b8601e370b4 (ovn cluster router)

2. 次のコマンドを実行して、localnet ポートを一覧表示します。

\$./debug-scripts/network-tools ovn-db-run-command \ ovn-sbctl find Port_Binding type=localnet

```
Leader pod is ovnkube-master-vslgm
_uuid
              : 3de79191-cca8-4c28-be5a-a228f0f9ebfc
additional chassis : []
additional encap : []
chassis
            :[]
              : 3f1a4928-7ff5-471f-9092-fe5f5c67d15c
datapath
encap
              :[]
external ids
              : {}
gateway_chassis : []
ha_chassis_group : []
logical_port
              : br-ex_helix13.lab.eng.tlv2.redhat.com
mac
              : [unknown]
nat addresses : []
              : {network_name=physnet}
options
parent_port
               :[]
port_security
                :[]
requested additional chassis: []
requested_chassis : []
tag
            :[]
tunnel_key
                :2
             : localnet
type
             : false
up
virtual_parent : []
_uuid
              : dbe21daf-9594-4849-b8f0-5efbfa09a455
additional chassis : []
additional_encap : []
chassis
              :[]
datapath
              : db2a6067-fe7c-4d11-95a7-ff2321329e11
encap
              : []
external ids
              : {}
gateway_chassis : []
ha_chassis_group : []
logical port : br-ex hlxcl7-master-2.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com
```

: [unknown] mac nat_addresses : [] : {network_name=physnet} options parent_port :[] port security :[] requested_additional_chassis: [] requested chassis : [] tag : [] tunnel key :2 type : localnet : false up virtual_parent : [] [...]

3. 次のコマンドを実行して、l3gateway ポートを一覧表示します。

\$./debug-scripts/network-tools ovn-db-run-command \ ovn-sbctl find Port_Binding type=l3gateway

```
Leader pod is ovnkube-master-vslgm
_uuid
             : 9314dc80-39e1-4af7-9cc0-ae8a9708ed59
additional chassis : []
additional_encap : []
chassis
          : 336a923d-99e8-4e71-89a6-12564fde5760
datapath
             : db2a6067-fe7c-4d11-95a7-ff2321329e11
encap
              :[]
external ids
              : {}
gateway_chassis : []
ha_chassis_group : []
logical_port : etor-GR_hlxcl7-master-2.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com
             : ["52:54:00:3e:95:d3"]
mac
nat addresses : ["52:54:00:3e:95:d3 10.46.56.77"]
        : {I3gateway-chassis="7eb1f1c3-87c2-4f68-8e89-60f5ca810971", peer=rtoe-
options
GR_hlxcl7-master-2.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com}
parent_port
              : []
port security
             :[]
requested_additional_chassis: []
requested_chassis : []
tag
            :[]
tunnel key
               :1
            : I3gateway
type
up
            : true
virtual_parent : []
uuid
             : ad7eb303-b411-4e9f-8d36-d07f1f268e27
additional chassis : []
additional_encap : []
chassis
            : f41453b8-29c5-4f39-b86b-e82cf344bce4
datapath
              : 082e7a60-d9c7-464b-b6ec-117d3426645a
encap
              :[]
external_ids
             : {}
gateway_chassis : []
```

```
ha_chassis_group : []
logical_port : etor-GR_helix14.lab.eng.tlv2.redhat.com
             : ["34:48:ed:f3:e2:2c"]
mac
nat addresses : ["34:48:ed:f3:e2:2c 10.46.56.14"]
options : {I3gateway-chassis="2e8abe3a-cb94-4593-9037-f5f9596325e2", peer=rtoe-
GR_helix14.lab.eng.tlv2.redhat.com}
parent port
              :[]
               :[]
port_security
requested_additional_chassis: []
requested_chassis : []
tag
            :[]
              :1
tunnel_key
type
             : I3gateway
           : true
up
virtual_parent : []
[...]
```

```
4. 次のコマンドを実行して、パッチポートを一覧表示します。
```

\$./debug-scripts/network-tools ovn-db-run-command \ ovn-sbctl find Port_Binding type=patch

```
Leader pod is ovnkube-master-vslqm
uuid
             : c48b1380-ff26-4965-a644-6bd5b5946c61
additional_chassis : []
additional_encap : []
chassis
          : []
datapath
             : 72734d65-fae1-4bd9-a1ee-1bf4e085a060
encap
             :[]
external_ids
            : {}
gateway chassis : []
ha_chassis_group : []
logical_port : jtor-ovn_cluster_router
mac
             : [router]
nat addresses : []
options
            : {peer=rtoj-ovn_cluster_router}
              :[]
parent_port
port_security : []
requested_additional_chassis: []
requested chassis : []
tag
            : []
              :4
tunnel_key
             : patch
type
            : false
up
virtual_parent : []
             : 5df51302-f3cd-415b-a059-ac24389938f7
_uuid
additional_chassis : []
additional_encap : []
chassis
              :[]
datapath
              : 0551c90f-e891-4909-8e9e-acc7909e06d0
encap
              :[]
```

```
external_ids
                : {}
gateway_chassis : []
ha_chassis_group : []
logical port
               : rtos-hlxcl7-master-1.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com
              : ["0a:58:0a:82:00:01 10.130.0.1/23"]
mac
nat addresses
                   : []
               : {chassis-redirect-port=cr-rtos-hlxcl7-master-1.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com,
options
peer=stor-hlxcl7-master-1.hlxcl7.lab.eng.tlv2.redhat.com}
parent_port
                 :[]
                 : []
port security
requested_additional_chassis: []
requested_chassis : []
tag
             :[]
tunnel_key
                 :4
type
             : patch
             : false
up
virtual_parent : []
[...]
```

25.2.8. 関連情報

- Red Hat OpenShift Container Platform 4.x で ovn-kubernetes を使用して OVN データベースの 内容を一覧表示するにはどうすればよいですか?
- ovnkube-trace を使用した Openflow のトレース
- OVN のアーキテクチャー
- Raft (algorithm)
- ovn-nbctl linux man ページ
- ovn-sbctl linux man ページ

25.3. OVN-KUBERNETES のトラブルシューティング

OVN-Kubernetesには、組み込みのヘルスチェックとログのソースが多数あります。

25.3.1. readiness プローブを使用した OVN-Kubernetes の正常性の監視

ovnkube-master および **ovnkube-node** Pod には、readiness プローブで設定されたコンテナーがあり ます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) へのアクセスがある。
- cluster-admin 権限でクラスターにアクセスできる。
- jq がインストールされている。

手順

1. 次のコマンドを実行して、**ovnkube-master** readiness プローブの詳細を確認します。

\$ oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-master \ -o json | jg '.items[0].spec.containers[] | .name,.readinessProbe'

ovnkube-master Pod 内のノースバウンドおよびサウスバウンドデータベースコンテナーの readiness プローブは、データベースをホストする Raft クラスターの正常性をチェックしま す。

2. 次のコマンドを実行して、ovnkube-node readiness プローブの詳細を確認します。

\$ oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-master \ -o json | jq '.items[0].spec.containers[] | .name,.readinessProbe'

ovnkube-node Pod 内の **ovnkube-node** コンテナーには、ovn-kubernetes CNI 設定ファイル の存在を確認する readiness プローブがあります。この設定ファイルがない場合、Pod が実行 されていないか、Pod を設定するリクエストを受け入れる準備ができていないません。

3. 次のコマンドを使用して、プローブの失敗を含む namespace のすべてのイベントを表示します。

\$ oc get events -n openshift-ovn-kubernetes

4. この Pod だけのイベントを表示します。

\$ oc describe pod ovnkube-master-tp2z8 -n openshift-ovn-kubernetes

5. クラスターネットワーク Operator からのメッセージとステータスを表示します。

\$ oc get co/network -o json | jq '.status.conditions[]'

6. 次のスクリプトを実行して、**ovnkube-master** Pod 内の各コンテナーの **ready** ステータスを表示します。

\$ for p in \$(oc get pods --selector app=ovnkube-master -n openshift-ovn-kubernetes \
-o jsonpath='{range.items[*]}{" "}{.metadata.name}'); do echo === \$p ===; \
oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes \$p -o json | jq '.status.containerStatuses[] | .name,
.ready'; \
done



注記

すべてのコンテナーのステータスが **true** として報告されることが期待されま す。readiness プローブが失敗すると、ステータスが **false** に設定されます。

関連情報

● ヘルスチェックの使用によるアプリケーションの正常性の監視

25.3.2. コンソールでの OVN-Kubernetes アラートの表示

アラート UI は、アラートおよびそれらを規定するアラートルールおよびサイレンスについての詳細情 報を提供します。

前提条件

 開発者として、またはメトリクスで表示しているプロジェクトの表示パーミッションを持つ ユーザーとしてクラスターへのアクセスがある。

手順 (UI)

- 1. Administrator パースペクティブで、Observe → Alerting を選択します。このパースペクティ ブのアラート UI の主なページには、Alerts、Silences、および Alerting Rules という 3 つの ページがあります。
- 2. **Observe** → **Alerting** → **Alerting Rules** を選択して、OVN-Kubernetes アラートのルールを表示 します。

25.3.3. CLI での OVN-Kubernetes アラートの表示

コマンドラインから、アラートとその管理アラートルールおよびサイレンスに関する情報を取得できま す。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- jq がインストールされている。

手順

- 1. 次のコマンドを実行して、アクティブまたは発生中のアラートを表示します。
 - a. 次のコマンドを実行して、アラートマネージャーのルート環境変数を設定します。

\$ ALERT_MANAGER=\$(oc get route alertmanager-main -n openshift-monitoring \ -o jsonpath='{@.spec.host}')

b. 次のコマンドを実行して、特定のフィールドを要求する正しい承認の詳細を指定して、ア ラートマネージャールート API に **curl** リクエストを発行します。

\$ curl -s -k -H "Authorization: Bearer \
\$(oc create token prometheus-k8s -n openshift-monitoring)" \
https://\$ALERT_MANAGER/api/v1/alerts \
| jq '.data[] | "\(.labels.severity) \(.labels.alertname) \(.labels.pod) \(.labels.container) \
(.labels.endpoint) \(.labels.instance)"'

2. 次のコマンドを実行して、アラートルールを表示します。

\$ oc -n openshift-monitoring exec -c prometheus prometheus-k8s-0 -- curl -s 'http://localhost:9090/api/v1/rules' | jq '.data.groups[].rules[] | select(((.name|contains("ovn"))) or (.name|contains("OVN")) or (.name|contains("Ovn")) or (.name|contains("North")) or (.name|contains("South"))) and .type=="alerting")'

25.3.4. CLI を使用した OVN-Kubernetes ログの表示

OpenShift CLI (**oc**) を使用して、**ovnkube-master** および **ovnkube-node** Pod 内の各 Pod のログを表 示できます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (oc) へのアクセスがある。
- jq がインストールされている。

手順

1. 特定の Pod のログを表示します。

\$ oc logs -f <pod_name> -c <container_name> -n <namespace>

ここでは、以下のようになります。

-f

オプション: ログに書き込まれている内容に沿って出力することを指定します。

<pod_name>

Pod の名前を指定します。

<container_name>

オプション: コンテナーの名前を指定します。Pod に複数のコンテナーがある場合、コンテ ナー名を指定する必要があります。

<namespace>

Pod が実行されている namespace を指定します。

以下に例を示します。

\$ oc logs ovnkube-master-7h4q7 -n openshift-ovn-kubernetes

\$ oc logs -f ovnkube-master-7h4q7 -n openshift-ovn-kubernetes -c ovn-dbchecker

ログファイルの内容が出力されます。

2. ovnkube-master Pod 内のすべてのコンテナーの最新のエントリーを調べます。

 $for p in (oc get pods --selector app=ovnkube-master -n openshift-ovn-kubernetes -o jsonpath='{range.items[*]}{" "}{.metadata.name}';$ do echo === \$p ===; for container in (oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes \$p -o json | jq -r '.status.containerStatuses[] | .name'; do echo ---\$container---;oc logs -c \$container \$p -n openshift-ovn-kubernetes --tail=5; done; done

次のコマンドを使用して、ovnkube-master Pod 内のすべてのコンテナーのすべてのログの最後の5行を表示します。

\$ oc logs -l app=ovnkube-master -n openshift-ovn-kubernetes --all-containers --tail 5

25.3.5. Web コンソールを使用した OVN-Kubernetes ログの表示

Web コンソールで、ovnkube-master Pod と ovnkube-node Pod の各 Pod のログを表示できます。

前提条件

• OpenShift CLI (**oc**) へのアクセスがある。

手順

- 1. OpenShift Container Platform コンソールで Workloads → Pods に移動するか、調査するリ ソースから Pod に移動します。
- 2. ドロップダウンメニューから openshift-ovn-kubernetes プロジェクトを選択します。
- 3. 調査する Pod の名前をクリックします。
- 4. Logs をクリックします。ovnkube-master のデフォルトでは、northd コンテナーに関連付け られたログが表示されます。
- 5. ドロップダウンメニューを使用して、各コンテナーのログを順番に選択します。

25.3.5.1. OVN-Kubernetes のログレベルの変更

OVN-Kubernetes のデフォルトのログレベルは2です。OVN-Kubernetes をデバッグするには、ログレベルを5に設定します。次の手順に従って OVN-Kubernetes のログレベルを上げることで、問題のデバッグに役立てることができます。

前提条件

- cluster-admin 権限でクラスターにアクセスできる。
- OpenShift Container Platform Web コンソールにアクセスできる。

手順

1. 次のコマンドを実行して、OVN-Kubernetes プロジェクト内のすべての Pod の詳細情報を取得 します。

\$ oc get po -o wide -n openshift-ovn-kubernetes

NAME READY	STATUS RE	ESTARTS	AGE IP	NODE
NOMINATED NODE RE	ADINESS GATE	S		
ovnkube-master-84nc9 6	6 Running (0 50m	10.0.134.156	ip-10-0-134-
156.ec2.internal <none></none>	<none></none>			
ovnkube-master-gmlqv 6	6 Running (0 50m	10.0.209.180	ip-10-0-209-
180.ec2.internal <none></none>	<none></none>			
ovnkube-master-nhts2 6/	6 Running 1	(48m ago) 5	50m 10.0.147.	31 ip-10-0-147-
31.ec2.internal <none></none>	<none></none>			
ovnkube-node-2cbh8 5/	5 Running 0	9 43m	10.0.217.114	ip-10-0-217-
114.ec2.internal <none></none>	<none></none>			
ovnkube-node-6fvzl 5/5	Running 0	50m 1	10.0.147.31 ip	-10-0-147-
31.ec2.internal <none></none>	<none></none>			
ovnkube-node-f4lzz 5/5	Running 0	24m 1	10.0.146.76 ip	-10-0-146-

76.ec2.internal <none></none>	<none></none>	
ovnkube-node-jf67d 5/5	Running 0	50m 10.0.209.180 ip-10-0-209-
180.ec2.internal <none></none>	<none></none>	
ovnkube-node-np9mf 5/5	Running 0	40m 10.0.165.191 ip-10-0-165-
191.ec2.internal <none></none>	<none></none>	
ovnkube-node-qjldg 5/5	Running 0	50m 10.0.134.156 ip-10-0-134-
156.ec2.internal <none></none>	<none></none>	

2. 次の例のような **ConfigMap** ファイルを作成し、**env-overrides.yaml** などのファイル名を使用 します。

ConfigMap ファイルの例

kind: ConfigMap apiVersion: v1 metadata: name: env-overrides namespace: openshift-ovn-kubernetes data: ip-10-0-217-114.ec2.internal: | 1 *#* This sets the log level for the ovn-kubernetes node process: OVN_KUBE_LOG_LEVEL=5 # You might also/instead want to enable debug logging for ovn-controller: OVN LOG LEVEL=dbg ip-10-0-209-180.ec2.internal: | # This sets the log level for the ovn-kubernetes node process: OVN KUBE LOG LEVEL=5 # You might also/instead want to enable debug logging for ovn-controller: OVN_LOG_LEVEL=dbg _master: | 2 # This sets the log level for the ovn-kubernetes master process as well as the ovndbchecker: OVN KUBE LOG LEVEL=5 # You might also/instead want to enable debug logging for northd, nbdb and sbdb on all masters: OVN_LOG_LEVEL=dbg デバッグログレベルを設定するノードの名前を指定します。

_master を指定して、ovnkube-master コンポーネントのログレベルを設定します。

3. 次のコマンドを使用して、ConfigMap ファイルを適用します。

\$ oc apply -n openshift-ovn-kubernetes -f env-overrides.yaml

出力例

configmap/env-overrides.yaml created

4. 次のコマンドを使用して ovnkube Pod を再起動し、新しいログレベルを適用します。

\$ oc delete pod -n openshift-ovn-kubernetes \ --field-selector spec.nodeName=ip-10-0-217-114.ec2.internal -l app=ovnkube-node

\$ oc delete pod -n openshift-ovn-kubernetes \ --field-selector spec.nodeName=ip-10-0-209-180.ec2.internal -l app=ovnkube-node

\$ oc delete pod -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-master

25.3.6. OVN-Kubernetes Pod ネットワーク接続のチェック

OpenShift Container Platform 4.10 以降の接続チェックコントローラーは、クラスター内の接続検証 チェックをオーケストレーションします。これには、Kubernetes API、OpenShift API、および個々の ノードが含まれます。接続テストの結果は、**openshift-network-diagnostics** namespace の **PodNetworkConnectivity** オブジェクトに保存されます。接続テストは、1分ごとに並行して実行され ます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) へのアクセスがある。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- jq がインストールされている。

手順

1. 現在の **PodNetworkConnectivityCheck** オブジェクトを一覧表示するには、以下のコマンドを 入力します。

\$ oc get podnetworkconnectivitychecks -n openshift-network-diagnostics

2. 次のコマンドを使用して、各接続オブジェクトの最新の成功を表示します。

\$ oc get podnetworkconnectivitychecks -n openshift-network-diagnostics \ -o json | jq '.items[]| .spec.targetEndpoint,.status.successes[0]'

3. 次のコマンドを使用して、各接続オブジェクトの最新のエラーを表示します。

\$ oc get podnetworkconnectivitychecks -n openshift-network-diagnostics \
-o json | jq '.items[]| .spec.targetEndpoint,.status.failures[0]'

4. 次のコマンドを使用して、各接続オブジェクトの最新の停止を表示します。

\$ oc get podnetworkconnectivitychecks -n openshift-network-diagnostics \ -o json | jq '.items[]| .spec.targetEndpoint,.status.outages[0]'

接続チェックコントローラーは、これらのチェックからのメトリクスも Prometheus に記録します。

5. 次のコマンドを実行して、すべてのメトリクスを表示します。

\$ oc exec prometheus-k8s-0 -n openshift-monitoring -- \ promtool query instant http://localhost:9090 \ '{component="openshift-network-diagnostics"}'

6. 過去5分間のソース Pod と openshift api サービス間のレイテンシーを表示します。

\$ oc exec prometheus-k8s-0 -n openshift-monitoring -- \ promtool query instant http://localhost:9090 \ '{component="openshift-network-diagnostics"}'

25.3.7. 関連情報

- OpenShift 4 で ovn-kubernetes のログレベルを変更するにはどうすればよいですか?
- 接続ヘルスチェックの実装
- エンドポイントのネットワーク接続の確認

25.4. OVNKUBE-TRACE を使用した OPENFLOW のトレース

OVN と OVS のトラフィックフローは、**ovnkube-trace** という単一のユーティリティーでシミュレート できます。**ovnkube-trace** ユーティリティーは、**ovn-trace**、**ovs-appctl ofproto/trace**、および **ovndetrace** を実行し、その情報を1つの出力に関連付けます。

専用コンテナーから **ovnkube-trace** バイナリーを実行できます。OpenShift Container Platform 4.7 以 降のリリースでは、バイナリーをローカルホストにコピーして、そのホストから実行することもできま す。



注記

現在、Quay イメージのバイナリーは、デュアル IP スタックまたは IPv6 のみの環境では 機能しません。これらの環境では、ソースからビルドする必要があります。

25.4.1. ローカルホストへの ovnkube-trace のインストール

ovnkube-trace ツールは、OVN-Kubernetes で動作する OpenShift Container Platform クラスター内の ポイント間における任意の UDP または TCP トラフィックのパケットシミュレーションをトレースしま す。**ovnkube-trace** バイナリーをローカルホストにコピーして、クラスターに対して実行できるように します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。

手順

1. 次のコマンドを使用して Pod 変数を作成します。

\$ POD=\$(oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-master -o name | head -1 | awk -F '/' '{print \$NF}') 2. ローカルホストで次のコマンドを実行して、**ovnkube-master** Pod からバイナリーをコピーします。

\$ oc cp -n openshift-ovn-kubernetes \$POD:/usr/bin/ovnkube-trace ovnkube-trace

3. 次のコマンドを実行して、ovnkube-trace を実行可能にします。

\$ chmod +x ovnkube-trace

4. 次のコマンドを実行して、ovnkube-trace で使用可能なオプションを表示します。

\$./ovnkube-trace -help

予想される出力

I0111 15:05:27.973305 204872 ovs.go:90] Maximum command line arguments set to: 191102 Usage of ./ovnkube-trace: -dst string dest: destination pod name -dst-ip string destination IP address (meant for tests to external targets) -dst-namespace string k8s namespace of dest pod (default "default") -dst-port string dst-port: destination port (default "80") -kubeconfig string absolute path to the kubeconfig file -loglevel string loglevel: klog level (default "0") -ovn-config-namespace string namespace used by ovn-config itself -service string service: destination service name -skip-detrace skip ovn-detrace command -src string src: source pod name -src-namespace string k8s namespace of source pod (default "default") -tcp use tcp transport protocol -udp use udp transport protocol

サポートされているコマンドライン引数は、namespace、Pod、サービスなど、よく知られた Kubernetes コンストラクトであるため、MAC アドレス、宛先ノードの IP アドレス、または ICMP タイプを見つける必要はありません。

ログレベルは次のとおりです。

- 0(最小出力)
- 2(トレースコマンドの結果を示すより詳細な出力)

5(デバッグ出力)

25.4.2. ovnkube-trace の実行

ovn-trace を実行して、OVN 論理ネットワーク内のパケット転送をシミュレートします。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ローカルホストに ovnkube-trace がインストールされている。

例: デプロイされた Pod からの DNS 解決が機能することをテストする

この例は、デプロイされた Pod からクラスターで実行されるコア DNS Pod への DNS 解決をテストす る方法を示しています。

手順

1. 次のコマンドを入力して、default namespace で Web サービスを開始します。

\$ oc run web --namespace=default --image=nginx --labels="app=web" --expose --port=80

2. openshift-dns namespace で実行されている Pod を一覧表示します。

oc get pods -n openshift-dns

出力例

NAME	READY	STATUS	RE	STARTS	AGE
dns-default-467qv	w 2/2	Running	0	49m	
dns-default-6prvx	2/2	Running	0	53m	
dns-default-fkqr8	2/2	Running	0	53m	
dns-default-qv2rg	2/2	Running	0	49m	
dns-default-s29vr	2/2	Running	0	49m	
dns-default-vdsbr	า 2/2	Running	0	53m	
node-resolver-6th	ntt 1/1	Running	0	53m	
node-resolver-7ks	sdn 1/1	Running	j 0	49m	
node-resolver-8st	thh 1/1	Running	0	53m	
node-resolver-c5l	ksw 1/1	Running	g 0	50m	
node-resolver-gb	vdp 1/1	Running	g 0	53m	
node-resolver-sxl	nkd 1/1	Running	ј О	50m	

3. 次の ovn-kube-trace コマンドを実行して、DNS 解決が機能していることを確認します。

\$./ovnkube-trace \
-src-namespace default \

-src web \
2
-dst-namespace openshift-dns \
3

-dst dns-default-467qw \ 4
-udp -dst-port 53 \ 5
-loglevel 0 (5)
1 ソース Pod の namespace
2 ソース Pod 名
3 宛先 Pod の namespace
4 宛先 Pod 名
5 udp トランスポートプロトコルを使用します。ポート 53 は、DNS サービスが使用する ポートです。
6 ログレベルを1に設定します (0 は最小限で、5 はデバッグです)。

予想される出力

I0116 10:19:35.601303 17900 ovs.go:90] Maximum command line arguments set to: 191102

ovn-trace source pod to destination pod indicates success from web to dns-default-467qw ovn-trace destination pod to source pod indicates success from dns-default-467qw to web ovs-appctl ofproto/trace source pod to destination pod indicates success from web to dns-default-467qw

ovs-appctl ofproto/trace destination pod to source pod indicates success from dns-default-467qw to web

ovn-detrace source pod to destination pod indicates success from web to dns-default-467qw ovn-detrace destination pod to source pod indicates success from dns-default-467qw to web

この出力は、デプロイされた Pod から DNS ポートへの解決が成功し、その反対方向への解決 も成功したことを示しています。つまり、Web Pod がコア DNS からの DNS 解決を行う場合 に、UDP ポート 53 で双方向のトラフィックがサポートされていることがわかります。

たとえば、これが機能せず、ovn-trace、ovs-appctl ofproto/trace と ovn-detrace、およびその他のデ バッグタイプ情報を取得したい場合は、ログレベルを2に上げて、次のようにコマンドを再度実行しま す。

./ovnkube-trace \
-src-namespace default \
-src web \
-dst-namespace openshift-dns \
-dst dns-default-467qw \
-udp -dst-port 53 \
-loglevel 2

このログレベルの出力は多すぎるため、ここにはリストできません。障害状況では、このコマンドの出 力は、どのフローがそのトラフィックを破棄しているかを示します。たとえば、egress または ingress ネットワークポリシーが、そのトラフィックを許可しないクラスターで設定されている場合などがあり ます。

例: デバッグ出力を使用して設定済みのデフォルトの拒否を確認する

この例は、デバッグ出力を使用して、デフォルトの Ingress 拒否ポリシーがトラフィックをブロックしていることを特定する方法を示しています。

手順

 すべての namespace におけるすべての Pod からの ingress を拒否する deny-by-default ポリ シーを定義する次の YAML を作成します。YAML を deny-by-default.yaml ファイルに保存し ます。

```
kind: NetworkPolicy
apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
name: deny-by-default
namespace: default
spec:
podSelector: {}
ingress: []
```

2. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f deny-by-default.yaml

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/deny-by-default created

3. 次のコマンドを入力して、default namespace で Web サービスを開始します。

\$ oc run web --namespace=default --image=nginx --labels="app=web" --expose --port=80

4. 次のコマンドを実行して、**prod** namespace を作成します。

\$ oc create namespace prod

5. 次のコマンドを実行して、prod namespace にラベルを付けます。

\$ oc label namespace/prod purpose=production

6. 次のコマンドを実行して、**alpine** イメージを **prod** namespace にデプロイし、シェルを開始し ます。

\$ oc run test-6459 --namespace=prod --rm -i -t --image=alpine -- sh

- 7. 別のターミナルセッションを開きます。
- この新しいターミナルセッションで ovn-trace を実行して、namespace prod で実行されてい るソース Pod test-6459 と default namespace で実行されている宛先 Pod 間の通信の失敗を確 認します。

\$./ovnkube-trace \ -src-namespace prod \ -src test-6459 \ -dst-namespace default \ -dst web \ -tcp -dst-port 80 \ -loglevel 0

予想される出力

I0116 14:20:47.380775 50822 ovs.go:90] Maximum command line arguments set to: 191102 ovn-trace source pod to destination pod indicates failure from test-6459 to web

9. 次のコマンドを実行して、ログレベルを2に上げて、失敗の理由を明らかにします。

```
./ovnkube-trace \
-src-namespace prod \
-src test-6459 \
-dst-namespace default \
-dst web \
-tcp -dst-port 80 \
-loglevel 2
```

予想される出力



デフォルトの拒否ポリシーが設定されているため、ingress トラフィックがブロックされ ています。

10. ラベルが **Purpose=production** の特定の namespace 内にあるすべての Pod からのトラフィッ クを許可するポリシーを作成します。YAML を **web-allow-prod.yaml** ファイルに保存します。

kind: NetworkPolicy apiVersion: networking.k8s.io/v1 metadata: name: web-allow-prod namespace: default spec: podSelector: matchLabels: app: web policyTypes: - Ingress ingress: from:
 namespaceSelector:
 matchLabels:
 purpose: production

11. 次のコマンドを入力して、ポリシーを適用します。

\$ oc apply -f web-allow-prod.yaml

12. 次のコマンドを入力して、**ovnkube-trace** を実行し、トラフィックが許可されていることを確認します。

```
./ovnkube-trace \
-src-namespace prod \
-src test-6459 \
-dst-namespace default \
-dst web \
-tcp -dst-port 80 \
-loglevel 0
```

予想される出力

I0116 14:25:44.055207 51695 ovs.go:90] Maximum command line arguments set to: 191102

ovn-trace source pod to destination pod indicates success from test-6459 to web ovn-trace destination pod to source pod indicates success from web to test-6459 ovs-appctl ofproto/trace source pod to destination pod indicates success from test-6459 to web

ovs-appctl ofproto/trace destination pod to source pod indicates success from web to test-6459

ovn-detrace source pod to destination pod indicates success from test-6459 to web ovn-detrace destination pod to source pod indicates success from web to test-6459

13. 開いているシェルで次のコマンドを実行します。

wget -qO- --timeout=2 http://web.default

予想される出力

```
<!DOCTYPE html>
<html>
<head>
<title>Welcome to nginx!</title>
<style>
html { color-scheme: light dark; }
body { width: 35em; margin: 0 auto;
font-family: Tahoma, Verdana, Arial, sans-serif; }
</style>
</head>
<body>
<h1>Welcome to nginx!</h1>
If you see this page, the nginx web server is successfully installed and
working. Further configuration is required.
```

For online documentation and support please refer to nginx.org.
Commercial support is available at nginx.com.

Thank you for using nginx. </body> </html>

25.4.3. 関連情報

- ovnkube-trace ユーティリティーを使用した Openflow のトレース
- ovnkube-trace

25.5. OPENSHIFT SDN ネットワークプラグインからの移行

クラスター管理者は、OpenShift SDN ネットワークプラグインから OVN-Kubernetes ネットワークプ ラグインに移行できます。

OVN-Kubernetes の詳細は、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインについて を参照してください。

25.5.1. OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行は、クラスターに到達できないダウンタイムを含む 手動プロセスです。ロールバック手順が提供されますが、移行は一方向プロセスとなることが意図され ています。

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行は、次のプラットフォームでサポートされています。

- ベアメタルハードウェア
- Amazon Web Services (AWS)
- Google Cloud Platform (GCP)
- IBM Cloud
- Microsoft Azure
- Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)
- Red Hat Virtualization (RHV)
- VMware vSphere

重要

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインとの間の移行は、Red Hat OpenShift Dedicated、Azure Red Hat OpenShift (ARO)、Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA) などのマネージド OpenShift クラウドサービスではサポートされていません。

OpenShift SDN ネットワークプラグインから OVN-Kubernetes ネットワークプラグイン への移行は、Nutanix ではサポートされていません。

25.5.1.1. OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行についての考慮点

OpenShift Container Platform クラスターに 150 を超えるノードがある場合は、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行について相談するサポートケースを開きます。

ノードに割り当てられたサブネット、および個々の Pod に割り当てられた IP アドレスは、移行時に保持されません。

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、OpenShift SDN ネットワークプラグインに存在する多 くの機能を実装していますが、設定は同じではありません。

- クラスターが次の OpenShift SDN ネットワークプラグイン機能のいずれかを使用する場合、 OVN-Kubernetes ネットワークプラグインで同じ機能を手動で設定する必要があります。
 - namespace の分離
 - Egress ルーター Pod
- クラスターまたは周囲のネットワークが 100.64.0.0/16 アドレス範囲の一部を使用している場合、spec.defaultNetwork.ovnKubernetesConfig オブジェクト定義で v4InternalSubnet 仕様を指定して、別の未使用の IP 範囲を選択する必要があります。OVN-Kubernetes は、デフォルトで IP 範囲 100.64.0.0/16 を内部的に使用します。

以下のセクションでは、OVN-Kubernetes と OpenShift SDN ネットワークプラグインの前述の機能の 設定の違いを強調しています。

namespace の分離

OVN-Kubernetes はネットワークポリシーの分離モードのみをサポートします。



重要

マルチテナントモードまたはサブネット分離モードのいずれかで設定されている OpenShift SDN を使用するクラスターの場合でも、OVN-Kubernetes ネットワークプラ グインに移行できます。移行操作後、マルチテナント分離モードは削除されるため、 Pod とサービスに対して同じプロジェクトレベルの分離を実現するには、ネットワーク ポリシーを手動で設定する必要があることに注意してください。

Egress IP アドレス OpenShift SDN は、2 つの異なる Egress IP モードをサポートしています。

- 自動的に割り当てる方法では、egress IP アドレス範囲はノードに割り当てられます。
- 手動で割り当てる方法では、1つ以上の Egress IP アドレスの一覧がノードに割り当てられます。

移行プロセスでは、自動割り当てモードを使用する Egress IP 設定の移行がサポートされています。

OVN-Kubernetes と OpenShift SDN との間に egress IP アドレスを設定する際の相違点は、以下の表で 説明されています。

表25.4 egress IP アドレス設定の違い

OVN-Kubernetes	OpenShift SDN
 EgressIPs オブジェクトを作成します。 アノテーションを Node オブジェクトに追加します。 	 NetNamespace オブジェクトにパッチを 適用します。 HostSubnet オブジェクトにパッチを適用 します。

OVN-Kubernetes で egress IP アドレスを使用する方法についての詳細は、egress IP アドレスの設定に ついて参照してください。

Egress ネットワークポリシー

OVN-Kubernetes と OpenShift SDN との間に egress ファイアウォールとしても知られる egress ネットワークポリシーの設定についての相違点は、以下の表に記載されています。

表25.5 egress ネットワークポリシー設定の相違点

OVN-Kubernetes	OpenShift SDN
 EgressFirewall オブジェクトを	 EgressNetworkPolicy オブジェクトを
namespace に作成します。	namespace に作成します。

注記

EgressFirewall オブジェクトの名前は **default** にしか設定できないため、移行後は、 OpenShift SDN での名前に関係なく、移行されたすべての **EgressNetworkPolicy** オブ ジェクトに **default** という名前が付けられます。

その後、OpenShift SDN にロールバックすると、以前の名前が失われるため、すべての **EgressNetworkPolicy** オブジェクトに **default** という名前が付けられます。

OVN-Kubernetes で egress ファイアウォールを使用する方法についての詳細は、プロ ジェクトの egress ファイアウォールの設定について参照してください。

Egress ルーター Pod

OVN-Kubernetes は、リダイレクトモードで Egress ルーター Pod をサポートします。OVN-Kubernetes は、HTTP プロキシーモードまたは DNS プロキシーモードでは Egress ルーター Pod をサ ポートしません。

Cluster Network Operator で Egress ルーターをデプロイする場合、ノードセレクターを指定して、 Egress ルーター Pod のホストに使用するノードを制御することはできません。

マルチキャスト

OVN-Kubernetes と OpenShift SDN でマルチキャストトラフィックを有効にする方法についての相違 点は、以下の表で説明されています。

表25.6 マルチキャスト設定の相違点

OVN-Kubernetes	OpenShift SDN
 アノテーションを Namespace オブジェクトに追加します。 	 アノテーションを NetNamespace オブ ジェクトに追加します。

OVN-Kubernetes でのマルチキャストの使用についての詳細は、プロジェクトのマルチキャストの有効 化を参照してください。

ネットワークポリシー

OVN-Kubernetes は、**networking.k8s.io/v1** API グループで Kubernetes **NetworkPolicy** API を完全に サポートします。OpenShift SDN から移行する際に、ネットワークポリシーで変更を加える必要はあり ません。

25.5.1.2. 移行プロセスの仕組み

以下の表は、プロセスのユーザーが開始する手順と、移行が応答として実行するアクション間を区分し て移行プロセスを要約しています。

表25.7 OpenShift SDN から OVN-Kubernetes への移行

ユーザーが開始する手順	移行アクティビティー
cluster という名前の Network.operator.openshift.io カスタムリソー ス (CR) の migration フィールドを OVNKubernetes に設定します。 migration フィールドを値に設定する前に null であることを確 認します。	Cluster Network Operator (CNO) cluster という名前の Network.config.openshift.io CR のステータ スを更新します。 Machine Config Operator (MCO) OVN-Kubernetes に必要な systemd 設定の更新 をロールアウトします。デフォルトでは、MCO はプールごとに一度に1台のマシンを更新するた め、クラスターのサイズに応じて移行にかかる合 計時間が長くなります。
Network.config.openshift.io CR の networkType フィールドを更新します。	 CNO 以下のアクションを実行します。 OpenShift SDN コントロールプレーン Pod を破棄します。 OVN-Kubernetes コントロールプレーン Pod をデプロイします。 Multus オブジェクトを更新して、新し いネットワークプラグインを反映しま す。

ユーザーが開始する手順	移行アクティビティー
クラスターの各ノードを再起動します。	クラスター ノードの再起動時に、クラスターは OVN- Kubernetes クラスターネットワークの Pod に IP アドレスを割り当てます。

OpenShift SDN へのロールバックが必要な場合、以下の表がプロセスについて説明します。



重要

ロールバックを開始する前に、OpenShift SDN から OVN-Kubernetes ネットワークプラ グインへの移行プロセスが成功するまで待つ必要があります。

表25.8 OpenShift SDN へのロールバックの実行

ユーザーが開始する手順	移行アクティビティー
MCO を一時停止し、移行が中断されないようにしま す。	MCO が停止します。
cluster という名前の Network.operator.openshift.io カスタムリソー ス (CR) の migration フィールドを OpenShiftSDN に設定します。 migration フィー ルドを値に設定する前に null であることを確認しま す。	CNO cluster という名前の Network.config.openshift.io CR のステータ スを更新します。
networkType フィールドを更新します。	 CNO 以下のアクションを実行します。 OVN-Kubernetes コントロールプレーン Pod を破棄します。 OpenShift SDN コントロールプレーン Pod をデプロイします。 Multus オブジェクトを更新して、新し いネットワークプラグインを反映しま す。
クラスターの各ノードを再起動します。	クラスター ノードがリブートすると、クラスターは OpenShift-SDN ネットワーク上の Pod に IP アド レスを割り当てます。
ユーザーが開始する手順	移行アクティビティー
---------------------------------------	--
クラスターのすべてのノードが再起動した後に MCO を有効にします。	MCO OpenShift SDN に必要な systemd 設定の更新を ロールアウトします。デフォルトでは、MCO は プールごとに一度に1台のマシンを更新するた め、移行にかかる合計時間はクラスターのサイズ に応じて増加します。

25.5.2. OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行

クラスター管理者は、クラスターのネットワークプラグインを OVN-Kubernetes に変更できます。移 行時に、クラスター内のすべてのノードを再起動する必要があります。



重要

移行の実行中はクラスターを利用できず、ワークロードが中断される可能性がありま す。サービスの中断が許容可能な場合にのみ移行を実行します。

前提条件

- ネットワークポリシー分離モードの OpenShift SDN CNI ネットワークプラグインで設定された クラスター。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- etcd データベースの最新のバックアップが利用可能である。
- 再起動は、ノードごとに手動でトリガーできます。
- クラスターは既知の正常な状態にあり、エラーがないこと。
- ソフトウェア更新後のクラウドプラットフォームでは、すべてのノードに対してポート 6081
 で UDP パケットを許可するセキュリティーグループルールを設定する必要があります。

手順

クラスターネットワークの設定のバックアップを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get Network.config.openshift.io cluster -o yaml > cluster-openshift-sdn.yaml

2. 移行のすべてのノードを準備するには、以下のコマンドを入力して Cluster Network Operator 設定オブジェクトに migration フィールドを設定します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": { "networkType": "OVNKubernetes" } } '



注記

この手順では、OVN-Kubernetes はすぐにデプロイしません。その代わり に、**migration** フィールドを指定すると、新規マシン設定が OVN-Kubernetes デプロイメントの準備に向けてクラスター内のすべてのノードに適用されるよう に Machine Config Operator (MCO) がトリガーされます。

- 3. オプション: いくつかの OpenShift SDN 機能の OVN-Kubernetes 同等機能への自動移行を無効 にすることができます。
 - Egress IP
 - Egress ファイアウォール
 - マルチキャスト

前述の OpenShift SDN 機能の設定の自動移行を無効にするには、次のキーを指定します。

ここでは、以下のようになります。

bool:機能の移行を有効にするかどうかを指定します。デフォルトは true です。

- 4. オプション: ネットワークインフラストラクチャーの要件を満たすように OVN-Kubernetes の 以下の設定をカスタマイズできます。
 - 最大伝送単位 (MTU)。このオプションの手順で MTU をカスタマイズする前に、以下を考慮してください。
 - デフォルトの MTU を使用しており、移行中にデフォルトの MTU を維持したい場合は、この手順を無視できます。
 - カスタム MTU を使用しており、移行中にカスタム MTU を維持する必要がある場合 は、この手順でカスタム MTU 値を宣言する必要があります。
 - 移行中に MTU 値を変更する場合、この手順は機能しません。代わりに、まず「クラス ター MTU の変更」に記載された指示に従う必要があります。その後、この手順を実行 してカスタム MTU 値を宣言すると、カスタム MTU 値を維持できます。



注記

OpenShift-SDN と OVN-Kubernetes のオーバーレイオーバーヘッドは 異なります。MTU 値は、「MTU 値の選択」ページにあるガイドライン に従って選択する必要があります。

- Geneve (Generic Network Virtualization Encapsulation) オーバーレイネットワークポート
- OVN-Kubernetes IPv4 内部サブネット
- OVN-Kubernetes IPv6 内部サブネット

以前の設定のいずれかをカスタマイズするには、以下のコマンドを入力してカスタマイズしま す。デフォルト値を変更する必要がない場合は、パッチのキーを省略します。

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
    "spec":{
        "defaultNetwork":{
        "ovnKubernetesConfig":{
        "mtu":<mtu>,
        "genevePort":<port>,
        "v4InternalSubnet":"<ipv4_subnet>",
        "v6InternalSubnet":"<ipv6_subnet>"
}}}]
```

ここでは、以下のようになります。

mtu

Geneve オーバーレイネットワークの MTU。この値は通常は自動的に設定されますが、クラスターにあるノードすべてが同じ MTU を使用しない場合、これを最小のノード MTU 値よりも **100** 小さく設定する必要があります。

port

Geneve オーバーレイネットワークの UDP ポート。値が指定されない場合、デフォルトは 6081 になります。ポートは、OpenShift SDN で使用される VXLAN ポートと同じにするこ とはできません。VXLAN ポートのデフォルト値は 4789 です。

ipv4_subnet

OVN-Kubernetes による内部使用のための IPv4 アドレス範囲。IP アドレス範囲が、 OpenShift Container Platform インストールで使用される他のサブネットと重複しないよう にする必要があります。IP アドレス範囲は、クラスターに追加できるノードの最大数より大 きくする必要があります。デフォルト値は **100.64.0.0**/16 です。

ipv6_subnet

OVN-Kubernetes による内部使用のための IPv6 アドレス範囲。IP アドレス範囲が、 OpenShift Container Platform インストールで使用される他のサブネットと重複しないよう にする必要があります。IP アドレス範囲は、クラスターに追加できるノードの最大数より大 きくする必要があります。デフォルト値は **fd98::/48** です。

mtu フィールドを更新する patch コマンドの例

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
 --patch '{
 "spec":{

"defaultNetwork":{ "ovnKubernetesConfig":{ "mtu":1200 }}}}'

5. MCO がそれぞれのマシン設定プールのマシンを更新すると、各ノードが1つずつ再起動します。すべてのノードが更新されるまで待機する必要があります。以下のコマンドを実行してマシン設定プールのステータスを確認します。

\$ oc get mcp

正常に更新されたノードには、**UPDATED=true、UPDATING=false、 DEGRADED=false**のス テータスがあります。



注記

デフォルトで、MCO はプールごとに一度に1つのマシンを更新するため、移行 にかかる合計時間がクラスターのサイズと共に増加します。

- 6. ホスト上の新規マシン設定のステータスを確認します。
 - a. マシン設定の状態と適用されたマシン設定の名前をリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc describe node | egrep "hostname|machineconfig"

出力例

kubernetes.io/hostname=master-0 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/reason: machineconfiguration.openshift.io/state: Done

以下のステートメントが true であることを確認します。

- machineconfiguration.openshift.io/state フィールドの値は Done です。
- machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドの値 は、machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig フィールドの値と等しくなり ます。
- b. マシン設定が正しいことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get machineconfig <config_name> -o yaml | grep ExecStart

ここで、<**config_name**> は、 **machineconfiguration.openshift.io**/currentConfig フィー ルドのマシン設定の名前になります。

マシン設定には、systemd 設定に以下の更新を含める必要があります。

ExecStart=/usr/local/bin/configure-ovs.sh OVNKubernetes

- c. ノードが **NotReady** 状態のままになっている場合、マシン設定デーモン Pod のログを調べ、エラーを解決します。
 - i. Pod をリスト表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pod -n openshift-machine-config-operator

出力例

NAME	READY	STA	TUS R	ESTAF	RTS AG	θE
machine-config-controller-75f75	6f89d-sjp8	3b 1	l/1 Rui	nning	0 3	37m
machine-config-daemon-5cf4b		2/2	Runnin	g 0	43h	
machine-config-daemon-7wzcd		2/2	Runni	ng 0	43ł	٦
machine-config-daemon-fc946		2/2	Runnin	g 0	43h	
machine-config-daemon-g2v28		2/2	Runnii	ng O	43h	า
machine-config-daemon-gcl4f	2	2/2	Running	g 0	43h	
machine-config-daemon-l5tnv	2	2/2	Running	g 0	43h	
machine-config-operator-79d9c	55d5-hth9	2	1/1 Ru	unning	0	37m
machine-config-server-bsc8h	1.	/1	Running	0	43h	
machine-config-server-hklrm	1/	1	Running	0	43h	
machine-config-server-k9rtx	1/1	I F	Running	0	43h	

設定デーモン Pod の名前は、**machine-config-daemon-<seq>** という形式になりま す。**<seq>** 値は、ランダムな5文字の英数字シーケンスになります。

ii. 以下のコマンドを入力して、直前の出力に表示される最初のマシン設定デーモン Pod の Pod ログを表示します。

\$ oc logs <pod> -n openshift-machine-config-operator

ここで、pod はマシン設定デーモン Pod の名前になります。

- iii. 直前のコマンドの出力で示されるログ内のエラーを解決します。
- 7. 移行を開始するには、次のいずれかのコマンドを使用して OVN-Kubernetes ネットワークプラ グインを設定します。
 - クラスターネットワークの IP アドレスブロックを変更せずにネットワークプロバイダーを 指定するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.config.openshift.io cluster \
 --type='merge' --patch '{ "spec": { "networkType": "OVNKubernetes" } }'

別のクラスターネットワーク IP アドレスブロックを指定するには、以下のコマンドを入力します。

```
$ oc patch Network.config.openshift.io cluster \
--type='merge' --patch '{
    "spec": {
        "clusterNetwork": [
           {
                "cidr": "<cidr>",
```

"hostPrefix": <prefix> }], "networkType": "OVNKubernetes" }'

ここで、cidr は CIDR ブロックであり、prefix はクラスター内の各ノードに割り当てられる CIDR ブロックのスライスです。OVN-Kubernetes ネットワークプロバイダーはこのブロックを内部で使用するため、100.64.0.0/16 CIDR ブロックと重複する CIDR ブロックは使用できません。



重要

移行時に、サービスネットワークのアドレスブロックを変更することはでき ません。

8. Multus デーモンセットのロールアウトが完了したことを確認してから、後続の手順を続行しま す。



Multus Pod の名前の形式は **multus-<xxxxx>** です。ここで、 **<xxxxx>** は文字のランダムな シーケンスになります。Pod が再起動するまでにしばらく時間がかかる可能性があります。

出力例

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 1 out of 6 new pods have been updated...

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 5 of 6 updated pods are available... daemon set "multus" successfully rolled out

9. ネットワークプラグインの変更を完了するには、クラスター内の各ノードを再起動します。次 のいずれかの方法で、クラスター内のノードを再起動できます。



重要

以下のスクリプトは、クラスター内のすべてのノードを同時に再起動します。これにより、クラスターが不安定になる可能性があります。もう1つのオプションとして、ノードを一度に1つずつ手動でリブートすることもできます。ノードを1つずつ再起動すると、多数のノードを持つクラスターでかなりのダウンタイムが発生します。

• oc rsh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。

```
#!/bin/bash
readarray -t POD_NODES <<< "$(oc get pod -n openshift-machine-config-operator -o
wide| grep daemon|awk '{print $1" "$7}')"
for i in "${POD_NODES[@]}"
do
read -r POD NODE <<< "$i"
until oc rsh -n openshift-machine-config-operator "$POD" chroot /rootfs shutdown -r +1</pre>
```



 ssh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。このスクリプトは、パス ワードの入力を求めないように sudo が設定されていることを前提としています。

```
#!/bin/bash
for ip in $(oc get nodes -o jsonpath='{.items[*].status.addresses[?
(@.type=="InternalIP")].address}')
do
    echo "reboot node $ip"
    ssh -o StrictHostKeyChecking=no core@$ip sudo shutdown -r -t 3
done
```

- 10. 移行が正常に完了したことを確認します。
 - a. ネットワークプラグインが OVN-Kubernetes であることを確認するには、次のコマンドを 入力します。status.networkType の値は OVNKubernetes である必要があります。

\$ oc get network.config/cluster -o jsonpath='{.status.networkType}{"\n"}'

b. クラスターノードが **Ready** 状態にあることを確認するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get nodes

c. Pod がエラー状態ではないことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pods --all-namespaces -o wide --sort-by='{.spec.nodeName}'

ノードの Pod がエラー状態にある場合は、そのノードを再起動します。

d. すべてのクラスター Operator が異常な状態にないことを確認するには、以下のコマンドを 入力します。

\$ oc get co

すべてのクラスター Operator のステータス

は、AVAILABLE="True"、PROGRESSING="False"、DEGRADED="False" になりま す。クラスター Operator が利用できないか、そのパフォーマンスが低下する場合には、ク ラスター Operator のログで詳細を確認します。

- 11. 以下の手順は、移行に成功し、クラスターの状態が正常である場合にのみ実行します。
 - a. CNO 設定オブジェクトから移行設定を削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": null } }'

b. OpenShift SDN ネットワークプロバイダーのカスタム設定を削除するには、以下のコマン ドを入力します。 \$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "defaultNetwork": { "openshiftSDNConfig": null } } }'

c. OpenShift SDN ネットワークプロバイダー namespace を削除するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc delete namespace openshift-sdn

25.5.3. 関連情報

- OVN-Kubernetes ネットワークプラグインの設定パラメーター
- etcd のバックアップ
- ネットワークポリシーについて
- クラスター MTU の変更
- MTU 値の選択
- OVN-Kubernetes の機能
 - egress IP アドレスの設定
 - o プロジェクトの egress ファイアウォールの設定
 - プロジェクトのマルチキャストの有効化
- OpenShift SDN の機能
 - プロジェクトの egress IP の設定
 - プロジェクトの egress ファイアウォールの設定
 - プロジェクトのマルチキャストの有効化
- ネットワーク [operator.openshift.io/v1]

25.6. OPENSHIFT SDN ネットワークプロバイダーへのロールバック

クラスター管理者は、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行が完了して成功した後にの み、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインから OpenShift SDN にロールバックできます。

25.6.1. OpenShift SDN ネットワークプラグインへの移行

クラスター管理者は、OpenShift SDN Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインに移行できます。移行中は、クラスター内のすべてのノードを再起動する必要があります。



重要

ロールバックを開始する前に、OpenShift SDN から OVN-Kubernetes ネットワークプラ グインへの移行プロセスが成功するまで待つ必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- インフラストラクチャーにインストールされたクラスターが OVN-Kubernetes ネットワークプ ラグインで設定されている。
- etcd データベースの最新のバックアップが利用可能である。
- 再起動は、ノードごとに手動でトリガーできます。
- クラスターは既知の正常な状態にあり、エラーがないこと。

手順

- 1. Machine Config Operator (MCO) によって管理されるすべてのマシン設定プールを停止しま す。
 - マスター設定プールを停止します。

\$ oc patch MachineConfigPool master --type='merge' --patch \
'{ "spec": { "paused": true } }'

ワーカーマシン設定プールを停止します。

\$ oc patch MachineConfigPool worker --type='merge' --patch \
'{ "spec":{ "paused": true } }'

2. 移行の準備をするには、次のコマンドを入力して移行フィールドを null に設定します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": null } }'

 移行を開始するには、次のコマンドを入力して、ネットワークプラグインを OpenShift SDN に 戻します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": { "networkType": "OpenShiftSDN" } } }'

\$ oc patch Network.config.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "networkType": "OpenShiftSDN" } }'

- 4. オプション: いくつかの OVN-Kubernetes 機能の OpenShift SDN 同等機能への自動移行を無効 にすることができます。
 - Egress IP
 - Egress ファイアウォール
 - マルチキャスト

前述の OpenShift SDN 機能の設定の自動移行を無効にするには、次のキーを指定します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{

```
"spec": {
    "migration": {
        "networkType": "OpenShiftSDN",
        "features": {
            "egressIP": <bool>,
            "egressFirewall": <bool>,
            "multicast": <bool>
        }
      }
    }
}
```

ここでは、以下のようになります。

bool: 機能の移行を有効にするかどうかを指定します。デフォルトは true です。

- 5. オプション: ネットワークインフラストラクチャーの要件を満たすように OpenShift SDN の以下の設定をカスタマイズできます。
 - Maximum transmission unit (MTU)
 - VXLAN ポート

以前の設定のいずれかを両方をカスタマイズするには、カスタマイズし、以下のコマンドを入 力します。デフォルト値を変更する必要がない場合は、パッチのキーを省略します。

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
    "spec":{
        "defaultNetwork":{
            "openshiftSDNConfig":{
                "mtu":<mtu>,
                "vxlanPort":<port>
        }}}}'
```

mtu

VXLAN オーバーレイネットワークの MTU。この値は通常は自動的に設定されますが、クラ スターにあるノードすべてが同じ MTU を使用しない場合、これを最小のノード MTU 値よ りも **50** 小さく設定する必要があります。

port

VXLAN オーバーレイネットワークの UDP ポート。値が指定されない場合は、デフォルトは **4789** になります。ポートは OVN-Kubernetes で使用される Geneve ポートと同じにすることはできません。Geneve ポートのデフォルト値は **6081** です。

patch コマンドの例

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
    "spec":{
        "defaultNetwork":{
            "openshiftSDNConfig":{
                "mtu":1200
        }}}}'
```

- クラスター内の各ノードを再起動します。次のいずれかの方法で、クラスター内のノードを再 起動できます。
 - oc rsh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。

```
#!/bin/bash
readarray -t POD_NODES <<< "$(oc get pod -n openshift-machine-config-operator -o
wide| grep daemon|awk '{print $1" "$7}')"
for i in "${POD_NODES[@]}"
do
    read -r POD NODE <<< "$i"
    until oc rsh -n openshift-machine-config-operator "$POD" chroot /rootfs shutdown -r +1
    do
        echo "cannot reboot node $NODE, retry" && sleep 3
    done
done</pre>
```

 ssh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。このスクリプトは、パス ワードの入力を求めないように sudo が設定されていることを前提としています。

```
#!/bin/bash
for ip in $(oc get nodes -o jsonpath='{.items[*].status.addresses[?
(@.type=="InternalIP")].address}')
do
    echo "reboot node $ip"
    ssh -o StrictHostKeyChecking=no core@$ip sudo shutdown -r -t 3
done
```

 Multus デーモンセットのロールアウトが完了するまで待機します。次のコマンドを実行して、 ロールアウトのステータスを確認します。

\$ oc -n openshift-multus rollout status daemonset/multus

Multus Pod の名前の形式は **multus-<xxxxx>** です。ここで、 **<xxxxx>** は文字のランダムな シーケンスになります。Pod が再起動するまでにしばらく時間がかかる可能性があります。

出力例

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 1 out of 6 new pods have been updated...

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 5 of 6 updated pods are available... daemon set "multus" successfully rolled out

- 8. クラスター内のノードが再起動し、multus Pod がロールアウトされたら、次のコマンドを実行 してすべてのマシン設定プールを起動します。
 - マスター設定プールを開始します。

\$ oc patch MachineConfigPool master --type='merge' --patch \
'{ "spec": { "paused": false } }'

ワーカー設定プールを開始します。

\$ oc patch MachineConfigPool worker --type='merge' --patch \
'{ "spec": { "paused": false } }'

MCO が各設定プールのマシンを更新すると、各ノードを再起動します。

デフォルトで、MCOは一度にプールごとに単一のマシンを更新するため、移行が完了するまでに必要な時間がクラスターのサイズと共に増加します。

- 9. ホスト上の新規マシン設定のステータスを確認します。
 - a. マシン設定の状態と適用されたマシン設定の名前をリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc describe node | egrep "hostname|machineconfig"

出力例

kubernetes.io/hostname=master-0 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/reason: machineconfiguration.openshift.io/state: Done

以下のステートメントが true であることを確認します。

- machineconfiguration.openshift.io/state フィールドの値は Done です。
- machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドの値 は、machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig フィールドの値と等しくなり ます。
- b. マシン設定が正しいことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get machineconfig <config_name> -o yaml

ここで、<**config_name**> は、 **machineconfiguration.openshift.io**/**currentConfig** フィー ルドのマシン設定の名前になります。

- 10. 移行が正常に完了したことを確認します。
 - a. ネットワークプラグインが OpenShift SDN であることを確認するには、次のコマンドを入力します。status.networkType の値は OpenShiftSDN である必要があります。

\$ oc get network.config/cluster -o jsonpath='{.status.networkType}{"\n"}'

b. クラスターノードが **Ready** 状態にあることを確認するには、以下のコマンドを実行します。



c. ノードが **NotReady** 状態のままになっている場合、マシン設定デーモン Pod のログを調べ、エラーを解決します。

i. Pod をリスト表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pod -n openshift-machine-config-operator

出力例

NAME	READY ST	ATUS R	ESTA	RTS AC	GE
machine-config-controller-75f7	56f89d-sjp8b	1/1 Rui	nning	0	37m
machine-config-daemon-5cf4b	2/2	2 Runnin	g 0	43h	
machine-config-daemon-7wzcc	l 2/	2 Runni	ng 0	43	h
machine-config-daemon-fc946	2/2	2 Runnin	g 0	43h	
machine-config-daemon-g2v28	2/	2 Runnii	ng O	43	n
machine-config-daemon-gcl4f	2/2	Running	y 0	43h	
machine-config-daemon-I5tnv	2/2	Running	y 0	43h	
machine-config-operator-79d9c	:55d5-hth92	1/1 Ri	unning	0	37m
machine-config-server-bsc8h	1/1	Running	0	43h	
machine-config-server-hklrm	1/1	Running	0	43h	
machine-config-server-k9rtx	1/1	Running	0	43h	

設定デーモン Pod の名前は、**machine-config-daemon-<seq>** という形式になりま す。**<seq>** 値は、ランダムな5文字の英数字シーケンスになります。

ii. 直前の出力に表示されるそれぞれのマシン設定デーモン Pod の Pod ログを表示するに は、以下のコマンドを入力します。

\$ oc logs <pod> -n openshift-machine-config-operator

ここで、**pod** はマシン設定デーモン Pod の名前になります。

iii. 直前のコマンドの出力で示されるログ内のエラーを解決します。

d. Pod がエラー状態ではないことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pods --all-namespaces -o wide --sort-by='{.spec.nodeName}'

ノードの Pod がエラー状態にある場合は、そのノードを再起動します。

- 11. 以下の手順は、移行に成功し、クラスターの状態が正常である場合にのみ実行します。
 - a. Cluster Network Operator 設定オブジェクトから移行設定を削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": null } }'

b. OVN-Kubernetes 設定を削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "defaultNetwork": { "ovnKubernetesConfig":null } } }'

c. OVN-Kubernetes ネットワークプロバイダー namespace を削除するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc delete namespace openshift-ovn-kubernetes

25.7. IPV4/IPV6 デュアルスタックネットワークへの変換

クラスター管理者は、IPv4 および IPv6 アドレスファミリーをサポートするデュアルネットワーククラ スターネットワークに、IPv4 の単ースタッククラスターを変換できます。デュアルスタックに変換した 後、新規に作成された Pod はすべてデュアルスタック対応になります。

8

注記

デュアルスタックネットワークは、ベアメタル、IBM Power インフラストラクチャー、 および単一ノードの OpenShift クラスターでプロビジョニングされたクラスターでサ ポートされます。



注記

デュアルスタックネットワークを使用している場合、IPv6 を必要とする、IPv4 にマッピ ングされ IPv6 アドレス (例: **::FFFF:198.51.100.1**) は使用できません。

25.7.1. デュアルスタッククラスターネットワークへの変換

クラスター管理者は、単一スタッククラスターネットワークをデュアルスタッククラスターネットワークに変換できます。



注記

デュアルスタックネットワークへの変換後に、新規に作成された Pod のみに IPv6 アドレスが割り当てられます。変換前に作成された Pod は、IPv6 アドレスを受信するように再作成される必要があります。

重要

続行する前に、OpenShift クラスターがバージョン 4.12.5 以降を使用していることを確認してください。そうしないと、バグ ovnkube node pod crashed after converting to a dual-stack cluster network が原因で、変換が失敗する可能性があります。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- クラスターは OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用します。
- クラスターノードに IPv6 アドレスがある。
- インフラストラクチャーに基づいて IPv6 対応ルーターを設定している。

手順

 クラスターおよびサービスネットワークの IPv6 アドレスブロックを指定するには、以下の YAML を含むファイルを作成します。

- op: add

path: /spec/clusterNetwork/value: 1 cidr: fd01::/48 hostPrefix: 64 - op: add path: /spec/serviceNetwork/value: fd02::/112 2



cidr および hostPrefix フィールドでオブジェクトを指定します。ホストの接頭辞は 64 以 上である必要があります。IPv6 CIDR 接頭辞は、指定されたホスト接頭辞に対応する十分 な大きさである必要があります。

接頭辞が 112 である IPv6 CIDR を指定します。Kubernetes は最低レベルの 16 ビットのみ を使用します。接頭辞が 112 の場合、IP アドレスは 112 から 128 ビットに割り当てられ ます。

2. クラスターネットワーク設定にパッチを適用するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch network.config.openshift.io cluster \ --type='json' --patch-file <file>.yaml

ここでは、以下のようになります。

file

先の手順で作成したファイルの名前を指定します。

出力例



検証

以下の手順を実施して、クラスターネットワークが直前の手順で指定した IPv6 アドレスブロックを認 識していることを確認します。

1. ネットワーク設定を表示します。



出力例

```
Status:
 Cluster Network:
  Cidr:
               10.128.0.0/14
  Host Prefix:
                 23
               fd01::/48
  Cidr:
  Host Prefix:
                 64
 Cluster Network MTU: 1400
                    OVNKubernetes
 Network Type:
 Service Network:
  172.30.0.0/16
  fd02::/112
```

25.7.2. 単一スタッククラスターネットワークへの変換

クラスター管理者は、デュアルスタッククラスターネットワークを単一スタッククラスターネットワークに変換できます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- クラスターは OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用します。
- クラスターノードに IPv6 アドレスがある。
- デュアルスタックネットワークを有効にしている。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、**networks.config.openshift.io** カスタムリソース (CR) を編集しま す。

\$ oc edit networks.config.openshift.io

2. 前の手順で cidr および hostPrefix フィールドに追加した IPv6 固有の設定を削除します。

25.8. EGRESS ファイアウォールとネットワークポリシールールのロギング

クラスター管理者は、クラスターの監査ロギングを設定し、1つ以上の namespace のロギングを有効に できます。OpenShift Container Platform は、Egress ファイアウォールとネットワークポリシーの両方 の監査ログを生成します。



注記

監査ログは、OVN-Kubernetes ネットワークプラグイン でのみ使用できます。

25.8.1. 監査ロギング

OVN-Kubernetes ネットワークプラグインは、Open Virtual Network (OVN) ACL を使用して、egress ファイアウォールとネットワークポリシーを管理します。監査ロギングは ACL イベントの許可および 拒否を公開します。

syslog サーバーや UNIX ドメインソケットなど、監査ログの宛先を設定できます。追加の設定に関係な く、監査ログは常にクラスター内の各 OVN-Kubernetes Pod の /**var/log/ovn/acl-audit-log.log** に保存 されます。

以下の例のように、namespace に **k8s.ovn.org/acl-logging** キーでアノテーションを付けることにより、namespace ごとに監査ログを有効にします。

namespace アノテーションの例

kind: Namespace apiVersion: v1 metadata:

```
name: example1
annotations:
k8s.ovn.org/acl-logging: |-
{
"deny": "info",
"allow": "info"
}
```

ロギング形式は RFC5424 によって定義される syslog と互換性があります。syslog ファシリティーは設 定可能です。デフォルトは **local0** です。ログエントリーの例は、以下のようになります。

ネットワークポリシーの ACL 拒否ログエントリーの例

2021-06-13T19:33:11.590Z|00005|acl_log(ovn_pinctrl0)|INFO|name="verify-audit-logging_deny-all", verdict=drop, severity=alert: icmp,vlan_tci=0x0000,dl_src=0a:58:0a:80:02:39,dl_dst=0a:58:0a:80:02:37,nw_src=10.128.2.57,nw_dst= 10.128.2.55,nw_tos=0,nw_ecn=0,nw_ttl=64,icmp_type=8,icmp_code=0

以下の表は、namespace アノテーションの値について説明しています。

表25.9 監査ログの namespace の注釈

Annotation	
k8s.ovn.org/acl-logging	namespace の監査ログを有効にするには、 allow、deny 、また はその両方の少なくとも1つを指定する必要があります。
	deny オプション: alert、warning、notice、info、または debug を指定します。 allow
	オプション: alert、warning、notice、info、または debug を指定します。

25.8.2. 監査設定

監査ロギングの設定は、OVN-Kubernetes クラスターネットワークプロバイダー設定の一部として指定 されます。次の YAML は、監査ログのデフォルト値を示しています。

監査ロギング設定

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
defaultNetwork:
ovnKubernetesConfig:
policyAuditConfig:
destination: "null"
```

maxFileSize: 50 rateLimit: 20 syslogFacility: local0

次の表では、監査ログの設定フィールドについて説明します。

表25.10 policyAuditConfig オブジェクト

フィールド	型	説明
rateLimit	integer	ノードごとに毎秒生成されるメッセージの最大数。デフォルト 値は、1秒あたり 20 メッセージです。
maxFileSize	integer	監査ログの最大サイズ (バイト単位)。デフォルト値は 50000000 (50 MB) です。
destination	string	以下の追加の監査ログターゲットのいずれかになります。 libc ホスト上の journald プロセスの libc syslog() 関数。 udp:<host>:<port></port></host> syslog サーバー。 <host>:<port></port></host> を syslog サーバーのホス トおよびポートに置き換えます。 unix:<file></file> <file></file> で指定された Unix ドメインソケットファイル。 null 監査ログを追加のターゲットに送信しないでください。
syslogFacility	string	RFC5424 で定義される kern などの syslog ファシリティー。デ フォルト値は local0 です。

25.8.3. クラスターの Egress ファイアウォールとネットワークポリシー監査の設定 クラスター管理者は、クラスターの監査ログをカスタマイズできます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。

手順

• 監査ロギング設定をカスタマイズするには、次のコマンドを入力します。

\$ oc edit network.operator.openshift.io/cluster

ヒント

または、以下の YAML をカスタマイズして適用することで、監査ロギングを設定できます。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
defaultNetwork:
ovnKubernetesConfig:
policyAuditConfig:
destination: "null"
maxFileSize: 50
rateLimit: 20
syslogFacility: local0
```

検証

- 1. ネットワークポリシーを使用して namespace を作成するには、次の手順を実行します。
 - a. 検証用の namespace を作成します。

```
$ cat <<EOF| oc create -f -
kind: Namespace
apiVersion: v1
metadata:
    name: verify-audit-logging
    annotations:
    k8s.ovn.org/acl-logging: '{ "deny": "alert", "allow": "alert" }'
EOF</pre>
```

出力例

namespace/verify-audit-logging created

b. 監査ロギングを有効にします。

\$ oc annotate namespace verify-audit-logging k8s.ovn.org/acl-logging='{ "deny": "alert", "allow": "alert" }'

namespace/verify-audit-logging annotated

c. namespace のネットワークポリシーを作成します。

```
$ cat <<EOF| oc create -n verify-audit-logging -f -
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
    name: deny-all
spec:
    podSelector:
    matchLabels:
```

policyTypes: - Ingress - Egress
apiVersion: networking.k8s.io/v1
kind: NetworkPolicy
metadata:
name: allow-from-same-namespace
spec:
podSelector: {}
policyTypes:
- Ingress
- Egress
ingress:
- from:
<pre>- podSelector: {}</pre>
egress:
- to:
 namespaceSelector:
matchLabels:
namespace: verify-audit-logging
EOF

出力例

networkpolicy.networking.k8s.io/deny-all created networkpolicy.networking.k8s.io/allow-from-same-namespace created

2. ソーストラフィックの Pod を **default** namespace に作成します。

```
$ cat <<EOF| oc create -n default -f -
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: client
spec:
containers:
    - name: client
    image: registry.access.redhat.com/rhel7/rhel-tools
    command: ["/bin/sh", "-c"]
    args:
    ["sleep inf"]
EOF</pre>
```

3. verify-audit-logging namespace に2つの Pod を作成します。

```
$ for name in client server; do
cat <<EOF| oc create -n verify-audit-logging -f -
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
    name: ${name}
spec:
    containers:</pre>
```

```
    name: ${name}
image: registry.access.redhat.com/rhel7/rhel-tools
command: ["/bin/sh", "-c"]
args:
["sleep inf"]
    EOF
done
```

出力例

pod/client created pod/server created

- トラフィックを生成し、ネットワークポリシー監査ログエントリーを作成するには、以下の手順を実行します。
 - a. **verify-audit-logging** namespace で **server** という名前の Pod の IP アドレスを取得しま す。

\$ POD_IP=\$(oc get pods server -n verify-audit-logging -o jsonpath='{.status.podIP}')

b. **default** の namespace の **client** という名前の Pod の直前のコマンドから IP アドレスに ping し、すべてのパケットがドロップされていることを確認します。

\$ oc exec -it client -n default -- /bin/ping -c 2 \$POD_IP

出力例

PING 10.128.2.55 (10.128.2.55) 56(84) bytes of data.

--- 10.128.2.55 ping statistics ---2 packets transmitted, 0 received, 100% packet loss, time 2041ms

c. **verify-audit-logging** namespace の **client** という名前の Pod から **POD_IP** シェル環境変数 に保存されている IP アドレスに ping し、すべてのパケットが許可されていることを確認 します。

\$ oc exec -it client -n verify-audit-logging -- /bin/ping -c 2 \$POD_IP

出力例

PING 10.128.0.86 (10.128.0.86) 56(84) bytes of data. 64 bytes from 10.128.0.86: icmp_seq=1 ttl=64 time=2.21 ms 64 bytes from 10.128.0.86: icmp_seq=2 ttl=64 time=0.440 ms

--- 10.128.0.86 ping statistics ---2 packets transmitted, 2 received, 0% packet loss, time 1001ms rtt min/avg/max/mdev = 0.440/1.329/2.219/0.890 ms

5. ネットワークポリシー監査ログの最新エントリーを表示します。

\$ for pod in \$(oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-node --noheaders=true | awk '{ print \$1 }'); do

oc exec -it \$pod -n openshift-ovn-kubernetes -- tail -4 /var/log/ovn/acl-audit-log.log done

出力例

Defaulting container name to ovn-controller. Use 'oc describe pod/ovnkube-node-hdb8v -n openshift-ovn-kubernetes' to see all of the containers in this pod. 2021-06-13T19:33:11.590Z|00005|acl_log(ovn_pinctrl0)|INFO|name="verify-auditlogging deny-all", verdict=drop, severity=alert: icmp,vlan tci=0x0000,dl src=0a:58:0a:80:02:39,dl dst=0a:58:0a:80:02:37,nw src=10.128.2.57, nw dst=10.128.2.55,nw tos=0,nw ecn=0,nw ttl=64,icmp type=8,icmp code=0 2021-06-13T19:33:12.614Z|00006|acl_log(ovn_pinctrl0)|INFO|name="verify-auditlogging_deny-all", verdict=drop, severity=alert: icmp,vlan tci=0x0000,dl src=0a:58:0a:80:02:39,dl dst=0a:58:0a:80:02:37,nw src=10.128.2.57, nw dst=10.128.2.55,nw tos=0,nw ecn=0,nw ttl=64,icmp type=8,icmp code=0 2021-06-13T19:44:10.037Z|00007|acl_log(ovn_pinctrl0)|INFO|name="verify-auditlogging_allow-from-same-namespace_0", verdict=allow, severity=alert: icmp,vlan_tci=0x0000,dl_src=0a:58:0a:80:02:3b,dl_dst=0a:58:0a:80:02:3a,nw_src=10.128.2.59, nw dst=10.128.2.58,nw_tos=0,nw_ecn=0,nw_ttl=64,icmp_type=8,icmp_code=0 2021-06-13T19:44:11.037Z|00008|acl_log(ovn_pinctrl0)|INFO|name="verify-auditlogging_allow-from-same-namespace_0", verdict=allow, severity=alert: icmp,vlan_tci=0x0000,dl_src=0a:58:0a:80:02:3b,dl_dst=0a:58:0a:80:02:3a,nw_src=10.128.2.59, nw dst=10.128.2.58,nw tos=0,nw ecn=0,nw ttl=64,icmp type=8,icmp code=0

25.8.4. namespace の Egress ファイアウォールとネットワークポリシーの監査ログを 有効にする

クラスター管理者は、namespaceの監査ログを有効にすることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。

手順

• namespace の監査ログを有効にするには、次のコマンドを入力します。

\$ oc annotate namespace <namespace> \
 k8s.ovn.org/acl-logging='{ "deny": "alert", "allow": "notice" }'

ここでは、以下のようになります。

<namespace>

namespace の名前を指定します。

ヒント

または、以下の YAML を適用して監査ロギングを有効化できます。

```
kind: Namespace
apiVersion: v1
metadata:
name: <namespace>
annotations:
k8s.ovn.org/acl-logging: |-
{
"deny": "alert",
"allow": "notice"
}
```

出力例

namespace/verify-audit-logging annotated

検証

● 監査ログの最新のエントリーを表示します。

出力例

2021-06-13T19:33:11.590Z|00005|acl_log(ovn_pinctrl0)|INFO|name="verify-audit-logging_deny-all", verdict=drop, severity=alert: icmp,vlan_tci=0x0000,dl_src=0a:58:0a:80:02:39,dl_dst=0a:58:0a:80:02:37,nw_src=10.128.2.57, nw_dst=10.128.2.55,nw_tos=0,nw_ecn=0,nw_ttl=64,icmp_type=8,icmp_code=0

25.8.5. namespace の Egress ファイアウォールとネットワークポリシーの監査ログを 無効にする

クラスター管理者は、namespaceの監査ログを無効にすることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。

手順

namespaceの監査ログを無効にするには、次のコマンドを入力します。

\$ oc annotate --overwrite namespace <namespace> k8s.ovn.org/acl-logging-

ここでは、以下のようになります。

<namespace>

namespace の名前を指定します。

ヒント

または、以下の YAML を適用して監査ロギングを無効化できます。

kind: Namespace apiVersion: v1 metadata: name: <namespace> annotations: k8s.ovn.org/acl-logging: null

出力例

namespace/verify-audit-logging annotated

25.8.6. 関連情報

- ネットワークポリシーについて
- プロジェクトの egress ファイアウォールの設定

25.9. IPSEC 暗号化の設定

IPsec を有効にすると、OVN-Kubernetes クラスターネットワーク上のノード間のすべての Pod 間ネットワークトラフィックが IPsec トランスポートモード で暗号化されます。

IPsec はデフォルトで無効にされています。クラスターのインストール中またはインストール後に有効 にできます。クラスターのインストールの詳細は、OpenShift Container Platform インストールの概要 を参照してください。クラスターのインストール後に IPsec を有効にする必要がある場合は、IPsec ESP IP ヘッダーのオーバーヘッドを考慮して、まずクラスター MTU のサイズを変更する必要がありま す。

次のドキュメントでは、クラスターのインストール後に IPSec を有効または無効にする方法について説 明します。

25.9.1. 前提条件

クラスター MTU のサイズを 46 バイト減らして、IPsec ESP ヘッダーにオーバーヘッドを追加している。クラスターが使用する MTU のサイズ変更の詳細は クラスターネットワークの MTU 変更 を参照してください。

25.9.2. IPsec で暗号化したネットワークトラフィックフローのタイプ

IPsec を有効にすると、Pod 間の以下のネットワークトラフィックフローのみが暗号化されます。

• クラスターネットワーク上の複数の異なるノードの Pod 間のトラフィック

• ホストネットワークの Pod からクラスターネットワーク上の Pod へのトラフィック

以下のトラフィックフローは暗号化されません。

- クラスターネットワーク上の同じノードの Pod 間のトラフィック
- ホストネットワーク上の Pod 間のトラフィック
- クラスターネットワークの Pod からホストネットワークの Pod へのトラフィック

暗号化されていないフローと暗号化されていないフローを以下の図に示します。



→ Not encrypted ---> Encrypted

138_OpenShift_0421

25.9.2.1. IPsec が有効になっている場合のネットワーク接続要件

OpenShift Container Platform クラスターのコンポーネントが通信できるように、マシン間のネット ワーク接続を設定する必要があります。すべてのマシンではクラスターの他のすべてのマシンのホスト 名を解決できる必要があります。

表25.11 すべてのマシンからすべてのマシンへの通信に使用されるポート

プロトコル	ポート	説明
UDP	500	IPsec IKE パケット
	4500	IPsec NAT-T パケット
ESP	該当なし	IPsec Encapsulating Security Payload (ESP)

25.9.3. 暗号化プロトコルおよび IPsec モード

使用する暗号化は AES-GCM-16-256 です。整合性チェック値 (ICV) は 16 バイトです。鍵の長さは 256 ビットです。

使用される IPsec モードは **トランスポートモード** です。これは、元のパケットの IP ヘッダーに Encapsulated Security Payload (ESP) ヘッダーを追加して、パケットデータを暗号化することで、エン ドツーエンドの通信を暗号化するモードです。OpenShift Container Platform は現在、Pod 間通信に IPsec **トンネルモード** を使用およびサポートしていません。

25.9.4. セキュリティー証明書の生成およびローテーション

Cluster Network Operator (CNO) は、暗号化用に IPsec によって使用される自己署名の X.509 認証局 (CA) を生成します。各ノードの証明書署名要求 (CSR) は、CNO によって自動的に満たされます。

この CA は 10 年間有効です。個別のノード証明書は 5 年間有効で、4 年半が経過すると自動的にロー テーションされます。

25.9.5. IPsec 暗号化の有効化

クラスター管理者は、クラスターのインストール後に IPsec 暗号化を有効にできます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。
- クラスター MTU のサイズを 46 バイト減らして、IPsec ESP ヘッダーにオーバーヘッドを設けている。

手順

• IPsec 暗号化を有効にするには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch networks.operator.openshift.io cluster --type=merge \
-p '{"spec":{"defaultNetwork":{"ovnKubernetesConfig":{ }}}}'

検証

1. OVN-Kubernetes コントロールプレーン Pod の名前を見つけるには、次のコマンドを入力します。

\$ oc get pods -I app=ovnkube-master -n openshift-ovn-kubernetes

出力例

NAME	READY	′ ST/	ATUS I	RESTA	RTS AGE
ovnkube-master-f	vtnh 6/	6 R	unning	0	122m
ovnkube-master-h	isgmm	6/6	Running	g 0	122m
ovnkube-master-c	cmdc (6/6	Running	0	122m

2. 次のコマンドを実行して、クラスターで IPsec が有効になっていることを確認します。

\$ oc -n openshift-ovn-kubernetes rsh ovnkube-master-<XXXX> \
 ovn-nbctl --no-leader-only get nb_global . ipsec

ここでは、以下のようになります。

<XXXXX>

前の手順の Pod の文字のランダムなシーケンスを指定します。

出力例

true

25.9.6. IPsec 暗号化の無効化

クラスター管理者は、クラスターのインストール後に IPsec を有効にした場合にのみ、IPsec 暗号化を 無効にできます。



注記

クラスターのインストール時に IPsec を有効にした場合、この手順では IPsec を無効化 できません。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインする。

手順

1. IPsec 暗号化を無効にするには、次のコマンドを入力します。

\$ oc patch networks.operator.openshift.io/cluster --type=json \
-p='[{"op":"remove", "path":"/spec/defaultNetwork/ovnKubernetesConfig/ipsecConfig"}]'

- 2. オプション: IP パケットの IPsec ESP ヘッダーからのオーバーヘッドがなくなるため、クラス ター MTU のサイズを **46** バイト増やすことができます。
- 3. クラスターで IPsec が無効になっていることを確認します。

\$ oc -n openshift-ovn-kubernetes -c nbdb rsh ovnkube-master-<XXXX> \ ovn-nbctl --no-leader-only get nb_global . ipsec

ここでは、以下のようになります。

<XXXXX>

前の手順の Pod の文字のランダムなシーケンスを指定します。

出力例

false

25.9.7. 関連情報

- OVN-Kubernetes Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインについて
- クラスターネットワークの MTU 変更
- Network [operator.openshift.io/v1] API

25.10. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの設定

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform クラスター外に出るプロジェクトのプロジェクに ついて、egress トラフィックを制限する egress ファイアウォールを作成できます。

25.10.1. egress ファイアウォールのプロジェクトでの機能

クラスター管理者は、 egress ファイアウォール を使用して、一部またはすべての Pod がクラスター内 からアクセスできる外部ホストを制限できます。egress ファイアウォールポリシーは以下のシナリオを サポートします。

- Podの接続を内部ホストに制限し、パブリックインターネットへの接続を開始できないように する。
- Pod の接続をパブリックインターネットに制限し、OpenShift Container Platform クラスター 外にある内部ホストへの接続を開始できないようにする。
- Pod は OpenShift Container Platform クラスター外の指定された内部サブネットまたはホスト にアクセスできません。
- Pod は特定の外部ホストにのみ接続することができます。

たとえば、指定された IP 範囲へのあるプロジェクトへのアクセスを許可する一方で、別のプロジェクトへの同じアクセスを拒否することができます。または、アプリケーション開発者の (Python) pip mirror からの更新を制限したり、更新を承認されたソースからの更新のみに強制的に制限したりすることができます。



注記

Egress ファイアウォールは、ホストネットワークの namespace には適用されません。 ホストネットワークが有効になっている Pod は、Egress ファイアウォールルールの影響 を受けません。

EgressFirewall カスタムリソース (CR) オブジェクトを作成して egress ファイアウォールポリシーを設 定します。egress ファイアウォールは、以下のいずれかの基準を満たすネットワークトラフィックと一 致します。

- CIDR 形式の IP アドレス範囲。
- IP アドレスに解決する DNS 名
- ポート番号
- プロトコル。TCP、UDP、および SCTP のいずれかになります。

重要

egress ファイアウォールに **0.0.0.0/0** の拒否ルールが含まれる場合、OpenShift Container Platform API サーバーへのアクセスはブロックされます。IP アドレスごとに 許可ルールを追加する必要があります。

次の例は、API サーバーへのアクセスを確保するために必要な Egress ファイアウォール ルールの順序を示しています。

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressFirewall metadata: name: default namespace: <namespace> 1</namespace>
spec:
egress:
 to: cidrSelector: <api_server_address_range></api_server_address_range> type: Allow
#
- to: cidrSelector: 0.0.0.0/0 3 type: Deny
Egress ファイアウォールの namespace。 OpenShift Container Platform API サーバーを含む IP アドレス範囲。 グローバル拒否ルールにより、OpenShift Container Platform API サーバーへのア クセスが阻止されます。

API サーバーの IP アドレスを見つけるには、**oc get ep kubernetes -n default** を実行します。

詳細は、BZ#1988324を参照してください。

警告

egress ファイアウォールルールは、ルーターを通過するトラフィックには適用され ません。ルート CR オブジェクトを作成するパーミッションを持つユーザーは、禁 止されている宛先を参照するルートを作成することにより、egress ファイアウォー ルポリシールールをバイパスできます。

25.10.1.1. egress ファイアウォールの制限

egress ファイアウォールには以下の制限があります。

- 複数の EgressFirewall オブジェクトを持つプロジェクトはありません。
- 最大 8,000 のルールを持つ最大1つの EgressFirewall オブジェクトはプロジェクトごとに定義 できます。

 Red Hat OpenShift Networking の共有ゲートウェイモードで OVN-Kubernetes ネットワークプ ラグインを使用している場合に、リターン Ingress 応答は Egress ファイアウォールルールの影 響を受けます。送信ファイアウォールルールが受信応答宛先 IP をドロップすると、トラフィッ クはドロップされます。

これらの制限のいずれかに違反すると、プロジェクトの Egress ファイアウォールが壊れます。その結果、すべての外部ネットワークトラフィックがドロップされ、組織にセキュリティーリスクが生じる可 能性があります。

egress ファイアウォールリソースは、**kube-node-lease**、**kube-public**、**kube-system**、**openshift**、**openshift**-プロジェクトで作成できます。

25.10.1.2. egress ポリシールールのマッチング順序

egress ファイアウォールポリシールールは、最初から最後へと定義された順序で評価されます。Pod からの egress 接続に一致する最初のルールが適用されます。この接続では、後続のルールは無視されます。

25.10.1.3. DNS (Domain Name Server) 解決の仕組み

egress ファイアウォールポリシールールのいずれかで DNS 名を使用する場合、ドメイン名の適切な解決には、以下の制限が適用されます。

- ドメイン名の更新は、Time-to-Live (TTL) 期間に基づいてポーリングされます。デフォルトで、期間は 30 分です。egress ファイアウォールコントローラーがローカルネームサーバーでドメイン名をクエリーする場合に、応答に 30 分未満の TTL が含まれる場合、コントローラーは DNS 名の期間を返される値に設定します。それぞれの DNS 名は、DNS レコードの TTL の期限が切れた後にクエリーされます。
- Pod は、必要に応じて同じローカルネームサーバーからドメインを解決する必要があります。
 そうしない場合、egress ファイアウォールコントローラーと Pod によって認識されるドメインの IP アドレスが異なる可能性があります。ホスト名の IP アドレスが異なる場合、egress ファイアウォールは一貫して実行されないことがあります。
- egress ファイアウォールコントローラーおよび Pod は同じローカルネームサーバーを非同期に ポーリングするため、Pod は egress コントローラーが実行する前に更新された IP アドレスを 取得する可能性があります。これにより、競合状態が生じます。この現時点の制限により、 EgressFirewall オブジェクトのドメイン名の使用は、IP アドレスの変更が頻繁に生じないドメ インの場合にのみ推奨されます。



注記

egress ファイアウォールは、DNS 解決用に Pod が置かれるノードの外部インターフェ イスに Pod が常にアクセスできるようにします。

ドメイン名を egress ファイアウォールで使用し、DNS 解決がローカルノード上の DNS サーバーによって処理されない場合は、Pod でドメイン名を使用している場合には DNS サーバーの IP アドレスへのアクセスを許可する egress ファイアウォールを追加する必 要があります。

25.10.2. EgressFirewall カスタムリソース (CR) オブジェクト

egress ファイアウォールのルールを1つ以上定義できます。ルールは、ルールが適用されるトラフィックを指定して Allow ルールまたは Deny ルールのいずれかになります。

Ξ

以下の YAML は EgressFirewall CR オブジェクトについて説明しています。

EgressFirewall オブジェクト

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressFirewall metadata: name: <name> 1 spec: egress: 2 </name>
1 オブジェクトの名前は default である必要があります。
2 以下のセクションで説明されているように、egress ネットワークポリシールールのコレクシ ン。

25.10.2.1. EgressFirewall ルール

以下の YAML は egress ファイアウォールルールオブジェクトについて説明しています。ユーザーは、 CIDR 形式の IP アドレス範囲またはドメイン名のいずれかを選択できます。**egress** スタンザは、単一 または複数のオブジェクトの配列を予想します。

Egress ポリシールールのスタンザ



ルールのタイプ。値には Allow または Deny のいずれかを指定する必要があります。

2 cidrSelector フィールドまたは dnsName フィールドを指定する egress トラフィックのマッチン グルールを記述するスタンザ。同じルールで両方のフィールドを使用することはできません。

CIDR 形式の IP アドレス範囲。

🗛 DNS ドメイン名。

👩 オプション: ルールのネットワークポートおよびプロトコルのコレクションを記述するスタンザ。

ポートスタンザ

ports:
- port: <port> 1</port>
protocol: <protocol> 2</protocol>



80 や 443 などのネットワークポート。このフィールドの値を指定する場合は、protocol の値も指 定する必要があります。

2 ネットワークプロトコル。値は TCP、UDP、または SCTP のいずれかである必要があります。

25.10.2.2. EgressFirewall CR オブジェクトの例

以下の例では、複数の egress ファイアウォールポリシールールを定義します。

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressFirewall metadata: name: default
spec:
egress: 1
- type: Allow
to:
cidrSelector: 1.2.3.0/24
- type: Deny
to:
cidrSelector: 0.0.0.0/0

A

egress ファイアウォールポリシールールオブジェクトのコレクション。

以下の例では、トラフィックが TCP プロトコルおよび宛先ポート 80 または任意のプロトコルと宛先 ポート 443 のいずれかを使用している場合に、IP アドレス 172.16.1.1 でホストへのトラフィックを拒 否するポリシールールを定義します。

```
apiVersion: k8s.ovn.org/v1
kind: EgressFirewall
metadata:
name: default
spec:
egress:
- type: Deny
to:
cidrSelector: 172.16.1.1
ports:
- port: 80
protocol: TCP
- port: 443
```

25.10.3. egress ファイアウォールポリシーオブジェクトの作成

クラスター管理者は、プロジェクトの egress ファイアウォールポリシーオブジェクトを作成できます。



重要

プロジェクトに EgressFirewall オブジェクトがすでに定義されている場合、既存のポリ シーを編集して egress ファイアウォールルールを変更する必要があります。 前提条件

- OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインする必要があります。

手順

- 1. ポリシールールを作成します。
 - a. **<policy_name>.yaml** ファイルを作成します。この場合、**<policy_name>**は egress ポリ シールールを記述します。
 - b. 作成したファイルで、egress ポリシーオブジェクトを定義します。
- 以下のコマンドを入力してポリシーオブジェクトを作成します。<policy_name> をポリシーの 名前に、<project> をルールが適用されるプロジェクトに置き換えます。

\$ oc create -f <policy_name>.yaml -n <project>

以下の例では、新規の EgressFirewall オブジェクトが **project1** という名前のプロジェクトに作 成されます。

\$ oc create -f default.yaml -n project1

出力例

egressfirewall.k8s.ovn.org/v1 created

3. オプション:後に変更できるように <policy_name>.yaml ファイルを保存します。

25.11. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの表示

クラスター管理者は、既存の egress ファイアウォールの名前をリスト表示し、特定の egress ファイア ウォールのトラフィックルールを表示できます。

25.11.1. EgressFirewall オブジェクトの表示

クラスターで EgressFirewall オブジェクトを表示できます。

前提条件

- OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- oc として知られる OpenShift コマンドラインインターフェイス (CLI) のインストール。
- クラスターにログインすること。

手順

1. オプション: クラスターで定義された EgressFirewall オブジェクトの名前を表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get egressfirewall --all-namespaces

2. ポリシーを検査するには、以下のコマンドを入力します。**<policy_name>**を検査するポリシーの名前に置き換えます。

\$ oc describe egressfirewall <policy_name>

出力例

Name: default Namespace: project1 Created: 20 minutes ago Labels: <none> Annotations: <none> Rule: Allow to 1.2.3.0/24 Rule: Allow to www.example.com Rule: Deny to 0.0.0.0/0

25.12. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの編集

クラスター管理者は、既存の egress ファイアウォールのネットワークトラフィックルールを変更できます。

25.12.1. EgressFirewall オブジェクトの編集

クラスター管理者は、プロジェクトの egress ファイアウォールを更新できます。

前提条件

- OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインする必要があります。

手順

1. プロジェクトの EgressFirewall オブジェクトの名前を検索します。**<project>**をプロジェクトの 名前に置き換えます。

\$ oc get -n <project> egressfirewall

2. オプション: egress ネットワークファイアウォールの作成時に EgressFirewall オブジェクトのコ ピーを保存しなかった場合には、以下のコマンドを入力してコピーを作成します。

\$ oc get -n <project> egressfirewall <name> -o yaml > <filename>.yaml

<project> をプロジェクトの名前に置き換えます。<name> をオブジェクトの名前に置き換え ます。<filename> をファイルの名前に置き換え、YAML を保存します。 ポリシールールに変更を加えたら、以下のコマンドを実行して EgressFirewall オブジェクトを 置き換えます。
 filename> を、更新された EgressFirewall オブジェクトを含むファイルの名前 に置き換えます。

\$ oc replace -f <filename>.yaml

25.13. プロジェクトからの EGRESS ファイアウォールの削除

クラスター管理者は、プロジェクトから egress ファイアウォールを削除して、OpenShift Container Platform クラスター外に出るプロジェクトからネットワークトラフィックについてのすべての制限を削 除できます。

25.13.1. EgressFirewall オブジェクトの削除

クラスター管理者は、プロジェクトから Egress ファイアウォールを削除できます。

前提条件

- OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインする必要があります。

手順

1. プロジェクトの EgressFirewall オブジェクトの名前を検索します。**<project>**をプロジェクトの 名前に置き換えます。

\$ oc get -n <project> egressfirewall

2. 以下のコマンドを入力し、EgressFirewall オブジェクトを削除します。**<project>**をプロジェクトの名前に、**<name>**をオブジェクトの名前に置き換えます。

\$ oc delete -n <project> egressfirewall <name>

25.14. EGRESS IP アドレスの設定

クラスター管理者は、1つ以上の egress IP アドレスを namespace に、または namespace 内の特定の pod に割り当てるように、OVN-Kubernetes の Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグ インを設定することができます。

25.14.1. Egress IP アドレスアーキテクチャーの設計および実装

OpenShift Container Platform の egress IP アドレス機能を使用すると、1つ以上の namespace の1つ 以上の Pod からのトラフィックに、クラスターネットワーク外のサービスに対する一貫したソース IP アドレスを持たせることができます。

たとえば、クラスター外のサーバーでホストされるデータベースを定期的にクエリーする Pod がある 場合があります。サーバーにアクセス要件を適用するために、パケットフィルタリングデバイスは、特 定の IP アドレスからのトラフィックのみを許可するよう設定されます。この特定の Pod のみからサー バーに確実にアクセスできるようにするには、サーバーに要求を行う Pod に特定の egress IP アドレス を設定できます。 namespace に割り当てられた egress IP アドレスは、特定の宛先にトラフィックを送信するために使用 されるスロールーターとは異なります。

一部のクラスター設定では、アプリケーション Pod と Ingress ルーター Pod が同じノードで実行され ます。このシナリオでアプリケーションプロジェクトの Egress IP アドレスを設定する場合、アプリ ケーションプロジェクトからルートに要求を送信するときに IP アドレスは使用されません。



重要

egress IP アドレスは、**ifcfg-eth0** などのように Linux ネットワーク設定ファイルで設定 することはできません。

25.14.1.1. プラットフォームサポート

各種のプラットフォームでの egress IP アドレス機能のサポートについては、以下の表で説明されてい ます。

プラットフォーム	サポート対象
ベアメタル	はい
VMware vSphere	はい
Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)	はい
Amazon Web Services (AWS)	はい
Google Cloud Platform (GCP)	はい
Microsoft Azure	はい



重要

EgressIP 機能を持つコントロールプレーンノードへの egress IP アドレスの割り当て は、Amazon Web Services (AWS) でプロビジョニングされるクラスターではサポートさ れません。(BZ#2039656)

25.14.1.2. パブリッククラウドプラットフォームに関する考慮事項

パブリッククラウドインフラストラクチャーでプロビジョニングされたクラスターの場合は、ノードごとに割り当て可能な IP アドレスの絶対数に制約があります。ノードごとに割り当て可能な IP アドレスの最大数、つまり IP 容量 は、次の式で表すことができます。

IP capacity = public cloud default capacity - sum(current IP assignments)

出力 IP 機能はノードごとの IP アドレス容量を管理しますが、デプロイメントでこの制約を計画することが重要です。たとえば、8 ノードのベアメタルインフラストラクチャーにインストールされたクラスターの場合は、150 の egress IP アドレスを設定できます。ただし、パブリッククラウドプロバイダーが IP アドレスの容量をノードあたり 10 IP アドレスに制限している場合、割り当て可能な IP アドレスの総数はわずか 80 です。この例のクラウドプロバイダーで同じ IP アドレス容量を実現するには、7 つの追加ノードを割り当てる必要があります。
パブリッククラウド環境内の任意のノードの IP 容量とサブネットを確認するには、oc get node <node_name> -o yaml コマンドを入力します。cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig アノ テーションには、ノードの容量とサブネット情報が含まれています。

アノテーション値は、プライマリーネットワークインターフェイスに次の情報を提供するフィールドを 持つ単一のオブジェクトを持つ配列です。

- interface: AWS と Azure のインターフェイス ID と GCP のインターフェイス名を指定します。
- ifaddr: 一方または両方の IP アドレスファミリーのサブネットマスクを指定します。
- capacity: ノードの IP アドレス容量を指定します。AWS では、IP アドレス容量は IP アドレス ファミリーごとに提供されます。Azure と GCP では、IP アドレスの容量には IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方が含まれます。

ノード間のトラフィックの送信 IP アドレスの自動アタッチおよびデタッチが可能です。これにより、 namespace 内の多くの Pod からのトラフィックが、クラスター外の場所への一貫した送信元 IP アドレ スを持つことができます。これは、OpenShift Container Platform 4.12 の Red Hat OpenShift Networking のデフォルトのネットワーキングプラグインである OpenShift SDN および OVN-Kubernetes もサポートします。



注記

RHOSP egress IP アドレス機能は、**egressip-<IP address**> と呼ばれる Neutron 予約 ポートを作成します。OpenShift Container Platform クラスターのインストールに使用し たものと同じ RHOSP ユーザーを使用して、Floating IP アドレスをこの予約ポートに割 り当て、egress トラフィック用の予測可能な SNAT アドレスを指定できます。RHOSP ネットワーク上の egress IP アドレスが、ノードのフェイルオーバーなどのためにある ノードから別のノードに移動されると、Neutron 予約ポートが削除され、再作成されま す。これは、フローティング IP の関連付けが失われ、フローティング IP アドレスを新 しい予約ポートに手動で再割り当てする必要があることを意味します。

注記

RHOSP クラスター管理者が Floating IP を予約ポートに割り当てると、OpenShift Container Platform は予約ポートを削除できません。RHOSP クラスター管理者が予約 ポートから Floating IP の割り当てを解除するまで、**CloudPrivatelPConfig** オブジェク トは削除および移動操作を実行できません。

次の例は、いくつかのパブリッククラウドプロバイダーのノードからのアノテーションを示していま す。アノテーションは、読みやすくするためにインデントされています。

AWS での cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig アノテーションの例

```
cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig: [
    {
        "interface":"eni-078d267045138e436",
        "ifaddr":{"ipv4":"10.0.128.0/18"},
        "capacity":{"ipv4":14,"ipv6":15}
    }
]
```

GCP での cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig アノテーションの例

```
cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig: [
    {
        "interface":"nic0",
        "ifaddr":{"ipv4":"10.0.128.0/18"},
        "capacity":{"ip":14}
    }
]
```

次のセクションでは、容量計算で使用するためにサポートされているパブリッククラウド環境の IP ア ドレス容量を説明します。

25.14.1.2.1. Amazon Web Services (AWS)の IP アドレス容量の制限

AWS では、IP アドレスの割り当てに関する制約は、設定されているインスタンスタイプによって異なります。詳細は、IP addresses per network interface per instance type を参照してください。

25.14.1.2.2. Google Cloud Platform (GCP)のIPアドレス容量の制限

GCP では、ネットワークモデルは、IP アドレスの割り当てではなく、IP アドレスのエイリアス作成を 介して追加のノード IP アドレスを実装します。ただし、IP アドレス容量は IP エイリアス容量に直接 マッピングされます。

IP エイリアスの割り当てには、次の容量制限があります。

- ノードごとに、IPv4 と IPv6 の両方の IP エイリアスの最大数は 100 です。
- VPC ごとに、IP エイリアスの最大数は指定されていませんが、OpenShift Container Platform のスケーラビリティーテストでは、最大数が約 15,000 であることが明らかになっています。

詳細は、インスタンスごとのクォータとエイリアス IP 範囲の概要を参照してください。

25.14.1.2.3. Microsoft Azure IP アドレスの容量制限

Azure では、IP アドレスの割り当てに次の容量制限があります。

- NIC ごとに、IPv4 と IPv6 の両方で割り当て可能な IP アドレスの最大数は 256 です。
- 仮想ネットワークごとに、割り当てられる IP アドレスの最大数は 65,536 を超えることはできません。

詳細は、ネットワークの制限を参照してください。

25.14.1.3. egress IP の Pod への割り当て

1つ以上の egress IP を namespace に、または namespace の特定の Pod に割り当てるには、以下の条件を満たす必要があります。

- クラスター内の1つ以上のノードに k8s.ovn.org/egress-assignable: "" ラベルがなければなり ません。
- **EgressIP** オブジェクトが存在し、これは namespace の Pod からクラスターを離脱するトラフィックのソース IP アドレスとして使用する1つ以上の egress IP アドレスを定義します。

重要

egress IP の割り当て用にクラスター内のノードにラベルを付ける前に **EgressIP** オブ ジェクトを作成する場合、OpenShift Container Platform は **k8s.ovn.org/egressassignable: ""** ラベルですべての egress IP アドレスを最初のノードに割り当てる可能性 があります。

egress IP アドレスがクラスター内のノード全体に広く分散されるようにするに は、**EgressIP** オブジェクトを作成する前に、egress IP アドレスをホストする予定の ノードにラベルを常に適用します。

25.14.1.4. egress IP のノードへの割り当て

EgressIP オブジェクトを作成する場合、**k8s.ovn.org/egress-assignable:** "" ラベルのラベルが付いた ノードに以下の条件が適用されます。

- egress IP アドレスは一度に複数のノードに割り当てられることはありません。
- egress IP アドレスは、egress IP アドレスをホストできる利用可能なノード間で均等に分散されます。
- EgressIP オブジェクトの spec.EgressIPs 配列が複数の IP アドレスを指定する場合は、以下の条件が適用されます。
 - 指定された IP アドレスを複数ホストするノードはありません。
 - トラフィックは、指定された namespace の指定された IP アドレス間でほぼ均等に分散されます。
- ノードが利用不可の場合、そのノードに割り当てられる egress IP アドレスは自動的に再割り当 てされます (前述の条件が適用されます)。

Pod が複数の **EgressIP** オブジェクトのセレクターに一致する場合、**EgressIP** オブジェクトに指定さ れる egress IP アドレスのどれが Pod の egress IP アドレスとして割り当てられるのかという保証はあ りません。

さらに、**EgressIP** オブジェクトが複数の送信 IP アドレスを指定する場合、どの送信 IP アドレスが使用されるかは保証されません。たとえば、Pod が **10.10.20.1** と **10.10.20.2** の 2 つの egress IP アドレスを持つ **EgressIP** オブジェクトのセレクターと一致する場合、各 TCP 接続または UDP 会話にいずれかが使用される可能性があります。

25.14.1.5. egress IP アドレス設定のアーキテクチャー図

以下の図は、egress IP アドレス設定を示しています。この図では、クラスターの3つのノードで実行 される2つの異なる namespace の4つの Pod について説明します。ノードには、ホストネットワーク の **192.168.126.0**/**18** CIDR ブロックから IP アドレスが割り当てられます。



ノード1とノード3の両方に **k8s.ovn.org/egress-assignable: ""** というラベルが付けられるため、 egress IP アドレスの割り当てに利用できます。

図の破線は、pod1、pod2、および pod3 からのトラフィックフローが Pod ネットワークを通過し、ク ラスターがノード1およびノード3 から出る様子を示しています。外部サービスが、**EgressIP** オブ ジェクトの例で選択した Pod からトラフィックを受信する場合、ソース IP アドレスは **192.168.126.10** または **192.168.126.102** のいずれかになります。トラフィックはこれらの2つのノード間でほぼ均等に 分散されます。

図にある次のリソースの詳細を以下に示します。

namespace オブジェクト

namespace は以下のマニフェストで定義されます。

namespace オブジェクト

apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: namespace1 labels: env: prod --apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: namespace2 labels: env: prod

EgressIP オブジェクト

以下の **EgressIP** オブジェクトは、**env** ラベルが **prod** に設定される namespace のすべての Pod を 選択する設定を説明しています。選択された Pod の egress IP アドレスは **192.168.126.10** および **192.168.126.102** です。

EgressIP オブジェクト

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressIP metadata: name: egressips-prod spec: egressIPs: - 192.168.126.10 - 192.168.126.102 namespaceSelector: matchLabels: env: prod status: items: - node: node1 egressIP: 192.168.126.10 - node: node3 egressIP: 192.168.126.102

直前の例の設定の場合、OpenShift Container Platform は両方の egress IP アドレスを利用可能な ノードに割り当てます。**status** フィールドは、egress IP アドレスの割り当ての有無および割り当て られる場所を反映します。

25.14.2. EgressIP オブジェクト

以下の YAML は、**EgressIP** オブジェクトの API について説明しています。オブジェクトの範囲はクラ スター全体です。これは namespace では作成されません。

	apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressIP metadata: name: <name> 1 spec: egressIPs: 2 - <ip_address> namespaceSelector: 3 podSelector: 4 </ip_address></name>
	EgressIPs オブジェクトの名前。
	2 1つ以上の IP アドレスの配列。
	egress IP アドレスを関連付ける namespace の1つ以上のセレクター。
2	▲ オプション: egress IP アドレスを関連付けるための指定された names

4 オプション: egress IP アドレスを関連付けるための指定された namespace の Pod の1つ以上のセレクター。これらのセレクターを適用すると、namespace 内の Pod のサブセットを選択できます。

以下の YAML は namespace セレクターのスタンザについて説明しています。

namespace セレクタースタンザ

namespaceSelector: 1 matchLabels: <label_name>: <label_value>



namespace の1つ以上のマッチングルール。複数のマッチングルールを指定すると、一致するす べての namespace が選択されます。

以下の YAML は Pod セレクターのオプションのスタンザについて説明しています。

Pod セレクタースタンザ

podSelector: 1 matchLabels: <label_name>: <label_value>

 オプション: 指定された namespaceSelector ルールに一致する、namespace の Pod の1つ以上の マッチングルール。これが指定されている場合、一致する Pod のみが選択されます。namespace の他の Pod は選択されていません。

以下の例では、**EgressIP** オブジェクトは **192.168.126.11** および **192.168.126.102** egress IP アドレス を、**app** ラベルが **web** に設定されており、**env** ラベルが **prod** に設定されている namespace にある Pod に関連付けます。

EgressIP オブジェクトの例

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressIP metadata: name: egress-group1 spec: egressIPs: - 192.168.126.11 - 192.168.126.102 podSelector: matchLabels: app: web namespaceSelector: matchLabels: env: prod

以下の例では、**EgressIP** オブジェクトは、**192.168.127.30** および **192.168.127.40** egress IP アドレス を、**environment** ラベルが **development** に設定されていない Pod に関連付けます。

EgressIP オブジェクトの例

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressIP metadata: name: egress-group2 spec: egressIPs: - 192.168.127.30 - 192.168.127.40 namespaceSelector: matchExpressions: - key: environment operator: NotIn values: - development

25.14.3. EgressIPconfig オブジェクト

egress IP の機能として、**reachabilityTotalTimeoutSeconds** パラメーターは、プローブによって egress IP ノードに送信されるチェックの合計タイムアウトを設定します。**egressIPConfig** オブジェク トを使用すると、ユーザーは **reachabilityTotalTimeoutSeconds spec** を設定できます。このタイムア ウト内に EgressIP ノードに到達できない場合、ノードはダウンしていると宣言されます。

ネットワークが現在のデフォルト値である1秒を処理できるほど安定していない場合は、この値を増や すことができます。

次の YAML は、**reachabilityTotalTimeoutSeconds** をデフォルトの1秒プローブから5秒プローブに 変更する方法を記述しています。



 egressIPConfig は、EgressIP オブジェクトのオプション設定を保持します。これらの設定を変 更すると、EgressIP オブジェクトを拡張できます。

 2 reachabilityTotalTimeoutSeconds の値としては、0 から 60 までの整数値が許可されます。値が 0 の場合、egressIP ノードの到達性チェックは無効になります。値が1 から 60 の場合、ノードの 到達性チェックを送信するプローブ間の時間 (秒単位)を表します。

25.14.4. egress IP アドレスをホストするノードのラベル付け

OpenShift Container Platform が1つ以上の egress IP アドレスをノードに割り当てることができるよう に、**k8s.ovn.org/egress-assignable='''** ラベルをクラスター内のノードに適用することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインします。

1つ以上の egress IP アドレスをホストできるようにノードにラベルを付けるには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc label nodes <node_name> k8s.ovn.org/egress-assignable=""



ラベルを付けるノードの名前。

ヒント

または、以下の YAML を適用してラベルをノードに追加できます。

```
apiVersion: v1
kind: Node
metadata:
labels:
k8s.ovn.org/egress-assignable: ""
name: <node_name>
```

25.14.5. 次のステップ

• egress IP の割り当て

25.14.6. 関連情報

- LabelSelector meta/v1
- LabelSelectorRequirement meta/v1

25.15. EGRESS IP アドレスの割り当て

クラスター管理者は、namespace または namespace の特定の Pod からクラスターを出るトラフィックに egress IP アドレスを割り当てることができます。

25.15.1. egress IP アドレスの namespace への割り当て

1つ以上の egress IP アドレスを namespace または namespace の特定の Pod に割り当てることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインします。
- egress IP アドレスをホストするように1つ以上のノードを設定します。

手順

- 1. EgressIP オブジェクトを作成します。
 - a. <egressips_name>.yaml ファイルを作成します。<egressips_name> はオブジェクトの 名前になります。

b. 作成したファイルで、以下の例のように EgressIPs オブジェクトを定義します。

apiVersion: k8s.ovn.org/v1 kind: EgressIP metadata: name: egress-project1 spec: egressIPs: - 192.168.127.10 - 192.168.127.11 namespaceSelector: matchLabels: env: qa

2. オブジェクトを作成するには、以下のコマンドを入力します。



<egressips_name> をオブジェクトの名前に置き換えます。

出力例

egressips.k8s.ovn.org/<egressips_name> created

- 3. オプション:後に変更できるように <egressips_name>.yaml ファイルを保存します。
- 4. egress IP アドレスを必要とする namespace にラベルを追加します。手順1で定義した **Egress** IP オブジェクトの namespace にラベルを追加するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc label ns <namespace> env=qa

<namespace>は、egress IP アドレスを必要とする namespace に置き換えてください。

25.15.2. 関連情報

● egress IP アドレスの設定

25.16. EGRESS ルーター POD の使用についての考慮事項

25.16.1. egress ルーター Pod について

OpenShift Container Platform egress ルーター Pod は、他の用途で使用されていないプライベートソー ス IP アドレスから指定されたリモートサーバーにトラフィックをリダイレクトします。Egress ルー ター Pod により、特定の IP アドレスからのアクセスのみを許可するように設定されたサーバーにネッ トワークトラフィックを送信できます。



注記

egress ルーター Pod はすべての発信接続のために使用されることが意図されていません。多数の egress ルーター Pod を作成することで、ネットワークハードウェアの制限 を引き上げられる可能性があります。たとえば、すべてのプロジェクトまたはアプリ ケーションに egress ルーター Pod を作成すると、ソフトウェアの MAC アドレスのフィ ルターに戻る前にネットワークインターフェイスが処理できるローカル MAC アドレス数 の上限を超えてしまう可能性があります。



重要

egress ルーターイメージには Amazon AWS, Azure Cloud またはレイヤー 2 操作をサポー トしないその他のクラウドプラットフォームとの互換性がありません。 それらに macvlan トラフィックとの互換性がないためです。

25.16.1.1. Egress ルーターモード

リダイレクトモードでは、egress ルーター Pod は、トラフィックを独自の IP アドレスから1つ以上の 宛先 IP アドレスにリダイレクトするために **iptables** ルールをセットアップします。予約された送信元 IP アドレスを使用する必要があるクライアント Pod は、宛先 IP に直接接続するのではなく、スロー ルーターのサービスにアクセスするように設定する必要があります。**curl** コマンドを使用して、アプリ ケーション Pod から宛先サービスとポートにアクセスできます。以下に例を示します。

\$ curl <router_service_IP> <port>



注記

egress ルーター CNI プラグインはリダイレクトモードのみをサポートします。これは、 OpenShift SDN でデプロイできる egress ルーター実装の相違点です。OpenShift SDN の Egress ルーターとは異なり、Egress ルーター CNI プラグインは HTTP プロキシー モードまたは DNS プロキシーモードをサポートしません。

25.16.1.2. egress ルーター Pod の実装

egress ルーターの実装では、egress ルーターの Container Network Interface (CNI) プラグインを使用し ます。プラグインはセカンダリーネットワークインターフェイスを Pod に追加します。

egress ルーターは、2 つのネットワークインターフェイスを持つ Pod です。たとえば、Pod に は、eth0 および net1 ネットワークインターフェイスを使用できます。eth0 インターフェイスはクラ スターネットワークにあり、Pod は通常のクラスター関連のネットワークトラフィックにこのインター フェイスを引き続き使用します。net1 インターフェイスはセカンダリーネットワークにあり、その ネットワークの IP アドレスとゲートウェイを持ちます。OpenShift Container Platform クラスターの他 の Pod は egress ルーターサービスにアクセスでき、サービスにより Pod が外部サービスにアクセスで きるようになります。egress ルーターは、Pod と外部システム間のブリッジとして機能します。

egress ルーターから出るトラフィックはノードで終了しますが、パケットには egress ルーター Pod からの **net1** インターフェイスの MAC アドレスがあります。

Egress ルーターのカスタムリソースを追加すると、Cluster Network Operator は以下のオブジェクトを 作成します。

- Pod の net1 セカンダリーネットワークインターフェイス用のネットワーク接続定義。
- Egress ルーターのデプロイメント。

Egress ルーターカスタムリソースを削除する場合、Operator は Egress ルーターに関連付けられた直前のリストの2つのオブジェクトを削除します。

25.16.1.3. デプロイメントに関する考慮事項

egress ルーター Pod は追加の IP アドレスおよび MAC アドレスをノードのプライマリーネットワーク インターフェイスに追加します。その結果、ハイパーバイザーまたはクラウドプロバイダーを、追加の アドレスを許可するように設定する必要がある場合があります。

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)

OpenShift Container Platform を RHOSP にデプロイする場合、OpenStack 環境の egress ルーター Pod の IP および MAC アドレスからのトラフィックを許可する必要があります。トラフィックを許 可しないと、通信は失敗 します。

\$ openstack port set --allowed-address \
 ip_address=<ip_address>,mac_address=<mac_address> <neutron_port_uuid>

Red Hat Virtualization (RHV)

RHV を使用している場合は、仮想インターフェイスカード (vNIC) に No Network Filter を選択する 必要があります。

VMware vSphere

VMware vSphere を使用している場合は、vSphere 標準スイッチのセキュリティー保護についての VMware ドキュメント を参照してください。vSphere Web クライアントからホストの仮想スイッチ を選択して、VMware vSphere デフォルト設定を表示し、変更します。

とくに、以下が有効にされていることを確認します。

- MAC アドレスの変更
- 偽装転送 (Forged Transit)
- 無作為別モード (Promiscuous Mode) 操作

25.16.1.4. フェイルオーバー設定

ダウンタイムを回避するにために、Cluster Network Operator は Egress ルーター Pod をデプロイメン トリソースとしてデプロイします。デプロイメント名は egress-router-cni-deployment です。デプロ イメントに対応する Pod には app=egress-router-cni のラベルがあります。

デプロイメントの新規サービスを作成するには、oc expose deployment/egress-router-cnideployment --port <port_number> コマンドを使用するか、以下のようにファイルを作成します。

apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: app-egress spec: ports: - name: tcp-8080 protocol: TCP port: 8080 - name: tcp-8443 protocol: TCP port: 8443 name: udp-80 protocol: UDP port: 80 type: ClusterIP selector: app: egress-router-cni

25.16.2. 関連情報

• リダイレクトモードでの egress ルーターのデプロイ

25.17. リダイレクトモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ

クラスター管理者は、トラフィックを予約されたソース IP アドレスから指定された宛先 IP アドレスに リダイレクトするように egress ルーター Pod をデプロイできます。

egress ルーターの実装では、egress ルーターの Container Network Interface (CNI) プラグインを使用します。

25.17.1. Egress ルーターのカスタムリソース

Egress ルーターのカスタムリソースで Egress ルーター Pod の設定を定義します。以下の YAML は、 リダイレクトモードでの Egress ルーターの設定のフィールドについて説明しています。

```
apiVersion: network.operator.openshift.io/v1
kind: EgressRouter
metadata:
 name: <egress router name>
 namespace: <namespace> <.>
spec:
 addresses: [ <.>
  {
   ip: "<egress router>", <.>
   gateway: "<egress_gateway>" <.>
  }
 1
 mode: Redirect
 redirect: {
  redirectRules: [ <.>
    destinationIP: "<egress destination>",
     port: <egress_router_port>,
    targetPort: <target_port>, <.>
    protocol: <network_protocol> <.>
   },
   ....
  ],
  fallbackIP: "<egress_destination>" <.>
```

<.> オプション: **namespace** フィールドは、Egress ルーターを作成するための namespace を指定しま す。ファイルまたはコマンドラインで値を指定しない場合には、**default** namespace が使用されます。 <.> addresses フィールドは、セカンダリーネットワークインターフェイスに設定する IP アドレスを指定します。

<.> ip フィールドは、ノードが Egress ルーター Pod と使用する物理ネットワークからの予約済みソー ス IP アドレスとネットマスクを指定します。CIDR 表記を使用して IP アドレスとネットマスクを指定 します。

<.> gateway フィールドは、ネットワークゲートウェイの IP アドレスを指定します。

<.> オプション: **redirectRules** フィールドは、Egress 宛先 IP アドレス、Egress ルーターポート、およ びプロトコルの組み合わせを指定します。指定されたポートとプロトコルでの Egress ルーターへの着 信接続は、宛先 IP アドレスにルーティングされます。

<.>オプション: targetPort フィールドは、宛先 IP アドレスのネットワークポートを指定します。この フィールドが指定されていない場合、トラフィックは到達したネットワークポートと同じネットワーク ポートにルーティングされます。

<.> protocol フィールドは TCP、UDP、または SCTP をサポートします。

<.>オプション: fallbackIP フィールドは、宛先 IP アドレスを指定します。リダイレクトルールを指定し ない場合、Egress ルーターはすべてのトラフィックをこのフォールバック IP アドレスに送信します。 リダイレクトルールを指定する場合、ルールに定義されていないネットワークポートへの接続は、 Egress ルーターによってこのフォールバック IP アドレスに送信されます。このフィールドを指定しな い場合、Egress ルーターはルールで定義されていないネットワークポートへの接続を拒否します。

egress ルーター仕様の例

```
apiVersion: network.operator.openshift.io/v1
kind: EgressRouter
metadata:
 name: egress-router-redirect
spec:
 networkInterface: {
  macvlan: {
   mode: "Bridge"
  }
 }
 addresses: [
  {
   ip: "192.168.12.99/24",
   gateway: "192.168.12.1"
  }
 1
 mode: Redirect
 redirect: {
  redirectRules: [
   ł
     destinationIP: "10.0.0.99",
     port: 80,
     protocol: UDP
   },
   {
     destinationIP: "203.0.113.26",
     port: 8080,
     targetPort: 80,
     protocol: TCP
```

```
},
{
    destinationIP: "203.0.113.27",
    port: 8443,
    targetPort: 443,
    protocol: TCP
    }
]
```

25.17.2. リダイレクトモードでの Egress ルーターのデプロイ

egress ルーターをデプロイして、独自の予約済みソース IP アドレスから1つ以上の宛先 IP アドレスに トラフィックをリダイレクトできます。

egress ルーターを追加した後に、予約済みソース IP アドレスを使用する必要のあるクライアント Pod は、宛先 IP に直接接続するのでなく、egress ルーターに接続するように変更される必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. egress ルーター定義の作成
- 2. 他の Pod が egress ルーター Pod の IP アドレスを見つられるようにするには、以下の例のよう に、egress ルーターを使用するサービスを作成します。

apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: egress-1 spec: ports: - name: web-app protocol: TCP port: 8080 type: ClusterIP selector: app: egress-router-cni <.>

<.> egress ルーターのラベルを指定します。表示されている値は Cluster Network Operator に よって追加され、設定不可能です。

サービスの作成後に、Pod はサービスに接続できます。egress ルーター Pod は、トラフィック を宛先 IP アドレスの対応するポートにリダイレクトします。接続は、予約されたソース IP ア ドレスを起点とします。

検証

Cluster Network Operator が egress ルーターを起動したことを確認するには、以下の手順を実行します。

1. Operator が egress ルーター用に作成したネットワーク接続定義を表示します。

\$ oc get network-attachment-definition egress-router-cni-nad

ネットワーク接続定義の名前は設定できません。

出力例

NAME AGE egress-router-cni-nad 18m

2. egress ルーター Pod のデプロイメントを表示します。

\$ oc get deployment egress-router-cni-deployment

デプロイメントの名前は設定できません。

出力例

NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE egress-router-cni-deployment 1/1 1 1 18m

3. egress ルーター Pod のステータスを表示します。

\$ oc get pods -l app=egress-router-cni

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE egress-router-cni-deployment-575465c75c-qkq6m 1/1 Running 0 18m

- 4. egress ルーター Pod のログとルーティングテーブルを表示します。
- a. egress ルーター Pod のノード名を取得します。

\$ POD_NODENAME=\$(oc get pod -l app=egress-router-cni -o jsonpath="
{.items[0].spec.nodeName}")

b. ターゲットノードのデバッグセッションに入ります。この手順は、<node_name>-debug というデバッグ Pod をインスタンス化します。

\$ oc debug node/\$POD_NODENAME

c. /host をデバッグシェル内のルートディレクトリーとして設定します。デバッグ Pod は、Pod 内の /host にホストのルートファイルシステムをマウントします。ルートディレクトリーを /host に変更すると、ホストの実行可能パスに含まれるバイナリーを実行できます。

chroot /host

d. chroot 環境コンソール内から、egress ルーターログを表示します。

cat /tmp/egress-router-log

出力例

2021-04-26T12:27:20Z [debug] Called CNI ADD 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Gateway: 192.168.12.1 2021-04-26T12:27:20Z [debug] IP Source Addresses: [192.168.12.99/24] 2021-04-26T12:27:20Z [debug] IP Destinations: [80 UDP 10.0.0.99/30 8080 TCP 203.0.113.26/30 80 8443 TCP 203.0.113.27/30 443] 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Created macvlan interface 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Renamed macvlan to "net1" 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Adding route to gateway 192.168.12.1 on macvlan interface 2021-04-26T12:27:20Z [debug] deleted default route {Ifindex: 3 Dst: <nil> Src: <nil> Gw: 10.128.10.1 Flags: [] Table: 254} 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Added new default route with gateway 192.168.12.1 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Added iptables rule: iptables -t nat PREROUTING -i eth0 -p UDP --dport 80 -j DNAT --to-destination 10.0.0.99 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Added iptables rule: iptables -t nat PREROUTING -i eth0 -p TCP --dport 8080 -j DNAT --to-destination 203.0.113.26:80 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Added iptables rule: iptables -t nat PREROUTING -i eth0 -p TCP --dport 8443 -j DNAT --to-destination 203.0.113.27:443 2021-04-26T12:27:20Z [debug] Added iptables rule: iptables -t nat -o net1 -j SNAT --tosource 192.168.12.99

この手順で説明されているように、**EgressRouter** オブジェクトを作成して egress ルーターを 起動する場合、ロギングファイルの場所とロギングレベルは設定できません。

e. chroot環境コンソール内で、コンテナー ID を取得します。

crictl ps --name egress-router-cni-pod | awk '{print \$1}'

出力例

CONTAINER bac9fae69ddb6

f. コンテナーのプロセス ID を判別します。この例では、コンテナー ID は bac9fae69ddb6 です。

crictl inspect -o yaml bac9fae69ddb6 | grep 'pid:' | awk '{print \$2}'

出力例

68857

g. コンテナーのネットワーク namespace を入力します。

nsenter -n -t 68857

h. ルーティングテーブルを表示します。

ip route

以下の出力例では、net1 ネットワークインターフェイスはデフォルトのルートです。クラス ターネットワークのトラフィックは eth0 ネットワークインターフェイスを使用しま す。192.168.12.0/24 ネットワークのトラフィックは、net1 ネットワークインターフェイスを 使用し、予約されたソース IP アドレス 192.168.12.99 を起点とします。Pod は他のすべてのト ラフィックを IP アドレス 192.168.12.1 のゲートウェイにルーティングします。サービスネッ トワークのルーティングは表示されません。

出力例

default via 192.168.12.1 dev net1 10.128.10.0/23 dev eth0 proto kernel scope link src 10.128.10.18 192.168.12.0/24 dev net1 proto kernel scope link src 192.168.12.99 192.168.12.1 dev net1

25.18. プロジェクトのマルチキャストの有効化

25.18.1. マルチキャストについて

IP マルチキャストを使用すると、データが多数の IP アドレスに同時に配信されます。



重要

- 現時点で、マルチキャストは低帯域幅の調整またはサービスの検出での使用に最 も適しており、高帯域幅のソリューションとしては適していません。
- デフォルトでは、ネットワークポリシーは namespace 内のすべての接続に影響 します。ただし、マルチキャストはネットワークポリシーの影響を受けません。 マルチキャストがネットワークポリシーと同じ namespace で有効にされている 場合、deny-all ネットワークポリシーがある場合でも、マルチキャストは常に許 可されます。クラスター管理者は、これを有効にする前に、ネットワークポリ シーからマルチキャストが除外されることの影響を考慮する必要があります。

OpenShift Container Platform の Pod 間のマルチキャストトラフィックはデフォルトで無効にされま す。OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを使用している場合は、プロジェクトごとにマルチキャ ストを有効にできます。

25.18.2. Pod 間のマルチキャストの有効化

プロジェクトの Pod でマルチキャストを有効にすることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

以下のコマンドを実行し、プロジェクトのマルチキャストを有効にします。<namespace>
 を、マルチキャストを有効にする必要のある namespace に置き換えます。

\$ oc annotate namespace <namespace> \
 k8s.ovn.org/multicast-enabled=true

ヒント

または、以下の YAML を適用してアノテーションを追加できます。

apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: <namespace> annotations: k8s.ovn.org/multicast-enabled: "true"

検証

マルチキャストがプロジェクトについて有効にされていることを確認するには、以下の手順を実行しま す。

1. 現在のプロジェクトを、マルチキャストを有効にしたプロジェクトに切り替えます。<project> をプロジェクト名に置き換えます。

\$ oc project <project>

2. マルチキャストレシーバーとして機能する Pod を作成します。

```
$ cat <<EOF| oc create -f -
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: mlistener
 labels:
  app: multicast-verify
spec:
 containers:
  - name: mlistener
   image: registry.access.redhat.com/ubi8
   command: ["/bin/sh", "-c"]
   args:
    ["dnf -y install socat hostname && sleep inf"]
   ports:
     - containerPort: 30102
      name: mlistener
      protocol: UDP
EOF
```

3. マルチキャストセンダーとして機能する Pod を作成します。

\$ cat <<EOF| oc create -f apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: msender

labels:
app: multicast-verify
spec:
containers:
- name: msender
image: registry.access.redhat.com/ubi8 command: ["/bin/sh", "-c"]
args:
["dnf -y install socat && sleep inf"]
EOF

4. 新しいターミナルウィンドウまたはタブで、マルチキャストリスナーを起動します。

a. PodのIPアドレスを取得します。 \$ POD_IP=\$(oc get pods mlistener -o jsonpath='{.status.podIP}') b. 次のコマンドを入力して、マルチキャストリスナーを起動します。 \$ oc exec mlistener -i -t -- \ socat UDP4-RECVFROM:30102, ip-add-membership=224.1.0.1: \$POD_IP, fork EXEC:hostname 5. マルチキャストトランスミッターを開始します。 a. Pod ネットワーク IP アドレス範囲を取得します。 \$ CIDR=\$(oc get Network.config.openshift.io cluster \ -o jsonpath='{.status.clusterNetwork[0].cidr}') b. マルチキャストメッセージを送信するには、以下のコマンドを入力します。 \$ oc exec msender -i -t -- \ /bin/bash -c "echo | socat STDIO UDP4-DATAGRAM:224.1.0.1:30102,range=\$CIDR,ip-multicast-ttl=64" マルチキャストが機能している場合、直前のコマンドは以下の出力を返します。 mlistener

25.19. プロジェクトのマルチキャストの無効化

25.19.1. Pod 間のマルチキャストの無効化

プロジェクトの Pod でマルチキャストを無効にすることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

• 以下のコマンドを実行して、マルチキャストを無効にします。



マルチキャストを無効にする必要のあるプロジェクトの namespace。

ヒント

または、以下の YAML を適用してアノテーションを削除できます。

apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: <namespace> annotations: k8s.ovn.org/multicast-enabled: null

25.20. ネットワークフローの追跡

クラスター管理者は、以下の領域をサポートする、クラスターからの Pod ネットワークフローについ ての情報を収集できます。

- Pod ネットワークで ingress および egress トラフィックをモニターします。
- パフォーマンスに関する問題のトラブルシューティング
- 容量計画およびセキュリティー監査に関するデータを収集します。

ネットワークフローのコレクションを有効にすると、トラフィックに関するメタデータのみが収集され ます。たとえば、パケットデータは収集されませんが、プロトコル、ソースアドレス、宛先アドレス、 ポート番号、バイト数、その他のパケットレベルの情報を収集します。

データは、以下の1つ以上のレコード形式で収集されます。

- NetFlow
- sFlow
- IPFIX

1つ以上のコレクター IP アドレスおよびポート番号を使用して Cluster Network Operator (CNO) を設 定する場合、Operator は各ノードで Open vSwitch (OVS) を設定し、ネットワークフローレコードを各 コレクターに送信します。

Operator を、複数のネットワークフローコレクターにレコードを送信するように設定できます。たと えば、レコードを NetFlow コレクターに送信し、レコードを sFlow コレクターに送信することもでき ます。

OVS がデータをコレクターに送信すると、それぞれのタイプのコレクターは同一レコードを受け取り ます。たとえば、2つの NetFlow コレクターを設定すると、ノード上の OVS は同じレコードを2つの コレクターに送信します。また、2つの sFlow コレクターを設定した場合には、2つの sFlow コレク ターが同じレコードを受け取ります。ただし、各コレクタータイプには固有のレコード形式があります。

ネットワークフローデータを収集し、レコードをコレクターに送信すると、パフォーマンスに影響があ ります。ノードは低速でパケットを処理します。パフォーマンスへの影響が大きすぎる場合は、コレク ターの宛先を削除し、ネットワークフローデータの収集を無効にしてパフォーマンスを回復できます。



注記

ネットワークフローコレクターを有効にすると、クラスターネットワークの全体的なパフォーマンスに影響を与える可能性があります。

25.20.1. ネットワークフローを追跡するためのネットワークオブジェクト設定

Cluster Network Operator (CNO) でネットワークフローコレクターを設定するフィールドを以下の表に示します。

表25.12 ネットワークフローの設定

フィールド	型	
metadata.name	string	CNO オブジェクトの名前。この名前は常に cluster です。
spec.exportNet workFlows	object	1つ以上の netFlow、sFlow、 または ipfix 。
spec.exportNet workFlows.netF low.collectors	array	最大 10 コレクターの IP アドレスとネットワークポートのペアの リスト。
spec.exportNet workFlows.sFlo w.collectors	array	最大 10 コレクターの IP アドレスとネットワークポートのペアの リスト。
spec.exportNet workFlows.ipfix. collectors	array	最大 10 コレクターの IP アドレスとネットワークポートのペアの リスト。

以下のマニフェストを CNO に適用した後に、Operator は、**192.168.1.99:2056** でリッスンする NetFlow コレクターにネットワークフローレコードを送信するようにクラスター内の各ノードで Open vSwitch (OVS) を設定します。

ネットワークフローを追跡するための設定例

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: exportNetworkFlows: netFlow: collectors: - 192.168.1.99:2056

25.20.2. ネットワークフローコレクターの宛先の追加

クラスター管理者として、Cluster Network Operator (CNO) を設定して、Pod ネットワークについての ネットワークフローメタデータのネットワークフローコレクターへの送信を停止することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。
- ネットワークフローコレクターがあり、リッスンする IP アドレスとポートを把握している。

手順

1. ネットワークフローコレクターのタイプおよびコレクターの IP アドレスとポート情報を指定す るパッチファイルを作成します。

spec:
exportNetworkFlows:
netFlow:
collectors:
- 192.168.1.99:2056

2. ネットワークフローコレクターで CNO を設定します。

\$ oc patch network.operator cluster --type merge -p "\$(cat <file_name>.yaml)"

出力例

network.operator.openshift.io/cluster patched

検証

検証は通常必須ではありません。以下のコマンドを実行して、各ノードの Open vSwitch (OVS) がネットワークフローレコードを1つ以上のコレクターに送信するように設定されていることを確認できます。

Operator 設定を表示して、exportNetworkFlows フィールドが設定されていることを確認します。

\$ oc get network.operator cluster -o jsonpath="{.spec.exportNetworkFlows}"

出力例

{"netFlow":{"collectors":["192.168.1.99:2056"]}}

2. 各ノードから OVS のネットワークフロー設定を表示します。

```
$ for pod in $(oc get pods -n openshift-ovn-kubernetes -l app=ovnkube-node -o
jsonpath='{range@.items[*]}{.metadata.name}{"\n"}{end}');
    do ;
    echo;
    echo;
    echo $pod;
    oc -n openshift-ovn-kubernetes exec -c ovnkube-node $pod \
    -- bash -c 'for type in ipfix sflow netflow ; do ovs-vsctl find $type ; done';
    done
```

出力例

```
ovnkube-node-xrn4p
              : a4d2aaca-5023-4f3d-9400-7275f92611f9
uuid
active timeout : 60
add_id_to_interface : false
engine_id
               : []
engine_type
               : []
external ids
                : {}
             : ["192.168.1.99:2056"]
targets
ovnkube-node-z4vq9
_uuid
             : 61d02fdb-9228-4993-8ff5-b27f01a29bd6
               : 60
active_timeout
add_id_to_interface : false
engine_id
              :[]
engine_type
               :[]
              : {}
external ids
             : ["192.168.1.99:2056"]-
targets
. . .
```

25.20.3. ネットワークフローコレクターのすべての宛先の削除

クラスター管理者として、Cluster Network Operator (CNO) を設定して、ネットワークフローメタデー タのネットワークフローコレクターへの送信を停止することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてクラスターにログインしている。

手順

1. すべてのネットワークフローコレクターを削除します。

\$ oc patch network.operator cluster --type='json' \
 -p='[{"op":"remove", "path":"/spec/exportNetworkFlows"}]'

出力例

network.operator.openshift.io/cluster patched

25.20.4. 関連情報

ネットワーク [operator.openshift.io/v1]

25.21. ハイブリッドネットワークの設定

クラスター管理者は、Red Hat OpenShift Networking OVN-Kubernetes ネットワークプラグインを設 定して、Linux および Windows ノードがそれぞれ Linux および Windows ワークロードをホストできる ようにすることができます。

25.21.1. OVN-Kubernetes を使用したハイブリッドネットワークの設定

OVN-Kubernetes でハイブリッドネットワークを使用するようにクラスターを設定できます。これにより、異なるノードのネットワーク設定をサポートするハイブリッドクラスターが可能になります。たとえば、これはクラスター内の Linux ノードと Windows ノードの両方を実行するために必要です。



重要

クラスターのインストール時に、OVN-Kubernetesを使用してハイブリッドネットワークを設定する必要があります。インストールプロセス後に、ハイブリッドネットワークに切り替えることはできません。

前提条件

 install-config.yaml ファイルで networking.networkType パラメーターの OVNKubernetes を 定義していること。詳細は、選択したクラウドプロバイダーでの OpenShift Container Platform ネットワークのカスタマイズの設定についてのインストールドキュメントを参照して ください。

手順

1. インストールプログラムが含まれるディレクトリーに切り替え、マニフェストを作成します。

\$./openshift-install create manifests --dir <installation_directory>

ここでは、以下のようになります。

<installation_directory>

クラスターの install-config.yaml ファイルが含まれるディレクトリーの名前を指定します。

2. cluster-network-03-config.yml という名前の、高度なネットワーク設定用のスタブマニフェストファイルを <installation_directory>/manifests/ ディレクトリーに作成します。

\$ cat <<EOF > <installation_directory>/manifests/cluster-network-03-config.yml
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
 name: cluster
spec:
EOF

ここでは、以下のようになります。

<installation_directory>

クラスターの manifests/ディレクトリーが含まれるディレクトリー名を指定します。

3. cluster-network-03-config.yml ファイルをエディターで開き、以下の例のようにハイブリッド ネットワークで OVN-Kubernetes を設定します。

ハイブリッドネットワーク設定の指定

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster
spec:
defaultNetwork:
ovnKubernetesConfig:
hybridOverlayConfig:
hybridClusterNetwork: 1
- cidr: 10.132.0.0/14
hostPrefix: 23
hybridOverlayVXLANPort: 9898 2

追加のオーバーレイネットワーク上のノードに使用される CIDR 設定を指定しま す。**hybridClusterNetwork** CIDR は **clusterNetwork** CIDR と重複できません。

追加のオーバーレイネットワークのカスタム VXLAN ポートを指定します。これは、 vSphere にインストールされたクラスターで Windows ノードを実行するために必要であ り、その他のクラウドプロバイダー用に設定することはできません。カスタムポートに は、デフォルトの **4789** ポートを除くいずれかのオープンポートを使用できます。この要 件についての詳細は、Microsoft ドキュメントの Pod-to-pod connectivity between hosts is broken を参照してください。



注記

Windows Server Long-Term Servicing Channel (LTSC): Windows Server 2019 は、カスタムの VXLAN ポートの選択をサポートしないため、カスタムの **hybridOverlayVXLANPort** 値を持つクラスターではサポートされません。

- 4. cluster-network-03-config.yml ファイルを保存し、テキストエディターを終了します。
- 5. オプション: manifests/cluster-network-03-config.yml ファイルをバックアップします。イン ストールプログラムは、クラスターの作成時に manifests/ ディレクトリーを削除します。

追加のインストール設定を完了してから、クラスターを作成します。インストールプロセスが終了する と、ハイブリッドネットワークが有効になります。

25.21.2. 関連情報

- Windows コンテナーワークロードについて
- Windows コンテナーワークロードの有効化
- ネットワークのカスタマイズによる AWS へのクラスターのインストール

• ネットワークのカスタマイズによる Azure へのクラスターのインストール

第26章 OPENSHIFT SDN ネットワークプラグイン

26.1. OPENSHIFT SDN ネットワークプラグインについて

Red Hat OpenShift Networking の一部である OpenShift SDN は、ソフトウェア定義ネットワーキング (SDN) アプローチを使用して、OpenShift Container Platform クラスター全体の Pod 間の通信を可能に する統合クラスターネットワークを提供するネットワークプラグインです。OpenShift SDN により、こ のような Pod ネットワークが確立され、メンテナンスされます。 OpenShift SDN は Open vSwitch (OVS) を使用してオーバーレイネットワークを設定します。

26.1.1. OpenShift SDN ネットワーク分離モード

OpenShift SDN では以下のように、Pod ネットワークを設定するための SDN モードを 3 つ提供します。

- ネットワークポリシー モードは、プロジェクト管理者が NetworkPolicy オブジェクトを使用 して独自の分離ポリシーを設定することを可能にします。ネットワークポリシーは、OpenShift Container Platform 4.12 のデフォルトモードです。
- マルチテナント モードは、Pod およびサービスのプロジェクトレベルの分離を可能にします。
 異なるプロジェクトの Pod は、別のプロジェクトの Pod およびサービスとパケットの送受信をすることができなくなります。プロジェクトの分離を無効にし、クラスター全体のすべての Pod およびサービスにネットワークトラフィックを送信したり、それらの Pod およびサービス からネットワークトラフィックを受信したりすることができます。
- サブネット モードは、すべての Pod が他のすべての Pod およびサービスと通信できる Pod ネットワークを提供します。ネットワークポリシーモードは、サブネットモードと同じ機能を 提供します。

26.1.2. サポートされているネットワークプラグイン機能のマトリックス

Red Hat OpenShift Networking は、ネットワークプラグイン用に OpenShift SDN と OVN-Kubernetes の 2 つのオプションを提供します。以下の表は、両方のネットワークプラグインの現在の機能サポート をまとめたものです。

機能	OpenShift SDN	OVN-Kubernetes	
Egress IP	サポート対象	サポート対象	
Egress ファイアウォール ^[1]	サポート対象	サポート対象	
Egress ルーター	サポート対象	サポート対象 ^[2]	
ハイブリッドネットワーク	サポート対象外	サポート対象	
IPsec 暗号化	サポート対象外	サポート対象	
IPv6	サポート対象外	サポート対象 ^{[3][4]}	

表26.1 デフォルトの CNI ネットワークプラグイン機能の比較

機能	OpenShift SDN	OVN-Kubernetes
Kubernetes ネットワークポリシー	サポート対象	サポート対象
Kubernetes ネットワークポリシーログ	サポート対象外	サポート対象
マルチキャスト	サポート対象	サポート対象
ハードウェアのオフロード	サポート対象外	サポート対象

- 1. egress ファイアウォールは、OpenShift SDN では egress ネットワークポリシーとしても知ら れています。これはネットワークポリシーの egress とは異なります。
- 2. OVN-Kubernetes \mathcal{O} egress $\mathcal{V} \mathcal{P} \mathcal{V} + \mathcal{V} \mathcal{V} + \mathcal{V$
- 3. IPv6 は、ベアメタル、IBM Power、および IBM Z クラスターでのみサポートされます。
- 4. IPv6 シングルスタックは、Kubernetes NMState をサポートしておらず、IBM Power および IBM Z クラスターでもサポートされていません。

26.2. OPENSHIFT SDN ネットワークプラグインへの移行

クラスター管理者は、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインから OpenShift SDN ネットワークプ ラグインに移行できます。

OpenShift SDN の詳細は、OpenShift SDN ネットワークプラグインについて を参照してください。

26.2.1. 移行プロセスの仕組み

以下の表は、プロセスのユーザーが開始する手順と、移行が応答として実行するアクション間を区分し て移行プロセスを要約しています。

表26.2 OVN-Kubernetes から OpenShift SDN への移行

ユーザーが開始する手順	移行アクティビティー
cluster という名前の Network.operator.openshift.io カスタムリソー ス (CR) の migration フィールドを OpenShiftSDN に設定します。 migration フィー ルドを値に設定する前に null であることを確認しま す。	Cluster Network Operator (CNO) cluster という名前の Network.config.openshift.io CR のステータ スを更新します。 Machine Config Operator (MCO) OpenShift SDN に必要な systemd 設定の更新を ロールアウトします。デフォルトでは、MCO は プールごとに一度に1台のマシンを更新するた め、クラスターのサイズに応じて移行にかかる合 計時間が長くなります。

ユーザーが開始する手順	移行アクティビティー
Network.config.openshift.io CR の networkType フィールドを更新します。	 CNO 以下のアクションを実行します。 OVN-Kubernetes コントロールプレーン Pod を破棄します。 OpenShift SDN コントロールプレーン Pod をデプロイします。 Multus オブジェクトを更新して、新し いネットワークプラグインを反映しま す。
クラスターの各ノードを再起動します。	クラスター ノードが再起動すると、クラスターは IP アドレ スを OpenShift SDN クラスターネットワーク上 の Pod に割り当てます。

26.2.2. OpenShift SDN ネットワークプラグインへの移行

クラスター管理者は、OpenShift SDN Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインに移行できます。移行中は、クラスター内のすべてのノードを再起動する必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- インフラストラクチャーにインストールされたクラスターが OVN-Kubernetes ネットワークプ ラグインで設定されている。
- etcd データベースの最新のバックアップが利用可能である。
- 再起動は、ノードごとに手動でトリガーできます。
- クラスターは既知の正常な状態にあり、エラーがないこと。

手順

- 1. Machine Config Operator (MCO) によって管理されるすべてのマシン設定プールを停止しま す。
 - マスター設定プールを停止します。

\$ oc patch MachineConfigPool master --type='merge' --patch \
'{ "spec": { "paused": true } }'

ワーカーマシン設定プールを停止します。

\$ oc patch MachineConfigPool worker --type='merge' --patch \
'{ "spec":{ "paused": true } }'

2. 移行の準備をするには、次のコマンドを入力して移行フィールドを null に設定します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": null } }'

3. 移行を開始するには、次のコマンドを入力して、ネットワークプラグインを OpenShift SDN に 戻します。

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
    --patch '{ "spec": { "migration": { "networkType": "OpenShiftSDN" } } }'
```

```
$ oc patch Network.config.openshift.io cluster --type='merge' \
    --patch '{ "spec": { "networkType": "OpenShiftSDN" } }'
```

- 4. オプション: いくつかの OVN-Kubernetes 機能の OpenShift SDN 同等機能への自動移行を無効 にすることができます。
 - Egress IP
 - Egress ファイアウォール
 - マルチキャスト

前述の OpenShift SDN 機能の設定の自動移行を無効にするには、次のキーを指定します。

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
--patch '{
    "spec": {
        "migration": {
            "networkType": "OpenShiftSDN",
            "features": {
             "egressIP": <bool>,
            "egressFirewall": <bool>,
            "multicast": <bool>,
            }
        }
      }
    }
}
```

ここでは、以下のようになります。

bool:機能の移行を有効にするかどうかを指定します。デフォルトは true です。

- 5. オプション: ネットワークインフラストラクチャーの要件を満たすように OpenShift SDN の以下の設定をカスタマイズできます。
 - Maximum transmission unit (MTU)
 - VXLAN ポート

以前の設定のいずれかを両方をカスタマイズするには、カスタマイズし、以下のコマンドを入 力します。デフォルト値を変更する必要がない場合は、パッチのキーを省略します。

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
    "spec":{
        "defaultNetwork":{
            "openshiftSDNConfig":{
                "mtu":<mtu>,
                "vxlanPort":<port>
        }}}}'
```

mtu

VXLAN オーバーレイネットワークの MTU。この値は通常は自動的に設定されますが、クラ スターにあるノードすべてが同じ MTU を使用しない場合、これを最小のノード MTU 値よ りも **50** 小さく設定する必要があります。

port

VXLAN オーバーレイネットワークの UDP ポート。値が指定されない場合は、デフォルトは **4789** になります。ポートは OVN-Kubernetes で使用される Geneve ポートと同じにすることはできません。Geneve ポートのデフォルト値は **6081** です。

patch コマンドの例

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
    "spec":{
        "defaultNetwork":{
            "openshiftSDNConfig":{
                "mtu":1200
        }}}}'
```

- クラスター内の各ノードを再起動します。次のいずれかの方法で、クラスター内のノードを再 起動できます。
 - oc rsh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。

#!/bin/bash

readarray -t POD_NODES <<< "\$(oc get pod -n openshift-machine-config-operator -o wide| grep daemon|awk '{print \$1" "\$7}')"

```
for i in "${POD_NODES[@]}"
do
read -r POD NODE <<< "$i"
until oc rsh -n openshift-machine-config-operator "$POD" chroot /rootfs shutdown -r +1
do
echo "cannot reboot node $NODE, retry" && sleep 3
done
done
```

 ssh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。このスクリプトは、パス ワードの入力を求めないように sudo が設定されていることを前提としています。

#!/bin/bash

for ip in \$(oc get nodes -o jsonpath='{.items[*].status.addresses[?
(@.type=="InternalIP")].address}')

do echo "reboot node \$ip" ssh -o StrictHostKeyChecking=no core@\$ip sudo shutdown -r -t 3 done

7. Multus デーモンセットのロールアウトが完了するまで待機します。次のコマンドを実行して、 ロールアウトのステータスを確認します。



\$ oc -n openshift-multus rollout status daemonset/multus

Multus Pod の名前の形式は multus-<xxxxx> です。ここで、 <xxxxx> は文字のランダムな シーケンスになります。Pod が再起動するまでにしばらく時間がかかる可能性があります。

出力例

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 1 out of 6 new pods have been updated...

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 5 of 6 updated pods are available... daemon set "multus" successfully rolled out

- 8. クラスター内のノードが再起動し、multus Pod がロールアウトされたら、次のコマンドを実行 してすべてのマシン設定プールを起動します。
 - マスター設定プールを開始します。

\$ oc patch MachineConfigPool master --type='merge' --patch \ '{ "spec": { "paused": false } }'

ワーカー設定プールを開始します。

\$ oc patch MachineConfigPool worker --type='merge' --patch \ '{ "spec": { "paused": false } }'

MCO が各設定プールのマシンを更新すると、各ノードを再起動します。

デフォルトで、MCO は一度にプールごとに単一のマシンを更新するため、移行が完了するまで に必要な時間がクラスターのサイズと共に増加します。

- 9. ホスト上の新規マシン設定のステータスを確認します。
 - a. マシン設定の状態と適用されたマシン設定の名前をリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc describe node | egrep "hostname|machineconfig"

出力例

kubernetes.io/hostname=master-0 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/reason: machineconfiguration.openshift.io/state: Done

以下のステートメントが true であることを確認します。

- machineconfiguration.openshift.io/state フィールドの値は Done です。
- machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドの値 は、machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig フィールドの値と等しくなり ます。
- b. マシン設定が正しいことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get machineconfig <config_name> -o yaml

ここで、<config_name> は、 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィー ルドのマシン設定の名前になります。

- 10. 移行が正常に完了したことを確認します。
 - a. ネットワークプラグインが OpenShift SDN であることを確認するには、次のコマンドを入力します。status.networkType の値は OpenShiftSDN である必要があります。

\$ oc get network.config/cluster -o jsonpath='{.status.networkType}{"\n"}'

b. クラスターノードが **Ready** 状態にあることを確認するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get nodes

- c. ノードが **NotReady** 状態のままになっている場合、マシン設定デーモン Pod のログを調べ、エラーを解決します。
 - i. Pod をリスト表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pod -n openshift-machine-config-operator

出力例

NAME F	READY ST	ATUS RE	STA	RTS AC	GE
machine-config-controller-75f756	f89d-sjp8b	1/1 Run	ning	0	37m
machine-config-daemon-5cf4b	2/2	Running	g 0	43h	
machine-config-daemon-7wzcd	2/2	2 Runnir	ig 0	43	h
machine-config-daemon-fc946	2/2	Running	g 0	43h	
machine-config-daemon-g2v28	2/2	Runnin	g 0	431	٦
machine-config-daemon-gcl4f	2/2	Running	0	43h	
machine-config-daemon-l5tnv	2/2	Running	0	43h	
machine-config-operator-79d9c55	5d5-hth92	1/1 Ru	nning	0	37m
machine-config-server-bsc8h	1/1	Running	0	43h	
machine-config-server-hklrm	1/1	Running	0	43h	
machine-config-server-k9rtx	1/1	Running	0	43h	

. .

....

設定デーモン Pod の名前は、machine-config-daemon-<seq> という形式になりま す。<seq> 値は、ランダムな5文字の英数字シーケンスになります。

ii. 直前の出力に表示されるそれぞれのマシン設定デーモン Pod の Pod ログを表示するに は、以下のコマンドを入力します。

\$ oc logs <pod> -n openshift-machine-config-operator

ここで、**pod**はマシン設定デーモン Pod の名前になります。

iii. 直前のコマンドの出力で示されるログ内のエラーを解決します。

d. Pod がエラー状態ではないことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pods --all-namespaces -o wide --sort-by='{.spec.nodeName}'

ノードの Pod がエラー状態にある場合は、そのノードを再起動します。

- 11. 以下の手順は、移行に成功し、クラスターの状態が正常である場合にのみ実行します。
 - a. Cluster Network Operator 設定オブジェクトから移行設定を削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": null } }'

b. OVN-Kubernetes 設定を削除するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "defaultNetwork": { "ovnKubernetesConfig":null } } }'

c. OVN-Kubernetes ネットワークプロバイダー namespace を削除するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc delete namespace openshift-ovn-kubernetes

26.2.3. 関連情報

- OpenShift SDN ネットワークプラグインの設定パラメーター
- etcd のバックアップ
- ネットワークポリシーについて
- OpenShift SDN の機能
 - プロジェクトの egress IP の設定
 - プロジェクトの egress ファイアウォールの設定
 - プロジェクトのマルチキャストの有効化
- ネットワーク [operator.openshift.io/v1]

26.3. OVN-KUBERNETES ネットワークプラグインへのロールバック

クラスター管理者は、OpenShift SDN への移行が失敗した場合に、OpenShift SDN ネットワークプラ グインから OVN-Kubernetes ネットワークプラグインにロールバックできます。

OVN-Kubernetes の詳細は、OVN-Kubernetes ネットワークプラグインについて を参照してください。

26.3.1. OVN-Kubernetes ネットワークプラグインへの移行

クラスター管理者は、クラスターのネットワークプラグインを OVN-Kubernetes に変更できます。移 行時に、クラスター内のすべてのノードを再起動する必要があります。



重要

移行の実行中はクラスターを利用できず、ワークロードが中断される可能性がありま す。サービスの中断が許容可能な場合にのみ移行を実行します。

前提条件

- ネットワークポリシー分離モードの OpenShift SDN CNI ネットワークプラグインで設定された クラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- etcd データベースの最新のバックアップが利用可能である。
- 再起動は、ノードごとに手動でトリガーできます。
- クラスターは既知の正常な状態にあり、エラーがないこと。
- ソフトウェア更新後のクラウドプラットフォームでは、すべてのノードに対してポート 6081
 で UDP パケットを許可するセキュリティーグループルールを設定する必要があります。

手順

クラスターネットワークの設定のバックアップを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get Network.config.openshift.io cluster -o yaml > cluster-openshift-sdn.yaml

2. 移行のすべてのノードを準備するには、以下のコマンドを入力して Cluster Network Operator 設定オブジェクトに **migration** フィールドを設定します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
 --patch '{ "spec": { "migration": { "networkType": "OVNKubernetes" } } }'



注記

この手順では、OVN-Kubernetes はすぐにデプロイしません。その代わり に、**migration** フィールドを指定すると、新規マシン設定が OVN-Kubernetes デプロイメントの準備に向けてクラスター内のすべてのノードに適用されるよう に Machine Config Operator (MCO) がトリガーされます。

- 3. オプション: いくつかの OpenShift SDN 機能の OVN-Kubernetes 同等機能への自動移行を無効 にすることができます。
 - Egress IP
 - Egress ファイアウォール
 - マルチキャスト

前述の OpenShift SDN 機能の設定の自動移行を無効にするには、次のキーを指定します。

ここでは、以下のようになります。

bool: 機能の移行を有効にするかどうかを指定します。デフォルトは true です。

- 4. オプション: ネットワークインフラストラクチャーの要件を満たすように OVN-Kubernetes の 以下の設定をカスタマイズできます。
 - 最大伝送単位 (MTU)。このオプションの手順で MTU をカスタマイズする前に、以下を考慮してください。
 - デフォルトの MTU を使用しており、移行中にデフォルトの MTU を維持したい場合は、この手順を無視できます。
 - カスタム MTU を使用しており、移行中にカスタム MTU を維持する必要がある場合 は、この手順でカスタム MTU 値を宣言する必要があります。
 - 移行中に MTU 値を変更する場合、この手順は機能しません。代わりに、まず「クラス ター MTU の変更」に記載された指示に従う必要があります。その後、この手順を実行 してカスタム MTU 値を宣言すると、カスタム MTU 値を維持できます。



注記

OpenShift-SDN と OVN-Kubernetes のオーバーレイオーバーヘッドは 異なります。MTU 値は、「MTU 値の選択」ページにあるガイドライン に従って選択する必要があります。

- Geneve (Generic Network Virtualization Encapsulation) オーバーレイネットワークポート
- OVN-Kubernetes IPv4 内部サブネット
- OVN-Kubernetes IPv6 内部サブネット
以前の設定のいずれかをカスタマイズするには、以下のコマンドを入力してカスタマイズしま す。デフォルト値を変更する必要がない場合は、パッチのキーを省略します。

\$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
 "spec":{
 "defaultNetwork":{
 "ovnKubernetesConfig":{
 "mtu":<mtu>,
 "genevePort":<port>,
 "v4InternalSubnet":"<ipv4_subnet>",
 "v6InternalSubnet":"<ipv6_subnet>"
}}}]'

ここでは、以下のようになります。

mtu

Geneve オーバーレイネットワークの MTU。この値は通常は自動的に設定されますが、クラスターにあるノードすべてが同じ MTU を使用しない場合、これを最小のノード MTU 値 よりも **100** 小さく設定する必要があります。

port

Geneve オーバーレイネットワークの UDP ポート。値が指定されない場合、デフォルトは 6081 になります。ポートは、OpenShift SDN で使用される VXLAN ポートと同じにするこ とはできません。VXLAN ポートのデフォルト値は 4789 です。

ipv4_subnet

OVN-Kubernetes による内部使用のための IPv4 アドレス範囲。IP アドレス範囲が、 OpenShift Container Platform インストールで使用される他のサブネットと重複しないよう にする必要があります。IP アドレス範囲は、クラスターに追加できるノードの最大数より大 きくする必要があります。デフォルト値は **100.64.0.0**/16 です。

ipv6_subnet

OVN-Kubernetes による内部使用のための IPv6 アドレス範囲。IP アドレス範囲が、 OpenShift Container Platform インストールで使用される他のサブネットと重複しないよう にする必要があります。IP アドレス範囲は、クラスターに追加できるノードの最大数より大 きくする必要があります。デフォルト値は **fd98::/48** です。

mtu フィールドを更新する patch コマンドの例

```
$ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type=merge \
--patch '{
    "spec":{
        "defaultNetwork":{
            "ovnKubernetesConfig":{
                "mtu":1200
        }}}}'
```

MCO がそれぞれのマシン設定プールのマシンを更新すると、各ノードが1つずつ再起動します。すべてのノードが更新されるまで待機する必要があります。以下のコマンドを実行してマシン設定プールのステータスを確認します。

\$ oc get mcp

正常に更新されたノードには、**UPDATED=true、UPDATING=false、 DEGRADED=false**のス テータスがあります。



注記

デフォルトで、MCOはプールごとに一度に1つのマシンを更新するため、移行 にかかる合計時間がクラスターのサイズと共に増加します。

- 6. ホスト上の新規マシン設定のステータスを確認します。
 - a. マシン設定の状態と適用されたマシン設定の名前をリスト表示するには、以下のコマンド を入力します。

\$ oc describe node | egrep "hostname|machineconfig"

出力例

kubernetes.io/hostname=master-0 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig: rendered-masterc53e221d9d24e1c8bb6ee89dd3d8ad7b machineconfiguration.openshift.io/reason: machineconfiguration.openshift.io/state: Done

以下のステートメントが true であることを確認します。

- machineconfiguration.openshift.io/state フィールドの値は Done です。
- machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィールドの値 は、machineconfiguration.openshift.io/desiredConfig フィールドの値と等しくなり ます。
- b. マシン設定が正しいことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get machineconfig <config_name> -o yaml | grep ExecStart

ここで、<config_name> は、 machineconfiguration.openshift.io/currentConfig フィー ルドのマシン設定の名前になります。

マシン設定には、systemd 設定に以下の更新を含める必要があります。

ExecStart=/usr/local/bin/configure-ovs.sh OVNKubernetes

- c. ノードが **NotReady** 状態のままになっている場合、マシン設定デーモン Pod のログを調べ、エラーを解決します。
 - i. Pod をリスト表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get pod -n openshift-machine-config-operator

出力例

NAME	READY S	STATU	S RE	STAF	RTS AG	ΞE
machine-config-controller-75f75	6f89d-sjp8	b 1/1	Run	ning	0	37m
machine-config-daemon-5cf4b		2/2 R	unning	у О	43h	
machine-config-daemon-7wzcd		2/2	Runnin	g 0	43ł	า
machine-config-daemon-fc946		2/2 R	unning	y 0	43h	
machine-config-daemon-g2v28		2/2 F	Runnin	g 0	43h	า
machine-config-daemon-gcl4f	2	/2 Ri	unning	0	43h	
machine-config-daemon-l5tnv	2	/2 Ri	unning	0	43h	
machine-config-operator-79d9c	55d5-hth92	2 1/1	Ru	nning	0	37m
machine-config-server-bsc8h	1/	1 Ru	nning	0	43h	
machine-config-server-hklrm	1/*	Rui	nning	0	43h	
machine-config-server-k9rtx	1/1	Run	ning	0	43h	

設定デーモン Pod の名前は、**machine-config-daemon-<seq>** という形式になりま す。**<seq>** 値は、ランダムな5文字の英数字シーケンスになります。

ii. 以下のコマンドを入力して、直前の出力に表示される最初のマシン設定デーモン Pod の Pod ログを表示します。

\$ oc logs <pod> -n openshift-machine-config-operator

ここで、pod はマシン設定デーモン Pod の名前になります。

- iii. 直前のコマンドの出力で示されるログ内のエラーを解決します。
- 7. 移行を開始するには、次のいずれかのコマンドを使用して OVN-Kubernetes ネットワークプラ グインを設定します。
 - クラスターネットワークの IP アドレスブロックを変更せずにネットワークプロバイダーを 指定するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc patch Network.config.openshift.io cluster \
 --type='merge' --patch '{ "spec": { "networkType": "OVNKubernetes" } }'

別のクラスターネットワーク IP アドレスブロックを指定するには、以下のコマンドを入力します。

```
$ oc patch Network.config.openshift.io cluster \
--type='merge' --patch '{
    "spec": {
        "clusterNetwork": [
            {
            "cidr": "<cidr>",
            "hostPrefix": <prefix>
            }
        ],
        "networkType": "OVNKubernetes"
        }
    }'
```

ここで、cidr は CIDR ブロックであり、prefix はクラスター内の各ノードに割り当てられる CIDR ブロックのスライスです。OVN-Kubernetes ネットワークプロバイダーはこのブロックを内部で使用するため、100.64.0.0/16 CIDR ブロックと重複する CIDR ブロックは使用できません。

重要



移行時に、サービスネットワークのアドレスブロックを変更することはでき ません。

8. Multus デーモンセットのロールアウトが完了したことを確認してから、後続の手順を続行しま す。

\$ oc -n openshift-multus rollout status daemonset/multus

Multus Pod の名前の形式は **multus-<xxxxx>** です。ここで、 **<xxxxx>** は文字のランダムな シーケンスになります。Pod が再起動するまでにしばらく時間がかかる可能性があります。

出力例

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 1 out of 6 new pods have been updated...

Waiting for daemon set "multus" rollout to finish: 5 of 6 updated pods are available... daemon set "multus" successfully rolled out

9. ネットワークプラグインの変更を完了するには、クラスター内の各ノードを再起動します。次 のいずれかの方法で、クラスター内のノードを再起動できます。



重要

以下のスクリプトは、クラスター内のすべてのノードを同時に再起動します。これにより、クラスターが不安定になる可能性があります。もう1つのオプションとして、ノードを一度に1つずつ手動でリブートすることもできます。ノードを1つずつ再起動すると、多数のノードを持つクラスターでかなりのダウンタイムが発生します。

• oc rsh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。

#!/bin/bash

readarray -t POD_NODES <<< "\$(oc get pod -n openshift-machine-config-operator -o wide| grep daemon|awk '{print \$1" "\$7}')"

```
for i in "${POD_NODES[@]}"
do
read -r POD NODE <<< "$i"
until oc rsh -n openshift-machine-config-operator "$POD" chroot /rootfs shutdown -r +1
do
echo "cannot reboot node $NODE, retry" && sleep 3
done
done
```

 ssh コマンドでは、次のような bash スクリプトを使用できます。このスクリプトは、パス ワードの入力を求めないように sudo が設定されていることを前提としています。

#!/bin/bash

for ip in \$(oc get nodes -o jsonpath='{.items[*].status.addresses[?
(@.type=="InternalIP")].address}')

```
do
         echo "reboot node $ip"
         ssh -o StrictHostKeyChecking=no core@$ip sudo shutdown -r -t 3
       done
10. 移行が正常に完了したことを確認します。
   a. ネットワークプラグインが OVN-Kubernetes であることを確認するには、次のコマンドを
     入力します。status.networkType の値は OVNKubernetes である必要があります。
       $ oc get network.config/cluster -o jsonpath='{.status.networkType}{"\n"}'
   b. クラスターノードが Ready 状態にあることを確認するには、以下のコマンドを実行しま
     す。
        $ oc get nodes
   c. Pod がエラー状態ではないことを確認するには、以下のコマンドを入力します。
       $ oc get pods --all-namespaces -o wide --sort-by='{.spec.nodeName}'
     ノードの Pod がエラー状態にある場合は、そのノードを再起動します。
   d. すべてのクラスター Operator が異常な状態にないことを確認するには、以下のコマンドを
     入力します。
        $ oc get co
     すべてのクラスター Operator のステータス
     は、AVAILABLE="True"、PROGRESSING="False"、DEGRADED="False" になりま
     す。クラスター Operator が利用できないか、そのパフォーマンスが低下する場合には、ク
     ラスター Operator のログで詳細を確認します。
11. 以下の手順は、移行に成功し、クラスターの状態が正常である場合にのみ実行します。
   a. CNO 設定オブジェクトから移行設定を削除するには、以下のコマンドを入力します。
       $ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
        --patch '{ "spec": { "migration": null } }'
   b. OpenShift SDN ネットワークプロバイダーのカスタム設定を削除するには、以下のコマン
      ドを入力します。
       $ oc patch Network.operator.openshift.io cluster --type='merge' \
        --patch '{ "spec": { "defaultNetwork": { "openshiftSDNConfig": null } } }'
   c. OpenShift SDN ネットワークプロバイダー namespace を削除するには、以下のコマンド
     を入力します。
```

\$ oc delete namespace openshift-sdn

26.4. プロジェクトの EGRESS IP の設定

クラスター管理者は、OpenShift SDN の Container Network Interface (CNI) ネットワークプラグインが 1つ以上の egress IP アドレスをプロジェクトに割り当てるように設定できます。

26.4.1. Egress IP アドレスアーキテクチャーの設計および実装

OpenShift Container Platform の egress IP アドレス機能を使用すると、1つ以上の namespace の1つ 以上の Pod からのトラフィックに、クラスターネットワーク外のサービスに対する一貫したソース IP アドレスを持たせることができます。

たとえば、クラスター外のサーバーでホストされるデータベースを定期的にクエリーする Pod がある 場合があります。サーバーにアクセス要件を適用するために、パケットフィルタリングデバイスは、特 定の IP アドレスからのトラフィックのみを許可するよう設定されます。この特定の Pod のみからサー バーに確実にアクセスできるようにするには、サーバーに要求を行う Pod に特定の egress IP アドレス を設定できます。

namespace に割り当てられた egress IP アドレスは、特定の宛先にトラフィックを送信するために使用 されるスロールーターとは異なります。

一部のクラスター設定では、アプリケーション Pod と Ingress ルーター Pod が同じノードで実行され ます。このシナリオでアプリケーションプロジェクトの Egress IP アドレスを設定する場合、アプリ ケーションプロジェクトからルートに要求を送信するときに IP アドレスは使用されません。

egress IP アドレスは、ノードのプライマリーネットワークインターフェイスの追加 IP アドレスとして 実装され、ノードのプライマリー IP アドレスと同じサブネットにある必要があります。追加の IP アド レスは、クラスター内の他のノードには割り当てないでください。



重要

egress IP アドレスは、**ifcfg-eth0** などのように Linux ネットワーク設定ファイルで設定 することはできません。

26.4.1.1. プラットフォームサポート

各種のプラットフォームでの egress IP アドレス機能のサポートについては、以下の表で説明されてい ます。

プラットフォーム	サポート対象
ベアメタル	はい
VMware vSphere	はい
Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)	はい
Amazon Web Services (AWS)	はい
Google Cloud Platform (GCP)	はい
Microsoft Azure	はい



重要

EgressIP 機能を持つコントロールプレーンノードへの egress IP アドレスの割り当て は、Amazon Web Services (AWS) でプロビジョニングされるクラスターではサポートさ れません。(BZ#2039656)

26.4.1.2. パブリッククラウドプラットフォームに関する考慮事項

パブリッククラウドインフラストラクチャーでプロビジョニングされたクラスターの場合は、ノードごとに割り当て可能な IP アドレスの絶対数に制約があります。ノードごとに割り当て可能な IP アドレスの最大数、つまり IP 容量 は、次の式で表すことができます。

IP capacity = public cloud default capacity - sum(current IP assignments)

出力 IP 機能はノードごとの IP アドレス容量を管理しますが、デプロイメントでこの制約を計画することが重要です。たとえば、8 ノードのベアメタルインフラストラクチャーにインストールされたクラスターの場合は、150 の egress IP アドレスを設定できます。ただし、パブリッククラウドプロバイダーが IP アドレスの容量をノードあたり 10 IP アドレスに制限している場合、割り当て可能な IP アドレスの総数はわずか 80 です。この例のクラウドプロバイダーで同じ IP アドレス容量を実現するには、7 つの追加ノードを割り当てる必要があります。

パブリッククラウド環境内の任意のノードの IP 容量とサブネットを確認するには、oc get node <node_name> -o yaml コマンドを入力します。cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig アノ テーションには、ノードの容量とサブネット情報が含まれています。

アノテーション値は、プライマリーネットワークインターフェイスに次の情報を提供するフィールドを 持つ単一のオブジェクトを持つ配列です。

- interface: AWS と Azure のインターフェイス ID と GCP のインターフェイス名を指定します。
- ifaddr: 一方または両方の IP アドレスファミリーのサブネットマスクを指定します。
- capacity: ノードの IP アドレス容量を指定します。AWS では、IP アドレス容量は IP アドレス ファミリーごとに提供されます。Azure と GCP では、IP アドレスの容量には IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方が含まれます。

ノード間のトラフィックの送信 IP アドレスの自動アタッチおよびデタッチが可能です。これにより、 namespace 内の多くの Pod からのトラフィックが、クラスター外の場所への一貫した送信元 IP アドレ スを持つことができます。これは、OpenShift Container Platform 4.12 の Red Hat OpenShift Networking のデフォルトのネットワーキングプラグインである OpenShift SDN および OVN-Kubernetes もサポートします。



注記

RHOSP egress IP アドレス機能は、**egressip-<IP address**> と呼ばれる Neutron 予約 ポートを作成します。OpenShift Container Platform クラスターのインストールに使用し たものと同じ RHOSP ユーザーを使用して、Floating IP アドレスをこの予約ポートに割 り当て、egress トラフィック用の予測可能な SNAT アドレスを指定できます。RHOSP ネットワーク上の egress IP アドレスが、ノードのフェイルオーバーなどのためにある ノードから別のノードに移動されると、Neutron 予約ポートが削除され、再作成されま す。これは、フローティング IP の関連付けが失われ、フローティング IP アドレスを新 しい予約ポートに手動で再割り当てする必要があることを意味します。



注記

RHOSP クラスター管理者が Floating IP を予約ポートに割り当てると、OpenShift Container Platform は予約ポートを削除できません。RHOSP クラスター管理者が予約 ポートから Floating IP の割り当てを解除するまで、**CloudPrivatelPConfig** オブジェク トは削除および移動操作を実行できません。

次の例は、いくつかのパブリッククラウドプロバイダーのノードからのアノテーションを示していま す。アノテーションは、読みやすくするためにインデントされています。

AWS での cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig アノテーションの例

```
cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig: [
    {
        "interface":"eni-078d267045138e436",
        "ifaddr":{"ipv4":"10.0.128.0/18"},
        "capacity":{"ipv4":14,"ipv6":15}
    }
]
```

GCP での cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig アノテーションの例

```
cloud.network.openshift.io/egress-ipconfig: [
    {
        "interface":"nic0",
        "ifaddr":{"ipv4":"10.0.128.0/18"},
        "capacity":{"ip":14}
    }
]
```

次のセクションでは、容量計算で使用するためにサポートされているパブリッククラウド環境の IP ア ドレス容量を説明します。

26.4.1.2.1. Amazon Web Services (AWS)の IP アドレス容量の制限

AWS では、IP アドレスの割り当てに関する制約は、設定されているインスタンスタイプによって異なります。詳細は、IP addresses per network interface per instance type を参照してください。

26.4.1.2.2. Google Cloud Platform (GCP)のIPアドレス容量の制限

GCP では、ネットワークモデルは、IP アドレスの割り当てではなく、IP アドレスのエイリアス作成を 介して追加のノード IP アドレスを実装します。ただし、IP アドレス容量は IP エイリアス容量に直接 マッピングされます。

IP エイリアスの割り当てには、次の容量制限があります。

- ノードごとに、IPv4 と IPv6 の両方の IP エイリアスの最大数は 100 です。
- VPC ごとに、IP エイリアスの最大数は指定されていませんが、OpenShift Container Platform のスケーラビリティーテストでは、最大数が約15,000 であることが明らかになっています。

詳細は、インスタンスごとのクォータとエイリアス IP 範囲の概要を参照してください。

26.4.1.2.3. Microsoft Azure IP アドレスの容量制限

Azure では、IP アドレスの割り当てに次の容量制限があります。

- NIC ごとに、IPv4 と IPv6 の両方で割り当て可能な IP アドレスの最大数は 256 です。
- 仮想ネットワークごとに、割り当てられる IP アドレスの最大数は 65,536 を超えることはできません。

詳細は、ネットワークの制限を参照してください。

26.4.1.3. 制限

OpenShift SDN ネットワークプラグインで egress IP アドレスを使用する場合、次の制限が適用されます。

- 手動で割り当てられた egress IP アドレスと、自動的に割り当てられた egress IP アドレスは同じノードで使用することができません。
- IP アドレス範囲から egress IP アドレスを手動で割り当てる場合、その範囲を自動の IP 割り当 てで利用可能にすることはできません。
- OpenShift SDN egress IP アドレス実装を使用して、複数の namespace で egress IP アドレス を共有することはできません。

複数の namespace 間で IP アドレスを共有する必要がある場合は、OVN-Kubernetes ネットワークプラ グインの egress IP アドレスの実装により、複数の namespace で IP アドレスを共有できます。



注記

OpenShift SDN をマルチテナントモードで使用する場合、それらに関連付けられたプロ ジェクトによって別の namespace に参加している namespace と共に egress IP アドレ スを使用することはできません。たとえば、project1 および project2 に oc adm podnetwork join-projects --to=project1 project2 コマンドを実行して参加している場合、 どちらもプロジェクトも egress IP アドレスを使用できません。詳細は、BZ#1645577 を 参照してください。

26.4.1.4. IP アドレス割り当てアプローチ

egress IP アドレスは、**NetNamespace** オブジェクトの **egressIPs** パラメーターを設定して namespace に割り当てることができます。egress IP アドレスがプロジェクトに関連付けられた後に、 OpenShift SDN は 2 つの方法で Egress IP アドレスをホストに割り当てることを可能にします。

- 自動的に割り当てる方法では、egress IP アドレス範囲はノードに割り当てられます。
- 手動で割り当てる方法では、1つ以上の egress IP アドレスの一覧がノードに割り当てられます。

egress IP アドレスを要求する namespace は、それらの egress IP アドレスをホストできるノードに一致し、egress IP アドレスはそれらのノードに割り当てられます。**egressIPs** パラメーターが NetNamespace オブジェクトに設定されるものの、ノードがその egress IP アドレスをホストしない場合、namespace からの egress トラフィックはドロップされます。

ノードの高可用性は自動的に実行されます。egress IP アドレスをホストするノードが到達不可能であり、egress IP アドレスをホストできるノードがある場合、egress IP アドレスは新規ノードに移行します。到達不可能なノードが再びオンラインに戻ると、ノード間で egress IP アドレスのバランスを図る

ために egress IP アドレスは自動的に移行します。

26.4.1.4.1. 自動的に割り当てられた egress IP アドレスを使用する場合の考慮事項

egress IP アドレスの自動割り当て方法を使用する場合、以下の考慮事項が適用されます。

 各ノードの HostSubnet リソースの egressCIDRs パラメーターを設定して、ノードでホスト できる egress IP アドレスの範囲を指定します。OpenShift Container Platform は、指定する IP アドレス範囲に基づいて HostSubnet リソースの egressIPs パラメーターを設定します。

namespace の egress IP アドレスをホストするノードに到達できない場合、OpenShift Container Platform は互換性のある egress IP アドレス範囲を持つ別のノードに egress IP アドレスを再割り当て します。自動割り当て方法は、追加の IP アドレスをノードに関連付ける柔軟性のある環境にインス トールされたクラスターに最も適しています。

26.4.1.4.2. 手動で割り当てられた egress IP アドレスを使用する場合の考慮事項

このアプローチにより、egress IP アドレスをホストできるノードを制御できます。



注記

クラスターがパブリッククラウドインフラストラクチャーにインストールされている場合は、egress IP アドレスを割り当てる各ノードに、IP アドレスをホストするための十分な予備容量があることを確認する必要があります。詳細については、前のセクションの プラットフォームに関する考慮事項を参照してください。

egress IP アドレスに手動割り当て方法を使用する場合、以下の考慮事項が適用されます。

- 各ノードの HostSubnet リソースの egressIPs パラメーターを設定して、ノードでホストできる IP アドレスを指定します。
- namespace ごとに複数の egress IP アドレスがサポートされます。

namespace に複数の egress IP アドレスがあり、それらのアドレスが複数のノードでホストされる場合、以下の追加の考慮事項が適用されます。

- Pod が egress IP アドレスをホストするノード上にある場合、その Pod はノード上の egress IP アドレスを常に使用します。
- Pod が egress IP アドレスをホストするノードにない場合、その Pod はランダムで egress IP アドレスを使用します。

26.4.2. namespace の自動的に割り当てられた egress IP アドレスの有効化

OpenShift Container Platform では、1つ以上のノードで特定の namespace の egress IP アドレスの自動的な割り当てを有効にできます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. 以下の JSON を使用して、NetNamespace オブジェクトを egress IP アドレスで更新します。

```
<project_name> --type=merge -p \
'{
    "egressIPs": [
    "<ip_address>"
  ]
}'
```

ここでは、以下のようになります。

<project_name>

プロジェクトの名前を指定します。

<ip_address>

egressIPs 配列の1つ以上の egress IP アドレスを指定します。

たとえば、**project1** を IP アドレスの 192.168.1.100 に、 **project2** を IP アドレスの 192.168.1.101 に割り当てるには、以下を実行します。

```
$ oc patch netnamespace project1 --type=merge -p \
'{"egressIPs": ["192.168.1.100"]}'
$ oc patch netnamespace project2 --type=merge -p \
'{"egressIPs": ["192.168.1.101"]}'
```



注記

OpenShift SDN は **NetNamespace** オブジェクトを管理するため、既存の **NetNamespace** オブジェクトを変更することによってのみ変更を加えることが できます。新規 **NetNamespace** オブジェクトは作成しません。

 以下の JSON を使用して、各ホストの egressCIDRs パラメーターを設定して egress IP アドレ スをホストできるノードを示します。

```
$ oc patch hostsubnet <node_name> --type=merge -p \
    '{
        "egressCIDRs": [
        "<ip_address_range>", "<ip_address_range>"
    ]
    }'
```

ここでは、以下のようになります。

<node_name>

ノード名を指定します。

<ip_address_range>

CIDR 形式の IP アドレス範囲を指定します。egressCIDRs 配列に複数のアドレス範囲を指定できます。

たとえば、**node1** および **node2** を、192.168.1.0 から 192.168.1.255 の範囲で egress IP アドレス をホストするように設定するには、以下を実行します。

\$ oc patch hostsubnet node1 --type=merge -p \

'{"egressCIDRs": ["192.168.1.0/24"]}' \$ oc patch hostsubnet node2 --type=merge -p \ '{"egressCIDRs": ["192.168.1.0/24"]}'

OpenShift Container Platform はバランスを取りながら特定の egress IP アドレスを利用可能な ノードに自動的に割り当てます。この場合、egress IP アドレス 192.168.1.100 を **node1** に、 egress IP アドレス 192.168.1.101 を **node2** に割り当て、その逆も行います。

26.4.3. namespace の手動で割り当てられた egress IP アドレスの設定

OpenShift Container Platform で、1つ以上の egress IP アドレスを namespace に関連付けることがで きます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. 以下の JSON オブジェクトを必要な IP アドレスで指定して、**NetNamespace** オブジェクトを 更新します。

```
$ oc patch netnamespace <project_name> --type=merge -p \
'{
    "egressIPs": [
    "<ip_address>"
  ]
}'
```

ここでは、以下のようになります。

<project_name>

プロジェクトの名前を指定します。

<ip_address>

egressIPs 配列の1つ以上の egress IP アドレスを指定します。

たとえば、**project1** プロジェクトを IP アドレス **192.168.1.100** および **192.168.1.101** に割り当 てるには、以下を実行します。

\$ oc patch netnamespace project1 --type=merge \ -p '{"egressIPs": ["192.168.1.100","192.168.1.101"]}'

高可用性を提供するには、**egressIPs** の値を異なるノードの2つ以上のIP アドレスに設定しま す。複数の egress IP アドレスが設定されている場合、Pod はすべての egress IP アドレスをほ ぼ均等に使用します。



注記

OpenShift SDN は **NetNamespace** オブジェクトを管理するため、既存の **NetNamespace** オブジェクトを変更することによってのみ変更を加えることが できます。新規 **NetNamespace** オブジェクトは作成しません。 egress IP アドレスをノードホストに手動で割り当てます。
 クラスターがパブリッククラウドインフラストラクチャーにインストールされている場合は、
 ノードに使用可能な IP アドレス容量があることを確認する必要があります。

egressIPs パラメーターを、ノードホストの HostSubnet オブジェクトに設定します。以下の JSON を使用して、そのノードホストに割り当てる必要のある任意の数の IP アドレスを含める ことができます。

```
$ oc patch hostsubnet <node_name> --type=merge -p \
    '{
        "egressIPs": [
            "<ip_address>",
            "<ip_address>"
        ]
    }'
```

ここでは、以下のようになります。

<node_name>

ノード名を指定します。

<ip_address>

IP アドレスを指定します。egressIPs 配列に複数の IP アドレスを指定できます。

たとえば、**node1** に egress IP **192.168.1.100**、 **192.168.1.101**、および **192.168.1.102** が設定 されるように指定するには、以下を実行します。

\$ oc patch hostsubnet node1 --type=merge -p \ '{"egressIPs": ["192.168.1.100", "192.168.1.101", "192.168.1.102"]}'

直前の例では、**project1**のすべての egress トラフィックは、指定された egress IP をホストするノードにルーティングされてから、その IP アドレスに Network Address Translation (NAT)を使用して接続されます。

26.4.4. 関連情報

● 手動の egress IP アドレス割り当てを設定している場合は、IP 容量計画の情報について、プ ラットフォームの考慮事項を参照してください。

26.5. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの設定

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform クラスター外に出るプロジェクトのプロジェクに ついて、egress トラフィックを制限する egress ファイアウォールを作成できます。

26.5.1. egress ファイアウォールのプロジェクトでの機能

クラスター管理者は、 egress ファイアウォール を使用して、一部またはすべての Pod がクラスター内 からアクセスできる外部ホストを制限できます。egress ファイアウォールポリシーは以下のシナリオを サポートします。

 Podの接続を内部ホストに制限し、パブリックインターネットへの接続を開始できないように する。

- Pod の接続をパブリックインターネットに制限し、OpenShift Container Platform クラスター 外にある内部ホストへの接続を開始できないようにする。
- Pod は OpenShift Container Platform クラスター外の指定された内部サブネットまたはホスト にアクセスできません。
- Pod は特定の外部ホストにのみ接続することができます。

たとえば、指定された IP 範囲へのあるプロジェクトへのアクセスを許可する一方で、別のプロジェクトへの同じアクセスを拒否することができます。または、アプリケーション開発者の (Python) pip mirror からの更新を制限したり、更新を承認されたソースからの更新のみに強制的に制限したりすることができます。



注記

Egress ファイアウォールは、ホストネットワークの namespace には適用されません。 ホストネットワークが有効になっている Pod は、Egress ファイアウォールルールの影響 を受けません。

EgressNetworkPolicy カスタムリソース (CR) オブジェクトを作成して egress ファイアウォールポリ シーを設定します。egress ファイアウォールは、以下のいずれかの基準を満たすネットワークトラ フィックと一致します。

- CIDR 形式の IP アドレス範囲。
- IP アドレスに解決する DNS 名

重要

egress ファイアウォールに **0.0.0.0/0** の拒否ルールが含まれる場合、OpenShift Container Platform API サーバーへのアクセスはブロックされます。IP アドレスごとに 許可ルールを追加する必要があります。

次の例は、API サーバーへのアクセスを確保するために必要な Egress ファイアウォール ルールの順序を示しています。

apiVersion: network.openshift.io/v1 kind: EgressNetworkPolicy metadata:
namespace: <namespace></namespace>
spec:
egress:
- to:
cidrSelector: <api address="" range="" server=""> 2</api>
type: Allow
#
- to:
cidrSelector: 0.0.0/0 3 type: Deny

1 2 3

Egress ファイアウォールの namespace。 OpenShift Container Platform API サーバーを含む IP アドレス範囲。 グローバル拒否ルールにより、OpenShift Container Platform API サーバーへのア クセスが阻止されます。

API サーバーの IP アドレスを見つけるには、oc get ep kubernetes -n default を実行します。

詳細は、BZ#1988324を参照してください。



重要

egress ファイアウォールを設定するには、ネットワークポリシーまたはマルチテナント モードのいずれかを使用するように OpenShift SDN を設定する必要があります。

ネットワークポリシーモードを使用している場合、egress ファイアウォールは namespace ごとに1つのポリシーとのみ互換性を持ち、グローバルプロジェクトなどの ネットワークを共有するプロジェクトでは機能しません。



警告

egress ファイアウォールルールは、ルーターを通過するトラフィックには適用され ません。ルート CR オブジェクトを作成するパーミッションを持つユーザーは、禁 止されている宛先を参照するルートを作成することにより、egress ファイアウォー ルポリシールールをバイパスできます。

26.5.1.1. egress ファイアウォールの制限

egress ファイアウォールには以下の制限があります。

• いずれのプロジェクトも複数の EgressNetworkPolicy オブジェクトを持つことができません。



重要

複数の EgressNetworkPolicy オブジェクトの作成は可能ですが、作成するべきで はありません。複数の EgressNetworkPolicy オブジェクトを作成する と、**dropping all rules** というメッセージが返されます。実際には、すべての外 部トラフィックがドロップされるため、組織にセキュリティーリスクが生じる可 能性があります。

- 最大 1,000 のルールを持つ最大 1つの EgressNetworkPolicy オブジェクトはプロジェクトごと に定義できます。
- default プロジェクトは egress ファイアウォールを使用できません。
- マルチテナントモードで OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用する場合、以下の制限 が適用されます。
 - グローバルプロジェクトは egress ファイアウォールを使用できません。oc adm podnetwork make-projects-global コマンドを使用して、プロジェクトをグローバルにするこ とができます。
 - oc adm pod-network join-projects コマンドを使用してマージされるプロジェクトでは、 結合されたプロジェクトのいずれでも egress ファイアウォールを使用することはできません。

これらの制限のいずれかに違反すると、プロジェクトの Egress ファイアウォールが壊れます。その結果、すべての外部ネットワークトラフィックがドロップされ、組織にセキュリティーリスクが生じる可能性があります。

egress ファイアウォールリソースは、**kube-node-lease、kube-public、kube**system、openshift、openshift- プロジェクトで作成できます。

26.5.1.2. egress ポリシールールのマッチング順序

egress ファイアウォールポリシールールは、最初から最後へと定義された順序で評価されます。Pod からの egress 接続に一致する最初のルールが適用されます。この接続では、後続のルールは無視されます。

26.5.1.3. DNS (Domain Name Server) 解決の仕組み

egress ファイアウォールポリシールールのいずれかで DNS 名を使用する場合、ドメイン名の適切な解決には、以下の制限が適用されます。

- ドメイン名の更新は、Time-to-Live (TTL)期間に基づいてポーリングされます。デフォルトの 期間は 30 秒です。egress ファイアウォールコントローラーがローカルネームサーバーでドメ イン名をクエリーする場合に、応答に 30 秒未満の TTL が含まれる場合は、コントローラーは その期間を返される値に設定します。応答の TTL が 30 分を超える場合、コントローラーは期 間を 30 分に設定します。TTL が 30 秒から 30 分の間に設定される場合、コントローラーは値 を無視し、期間を 30 秒に設定します。
- Pod は、必要に応じて同じローカルネームサーバーからドメインを解決する必要があります。

そうしない場合、egress ファイアウォールコントローラーと Pod によって認識されるドメインの IP アドレスが異なる可能性があります。ホスト名の IP アドレスが異なる場合、egress ファ イアウォールは一貫して実行されないことがあります。

 egress ファイアウォールコントローラーおよび Pod は同じローカルネームサーバーを非同期に ポーリングするため、Pod は egress コントローラーが実行する前に更新された IP アドレスを 取得する可能性があります。これにより、競合状態が生じます。この現時点の制限により、 EgressNetworkPolicy オブジェクトのドメイン名の使用は、IP アドレスの変更が頻繁に生じな いドメインの場合にのみ推奨されます。



注記

egress ファイアウォールは、DNS 解決用に Pod が置かれるノードの外部インターフェ イスに Pod が常にアクセスできるようにします。

ドメイン名を egress ファイアウォールで使用し、DNS 解決がローカルノード上の DNS サーバーによって処理されない場合は、Pod でドメイン名を使用している場合には DNS サーバーの IP アドレスへのアクセスを許可する egress ファイアウォールを追加する必 要があります。

26.5.2. EgressNetworkPolicy カスタムリソース (CR) オブジェクト

egress ファイアウォールのルールを1つ以上定義できます。ルールは、ルールが適用されるトラフィックを指定して Allow ルールまたは Deny ルールのいずれかになります。

以下の YAML は EgressNetworkPolicy CR オブジェクトについて説明しています。

EgressNetworkPolicy オブジェクト



- 1 egress ファイアウォールポリシーの名前。
- 2 以下のセクションで説明されているように、egress ネットワークポリシールールのコレクション。

26.5.2.1. EgressNetworkPolicy ルール

以下の YAML は egress ファイアウォールルールオブジェクトについて説明しています。ユーザーは、 CIDR 形式の IP アドレス範囲またはドメイン名のいずれかを選択できます。**egress** スタンザは、単一 または複数のオブジェクトの配列を予想します。

Egress ポリシールールのスタンザ

egress: - type: <type> 1 to: 2 cidrSelector: <cidr> 3 dnsName: <dns_name> 4

ルールのタイプ。値には Allow または Deny のいずれかを指定する必要があります。

2 egress トラフィックのマッチングルールを記述するスタンザ。ルールの cidrSelector フィールド または dnsName フィールドのいずれかの値。同じルールで両方のフィールドを使用することはで きません。

3 CIDR 形式の IP アドレス範囲。

4 ドメイン名。

26.5.2.2. EgressNetworkPolicy CR オブジェクトの例

以下の例では、複数の egress ファイアウォールポリシールールを定義します。



egress ファイアウォールポリシールールオブジェクトのコレクション。

26.5.3. egress ファイアウォールポリシーオブジェクトの作成

クラスター管理者は、プロジェクトの egress ファイアウォールポリシーオブジェクトを作成できます。



重要

プロジェクトに EgressNetworkPolicy オブジェクトがすでに定義されている場合、既存のポリシーを編集して egress ファイアウォールルールを変更する必要があります。

前提条件

- OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

クラスター管理者としてクラスターにログインする必要があります。

手順

- 1. ポリシールールを作成します。
 - a. <policy_name>.yaml ファイルを作成します。この場合、<policy_name> は egress ポリ シールールを記述します。
 - b. 作成したファイルで、egress ポリシーオブジェクトを定義します。
- 以下のコマンドを入力してポリシーオブジェクトを作成します。<policy_name> をポリシーの 名前に、<project> をルールが適用されるプロジェクトに置き換えます。

\$ oc create -f <policy_name>.yaml -n <project>

以下の例では、新規の EgressNetworkPolicy オブジェクトが **project1** という名前のプロジェクトに作成されます。



出力例

egressnetworkpolicy.network.openshift.io/v1 created

3. オプション:後に変更できるように <policy_name>.yaml ファイルを保存します。

26.6. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの編集

クラスター管理者は、既存の egress ファイアウォールのネットワークトラフィックルールを変更でき ます。

26.6.1. EgressNetworkPolicy オブジェクトの表示

クラスターで EgressNetworkPolicy オブジェクトを表示できます。

前提条件

- OpenShiftSDN ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- oc として知られる OpenShift コマンドラインインターフェイス (CLI) のインストール。
- クラスターにログインすること。

手順

オプション: クラスターで定義された EgressNetworkPolicy オブジェクトの名前を表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get egressnetworkpolicy --all-namespaces

ポリシーを検査するには、以下のコマンドを入力します。<policy_name> を検査するポリシーの名前に置き換えます。

\$ oc describe egressnetworkpolicy <policy_name>

出力例

Name: default Namespace: project1 Created: 20 minutes ago Labels: <none> Annotations: <none> Rule: Allow to 1.2.3.0/24 Rule: Allow to www.example.com Rule: Deny to 0.0.0.0/0

26.7. プロジェクトの EGRESS ファイアウォールの編集

クラスター管理者は、既存の egress ファイアウォールのネットワークトラフィックルールを変更できます。

26.7.1. EgressNetworkPolicy オブジェクトの編集

クラスター管理者は、プロジェクトの egress ファイアウォールを更新できます。

前提条件

- OpenShiftSDN ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインする必要があります。

手順

1. プロジェクトの EgressNetworkPolicy オブジェクトの名前を検索します。**<project>**をプロジェクトの名前に置き換えます。

\$ oc get -n <project> egressnetworkpolicy

オプション: egress ネットワークファイアウォールの作成時に EgressNetworkPolicy オブジェクトのコピーを保存しなかった場合には、以下のコマンドを入力してコピーを作成します。

\$ oc get -n <project> egressnetworkpolicy <name> -o yaml > <filename>.yaml

<project> をプロジェクトの名前に置き換えます。<name> をオブジェクトの名前に置き換え ます。<filename> をファイルの名前に置き換え、YAML を保存します。

 ポリシールールに変更を加えたら、以下のコマンドを実行して EgressNetworkPolicy オブジェクトを置き換えます。
 filename> を、更新された EgressNetworkPolicy オブジェクトを含む ファイルの名前に置き換えます。

\$ oc replace -f <filename>.yaml

26.8. プロジェクトからの EGRESS ファイアウォールの削除

クラスター管理者は、プロジェクトから egress ファイアウォールを削除して、OpenShift Container Platform クラスター外に出るプロジェクトからネットワークトラフィックについてのすべての制限を削 除できます。

26.8.1. EgressNetworkPolicy オブジェクトの削除

クラスター管理者は、プロジェクトから Egress ファイアウォールを削除できます。

前提条件

- OpenShiftSDN ネットワークプラグインを使用するクラスター。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- クラスター管理者としてクラスターにログインする必要があります。

手順

1. プロジェクトの EgressNetworkPolicy オブジェクトの名前を検索します。**<project>**をプロジェクトの名前に置き換えます。

\$ oc get -n <project> egressnetworkpolicy

2. 以下のコマンドを入力し、EgressNetworkPolicy オブジェクトを削除します。**<project>**をプロジェクトの名前に、**<name>**をオブジェクトの名前に置き換えます。

\$ oc delete -n <project> egressnetworkpolicy <name>

26.9. EGRESS ルーター POD の使用についての考慮事項

26.9.1. egress ルーター Pod について

OpenShift Container Platform egress ルーター Pod は、他の用途で使用されていないプライベートソー ス IP アドレスから指定されたリモートサーバーにトラフィックをリダイレクトします。Egress ルー ター Pod により、特定の IP アドレスからのアクセスのみを許可するように設定されたサーバーにネッ トワークトラフィックを送信できます。



注記

egress ルーター Pod はすべての発信接続のために使用されることが意図されていません。多数の egress ルーター Pod を作成することで、ネットワークハードウェアの制限を引き上げられる可能性があります。たとえば、すべてのプロジェクトまたはアプリケーションに egress ルーター Pod を作成すると、ソフトウェアの MAC アドレスのフィルターに戻る前にネットワークインターフェイスが処理できるローカル MAC アドレス数の上限を超えてしまう可能性があります。



重要

egress ルーターイメージには Amazon AWS, Azure Cloud またはレイヤー 2 操作をサポートしないその他のクラウドプラットフォームとの互換性がありません。 それらに macvlan トラフィックとの互換性がないためです。

26.9.1.1. Egress ルーターモード

リダイレクトモードでは、egress ルーター Pod は、トラフィックを独自の IP アドレスから1つ以上の 宛先 IP アドレスにリダイレクトするために **iptables** ルールをセットアップします。予約された送信元 IP アドレスを使用する必要があるクライアント Pod は、宛先 IP に直接接続するのではなく、スロー ルーターのサービスにアクセスするように設定する必要があります。**curl** コマンドを使用して、アプリ ケーション Pod から宛先サービスとポートにアクセスできます。以下に例を示します。

\$ curl <router_service_IP> <port>

HTTP プロキシーモード では、egress ルーター Pod はポート 8080 で HTTP プロキシーとして実行さ れます。このモードは、HTTP または HTTPS ベースのサービスと通信するクライアントの場合にのみ 機能しますが、通常それらを機能させるのにクライアント Pod への多くの変更は不要です。環境変数 を設定することで、数多くのプログラムは HTTP プロキシーを使用するように指示されます。

DNS プロキシーモードでは、egress ルーター Pod は、トラフィックを独自の IP アドレスから1つ以 上の宛先 IP アドレスに送信する TCP ベースのサービスの DNS プロキシーとして実行されます。予約 されたソース IP アドレスを使用するには、クライアント Pod は、宛先 IP アドレスに直接接続するので なく、egress ルーター Pod に接続するように変更される必要があります。この修正により、外部の宛 先でトラフィックが既知のソースから送信されているかのように処理されます。

リダイレクトモードは、HTTP および HTTPS 以外のすべてのサービスで機能します。HTTP および HTTPS サービスの場合は、HTTP プロキシーモードを使用します。IP アドレスまたはドメイン名を持 つ TCP ベースのサービスの場合は、DNS プロキシーモードを使用します。

26.9.1.2. eqress ルーター Pod の実装

egress ルーター Pod の設定は、初期化コンテナーで実行されます。このコンテナーは特権付きコンテ キストで実行され、macvlan インターフェイスを設定して **iptables** ルールを設定できます。初期化コン テナーが **iptables** ルールの設定を終了すると、終了します。次に、egress ルーター Pod はコンテナー を実行して egress ルーターのトラフィックを処理します。使用されるイメージは、egress ルーター モードによって異なります。

環境変数は、egress-router イメージが使用するアドレスを判別します。イメージは macvlan インター フェイスを、 **EGRESS_SOURCE** をその IP アドレスとして使用し、**EGRESS_GATEWAY** をゲート ウェイの IP アドレスとして使用するように設定します。

ネットワークアドレス変換 (NAT) ルールは、TCP ポートまたは UDP ポート上の Pod のクラスター IP アドレスへの接続が **EGRESS_DESTINATION** 変数で指定される IP アドレスの同じポートにリダイレ クトされるように設定されます。

クラスター内の一部のノードのみが指定されたソース IP アドレスを要求でき、指定されたゲートウェ イを使用できる場合、受け入れ可能なノードを示す nodeName または nodeSelector を指定すること ができます。

26.9.1.3. デプロイメントに関する考慮事項

egress ルーター Pod は追加の IP アドレスおよび MAC アドレスをノードのプライマリーネットワーク インターフェイスに追加します。その結果、ハイパーバイザーまたはクラウドプロバイダーを、追加の アドレスを許可するように設定する必要がある場合があります。

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)

OpenShift Container Platform を RHOSP にデプロイする場合、OpenStack 環境の egress ルーター Pod の IP および MAC アドレスからのトラフィックを許可する必要があります。トラフィックを許 可しないと、通信は失敗 します。 \$ openstack port set --allowed-address \
 ip address=<ip address>,mac address=<mac address> <neutron port uuid>

Red Hat Virtualization (RHV)

RHV を使用している場合は、仮想インターフェイスカード (vNIC) に No Network Filter を選択する 必要があります。

VMware vSphere

VMware vSphere を使用している場合は、vSphere 標準スイッチのセキュリティー保護についての VMware ドキュメント を参照してください。vSphere Web クライアントからホストの仮想スイッチ を選択して、VMware vSphere デフォルト設定を表示し、変更します。

とくに、以下が有効にされていることを確認します。

- MAC アドレスの変更
- 偽装転送 (Forged Transit)
- 無作為別モード (Promiscuous Mode) 操作

26.9.1.4. フェイルオーバー設定

ダウンタイムを回避するには、以下の例のように **Deployment** リソースで egress ルーター Pod をデプ ロイできます。サンプルのデプロイメント用に新規 **Service** オブジェクトを作成するには、**oc expose deployment/egress-demo-controller** コマンドを使用します。

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
name: egress-demo-controller
spec:
 replicas: 1 1
 selector:
  matchLabels:
   name: egress-router
 template:
  metadata:
   name: egress-router
  labels:
   name: egress-router
   annotations:
   pod.network.openshift.io/assign-macvlan: "true"
  spec: 2
   initContainers:
    ...
   containers:
    ...
 1つの Pod のみが指定される egress ソース IP アドレスを使用できるため、レプリカが1に設定さ
 れていることを確認します。これは、単一コピーのルーターのみがノード実行されることを意味し
 ます。
```

```
egress ルーター Pod の Pod オブジェクトテンプレートを指定します。
```

26.9.2. 関連情報

- リダイレクトモードでの egress ルーターのデプロイ
- HTTP プロキシーモードでの egress ルーターのデプロイ
- DNS プロキシーモードでの egress ルーターのデプロイ

26.10. リダイレクトモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ

クラスター管理者は、トラフィックを指定された宛先 IP アドレスにリダイレクトするように設定された egress ルーター Pod をデプロイできます。

26.10.1. リダイレクトモードの egress ルーター Pod 仕様

Pod オブジェクトで egress ルーター Pod の設定を定義します。以下の YAML は、リダイレクトモード での egress ルーター Pod の設定のフィールドについて説明しています。

apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: egress-1
labels:
name: egress-1
annotations:
pod.network.openshift.io/assign-macvlan: "true" 1
spec:
initContainers:
- name: egress-router
image: registry.redhat.io/openshift4/ose-egress-router
securityContext:
privileged: true
env:
- name: EGRESS_SOURCE 2
value: <egress_router></egress_router>
- name: EGRESS_GATEWAY 3
value: <egress_gateway></egress_gateway>
- name: EGRESS_DESTINATION 4
value: <egress_destination></egress_destination>
 name: EGRESS_ROUTER_MODE
value: init
containers:
- name: egress-router-wait
image: registry.redhat.io/openshift4/ose-pod
このアノテーションは、OpenShift Container Platform

このアノテーションは、OpenShift Container Platform に対して、プライマリーネットワークイン ターフェイスコントローラー (NIC) に macvlan ネットワークインターフェイスを作成し、その macvlan インターフェイスを Pod ネットワークの namespace に移動するよう指示します。引用符 を "true" 値の周囲に含める必要があります。OpenShift Container Platform が別の NIC インター フェイスに macvlan インターフェイスを作成するには、アノテーションの値をそのインターフェ イスの名前に設定します。たとえば、eth1 を使用します。

2

ノードが置かれている物理ネットワークの IP アドレスは egress ルーター Pod で使用するために 予約されます。オプション: サブネットの長さ /**24** 接尾辞を組み込み、ローカルサブネットへの適

- ノードで使用されるデフォルトゲートウェイと同じ値です。
- 4 トラフィックの送信先となる外部サーバー。この例では、Pod の接続は 203.0.113.25 にリダイレ クトされます。 ソース IP アドレスは 192.168.12.99 です。

egress ルーター Pod 仕様の例

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: egress-multi labels: name: egress-multi annotations: pod.network.openshift.io/assign-macvlan: "true" spec: initContainers: - name: egress-router image: registry.redhat.io/openshift4/ose-egress-router securityContext: privileged: true env: - name: EGRESS SOURCE value: 192.168.12.99/24 - name: EGRESS GATEWAY value: 192.168.12.1 - name: EGRESS DESTINATION value: 80 tcp 203.0.113.25 8080 tcp 203.0.113.26 80 8443 tcp 203.0.113.26 443 203.0.113.27 - name: EGRESS_ROUTER_MODE value: init containers: - name: egress-router-wait image: registry.redhat.io/openshift4/ose-pod

26.10.2. egress 宛先設定形式

egress ルーター Pod がリダイレクトモードでデプロイされる場合、以下のいずれかの形式を使用して リダイレクトルールを指定できます。

- <port> <protocol> <ip_address>: 指定される <port> への着信接続が指定される
 <ip_address> の同じポートにリダイレクトされます。<protocol> は tcp または udp のいずれかになります。
- <port> <protocol> <ip_address> <remote_port>: 接続が <ip_address> の別の
 <remote_port> にリダイレクトされるのを除き、上記と同じになります。

 <ip_address>: 最後の行が単一 IP アドレスである場合、それ以外のボートの接続はその IP ア ドレスの対応するポートにリダイレクトされます。フォールバック IP アドレスがない場合、他 のポートでの接続は拒否されます。

以下の例では、複数のルールが定義されます。

- 最初の行はローカルポート 80 から 203.0.113.25 のポート 80 にトラフィックをリダイレクトします。
- 2番目と3番目の行では、ローカルポート 8080 および 8443 を、203.0.113.26のリモートポート 80 および 443 にリダイレクトします。
- 最後の行は、先のルールで指定されていないポートのトラフィックに一致します。

設定例

80 tcp 203.0.113.25 8080 tcp 203.0.113.26 80 8443 tcp 203.0.113.26 443 203.0.113.27

26.10.3. リダイレクトモードでの egress ルーター Pod のデプロイ

リダイレクトモードでは、egress ルーター Pod は、トラフィックを独自の IP アドレスから1つ以上の 宛先 IP アドレスにリダイレクトするために iptables ルールをセットアップします。予約された送信元 IP アドレスを使用する必要があるクライアント Pod は、宛先 IP に直接接続するのではなく、スロー ルーターのサービスにアクセスするように設定する必要があります。**curl** コマンドを使用して、アプリ ケーション Pod から宛先サービスとポートにアクセスできます。以下に例を示します。

\$ curl <router_service_IP> <port>

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. egress ルーター Pod の作成
- 2. 他の Pod が egress ルーター Pod の IP アドレスを見つられるようにするには、以下の例のよう に、egress ルーター Pod を参照するサービスを作成します。

apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: egress-1 spec: ports: - name: http port: 80 - name: https port: 443 type: ClusterIP selector: name: egress-1

Pod がこのサービスに接続できるようになります。これらの接続は、予約された egress IP ア ドレスを使用して外部サーバーの対応するポートにリダイレクトされます。

26.10.4. 関連情報

• ConfigMap を使用した egress ルーターの宛先マッピングの設定

26.11. HTTP プロキシーモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ

クラスター管理者は、トラフィックを指定された HTTP および HTTPS ベースのサービスにプロキシー するように設定された egress ルーター Pod をデプロイできます。

26.11.1. HTTP モードの egress ルーター Pod 仕様

Pod オブジェクトで egress ルーター Pod の設定を定義します。以下の YAML は、HTTP モードでの egress ルーター Pod の設定のフィールドについて説明しています。

macvlan インターフェイスを Pod ネットワークの namespace に移動するよう指示します。引用符

apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: egress-1
labels:
name: egress-1
annotations:
pod.network.openshift.io/assign-macvlan: "true"
spec:
initContainers:
- name: egress-router
image: registry.redhat.io/openshift4/ose-egress-router
securityContext:
privilegea: true
env:
- name: EGRESS_SOURCE
value: <egress-router></egress-router>
- name: EGRESS_GATEWAY 3
value: <egress-gateway></egress-gateway>
- name: EGRESS_ROUTER_MODE
value: http-proxy
containers:
- name: egress-rouler-pod
image. registry.rednat.io/openshiit4/ose-egress-http-proxy
value: -
このアノテーションは OpenShift Container Platform に対して プライマリーネットワーク
ターフェイスコントローラー (NIC) に macylan ネットワークインターフェイスを作成し、 その

プライマリーネットワークイン

を "**true**" 値の周囲に含める必要があります。OpenShift Container Platform が別の NIC インター フェイスに macvlan インターフェイスを作成するには、アノテーションの値をそのインターフェ イスの名前に設定します。たとえば、**eth1** を使用します。

- 2 ノードが置かれている物理ネットワークの IP アドレスは egress ルーター Pod で使用するために 予約されます。オプション: サブネットの長さ /24 接尾辞を組み込み、ローカルサブネットへの適 切なルートがセットアップされるようにできます。サブネットの長さを指定しない場合、egress ルーターは EGRESS_GATEWAY 変数で指定されたホストにのみアクセスでき、サブネットの他 のホストにはアクセスできません。
- ノードで使用されるデフォルトゲートウェイと同じ値です。
- プロキシーの設定方法を指定する文字列または YAML の複数行文字列です。これは、init コンテ ナーの他の環境変数ではなく、HTTP プロキシーコンテナーの環境変数として指定されることに注 意してください。

26.11.2. eqress 宛先設定形式

egress ルーター Pod が HTTP プロキシーモードでデプロイされる場合、以下の形式のいずれかを使用 してリダイレクトルールを指定できます。これはすべてのリモート宛先への接続を許可することを意味 します。 設定の各行には、許可または拒否する接続の1つのグループを指定します。

- IP アドレス (例: 192.168.1.1) は該当する IP アドレスへの接続を許可します。
- CIDR 範囲 (例: 192.168.1.0/24)は CIDR 範囲への接続を許可します。
- ホスト名 (例: www.example.com) は該当ホストへのプロキシーを許可します。
- *. が前に付けられているドメイン名 (例: *.example.com) は該当ドメインおよびそのサブドメインのすべてへのプロキシーを許可します。
- 先の一致 (match) 式のいずれかの後に来る!は接続を拒否します。
- 最後の行が*の場合、明示的に拒否されていないすべてのものが許可されます。それ以外の場合、許可されないすべてのものが拒否されます。

*を使用してすべてのリモート宛先への接続を許可することもできます。

設定例

!*.example.com !192.168.1.0/24 192.168.2.1 *

26.11.3. HTTP プロキシーモードでの eqress ルーター Pod のデプロイ

HTTP プロキシーモード では、egress ルーター Pod はポート 8080 で HTTP プロキシーとして実行さ れます。このモードは、HTTP または HTTPS ベースのサービスと通信するクライアントの場合にのみ 機能しますが、通常それらを機能させるのにクライアント Pod への多くの変更は不要です。環境変数 を設定することで、数多くのプログラムは HTTP プロキシーを使用するように指示されます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. egress ルーター Pod の作成
- 2. 他の Pod が egress ルーター Pod の IP アドレスを見つられるようにするには、以下の例のよう に、egress ルーター Pod を参照するサービスを作成します。

apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: egress-1
spec:
ports:
- name: http-proxy
port: 8080 🚺
type: ClusterIP
selector:
name: egress-1

1

http ポートが常に 8080 に設定されていることを確認します。

3. http_proxy または https_proxy 変数を設定して、クライアント Pod (egress プロキシー Pod ではない) を HTTP プロキシーを使用するように設定します。

apiVersion: v1 kind: Pod metadata: name: app-1 labels: name: app-1 spec: containers: env: - name: http_proxy value: http://egress-1:8080/ 1 - name: https_proxy value: http://egress-1:8080/ ... 先の手順で作成したサービス。



注記

すべてのセットアップに http_proxy および https_proxy 環境変数が必要になる 訳ではありません。上記を実行しても作業用セットアップが作成されない場合 は、Pod で実行しているツールまたはソフトウェアについてのドキュメントを参 照してください。

26.11.4. 関連情報

• ConfigMap を使用した egress ルーターの宛先マッピングの設定

26.12. DNS プロキシーモードでの EGRESS ルーター POD のデプロイ

クラスター管理者は、トラフィックを指定された DNS 名および IP アドレスにプロキシーするように設 定された egress ルーター Pod をデプロイできます。

26.12.1. DNS モードの egress ルーター Pod 仕様

Pod オブジェクトで egress ルーター Pod の設定を定義します。以下の YAML は、DNS モードでの egress ルーター Pod の設定のフィールドについて説明しています。

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
name: egress-1
labels:
 name: egress-1
 annotations:
  pod.network.openshift.io/assign-macvlan: "true"
spec:
initContainers:
 - name: egress-router
 image: registry.redhat.io/openshift4/ose-egress-router
  securityContext:
  privileged: true
  env:
  - name: EGRESS SOURCE 2
  value: <egress-router>
  - name: EGRESS_GATEWAY 3
  value: <egress-gateway>
  - name: EGRESS ROUTER MODE
   value: dns-proxy
 containers:
 - name: egress-router-pod
  image: registry.redhat.io/openshift4/ose-egress-dns-proxy
  securityContext:
  privileged: true
  env:
  - name: EGRESS DNS PROXY DESTINATION 4
   value: |-
  - name: EGRESS DNS PROXY DEBUG 5
  value: "1"
  ...
 このアノテーションは、OpenShift Container Platform に対して、プライマリーネットワークイン
 ターフェイスコントローラー (NIC) に macvlan ネットワークインターフェイスを作成し、その
 macvlan インターフェイスを Pod ネットワークの namespace に移動するよう指示します。引用符
 を "true" 値の周囲に含める必要があります。OpenShift Container Platform が別の NIC インター
 フェイスに macvlan インターフェイスを作成するには、アノテーションの値をそのインターフェ
```

イスの名前に設定します。たとえば、eth1 を使用します。

- 2 ノードが置かれている物理ネットワークの IP アドレスは egress ルーター Pod で使用するために 予約されます。オプション: サブネットの長さ /24 接尾辞を組み込み、ローカルサブネットへの適
- ノードで使用されるデフォルトゲートウェイと同じ値です。
- 1つ以上のプロキシー宛先のリストを指定します。
- 「」 オプション: DNS プロキシーログ出力を stdout に出力するために指定します。

26.12.2. egress 宛先設定形式

ルーターが DNS プロキシーモードでデプロイされる場合、ポートおよび宛先マッピングのリストを指定します。宛先には、IP アドレスまたは DNS 名のいずれかを使用できます。

egress ルーター Pod は、ポートおよび宛先マッピングを指定するために以下の形式をサポートします。

ポートおよびリモートアドレス

送信元ポートおよび宛先ホストは、2 つのフィールド形式 (**<port> <remote_address>**)を使用して 指定できます。

ホストには、IP アドレスまたは DNS 名を指定できます。DNS 名を指定すると、DNS 解決が起動時に 行われます。特定のホストについては、プロキシーは、宛先ホスト IP アドレスへの接続時に、宛先ホ ストの指定された送信元ポートに接続されます。

ポートとリモートアドレスペアの例

80 172.16.12.11 100 example.com

ポート、リモートアドレス、およびリモートポート

送信元ポート、宛先ホスト、および宛先ポートは、**<port> <remote_address> <remote_port>**の3 つのフィールドからなる形式を使用して指定できます。

3つのフィールド形式は、2つのフィールドバージョンと同じように動作しますが、宛先ポートが送信 元ポートとは異なる場合があります。

ポート、リモートアドレス、およびリモートポートの例

8080 192.168.60.252 80 8443 web.example.com 443

26.12.3. DNS プロキシーモードでの egress ルーター Pod のデプロイ

DNS プロキシーモード では、egress ルーター Pod は、トラフィックを独自の IP アドレスから1つ以 上の宛先 IP アドレスに送信する TCP ベースのサービスの DNS プロキシーとして機能します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. egress ルーター Pod の作成
- 2. egress ルーター Pod のサービスを作成します。
 - a. 以下の YAML 定義が含まれる egress-router-service.yaml という名前のファイルを作成します。spec.ports を、EGRESS_DNS_PROXY_DESTINATION 環境変数に先に定義したポートの一覧に設定します。

apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: egress-dns-svc
spec:
ports:
type: ClusterIP
selector:
name: egress-dns-proxy

以下に例を示します。

apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: egress-dns-svc spec: ports: - name: con1 protocol: TCP port: 80 targetPort: 80 - name: con2 protocol: TCP port: 100 targetPort: 100 type: ClusterIP selector: name: egress-dns-proxy

b. サービスを作成するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc create -f egress-router-service.yaml

Pod がこのサービスに接続できるようになります。これらの接続は、予約された egress IP アドレスを使用して外部サーバーの対応するポートにプロキシー送信されます。

26.12.4. 関連情報

• ConfigMap を使用した egress ルーターの宛先マッピングの設定

26.13. CONFIG MAP からの EGRESS ルーター POD 宛先一覧の設定

クラスター管理者は、egress ルーター Pod の宛先マッピングを指定する **ConfigMap** オブジェクトを定 義できます。設定の特定の形式は、egress ルーター Pod のタイプによって異なります。形式について の詳細は、特定の egress ルーター Pod のドキュメントを参照してください。

26.13.1. config map を使用した egress ルーター宛先マッピングの設定

宛先マッピングのセットのサイズが大きいか、これが頻繁に変更される場合、config map を使用して一 覧を外部で維持できます。この方法の利点は、ConfigMap を編集するパーミッションを **cluster-admin** 権限を持たないユーザーに委任できることです。egress ルーター Pod には特権付きコンテナーを必要 とするため、**cluster-admin** 権限を持たないユーザーは Pod 定義を直接編集することはできません。



注記

egress ルーター Pod は、config map が変更されても自動的に更新されません。更新を 取得するには、egress ルーター Pod を再起動する必要があります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下の例のように、egress ルーター Pod のマッピングデータが含まれるファイルを作成します。

Egress routes for Project "Test", version 3

80 tcp 203.0.113.25

8080 tcp 203.0.113.26 80 8443 tcp 203.0.113.26 443

Fallback 203.0.113.27

空の行とコメントをこのファイルに追加できます。

2. このファイルから ConfigMap オブジェクトを作成します。

\$ oc delete configmap egress-routes --ignore-not-found

\$ oc create configmap egress-routes \
 --from-file=destination=my-egress-destination.txt

直前のコマンドで、egress-routes 値は、作成する ConfigMap オブジェクトの名前で、myegress-destination.txt はデータの読み取り元のファイルの名前です。

ヒント

または、以下の YAML を適用して config map を作成できます。

apiVersion: v1 kind: ConfigMap metadata: name: egress-routes data: destination: | # Egress routes for Project "Test", version 3 80 tcp 203.0.113.25 8080 tcp 203.0.113.26 80 8443 tcp 203.0.113.26 443 # Fallback 203.0.113.27

3. 6egress ルーター Pod 定義を作成し、environment スタンザの **EGRESS_DESTINATION** フィールドに **configMapKeyRef** スタンザを指定します。

```
...
env:
- name: EGRESS_DESTINATION
valueFrom:
configMapKeyRef:
name: egress-routes
key: destination
...
```

26.13.2. 関連情報

- リダイレクトモード
- HTTP_PROXY
- DNS プロキシーモード

26.14. プロジェクトのマルチキャストの有効化

26.14.1. マルチキャストについて

IP マルチキャストを使用すると、データが多数の IP アドレスに同時に配信されます。



- 重要
 - 現時点で、マルチキャストは低帯域幅の調整またはサービスの検出での使用に最も適しており、高帯域幅のソリューションとしては適していません。
 - デフォルトでは、ネットワークポリシーは namespace 内のすべての接続に影響 します。ただし、マルチキャストはネットワークポリシーの影響を受けません。 マルチキャストがネットワークポリシーと同じ namespace で有効にされている 場合、deny-all ネットワークポリシーがある場合でも、マルチキャストは常に許 可されます。クラスター管理者は、これを有効にする前に、ネットワークポリ シーからマルチキャストが除外されることの影響を考慮する必要があります。

OpenShift Container Platform の Pod 間のマルチキャストトラフィックはデフォルトで無効にされま す。OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用している場合、プロジェクトごとにマルチキャスト を有効にできます。

networkpolicy 分離モードで OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用する場合は、以下を行います。

- Pod によって送信されるマルチキャストパケットは、NetworkPolicy オブジェクトに関係なく、プロジェクトの他のすべての Pod に送信されます。Pod はユニキャストで通信できない場合でもマルチキャストで通信できます。
- 1つのプロジェクトの Pod によって送信されるマルチキャストパケットは、NetworkPolicy オブジェクトがプロジェクト間の通信を許可する場合であっても、それ以外のプロジェクトの Pod に送信されることはありません。

multinenant 分離モードで OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用する場合は、以下を行います。

- Pod で送信されるマルチキャストパケットはプロジェクトにあるその他の全 Pod に送信されます。
- あるプロジェクトの Pod によって送信されるマルチキャストパケットは、各プロジェクトが結合し、マルチキャストが結合した各プロジェクトで有効にされている場合にのみ、他のプロジェクトの Pod に送信されます。

26.14.2. Pod 間のマルチキャストの有効化

プロジェクトの Pod でマルチキャストを有効にすることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

以下のコマンドを実行し、プロジェクトのマルチキャストを有効にします。<namespace>
 を、マルチキャストを有効にする必要のある namespace に置き換えます。

\$ oc annotate netnamespace <namespace> \
 netnamespace.network.openshift.io/multicast-enabled=true

検証

マルチキャストがプロジェクトについて有効にされていることを確認するには、以下の手順を実行しま す。

1. 現在のプロジェクトを、マルチキャストを有効にしたプロジェクトに切り替えます。<project> をプロジェクト名に置き換えます。

```
$ oc project <project>
```

2. マルチキャストレシーバーとして機能する Pod を作成します。

```
$ cat <<EOF| oc create -f -
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
 name: mlistener
 labels:
  app: multicast-verify
spec:
 containers:
  - name: mlistener
   image: registry.access.redhat.com/ubi8
   command: ["/bin/sh", "-c"]
   args:
     ["dnf -y install socat hostname && sleep inf"]
   ports:
     - containerPort: 30102
      name: mlistener
      protocol: UDP
EOF
```

3. マルチキャストセンダーとして機能する Pod を作成します。

```
$ cat <<EOF| oc create -f -
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
    name: msender
    labels:
    app: multicast-verify
spec:
    containers:
        - name: msender
        image: registry.access.redhat.com/ubi8
        command: ["/bin/sh", "-c"]
        args:
        ["dnf -y install socat && sleep inf"]
EOF</pre>
```

- 4. 新しいターミナルウィンドウまたはタブで、マルチキャストリスナーを起動します。
 - a. PodのIPアドレスを取得します。

\$ POD_IP=\$(oc get pods mlistener -o jsonpath='{.status.podIP}')
b. 次のコマンドを入力して、マルチキャストリスナーを起動します。

```
$ oc exec mlistener -i -t -- \
    socat UDP4-RECVFROM:30102,ip-add-membership=224.1.0.1:$POD_IP,fork
EXEC:hostname
```

- 5. マルチキャストトランスミッターを開始します。
 - a. Pod ネットワーク IP アドレス範囲を取得します。

\$ CIDR=\$(oc get Network.config.openshift.io cluster \
 -o jsonpath='{.status.clusterNetwork[0].cidr}')

b. マルチキャストメッセージを送信するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc exec msender -i -t -- \
 /bin/bash -c "echo | socat STDIO UDP4DATAGRAM:224.1.0.1:30102,range=\$CIDR,ip-multicast-ttl=64"

マルチキャストが機能している場合、直前のコマンドは以下の出力を返します。

mlistener

26.15. プロジェクトのマルチキャストの無効化

26.15.1. Pod 間のマルチキャストの無効化

プロジェクトの Pod でマルチキャストを無効にすることができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

• 以下のコマンドを実行して、マルチキャストを無効にします。

\$ oc annotate netnamespace <namespace>\1 netnamespace.network.openshift.io/multicast-enabled-

マルチキャストを無効にする必要のあるプロジェクトの namespace。

26.16. OPENSHIFT SDN を使用したネットワーク分離の設定

クラスターが OpenShift SDN ネットワークプラグインのマルチテナント分離モードを使用するように 設定されている場合、各プロジェクトはデフォルトで分離されます。ネットワークトラフィックは、マ ルチテナント分離モードでは、異なるプロジェクトの Pod およびサービス間で許可されません。

プロジェクトのマルチテナント分離の動作を2つの方法で変更することができます。

- 1つ以上のプロジェクトを結合し、複数の異なるプロジェクトの Pod とサービス間のネット ワークトラフィックを可能にします。
- プロジェクトのネットワーク分離を無効にできます。これはグローバルにアクセスできるようになり、他のすべてのプロジェクトのPodおよびサービスからのネットワークトラフィックを受け入れます。グローバルにアクセス可能なプロジェクトは、他のすべてのプロジェクトのPodおよびサービスにアクセスできます。

26.16.1. 前提条件

マルチテナント分離モードで OpenShift SDN ネットワークプラグインを使用するように設定されたクラスターが必要です。

26.16.2. プロジェクトの結合

2つ以上のプロジェクトを結合し、複数の異なるプロジェクトの Pod とサービス間のネットワークトラフィックを可能にします。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

以下のコマンドを使用して、プロジェクトを既存のプロジェクトネットワークに参加させます。

\$ oc adm pod-network join-projects --to=<project1> <project2> <project3>

または、特定のプロジェクト名を指定する代わりに --selector=<project_selector> オプション を使用し、関連付けられたラベルに基づいてプロジェクトを指定できます。

2. オプション: 以下のコマンドを実行し、結合した Pod ネットワークを表示します。

\$ oc get netnamespaces

同じ Pod ネットワークのプロジェクトには、NETID 列に同じネットワーク ID があります。

26.16.3. プロジェクトの分離

他のプロジェクトの Pod およびサービスがその Pod およびサービスにアクセスできないようにするためにプロジェクトを分離することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

• クラスターのプロジェクトを分離するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc adm pod-network isolate-projects <project1> <project2>

または、特定のプロジェクト名を指定する代わりに --selector=<project_selector> オプション を使用し、関連付けられたラベルに基づいてプロジェクトを指定できます。

26.16.4. プロジェクトのネットワーク分離の無効化

プロジェクトのネットワーク分離を無効にできます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにログインする必要があります。

手順

• プロジェクトの以下のコマンドを実行します。

\$ oc adm pod-network make-projects-global <project1> <project2>

または、特定のプロジェクト名を指定する代わりに --selector=<project_selector> オプション を使用し、関連付けられたラベルに基づいてプロジェクトを指定できます。

26.17. KUBE-PROXY の設定

Kubernetes メットワークプロキシー (kube-proxy) は各ノードで実行され、Cluster Network Operator (CNO) で管理されます。kube-proxy は、サービスに関連付けられたエンドポイントの接続を転送する ためのネットワークルールを維持します。

26.17.1. iptables ルールの同期について

同期の期間は、Kubernetes ネットワークプロキシー (kube-proxy) がノードで iptables ルールを同期す る頻度を定めます。

同期は、以下のイベントのいずれかが生じる場合に開始します。

- サービスまたはエンドポイントのクラスターへの追加、またはクラスターからの削除などのイベントが発生する。
- 最後の同期以後の時間が kube-proxy に定義される同期期間を超過している。

26.17.2. kube-proxy 設定パラメーター

以下の kubeProxyConfig パラメーターを変更することができます。



注記

OpenShift Container Platform 4.3 以降で強化されたパフォーマンスの向上により、**iptablesSyncPeriod** パラメーターを調整する必要はなくなりました。

表26.3 パラメーター

パラメーター	説明	值	デフォ ルト
iptablesSyncPeriod	iptables ルールの更新期間。	30s または 2m などの期間。 有効な接尾辞には、 s、m 、 および h などが含まれ、これ らについては、Go time パッ ケージドキュメントで説明さ れています。	30s
proxyArguments.iptables- min-sync-period	iptables ルールを更新する前 の最小期間。このパラメー ターにより、更新の頻度が高 くなり過ぎないようにできま す。デフォルトで は、iptables ルールに影響す る変更が生じるとすぐに、更 新が開始されます。	30s または 2m などの期間。 有効な接尾辞には、 s、m 、 および h などが含まれ、これ らについては、Go time パッ ケージ で説明されています。	0s

26.17.3. kube-proxy 設定の変化

クラスターの Kubernetes ネットワークプロキシー設定を変更することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin ロールで実行中のクラスターにログインしている。

手順

1. 以下のコマンドを実行して、**Network.operator.openshift.io** カスタムリソース (CR) を編集します。



- 2. 以下のサンプル CR のように、kube-proxy 設定への変更内容で、CR の **kubeProxyConfig** パ ラメーターを変更します。
 - apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: kubeProxyConfig: iptablesSyncPeriod: 30s proxyArguments: iptables-min-sync-period: ["30s"]
- 3. ファイルを保存し、テキストエディターを編集します。

.

構文は、ファイルを保存し、エディターを終了する際に oc コマンドによって検証されます。 変更内容に構文エラーが含まれる場合、エディターはファイルを開き、エラーメッセージを表 示します。

4. 以下のコマンドを実行して、設定の更新を確認します。

\$ oc get networks.operator.openshift.io -o yaml

出力例

```
apiVersion: v1
items:
- apiVersion: operator.openshift.io/v1
 kind: Network
 metadata:
  name: cluster
 spec:
  clusterNetwork:
  - cidr: 10.128.0.0/14
   hostPrefix: 23
  defaultNetwork:
   type: OpenShiftSDN
  kubeProxyConfig:
   iptablesSyncPeriod: 30s
   proxyArguments:
    iptables-min-sync-period:
    - 30s
  serviceNetwork:
  - 172.30.0.0/16
 status: {}
kind: List
```

5. オプション: 以下のコマンドを実行し、Cluster Network Operator が設定変更を受け入れている ことを確認します。

\$ oc get clusteroperator network

出力例

NAME VERSION AVAILABLE PROGRESSING DEGRADED SINCE network 4.1.0-0.9 True False False 1m

設定の更新が正常に適用されると、AVAILABLE フィールドが True になります。

第27章 ルートの作成

27.1. ルート設定

27.1.1. HTTP ベースのルートの作成

ルートを使用すると、公開された URL でアプリケーションをホストできます。これは、アプリケー ションのネットワークセキュリティー設定に応じて、セキュリティー保護または保護なしを指定できま す。HTTP ベースのルートとは、セキュアではないルートで、基本的な HTTP ルーティングプロトコル を使用してセキュリティー保護されていないアプリケーションポートでサービスを公開します。

以下の手順では、**hello-openshift** アプリケーションを例に、Web アプリケーションへのシンプルな HTTP ベースのルートを作成する方法を説明します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- 管理者としてログインしている。
- あるポートを公開する Web アプリケーションと、そのポートでトラフィックをリッスンする TCP エンドポイントがあります。

手順

1. 次のコマンドを実行して、hello-openshift というプロジェクトを作成します。



2. 以下のコマンドを実行してプロジェクトに Pod を作成します。

\$ oc create -f https://raw.githubusercontent.com/openshift/origin/master/examples/helloopenshift/hello-pod.json

3. 以下のコマンドを実行して、hello-openshift というサービスを作成します。

\$ oc expose pod/hello-openshift

4. 次のコマンドを実行して、hello-openshift アプリケーションに対して、セキュアではないルートを作成します。

\$ oc expose svc hello-openshift

検証

作成した route リソースを確認するには、次のコマンドを実行します。

\$ oc get routes -o yaml <name of resource>

この例では、ルートの名前は hello-openshift です。

上記で作成されたセキュアでないルートの YAML 定義

apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
name: hello-openshift
spec:
host: hello-openshift-hello-openshift. <ingress_domain> 1</ingress_domain>
port:
targetPort: 8080 2
to:
kind: Service
name: hello-openshift

<Ingress_Domain> はデフォルトの Ingress ドメイン名です。 ingresses.config/cluster オブジェ クトはインストール中に作成され、変更できません。別のドメインを指定する場合 は、appsDomain オプションを使用して別のクラスタードメインを指定できます。

targetPort は、このルートが指すサービスによって選択される Pod のターゲットポートです。



注記

デフォルトの ingress ドメインを表示するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get ingresses.config/cluster -o jsonpath={.spec.domain}

27.1.2. Ingress Controller シャーディングのルート作成

ルートを使用すると、URL でアプリケーションをホストできます。この場合、ホスト名は設定されず、 ルートは代わりにサブドメインを使用します。サブドメインを指定すると、ルートを公開する Ingress Controller のドメインが自動的に使用されます。ルートが複数の Ingress Controller によって公開されて いる状況では、ルートは複数の URL でホストされます。

以下の手順では、例として **hello-openshift** アプリケーションを使用して、Ingress コントローラー シャーディングのルートを作成する方法について説明します。

Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- プロジェクト管理者としてログインしている。
- あるポートを公開する Web アプリケーションと、そのポートでトラフィックをリッスンする HTTP または TCP エンドポイントがある。
- シャーディング用に Ingress Controller を設定している。

1. 次のコマンドを実行して、hello-openshift というプロジェクトを作成します。

\$ oc new-project hello-openshift

2. 以下のコマンドを実行してプロジェクトに Pod を作成します。

\$ oc create -f https://raw.githubusercontent.com/openshift/origin/master/examples/helloopenshift/hello-pod.json

3. 以下のコマンドを実行して、hello-openshift というサービスを作成します。

\$ oc expose pod/hello-openshift

4. hello-openshift-route.yaml というルート定義を作成します。

シャーディング用に作成されたルートの YAML 定義:

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata: labels: type: sharded 1 name: hello-openshift-edge namespace: hello-openshift spec: subdomain: hello-openshift 2 tls: termination: edge to: kind: Service name: hello-openshift



ラベルキーとそれに対応するラベル値の両方が、Ingress Controller で指定されたものと一 致する必要があります。この例では、Ingress コントローラーにはラベルキーと値 **type:** sharded があります。

- 2 ルートは、subdomain フィールドの値を使用して公開されます。subdomain フィールド を指定するときは、ホスト名を未設定のままにしておく必要があります。host フィールド と subdomain フィールドの両方を指定すると、ルートは host フィールドの値を使用 し、subdomain フィールドを無視します。
- 5. 次のコマンドを実行し、hello-openshift-route.yaml を使用して hello-openshift アプリケー ションへのルートを作成します。

\$ oc -n hello-openshift create -f hello-openshift-route.yaml

検証

次のコマンドを使用して、ルートのステータスを取得します。

\$ oc -n hello-openshift get routes/hello-openshift-edge -o yaml

結果の Route リソースは次のようになります。

出力例

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Boute
metadata:
labels.
type: sharded
name: hello-openshift-edge
namesnace: hello-openshift
snec.
subdomain: hello-openshift
tls.
termination: edge
to:
kind: Service
name: hello-openshift
status:
ingress:
- host: hello-openshift <apps-sharded basedomain="" example="" net=""></apps-sharded>
routerCanonicalHostname: router-sharded <anne-sharded 2<="" basedomain="" example="" nets="" th=""></anne-sharded>
router Names abarded
roulerivame: sharded 3
Ingress Controller またはルーターがルートを公開するために使用するホスト名。 host
フィールドの値は、Ingress コントローラーによって自動的に決定され、そのドメインを
使用します。この例では、Ingress コントローラーのドメインは <apps-< b=""></apps-<>
sharded.basedomain.example.net> です。
Ingress Controller のホスト名。
Ingress Controller の名前。この例では、Ingress コントローラーの名前は sharded です。

27.1.3. ルートのタイムアウトの設定

Service Level Availability (SLA) で必要とされる、低タイムアウトが必要なサービスや、バックエンドでの処理速度が遅いケースで高タイムアウトが必要なサービスがある場合は、既存のルートに対してデフォルトのタイムアウトを設定することができます。

前提条件

• 実行中のクラスターでデプロイ済みの Ingress Controller が必要になります。

手順

1. oc annotate コマンドを使用して、ルートにタイムアウトを追加します。

\$ oc annotate route <route_name> \
 --overwrite haproxy.router.openshift.io/timeout=<timeout><time_unit> 1

- 1
- サポートされる時間単位は、マイクロ秒 (us)、ミリ秒 (ms)、秒 (s)、分 (m)、時間 (h)、または日 (d) です。

以下の例では、2 秒のタイムアウトを myroute という名前のルートに設定します。

\$ oc annotate route myroute --overwrite haproxy.router.openshift.io/timeout=2s

27.1.4. HTTP Strict Transport Security

HTTP Strict Transport Security (HSTS) ポリシーは、HTTPS トラフィックのみがルートホストで許可 されるブラウザークライアントに通知するセキュリティーの拡張機能です。また、HSTS は、HTTP リ ダイレクトを使用せずに HTTPS トランスポートにシグナルを送ることで Web トラフィックを最適化し ます。HSTS は Web サイトとの対話を迅速化するのに便利です。

HSTS ポリシーが適用されると、HSTS はサイトから Strict Transport Security ヘッダーを HTTP およ び HTTPS 応答に追加します。HTTP を HTTPS にリダイレクトするルートで insecureEdgeTerminationPolicy 値を使用できます。HSTS を強制している場合は、要求の送信前に クライアントがすべての要求を HTTP URL から HTTPS に変更するため、リダイレクトの必要がなくな ります。

クラスター管理者は、以下を実行するために HSTS を設定できます。

- ルートごとに HSTS を有効にします。
- ルートごとに HSTS を無効にします。
- ドメインごとに HSTS を適用するか、ドメインと組み合わせた namespace ラベルを使用しま す。



重要

HSTS はセキュアなルート (edge-termination または re-encrypt) でのみ機能します。こ の設定は、HTTP またはパススルールートには適していません。

27.1.4.1. ルートごとの HTTP Strict Transport Security の有効化

HTTP 厳密なトランスポートセキュリティー (HSTS) は HAProxy テンプレートに実装さ れ、haproxy.router.openshift.io/hsts header アノテーションを持つ edge および re-encrypt ルート に適用されます。

前提条件

- プロジェクトの管理者権限があるユーザーで、クラスターにログインしている。
- oc CLI をインストールしていること。

手順

• ルートで HSTS を有効にするには、haproxy.router.openshift.io/hsts header 値を edgetermed または re-encrypt ルートに追加します。これを実行するには、oc annotate ツールを 使用してこれを実行できます。

\$ oc annotate route <route name> -n <namespace> --overwrite=true "haproxy.router.openshift.io/hsts_header"="max-age=31536000;\ includeSubDomains;preload"

この例では、最長期間は 31536000 ミリ秒(約8時間および半分)に設定されます。



この例では、等号 (=) が引用符で囲まれています。これは、annotate コマンド を正しく実行するために必要です。

アノテーションで設定されたルートの例

注記

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata:

annotations:

haproxy.router.openshift.io/hsts_header: max-age=31536000;includeSubDomains;preload

... spec: host: def.abc.com tls: termination: "reencrypt"

wildcardPolicy: "Subdomain"



必須。**max-age** は、HSTS ポリシーが有効な期間 (秒単位) を測定します。**0** に設定する と、これはポリシーを無効にします。



3

オプション: **includeSubDomains** は、クライアントに対し、ホストのすべてのサブドメインにホストと同じ HSTS ポリシーを持つ必要があることを指示します。

オプション: max-age が 0 より大きい場合、preload を haproxy.router.openshift.io/hsts_header に追加し、外部サービスがこのサイトをそれ ぞれの HSTS プリロード一覧に含めることができます。たとえば、Google などのサイト は preload が設定されているサイトの一覧を作成します。ブラウザーはこれらのリストを 使用し、サイトと対話する前でも HTTPS 経由で通信できるサイトを判別できま す。preload を設定していない場合、ブラウザーはヘッダーを取得するために、HTTPS を介してサイトと少なくとも1回対話している必要があります。

27.1.4.2. ルートごとの HTTP Strict Transport Security の無効化

ルートごとに HSTS (HTTP Strict Transport Security) を無効にするには、ルートアノテーションの **max-age** の値を **0** に設定します。

前提条件

- プロジェクトの管理者権限があるユーザーで、クラスターにログインしている。
- oc CLI をインストールしていること。

手順

 HSTS を無効にするには、以下のコマンドを入力してルートアノテーションの max-age の値を 0 に設定します。

\$ oc annotate route <route_name> -n <namespace> --overwrite=true "haproxy.router.openshift.io/hsts_header"="max-age=0"

ヒント

または、以下の YAML を適用して config map を作成できます。

ルートごとに HSTS を無効にする例

metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/hsts_header: max-age=0

• namespace のすべてのルートで HSTS を無効にするには、following コマンドを入力します。

\$ oc annotate route --all -n <namespace> --overwrite=true "haproxy.router.openshift.io/hsts_header"="max-age=0"

検証

1. すべてのルートのアノテーションをクエリーするには、以下のコマンドを入力します。

 $\label{eq:started_s$

出力例

Name: routename HSTS: max-age=0

27.1.4.3. ドメインごとに HTTP Strict Transport Security の強制

安全なルートのドメインごとに HTTPStrict Transport Security(HSTS) を適用するに は、**requiredHSTSPolicies** レコードを Ingress 仕様に追加して、HSTS ポリシーの設定を取得しま す。

requiredHSTSPolicy を設定して HSTS を適用する場合は、新規に作成されたルートは準拠された HSTS ポリシーアノテーションで設定する必要があります。



注記

準拠しない HSTS ルートを持つアップグレードされたクラスターを処理するには、ソー スでマニフェストを更新し、更新を適用できます。



注記

oc expose route コマンドまたは oc create route コマンドを使用して、HSTS を強制す るドメインにルートを追加することはできません。このコマンドの API はアノテーショ ンを受け入れないためです。



重要

HSTS がすべてのルートに対してグローバルに要求されている場合でも、セキュアではないルートや非 TLS ルートに適用することはできません。

前提条件

- プロジェクトの管理者権限があるユーザーで、クラスターにログインしている。
- oc CLI をインストールしていること。

手順

1. Ingress 設定ファイルを編集します。

\$ oc edit ingresses.config.openshift.io/cluster

HSTS ポリシーの例

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Ingress
metadata:
 name: cluster
spec:
 domain: 'hello-openshift-default.apps.username.devcluster.openshift.com'
 requiredHSTSPolicies: 1
 - domainPatterns: 2
  - '*hello-openshift-default.apps.username.devcluster.openshift.com'
  - '*hello-openshift-default2.apps.username.devcluster.openshift.com'
  namespaceSelector: 3
   matchLabels:
    myPolicy: strict
  maxAge: 4
   smallestMaxAge: 1
   largestMaxAge: 31536000
  preloadPolicy: RequirePreload 5
  includeSubDomainsPolicy: RequireIncludeSubDomains 6
 - domainPatterns: 7
  - 'abc.example.com'
  - '*xyz.example.com'
  namespaceSelector:
   matchLabels: {}
  maxAge: {}
  preloadPolicy: NoOpinion
  includeSubDomainsPolicy: RequireNoIncludeSubDomains
```



必須。requiredHSTSPolicies は順番に検証され、最初に一致する domainPatterns が適 用されます。

- ンジョンングングであります。任意の数のドメント名を指定する必要があります。任意の数のドメインをリスト表示できます。さまざまな domainPatterns について、Enforcing オプションの複数のセクションを含めることができます。
- 3 オプション: namespaceSelector を含める場合、ルートを配置するプロジェクトのラベル と一致する必要があります。これにより、ルートに設定された HSTS ポリシーを適用する 必要があります。domainPatterns ではなく namespaceSelector のみに一致するルート は検証されません。

必須。max-age は、HSTS ポリシーが有効な期間 (秒単位) を測定します。このポリシー 設定により、最小および最大の max-age を適用することができます。

- largestMaxAgeの値は0から2147483647の範囲内で指定する必要があります。これ を指定しないと、上限が強制されないことを意味します。
- smallestMaxAge の値は 0 から 2147483647 の範囲内で指定する必要があります。トラブルシューティングのために HSTS を無効にするには、0 を入力します。HSTS を 無効にする必要がない場合は1を入力します。これを指定しないと、下限が強制されません。
- 5

オプション: haproxy.router.openshift.io/hsts_header に preload を含めることで、外部 サービスがこのサイトをそれぞれの HSTS プリロード一覧に含めることができます。ブラ ウザーはこれらの一覧を使用し、サイトと対話する前でも HTTPS 経由で通信できるサイ トを判別できます。preload 設定がない場合、ブラウザーは少なくともサイトと通信して ヘッダーを取得する必要があります。preload は、以下のいずれかで設定できます。

- RequirePreload: preload は RequiredHSTSPolicy で必要になります。
- RequireNoPreload: preload は RequiredHSTSPolicy によって禁止されます。
- NoOpinion: preload は RequiredHSTSPolicy に重要ではありません。
- オプション: includeSubDomainsPolicy は、以下のいずれかで設定できます。
 - RequireIncludeSubDomains: includeSubDomains は RequiredHSTSPolicy で必要 です。
 - RequireNoIncludeSubDomains: includeSubDomains は RequiredHSTSPolicy に よって禁止されています。
- NoOpinion: includeSubDomains は RequiredHSTSPolicy に重要ではありません。
- 2. **oc annotate command** を入力して、HSTS をクラスターのすべてのルートまたは特定の namespace に適用することができます。
 - HSTS をクラスターのすべてのルートに適用するには、oc annotate command を実行します。以下に例を示します。

\$ oc annotate route --all --all-namespaces --overwrite=true "haproxy.router.openshift.io/hsts_header"="max-age=31536000"

 特定の namespace のすべてのルートに HSTS を適用するには、oc annotate command を 実行します。以下に例を示します。

\$ oc annotate route --all -n my-namespace --overwrite=true "haproxy.router.openshift.io/hsts_header"="max-age=31536000"

検証

設定した HSTS ポリシーを確認できます。以下に例を示します。

• 必要な HSTS ポリシーの maxAge セットを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get clusteroperator/ingress -n openshift-ingress-operator -o jsonpath='{range .spec.requiredHSTSPolicies[*]}{.spec.requiredHSTSPolicies.maxAgePolicy.largestMaxAge} {"\n"}{end}'

すべてのルートで HSTS アノテーションを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get route --all-namespaces -o go-template='{{range .items}}{{if .metadata.annotations}} {{\$a := index .metadata.annotations "haproxy.router.openshift.io/hsts header"}}{{\$n := .metadata.name}}{{with \$a}}Name: {{\$n}} HSTS: {{\$a}}{{"\n"}}{{else}}{{""}}{{end}}} {{end}}'

出力例

Name: < routename > HSTS: max-age=31536000;preload;includeSubDomains

27.1.5. スループットの問題のトラブルシューティング方法

OpenShift Container Platform でデプロイされるアプリケーションでは、特定のサービス間で非常に長 い待ち時間が発生するなど、ネットワークのスループットの問題が生じることがあります。

Pod のログが問題の原因を指摘しない場合は、以下の方法を使用してパフォーマンスの問題を分析しま す。

• ping または tcpdump などのパケットアナライザーを使用して Pod とそのノード間のトラ フィックを分析します。 たとえば、問題を生じさせる動作を再現している間に各ノードで tcpdump ツールを実行 しま す。両サイトでキャプチャーしたデータを確認し、送信および受信タイムスタンプを比較して Pod への/からのトラフィックの待ち時間を分析します。待ち時間は、ノードのインターフェイ スが他の Pod やストレージデバイス、またはデータプレーンからのトラフィックでオーバー ロードする場合に OpenShift Container Platform で発生する可能性があります。

\$ tcpdump -s 0 -i any -w /tmp/dump.pcap host <podip 1> && host <podip 2> 1



podip は Pod の IP アドレスです。 oc get pod <pod_name> -o wide コマンドを実行して Pod の IP アドレスを取得します。

tcpdumpは、これらの2つのPod間のすべてのトラフィックが含まれる /tmp/dump.pcapの ファイルを生成します。ファイルサイズを最小限に抑えるために問題を再現するすぐ前と問題 を再現したすぐ後ににアナライザーを実行することが良いでしょう。以下のように ノード間で パケットアナライザーを実行することもできます (式から SDN を排除する)。

\$ tcpdump -s 0 -i any -w /tmp/dump.pcap port 4789

- ストリーミングのスループットおよび UDP スループットを測定するために iperf などの帯域幅 測定ツールを使用します。最初に Pod からツールを実行し、次にノードから実行して、ボトル ネックを特定します。
 - o iperf のインストールおよび使用についての詳細は、こちらの Red Hat ソリューション を 参照してください。
- 場合によっては、レイテンシーの問題が原因で、クラスターがルーター Pod を含むノードを異 常としてマークすることがあります。ワーカーレイテンシープロファイルを使用して、アク

ションを実行する前にクラスターがノードからステータスの最新情報を受け取る頻度を調節します。

 クラスターでレイテンシーの低いノードとレイテンシーの高いノードが指定されている場合 は、Ingress コントローラーの spec.nodePlacement フィールドを設定して、ルーター Pod の 配置を制御します。

関連情報

- リモートワーカーへのレイテンシーの急上昇またはスループットの一時的な低下
- Ingress Controller 設定パラメーター

27.1.6. Cookie の使用によるルートのステートフル性の維持

OpenShift Container Platform は、すべてのトラフィックを同じエンドポイントにヒットさせることに よりステートフルなアプリケーションのトラフィックを可能にするスティッキーセッションを提供しま す。ただし、エンドポイント Pod が再起動、スケーリング、または設定の変更などによって終了する 場合、このステートフル性はなくなります。

OpenShift Container Platform は Cookie を使用してセッションの永続化を設定できます。Ingress Controller はユーザー要求を処理するエンドポイントを選択し、そのセッションの Cookie を作成しま す。Cookie は要求の応答として戻され、ユーザーは Cookie をセッションの次の要求と共に送り返しま す。Cookie は Ingress Controller に対し、セッションを処理しているエンドポイントを示し、クライア ント要求が Cookie を使用して同じ Pod にルーティングされるようにします。



注記

cookie は、HTTP トラフィックを表示できないので、パススルールートで設定できません。代わりに、ソース IP アドレスをベースに数が計算され、バックエンドを判断します。

バックエンドが変わると、トラフィックが間違ったサーバーに転送されてしまい、ス ティッキーではなくなります。ソース IP を非表示にするロードバランサーを使用してい る場合は、すべての接続に同じ番号が設定され、トラフィックは同じ Pod に送られま す。

27.1.6.1. Cookie を使用したルートのアノテーション

ルート用に自動生成されるデフォルト名を上書きするために Cookie 名を設定できます。これにより、 ルートトラフィックを受信するアプリケーションが Cookie 名を認識できるようになります。Cookie を 削除すると、次の要求でエンドポイントの再選択が強制的に実行される可能性があります。そのため サーバーがオーバーロードしている場合には、クライアントからの要求を取り除き、それらの再分配を 試行します。

手順

1. 指定される cookie 名でルートにアノテーションを付けます。

\$ oc annotate route <route_name> router.openshift.io/cookie_name="<cookie_name>"

ここでは、以下のようになります。

<route_name>

Pod の名前を指定します。

<cookie_name>

cookie の名前を指定します。

たとえば、ルート **my_route** に cookie 名 **my_cookie** でアノテーションを付けるには、以下を 実行します。

\$ oc annotate route my_route router.openshift.io/cookie_name="my_cookie"

2. 変数でルートのホスト名を取得します。

\$ ROUTE_NAME=\$(oc get route <route_name> -o jsonpath='{.spec.host}')

ここでは、以下のようになります。

<route_name>

Pod の名前を指定します。

3. cookie を保存してからルートにアクセスします。

\$ curl \$ROUTE_NAME -k -c /tmp/cookie_jar

ルートに接続する際に、直前のコマンドによって保存される cookie を使用します。

\$ curl \$ROUTE_NAME -k -b /tmp/cookie_jar

27.1.7. パスベースのルート

パスベースのルートは、URL に対して比較できるパスコンポーネントを指定します。この場合、ルート のトラフィックは HTTP ベースである必要があります。そのため、それぞれが異なるパスを持つ同じホ スト名を使用して複数のルートを提供できます。ルーターは、最も具体的なパスの順に基づいてルート と一致する必要があります。

以下の表は、ルートのサンプルおよびそれらのアクセシビリティーを示しています。

表27.1ルートの可用性

ルート	比較対象	アクセス可能
www.example.com/test	www.example.com/test	はい
	www.example.com	いいえ
www.example.com/test および www.example.com	www.example.com/test	はい
	www.example.com	はい
www.example.com	www.example.com/text	Yes (ルートではなく、ホストで 一致)

ルート	比較対象	アクセス可能
	www.example.com	はい

パスが1つでセキュリティー保護されていないルート

apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
name: route-unsecured
spec:
host: www.example.com
path: "/test" 1
to:
kind: Service
name: service-name



パスは、パスベースのルートに唯一追加される属性です。



注記

ルーターは TLS を終了させず、要求のコンテンツを読み込みことができないので、パス ベースのルーティングは、パススルー TLS を使用する場合には利用できません。

27.1.8. ルート固有のアノテーション

Ingress Controller は、公開するすべてのルートのデフォルトオプションを設定できます。個別のルート は、アノテーションに個別の設定を指定して、デフォルトの一部を上書きできます。Red Hat では、 ルートアノテーションの Operator 管理ルートへの追加はサポートしません。



重要

複数のソース IP またはサブネットのホワイトリストを作成するには、スペースで区切ら れたリストを使用します。他の区切りタイプを使用すると、リストが警告やエラーメッ セージなしに無視されます。

表27.2 ルートアノテーション

変数	説明	デフォルトで使用される環境変数
haproxy.router.openshift.io/b alance	ロードバランシングアルゴリズム を設定します。使用できるオプ ションは、random、 source、roundrobin、および leastconn です。デフォルト値 は、TLS パススルールートの場 合、source です。他のすべての ルートの場合、デフォルトは random です。	パススルールートの ROUTER_TCP_BALANCE_S CHEME です。それ以外の場合は ROUTER_LOAD_BALANCE_ ALGORITHM を使用します。

変数	説明	デフォルトで使用される環境変数
haproxy.router.openshift.io/d isable_cookies	関連の接続を追跡する cookie の 使用を無効にします。'true' また は 'TRUE' に設定する場合は、分 散アルゴリズムを使用して、受信 する HTTP 要求ごとに、どのバッ クエンドが接続を提供するかを選 択します。	
router.openshift.io/cookie_n ame	このルートに使用するオプション の cookie を指定します。名前 は、大文字、小文字、数字、"_" または "-" を任意に組み合わせて 指定する必要があります。デフォ ルトは、ルートのハッシュ化され た内部キー名です。	
haproxy.router.openshift.io/p od-concurrent-connections	ルーターからバッキングされる Pod に対して許容される接続最大 数を設定します。 注意: Pod が複数ある場合には、 それぞれに対応する接続数を設定 できます。複数のルーターがある 場合は、それらのルーター間で調 整は行われず、それぞれがこれに 複数回接続する可能性がありま す。設定されていない場合または 0 に設定されている場合には制限 はありません。	
haproxy.router.openshift.io/r ate-limit-connections	'true' または 'TRUE' を設定する と、ルートごとに特定のバックエ ンドの stick-tables で実装される レート制限機能が有効になりま す。 注記: このアノテーションを使用 すると、サービス拒否攻撃に対す る基本的な保護が提供されます。	
haproxy.router.openshift.io/r ate-limit- connections.concurrent-tcp	同じソース IP アドレスで行われ る同時 TCP 接続の数を制限しま す。数値を受け入れます。 注記: このアノテーションを使用 すると、サービス拒否攻撃に対す る基本的な保護が提供されます。	

変数	説明	デフォルトで使用される環境変数
haproxy.router.openshift.io/r ate-limit-connections.rate- http	同じソース IP アドレスを持つク ライアントが HTTP 要求を実行で きるレートを制限します。数値を 受け入れます。 注記: このアノテーションを使用 すると、サービス拒否攻撃に対す る基本的な保護が提供されます。	
haproxy.router.openshift.io/r ate-limit-connections.rate- tcp	同じソース IP アドレスを持つク ライアントが TCP 接続を確立す るレートを制限します。数値を受 け入れます。 注記: このアノテーションを使用 すると、サービス拒否攻撃に対す る基本的な保護が提供されます。	
haproxy.router.openshift.io/ti meout	ルートのサーバー側のタイムアウ トを設定します。(TimeUnits)	ROUTER_DEFAULT_SERVE R_TIMEOUT
haproxy.router.openshift.io/ti meout-tunnel	このタイムアウトは、クリアテキ スト、エッジ、再暗号化、または パススルーのルートを介した WebSocket などトンネル接続に 適用されます。cleartext、 edge、または reencrypt のルート タイプでは、このアノテーション は、タイムアウト値がすでに存在 するタイムアウトトンネルとして 適用されます。パススルーのルー トタイプでは、アノテーションは 既存のタイムアウト値の設定より も優先されます。	ROUTER_DEFAULT_TUNNE L_TIMEOUT
ingresses.config/cluster ingress.operator.openshift.io /hard-stop-after	設定できるのは、 IngressController または ingress config です。このアノテーション では、ルーターを再デプロイし、 HA プロキシーが haproxy hard- stop-after グローバルオプショ ンを実行するように設定します。 このオプションは、クリーンなソ フトストップの実行に許容される 最大時間を定義します。	ROUTER_HARD_STOP_AFT ER
router.openshift.io/haproxy.h ealth.check.interval	バックエンドのヘルスチェックの 間隔を設定します。(TimeUnits)	ROUTER_BACKEND_CHEC K_INTERVAL

変数	説明	デフォルトで使用される環境変数
haproxy.router.openshift.io/i p_whitelist	ルートの許可リストを設定しま す。許可リストは、承認したソー スアドレスの IP アドレスおよび CIDR 範囲のリストをスペース区 切りにしたリストです。許可リス トに含まれていない IP アドレス からの要求は破棄されます。 haproxy.config ファイルで直接 表示される IP アドレスと CIDR 範 囲の最大数は 61 です [¹]。	
haproxy.router.openshift.io/h sts_header	edge terminated または re- encrypt ルートの Strick- Transport-Security ヘッダーを設 定します。	
haproxy.router.openshift.io/r ewrite-target	バックエンドの要求の書き換えパ スを設定します。	
router.openshift.io/cookie- same-site	Cookie を制限するために値を設 定します。値は以下のようになり ます。 Lax: ブラウザーは、クロスサイ ト要求では Cookie を送信しませ んが、ユーザーが外部サイトから 元のサイトに移動するときに Cookie を送信します。これは、 SameSite 値が指定されていない 場合のブラウザーのデフォルトの 動作です。 Strict: ブラウザーは、同じサイト のリクエストに対してのみ Cookie を送信します。 None: ブラウザーは、クロスサイ ト要求と同一サイト要求の両方に 対して Cookie を送信します。 この値は、re-encrypt および edge ルートにのみ適用されま す。詳細は、SameSite cookie の ドキュメント を参照してくださ い。	

変数	説明	デフォルトで使用される環境変数
haproxy.router.openshift.io/s et-forwarded-headers	ルートごとに Forwarded および X-Forwarded-For HTTP ヘッ ダーを処理するポリシーを設定し ます。値は以下のようになりま す。	ROUTER_SET_FORWARDE D_HEADERS
	append : ヘッダーを追加し、既 存のヘッダーを保持します。これ はデフォルト値です。	
	Replace : ヘッダーを設定し、既 存のヘッダーを削除します。	
	never : ヘッダーを設定しません が、既存のヘッダーを保持しま す。	
	if-none : ヘッダーがまだ設定され ていない場合にこれを設定しま す。	

許可リストの IP アドレスと CIDR 範囲の数が 61 を超えると、それらは別のファイルに書き込まれます。このファイルは haproxy.config から参照されます。このファイルは、var/lib/haproxy/router/whitelists フォルダーに保存されます。



注記

アドレスが許可リストに書き込まれることを確認するには、CIDR 範囲の完全な リストが Ingress Controller 設定ファイルに記載されていることを確認します。 etcd オブジェクトサイズ制限は、ルートアノテーションのサイズを制限しま す。このため、許可リストに追加できる IP アドレスと CIDR 範囲の最大数のし きい値が作成されます。

注記

環境変数を編集することはできません。

ルータータイムアウト変数

TimeUnits は数字、その後に単位を指定して表現します。**us***(マイクロ秒)、**ms**(ミリ秒、デフォルト)、**s**(秒)、**m**(分)、**h***(時間)、**d**(日)

正規表現: [1-9][0-9]*(us\|ms\|s\|m\|h\|d)

変数	デフォルト	説明
ROUTER_BACKEND_CHECK_INTE RVAL	5000ms	バックエンドでの後続の liveness チェッ クの時間の長さ。

変数	デフォルト	説明
ROUTER_CLIENT_FIN_TIMEOUT	1s	クライアントがルートに接続する場合の TCP FIN タイムアウトの期間を制御しま す。接続切断のために送信された FIN が 指定の時間内に応答されない場合は、 HAProxy が接続を切断します。小さい値 を設定し、ルーターでリソースをあまり 使用していない場合には、リスクはあり ません。
ROUTER_DEFAULT_CLIENT_TIME OUT	30s	クライアントがデータを確認するか、送 信するための時間の長さ。
ROUTER_DEFAULT_CONNECT_TI MEOUT	5s	最大接続時間。
ROUTER_DEFAULT_SERVER_FIN_ TIMEOUT	1s	ルーターからルートをバッキングする Pod の TCP FIN タイムアウトを制御しま す。
ROUTER_DEFAULT_SERVER_TIME OUT	30s	サーバーがデータを確認するか、送信す るための時間の長さ。
ROUTER_DEFAULT_TUNNEL_TIME OUT	1h	TCP または WebSocket 接続が開放され た状態で保つ時間数。このタイムアウト 期間は、HAProxy が再読み込みされるた びにリセットされます。
ROUTER_SLOWLORIS_HTTP_KEE PALIVE	300s	 新しい HTTP 要求が表示されるまで待機 する最大時間を設定します。この値が低 すぎる場合には、ブラウザーおよびアプ リケーションの keepalive 値が低くなり すぎて、問題が発生する可能性がありま す。 有効なタイムアウト値には、想定した個 別のタイムアウトではなく、特定の変数 を合計した値に指定することができま す。たとえ ば、ROUTER_SLOWLORIS_HTTP_ KEEPALIVE は、timeout http-keep- alive を調整します。HAProxy はデフォ ルトで 300s に設定されていますが、 HAProxy は tcp-request inspect- delay も待機します。これは5s に設定さ れています。この場合、全体的なタイム アウトは 300s に 5s を加えたことになり ます。

変数	デフォルト	説明
ROUTER_SLOWLORIS_TIMEOUT	10s	HTTP 要求の伝送にかかる時間。
RELOAD_INTERVAL	5s	ルーターがリロードし、新規の変更を受 け入れる最小の頻度を許可します。
ROUTER_METRICS_HAPROXY_TIM EOUT	5s	HAProxy メトリクスの収集タイムアウ ト。

ルート設定のカスタムタイムアウト

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/timeout: 5500ms 1 ...

1

HAProxy 対応の単位 (**us、ms、s、 m、h、d**) で新規のタイムアウトを指定します。単位が指定 されていない場合は、**ms** がデフォルトになります。



注記

パススルールートのサーバー側のタイムアウト値を低く設定し過ぎると、WebSocket 接 続がそのルートで頻繁にタイムアウトする可能性があります。

特定の IP アドレスを1つだけ許可するルート

metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/ip_whitelist: 192.168.1.10

複数の IP アドレスを許可するルート

metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/ip_whitelist: 192.168.1.10 192.168.1.11 192.168.1.12

IP アドレスの CIDR ネットワークを許可するルート

metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/ip_whitelist: 192.168.1.0/24

IP アドレスと IP アドレスの CIDR ネットワークの両方を許可するルート

metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/ip_whitelist: 180.5.61.153 192.168.1.0/24 10.0.0.0/8

書き換えターゲットを指定するルート

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata: annotations: haproxy.router.openshift.io/rewrite-target: / 1 ...

バックエンドの要求の書き換えパスとして / を設定します。

ルートに haproxy.router.openshift.io/rewrite-target アノテーションを設定すると、要求をバックエン ドアプリケーションに転送する前に Ingress コントローラーがこのルートを使用して HTTP 要求のパス を書き換える必要があることを指定します。spec.path で指定されたパスに一致する要求パスの一部 は、アノテーションで指定された書き換えターゲットに置き換えられます。

以下の表は、**spec.path**、要求パス、および書き換えターゲットの各種の組み合わせについてのパスの 書き換え動作の例を示しています。

表27.3 rewrite-target の例:

Route.spec.path	要求パス	書き換えターゲット	転送された要求パス
/foo	/foo	/	/
/foo	/foo/	/	/
/foo	/foo/bar	/	/bar
/foo	/foo/bar/	/	/bar/
/foo	/foo	/bar	/bar
/foo	/foo/	/bar	/bar/
/foo	/foo/bar	/baz	/baz/bar
/foo	/foo/bar/	/baz	/baz/bar/
/foo/	/foo	/	該当なし (要求パスが ルートパスに一致しな い)
/foo/	/foo/	/	/

Route.spec.path	要求パス	書き換えターゲット	転送された要求パス
/foo/	/foo/bar	/	/bar

27.1.9. ルートの受付ポリシーの設定

管理者およびアプリケーション開発者は、同じドメイン名を持つ複数の namespace でアプリケーショ ンを実行できます。これは、複数のチームが同じホスト名で公開されるマイクロサービスを開発する組 織を対象としています。



警告

複数の namespace での要求の許可は、namespace 間の信頼のあるクラスターに対してのみ有効にする必要があります。有効にしないと、悪意のあるユーザーがホスト名を乗っ取る可能性があります。このため、デフォルトの受付ポリシーは複数の namespace 間でのホスト名の要求を許可しません。

前提条件

• クラスター管理者の権限。

手順

 以下のコマンドを使用して、ingresscontroller リソース変数の .spec.routeAdmission フィー ルドを編集します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default --patch '{"spec": {"routeAdmission":{"namespaceOwnership":"InterNamespaceAllowed"}}}' --type=merge

イメージコントローラー設定例

spec: routeAdmission: namespaceOwnership: InterNamespaceAllowed

ヒント

または、以下の YAML を適用してルートの受付ポリシーを設定できます。

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
routeAdmission:
namespaceOwnership: InterNamespaceAllowed
```

27.1.10. Ingress オブジェクトを使用したルートの作成

ー部のエコシステムコンポーネントには Ingress リソースとの統合機能がありますが、ルートリソース とは統合しません。これに対応するために、OpenShift Container Platform は Ingress オブジェクトの 作成時に管理されるルートオブジェクトを自動的に作成します。これらのルートオブジェクトは、対応 する Ingress オブジェクトが削除されると削除されます。

手順

 OpenShift Container Platform コンソールで Ingress オブジェクトを定義するか、oc create コ マンドを実行します。

Ingress の YAML 定義

apiVersion: networking.k8s.io/v1
metadata:
name: frontend
annotations:
route.openshift.io/termination: "reencrypt"
route.openshift.io/destination-ca-certificate-secret: secret-ca-cert 2
spec:
rules:
- host: www.example.com 3
http:
paths:
- backend:
service:
name: frontend
port:
number: 443
path: /
pathType: Prefix
tls:
- hosts:
- www.example.com
secretName: example-com-tls-certificate

route.openshift.io/termination アノテーションは、Route の spec.tls.termination フィールドを設定するために使用できます。Ingress にはこのフィールドがありません。 許可される値は edge、passthrough、および reencrypt です。その他のすべての値は警 告なしに無視されます。アノテーション値が設定されていない場合は、edge がデフォルトルートになります。デフォルトのエッジルートを実装するには、TLS 証明書の詳細をテンプレートファイルで定義する必要があります。

3

Ingress オブジェクトを操作する場合、ルートを操作する場合とは異なり、明示的なホス ト名を指定する必要があります。<host_name>.<cluster_ingress_domain> 構文 (apps.openshiftdemos.com など)を使用して、*.<cluster_ingress_domain> ワイルド カード DNS レコードとクラスターのサービング証明書を利用できます。それ以外の場合 は、選択したホスト名の DNS レコードがあることを確認する必要があります。

a. route.openshift.io/termination アノテーションで passthrough の値を指定する場合 は、仕様で path を " に設定し、pathType を ImplementationSpecific に設定しま す。

spec:
rules:
 host: www.example.com
http:
paths:
- path: "
pathType: ImplementationSpecific
backend:
service:
name: frontend
port:
number: 443

\$ oc apply -f ingress.yaml



route.openshift.io/destination-ca-certificate-secret を lngress オブジェクトで使用して、カスタム宛先証明書 (CA) でルートを定義できます。アノテーションは、生成されたルートに挿入される kubernetes シークレット **secret-ca-cert** を参照します。

- a. Ingress オブジェクトから宛先 CA を使用してルートオブジェクトを指定するには、 シークレットの data.tls.crt 指定子に PEM エンコード形式の証明書を使用して kubernetes.io/tls または Opaque タイプのシークレットを作成する必要があります。
- 2. ルートを一覧表示します。

\$ oc get routes

結果には、frontend-で始まる名前の自動生成ルートが含まれます。

NAMEHOST/PORTPATHSERVICESPORTTERMINATIONWILDCARDfrontend-gnztqwww.example.comfrontend443reencrypt/RedirectNone

このルートを検査すると、以下のようになります。

自動生成されるルートの YAML 定義

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route

metadata: name: frontend-gnztq ownerReferences: apiVersion: networking.k8s.io/v1 controller: true kind: Ingress name: frontend uid: 4e6c59cc-704d-4f44-b390-617d879033b6 spec: host: www.example.com path: / port: targetPort: https tls: certificate: | -----BEGIN CERTIFICATE-----[...] -----END CERTIFICATE----insecureEdgeTerminationPolicy: Redirect kev: -----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----[...] -----END RSA PRIVATE KEY----termination: reencrypt destinationCACertificate: | -----BEGIN CERTIFICATE-----[...] -----END CERTIFICATE----to: kind: Service name: frontend

27.1.11. Ingress オブジェクトを介してデフォルトの証明書を使用してルートを作成する

TLS 設定を指定せずに Ingress オブジェクトを作成すると、OpenShift Container Platform は安全でな いルートを生成します。デフォルトの Ingress 証明書を使用してセキュアなエッジ終端ルートを生成す る Ingress オブジェクトを作成するには、次のように空の TLS 設定を指定できます。

前提条件

- 公開したいサービスがあります。
- OpenShift CLI (oc) にアクセスできる。

手順

1. Ingress オブジェクトの YAML ファイルを作成します。この例では、ファイルの名前は example-ingress.yaml です。

Ingress オブジェクトの YAML 定義

apiVersion: networking.k8s.io/v1 kind: Ingress metadata:



2. 次のコマンドを実行して、Ingress オブジェクトを作成します。

\$ oc create -f example-ingress.yaml

検証

 以下のコマンドを実行して、OpenShift Container Platform が Ingress オブジェクトの予期され るルートを作成したことを確認します。

\$ oc get routes -o yaml

出力例

	apiVersion: v1 items: - apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata: name: frontend-j9sdd 1
	spec: tls: 2 insecureEdgeTerminationPolicy: Redirect
1	ルートの名前には、Ingress オブジェクトの名前とそれに続くランダムな接尾辞が含まれ ます。
2	デフォルトの証明書を使用するには、ルートで spec.certificate を指定しないでくださ い。
3	ルートは、 edge の終了ポリシーを指定する必要があります。

27.1.12. Ingress アノテーションでの宛先 CA 証明書を使用したルート作成

route.openshift.io/destination-ca-certificate-secret アノテーションを Ingress オブジェクトで使用して、カスタム宛先 CA 証明書でルートを定義できます。

前提条件

- PEM エンコードされたファイルで証明書/キーのペアを持つことができます。ここで、証明書 はルートホストに対して有効となっています。
- 証明書チェーンを完了する PEM エンコードされたファイルの別の CA 証明書が必要です。
- PEM エンコードされたファイルの別の宛先 CA 証明書が必要です。
- 公開する必要のあるサービスが必要です。

手順

1. route.openshift.io/destination-ca-certificate-secret を Ingress アノテーションに追加しま す。



2. このアノテーションで参照されているシークレットは、生成されたルートに挿入されます。

出力例

```
apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
 name: frontend
 annotations:
  route.openshift.io/termination: reencrypt
  route.openshift.io/destination-ca-certificate-secret: secret-ca-cert
spec:
. . .
 tls:
  insecureEdgeTerminationPolicy: Redirect
  termination: reencrypt
  destinationCACertificate: |
   -----BEGIN CERTIFICATE-----
   [...]
   -----END CERTIFICATE-----
```

27.1.13. デュアルスタックネットワーク用の OpenShift Container Platform Ingress Controller の設定

OpenShift Container Platform クラスターが IPv4 および IPv6 デュアルスタックネットワーク用に設定 されている場合、クラスターは OpenShift Container Platform ルートによって外部からアクセス可能で す。 Ingress Controller は、IPv4 エンドポイントと IPv6 エンドポイントの両方を持つサービスを自動的に提供しますが、シングルスタックまたはデュアルスタックサービス用に Ingress Controller を設定できます。

前提条件

- ベアメタルに OpenShift Container Platform クラスターをデプロイしていること。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

手順

 Ingress コントローラーが、IPv4 / IPv6 を介してトラフィックをワークロードに提供するよう にするには、ipFamilies フィールドおよび ipFamilyPolicy フィールドを設定して、サービス YAML ファイルを作成するか、既存のサービス YAML ファイルを変更します。以下に例を示し ます。

サービス YAML ファイルの例

apiVersion: v1 kind: Service metadata: creationTimestamp: yyyy-mm-ddT00:00:00Z labels: name: <service name> manager: kubectl-create operation: Update time: yyyy-mm-ddT00:00:00Z name: <service_name> namespace: <namespace_name> resourceVersion: "<resource_version_number>" selfLink: "/api/v1/namespaces/<namespace_name>/services/<service_name>" uid: <uid_number> spec: clusterIP: 172.30.0.0/16 clusterIPs: - 172.30.0.0/16 - <second_IP_address> ipFamilies: 2 - IPv4 - IPv6 ipFamilyPolicy: RequireDualStack 3 ports: - port: 8080 protocol: TCP targetport: 8080 selector: name: <namespace_name> sessionAffinity: None type: ClusterIP status: loadbalancer: {}

デュアルスタックインスタンスでは、2 つの異なる clusterIPs が提供されます。



シングルスタックインスタンスの場合は、IPv4 または IPv6 と入力します。デュアルス タックインスタンスの場合は、IPv4 と IPv6 の両方を入力します。



シングルスタックインスタンスの場合は、SingleStack と入力します。デュアルスタック インスタンスの場合は、RequireDualStack と入力します。

これらのリソースは、対応する **endpoints** を生成します。Ingress コントローラーは、**endpointslices** を監視するようになりました。

2. endpoints を表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get endpoints

3. endpointslices を表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get endpointslices

関連情報

● appsDomain オプションを使用した代替クラスタードメインの指定

27.2. セキュリティー保護されたルート

セキュアなルートは、複数の TLS 終端タイプを使用してクライアントに証明書を提供できます。以下 のセクションでは、カスタム証明書を使用して re-encrypt、edge、および passthrough ルートを作成 する方法を説明します。



重要

パブリックエンドポイントを使用して Microsoft Azure にルートを作成する場合、リソー ス名は制限されます。特定の用語を使用するリソースを作成することはできません。 Azure が制限する語のリストは、Azure ドキュメントの Resolve reserved resource name errors を参照してください。

27.2.1. カスタム証明書を使用した re-encrypt ルートの作成

oc create route コマンドを使用し、カスタム証明書と共に reencrypt TLS termination を使用してセ キュアなルートを設定できます。

前提条件

- PEM エンコードされたファイルに証明書/キーのペアが必要です。ここで、証明書はルートホストに対して有効となっています。
- 証明書チェーンを完了する PEM エンコードされたファイルの別の CA 証明書が必要です。
- PEM エンコードされたファイルの別の宛先 CA 証明書が必要です。
- 公開する必要のあるサービスが必要です。

注記



パスワードで保護されるキーファイルはサポートされません。キーファイルからパスフ レーズを削除するには、以下のコマンドを使用します。

\$ openssl rsa -in password_protected_tls.key -out tls.key

手順

この手順では、カスタム証明書および reencrypt TLS termination を使用して Route リソースを作成し ます。以下では、証明書/キーのペアが現在の作業ディレクトリーの tls.crt および tls.key ファイルに あることを前提としています。また、Ingress Controller がサービスの証明書を信頼できるように宛先 CA 証明書を指定する必要もあります。必要な場合には、証明書チェーンを完了するために CA 証明書 を指定することもできます。tls.crt、tls.key、cacert.crt、および (オプションで) ca.crt を実際のパス 名に置き換えます。frontend を、公開する必要のある Service リソースに置き換えま す。www.example.com を適切な名前に置き換えます。

reencrypt TLS 終端およびカスタム証明書を使用してセキュアな Route リソースを作成します。

\$ oc create route reencrypt --service=frontend --cert=tls.crt --key=tls.key --dest-cacert=destca.crt --ca-cert=ca.crt --hostname=www.example.com

結果として生成される Route リソースを検査すると、以下のようになります。

セキュアなルートの YAML 定義

```
apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
 name: frontend
spec:
 host: www.example.com
 to:
  kind: Service
  name: frontend
 tls:
  termination: reencrypt
  key: |-
   -----BEGIN PRIVATE KEY-----
   [...]
   -----END PRIVATE KEY-----
  certificate: |-
   -----BEGIN CERTIFICATE-----
   [...]
   -----END CERTIFICATE-----
  caCertificate: |-
   -----BEGIN CERTIFICATE-----
   [...]
   -----END CERTIFICATE-----
  destinationCACertificate: |-
   -----BEGIN CERTIFICATE-----
   [...]
   -----END CERTIFICATE-----
```

他のオプションについては、oc create route reencrypt --help を参照してください。

27.2.2. カスタム証明書を使用した edge ルートの作成

oc create route コマンドを使用し、edge TLS termination とカスタム証明書を使用してセキュアな ルートを設定できます。edge ルートの場合、Ingress Controller は、トラフィックを宛先 Pod に転送す る前に TLS 暗号を終了します。ルートは、Ingress Controller がルートに使用する TLS 証明書および キーを指定します。

前提条件

- PEM エンコードされたファイルに証明書/キーのペアが必要です。ここで、証明書はルートホ ストに対して有効となっています。
- 証明書チェーンを完了する PEM エンコードされたファイルの別の CA 証明書が必要です。
- 公開する必要のあるサービスが必要です。

注記

パスワードで保護されるキーファイルはサポートされません。キーファイルからパスフレーズを削除するには、以下のコマンドを使用します。

\$ openssl rsa -in password_protected_tls.key -out tls.key

手順

この手順では、カスタム証明書および edge TLS termination を使用して Route リソースを作成しま す。以下では、証明書/キーのペアが現在の作業ディレクトリーの tls.crt および tls.key ファイルにあ ることを前提としています。必要な場合には、証明書チェーンを完了するために CA 証明書を指定する こともできます。tls.crt、tls.key、および (オプションで) ca.crt を実際のパス名に置き換えま す。frontend を、公開する必要のあるサービスの名前に置き換えます。www.example.com を適切な 名前に置き換えます。

edge TLS termination およびカスタム証明書を使用して、セキュアな Route リソースを作成します。

\$ oc create route edge --service=frontend --cert=tls.crt --key=tls.key --ca-cert=ca.crt -hostname=www.example.com

結果として生成される Route リソースを検査すると、以下のようになります。

セキュアなルートの YAML 定義

apiVersion: route.openshift.io/v1 kind: Route metadata: name: frontend spec: host: www.example.com to: kind: Service name: frontend tls:

termination: edge
key: -
BEGIN PRIVATE KEY
[]
END PRIVATE KEY
certificate: -
BEGIN CERTIFICATE
[]
END CERTIFICATE
caCertificate: -
BEGIN CERTIFICATE
[]
END CERTIFICATE

他のオプションについては、oc create route edge --help を参照してください。

27.2.3. passthrough ルートの作成

oc create route コマンドを使用し、passthrough termination を使用してセキュアなルートを設定でき ます。passthrough termination では、暗号化されたトラフィックが TLS 終端を提供するルーターなし に宛先に直接送信されます。そのため、ルートでキーや証明書は必要ありません。

前提条件

• 公開する必要のあるサービスが必要です。

手順

• **Route** リソースを作成します。

\$ oc create route passthrough route-passthrough-secured --service=frontend --port=8080

結果として生成される Route リソースを検査すると、以下のようになります。

passthrough termination を使用したセキュリティー保護されたルート

apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
name: route-passthrough-secured 1
spec:
host: www.example.com
port:
targetPort: 8080
tls:
termination: passthrough 2
insecureEdgeTerminationPolicy: None 3
to:
kind: Service
name: frontend

│ オブジェクトの名前で、63 文字に制限されます。


termination フィールドを passthrough に設定します。これは、必要な唯一の tls フィー ルドです。



オプションの insecureEdgeTerminationPolicy。唯一有効な値は None、Redirect、また は空の値です (無効にする場合)。

宛先 Pod は、エンドポイントでトラフィックに証明書を提供します。これは、必須となるクラ イアント証明書をサポートするための唯一の方法です (相互認証とも呼ばれる)。

第28章 INGRESS クラスタートラフィックの設定

28.1. INGRESS クラスタートラフィックの設定の概要

OpenShift Container Platform は、クラスター内で実行されるサービスを使用してクラスター外からの 通信を可能にする以下の方法を提供します。

以下の方法が推奨されます。以下は、これらの方法の優先される順です。

- HTTP/HTTPS を使用する場合は Ingress Controller を使用する。
- HTTPS 以外の TLS で暗号化されたプロトコルを使用する場合、たとえば、SNI ヘッダーを使用する TLS の場合は、Ingress Controller を使用します。
- それ以外の場合は、ロードバランサー、外部 IP、または NodePort を使用します。

方法	目的
Ingress Controller の使用	HTTP/HTTPS トラフィックおよび HTTPS 以外の TLS で暗号化されたプロトコル (TLS と SNI ヘッダー の使用など) へのアクセスを許可します。
ロードバランサーサービスを使用した外部 IP の自動 割り当て	プールから割り当てられた IP アドレスを使用した非 標準ポートへのトラフィックを許可します。ほとん どのクラウドプラットフォームは、ロードバラン サーの IP アドレスでサービスを開始する方法を提供 します。
MetalLB および MetalLB Operator について	マシンネットワーク上のプールから特定の IP アドレ スまたはアドレスへのトラフィックを許可します。 ベアメタルインストールまたはベアメタルのような プラットフォームの場合、MetalLB は、ロードバラ ンサーの IP アドレスを使用してサービスを開始する 方法を提供します。
外部 IP のサービスへの手動割り当て	特定の IP アドレスを使用した非標準ポートへのトラ フィックを許可します。
NodePort を設定する	クラスターのすべてのノードでサービスを公開しま す。

28.1.1. 比較: 外部 IP アドレスへのフォールトトレランスアクセス

外部 IP アドレスへのアクセスを提供する通信メソッドの場合、IP アドレスへのフォールトトレランス アクセスは別の考慮事項となります。以下の機能は、外部 IP アドレスへのフォールトトレランスアク セスを提供します。

IP フェイルオーバー

IP フェイルオーバーはノードセットの仮想 IP アドレスのプールを管理します。これは、Keepalived および Virtual Router Redundancy Protocol (VRRP) で実装されます。IP フェイルオーバーはレイ ヤー2のメカニズムのみで、マルチキャストに依存します。マルチキャストには、一部のネット ワークに欠点がある場合があります。

MetalLB

MetalLB にはレイヤー2モードがありますが、マルチキャストは使用されません。レイヤー2モー ドには、1つのノードで外部 IP アドレスのトラフィックをすべて転送する欠点があります。

外部 IP アドレスの手動割り当て

クラスターを、外部 IP アドレスをサービスに割り当てるために使用される IP アドレスブロックで 設定できます。デフォルトでは、この機能は無効にされています。この機能は柔軟性があります が、クラスターまたはネットワーク管理者に最大の負担をかけます。クラスターは、外部 IP 宛ての トラフィックを受信する準備ができていますが、各顧客は、トラフィックをノードにルーティング する方法を決定する必要があります。

28.2. サービスの EXTERNALIP の設定

クラスター管理者は、トラフィックをクラスター内のサービスに送信できるクラスター外の IP アドレ スブロックを指定できます。

この機能は通常、ベアメタルハードウェアにインストールされているクラスターに最も役立ちます。

28.2.1. 前提条件

 ネットワークインフラストラクチャーは、外部 IP アドレスのトラフィックをクラスターにルー ティングする必要があります。

28.2.2. ExternalIP について

クラウド以外の環境では、OpenShift Container Platform は **ExternallP** 機能を使用して外部 IP アドレ スの **Service** オブジェクトの **spec.externallPs[]** フィールドへの割り当てをサポートします。この フィールドを設定すると、OpenShift Container Platform は追加の仮想 IP アドレスをサービスに割り当 てます。IP アドレスは、クラスターに定義されたサービスネットワーク外に指定できま す。**type=NodePort** が設定されたサービスと同様に ExternallP 機能で設定されたサービスにより、ト ラフィックを負荷分散のためにローカルノードに転送することができます。

ネットワークインフラストラクチャーを設定し、定義する外部 IP アドレスブロックがクラスターに ルーティングされるようにする必要があります。

OpenShift Container Platform は以下の機能を追加して Kubernetes の ExternalIP 機能を拡張します。

- 設定可能なポリシーでの、ユーザーによる外部 IP アドレスの使用の制限
- 要求時の外部 IP アドレスのサービスへの自動割り当て



警告

ExternalIP 機能の使用はデフォルトで無効にされます。これは、外部 IP アドレス へのクラスター内のトラフィックがそのサービスにダイレクトされるため、セキュ リティー上のリスクを生じさせる可能性があります。これにより、クラスターユー ザーは外部リソースについての機密性の高いトラフィックをインターセプトできる ようになります。



重要

この機能は、クラウド以外のデプロイメントでのみサポートされます。クラウドデプロ イメントの場合、クラウドの自動デプロイメントのためにロードバランサーサービスを 使用し、サービスのエンドポイントをターゲットに設定します。

以下の方法で外部 IP アドレスを割り当てることができます。

外部 IP の自動割り当て

OpenShift Container Platform は、**spec.type=LoadBalancer** を設定して **Service** オブジェクトを 作成する際に、IP アドレスを **autoAssignCIDRs** CIDR ブロックから **spec.externalIPs[]** 配列に自動 的に割り当てます。この場合、OpenShift Container Platform はロードバランサーサービスタイプの クラウド以外のバージョンを実装し、IP アドレスをサービスに割り当てます。自動割り当てはデ フォルトで無効にされており、以下のセクションで説明されているように、これはクラスター管理 者が設定する必要があります。

外部 IP の手動割り当て

OpenShift Container Platform は **Service** オブジェクトの作成時に **spec.externallPs[]** 配列に割り 当てられた IP アドレスを使用します。別のサービスによってすでに使用されている IP アドレスを 指定することはできません。

28.2.2.1. ExternalIP の設定

OpenShift Container Platform での外部 IP アドレスの使用は、**cluster** という名前の **Network.config.openshift.io** CR の以下のフィールドで管理されます。

- spec.externallP.autoAssignCIDRs は、サービスの外部 IP アドレスを選択する際にロードバランサーによって使用される IP アドレスブロックを定義します。OpenShift Container Platform は、自動割り当て用の単一 IP アドレスブロックのみをサポートします。これは、 ExternalIP をサービスに手動で割り当てる際に、制限された数の共有 IP アドレスのポート領域 を管理しなくてはならない場合よりも単純になります。自動割り当てが有効な場合に は、spec.type=LoadBalancer が設定された Service オブジェクトには外部 IP アドレスが割り 当てられます。
- spec.externallP.policy は、IP アドレスを手動で指定する際に許容される IP アドレスブロック を定義します。OpenShift Container Platform は、spec.externallP.autoAssignClDRs で定義 される IP アドレスブロックにポリシールールを適用しません。

ルーティングが正しく行われると、設定された外部 IP アドレスブロックからの外部トラフィックは、 サービスが公開する TCP ポートまたは UDP ポートを介してサービスのエンドポイントに到達できま す。



重要

クラスター管理者は、OpenShiftSDN ネットワークタイプと OVN-Kubernetes ネット ワークタイプの両方で externalIP へのルーティングを設定する必要があります。割り当 てる IP アドレスブロックがクラスター内の1つ以上のノードで終了することを確認する 必要もあります。詳細は、Kubernetes External IPs を参照してください。

OpenShift Container Platform は IP アドレスの自動および手動割り当ての両方をサポートしており、そ れぞれのアドレスは1つのサービスの最大数に割り当てられることが保証されます。これにより、各 サービスは、ポートが他のサービスで公開されているかによらず、自らの選択したポートを公開できま す。



注記

OpenShift Container Platform の **autoAssignClDRs** で定義された IP アドレスブロック を使用するには、ホストのネットワークに必要な IP アドレスの割り当ておよびルーティ ングを設定する必要があります。

以下の YAML は、外部 IP アドレスが設定されたサービスについて説明しています。

spec.externallPs[] が設定された Service オブジェクトの例

apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: http-service spec: clusterIP: 172.30.163.110 externallPs: - 192.168.132.253 externalTrafficPolicy: Cluster ports: - name: highport nodePort: 31903 port: 30102 protocol: TCP targetPort: 30102 selector: app: web sessionAffinity: None type: LoadBalancer status: loadBalancer: ingress: - ip: 192.168.132.253

28.2.2.2. 外部 IP アドレスの割り当ての制限

クラスター管理者は、IP アドレスブロックを指定して許可および拒否できます。

制限は、cluster-admin 権限を持たないユーザーにのみ適用されます。クラスター管理者は、サービスの spec.externallPs[] フィールドを任意の IP アドレスに常に設定できます。

spec.ExternallP.policy フィールドを指定して、**policy** オブジェクトが定義された IP アドレスポリ シーを設定します。ポリシーオブジェクトには以下の形があります。

```
{
    "policy": {
        "allowedCIDRs": [],
        "rejectedCIDRs": []
    }
}
```

ポリシーの制限を設定する際に、以下のルールが適用されます。

- policy={} が設定される場合、spec.ExternallPs[] が設定されている Service オフジェクトの作成は失敗します。これは OpenShift Container Platform のデフォルトです。policy=null が設定される動作は同一です。
- policy が設定され、policy.allowedCIDRs[] または policy.rejectedCIDRs[] のいずれかが設定 される場合、以下のルールが適用されます。
 - allowedCIDRs[] と rejectedCIDRs[]の両方が設定される場合、rejectedCIDRs[] が allowedCIDRs[] よりも優先されます。
 - **allowedCIDRs[]** が設定される場合、**spec.ExternalIPs[]** が設定されている **Service** オブ ジェクトの作成は、指定された IP アドレスが許可される場合にのみ正常に実行されます。
 - rejectedClDRs[] が設定される場合、spec.ExternallPs[] が設定されている Service オブ ジェクトの作成は、指定された IP アドレスが拒否されていない場合にのみ正常に実行され ます。

28.2.2.3. ポリシーオブジェクトの例

以下に続く例では、複数のポリシー設定の例を示します。

以下の例では、ポリシーは OpenShift Container Platform が外部 IP アドレスが指定されたサービスを作成するのを防ぎます。

```
Service オブジェクトの spec.externallPs[]に指定された値を拒否するポリシーの例
```

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
externalIP:
policy: {}
```

● 以下の例では、allowedCIDRs および rejectedCIDRs フィールドの両方が設定されます。

許可される、および拒否される CIDR ブロックの両方を含むポリシーの例

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
externalIP:
policy:
allowedCIDRs:
- 172.16.66.10/23
rejectedCIDRs:
- 172.16.66.10/24
...
```

 以下の例では、policy は null に設定されます。null に設定されている場合、oc get networks.config.openshift.io -o yaml を入力して設定オブジェクトを検査する際に、policy フィールドは出力に表示されません。

```
Service オブジェクトの spec.externallPs[] に指定された値を許可するポリシーの例
```

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: externalIP: policy: null ...

28.2.3. ExternalIP アドレスブロックの設定

ExternallP アドレスブロックの設定は、**cluster** という名前の Network カスタムリソース (CR) で定義 されます。ネットワーク CR は **config.openshift.io API** グループに含まれます。



重要

クラスターのインストール時に、Cluster Version Operator (CVO) は **cluster** という名前 のネットワーク CR を自動的に作成します。このタイプのその他の CR オブジェクトの 作成はサポートされていません。

以下の YAML は ExternalIP 設定について説明しています。

cluster という名前の network.config.openshift.io CR

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
externalIP:
autoAssignCIDRs: [] 1
policy: 2

- 外部 IP アドレスのサービスへの自動割り当てに使用できる CIDR 形式で IP アドレスブロックを定 義します。1つの IP アドレス範囲のみが許可されます。
- 2 IP アドレスのサービスへの手動割り当ての制限を定義します。制限が定義されていない場合は、Service オブジェクトに spec.externalIP フィールドを指定しても許可されません。デフォルトで、制限は定義されません。

以下の YAML は、**policy** スタンザのフィールドについて説明しています。

Network.config.openshift.io policy スタンザ

policy: allowedCIDRs: [] 1 rejectedCIDRs: [] 2

- CIDR 形式の許可される IP アドレス範囲のリスト。
 - CIDR 形式の拒否される IP アドレス範囲のリスト。

外部 IP 設定の例

外部 IP アドレスプールの予想される複数の設定が以下の例で表示されています。

• 以下の YAML は、自動的に割り当てられた外部 IP アドレスを有効にする設定について説明しています。

spec.externallP.autoAssignCIDRs が設定された設定例

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec: ... externallP: autoAssignCIDRs: - 192.168.132.254/29

• 以下の YAML は、許可された、および拒否された CIDR 範囲のポリシールールを設定します。

spec.externallP.policy が設定された設定例

apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Network
metadata:
name: cluster
spec:
externalIP:
policy:
allowedCIDRs:
- 192.168.132.0/29
- 192.168.132.8/29
rejectedCIDRs:
- 192.168.132.7/32

28.2.4. クラスターの外部 IP アドレスブロックの設定

-

クラスター管理者は、以下の ExternallP を設定できます。

 Service オブジェクトの spec.clusterIP フィールドを自動的に設定するために OpenShift Container Platform によって使用される ExternalIP アドレスブロック。

.. .

.. .

 IP アドレスを制限するポリシーオブジェクトは Service オブジェクトの spec.clusterIP 配列に 手動で割り当てられます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。

手順

1. オプション:現在の外部 IP 設定を表示するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc describe networks.config cluster

2. 設定を編集するには、以下のコマンドを入力します。



3. 以下の例のように ExternalIP 設定を変更します。

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Network metadata: name: cluster spec:	
externalIP: 1	
externallP スタンザの設定を指定し	ます。

4. 更新された ExternallP 設定を確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get networks.config cluster -o go-template='{{.spec.externalIP}}{{"\n"}}'

28.2.5. 次のステップ

• サービスの外部 IP を使用した ingress クラスタートラフィックの設定

28.3. INGRESS CONTROLLER を使用した INGRESS クラスターの設定

OpenShift Container Platform は、クラスター内で実行されるサービスを使用してクラスター外からの 通信を可能にする方法を提供します。この方法は Ingress Controller を使用します。

28.3.1. Ingress Controller およびルートの使用

Ingress Operator は Ingress Controller およびワイルドカード DNS を管理します。

Ingress Controller の使用は、最も一般的な、OpenShift Container Platform クラスターへの外部アクセスを許可する方法です。

Ingress Controller は外部要求を許可し、設定されたルートに基づいてそれらをプロキシー送信するよう 設定されます。これは、HTTP、SNIを使用する HTTPS、SNIを使用する TLS に限定されており、SNI を使用する TLS で機能する Web アプリケーションやサービスには十分な設定です。

管理者と連携して Ingress Controller を設定します。外部要求を許可し、設定されたルートに基づいて それらをプロキシー送信するように Ingress Controller を設定します。

管理者はワイルドカード DNS エントリーを作成してから Ingress Controller を設定できます。その後は 管理者に問い合わせることなく edge Ingress Controller と連携できます。

デフォルトで、クラスター内のすべての Ingress Controller はクラスター内の任意のプロジェクトで作成されたすべてのルートを許可します。

Ingress Controller:

- デフォルトでは2つのレプリカがあるので、これは2つのワーカーノードで実行する必要があります。
- 追加のノードにレプリカを組み込むためにスケールアップすることができます。



注記

このセクションの手順では、クラスターの管理者が事前に行っておく必要のある前提条 件があります。

28.3.2. 前提条件

以下の手順を開始する前に、管理者は以下の条件を満たしていることを確認する必要があります。

- 要求がクラスターに到達できるように、クラスターネットワーク環境に対して外部ポートを セットアップします。
- クラスター管理者ロールを持つユーザーが1名以上いることを確認します。このロールをユー ザーに追加するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc adm policy add-cluster-role-to-user cluster-admin username

 OpenShift Container Platform クラスターを、1つ以上のマスターと1つ以上のノード、および クラスターへのネットワークアクセスのあるクラスター外のシステムと共に用意します。この 手順では、外部システムがクラスターと同じサブセットにあることを前提とします。別のサブ セットの外部システムに必要な追加のネットワーク設定については、このトピックでは扱いま せん。

28.3.3. プロジェクトおよびサービスの作成

公開するプロジェクトおよびサービスが存在しない場合、最初にプロジェクトを作成し、次にサービス を作成します。

プロジェクトおよびサービスがすでに存在する場合は、サービスを公開してルートを作成する手順に進 みます。

前提条件

• クラスター管理者として oc CLI をインストールし、ログインします。

---- WII

于順

1. oc new-project コマンドを実行して、サービス用の新しいプロジェクトを作成します。

\$ oc new-project myproject

2. oc new-app コマンドを使用してサービスを作成します。

\$ oc new-app nodejs:12~https://github.com/sclorg/nodejs-ex.git

3. サービスが作成されたことを確認するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get svc -n myproject

出力例

NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE nodejs-ex ClusterIP 172.30.197.157 <none> 8080/TCP 70s

デフォルトで、新規サービスには外部 IP アドレスがありません。

28.3.4. ルートの作成によるサービスの公開

oc expose コマンドを使用して、サービスをルートとして公開することができます。

手順

サービスを公開するには、以下を実行します。

- 1. OpenShift Container Platform にログインします。
- 2. 公開するサービスが置かれているプロジェクトにログインします。

\$ oc project myproject

3. oc expose service コマンドを実行して、ルートを公開します。

\$ oc expose service nodejs-ex

出力例

route.route.openshift.io/nodejs-ex exposed

 サービスが公開されていることを確認するには、cURL などのツールを使用して、クラスター 外からサービスにアクセスできることを確認します。

a. ルートのホスト名を調べるには、oc get route コマンドを使用します。



\$ oc get route

出力例



28.3.5. ルートラベルを使用した Ingress Controller のシャード化の設定

ルートラベルを使用した Ingress Controller のシャード化とは、Ingress Controller がルートセレクター によって選択される任意 namespace の任意のルートを提供することを意味します。

図28.1ルートラベルを使用した Ingress シャーディング



301_OpenShift_0123

Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

手順

1. router-internal.yaml ファイルを編集します。

cat router-internal.yaml
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
 name: sharded
 namespace: openshift-ingress-operator
spec:
 domain: <apps-sharded.basedomain.example.net> 1
 nodePlacement:
 nodeSelector:
 matchLabels:
 node-role.kubernetes.io/worker: ""
routeSelector:
 matchLabels:
 type: sharded



Ingress Controller が使用するドメインを指定します。このドメインは、デフォルトの Ingress Controller ドメインとは異なる必要があります。

2. Ingress コントローラーの router-internal.yaml ファイルを適用します。

oc apply -f router-internal.yaml

Ingress コントローラーは、**type: sharded** というラベルのある namespace のルートを選択します。

3. router-internal.yaml で設定されたドメインを使用して新しいルートを作成します。

\$ oc expose svc <service-name> --hostname <route-name>.appssharded.basedomain.example.net

28.3.6. namespace ラベルを使用した Ingress Controller のシャード化の設定

namespace ラベルを使用した Ingress Controller のシャード化とは、Ingress Controller が namespace セレクターによって選択される任意の namespace の任意のルートを提供することを意味します。

図28.2 namespace ラベルを使用した Ingress シャーディング



Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

手順

1. router-internal.yaml ファイルを編集します。

cat router-internal.yaml

出力例





Ingress Controller が使用するドメインを指定します。このドメインは、デフォルトの Ingress Controller ドメインとは異なる必要があります。 2. Ingress コントローラーの router-internal.yaml ファイルを適用します。

oc apply -f router-internal.yaml

Ingress コントローラーは、**type: sharded** というラベルのある namespace セレクターによっ て選択される namespace のルートを選択します。

3. router-internal.yaml で設定されたドメインを使用して新しいルートを作成します。

\$ oc expose svc <service-name> --hostname <route-name>.appssharded.basedomain.example.net

28.3.7. Ingress Controller シャーディングのルート作成

ルートを使用すると、URL でアプリケーションをホストできます。この場合、ホスト名は設定されず、 ルートは代わりにサブドメインを使用します。サブドメインを指定すると、ルートを公開する Ingress Controller のドメインが自動的に使用されます。ルートが複数の Ingress Controller によって公開されて いる状況では、ルートは複数の URL でホストされます。

以下の手順では、例として **hello-openshift** アプリケーションを使用して、Ingress コントローラー シャーディングのルートを作成する方法について説明します。

Ingress Controller のシャード化は、一連の Ingress Controller 間で着信トラフィックの負荷を分散し、 トラフィックを特定の Ingress Controller に分離する際に役立ちます。たとえば、Company A のトラ フィックをある Ingress Controller に指定し、Company B を別の Ingress Controller に指定できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- プロジェクト管理者としてログインしている。
- あるポートを公開する Web アプリケーションと、そのポートでトラフィックをリッスンする HTTP または TCP エンドポイントがある。
- シャーディング用に Ingress Controller を設定している。

手順

1. 次のコマンドを実行して、hello-openshift というプロジェクトを作成します。

\$ oc new-project hello-openshift

2. 以下のコマンドを実行してプロジェクトに Pod を作成します。

\$ oc create -f https://raw.githubusercontent.com/openshift/origin/master/examples/helloopenshift/hello-pod.json

3. 以下のコマンドを実行して、hello-openshift というサービスを作成します。

\$ oc expose pod/hello-openshift

4. hello-openshift-route.yaml というルート定義を作成します。

シャーディング用に作成されたルートの YAML 定義:

apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
labels:
type: sharded 1
name: hello-openshift-edge
namespace: hello-openshift
spec:
subdomain: hello-openshift 2
tls:
termination: edge
to:
kind: Service
nomer helle energhift
name: nello-opensnin





5. 次のコマンドを実行し、hello-openshift-route.yaml を使用して hello-openshift アプリケー ションへのルートを作成します。

\$ oc -n hello-openshift create -f hello-openshift-route.yaml

検証

• 次のコマンドを使用して、ルートのステータスを取得します。

\$ oc -n hello-openshift get routes/hello-openshift-edge -o yaml

結果の Route リソースは次のようになります。

出力例

```
apiVersion: route.openshift.io/v1
kind: Route
metadata:
labels:
type: sharded
name: hello-openshift-edge
namespace: hello-openshift
spec:
subdomain: hello-openshift
tls:
termination: edge
to:
```

kind: Service name: hello-openshift status: ingress:
host: hello-openshift.<apps-sharded.basedomain.example.net> 1 routerCanonicalHostname: router-sharded.<apps-sharded.basedomain.example.net> 2 routerName: sharded 3
1 Ingress Controller またはルーターがルートを公開するために使用するホスト名。host フィールドの値は、Ingress コントローラーによって自動的に決定され、そのドメインを 使用します。この例では、Ingress コントローラーのドメインは <appssharded.basedomain.example.net> です。
2 Ingress Controller のホスト名。
3 Ingress Controller の名前。この例では、Ingress コントローラーの名前は sharded です。

28.3.8. 関連情報

Ingress Operator はワイルドカード DNS を管理します。詳細は、以下を参照してください。

- OpenShift Container Platform の Ingress Operator
- ベアメタルにクラスターをインストールする
- クラスターの vSphere へのインストール
- ネットワークポリシーについて

28.4. ロードバランサーを使用した INGRESS クラスターの設定

OpenShift Container Platform は、クラスター内で実行されるサービスを使用してクラスター外からの 通信を可能にする方法を提供します。この方法では、ロードバランサーを使用します。

28.4.1. ロードバランサーを使用したトラフィックのクラスターへの送信

特定の外部 IP アドレスを必要としない場合、ロードバランサーサービスを OpenShift Container Platform クラスターへの外部アクセスを許可するよう設定することができます。

ロードバランサーサービスは固有の IP を割り当てます。ロードバランサーには単一の edge ルーター IP があります (これは仮想 IP (VIP) の場合もありますが、初期の負荷分散では単ーマシンになります。



注記

プールが設定される場合、これはクラスター管理者によってではなく、インフラストラ クチャーレベルで実行されます。

注記

このセクションの手順では、クラスターの管理者が事前に行っておく必要のある前提条 件があります。

28.4.2. 前提条件

以下の手順を開始する前に、管理者は以下の条件を満たしていることを確認する必要があります。

- 要求がクラスターに到達できるように、クラスターネットワーク環境に対して外部ポートを セットアップします。
- クラスター管理者ロールを持つユーザーが1名以上いることを確認します。このロールをユー ザーに追加するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc adm policy add-cluster-role-to-user cluster-admin username

 OpenShift Container Platform クラスターを、1つ以上のマスターと1つ以上のノード、および クラスターへのネットワークアクセスのあるクラスター外のシステムと共に用意します。この 手順では、外部システムがクラスターと同じサブセットにあることを前提とします。別のサブ セットの外部システムに必要な追加のネットワーク設定については、このトピックでは扱いま せん。

28.4.3. プロジェクトおよびサービスの作成

公開するプロジェクトおよびサービスが存在しない場合、最初にプロジェクトを作成し、次にサービス を作成します。

プロジェクトおよびサービスがすでに存在する場合は、サービスを公開してルートを作成する手順に進 みます。

前提条件

• クラスター管理者として oc CLI をインストールし、ログインします。

手順

1. oc new-project コマンドを実行して、サービス用の新しいプロジェクトを作成します。

\$ oc new-project myproject

2. oc new-app コマンドを使用してサービスを作成します。

\$ oc new-app nodejs:12~https://github.com/sclorg/nodejs-ex.git

3. サービスが作成されたことを確認するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get svc -n myproject

出力例

NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE nodejs-ex ClusterIP 172.30.197.157 <none> 8080/TCP 70s

デフォルトで、新規サービスには外部 IP アドレスがありません。

28.4.4. ルートの作成によるサービスの公開

oc expose コマンドを使用して、サービスをルートとして公開することができます。

手順

サービスを公開するには、以下を実行します。

- 1. OpenShift Container Platform にログインします。
- 2. 公開するサービスが置かれているプロジェクトにログインします。

\$ oc project myproject

3. oc expose service コマンドを実行して、ルートを公開します。

\$ oc expose service nodejs-ex

出力例

route.route.openshift.io/nodejs-ex exposed

- サービスが公開されていることを確認するには、cURL などのツールを使用して、クラスター 外からサービスにアクセスできることを確認します。
 - a. ルートのホスト名を調べるには、oc get route コマンドを使用します。



出力例

NAMEHOST/PORTPATHSERVICESPORTTERMINATIONWILDCARDnodejs-exnodejs-ex-myproject.example.comnodejs-ex8080-tcpNone

b. cURLを使用して、ホストがGET要求に応答することを確認します。

\$ curl --head nodejs-ex-myproject.example.com

出力例

```
HTTP/1.1 200 OK
```

28.4.5. ロードバランサーサービスの作成

以下の手順を使用して、ロードバランサーサービスを作成します。

前提条件

- 公開するプロジェクトとサービスがあること。
- クラウドプロバイダーがロードバランサーをサポートしている。

手順

- ロードバランサーサービスを作成するには、以下を実行します。
 - 1. OpenShift Container Platform にログインします。
 - 2. 公開するサービスが置かれているプロジェクトを読み込みます。



コントロールプレーンノードでテキストファイルを開き、以下のテキストを貼り付け、必要に応じてファイルを編集します。

ロードバランサー設定ファイルのサンプル

apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: egress-2 1
spec:
ports:
- name: db
port: 3306 (2)
loadBalancerIP:
loadBalancerSourceRanges: 3
- 10.0.0/8
- 192.168.0.0/16
type: LoadBalancer 4
selector:
name: mysql 5

6

ロードバランサーサービスの説明となる名前を入力します。

2 公開するサービスがリッスンしている同じポートを入力します。

3 特定の IP アドレスのリストを入力して、ロードバランサー経由でトラフィックを制限します。クラウドプロバイダーがこの機能に対応していない場合、このフィールドは無視されます。

- タイプに loadbalancer を入力します。
- 5 サービスの名前を入力します。



注記

ロードバランサーを通過するトラフィックを特定の IP アドレスに制限するに は、Ingress Controller フィールド

spec.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.allowedSourceRanges を使 用することを推奨します。**loadBalancerSourceRanges** フィールドを設定しな いでください。

4. ファイルを保存し、終了します。

5. 以下のコマンドを実行してサービスを作成します。

\$ oc create -f <file-name>

以下に例を示します。

\$ oc create -f mysql-lb.yaml

6. 以下のコマンドを実行して新規サービスを表示します。

\$ oc get svc

出力例

NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE egress-2 LoadBalancer 172.30.22.226 ad42f5d8b303045-487804948.example.com 3306:30357/TCP 15m

有効にされたクラウドプロバイダーがある場合、サービスには外部 IP アドレスが自動的に割り 当てられます。

7. マスターで cURL などのツールを使用し、パブリック IP アドレスを使用してサービスに到達で きることを確認します。

\$ curl <public-ip>:<port>

以下に例を示します。

\$ curl 172.29.121.74:3306

このセクションの例では、クライアントアプリケーションを必要とする MySQL サービスを使用しています。Got packets out of order のメッセージと共に文字ストリングを取得する場合は、このサービスに接続していることになります。

MySQL クライアントがある場合は、標準 CLI コマンドでログインします。

\$ mysql -h 172.30.131.89 -u admin -p

出力例

Enter password: Welcome to the MariaDB monitor. Commands end with ; or \g.

MySQL [(none)]>

28.5. AWS での INGRESS クラスタートラフィックの設定

OpenShift Container Platform は、クラスター内で実行されるサービスを使用してクラスター外からの 通信を可能にする方法を提供します。この方法では、AWS のロードバランサー、具体的には Network Load Balancer (NLB) またはク Classic Load Balancer (CLB) を使用します。どちらのタイプのロードバ ランサーもクライアントの IP アドレスをノードに転送できますが、CLB にはプロキシープロトコルの サポートが必要です。これは OpenShift Container Platform によって自動的に有効になります。

NLB を使用するように Ingress Controller を設定するには、次の2つの方法があります。

- 現在 CLB を使用している Ingress Controller を強制的に置き換える。これにより、IngressController オブジェクトが削除され、新しい DNS レコードが伝達され、NLB がプロビジョニングされている間、停止が発生します。
- CLB を使用する既存の Ingress Controller を編集して、NLB を使用する。これにより、IngressController オブジェクトを削除して再作成することなく、ロードバランサーが変更されます。

どちらの方法も、NLB から CLB への切り替えに使用できます。

これらのロードバランサーは、新規または既存のAWS クラスターで設定できます。

28.5.1. AWS での Classic Load Balancer タイムアウトの設定

OpenShift Container Platform は、特定のルートまたは Ingress Controller のカスタムタイムアウト期間 を設定するためのメソッドを提供します。さらに、AWS Classic Load Balancer (CLB) には独自のタイ ムアウト期間があり、デフォルトは 60 秒です。

CLB のタイムアウト期間がルートタイムアウトまたは Ingress Controller タイムアウトよりも短い場合、ロードバランサーは接続を途中で終了する可能性があります。ルートと CLB の両方のタイムアウト期間を増やすことで、この問題を防ぐことができます。

28.5.1.1. ルートのタイムアウトの設定

Service Level Availability (SLA) で必要とされる、低タイムアウトが必要なサービスや、バックエンドでの処理速度が遅いケースで高タイムアウトが必要なサービスがある場合は、既存のルートに対してデフォルトのタイムアウトを設定することができます。

前提条件

実行中のクラスターでデプロイ済みの Ingress Controller が必要になります。

手順

1. oc annotate コマンドを使用して、ルートにタイムアウトを追加します。

\$ oc annotate route <route_name> \

--overwrite haproxy.router.openshift.io/timeout=<timeout><time_unit>

1

サポートされる時間単位は、マイクロ秒 (us)、ミリ秒 (ms)、秒 (s)、分 (m)、時間 (h)、または日 (d) です。

以下の例では、2秒のタイムアウトをmyrouteという名前のルートに設定します。

\$ oc annotate route myroute --overwrite haproxy.router.openshift.io/timeout=2s

28.5.1.2. Classic Load Balancer タイムアウトの設定

Classic Load Balancer (CLB) のデフォルトのタイムアウトを設定して、アイドル接続を延長できます。

前提条件

実行中のクラスターにデプロイ済みの Ingress Controller がある。

手順

- 次のコマンドを実行して、デフォルト ingresscontroller の AWS 接続アイドルタイムアウトを 5分に設定します。
 - \$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default \
 --type=merge --patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy": \
 {"type":"LoadBalancerService", "loadBalancer": \
 {"scope":"External", "providerParameters":{"type":"AWS", "aws": \
 {"type":"Classic", "classicLoadBalancer": \
 {"connectionIdleTimeout":"5m"}}}}'
- 2. オプション:次のコマンドを実行して、タイムアウトのデフォルト値を復元します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default \
 --type=merge --patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy": \
 {"loadBalancer":{"providerParameters":{"aws":{"classicLoadBalancer": \
 {"connectionIdleTimeout":null}}}}}



注記

現在のスコープがすでに設定されている場合を除き、接続タイムアウト値を変更するに は scope フィールドを指定する必要があります。デフォルトのタイムアウト値に戻す場 合は、scope フィールドを設定する際に再度設定する必要はありません。

28.5.2. ネットワークロードバランサーを使用した AWS での ingress クラスタートラ フィックの設定

OpenShift Container Platform は、クラスター内で実行されるサービスを使用してクラスター外からの 通信を可能にする方法を提供します。そのような方法の1つでは、Network Load Balancer (NLB)を使 用します。NLB を新規または既存の AWS クラスターに設定することができます。

28.5.2.1. Ingress Controller を Classic Load Balancer から Network Load Balancer に切り替 える

Classic Load Balancer (CLB) を使用している Ingress Controller を、AWS の Network Load Balancer (NLB) を使用する Ingress Controller に切り替えることができます。

これらのロードバランサーを切り替えても、IngressController オブジェクトは削除されません。

警告



この手順により、次の問題が発生する可能性があります。

- 新しい DNS レコードの伝播、新しいロードバランサーのプロビジョニン グ、およびその他の要因により、数分間続く可能性のある停止。この手順 を適用すると、Ingress Controller ロードバランサーの IP アドレスや正規名 が変更になる場合があります。
- サービスのアノテーションの変更により、ロードバランサーリソースが リークする。

手順

NLB を使用して切り替える既存の Ingress Controller を変更します。この例では、デフォルトの Ingress コントローラーに External スコープがあり、他のカスタマイズがないことを前提としています。

ingresscontroller.yaml ファイルの例

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
creationTimestamp: null
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
endpointPublishingStrategy:
loadBalancer:
scope: External
providerParameters:
type: AWS
aws:
type: NLB
type: LoadBalancerService



注記

spec.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.providerParameters.aws.typ e フィールドの値を指定しない場合、Ingress コントローラーは、インストール 時に設定されたクラスター **Ingress** 設定の **spec.loadBalancer.platform.aws.type** 値を使用します。

ヒント

Ingress Controller に、ドメインの変更など、更新したい他のカスタマイズがある場合は、代わりに Ingress Controller 定義ファイルを強制的に置き換えることを検討してください。

2. 次のコマンドを実行して、Ingress Controller YAML ファイルに変更を適用します。

1

\$ oc apply -f ingresscontroller.yaml

Ingress Controller の更新中は、数分間の停止が予想されます。

28.5.2.2. Network Load Balancer の使用から Classic Load Balancer への Ingress Controller の切り替え

Network Load Balancer (NLB) を使用している Ingress Controller を、AWS の Classic Load Balancer (CLB) を使用する Ingress Controller に切り替えることができます。

これらのロードバランサーを切り替えても、IngressController オブジェクトは削除されません。



警告

この手順により、新しい DNS レコードの伝播、新しいロードバランサーのプロビ ジョニング、およびその他の要因により、数分間続く停止が発生する可能性があり ます。この手順を適用すると、Ingress Controller ロードバランサーの IP アドレス や正規名が変更になる場合があります。

手順

CLB を使用して切り替える既存の Ingress Controller を変更します。この例では、デフォルトの Ingress コントローラーに External スコープがあり、他のカスタマイズがないことを前提としています。

ingresscontroller.yaml ファイルの例

```
apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata:
creationTimestamp: null
name: default
namespace: openshift-ingress-operator
spec:
endpointPublishingStrategy:
loadBalancer:
scope: External
providerParameters:
type: AWS
aws:
type: Classic
type: LoadBalancerService
```



注記

spec.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.providerParameters.aws.typ e フィールドの値を指定しない場合、Ingress コントローラーは、インストール 時に設定されたクラスター Ingress 設定の spec.loadBalancer.platform.aws.type 値を使用します。

ヒント

Ingress Controller に、ドメインの変更など、更新したい他のカスタマイズがある場合は、代わりに Ingress Controller 定義ファイルを強制的に置き換えることを検討してください。

2. 次のコマンドを実行して、Ingress Controller YAML ファイルに変更を適用します。

\$ oc apply -f ingresscontroller.yaml

Ingress Controller の更新中は、数分間の停止が予想されます。

28.5.2.3. Ingress Controller Classic Load Balancerの Network Load Balancer への置き換え

Classic Load Balancer (CLB) を使用している Ingress Controller は、AWS の Network Load Balancer (NLB) を使用している Ingress Controller に置き換えることができます。



警告

この手順により、次の問題が発生する可能性があります。

- 新しい DNS レコードの伝播、新しいロードバランサーのプロビジョニン グ、およびその他の要因により、数分間続く可能性のある停止。この手順 を適用すると、Ingress Controller ロードバランサーの IP アドレスや正規名 が変更になる場合があります。
- サービスのアノテーションの変更により、ロードバランサーリソースが リークする。

手順

1. 新しいデフォルトの Ingress Controller を含むファイルを作成します。以下の例では、デフォルトの Ingress Controller の範囲が **External** で、その他のカスタマイズをしていないことを想定しています。

ingresscontroller.yml ファイルの例

apiVersion: operator.openshift.io/v1
kind: IngressController
metadata.
creation limestamp: hull
name: default
namespace: openshift-ingress-operato
spec:
endpointPublishingStrategy:
loadBalancer:
scope: External
providerParameters:
type: Avv5

aws: type: NLB type: LoadBalancerService

デフォルトの Ingress Controller が他にカスタマイズされている場合には、それに応じてファイルを修正してください。

ヒント

Ingress Controller に他のカスタマイズがなく、ロードバランサータイプのみを更新する場合 は、Switching the Ingress Controller from using a Classic Load Balancer to a Network Load Balancer に記載の手順に従ってください。

2. Ingress Controller の YAML ファイルを強制的に置き換えます。

\$ oc replace --force --wait -f ingresscontroller.yml

Ingress Controller の置き換えが完了するまでお待ちください。数分間の停止が予想されます。

28.5.2.4. 既存 AWS クラスターでの Ingress Controller ネットワークロードバランサーの設定

AWS Network Load Balancer (NLB) がサポートする Ingress Controller を既存のクラスターに作成できます。

前提条件

- AWS クラスターがインストールされている。
- インフラストラクチャーリソースの PlatformStatus は AWS である必要があります。
 - PlatformStatus が AWS であることを確認するには、以下を実行します。

\$ oc get infrastructure/cluster -o jsonpath='{.status.platformStatus.type}'
AWS

手順

既存のクラスターの AWS NLB がサポートする Ingress Controller を作成します。

1. Ingress Controller のマニフェストを作成します。

\$ cat ingresscontroller-aws-nlb.yaml

出力例

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: name: \$my_ingress_controller namespace: openshift-ingress-operator spec: domain: \$my_unique_ingress_domain 2 endpointPublishingStrategy: type: LoadBalancerService loadBalancer: scope: External providerParameters: type: AWS aws: type: NLB

\$my_ingress_controller を Ingress コントローラーの一意の名前に置き換えます。



\$my_unique_ingress_domain を、クラスター内のすべての Ingress コントローラー間で 一意のドメイン名に置き換えます。この変数は、DNS 名 **<clustername>.<domain>** のサ ブドメインである必要があります。

External を内部 NLB を使用するために Internal に置き換えることができます。

2. クラスターにリソースを作成します。

\$ oc create -f ingresscontroller-aws-nlb.yaml



重要

新規 AWS クラスターで Ingress Controller NLB を設定する前に、インストール設定ファ イルの作成 手順を完了する必要があります。

28.5.2.5. 新規 AWS クラスターでの Ingress Controller ネットワークロードバランサーの設定

新規クラスターに AWS Network Load Balancer (NLB) がサポートする Ingress Controller を作成できま す。

前提条件

● install-config.yaml ファイルを作成し、これに対する変更を完了します。

手順

新規クラスターの AWS NLB がサポートする Ingress Controller を作成します。

1. インストールプログラムが含まれるディレクトリーに切り替え、マニフェストを作成します。

\$./openshift-install create manifests --dir <installation_directory> 1

1 <

<installation_directory> については、クラスターの install-config.yaml ファイルが含まれるディレクトリーの名前を指定します。

2. cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml という名前のファイルを <installation_directory>/manifests/ ディレクトリーに作成します。

\$ touch <installation_directory>/manifests/cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml



るテイレクトリー名を指定します。

ファイルの作成後は、以下のようにいくつかのネットワーク設定ファイルが manifests/ ディレ クトリーに置かれます。

\$ Is <installation_directory>/manifests/cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml

出力例

cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml

3. エディターで **cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml** ファイルを開き、必要な Operator 設定を記述するカスタムリソース (CR) を入力します。

apiVersion: operator.openshift.io/v1 kind: IngressController metadata: creationTimestamp: null name: default namespace: openshift-ingress-operator spec: endpointPublishingStrategy: loadBalancer: scope: External providerParameters: type: AWS aws: type: NLB type: LoadBalancerService

- 4. cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml ファイルを保存し、テキストエディターを終 了します。
- オプション: manifests/cluster-ingress-default-ingresscontroller.yaml ファイルをバックアッ プします。インストールプログラムは、クラスターの作成時に manifests/ディレクトリーを削 除します。

28.5.3. 関連情報

- ネットワークのカスタマイズによる AWS へのクラスターのインストール
- NLB のサポートの詳細は、Network Load Balancer support on AWS を参照してください。
- CLB のプロキシープロトコルサポートの詳細は、Configure proxy protocol support for your Classic Load Balancer を参照してください。

28.6. サービスの外部 IP を使用した INGRESS クラスタートラフィックの設 定

外部 IP アドレスをサービスに割り当てることで、これをクラスター外のトラフィックで使用できるようにします。通常、これはベアメタルハードウェアにインストールされているクラスターの場合にのみ 役立ちます。外部ネットワークインフラストラクチャーは、トラフィックをサービスにルーティングす るように正しく設定される必要があります。

28.6.1. 前提条件

クラスターは ExternallP が有効にされた状態で設定されます。詳細は、サービスの ExternallP の設定 を参照してください。



注記

egress IP に同じ ExternalIP を使用しないでください。

28.6.2. ExternalIP のサービスへの割り当て

ExternalIP をサービスに割り当てることができます。クラスターが ExternalIP を自動的に割り当てする ように設定されている場合、ExternalIP をサービスに手動で割り当てる必要がない場合があります。

手順

1. オプション: ExternallP で使用するために設定される IP アドレス範囲を確認するには、以下の コマンドを入力します。

\$ oc get networks.config cluster -o jsonpath='{.spec.externalIP}{"\n"}'

autoAssignCIDRs が設定されている場合、**spec.externalIPs** フィールドが指定されていない 場合、 OpenShift Container Platform は ExternalIP を新規 **Service** オブジェクトに自動的に割 り当てます。

- 2. ExternalIP をサービスに割り当てます。
 - a. 新規サービスを作成する場合は、**spec.externallPs** フィールドを指定し、1つ以上の有効な IP アドレスの配列を指定します。以下に例を示します。

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: svc-with-externalip
spec:
...
externalIPs:
- 192.174.120.10
```

b. ExternallP を既存のサービスに割り当てる場合は、以下のコマンドを入力します。<name> をサービス名に置き換えます。<ip_address> を有効な ExternallP アドレスに置き換えま す。コンマで区切られた複数の IP アドレスを指定できます。

```
$ oc patch svc <name> -p \
    '{
        "spec": {
            "externalIPs": [ "<ip_address>" ]
        }
}'
```

以下に例を示します。

\$ oc patch svc mysql-55-rhel7 -p '{"spec":{"externallPs":["192.174.120.10"]}}'

出力例

"mysql-55-rhel7" patched

 ExternallP アドレスがサービスに割り当てられていることを確認するには、以下のコマンドを 入力します。新規サービスに ExternallP を指定した場合、まずサービスを作成する必要があり ます。

\$ oc get svc

出力例

NAMECLUSTER-IPEXTERNAL-IPPORT(S)AGEmysql-55-rhel7172.30.131.89192.174.120.103306/TCP13m

28.6.3. 関連情報

サービスの ExternalIP の設定

28.7. NODEPORT を使用した INGRESS クラスタートラフィックの設定

OpenShift Container Platform は、クラスター内で実行されるサービスを使用してクラスター外からの 通信を可能にする方法を提供します。この方法は **NodePort** を使用します。

28.7.1. NodePort を使用したトラフィックのクラスターへの送信

NodePort タイプの Service リソースを使用して、クラスター内のすべてのノードの特定のポートで サービスを公開します。ポートは Service リソースの .spec.ports[*].nodePort フィールドで指定され ます。



重要

ノードポートを使用するには、追加のポートリソースが必要です。

NodePort は、ノードの IP アドレスの静的ポートでサービスを公開します。 NodePort はデフォルトで 30000 から 32767 の範囲に置かれます。つまり、NodePort はサービスの意図されるポートに一致しな いことが予想されます。たとえば、ポート 8080 はノードのポート 31020 として公開できます。

管理者は、外部 IP アドレスがノードにルーティングされることを確認する必要があります。

NodePort および外部 IP は独立しており、両方を同時に使用できます。



注記

このセクションの手順では、クラスターの管理者が事前に行っておく必要のある前提条 件があります。

28.7.2. 前提条件

以下の手順を開始する前に、管理者は以下の条件を満たしていることを確認する必要があります。

- 要求がクラスターに到達できるように、クラスターネットワーク環境に対して外部ポートを セットアップします。
- クラスター管理者ロールを持つユーザーが1名以上いることを確認します。このロールをユー ザーに追加するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc adm policy add-cluster-role-to-user cluster-admin <user_name>

 OpenShift Container Platform クラスターを、1つ以上のマスターと1つ以上のノード、および クラスターへのネットワークアクセスのあるクラスター外のシステムと共に用意します。この 手順では、外部システムがクラスターと同じサブセットにあることを前提とします。別のサブ セットの外部システムに必要な追加のネットワーク設定については、このトピックでは扱いま せん。

28.7.3. プロジェクトおよびサービスの作成

公開するプロジェクトおよびサービスが存在しない場合、最初にプロジェクトを作成し、次にサービス を作成します。

プロジェクトおよびサービスがすでに存在する場合は、サービスを公開してルートを作成する手順に進みます。

前提条件

• クラスター管理者として oc CLI をインストールし、ログインします。

手順

1. oc new-project コマンドを実行して、サービス用の新しいプロジェクトを作成します。

\$ oc new-project myproject

2. oc new-app コマンドを使用してサービスを作成します。

\$ oc new-app nodejs:12~https://github.com/sclorg/nodejs-ex.git

3. サービスが作成されたことを確認するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get svc -n myproject

出力例

NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE nodejs-ex ClusterIP 172.30.197.157 <none> 8080/TCP 70s

デフォルトで、新規サービスには外部 IP アドレスがありません。

28.7.4. ルートの作成によるサービスの公開

oc expose コマンドを使用して、サービスをルートとして公開することができます。

手順

サービスを公開するには、以下を実行します。

- 1. OpenShift Container Platform にログインします。
- 2. 公開するサービスが置かれているプロジェクトにログインします。

\$ oc project myproject

3. アプリケーションのノードポートを公開するには、次のコマンドを入力して、サービスのカス タムリソース定義 (CRD) を変更します。

\$ oc edit svc <service_name>

出力例

spec:
ports:
- name: 8443-tcp
nodePort: 30327 1
port: 8443
protocol: TCP
targetPort: 8443
sessionAffinity: None
type: NodePort 2



オプション: アプリケーションのノードポート範囲を指定します。デフォルトでは、 OpenShift Container Platform は **30000-32767** 範囲で使用可能なポートを選択します。

サービスタイプを定義します。

4. オプション: サービスが公開されるノードポートで利用可能なことを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get svc -n myproject

出力例

NAMETYPECLUSTER-IPEXTERNAL-IPPORT(S)AGEnodejs-exClusterIP172.30.217.127<none>3306/TCP9m44snodejs-ex-ingressNodePort172.30.107.72<none>3306:31345/TCP39s

5. オプション: **oc new-app** コマンドによって自動的に作成されたサービスを削除するには、以下 のコマンドを入力します。

\$ oc delete svc nodejs-ex

検証

サービスノードポートが 30000 ~ 32767 の範囲のポートで更新されていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

\$ oc get svc

次の出力例では、更新されたポートは 30327 です。

出力例

NAMETYPECLUSTER-IPEXTERNAL-IPPORT(S)AGEhttpdNodePort172.xx.xx.xx<none>8443:30327/TCP109s

28.7.5. 関連情報

• ノードポートサービス範囲の設定

28.8. ロードバランサーの許可された送信元範囲を使用した INGRESS クラ スタートラフィックの設定

IngressController の IP アドレス範囲の一覧を指定できます。**endpointPublishingStrategy** が **LoadBalancerService** の場合、これにより、ロードバランサーサービスへのアクセスが制限されま す。

28.8.1. ロードバランサーの許可されるソース範囲の設定

spec.endpointPublishingStrategy.loadBalancer.allowedSourceRanges フィールドを有効にして設定できます。ロードバランサーの許可されるソース範囲を設定することで、Ingress Contoller のロードバランサーへのアクセスを、指定された IP アドレス範囲のリストに制限できます。Ingress Operator はロードバランサー Service を調整し、AllowedSourceRanges に基づいて spec.loadBalancerSourceRanges フィールドを設定します。



注記

以前のバージョンの OpenShift Container Platform で spec.loadBalancerSourceRanges フィールドまたはロードバランサーサービスアノ テーション service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges をすでに設定し ている場合、Ingress コントローラーはアップグレード後に Progressing=True のレポー トを開始します。これを修正するには、spec.loadBalancerSourceRanges フィールド を上書きし、service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges アノテーショ ンをクリアする AllowedSourceRanges を設定します。Ingress Controller は、再び Progressing=False の報告を開始します。

前提条件

実行中のクラスターにデプロイされた Ingress Controller があります。

手順

• 次のコマンドを実行して、Ingress Controller の許可されるソース範囲 API を設定します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default \ --type=merge --patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy": \ {"loadBalancer":{"allowedSourceRanges":["0.0.0.0/0"]}}}'

例の値 0.0.0.0/0 は、許可されるソース範囲を指定します。

28.8.2. ロードバランサーの許可されたソース範囲への移行

アノテーション service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges をすでに設定している場合 は、ロードバランサーの許可されたソース範囲に移行できます。AllowedSourceRanges を設定する と、Ingress コントローラーは AllowedSourceRanges 値に基づいて

spec.loadBalancerSourceRanges フィールドを設定し、service.beta.kubernetes.io/load-balancersource-ranges アノテーションを設定解除します。



注記

以前のバージョンの OpenShift Container Platform で spec.loadBalancerSourceRanges フィールドまたはロードバランサーサービスアノ テーション service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges をすでに設定し ている場合、Ingress コントローラーはアップグレード後に Progressing=True のレポー トを開始します。.これを修正するには、spec.loadBalancerSourceRanges フィールド を上書きし、service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges アノテーショ ンをクリアする AllowedSourceRanges を設定します。Ingress Controller は再び Progressing=False の報告を開始します。

前提条件

• service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges アノテーションを設定している。

手順

1. service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges が設定されていることを確認しま す。

\$ oc get svc router-default -n openshift-ingress -o yaml

出力例

apiVersion: v1 kind: Service metadata: annotations: service.beta.kubernetes.io/load-balancer-source-ranges: 192.168.0.1/32

2. spec.loadBalancerSourceRanges フィールドが設定されていないことを確認します。

\$ oc get svc router-default -n openshift-ingress -o yaml

```
出力例
```

```
...
spec:
loadBalancerSourceRanges:
- 0.0.0.0/0
...
```

3. クラスターを OpenShift Container Platform 4.12 に更新します。

4. 次のコマンドを実行して、ingresscontrollerの許可されるソース範囲 APIを設定します。

\$ oc -n openshift-ingress-operator patch ingresscontroller/default \ --type=merge --patch='{"spec":{"endpointPublishingStrategy": \ {"loadBalancer":{"allowedSourceRanges":["0.0.0.0/0"]}}}} 1

例の値 0.0.0.0/0 は、許可されるソース範囲を指定します。

28.8.3. 関連情報

1

• クラスターの更新
第29章 KUBERNETES NMSTATE

29.1. KUBERNETES NMSTATE OPERATOR について

Kubernetes NMState Operator は、NMState の OpenShift Container Platform クラスターのノード間 でステートドリブンのネットワーク設定を実行するための Kubernetes API を提供します。Kubernetes NMState Operator は、ユーザーに対して、クラスターノードの各種のネットワークインターフェイス タイプ、DNS、およびルーティングを設定する機能を提供します。さらに、クラスターノードのデーモ ンは、各ノードの API サーバーへのネットワークインターフェイスの状態の定期的な報告を行います。



重要

Red Hat は、ベアメタル、IBM Power、IBM Z、IBM[®] LinuxONE、VMware vSphere、および OpenStack インストール上の実稼働環境で Kubernetes NMState Operator をサポートします。

OpenShift Container Platform で NMState を使用する前に、Kubernetes NMState Operator をインストールする必要があります。



注記

Kubernetes NMState Operator は、セカンダリー NIC のネットワーク設定を更新しま す。プライマリー NIC または **br-ex** ブリッジのネットワーク設定を更新できません。

OpenShift Container Platform は **nmstate** を使用して、ノードネットワークの状態を報告し、これを設 定します。これにより、たとえばすべてのノードに Linux ブリッジを作成するなど、単一の設定マニ フェストをクラスターに適用して、ネットワークポリシー設定を変更できるようになります。

ノードのネットワークは、以下のオブジェクトによって監視され更新されます。

NodeNetworkState

そのノード上のネットワークの状態を報告します。

NodeNetworkConfigurationPolicy

ノードで要求されるネットワーク設定について説明します。NodeNetworkConfigurationPolicyマニフェストをクラスターに適用して、インターフェイスの追加および削除など、ノードネットワーク設定を更新します。

NodeNetworkConfigurationEnactment

各ノードに制定されたネットワークポリシーを報告します。

29.1.1. Kubernetes NMState Operator のインストール

ウェブコンソールまたは CLI を使用して、Kubernetes NMState Operator をインストールできます。

29.1.1.1. Web コンソールを使用した Kubernetes NMState Operator のインストール

Web コンソールを使用して Kubernetes NMState Operator をインストールできます。インストールが 完了すると、Operator はすべてのクラスターノードに NMState State Controller をデーモンセットと してデプロイできます。

前提条件

• cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. Operators → OperatorHub を選択します。
- 2. All Items の下の検索フィールドに、nmstate と入力し、Enter をクリックして Kubernetes NMState Operator を検索します。
- 3. Kubernetes NMState Operator の検索結果をクリックします。
- 4. Install をクリックして、Install Operator ウィンドウを開きます。
- 5. Install をクリックして Operator をインストールします。
- 6. Operator のインストールが完了したら、View Operator をクリックします。
- 7. Provided APIs で Create Instance をクリックし、kubernetes-nmstate のインスタンスを作成 するダイアログボックスを開きます。
- 8. ダイアログボックスの Name フィールドで、インスタンスの名前が nmstate であることを確認 します。



注記

名前の制限は既知の問題です。インスタンスはクラスター全体のシングルトンで す。

9. デフォルト設定を受け入れ、Create をクリックしてインスタンスを作成します。

概要

完了後に、Operator はすべてのクラスターノードに NMState State Controller をデーモンセットとし てデプロイしています。

29.1.1.2. CLI を使用した Kubernetes NMState Operator のインストール

OpenShift CLI (**oc**) を使用して、Kubernetes NMState Operator をインストールできます。インストー ルが完了すると、Operator はすべてのクラスターノードに NMState State Controller をデーモンセッ トとしてデプロイできます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. **nmstateOperator** namespace を作成します。

\$ cat << EOF | oc apply -f apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: labels: kubernetes.io/metadata.name: openshift-nmstate name: openshift-nmstate name: openshift-nmstate spec: finalizers: - kubernetes EOF

2. OperatorGroup を作成します。

```
$ cat << EOF | oc apply -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
    annotations:
    olm.providedAPIs: NMState.v1.nmstate.io
    name: openshift-nmstate
    namespace: openshift-nmstate
spec:
    targetNamespaces:
    openshift-nmstate
EOF</pre>
```

3. **nmstate** Operator にサブスクライブします。

```
$ cat << EOF| oc apply -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1
kind: Subscription
metadata:
    labels:
        operators.coreos.com/kubernetes-nmstate-operator.openshift-nmstate: ""
        name: kubernetes-nmstate-operator
        namespace: openshift-nmstate
spec:
        channel: stable
        installPlanApproval: Automatic
        name: kubernetes-nmstate-operator
        source: redhat-operators
        sourceNamespace: openshift-marketplace
EOF</pre>
```

4. **nmstate** Operator のインスタンスを作成します。

\$ cat << EOF oc apply -f -
apiVersion: nmstate.io/v1
kind: NMState
metadata:
name: nmstate
EOF

検証

• **nmstate** Operator のデプロイメントが実行されていることを確認します。

oc get clusterserviceversion -n openshift-nmstate \ -o custom-columns=Name:.metadata.name,Phase:.status.phase

出力例

Name Phase Phase kubernetes-nmstate-operator.4.12.0-202210210157 Succeeded

29.2. ノードのネットワーク状態と設定の監視と更新

29.2.1. ノードのネットワーク状態の表示

ノードのネットワーク状態は、クラスター内のすべてのノードのネットワーク設定で す。NodeNetworkState オブジェクトはクラスター内のすべてのノードにあります。このオブジェクト は定期的に更新され、ノードのネットワークの状態を取得します。

手順

1. クラスターのすべての NodeNetworkState オブジェクトを一覧表示します。

\$ oc get nns

2. **NodeNetworkState** オブジェクトを検査して、そのノードにネットワークを表示します。この 例の出力は、明確にするために編集されています。

\$ oc get nns node01 -o yaml

出力例



29.2.2. CLI を使用したポリシーの管理

29.2.2.1. ノード上でのインターフェイスの作成

NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストをクラスターに適用してクラスター内のノード上にインターフェイスを作成します。マニフェストには、インターフェイスの要求された設定の詳細が含まれます。

デフォルトでは、マニフェストはクラスター内のすべてのノードに適用されます。インターフェイスを 特定ノードに追加するには、ノードセレクターの spec: nodeSelector パラメーターおよび適切な <key>:<value> を追加します。

複数の nmstate 対応ノードを同時に設定できます。この設定は、並列のノードの 50% に適用されま す。このストラテジーでは、ネットワーク接続に障害が発生した場合にクラスター全体が使用できなく なるのを回避します。クラスターの特定の部分に、ポリシーの並行設定を適用するには、 maxUnavailableフィールドを使用します。

手順

1. NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストを作成します。以下の例は、すべてのワー カーノードで Linux ブリッジを設定し、DNS リゾルバーを設定します。

apiVersion: nmstate.io/v1 kind: NodeNetworkConfigurationPolicy metadata: name: br1-eth1-policy spec: nodeSelector: 2 node-role.kubernetes.io/worker: "" 3 maxUnavailable: 3 4 desiredState: interfaces: - name: br1 description: Linux bridge with eth1 as a port 5 type: linux-bridge state: up ipv4: dhcp: true enabled: true auto-dns: false bridge: options: stp: enabled: false port: - name: eth1 dns-resolver: 6 config: search: - example.com



関連情報

- 同じポリシーで複数のインターフェイスを作成する例
- ポリシーの各種 IP の管理方法の例

29.2.3. ノード上でのノードネットワークポリシー更新の確認

NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストは、クラスターのノードについて要求されるネット ワーク設定を記述します。ノードネットワークポリシーには、要求されたネットワーク設定と、クラス ター全体でのポリシーの実行ステータスが含まれます。

ノードネットワークポリシーを適用する際に、NodeNetworkConfigurationEnactment オブジェクト がクラスター内のすべてのノードについて作成されます。ノードネットワーク設定の enactment (実行) は、そのノードでのポリシーの実行ステータスを表す読み取り専用オブジェクトです。ポリシーがノー ドに適用されない場合、そのノードの enactment (実行) にはトラブルシューティングのためのトレー スバックが含まれます。

手順

1. ポリシーがクラスターに適用されていることを確認するには、ポリシーとそのステータスをリ スト表示します。

\$ oc get nncp

オプション: ポリシーの設定に想定されている以上の時間がかかる場合は、特定のポリシーの要求される状態とステータスの状態を検査できます。

\$ oc get nncp <policy> -o yaml

オプション: ポリシーのすべてのノード上での設定に想定されている以上の時間がかかる場合は、クラスターの enactment (実行)のステータスをリスト表示できます。

\$ oc get nnce

4. オプション: 特定の enactment (実行) の設定 (失敗した設定のエラーレポートを含む) を表示す るには、以下を実行します。

\$ oc get nnce <node>.<policy> -o yaml

29.2.4. ノードからインターフェイスの削除

NodeNetworkConfigurationPolicy オブジェクトを編集し、インターフェイスの **state** を **absent** に設定して、クラスターの1つ以上のノードからインターフェイスを削除できます。

ノードからインターフェイスを削除しても、ノードのネットワーク設定は以前の状態に自動的に復元されません。以前の状態に復元する場合、そのノードのネットワーク設定をポリシーで定義する必要があります。

ブリッジまたはボンディングインターフェイスを削除すると、そのブリッジまたはボンディングイン ターフェイスに以前に接続されたか、それらの下位にあるノード NIC は **down** の状態になり、到達で きなくなります。接続が失われないようにするには、同じポリシーでノード NIC を設定し、ステータス を **up** にし、DHCP または静的 IP アドレスのいずれかになるようにします。



注記

インターフェイスを追加したポリシーを削除しても、ノード上のポリシーの設定は変更 されません。NodeNetworkConfigurationPolicy はクラスターのオブジェクトですが、 これは要求される設定のみを表します。 同様に、インターフェイスを削除してもポリシーは削除されません。

手順

 インターフェイスの作成に使用する NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストを更新し ます。以下の例は Linux ブリッジを削除し、接続が失われないように DHCP で eth1 NIC を設 定します。



1 ポリシーマニフェストのファイル名。

29.2.5. 異なるインターフェイスのポリシー設定の例

次の例は、さまざまな NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェスト設定を示しています。

最高のパフォーマンスを得るには、ポリシーを適用するときに次の要素を考慮してください。

- ポリシーを複数のノードに適用する必要がある場合は、ターゲットノードごとに NodeNetworkConfigurationPolicyマニフェストを作成します。ポリシーの範囲を1つのノー ドに設定すると、Kubernetes NMState Operator によるポリシー適用にかかる総時間が短縮さ れます。 対照的に、1つのポリシーに複数のノードの設定が含まれている場合、Kubernetes NMState Operator はポリシーを各ノードに順番に適用するため、ポリシー適用にかかる総時間が長くな ります。
- 関連するすべてのネットワーク設定を1つのポリシーで指定する必要があります。 ノードが再起動すると、Kubernetes NMState Operator はポリシーを適用する順序を制御でき ません。したがって、Kubernetes NMState Operator が相互依存するポリシーを順番に適用す ると、ネットワークオブジェクトがデグレード状態になる可能性があります。

29.2.5.1. 例: Linux ブリッジインターフェイスノードネットワーク設定ポリシー

NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストをクラスターに適用してクラスター内のノード上に Linux ブリッジインターフェイスを作成します。

以下の YAML ファイルは、Linux ブリッジインターフェイスのマニフェストの例です。これには、独自の情報で置き換える必要のあるサンプルの値が含まれます。

	<pre>apiVersion: nmstate.io/v1 kind: NodeNetworkConfigurationPolicy metadata: name: br1-eth1-policy 1 spec: nodeSelector: 2 kubernetes.io/hostname: <node01> 3 desiredState: interfaces: - name: br1 4 description: Linux bridge with eth1 as a port 5 type: linux-bridge 6 state: up 7 </node01></pre>
	ipv4: dhcp: true 8 enabled: true 9 bridge: options: stp: enabled: false 10 port: - name: eth1 11
	1 ポリシーの名前。
	2 オプション: nodeSelector パラメーターを含めない場合、ポリシーはクラスター内のすべての ノードに適用されます。
	3 この例では、hostname ノードセレクターを使用します。
	4.インターフェイスの名前。
Ę	5 オプション: 人間が判読できるインターフェイスの説明。
	6 インターフェイスのタイプ。この例では、ブリッジを作成します。
	7 作成後のインターフェイスの要求された状態。
	8 オプション: dhcp を使用しない場合は、静的 IP を設定するか、IP アドレスなしでインターフェイ スを出ることができます。
	9 この例では ipv4 を有効にします。
1	10 この例では stp を無効にします。
f	11 ブリッジが接続されるノードの NIC。

29.2.5.2. 例: VLAN インターフェイスノードネットワークの設定ポリシー

NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストをクラスターに適用してクラスター内のノード上に VLAN インターフェイスを作成します。



注記

1つの NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストで、ノードの VLAN インター フェイスに関連するすべての設定を定義します。たとえば、同じ NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストで、ノードの VLAN インターフェイスと VLAN インターフェイスの関連ルートを定義します。

ノードが再起動すると、Kubernetes NMState Operator はポリシーを適用する順序を制 御できません。したがって、関連するネットワーク設定に別々のポリシーを使用する と、Kubernetes NMState Operator がこれらのポリシーを順番に適用するため、ネット ワークオブジェクトがデグレード状態になる可能性があります。

以下の YAML ファイルは、VLAN インターフェイスのマニフェストの例です。これには、独自の情報で 置き換える必要のあるサンプルの値が含まれます。





29.2.5.3. 例: ボンドインターフェイスノードネットワークの設定ポリシー

NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストをクラスターに適用してノード上にボンドインター フェイスを作成します。



注記

OpenShift Container Platform は以下の bond モードのみをサポートします。

- mode=1 active-backup
- mode=2 balance-xor
- mode=4 802.3ad
- mode=5 balance-tlb
- mode=6 balance-alb

以下の YAML ファイルは、ボンドインターフェイスのマニフェストの例です。これには、独自の情報で 置き換える必要のあるサンプルの値が含まれます。



オプション: **nodeSelector** パラメーターを含めない場合、ポリシーはクラスター内のすべての ノードに適用されます。

- 3 この例では、hostname ノードセレクターを使用します。
- インターフェイスの名前。
- 5 オプション:人間が判読できるインターフェイスの説明。
- インターフェイスのタイプ。この例では、ボンドを作成します。
- 7 作成後のインターフェイスの要求された状態。
- 8 オプション: **dhcp** を使用しない場合は、静的 IP を設定するか、IP アドレスなしでインターフェイ スを出ることができます。
- 3 この例では ipv4 を有効にします。
- がンドのドライバーモード。この例では、アクティブなバックアップモードを使用します。
- 11 オプション: この例では、miimon を使用して 140ms ごとにボンドリンクを検査します。
- 12 ボンド内の下位ノードの NIC。
- 13 オプション: ボンドの Maximum transmission unit (MTU)指定がない場合、この値はデフォルトで 1500 に設定されます。

29.2.5.4. 例: イーサネットインターフェイスノードネットワークの設定ポリシー

NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストをクラスターに適用してクラスター内のノードにイー サネットインターフェイスを作成します。

以下の YAML ファイルは、イーサネットインターフェイスのマニフェストの例です。これには、独自の 情報で置き換える必要のあるサンプルの値が含まれます。



2 オプション: nodeSelector パラメーターを含めない場合、ポリシーはクラスター内のすべての ノードに適用されます。

- 3 この例では、hostname ノードセレクターを使用します。
- インターフェイスの名前。
- オプション:人間が判読できるインターフェイスの説明。
- インターフェイスのタイプ。この例では、イーサネットネットワークインターフェイスを作成します。
- 7 作成後のインターフェイスの要求された状態。
- 8 オプション: **dhcp** を使用しない場合は、静的 IP を設定するか、IP アドレスなしでインターフェイ スを出ることができます。
- 3 この例では ipv4 を有効にします。

29.2.5.5. 例: 同じノードネットワーク設定ポリシーでの複数のインターフェイス

同じノードネットワーク設定ポリシーで複数のインターフェイスを作成できます。これらのインター フェイスは相互に参照でき、単一のポリシーマニフェストを使用してネットワーク設定をビルドし、デ プロイできます。

以下の YAML ファイルの例では、2 つの NIC 間に **bond10** という名前のボンドと、ボンドに接続する **bond10.103** という名前の VLAN を作成します。



ipv4: dhcp: true 17 enabled: true 18

- 1 ポリシーの名前。
- 2 オプション: nodeSelector パラメーターを含めない場合、ポリシーはクラスター内のすべての ノードに適用されます。
- 3 この例では、hostname ノードセレクターを使用します。
- 4mインターフェイスの名前。
- 512オプション:人間が判読できるインターフェイスの説明。
- **6**13インターフェイスのタイプ。
- 714作成後のインターフェイスの要求された状態。
- 8 ボンドのドライバーモード。
- オプション: この例では、miimon を使用して 140ms ごとにボンドリンクを検査します。
- 10 ボンド内の下位ノードの NIC。
- 15 VLAN が接続されているノードの NIC。
- 16 VLAN タグ。
- オプション: dhcp を使用しない場合は、静的 IP を設定するか、IP アドレスなしでインターフェイ スを出ることができます。
- 18 この例では ipv4 を有効にします。

29.2.6. ブリッジに接続された NIC の静的 IP の取得



重要

NIC の静的 IP のキャプチャーは、テクノロジープレビュー機能としてのみ提供されま す。テクノロジープレビュー機能は、Red Hat 製品サポートのサービスレベルアグリー メント (SLA) の対象外であり、機能的に完全ではない場合があります。Red Hat は、実 稼働環境でこれらを使用することを推奨していません。テクノロジープレビュー機能 は、最新の製品機能をいち早く提供して、開発段階で機能のテストを行いフィードバッ クを提供していただくことを目的としています。

Red Hat のテクノロジープレビュー機能のサポート範囲に関する詳細は、テクノロジー プレビュー機能のサポート範囲 を参照してください。

29.2.6.1. 例: ブリッジに接続された NIC から静的 IP アドレスを継承する Linux ブリッジイン ターフェイスノードネットワーク設定ポリシー

クラスター内のノードに Linux ブリッジインターフェイスを作成し、単一の NodeNetworkConfigurationPolicy マニフェストをクラスターに適用して NIC の静的 IP 設定をブリッ ジに転送します。 以下の YAML ファイルは、Linux ブリッジインターフェイスのマニフェストの例です。これには、独自の情報で置き換える必要のあるサンプルの値が含まれます。

```
apiVersion: nmstate.io/v1
  kind: NodeNetworkConfigurationPolicy
  metadata:
   name: br1-eth1-copy-ipv4-policy 1
  spec:
   nodeSelector: 2
    node-role.kubernetes.io/worker: ""
   capture:
    eth1-nic: interfaces.name=="eth1" 3
    eth1-routes: routes.running.next-hop-interface=="eth1"
    br1-routes: capture.eth1-routes | routes.running.next-hop-interface := "br1"
   desiredState:
    interfaces:
     - name: br1
      description: Linux bridge with eth1 as a port
      type: linux-bridge 4
      state: up
      ipv4: "{{ capture.eth1-nic.interfaces.0.ipv4 }}" 5
      bridge:
       options:
        stp:
         enabled: false
       port:
        - name: eth1 6
     routes:
      config: "{{ capture.br1-routes.routes.running }}"
    ポリシーの名前。
    オプション: nodeSelector パラメーターを含めない場合、ポリシーはクラスター内のすべての
2
    ノードに適用されます。この例では node-role.kubernetes.io/worker: "" ノードセレクターを使用
    し、クラスター内のすべてのワーカーノードを選択します。
    ブリッジを接続するノード NIC への参照。
3
    インターフェイスのタイプ。この例では、ブリッジを作成します。
4
    ブリッジインターフェイスの IP アドレス。この値は、spec.capture.eth1-nic エントリーにより参
5
    照される NIC の IP アドレスと一致します。
    ブリッジが接続されるノードの NIC。
6
```

関連情報

The NMPolicy project - Policy syntax

29.2.7. 例: IP 管理

以下の設定スニペットの例は、さまざまな IP 管理方法を示しています。

これらの例では、ethernet インターフェイスタイプを使用して、ポリシー設定に関連するコンテキスト を表示しつつ、サンプルを単純化します。これらの IP 管理のサンプルは、他のインターフェイスタイ プでも使用できます。

29.2.7.1. 静的

以下のスニペットは、イーサネットインターフェイスで IP アドレスを静的に設定します。

ir	nterfaces:
-	name: eth1
	description: static IP on eth1
	type: ethernet
	state: up
	ipv4:
	dhcp: false
	address:
	- ip: 192.168.122.250 1
	prefix-length: 24
	enabled: true

1 この値を、インターフェイスの静的 IP アドレスに置き換えます。

29.2.7.2. IP アドレスなし

以下のスニペットでは、インターフェイスに IP アドレスがないことを確認できます。

interfaces:
- name: eth1
description: No IP on eth1
type: ethernet
state: up
ipv4:
enabled: false

29.2.7.3. 動的ホストの設定

以下のスニペットは、動的 IP アドレス、ゲートウェイアドレス、および DNS を使用するイーサネット インターフェイスを設定します。

```
...

interfaces:

- name: eth1

description: DHCP on eth1

type: ethernet

state: up

ipv4:

dhcp: true

enabled: true
```

以下のスニペットは、動的 IP アドレスを使用しますが、動的ゲートウェイアドレスまたは DNS を使用 しないイーサネットインターフェイスを設定します。

```
...
interfaces:
- name: eth1
description: DHCP without gateway or DNS on eth1
type: ethernet
state: up
ipv4:
dhcp: true
auto-gateway: false
auto-dns: false
enabled: true
```

29.2.7.4. DNS

DNS 設定の定義は、/etc/resolv.conf ファイルの変更に類似しています。以下のスニペットは、ホスト に DNS 設定を定義します。

interfaces: 1
ipv4:
auto-dns: false
dns-resolver:
config:
search:
- example.com
 example.org
server:
- 8.8.8.8
I

Kubernetes NMState がカスタム DNS 設定を保存するためには、インターフェイスを **auto-dns:** false で設定するか、インターフェイスで静的 IP 設定を使用する必要があります。



重要

DNS リゾルバーの設定時に、インターフェイスとして OVNKubernetes が管理する Open vSwitch ブリッジである **br-ex** を使用することはできません。

29.2.7.5. 静的ルーティング

以下のスニペットは、インターフェイス eth1 に静的ルートおよび静的 IP を設定します。

```
...
interfaces:
- name: eth1
description: Static routing on eth1
```

type: ethernet state: up ipv4: dhcp: false address: - ip: 192.0.2.251 1 prefix-length: 24 enabled: true routes: config: - destination: 198.51.100.0/24 metric: 150 next-hop-address: 192.0.2.1 2 next-hop-interface: eth1 table-id: 254

イーサネットインターフェイスの静的 IP アドレス。

ノードトラフィックのネクストホップアドレス。これは、イーサネットインターフェイスに設定される IP アドレスと同じサブネットにある必要があります。

29.3. ノードのネットワーク設定のトラブルシューティング

ノードのネットワーク設定で問題が発生した場合には、ポリシーが自動的にロールバックされ、 enactment (実行) レポートは失敗します。これには、以下のような問題が含まれます。

- ホストで設定を適用できません。
- ホストはデフォルトゲートウェイへの接続を失います。
- ホストは API サーバーへの接続を失います。

29.3.1. 正確でないノードネットワーク設定のポリシー設定のトラブルシューティング

ノードネットワーク設定ポリシーを適用し、クラスター全体でノードのネットワーク設定への変更を適 用することができます。正確でない設定を適用する場合、以下の例を使用して、失敗したノードネット ワークポリシーのトラブルシューティングと修正を行うことができます。

この例では、Linux ブリッジポリシーが、3 つのコントロールプレーンノードと3 つのコンピュート ノードを持つサンプルクラスターに適用されます。ポリシーは正しくないインターフェイスを参照する ために、適用することができません。エラーを確認するには、利用可能な NMState リソースを調べま す。その後に、正しい設定でポリシーを更新できます。

手順

1. ポリシーを作成し、これをクラスターに適用します。以下の例では、**ens01**インターフェイス に単純なブリッジを作成します。

apiVersion: nmstate.io/v1 kind: NodeNetworkConfigurationPolicy metadata: name: ens01-bridge-testfail spec: desiredState: interfaces: - name: br1 description: Linux bridge with the wrong port type: linux-bridge state: up ipv4: dhcp: true enabled: true bridge: options: stp: enabled: false port: - name: ens01

\$ oc apply -f ens01-bridge-testfail.yaml

出力例

nodenetworkconfigurationpolicy.nmstate.io/ens01-bridge-testfail created

2. 以下のコマンドを実行してポリシーのステータスを確認します。

\$ oc get nncp

この出力は、ポリシーが失敗したことを示しています。

出力例

NAME STATUS ens01-bridge-testfail FailedToConfigure

ただし、ポリシーのステータスのみでは、すべてのノードで失敗したか、ノードのサブセット で失敗したかを確認することはできません。

 ノードのネットワーク設定の enactment (実行)をリスト表示し、ポリシーがいずれかのノード で成功したかどうかを確認します。このポリシーがノードのサブセットに対してのみ失敗した 場合は、問題が特定のノード設定にあることが示唆されます。このポリシーがすべてのノード で失敗した場合には、問題はポリシーに関連するものであることが示唆されます。

\$ oc get nnce

この出力は、ポリシーがすべてのノードで失敗したことを示しています。

出力例

NAMESTATUScontrol-plane-1.ens01-bridge-testfailFailedToConfigurecontrol-plane-2.ens01-bridge-testfailFailedToConfigurecontrol-plane-3.ens01-bridge-testfailFailedToConfigure

compute-1.ens01-bridge-testfail compute-2.ens01-bridge-testfail compute-3.ens01-bridge-testfail FailedToConfigure FailedToConfigure FailedToConfigure

4. 失敗した enactment (実行) のいずれかを表示し、トレースバックを確認します。以下のコマン ドは、出力ツール **jsonpath** を使用して出力をフィルターします。

\$ oc get nnce compute-1.ens01-bridge-testfail -o jsonpath='{.status.conditions[? (@.type=="Failing")].message}'

このコマンドは、簡潔にするために編集されている大きなトレースバックを返します。

出力例

error reconciling NodeNetworkConfigurationPolicy at desired state apply: , failed to execute nmstatectl set --no-commit --timeout 480: 'exit status 1' " libnmstate.error.NmstateVerificationError: desired _____ --name: br1 type: linux-bridge state: up bridge: options: group-forward-mask: 0 mac-ageing-time: 300 multicast-snooping: true stp: enabled: false forward-delay: 15 hello-time: 2 max-age: 20 priority: 32768 port: - name: ens01 description: Linux bridge with the wrong port ipv4: address: [] auto-dns: true auto-gateway: true auto-routes: true dhcp: true enabled: true ipv6: enabled: false mac-address: 01-23-45-67-89-AB mtu: 1500 current ====== ___ name: br1 type: linux-bridge

state: up bridge: options: group-forward-mask: 0 mac-ageing-time: 300 multicast-snooping: true stp: enabled: false forward-delay: 15 hello-time: 2 max-age: 20 priority: 32768 port: [] description: Linux bridge with the wrong port ipv4: address: [] auto-dns: true auto-gateway: true auto-routes: true dhcp: true enabled: true ipv6: enabled: false mac-address: 01-23-45-67-89-AB mtu: 1500 difference ========= --- desired +++ current @@ -13,8 +13,7 @@ hello-time: 2 max-age: 20 priority: 32768 - port: - - name: ens01 + port: [] description: Linux bridge with the wrong port ipv4: address: [] line 651, in _assert_interfaces_equal\n current state.interfaces[ifname],\nlibnmstate.error.NmstateVerificationError:

NmstateVerificationError は、desired ポリシー設定、ノード上のポリシーの current 設定、 および一致しないパラメーターを強調表示する difference を一覧表示します。この例で は、port は difference に組み込まれ、これは問題がポリシーのポート設定に関連するものであ ることを示唆します。

ポリシーが適切に設定されていることを確認するには、NodeNetworkState オブジェクトを要求して、1つまたはすべてのノードのネットワーク設定を表示します。以下のコマンドは、control-plane-1ノードのネットワーク設定を返します。

\$ oc get nns control-plane-1 -o yaml

出力は、ノード上のインターフェイス名は **ens1** であるものの、失敗したポリシーが **ens01** を 誤って使用していることを示します。

出力例

- ipv4: ... name: ens1 state: up type: ethernet

6. 既存のポリシーを編集してエラーを修正します。

\$ oc edit nncp ens01-bridge-testfail

port: - name: ens1

ポリシーを保存して修正を適用します。

7. ポリシーのステータスをチェックして、更新が正常に行われたことを確認します。

\$ oc get nncp

出力例

...

NAME STATUS ens01-bridge-testfail SuccessfullyConfigured

更新されたポリシーは、クラスターのすべてのノードで正常に設定されました。

第30章 クラスター全体のプロキシーの設定

実稼働環境では、インターネットへの直接アクセスを拒否し、代わりに HTTP または HTTPS プロキ シーを使用することができます。既存クラスターのプロキシーオブジェクトを変更 するか、新規クラス ターの **install-config.yaml** ファイルでプロキシー設定を行うことにより、OpenShift Container Platform をプロキシーを使用するように設定できます。

30.1. 前提条件

 クラスターがアクセスする必要のあるサイトを確認し、プロキシーをバイパスする必要がある かどうかを判断します。デフォルトで、すべてのクラスターシステムの egress トラフィック (クラスターをホストするクラウドのクラウドプロバイダー API に対する呼び出しを含む) はプ ロキシーされます。システム全体のプロキシーは、ユーザーのワークロードではなく、システ ムコンポーネントにのみ影響を与えます。プロキシーオブジェクトの spec.noProxy フィール ドにサイトを追加し、必要に応じてプロキシーをバイパスします。



注記

プロキシーオブジェクトの status.noProxy フィールドには、ほとんどのインストールタイプのインストール設定における

networking.machineNetwork[].cidr、**networking.clusterNetwork[].cidr**、および**networking.serviceNetwork[]**フィールドの値が設定されます。

Amazon Web Services (AWS)、Google Cloud Platform (GCP)、Microsoft Azure、および Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) へのインストールの場 合、**Proxy** オブジェクトの **status.noProxy** フィールドには、インスタンスメタ データのエンドポイント (**169.254.169.254**) も設定されます。



重要

使用しているインストールタイプに networking.machineNetwork[].cidr フィー ルドの設定が含まれていない場合は、ノード間のトラフィックがプロキシーをバ イパスできるようにするために、.status.noProxy フィールドにマシンの IP ア ドレスを手動で含める必要があります。

30.2. クラスター全体のプロキシーの有効化

Proxy オブジェクトは、クラスター全体の egress プロキシーを管理するために使用されます。プロキ シーを設定せずにクラスターがインストールまたはアップグレードされると、**Proxy** オブジェクトは引 き続き生成されますが、**spec** は設定されません。以下に例を示します。

apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Proxy
metadata:
name: cluster
spec:
trustedCA:
name: ""
status:

クラスター管理者は、この **cluster Proxy** オブジェクトを変更して OpenShift Container Platform のプロキシーを設定できます。

注記



cluster という名前の **Proxy** オブジェクトのみがサポートされ、追加のプロキシーを作成することはできません。

前提条件

• クラスター管理者のパーミッション。

注記

• OpenShift Container Platform **oc** CLI ツールがインストールされている。

手順

1. HTTPS 接続のプロキシーに必要な追加の CA 証明書が含まれる config map を作成します。



プロキシーのアイデンティティー証明書が RHCOS 信頼バンドルからの認証局に よって署名される場合は、これを省略できます。

a. 以下の内容で **user-ca-bundle.yaml** というファイルを作成して、PEM でエンコードされた 証明書の値を指定します。

apiVersion: v1
data:
ca-bundle.crt: 1
<my_pem_encoded_certs> (2)</my_pem_encoded_certs>
kind: ConfigMap
metadata:
name: user-ca-bundle 3
namespace: openshift-config 4

- このデータキーは ca-bundle.crt という名前にする必要があります。
- プロキシーのアイデンティティー証明書に署名するために使用される1つ以上の PEM でエンコードされた X.509 証明書。



4

Proxy オブジェクトから参照される config map 名。

config map は openshift-config namespace になければなりません。

b. このファイルから config map を作成します。

\$ oc create -f user-ca-bundle.yaml

2. oc edit コマンドを使用して Proxy オブジェクトを変更します。



3. プロキシーに必要なフィールドを設定します。

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Proxy

metadata:
spoc:
spec.
httpProxy: http:// <username>:<pswd>@<ip>:<port></port></ip></pswd></username>
httpsProxy: https:// <username>:<pswd>@<ip>:<port> 2</port></ip></pswd></username>
noProxy: example.com 3
readinessEndpoints:
- http://www.google.com 4
- https://www.google.com
trustedCA:
name: user-ca-bundle 5



クラスター外の HTTP 接続を作成するために使用するプロキシー URL。URL スキームは **http** である必要があります。

クラスター外で HTTPS 接続を作成するために使用するプロキシー URL。URL スキームは http または https である必要があります。URL スキームをサポートするプロキシーの URL を指定します。たとえば、ほとんどのプロキシーは、https を使用するように設定されていても、http しかサポートしていない場合、エラーを報告します。このエラーメッ セージはログに反映されず、代わりにネットワーク接続エラーのように見える場合があり ます。クラスターからの https 接続をリッスンするプロキシーを使用している場合は、プ ロキシーが使用する CA と証明書を受け入れるようにクラスターを設定する必要がある場 合があります。

3 プロキシーを除外するための宛先ドメイン名、ドメイン、IP アドレス、または他のネット ワーク CIDR のコンマ区切りの一覧。

サブドメインのみと一致するように、ドメインの前に.を付けます。たとえば、.y.com は x.y.com に一致しますが、y.com には一致しません。*を使用し、すべての宛先のプロキ シーをバイパスします。インストール設定で networking.machineNetwork[].cidr フィー ルドで定義されるネットワークに含まれていないワーカーをスケールアップする場合、そ れらをこの一覧に追加し、接続の問題を防ぐ必要があります。

httpProxy または **httpsProxy** フィールドのいずれも設定されていない場合に、この フィールドは無視されます。



httpProxy および **httpsProxy** の値をステータスに書き込む前の readiness チェックに使用 するクラスター外の1つ以上の URL。

- 5 HTTPS 接続のプロキシーに必要な追加の CA 証明書が含まれる、**openshift-config** namespace の config map の参照。ここで参照する前に config map が存在している必要 があります。このフィールドは、プロキシーのアイデンティティー証明書が RHCOS 信頼 バンドルからの認証局によって署名されない限り必要になります。
- 4. 変更を適用するためにファイルを保存します。

30.3. クラスター全体のプロキシーの削除

cluster プロキシーオブジェクトは削除できません。クラスターからプロキシーを削除するには、プロ キシーオブジェクトからすべての **spec** フィールドを削除します。

前提条件

クラスター管理者のパーミッション。

• OpenShift Container Platform **oc** CLI ツールがインストールされている。

手順

1. oc edit コマンドを使用してプロキシーを変更します。

\$ oc edit proxy/cluster

2. プロキシーオブジェクトからすべての **spec** フィールドを削除します。以下に例を示します。

apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Proxy
metadata:
name: cluster
spec: {}

3. 変更を適用するためにファイルを保存します。

関連情報

- CA バンドル証明書の置き換え
- プロキシー証明書のカスタマイズ
- How is the cluster-wide proxy setting applied to OpenShift Container Platform nodes?

第31章 カスタム PKI の設定

Web コンソールなどの一部のプラットフォームコンポーネントは、通信にルートを使用し、それらと対話するために他のコンポーネントの証明書を信頼する必要があります。カスタムのパブリックキーインフラストラクチャー (PKI)を使用している場合は、プライベートに署名された CA 証明書がクラスター 全体で認識されるようにこれを設定する必要があります。

プロキシー API を使用して、クラスター全体で信頼される CA 証明書を追加できます。インストール時 またはランタイム時にこれを実行する必要があります。

- インストール時に、クラスター全体のプロキシーを設定します。プライベートに署名された CA証明書は、install-config.yaml ファイルの additionalTrustBundle 設定で定義する必要が あります。 インストールプログラムは、定義した追加の CA 証明書が含まれる user-ca-bundle という名前 の ConfigMap を生成します。次に Cluster Network Operator は、これらの CA 証明書を Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS) 信頼バンドルにマージする trusted-ca-bundle ConfigMap を作成し、この ConfigMap はプロキシーオブジェクトの trustedCA フィールドで 参照されます。
- ランタイム時に、デフォルトのプロキシーオブジェクトを変更して、プライベートに署名された CA 証明書を追加します (これは、クラスターのプロキシー有効化のワークフローの一部です)。これには、クラスターで信頼される必要があるプライベートに署名された CA 証明書が含まれる ConfigMap を作成し、次にプライベートに署名された証明書の ConfigMap を参照するtrustedCA でプロキシーリソースを変更することが関係します。

注記

インストーラー設定の additionalTrustBundle フィールドおよびプロキシーリソースの trustedCA フィールドは、クラスター全体の信頼バンドルを管理するために使用されま す。additionalTrustBundle はインストール時に使用され、プロキシーの trustedCA が ランタイム時に使用されます。

trustedCA フィールドは、クラスターコンポーネントによって使用されるカスタム証明 書とキーのペアを含む **ConfigMap** の参照です。

31.1. インストール時のクラスター全体のプロキシーの設定

実稼働環境では、インターネットへの直接アクセスを拒否し、代わりに HTTP または HTTPS プロキ シーを使用することができます。プロキシー設定を install-config.yaml ファイルで行うことにより、新 規の OpenShift Container Platform クラスターをプロキシーを使用するように設定できます。

前提条件

- 既存の install-config.yaml ファイルがある。
- クラスターがアクセスする必要のあるサイトを確認済みで、それらのいずれかがプロキシーを バイパスする必要があるかどうかを判別している。デフォルトで、すべてのクラスター egress トラフィック (クラスターをホストするクラウドについてのクラウドプロバイダー API に対す る呼び出しを含む) はプロキシーされます。プロキシーを必要に応じてバイパスするために、サ イトを Proxy オブジェクトの spec.noProxy フィールドに追加している。



注記

Proxy オブジェクトの **status.noProxy** フィールドには、インストール設定の **networking.machineNetwork[].cidr**、 **networking.clusterNetwork[].cidr**、お よび **networking.serviceNetwork[]** フィールドの値が設定されます。

Amazon Web Services (AWS)、Google Cloud Platform (GCP)、Microsoft Azure、および Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) へのインストールの場 合、**Proxy** オブジェクトの **status.noProxy** フィールドには、インスタンスメタ データのエンドポイント (**169.254.169.254**) も設定されます。

手順

1. install-config.yaml ファイルを編集し、プロキシー設定を追加します。以下に例を示します。

apiVersion: v1 baseDomain: my.domain.com proxy: httpProxy: http://<username>:<pswd>@<ip>:<port> 1 httpsProxy: https://<username>:<pswd>@<ip>:<port> 2 noProxy: ec2.<aws region>.amazonaws.com,elasticloadbalancing. <aws region>.amazonaws.com,s3.<aws region>.amazonaws.com 3 additionalTrustBundle: | 4 -----BEGIN CERTIFICATE-----<MY TRUSTED CA CERT> -----END CERTIFICATE----additionalTrustBundlePolicy: <policy_to_add_additionalTrustBundle> 5

クラスター外の HTTP 接続を作成するために使用するプロキシー URL。URL スキームは **http** である必要があります。

- クラスター外で HTTPS 接続を作成するために使用するプロキシー URL。
- 3

プロキシーから除外するための宛先ドメイン名、IP アドレス、または他のネットワーク CIDR のコンマ区切りのリスト。サブドメインのみと一致するように、ドメインの前に. を付けます。たとえば、.y.com は x.y.com に一致しますが、y.com には一致しません。* を使用し、すべての宛先のプロキシーをバイパスします。Amazon EC2、Elastic Load Balancing、および S3 VPC エンドポイントを VPC に追加した場合は、これらのエンドポ イントを noProxy フィールドに追加する必要があります。

指定されている場合、インストールプログラムは HTTPS 接続のプロキシーに必要な1つ 以上の追加の CA 証明書が含まれる user-ca-bundle という名前の ConfigMap を openshift-config namespace に生成します。次に Cluster Network Operator は、これら のコンテンツを Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS) 信頼バンドルにマージする trusted-ca-bundle ConfigMap を作成し、この ConfigMap は Proxy オブジェクトの trustedCA フィールドで参照されます。additionalTrustBundle フィールドは、プロキ シーのアイデンティティー証明書が RHCOS 信頼バンドルからの認証局によって署名され ない限り必要になります。



注記



インストールプログラムは、プロキシーの readinessEndpoints フィールドをサポートしません。

注記

インストーラーがタイムアウトした場合は、インストーラーの wait-for コマン ドを使用してデプロイメントを再起動してからデプロイメントを完了します。以 下に例を示します。

\$./openshift-install wait-for install-complete --log-level debug

2. ファイルを保存し、OpenShift Container Platform のインストール時にこれを参照します。

インストールプログラムは、指定の install-config.yaml ファイルのプロキシー設定を使用する cluster という名前のクラスター全体のプロキシーを作成します。プロキシー設定が指定されていない場 合、cluster Proxy オブジェクトが依然として作成されますが、これには spec がありません。



注記

cluster という名前の **Proxy** オブジェクトのみがサポートされ、追加のプロキシーを作成することはできません。

31.2. クラスター全体のプロキシーの有効化

Proxy オブジェクトは、クラスター全体の egress プロキシーを管理するために使用されます。プロキ シーを設定せずにクラスターがインストールまたはアップグレードされると、**Proxy** オブジェクトは引 き続き生成されますが、**spec** は設定されません。以下に例を示します。

apiVersion: config.openshift.io/v1 kind: Proxy metadata: name: cluster spec: trustedCA: name: "" status:

クラスター管理者は、この **cluster Proxy** オブジェクトを変更して OpenShift Container Platform のプロキシーを設定できます。



注記

cluster という名前の **Proxy** オブジェクトのみがサポートされ、追加のプロキシーを作成することはできません。

前提条件

- クラスター管理者のパーミッション。
- OpenShift Container Platform **oc** CLI ツールがインストールされている。

手順

1. HTTPS 接続のプロキシーに必要な追加の CA 証明書が含まれる config map を作成します。



注記

プロキシーのアイデンティティー証明書が RHCOS 信頼バンドルからの認証局に よって署名される場合は、これを省略できます。

a. 以下の内容で **user-ca-bundle.yaml** というファイルを作成して、PEM でエンコードされた 証明書の値を指定します。

apiVersion: v1
data:
ca-bundle.crt: 1
<my_pem_encoded_certs> 2</my_pem_encoded_certs>
kind: ConfigMap
metadata:
name: user-ca-bundle 3
namespace: openshift-config 4

- このデータキーは ca-bundle.crt という名前にする必要があります。
- 2

3

4

プロキシーのアイデンティティー証明書に署名するために使用される1つ以上の PEM でエンコードされた X.509 証明書。

- Proxy オブジェクトから参照される config map 名。
 - config map は openshift-config namespace になければなりません。
- b. このファイルから config map を作成します。

\$ oc create -f user-ca-bundle.yaml

2. oc edit コマンドを使用して Proxy オブジェクトを変更します。



3. プロキシーに必要なフィールドを設定します。

apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Proxy
metadata:
name: cluster
spec:
httpProxy: http:// <username>:<pswd>@<ip>:<port> 1</port></ip></pswd></username>
httpsProxy: https:// <username>:<pswd>@<ip>:<port> 2</port></ip></pswd></username>
noProxy: example.com 3
readinessEndpoints:
- http://www.google.com 4

- https://www.google.com trustedCA: name: user-ca-bundle 5



クラスター外の HTTP 接続を作成するために使用するプロキシー URL。URL スキームは **http** である必要があります。

2 クラスター外で HTTPS 接続を作成するために使用するプロキシー URL。URL スキームは http または https である必要があります。URL スキームをサポートするプロキシーの URL を指定します。たとえば、ほとんどのプロキシーは、https を使用するように設定さ れていても、http しかサポートしていない場合、エラーを報告します。このエラーメッ セージはログに反映されず、代わりにネットワーク接続エラーのように見える場合があり ます。クラスターからの https 接続をリッスンするプロキシーを使用している場合は、プ ロキシーが使用する CA と証明書を受け入れるようにクラスターを設定する必要がある場 合があります。



プロキシーを除外するための宛先ドメイン名、ドメイン、IP アドレス、または他のネット ワーク CIDR のコンマ区切りの一覧。

サブドメインのみと一致するように、ドメインの前に.を付けます。たとえば、.y.com は x.y.com に一致しますが、y.com には一致しません。*を使用し、すべての宛先のプロキ シーをバイパスします。インストール設定で networking.machineNetwork[].cidr フィー ルドで定義されるネットワークに含まれていないワーカーをスケールアップする場合、そ れらをこの一覧に追加し、接続の問題を防ぐ必要があります。

httpProxy または **httpsProxy** フィールドのいずれも設定されていない場合に、この フィールドは無視されます。



5 HTTPS 接続のプロキシーに必要な追加の CA 証明書が含まれる、**openshift-config** namespace の config map の参照。ここで参照する前に config map が存在している必要 があります。このフィールドは、プロキシーのアイデンティティー証明書が RHCOS 信頼 バンドルからの認証局によって署名されない限り必要になります。

4. 変更を適用するためにファイルを保存します。

31.3. OPERATOR を使用した証明書の挿入

カスタム CA 証明書が ConfigMap 経由でクラスターに追加されると、Cluster Network Operator は ユーザーによってプロビジョニングされる CA 証明書およびシステム CA 証明書を単一バンドルにマー ジし、信頼バンドルの挿入を要求する Operator にマージされたバンドルを挿入します。



重要

config.openshift.io/inject-trusted-cabundle="true" ラベルを config map に追加する と、そこに格納されている既存データが削除されます。Cluster Network Operator は config map の所有権を取得し、**ca-bundle** をデータとしてのみ受け入れま す。**service.beta.openshift.io/inject-cabundle=true** アノテーションまたは同様の設定 を使用して **service-ca.crt** を保存するには、別の config map を使用する必要がありま す。同じ config map に **config.openshift.io/inject-trusted-cabundle="true"** ラベルと **service.beta.openshift.io/inject-cabundle=true** アノテーションを追加すると、問題が 発生する可能性があります。 Operator は、以下のラベルの付いた空の ConfigMap を作成してこの挿入を要求します。

config.openshift.io/inject-trusted-cabundle="true"

空の ConfigMap の例:

apiVersion: v1 data: {} kind: ConfigMap metadata: labels: config.openshift.io/inject-trusted-cabundle: "true" name: ca-inject 1 namespace: apache



空の ConfigMap 名を指定します。

Operator は、この ConfigMap をコンテナーのローカル信頼ストアにマウントします。



注記

信頼された CA 証明書の追加は、証明書が Red Hat Enterprise Linux CoreOS (RHCOS) 信頼バンドルに含まれない場合にのみ必要になります。

証明書の挿入は Operator に制限されません。Cluster Network Operator は、空の ConfigMap が **config.openshift.io**/**inject-trusted-cabundle=true** ラベルを使用して作成される場合に、すべての namespace で証明書を挿入できます。

ConfigMap はすべての namespace に置くことができますが、ConfigMap はカスタム CA を必要とする Pod 内の各コンテナーに対してボリュームとしてマウントされる必要があります。以下に例を示しま す。

```
apiVersion: apps/v1
kind: Deployment
metadata:
 name: my-example-custom-ca-deployment
 namespace: my-example-custom-ca-ns
spec:
 ...
  spec:
   ...
   containers:
    - name: my-container-that-needs-custom-ca
      volumeMounts:
      - name: trusted-ca
       mountPath: /etc/pki/ca-trust/extracted/pem
       readOnly: true
   volumes:
   - name: trusted-ca
    configMap:
      name: trusted-ca
```

items: - key: ca-bundle.crt 1 path: tls-ca-bundle.pem 2

2

ca-bundle.crtは ConfigMap キーとして必要になります。

tls-ca-bundle.pem は ConfigMap パスとして必要になります。

第32章 RHOSP での負荷分散

32.1. ロードバランサーサービスの制限

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) 上の OpenShift Container Platform クラスターは、Octavia を 使用してロードバランサーサービスを処理します。その結果、該当するクラスターには多くの機能的制 限が生じます。

RHOSP Octavia では、Amphora と OVN の 2 つのプロバイダーがサポートされています。これらのプロバイダーでは、利用可能な機能と実装の詳細が異なります。そのような差異は、クラスター上に作成 されるロードバランサーサービスに影響を及ぼします。

32.1.1. ローカルの外部トラフィックポリシー

ロードバランサーサービスで外部トラフィックポリシー (ETP) パラメーター **.spec.externalTrafficPolicy** を設定して、受信トラフィックがサービスエンドポイント Pod に到達する 際に、そのソース IP アドレスを保存できます。ただし、クラスターが Amphora Octavia プロバイダー を使用している場合じゃ、トラフィックのソース IP は Amphora 仮想マシンの IP アドレスに置き換え られます。クラスターが OVN Octavia プロバイダーを使用している場合、この動作は発生しません。

ETP オプションを Local に設定する場合は、ロードバランサー用にヘルスモニターを作成する必要が あります。ヘルスモニターがないと、トラフィックは機能エンドポイントを持たないノードにルーティ ングされる可能性があり、そうなると接続が切断されます。ヘルスモニターの作成を Cloud Provider OpenStack に強制するには、クラウドプロバイダー設定の create-monitor オプションの値を true に設 定する必要があります。

RHOSP 16.2 では、OVN Octavia プロバイダーはヘルスモニターをサポートしません。そのため、EPP をローカルに設定することはサポートされていません。

RHOSP 16.2 では、Amphora Octavia プロバイダーは UDP プールでの HTTP モニターをサポートしま せん。その結果、UDP ロードバランサーサービスには **UDP-CONNECT** モニターが代わりに作成されま す。実装の詳細に基づき、この設定は OVN-Kubernetes CNI プラグインでのみ適切に機能します。 OpenShift SDN CNI プラグインを使用している場合、UDP サービスのアクティブなノードの検出が不 確実になります。

32.1.2. ロードバランサーのソース範囲

.spec.loadBalancerSourceRanges プロパティーを使用して、ソース IP に従ってロードバランサーを 通過できるトラフィックを制限します。このプロパティーは、Amphora Octavia プロバイダーで使用す る場合に限りサポートされます。クラスターが OVN Octavia プロバイダーを使用している場合、オプ ションは無視され、トラフィックは制限されません。

32.2. KURYR SDN を使用した OCTAVIA OVN ロードバランサープロバイ ダードライバーの使用



重要

Kuryr は非推奨の機能です。非推奨の機能は依然として OpenShift Container Platform に 含まれており、引き続きサポートされますが、本製品の今後のリリースで削除されるた め、新規デプロイメントでの使用は推奨されません。

OpenShift Container Platform で非推奨となったか、削除された主な機能の最新の一覧に ついては、OpenShift Container Platform リリースノートの非推奨および削除された機 能 セクションを参照してください。

OpenShift Container Platform クラスターが Kuryr を使用し、これが後に RHOSP 16 にアップグレード された Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) 13 クラウドにインストールされている場合、これを Octavia OVN プロバイダードライバーを使用するように設定できます。



重要

Kuryr はプロバイダードライバーの変更後に既存のロードバランサーを置き換えます。このプロセスにより、ダウンタイムが生じます。

前提条件

- RHOSP CLIの openstack をインストールしている。
- OpenShift Container Platform CLI (oc) をインストールしている。
- RHOSP の Octavia OVN ドライバーが有効になっていることを確認している。

ヒント

利用可能な Octavia ドライバーの一覧を表示するには、コマンドラインで **openstack loadbalancer provider list** を入力します。

ovn ドライバーはコマンドの出力に表示されます。

手順

Octavia Amphora プロバイダードライバーから Octavia OVN に変更するには、以下を実行します。

1. kuryr-config ConfigMap を開きます。コマンドラインで、以下を実行します。

\$ oc -n openshift-kuryr edit cm kuryr-config

2. ConfigMap で、**kuryr-octavia-provider: default** が含まれる行を削除します。以下に例を示します。



Cluster Network Operator が変更を検出し、**kuryr-controller** および **kuryr-cni** Pod を再デプロ イするのを待機します。このプロセスには数分の時間がかかる可能性があります。

3. **kuryr-config** ConfigMap アノテーションで **ovn** をその値として表示されていることを確認し ます。コマンドラインで、以下を実行します。

\$ oc -n openshift-kuryr edit cm kuryr-config

ovn プロバイダーの値は出力に表示されます。

kind: ConfigMap
metadata:
annotations:
networkoperator.openshift.io/kuryr-octavia-provider: ovn

- 4. RHOSP がそのロードバランサーを再作成していることを確認します。
 - a. コマンドラインで、以下を実行します。

\$ openstack loadbalancer list | grep amphora

単一の Amphora ロードバランサーが表示されます。以下に例を示します。

a4db683b-2b7b-4988-a582-c39daaad7981 | ostest-7mbj6-kuryr-api-loadbalancer | 84c99c906edd475ba19478a9a6690efd | 172.30.0.1 | ACTIVE | amphora

b. 以下を入力して ovn ロードバランサーを検索します。

\$ openstack loadbalancer list | grep ovn

ovn タイプの残りのロードバランサーが表示されます。以下に例を示します。

 2dffe783-98ae-4048-98d0-32aa684664cc | openshift-apiserver-operator/metrics |

 84c99c906edd475ba19478a9a6690efd | 172.30.167.119 | ACTIVE | ovn

 0b1b2193-251f-4243-af39-2f99b29d18c5 | openshift-etcd/etcd |

 84c99c906edd475ba19478a9a6690efd | 172.30.143.226 | ACTIVE | ovn

 f05b07fc-01b7-4673-bd4d-adaa4391458e | openshift-dns-operator/metrics |

 84c99c906edd475ba19478a9a6690efd | 172.30.152.27 | ACTIVE | ovn

32.3. OCTAVIA を使用したアプリケーショントラフィック用のクラスター のスケーリング

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) で実行される OpenShift Container Platform クラスターでは、 Octavia 負荷分散サービスを使用して、複数の仮想マシン (VM) または Floating IP アドレスにトラ フィックを分散することができます。この機能は、単一マシンまたはアドレスが生じさせるボトルネッ クを軽減します。

クラスターで Kuryr を使用する場合、Cluster Network Operator はデプロイメント時に内部 Octavia ロードバランサーを作成していました。アプリケーションネットワークのスケーリングには、このロー ドバランサーを使用できます。
クラスターで Kuryr を使用しない場合、アプリケーションのネットワークのスケーリングに使用する独 自の Octavia ロードバランサーを作成する必要があります。

32.3.1. Octavia を使用したクラスターのスケーリング

複数の API ロードバランサーを使用する場合や、クラスターが Kuryr を使用しない場合、Octavia ロー ドバランサーを作成してから、クラスターをこれを使用するように設定します。

前提条件

• Octavia は Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) デプロイメントで利用できます。

手順

1. コマンドラインから、Amphora ドライバーを使用する Octavia ロードバランサーを作成しま す。

\$ openstack loadbalancer create --name API_OCP_CLUSTER --vip-subnet-id <id_of_worker_vms_subnet>

API_OCP_CLUSTERの代わりに、任意の名前を使用することができます。

2. ロードバランサーがアクティブになったら、リスナーを作成します。

\$ openstack loadbalancer listener create --name API_OCP_CLUSTER_6443 --protocol HTTPS--protocol-port 6443 API_OCP_CLUSTER



注記

ロードバランサーのステータスを表示するには、**openstack loadbalancer list** と入力します。

ラウンドロビンアルゴリズムを使用し、セッションの永続性が有効にされているプールを作成します。

\$ openstack loadbalancer pool create --name API_OCP_CLUSTER_pool_6443 --lbalgorithm ROUND_ROBIN --session-persistence type=<source_IP_address> --listener API_OCP_CLUSTER_6443 --protocol HTTPS

コントロールプレーンマシンが利用可能であることを確認するには、ヘルスモニターを作成します。

\$ openstack loadbalancer healthmonitor create --delay 5 --max-retries 4 --timeout 10 --type TCP API_OCP_CLUSTER_pool_6443

5. コントロールプレーンマシンをロードバランサープールのメンバーとして追加します。

\$ for SERVER in \$(MASTER-0-IP MASTER-1-IP MASTER-2-IP)
do
 openstack loadbalancer member create --address \$SERVER --protocol-port 6443
API_OCP_CLUSTER_pool_6443
done

6. オプション: クラスター API の Floating IP アドレスを再利用するには、設定を解除します。

\$ openstack floating ip unset \$API_FIP

7. 設定を解除された **API_FIP**、または新規アドレスを、作成されたロードばランサー VIP に追加 します。

\$ openstack floating ip set --port \$(openstack loadbalancer show -c <vip_port_id> -f value API_OCP_CLUSTER) \$API_FIP

クラスターは、負荷分散に Octavia を使用するようになりました。



注記

Kuryr が Octavia Amphora ドライバーを使用する場合、すべてのトラフィックは単一の Amphora 仮想マシン (VM) 経由でルーティングされます。

この手順を繰り返して追加のロードバランサーを作成します。これにより、ボトルネックを軽減することができます。

32.3.2. Octavia の使用による Kuryr を使用するクラスターのスケーリング



重要

Kuryr は非推奨の機能です。非推奨の機能は依然として OpenShift Container Platform に 含まれており、引き続きサポートされますが、本製品の今後のリリースで削除されるた め、新規デプロイメントでの使用は推奨されません。

OpenShift Container Platform で非推奨となったか、削除された主な機能の最新の一覧に ついては、OpenShift Container Platform リリースノートの非推奨および削除された機 能 セクションを参照してください。

クラスターで Kuryr を使用する場合は、クラスターの API Floating IP アドレスを既存の Octavia ロード バランサーに関連付けます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターは Kuryr を使用します。
- Octavia は Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) デプロイメントで利用できます。

手順

1. オプション: コマンドラインからクラスター API の Floating IP アドレスを再利用するには、この設定を解除します。

\$ openstack floating ip unset \$API_FIP

2. 設定を解除された **API_FIP**、または新規アドレスを、作成されたロードばランサー VIP に追加 します。

\$ openstack floating ip set --port \$(openstack loadbalancer show -c <vip_port_id> -f value \${OCP_CLUSTER}-kuryr-api-loadbalancer) \$API_FIP

クラスターは、負荷分散に Octavia を使用するようになりました。



注記

Kuryr が Octavia Amphora ドライバーを使用する場合、すべてのトラフィックは単一の Amphora 仮想マシン (VM) 経由でルーティングされます。

この手順を繰り返して追加のロードバランサーを作成します。これにより、ボトルネックを軽減することができます。

32.4. RHOSP OCTAVIA を使用した INGRESS トラフィックのスケーリング



重要

Kuryr は非推奨の機能です。非推奨の機能は依然として OpenShift Container Platform に 含まれており、引き続きサポートされますが、本製品の今後のリリースで削除されるた め、新規デプロイメントでの使用は推奨されません。

OpenShift Container Platform で非推奨となったか、削除された主な機能の最新の一覧については、OpenShift Container Platform リリースノートの非推奨および削除された機能 セクションを参照してください。

Octavia ロードバランサーを使用して、Kuryr を使用するクラスターで Ingress コントローラーをスケー リングできます。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターは Kuryr を使用します。
- Octavia は RHOSP デプロイメントで利用できます。

手順

1. 現在の内部ルーターサービスをコピーするには、コマンドラインで以下を入力します。

\$ oc -n openshift-ingress get svc router-internal-default -o yaml > external_router.yaml

2. external_router.yaml ファイルで、metadata.name および spec.type の値を LoadBalancer に変更します。

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
labels:
ingresscontroller.operator.openshift.io/owning-ingresscontroller: default
name: router-external-default
namespace: openshift-ingress
spec:
ports:
- name: http
```

ルーターファイルの例

port: 80 protocol: TCP targetPort: http - name: https port: 443 protocol: TCP targetPort: https - name: metrics port: 1936 protocol: TCP targetPort: 1936 selector: ingresscontroller.operator.openshift.io/deployment-ingresscontroller: default sessionAffinity: None type: LoadBalancer 2



この値は router-external-default のように、わかりやすいものであることを確認します。



この値は LoadBalancer であることを確認します。



注記

ロードバランシングと関連性のないタイムスタンプやその他の情報を削除できます。

1. コマンドラインで、external_router.yaml ファイルからサービスを作成します。

\$ oc apply -f external_router.yaml

2. サービスの外部 IP アドレスがロードバランサーに関連付けられているものと同じであることを 確認します。

a. コマンドラインで、サービスの外部 IP アドレスを取得します。

\$ oc -n openshift-ingress get svc

出力例

NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE router-external-default LoadBalancer 172.30.235.33 10.46.22.161 80:30112/TCP,443:32359/TCP,1936:30317/TCP 3m38s router-internal-default ClusterIP 172.30.115.123 <none> 80/TCP,443/TCP,1936/TCP 22h

b. ロードバランサーの IP アドレスを取得します。

\$ openstack loadbalancer list | grep router-external

出力例

| 21bf6afe-b498-4a16-a958-3229e83c002c | openshift-ingress/router-external-default | 66f3816acf1b431691b8d132cc9d793c | 172.30.235.33 | ACTIVE | octavia |

c. 直前のステップで取得したアドレスが、Floating IP のリストで相互に関連付けられている ことを確認します。

\$ openstack floating ip list | grep 172.30.235.33

出力例

| e2f80e97-8266-4b69-8636-e58bacf1879e | 10.46.22.161 | 172.30.235.33 | 655e7122-806a-4e0a-a104-220c6e17bda6 | a565e55a-99e7-4d15-b4df-f9d7ee8c9deb | 66f3816acf1b431691b8d132cc9d793c |

EXTERNAL-IPの値を新規 Ingress アドレスとして使用できるようになりました。



注記

Kuryr が Octavia Amphora ドライバーを使用する場合、すべてのトラフィックは単一の Amphora 仮想マシン (VM) 経由でルーティングされます。

この手順を繰り返して追加のロードバランサーを作成します。これにより、ボトルネックを軽減することができます。

32.5. 外部ロードバランサー用のサービス

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) の OpenShift Container Platform クラスターを、デフォルトの ロードバランサーの代わりに外部ロードバランサーを使用するように設定できます。



重要

外部ロードバランサーの設定は、ベンダーのロードバランサーによって異なります。

このセクションの情報と例は、ガイドラインのみを目的としています。ベンダーのロー ドバランサーに関する詳細は、ベンダーのドキュメントを参照してください。

Red Hat は、外部ロードバランサーに対して次のサービスをサポートしています。

- Ingress Controller
- OpenShift API
- OpenShift MachineConfig API

外部ロードバランサーに対して、これらのサービスの1つまたはすべてを設定するように選択できま す。一般的な設定オプションは、Ingress Controller サービスのみを設定することです。次の図は、各 サービスの詳細を示しています。 図32.1 OpenShift Container Platform 環境で動作する Ingress Controller を示すネットワークワークフローの例



図32.2 OpenShift Container Platform 環境で動作する OpenShift API を示すネットワークワークフローの例



496_OpenShift_1223

図32.3 OpenShift Container Platform 環境で動作する OpenShift MachineConfig API を示すネット ワークワークフローの例



外部ロードバランサーでは、次の設定オプションがサポートされています。

- ノードセレクターを使用して、Ingress Controller を特定のノードのセットにマッピングします。このセットの各ノードに静的 IP アドレスを割り当てるか、Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) から同じ IP アドレスを受け取るように各ノードを設定する必要があります。 インフラストラクチャーノードは通常、このタイプの設定を受け取ります。
- サブネット上のすべての IP アドレスをターゲットにします。この設定では、ロードバランサー ターゲットを再設定せずにネットワーク内でノードを作成および破棄できるため、メンテナン スオーバーヘッドを削減できます。/27 や /28 などの小規模なネットワーク上に設定されたマシンを使用して Ingress Pod をデプロイする場合、ロードバランサーのターゲットを簡素化でき ます。

ヒント

マシン config プールのリソースを確認することで、ネットワーク内に存在するすべての IP ア ドレスをリスト表示できます。

OpenShift Container Platform クラスターの外部ロードバランサーを設定する前に、以下の情報を考慮 してください。

- フロントエンド IP アドレスの場合、フロントエンド IP アドレス、Ingress Controller のロード バランサー、および API ロードバランサーに同じ IP アドレスを使用できます。この機能につい ては、ベンダーのドキュメントを確認してください。
- バックエンド IP アドレスの場合、OpenShift Container Platform コントロールプレーンノードの IP アドレスが、外部ロードバランサーの存続期間中に変更されないようにください。次のいずれかのアクションを実行すると、これを実現できます。
 - 各コントロールプレーンノードに静的 IP アドレスを割り当てます。

- ノードが DHCP リースを要求するたびに、DHCP から同じ IP アドレスを受信するように 各ノードを設定します。ベンダーによっては、DHCP リースは IP 予約または静的 DHCP 割り当ての形式になる場合があります。
- Ingress Controller バックエンドサービスの外部ロードバランサーで、Ingress Controller を実行 する各ノードを手動で定義します。たとえば、Ingress Controller が未定義のノードに移動する と、接続が停止する可能性があります。

32.5.1. 外部ロードバランサーの設定

Red Hat OpenStack Platform (RHOSP)の OpenShift Container Platform クラスターを、デフォルトの ロードバランサーの代わりに外部ロードバランサーを使用するように設定できます。



重要

外部ロードバランサーを設定する前に、「外部ロードバランサー用のサービス」セク ションを必ず確認してください。

外部ロードバランサー用に設定するサービスに適用される次の前提条件を確認してください。



注記

クラスター上で動作する MetalLB は、外部ロードバランサーとして機能します。

OpenShift API の前提条件

- フロントエンド IP アドレスを定義している。
- TCP ポート 6443 および 22623 は、ロードバランサーのフロントエンド IP アドレスで公開されている。以下の項目を確認します。
 - ポート 6443 が OpenShift API サービスにアクセスできる。
 - ポート 22623 が Ignition 起動設定をノードに提供できる。
- フロントエンド IP アドレスとポート 6443 へは、OpenShift Container Platform クラスターの 外部の場所にいるシステムのすべてのユーザーがアクセスできる。
- フロントエンド IP アドレスとポート 22623 は、OpenShift Container Platform ノードからのみ 到達できる。
- ロードバランサーバックエンドは、ポート 6443 および 22623 の OpenShift Container Platform コントロールプレーンノードと通信できる。

Ingress Controller の前提条件

- フロントエンド IP アドレスを定義している。
- TCP ポート 443 および 80 はロードバランサーのフロントエンド IP アドレスで公開されている。
- フロントエンドの IP アドレス、ポート 80、ポート 443 へは、OpenShift Container Platform クラスターの外部の場所にあるシステムの全ユーザーがアクセスできる。

- フロントエンドの IP アドレス、ポート 80、ポート 443 は、OpenShift Container Platform クラスターで動作するすべてのノードから到達できる。
- ロードバランサーバックエンドは、ポート 80、443、および 1936 で Ingress Controller を実行 する OpenShift Container Platform ノードと通信できる。

ヘルスチェック URL 仕様の前提条件

ほとんどのロードバランサーは、サービスが使用可能か使用不可かを判断するヘルスチェック URL を 指定して設定できまうs. OpenShift Container Platform は、OpenShift API、Machine Configuration API、および Ingress Controller バックエンドサービスのこれらのヘルスチェックを提供します。

次の例は、前にリスト表示したバックエンドサービスのヘルスチェック仕様を示しています。

Kubernetes API ヘルスチェック仕様の例

Path: HTTPS:6443/readyz Healthy threshold: 2 Unhealthy threshold: 2 Timeout: 10 Interval: 10

Machine Config API ヘルスチェック仕様の例

Path: HTTPS:22623/healthz Healthy threshold: 2 Unhealthy threshold: 2 Timeout: 10 Interval: 10

Ingress Controller のヘルスチェック仕様の例

Path: HTTP:1936/healthz/ready Healthy threshold: 2 Unhealthy threshold: 2 Timeout: 5 Interval: 10

手順

1. HAProxy Ingress Controller を設定して、ポート 6443、443、および 80 でロードバランサー からクラスターへのアクセスを有効化できるようにします。

HAProxy 設定の例

#...
listen my-cluster-api-6443
bind 192.168.1.100:6443
mode tcp
balance roundrobin
option httpchk
http-check connect

http-check send meth GET uri /readyz http-check expect status 200 server my-cluster-master-2 192.168.1.101:6443 check inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-master-0 192.168.1.102:6443 check inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-master-1 192.168.1.103:6443 check inter 10s rise 2 fall 2 listen my-cluster-machine-config-api-22623 bind 192.168.1.100:22623 mode tcp balance roundrobin option httpchk http-check connect http-check send meth GET uri /healthz http-check expect status 200 server my-cluster-master-2 192.168.1.101:22623 check inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-master-0 192.168.1.102:22623 check inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-master-1 192.168.1.103:22623 check inter 10s rise 2 fall 2 listen my-cluster-apps-443 bind 192.168.1.100:443 mode tcp balance roundrobin option httpchk http-check connect http-check send meth GET uri /healthz/ready http-check expect status 200 server my-cluster-worker-0 192.168.1.111:443 check port 1936 inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-worker-1 192.168.1.112:443 check port 1936 inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-worker-2 192.168.1.113:443 check port 1936 inter 10s rise 2 fall 2 listen my-cluster-apps-80 bind 192.168.1.100:80 mode tcp balance roundrobin option httpchk http-check connect http-check send meth GET uri /healthz/ready http-check expect status 200 server my-cluster-worker-0 192.168.1.111:80 check port 1936 inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-worker-1 192.168.1.112:80 check port 1936 inter 10s rise 2 fall 2 server my-cluster-worker-2 192.168.1.113:80 check port 1936 inter 10s rise 2 fall 2 # ...

- 2. **curl** CLI コマンドを使用して、外部ロードバランサーとそのリソースが動作していることを確認します。
 - a. 次のコマンドを実行して応答を観察し、クラスターマシン設定 API が Kubernetes API サー バーリソースにアクセスできることを確認します。

\$ curl https://<loadbalancer_ip_address>:6443/version --insecure

設定が正しい場合は、応答として JSON オブジェクトを受信します。

```
{
"major": "1",
"minor": "11+",
```

"gitVersion": "v1.11.0+ad103ed", "gitCommit": "ad103ed", "gitTreeState": "clean", "buildDate": "2019-01-09T06:44:10Z", "goVersion": "go1.10.3", "compiler": "gc", "platform": "linux/amd64" }

b. 次のコマンドを実行して出力を確認し、クラスターマシン設定 API がマシン設定サーバー リソースからアクセスできることを確認します。

\$ curl -v https://<loadbalancer_ip_address>:22623/healthz --insecure

設定が正しい場合、コマンドの出力には次の応答が表示されます。

HTTP/1.1 200 OK Content-Length: 0

c. 次のコマンドを実行して出力を確認し、コントローラーがポート 80 の Ingress Controller リソースにアクセスできることを確認します。

\$ curl -I -L -H "Host: console-openshift-console.apps.<cluster_name>.<base_domain>"
http://<load_balancer_front_end_IP_address>

設定が正しい場合、コマンドの出力には次の応答が表示されます。

HTTP/1.1 302 Found content-length: 0 location: https://console-openshift-console.apps.ocp4.private.opequon.net/ cache-control: no-cache

d. 次のコマンドを実行して出力を確認し、コントローラーがポート 443 の Ingress Controller リソースにアクセスできることを確認します。

\$ curl -I -L --insecure --resolve console-openshift-console.apps.<cluster_name>.
<base_domain>:443:<Load Balancer Front End IP Address> https://console-openshiftconsole.apps.<cluster_name>.<base_domain>

設定が正しい場合、コマンドの出力には次の応答が表示されます。

HTTP/1.1 200 OK referrer-policy: strict-origin-when-cross-origin set-cookie: csrftoken=UIYWOyQ62LWjw2h003xtYSKIh1a0Py2hhctw0WmV2YEdhJjFyQwWcGBsja261dG LgaYO0nxzVErhiXt6QepA7g==; Path=/; Secure; SameSite=Lax x-content-type-options: nosniff x-dns-prefetch-control: off x-frame-options: DENY x-xss-protection: 1; mode=block date: Wed, 04 Oct 2023 16:29:38 GMT content-type: text/html; charset=utf-8 set-cookie: 1e2670d92730b515ce3a1bb65da45062=1bf5e9573c9a2760c964ed1659cc1673; path=/; HttpOnly; Secure; SameSite=None cache-control: private

 外部ロードバランサーのフロントエンド IP アドレスをターゲットにするように、クラスターの DNS レコードを設定します。ロードバランサー経由で、クラスター API およびアプリケーショ ンの DNS サーバーのレコードを更新する必要があります。

変更された DNS レコードの例

<load_balancer_ip_address> A api.<cluster_name>.<base_domain> A record pointing to Load Balancer Front End

<load_balancer_ip_address> A apps.<cluster_name>.<base_domain> A record pointing to Load Balancer Front End



重要

DNSの伝播では、各DNSレコードが使用可能になるまでに時間がかかる場合が あります。各レコードを検証する前に、各DNSレコードが伝播されることを確 認してください。

- 4. **curl** CLI コマンドを使用して、外部ロードバランサーと DNS レコード設定が動作していること を確認します。
 - a. 次のコマンドを実行して出力を確認し、クラスター API にアクセスできることを確認します。

\$ curl https://api.<cluster_name>.<base_domain>:6443/version --insecure

設定が正しい場合は、応答として JSON オブジェクトを受信します。

```
{
    "major": "1",
    "minor": "11+",
    "gitVersion": "v1.11.0+ad103ed",
    "gitCommit": "ad103ed",
    "gitTreeState": "clean",
    "buildDate": "2019-01-09T06:44:10Z",
    "goVersion": "go1.10.3",
    "compiler": "gc",
    "platform": "linux/amd64"
}
```

b. 次のコマンドを実行して出力を確認し、クラスターマシン設定にアクセスできることを確認します。

\$ curl -v https://api.<cluster_name>.<base_domain>:22623/healthz --insecure

設定が正しい場合、コマンドの出力には次の応答が表示されます。

HTTP/1.1 200 OK Content-Length: 0

c. 以下のコマンドを実行して出力を確認し、ポートで各クラスターアプリケーションにアク セスできることを確認します。

\$ curl http://console-openshift-console.apps.<cluster_name>.<base_domain -I -L -- insecure

設定が正しい場合、コマンドの出力には次の応答が表示されます。

HTTP/1.1 302 Found content-length: 0 location: https://console-openshift-console.apps.<cluster-name>.<base domain>/ cache-control: no-cacheHTTP/1.1 200 OK referrer-policy: strict-origin-when-cross-origin set-cookie: csrftoken=39HoZgztDnzjJkq/JuLJMeoKNXlfiVv2YgZc09c3TBOBU4Nl6kDXaJH1LdicNhN1UsQ Wzon4Dor9GWGfopaTEQ==; Path=/; Secure x-content-type-options: nosniff x-dns-prefetch-control: off x-frame-options: DENY x-xss-protection: 1; mode=block date: Tue, 17 Nov 2020 08:42:10 GMT content-type: text/html; charset=utf-8 set-cookie: 1e2670d92730b515ce3a1bb65da45062=9b714eb87e93cf34853e87a92d6894be; path=/; HttpOnly; Secure; SameSite=None cache-control: private

d. 次のコマンドを実行して出力を確認し、ポート 443 で各クラスターアプリケーションにア クセスできることを確認します。

\$ curl https://console-openshift-console.apps.<cluster_name>.<base_domain> -I -L -- insecure

設定が正しい場合、コマンドの出力には次の応答が表示されます。

HTTP/1.1 200 OK referrer-policy: strict-origin-when-cross-origin set-cookie: csrftoken=UIYWOyQ62LWjw2h003xtYSKIh1a0Py2hhctw0WmV2YEdhJjFyQwWcGBsja261dG LgaYO0nxzVErhiXt6QepA7g==; Path=/; Secure; SameSite=Lax x-content-type-options: nosniff x-dns-prefetch-control: off x-frame-options: DENY x-xss-protection: 1; mode=block date: Wed, 04 Oct 2023 16:29:38 GMT content-type: text/html; charset=utf-8 set-cookie: 1e2670d92730b515ce3a1bb65da45062=1bf5e9573c9a2760c964ed1659cc1673; path=/; HttpOnly; Secure; SameSite=None cache-control: private

第33章 METALLB を使用した負荷分散

33.1. METALLB および METALLB OPERATOR について

クラスター管理者は、MetalLB Operator をクラスターに追加し、タイプ **LoadBalancer** のサービスが クラスターに追加されると、MetalLB はサービスの外部 IP アドレスを追加できます。外部 IP アドレス がクラスターのホストネットワークに追加されます。

33.1.1. MetalLB を使用するタイミング

MetalLBの使用は、ベアメタルクラスター、またはベアメタルのようなインフラストラクチャーがある 場合や、外部 IP アドレスを使用したアプリケーションへのフォールトトレラントがあるアクセスが必 要な場合に役立ちます。

ネットワークインフラストラクチャーを設定し、外部 IP アドレスのネットワークトラフィックがクラ イアントからクラスターのホストネットワークにルーティングされるようにする必要があります。

MetalLB Operator を使用して MetalLB をデプロイした後、タイプ **LoadBalancer** のサービスを追加す ると、MetalLB はプラットフォームネイティブなロードバランサーを提供します。

レイヤ2モードで動作する MetalLB は、IP フェイルオーバーと同様のメカニズムを利用してフェイル オーバーをサポートします。ただし、仮想ルーター冗長プロトコル (VRRP) とキープアライブに依存す る代わりに、MetalLB はゴシップベースのプロトコルを利用してノード障害のインスタンスを識別しま す。フェイルオーバーが検出されると、別のノードがリーダーノードのロールを引き継ぎ、Gratuitous ARP メッセージがディスパッチされて、この変更がブロードキャストされます。

レイヤ3またはボーダーゲートウェイプロトコル (BGP) モードで動作する MetalLB は、障害検出を ネットワークに委任します。OpenShift Container Platform ノードが接続を確立した BGP ルーター は、ノードの障害を識別し、そのノードへのルートを終了します。

Pod とサービスの高可用性を確保するには、IP フェイルオーバーの代わりに MetalLB を使用することを推奨します。

33.1.2. MetalLB Operator カスタムリソース

MetalLB Operator は、次のカスタムリソースについて独自の namespace を監視します。

MetalLB

MetalLB カスタムリソースをクラスターに追加する際に、MetalLB Operator は MetalLB をクラス ターにデプロイします。Operator はカスタムリソースの単一インスタンスのみをサポートします。 インスタンスが削除されると、Operator はクラスターから MetalLB を削除します。

IPAddressPool

MetalLBには、タイプ LoadBalancer のサービスを追加する際にサービスに割り当てることができ る IP アドレスの1つ以上のプールが必要です。IPAddressPool には、IP アドレスのリストが含まれ ています。リストは、1.1.1-1.1.1 などの範囲を使用して設定された単一の IP アドレス、CIDR 表記で 指定された範囲、ハイフンで区切られた開始アドレスと終了アドレスとして指定された範囲、また はこの3つの組み合わせにすることができます。IPAddressPool には名前が必要です。ドキュメン トは、doc-example、doc-example-reserved、doc-example-ipv6 などの名前を使用しま す。IPAddressPool は、プールから IP アドレスを割り当てます。L2Advertisement および BGPAdvertisement カスタムリソースは、指定されたプールからの指定された IP のアドバタイズメ ントを有効にします。



注記

単一の **IPAddressPool** は、L2 アドバタイズメントと BGP アドバタイズメントに よって参照できます。

BGPPeer

BGP ピアカスタムリソースは、通信する MetalLB の BGP ルーター、ルーターの AS 番号、 MetalLB の AS 番号、およびルートアドバタイズメントのカスタマイズを識別します。MetalLB は、サービスロードバランサーの IP アドレスのルートを1つ以上の BGP ピアにアドバタイズしま す。

BFDProfile

BFD プロファイルカスタムリソースは、BGP ピアの双方向フォワーディング検出 (BFD) を設定します。BFD は、BGP のみよりも、パスの障害検出が高速になります。

L2Advertisement

L2Advertisement カスタムリソースは、L2 プロトコルを使用して **IPAddressPool** からの IP をアド バタイズします。

BGPAdvertisement

BGPAdvertisement カスタムリソースは、BGP プロトコルを使用して **IPAddressPool** からの IP を アドバタイズします。

MetalLB カスタムリソースをクラスターに追加し、Operator が MetalLB をデプロイする と、**controller** および **speaker** MetalLB ソフトウェアコンポーネントは実行を開始します。

MetalLB は、関連するすべてのカスタムリソースを検証します。

33.1.3. MetalLB ソフトウェアコンポーネント

MetalLB Operator のインストール時に、**metallb-operator-controller-manager** デプロイメントは Pod を起動します。Pod は Operator の実装です。Pod は、関連するすべてのリソースへの変更を監視します。

Operator が MetalLB のインスタンスを起動すると、**controller** デプロイメントと **speaker** のデーモン セットが開始します。



注記

MetalLB カスタムリソースでデプロイメント仕様を設定して、**controller** および **speaker** Pod がクラスターへのデプロイおよび実行方法を管理できます。これらの展開 仕様の詳細については、**その他のリソース** セクションを参照してください。

controller

Operator はデプロイメントおよび単一の Pod を起動します。LoadBalancer タイプのサービスを追加する場合、Kubernetes は controller を使用してアドレスプールから IP アドレスを割り当てます。サービスに障害が発生した場合は、controller Pod のログに次のエントリーがあることを確認します。

出力例

"event":"ipAllocated","ip":"172.22.0.201","msg":"IP address assigned by controller

speaker

Operator は、**speaker**Pod 用に設定されたデーモンを起動します。デフォルトでは、Pod はクラス ター内の各ノードで起動されます。Metal LB の起動時に**MetalLB**カスタムリソースでノードセレク ターを指定して、Pod を特定のノードに制限できます。**controller** がサービスに IP アドレスを割り 当てても、サービスがまだ利用できない場合は、**speaker** Pod のログを確認してくださ い。**speaker** Pod が使用できない場合は、**oc describe pod -n** コマンドを実行します。 レイヤー2モードの場合には、コントローラー がサービスに IP アドレスを割り当てた後 に、**speaker**Pod はアルゴリズムを使用して、どのノードの、どの**speaker**Pod がロードバランサー の IP アドレスをアナウンスするかを決定します。このアルゴリズムには、ノード名とロードバラン サーの IP アドレスのハッシュが含まれます。詳細は、MetalLB と外部トラフィックポリシーを参照 してください。**speaker** は、Address Resolution Protocol (ARP)を使用して IPv4 アドレスと Neighbor Discovery Protocol (NDP)を公開して、IPv6 アドレスにアナウンスします。

Border Gateway Protocol (BGP) モードの場合、**controller** がサービスに IP アドレスを割り当てた後 に、各 **speaker** Pod はロードバランサーの IP アドレスを BGP ピアにアドバタイズします。どのノー ドが BGP ピアとの BGP セッションを開始するかを設定できます。

ロードバランサーの IP アドレスの要求は、IP アドレスを通知する **speaker** でノードにルーティングさ れます。ノードがパケットを受信した後に、サービスプロキシーはパケットをサービスのエンドポイン トにルーティングします。エンドポイントは、最適なケースでは同じノードに配置することも、別の ノードに配置することもできます。サービスプロキシーは、接続が確立されるたびにエンドポイントを 選択します。

33.1.4. MetalLB と外部トラフィックポリシー

レイヤー2モードでは、クラスター内のノードはサービス IP アドレスのすべてのトラフィックを受信 します。BGP モードでは、ホストネットワーク上のルーターが、新しいクライアントが接続を確立で きるように、クラスター内のノードの1つに接続を開きます。クラスターがノードに入った後にトラ フィックを処理する方法は、外部トラフィックポリシーの影響を受けます。

cluster

これは spec.externalTrafficPolicy のデフォルト値です。

cluster トラフィックポリシーでは、ノードがトラフィックを受信した後に、サービスプロキシーは トラフィックをサービスのすべての Pod に分散します。このポリシーは、Pod 全体に均一なトラ フィック分散を提供しますが、クライアントの IP アドレスを覆い隠し、トラフィックがクライアン トではなくノードから発信されているように Pod 内のアプリケーションに表示される可能性があり ます。

local

localトラフィックポリシーでは、ノードがトラフィックを受信した後に、サービスプロキシーはト ラフィックを同じノードの Pod にのみ送信します。たとえば、ノード A の**speaker** Pod が外部サー ビス IP をアナウンスすると、すべてのトラフィックがノード A に送信されます。トラフィックが ノード A に入った後、サービスプロキシーはノード A にあるサービスの Pod にのみトラフィックを 送信します。追加のノードにあるサービスの Pod は、ノード A からトラフィックを受信しません。 追加のノードにあるサービスの Pod は、フェイルオーバーが必要な場合にレプリカとして機能しま す。

このポリシーは、クライアントの IP アドレスには影響しません。アプリケーション Pod は、受信接 続からクライアント IP アドレスを判別できます。

注記



次の情報は、BGP モードで外部トラフィックポリシーを設定する場合に重要です。

MetalLB は、適格なすべてのノードからロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズ しますが、サービスのロードバランシングを行うノードの数は、等コストマルチパス (ECMP) ルートを確立するルーターの容量によって制限される場合があります。 IP をア ドバタイズするノードの数がルーターの ECMP グループ制限よりも多い場合、ルーター は IP をアドバタイズするノードよりも少ないノードを使用します。

たとえば、外部トラフィックポリシーが **local** に設定され、ルーターの ECMP グループ 制限が 16 に設定され、LoadBalancer サービスを実装する Pod が 30 ノードにデプロイ されている場合、14 ノードにデプロイされた Pod はトラフィックを受信しません。この 状況では、サービスの外部トラフィックポリシーを **cluster** に設定することを推奨しま す。

33.1.5. レイヤー 2 モードの MetalLB の概念

レイヤー2モードでは、1つのノードの **speaker** Pod が、サービスの外部 IP アドレスをホストネット ワークに公開します。ネットワークの観点からは、ノードで複数の IP アドレスがネットワークイン ターフェイスに割り当てられるように見えます。



注記

レイヤ2モードでは、MetalLB は ARP と NDP に依存します。これらのプロトコルは、 特定のサブネット内でローカルアドレス解決を実装します。このコンテキストでは、 MetalLB が機能するために、クライアントは、サービスをアナウンスするノードと同じ サブネット上に存在する MetalLB によって割り当てられた VIP に到達できなければなり ません。

speaker Pod は、IPv4 サービスの ARP 要求と IPv6 の NDP 要求に応答します。

レイヤー2モードでは、サービス IP アドレスのすべてのトラフィックは1つのノードを介してルー ティングされます。トラフィックがノードに入ると、CNI ネットワークプロバイダーのサービスプロキ シーはトラフィックをサービスのすべての Pod に配信します。

サービスのすべてのトラフィックがレイヤー2モードで単一のノードを通過するので、より厳密な意味 で、MetalLB はレイヤー2のロードバランサーを実装しません。むしろ、MetalLB はレイヤー2の フェイルオーバーメカニズムを実装しているため、**speaker** Pod が利用できなくなったときに、別の ノードの **speaker** Pod がサービス IP アドレスをアナウンスできます。

ノードが使用できなくなると、フェイルオーバーが自動的に行われます。他のノードの **speaker** Pod は、ノードが使用できないことを検出し、障害が発生したノードから、新しい **speaker** Pod とノード がサービス IP アドレスの所有権を取得します。



前述のグラフは、MetalLB に関する以下の概念を示しています。

- アプリケーションは、172.130.0.0/16 サブネットのクラスター IP を持つサービスで利用できます。その IP アドレスはクラスター内からアクセスできます。サービスには、MetalLB がサービス 192.168.100.200 に割り当てられている外部 IP アドレスもあります。
- ノード1および3には、アプリケーションの Pod があります。
- **speaker** デーモンセットは、各ノードで Pod を実行します。MetalLB Operator はこれらの Pod を起動します。
- 各 speaker Pod はホストネットワーク化された Pod です。Pod の IP アドレスは、ホストネットワーク上のノードの IP アドレスと同じです。
- ノード1の speaker Pod は ARP を使用して、サービスの外部 IP アドレスに 192.168.100.200
 を認識します。外部 IP アドレスをアナウンスする speaker Pod は、サービスのエンドポイントと同じノード上にあり、エンドポイントは Ready 状態である必要があります。
- クライアントトラフィックはホストネットワークにルーティングされ、192.168.100.200 の IP アドレスに接続します。トラフィックがノードに入ると、サービスプロキシーは、サービスに 設定した外部トラフィックポリシーに従って、同じノードまたは別のノードのアプリケーション Pod にトラフィックを送信します。
 - サービスの外部トラフィックポリシーが cluster に設定されている場合、speaker Pod が 実行されているノードから 192.168.100.200 ロードバランサーの IP アドレスをアドバタイ ズするノードが選択されます。そのノードのみがサービスのトラフィックを受信できま す。
 - サービスの外部トラフィックポリシーが local に設定されている場合、speaker Pod が実行されているノードと少なくとも1つのサービスエンドポイントから 192.168.100.200 ロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズするノードが選択されます。そのノードのみが

サービスのトラフィックを受信できます。前の図では、ノード1または3のいずれかが **192.168.100.200**をアドバタイズします。

ノード1が利用できない場合、外部 IP アドレスは別のノードにフェイルオーバーします。アプリケーション Pod およびサービスエンドポイントのインスタンスを持つ別のノードでは、speaker Pod は外部 IP アドレス 192.168.100.200 になり、新規ノードがクライアントトラフィックを受信します。図では、唯一の候補はノード3です。

33.1.6. BGP モードの MetalLB の概念

BGP モードでは、デフォルトで各 **speaker** Pod がサービスのロードバランサー IP アドレスを各 BGP ピアにアドバタイズします。オプションの BGP ピアのリストを追加すると、指定されたプールからの IP を指定されたピアセットにアドバタイズすることもできます。BGP ピアは通常、BGP プロトコルを 使用するように設定されたネットワークルーターです。ルーターがロードバランサーの IP アドレスの トラフィックを受信すると、ルーターは IP アドレスをアドバタイズした **speaker** Pod が含まれるノー ドの1つを選択します。ルーターはトラフィックをそのノードに送信します。トラフィックがノードに 入ると、CNI ネットワークプラグインのサービスプロキシーはトラフィックをサービスのすべての Pod に配信します。

クラスターノードと同じレイヤー2のネットワークセグメントに直接接続されたルーターは、BGP ピアとして設定できます。直接接続されたルーターが BGP ピアとして設定されていない場合は、ロード バランサーの IP アドレスのパケットが BGP ピアと **speaker**Pod を実行するクラスターノードの間で ルーティングされるようにネットワークを設定する必要があります。

ルーターは、ロードバランサーの IP アドレスの新しいトラフィックを受信するたびに、ノードへの新 しい接続を作成します。各ルーターのメーカーには、接続開始ノードを選択する実装固有のアルゴリズ ムがあります。ただし、アルゴリズムは通常、ネットワーク負荷のバランスをとるために、使用可能な ノード間でトラフィックを分散するように設計されています。

ノードが使用できなくなった場合に、ルーターは、ロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズする **speaker** Pod が含まれる別のノードとの新しい接続を開始します。





前述のグラフは、MetalLB に関する以下の概念を示しています。

- アプリケーションは、172.130.0.0/16 サブネットの IPv4 クラスター IP を持つサービスで利用 できます。その IP アドレスはクラスター内からアクセスできます。サービスには、MetalLB が サービス 203.0.113.200 に割り当てられている外部 IP アドレスもあります。
- ノード2および3には、アプリケーションの Pod があります。
- **speaker** デーモンセットは、各ノードで Pod を実行します。MetalLB Operator はこれらの Pod を起動します。MetalLB を設定して、**speaker** Pod を実行するノードを指定できます。
- 各 **speaker** Pod はホストネットワーク化された Pod です。Pod の IP アドレスは、ホストネットワーク上のノードの IP アドレスと同じです。
- 各speaker Pod は、すべての BGP ピアとの BGP セッションを開始し、ロードバランサーの IP アドレスまたは集約されたルートを BGP ピアにアドバタイズします。speaker Pod は、 Autonomous System 65010 の一部であることをアドバタイズします。この図ではルーター R1 を示しており、これは同じ Autonomous System 内の BGP ピアです。ただし、他の Autonomous System に属するピアとの BGP セッションを開始するように MetalLB を設定でき ます。
- ノードに、ロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズするspeaker Pod がある場合にはすべて、サービスのトラフィックを受信できます。
 - サービスの外部トラフィックポリシーが cluster に設定されている場合、スピーカー Pod が実行されているすべてのノードが 203.0.113.200 ロードバランサーの IP アドレスをアド バタイズし、speaker Pod を持つすべてのノードがサービスのトラフィックを受信できま

す。ホストの接頭辞は、外部トラフィックポリシーが cluster に設定されている場合にの み、ルーターピアにアドバタイズされます。

- サービスの外部トラフィックポリシーが local に設定されている場合、speaker Pod が実行されているノードとサービスが実行されている少なくとも1つのエンドポイントが、203.0.113.200 ロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズできます。これらのノードのみがサービスのトラフィックを受信できます。前の図では、ノード2と3は203.0.113.200をアドバタイズします。
- BGP ピアカスタムリソースの追加時にノードセレクターを指定して、特定の BGP ピアとの BGP セッションを開始するspeakerPod を制御するように MetalLB を設定できます。
- BGPを使用するように設定されている R1 などのルーターは、BGP ピアとして設定できます。
- クライアントトラフィックは、ホストネットワーク上のノードの1つにルーティングされます。トラフィックがノードに入ると、サービスプロキシーは、サービスに設定した外部トラフィックポリシーに従って、同じノードまたは別のノードのアプリケーション Pod にトラフィックを送信します。
- ノードが使用できなくなった場合に、ルーターは障害を検出し、別のノードとの新しい接続を 開始します。BGP ピアに双方向フォワーディング検出 (BFD) プロファイルを使用するように MetalLB を設定できます。BFD は、リンク障害検出がより高速であるため、ルーターは BFD がない場合よりも早く新しい接続を開始できます。

33.1.7. 制限および制限

33.1.7.1. MetalLB のインフラストラクチャーについての考慮事項

MetalLB は、ネイティブのロードバランサー機能が含まれていないため、主にオンプレミスのベアメタ ルインストールに役立ちます。ベアメタルのインストールに加え、一部のインフラストラクチャーに OpenShift Container Platform をインストールする場合は、ネイティブのロードバランサー機能が含ま れていない場合があります。たとえば、以下のインフラストラクチャーは MetalLB Operator を追加す るのに役立ちます。

- ベアメタル
- VMware vSphere

MetalLB Operator および MetalLB は、OpenShift SDN および OVN-Kubernetes ネットワークプロバ イダーでサポートされます。

33.1.7.2. レイヤー2モードの制限

33.1.7.2.1. 単一ノードのボトルネック

MetalLB は、1つのノードを介してサービス内のすべてのトラフィックをルーティングします。この際、ノードはボトルネックとなり、パフォーマンスを制限する可能性があります。

レイヤー2モードは、サービスの Ingress 帯域幅を単一ノードの帯域幅に制限します。これは、ARP および NDP を使用してトラフィックを転送するための基本的な制限です。

33.1.7.2.2. フェイルオーバーのパフォーマンスの低下

ノード間のフェイルオーバーは、クライアントからの操作によって異なります。フェイルオーバーが発 生すると、MetalLB は Gratuitous ARP パケットを送信して、サービス IP に関連付けられた MAC アド レスが変更されたことをクライアントに通知します。

ほとんどのクライアントオペレーティングシステムは、Gratuitous ARP パケットを正しく処理し、隣接 キャッシュを迅速に更新します。クライアントがキャッシュを迅速に更新すると、フェイルオーバーは 数秒以内に完了します。通常、クライアントは新しいノードに 10 秒以内にフェイルオーバーします。 しかし、一部のクライアントオペレーティングシステムは Gratuitous ARP パケットをまったく処理し ないか、キャッシュの更新を遅延させる古い実装があります。

Windows、macOS、Linux などの一般的なオペレーティングシステムの新しいバージョンは、レイヤー 2フェイルオーバーを正しく実装します。フェイルオーバーが遅いという問題は、古くてあまり一般的 ではないクライアントオペレーティングシステムを除いて、予期されていません。

古いクライアントで予定されているフェイルオーバーの影響を最小限にするには、リーダーシップをフ ラップした後に、古いノードを数分にわたって実行したままにします。古いノードは、キャッシュが更 新されるまで、古いクライアントのトラフィックを転送することができます。

予定外のフェイルオーバー時に、古いクライアントがキャッシュエントリーを更新するまでサービス IP に到達できません。

33.1.7.2.3. 追加ネットワークと MetalLB は同じネットワークを使用できない

MetalLB とソース Pod 上に設定された追加のネットワークインターフェイスの両方に同じ VLAN を使用すると、接続エラーが発生する可能性があります。これは、MetalLB IP とソース Pod が同じノード上に存在する場合に発生します。

接続エラーを回避するには、ソース Pod が存在するサブネットとは異なるサブネットに MetalLB IP を 配置します。この設定により、ソース Pod からのトラフィックがデフォルトゲートウェイを経由する ようになります。その結果、トラフィックは OVN オーバーレイネットワークを使用して宛先に到達で き、接続が確実に意図したとおりに機能するようになります。

33.1.7.3. BGP モードの制限

33.1.7.3.1. ノードに障害が発生すると、アクティブなすべての接続が切断される可能性があります

MetalLB には、BGP ベースのロードバランシングに共通する制限があります。ノードに障害が発生した場合や **speaker** Pod が再起動した場合など、BGP セッションが中断されると、すべてのアクティブな接続がリセットされる可能性があります。エンドユーザーに、**Connection reset by peer** のメッセージが表示される可能性があります。

BGP セッションが中断された場合にどうなるかは、各ルーターの製造元の実装によります。ただ し、**speaker** Pod の数を変更すると、BGP セッションの数に影響し、BGP ピアとのアクティブな接続 が切断されることが予想されます。

サービスの中断の可能性を回避または低減するために、BGP ピアの追加時にノードセレクターを指定 できます。BGP セッションを開始するノードの数を制限すると、BGP セッションのないノードでの障 害が発生しても、サービスへの接続に影響はありません。

33.1.7.3.2. 単一の ASN とルーター ID のみのサポート

BGP ピアカスタムリソースを追加するときは、**spec.myASN**フィールドを指定して、MetalLB が属す る Autonomous System Number (ASN) を特定します。OpenShift Container Platform は、MetalLB を 使用した BGP の実装を使用しますが、この実装は MetalLB が単一の ASN に所属する必要がありま す。BGP ピアを追加し、**spec.myASN**に既存の BGP ピアカスタムリソースとは異なる値を指定しよ うとするとエラーが発生します。 同様に、BGP ピアカスタムリソースを追加する場合には、**spec.router D**フィールドはオプションで す。このフィールドに値を指定する場合は、追加する他の BGP ピアカスタムリソースすべてに、同じ 値を指定する必要があります。

単一の ASN と単一のルーター ID のサポートに制限がある点が、コミュニティーがサポートする MetalLB の実装との違いです。

33.1.8. 関連情報

- Comparison: Fault tolerant access to external IP addresses
- IP フェイルオーバーの削除
- MetalLB のデプロイメント仕様

33.2. METALLB OPERATOR のインストール

クラスター管理者は、Operator がクラスター上の MetalLB インスタンスのライフサイクルを管理でき るようにする MetallB Operator を追加できます。

MetalLB および IP フェイルオーバーは互換性がありません。クラスターの IP フェイルオーバーを設定 している場合、Operator をインストールする前に IP フェイルオーバーを削除する 手順を実行します。

33.2.1. Web コンソールを使用した OperatorHub からの MetalLB Operator のインス トール

クラスター管理者は、OpenShift Container Platform Web コンソールを使用して MetalLB Operator を インストールできます。

前提条件

• cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. OpenShift Container Platform Web コンソールで、**Operators → OperatorHub** ページに移動 します。
- キーワードを Filter by keyword ボックスに入力するか、目的の Operator までスクロールしま す。たとえば、metallb と入力して MetalLB Operator を見つけます。 また、インフラストラクチャー機能 でオプションをフィルタリングすることもできます。たと えば、非接続環境 (ネットワークが制限された環境) で機能する Operator を表示するに は、Disconnected を選択します。
- 3. Install Operator ページで、デフォルトを受け入れて Install をクリックします。

検証

- 1. インストールが正常に行われたことを確認するには、以下を実行します。
 - a. Operators → Installed Operators ページに移動します。
 - b. Operator が **openshift-operators** の namespace 内に設置されていることと、その状態が **Succeeded** となっていることを確認してください。

- Operator が正常にインストールされない場合は、Operator のステータスを確認し、ログを確認してください。
 - a. Operators → Installed Operators ページに移動し、Status 列でエラーまたは失敗の有無を 確認します。
 - b. Workloads → Pods ページに移動し、問題を報告している openshift-operators プロジェ クトの Pod のログを確認します。

33.2.2. CLI を使用した Operator Hub からのインストール

OpenShift Container Platform Web コンソールを使用する代わりに、CLI を使用して OperatorHub から Operator をインストールできます。OpenShift CLI (**oc**) を使用して、MetalLB Operator をインストールできます。

CLI を使用する場合は、**metallb-system** namespace に Operator をインストールすることを推奨します。

前提条件

- ベアメタルハードウェアにインストールされたクラスター。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 次のコマンドを入力して、MetalLB Operator の namespace を作成します。

\$ cat << EOF | oc apply -f apiVersion: v1 kind: Namespace metadata: name: metallb-system EOF

2. namespace に Operator グループのカスタムリソースを作成します。

```
$ cat << EOF | oc apply -f -
apiVersion: operators.coreos.com/v1
kind: OperatorGroup
metadata:
    name: metallb-operator
    namespace: metallb-system
EOF</pre>
```

3. Operator グループが namespace にインストールされていることを確認します。

\$ oc get operatorgroup -n metallb-system

出力例

NAME AGE metallb-operator 14m

- 4. Subscription CR を作成します。
 - a. Subscription CR を定義し、YAML ファイルを保存します (例: metallb-sub.yaml)。

apiVersion: operators.coreos.com/v1alpha1 kind: Subscription metadata: name: metallb-operator-sub namespace: metallb-system spec: channel: stable name: metallb-operator source: redhat-operators 1 sourceNamespace: openshift-marketplace

redhat-operators 値を指定する必要があります。

b. Subscription CR を作成するには、次のコマンドを実行します。



\$ oc create -f metallb-sub.yaml

5. オプション: BGP および BFD メトリックが Prometheus に表示されるようにするには、次のコ マンドのように namespace にラベルを付けることができます。

\$ oc label ns metallb-system "openshift.io/cluster-monitoring=true"

検証

検証手順は、MetallB Operator が metallb-system namespace にインストールされていることを前提と しています。

1. インストール計画が namespace にあることを確認します。



\$ oc get installplan -n metallb-system

出力例



CSV APPROVAL APPROVED install-wzg94 metallb-operator.4.12.0-nnnnnnnnnn Automatic true



注記

Operator のインストールには数秒かかる場合があります。

2. Operator がインストールされていることを確認するには、以下のコマンドを入力します。

\$ oc get clusterserviceversion -n metallb-system \ -o custom-columns=Name:.metadata.name,Phase:.status.phase

出力例

Name Phase Phase metallb-operator.4.12.0-nnnnnnnnn Succeeded

33.2.3. クラスターでの MetalLB の起動

Operator のインストール後に、MetalLB カスタムリソースの単一のインスタンスを設定する必要があります。カスタムリソースの設定後、Operator はクラスターで MetalLB を起動します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- MetalLB Operator がインストールされている。

手順

この手順は、MetallB Operator が **metallb-system** namespace にインストールされていることを前提としています。Web コンソールを使用してインストールした場合は、namespace の代わりに **openshift-operators** を使用してください。

1. MetalLB カスタムリソースの単一のインスタンスを作成します。

\$ cat << EOF | oc apply -f apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: MetalLB metadata: name: metallb namespace: metallb-system EOF

検証

MetalLB コントローラーのデプロイメントと、BareLB スピーカーのデーモンセットが実行していることを確認します。

1. コントローラーのデプロイメントが稼働していることを検証します。

\$ oc get deployment -n metallb-system controller

出力例

NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE controller 1/1 1 1 11m

2. スピーカーに設定されているデーモンが実行されていることを検証します。

\$ oc get daemonset -n metallb-system speaker

111 - **1**- 1731

出刀例

NAMEDESIREDCURRENTREADYUP-TO-DATEAVAILABLENODESELECTORAGEspeaker666kubernetes.io/os=linux18m

この出力例は、6 つの speaker Pod を示しています。クラスターの speaker Pod の数は出力例 とは異なる場合があります。出力で各ノードの1つの Pod が表示されることを確認します。

33.2.4. MetalLB のデプロイメント仕様

MetalLB カスタムリソースを使用して MetalLB のインスタンスを起動すると、**MetalLB** カスタムリ ソースでデプロイメント仕様を設定して、**controller** または **speaker** Pod がクラスターにデプロイ し、実行する方法を管理できます。これらのデプロイメント仕様を使用して、以下のタスクを管理しま す。

- MetalLB Pod デプロイメントのノードの選択
- Pod の優先順位および Pod のアフィニティーを使用してたケジューリングの管理
- MetalLB Pod の CPU 制限の割り当て
- MetalLB Pod のコンテナー RuntimeClass の割り当て
- MetalLB Pod のメタデータの割り当て

33.2.4.1. speaker Pod の特定のノードへの限定

デフォルトでは、MetalLB Operator を使用して MetalLB を開始すると、Operator はクラスター内の各 ノードで**speaker**Pod のインスタンスを開始します。ロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズ できるのは、**speaker** Pod を備えたノードのみです。ノードセレクターを使用して **MetalLB**カスタム リソースを設定し、**speaker**Pod を実行するノードを指定できます。

speaker Pod を特定のノードに制限する最も一般的な理由として、特定のネットワークにネットワーク インターフェイスがあるノードのみがロードバランサーの IP アドレスをアドバタイズするようにする ことが挙げられます。ロードバランサーの IP アドレスの宛先として、**speaker** Pod が実行されている ノードのみがアドバタイズされます。

speaker Pod を特定のノードに制限し、サービスの外部トラフィックポリシーに**ローカル** を指定する 場合は、サービスのアプリケーション Pod が同じノードにデプロイされていることを確認する必要が あります。

speaker Pod をワーカーノードに制限する設定例

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: MetalLB metadata: name: metallb namespace: metallb-system spec: nodeSelector: <.> node-role.kubernetes.io/worker: "" speakerTolerations: <.> key: "Example" operator: "Exists" effect: "NoExecute"

<.> 設定例では、スピーカー Pod をワーカーノードに割り当てるように指定していますが、ノードまた は任意の有効なノードセレクターに割り当てたラベルを指定できます。<.> この設定例では、この容認 がアタッチされている Pod は、**operator** を使用して **キー** 値と **effect** 値に一致するテイントを容認し ます。

spec.nodeSelectorフィールドを使用してマニフェストを適用した後に、oc get daemonset -n metallb-systemspeaker コマンドを使用して Operator がデプロイした Pod の数を確認できます。同様 に、oc get node -l node-role.kubernetes.io/worker =のようなコマンドを使用して、ラベルに一致す るノードを表示できます。

オプションで、アフィニティールールを使用して、ノードがどの speaker Pod をスケジュールするか、 スケジュールしないかを制御することができます。また、容認の一覧を適用してこれらの Pod を制限 することもできます。アフィニティールール、テイント、および容認の詳細は、追加のリソースを参照 してください。

33.2.4.2. MetalLB デプロイメントでのコンテナーランタイムクラスの設定

必要に応じて、MetalLB カスタムリソースを設定して、コンテナーランタイムクラスを **controller** Pod および **speaker** Pod に割り当てることができます。たとえば、Windows ワークロードでは、Windows ランタイムクラスを Pod に割り当てることができ、Pod のすべてのコンテナーに対してこのランタイムクラスが使用されるようになります。

前提条件

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- MetalLB Operator がインストールされている。

手順

1. **myRuntimeClass.yaml** などの **RuntimeClass** カスタムリソースを作成して、ランタイムクラ スを定義します。

apiVersion: node.k8s.io/v1 kind: RuntimeClass metadata: name: myclass handler: myconfiguration

2. RuntimeClass カスタムリソース設定を適用します。

\$ oc apply -f myRuntimeClass.yaml

3. MetalLBRuntime.yaml などの MetalLB カスタムリソースを作成して、runtimeClassName 値 を指定します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: MetalLB metadata: name: metallb namespace: metallb-system spec: logLevel: debug controllerConfig: runtimeClassName: myclass annotations: 1 controller: demo speakerConfig: runtimeClassName: myclass annotations: 2 speaker: demo

- 12 この例では、アノテーション を使用してビルドリリース情報や GitHub プルリクエスト情報などのメタデータを追加します。ラベルで許可されていない文字をアノテーションに入力できます。ただし、アノテーションを使用してオブジェクトを特定または選択することはできません。
- 4. MetalLB カスタムリソース設定を適用します。

\$ oc apply -f MetalLBRuntime.yaml

検証

• Pod のコンテナーランタイムを表示するには、以下のコマンドを実行します。

\$ oc get pod -o customcolumns=NAME:metadata.name,STATUS:.status.phase,RUNTIME_CLASS:.spec.runtimeClass Name

33.2.4.3. MetalLB デプロイメントでの Pod の優先順位および Pod アフィニティーの設定

オプションで、**MetalLB** カスタムリソースを設定して、Pod の優先順位と Pod のアフィニティールー ルを **controller** Pod および **speaker** Pod に割り当てることができます。Pod の優先順位は、ノード上 の Pod の相対的な重要度を示し、この優先順位に基づいて Pod をスケジュールします。**controller** ま たは **speaker** Pod に高い優先順位を設定して、ノード上の他の Pod よりも優先的にスケジューリング されるようにします。

Pod のアフィニティーは Pod 間の関係を管理します。Pod のアフィニティーを **controller** または **speaker** Pod に割り当て、スケジューラーが Pod 関係のコンテキストで Pod を配置するノードを制御 します。たとえば、Pod アフィニティールールを使用して、複数の特定 Pod を同じノードまたは別の ノードに配置するようにできます。これにより、ネットワーク通信が改善され、これらのコンポーネン ト間の遅延が縮小されます。

前提条件

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- MetalLB Operator がインストールされている。
- クラスター上で MetalLB Operator を開始している。

myPriorityClass.yaml などの PriorityClass カスタムリソースを作成して、優先度レベルを設定します。この例では、high-priority という名前の PriorityClass を、値 1000000 で定義します。この優先クラスが割り当てられた Pod は、スケジューリングにおいて、それより低い優先クラスの Pod より優先順位が高いとみなされます。

apiVersion: scheduling.k8s.io/v1 kind: PriorityClass metadata: name: high-priority value: 1000000

2. PriorityClass カスタムリソース設定を適用します。

\$ oc apply -f myPriorityClass.yaml

3. MetalLBPodConfig.yaml などの MetalLB カスタムリソースを作成して、priorityClassName と podAffinity の値を指定します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: MetalLB metadata: name: metallb namespace: metallb-system spec: logLevel: debug controllerConfig: priorityClassName: high-priority affinity: podAffinity: 2 requiredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution: - labelSelector: matchLabels: app: metallb topologyKey: kubernetes.io/hostname speakerConfig: priorityClassName: high-priority affinity: podAffinity: requiredDuringSchedulingIgnoredDuringExecution: - labelSelector: matchLabels: app: metallb topologyKey: kubernetes.io/hostname



MetalLB コントローラー Pod の優先クラスを指定します。この場合、**high-priority** に設定されます。

Pod アフィニティールールを設定していることを指定します。これらのルールは、他の Pod またはノードに関連して Pod がどのようにスケジュールされるかを決定します。こ の設定は、app: metallb ラベルを持つ Pod を同じホスト名を共有するノードにスケ ジュールするようにスケジューラーに指示します。これは、MetalLB 関連の Pod を同じ ノード上に配置するのに役立ち、これらの Pod 間のネットワーク通信、遅延、リソース使 用量を最適化できる可能性があります。 4. MetalLB カスタムリソース設定を適用します。

\$ oc apply -f MetalLBPodConfig.yaml

検証

 metallb-system namespace の Pod に割り当てた優先クラスを表示するには、次のコマンドを 実行します。

\$ oc get pods -n metallb-system -o customcolumns=NAME:.metadata.name,PRIORITY:.spec.priorityClassName

出力例

NAMEPRIORITYcontroller-584f5c8cd8-5zbvghigh-prioritymetallb-operator-controller-manager-9c8d9985-szkqg<none>metallb-operator-webhook-server-c895594d4-shjgx<none>speaker-dddf7high-priority

 スケジューラーが Pod アフィニティールールに従って Pod を配置したことを確認するには、 次のコマンドを実行して Pod のノードのメタデータを表示します。

\$ oc get pod -o=custom-columns=NODE:.spec.nodeName,NAME:.metadata.name -n metallb-system

33.2.4.4. MetalLB デプロイメントでの Pod CPU 制限の設定

オプションで、**MetalLB** カスタムリソースを設定することで、Pod の CPU 制限を **controller** Pod と **speaker** Pod に割り当てることができます。**controller** Pod または **speaker** Pod の CPU 制限を定義す ると、ノード上のコンピュートリソースを管理するのに役立ちます。これにより、ノード上のすべての Pod に、ワークロードとクラスターのハウスキーピングを管理するために必要なコンピューティングリ ソースが確保されます。

前提条件

- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- MetalLB Operator がインストールされている。

手順

 CPULimits.yaml などの MetalLB カスタムリソースファイルを作成し、コントローラー および speaker Pod の cpu 値を指定します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: MetalLB metadata: name: metallb namespace: metallb-system spec: logLevel: debug controllerConfig: resources: limits: cpu: "200m" speakerConfig: resources: limits: cpu: "300m"

2. MetalLB カスタムリソース設定を適用します。

\$ oc apply -f CPULimits.yaml

検証

 Pod のコンピューティングリソースを表示するには、次のコマンドを実行し、<pod_name> を ターゲット Pod に置き換えます。

\$ oc describe pod <pod_name>

33.2.5. 関連情報

- ノードセレクターの使用による特定ノードへの Pod の配置
- テイントおよび容認 (Toleration) について
- Pod の優先順位について
- Pod のアフィニティーについて

33.2.6. 次のステップ

• MetalLB アドレスプールの設定

33.3. METALLB のアップグレード

現在、MetalLB Operator のバージョン 4.10 以前のバージョンを実行している場合、4.10 以降のバー ジョンへの自動更新は機能しないことに注意してください。4.11 以降の任意のバージョンの MetalLB Operator から新しいバージョンへのアップグレードは成功します。たとえば、バージョン 4.12 から バージョン 4.13 へのアップグレードはスムーズに行われます。

4.10 以前からの MetalLB Operator のアップグレード手順の概要は次のとおりです。

- 1. インストールされている MetalLB Operator バージョン (4.10 など) を削除します。namespace と **metallb** カスタムリソースが削除されていないことを確認してください。
- 2. CLI を使用して、以前のバージョンの MetalLB Operator がインストールされていた namespace に MetalLB Operator 4.12 をインストールします。



注記

この手順は、標準の簡単な方法に従う MetalLB Operator の自動 z ストリーム更新には適用されません。

MetalLB Operator を 4.10 以前からアップグレードする詳細な手順については、次のガイダンスを参照 してください。クラスター管理者は、OpenShift CLI (**oc**) または Web コンソールを使用して MetalLB Operator を削除し、アップグレードプロセスを開始します。

33.3.1. Web コンソールを使用してクラスターから MetalLB Operator を削除

クラスター管理者は Web コンソールを使用して、選択した namespace からインストールされた Operator を削除できます。

前提条件

 cluster-admin 権限を持つアカウントを使用して OpenShift Container Platform クラスター Web コンソールにアクセスできる。

手順

- 1. Operators → Installed Operators ページに移動します。
- 2. MetalLB Operator を検索します。次に、それをクリックします。
- Operator Details ページの右側で、Actions ドロップダウンメニューから Uninstall Operator を選択します。 Uninstall Operator? ダイアログボックスが表示されます。
- 4. **Uninstall** を選択し、Operator、Operator デプロイメント、および Pod を削除します。この操作を実行すると、Operator は実行を停止し、更新を受信しなくなります。



注記

このアクションは、カスタムリソース定義 (CRD) およびカスタムリソース (CR) など、Operator が管理するリソースは削除されません。Web コンソールおよび 継続して実行されるクラスター外のリソースによって有効にされるダッシュボー ドおよびナビゲーションアイテムには、手動でのクリーンアップが必要になる場 合があります。Operator のアンインストール後にこれらを削除するには、 Operator CRD を手動で削除する必要があります。

33.3.2. CLI を使用してクラスターから MetalLB Operator を削除

クラスター管理者は CLI を使用して、選択した namespace からインストールされた Operator を削除 できます。

前提条件

- cluster-admin 権限を持つアカウントを使用して OpenShift Container Platform クラスターに アクセスできる。
- oc コマンドがワークステーションにインストールされていること。

手順

1. currentCSV フィールドでサブスクライブされた MetalLB Operator の現在のバージョンを確認 します。

\$ oc get subscription metallb-operator -n metallb-system -o yaml | grep currentCSV

出力例

currentCSV: metallb-operator.4.10.0-202207051316

2. サブスクリプションを削除します。

\$ oc delete subscription metallb-operator -n metallb-system

出力例

subscription.operators.coreos.com "metallb-operator" deleted

3. 直前の手順で **currentCSV** 値を使用し、ターゲット namespace の Operator の CSV を削除し ます。

\$ oc delete clusterserviceversion metallb-operator.4.10.0-202207051316 -n metallb-system

出力例

clusterserviceversion.operators.coreos.com "metallb-operator.4.10.0-202207051316" deleted

33.3.3. MetalLB Operator Operator グループの編集

4.10 以前の MetalLB Operator バージョンから 4.11 以降にアップグレードする場合は、Operator グルー プのカスタムリソース (CR) から **spec.targetNamespaces** を削除します。MetalLB Operator の削除に Web コンソールや CLI を使用したかにかかわらず、仕様を削除する必要があります。



注記

MetalLB Operator バージョン 4.11 以降は **AllNamespaces** インストールモードのみをサ ポートしますが、4.10 以前のバージョンは **OwnNamespace** モードまたは **SingleNamespace** モードをサポートします。

前提条件

- cluster-admin 権限を使用して OpenShift Container Platform クラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

手順

1. 次のコマンドを実行して、**metallb-system** namespace 内の Operator グループをリスト表示します。

\$ oc get operatorgroup -n metallb-system

出力例

NAME AGE metallb-system-7jc66 85m 2. 次のコマンドを実行して、**metallb-system** namespace に関連付けられた Operator グループ CR に **spec.targetNamespaces** が存在することを確認します。

\$ oc get operatorgroup metallb-system-7jc66 -n metallb-system -o yaml

出力例

apiVersion: operators.coreos.com/v1 kind: OperatorGroup metadata: annotations: olm.providedAPIs: "" creationTimestamp: "2023-10-25T09:42:49Z" generateName: metallb-systemgeneration: 1 name: metallb-system-7jc66 namespace: metallb-system resourceVersion: "25027" uid: f5f644a0-eef8-4e31-a306-e2bbcfaffab3 spec: targetNamespaces: - metallb-system upgradeStrategy: Default status: lastUpdated: "2023-10-25T09:42:49Z" namespaces: - metallb-system

 次のコマンドを実行して、Operator グループを編集し、spec セクション配下の targetNamespaces と metallb-system を削除します。

\$ oc edit n metallb-system

出力例

operatorgroup.operators.coreos.com/metallb-system-7jc66 edited

4. 次のコマンドを実行して、**metallb-system** namespace に関連付けられた Operator グループの カスタムリソースから **spec.targetNamespaces** が削除されていることを確認します。

\$ oc get operatorgroup metallb-system-7jc66 -n metallb-system -o yaml

出力例

apiVersion: operators.coreos.com/v1 kind: OperatorGroup metadata: annotations: olm.providedAPIs: "" creationTimestamp: "2023-10-25T09:42:49Z" generateName: metallb-systemgeneration: 2 name: metallb-system-7jc66 namespace: metallb-system resourceVersion: "61658" uid: f5f644a0-eef8-4e31-a306-e2bbcfaffab3 spec: upgradeStrategy: Default status: lastUpdated: "2023-10-25T14:31:30Z" namespaces: - ""

33.3.4. MetalLB Operator のアップグレード

前提条件

• cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスします。

手順

1. metallb-system namespace がまだ存在することを確認します。

\$ oc get namespaces | grep metallb-system

出力例

metallb-system

Active 31m

2. metallb カスタムリソースがまだ存在することを確認します。

\$ oc get metallb -n metallb-system

出力例

NAME AGE metallb 33m

3. CLI を使用した OperatorHub からのインストールに記載されたガイダンスに従い、MetalLB Operator の最新の 4.12 バージョンをインストールします。



注記

MetalLB Operator の最新の 4.12 バージョンをインストールする場合、以前にインストールしたのと同じ namespace に Operator をインストールする必要があります。

4. Operator のアップグレードされたバージョンが 4.12 バージョンになったことを確認します。

\$ oc get csv -n metallb-system

出力例
NAME DISPLAY VERSION REPLACES PHASE metallb-operator.4.12.0-202207051316 MetalLB Operator 4.12.0-202207051316 Succeeded

- 33.3.5. 関連情報
 - クラスターからの Operator の削除
 - MetalLB Operator のインストール

33.4. METALLB アドレスプールの設定

クラスター管理者は、アドレスプールを追加、変更、および削除できます。MetalLB Operator は、ア ドレスプールカスタムリソースを使用して、MetalLB がサービスに割り当てることのできる IP アドレ スを設定します。例で使用されている namespace は、namespace が **metallb-system** であることを前 提としています。

33.4.1. IPAddressPool カスタムリソースについて



注記

OpenShift Container Platform 4.10 の MetalLB を使用したロードバランシングに記載されているアドレスプールカスタムリソース定義 (CRD) および API は、4.12 でも引き続き 使用できます。ただし、アドレスプール CRD を使用する場合、レイヤー 2 または BGP プロトコルでの **IPAddressPools** のアドバタイズに関連する拡張機能はサポートされません。

次の表で、**IPAddressPool**カスタムリソースのフィールドについて説明します。

表33.1 MetalLB IPAddressPool プールのカスタムリソース

フィールド	型	説明
metadata.name	string	アドレスプールの名前を指定します。サービスを追加する場合 は、 metallb.universe.tf/address-pool アノテーションにこ のプール名を指定して、特定のプールから IP アドレスを選択で きます。ドキュメント全体で、 doc-example、silver 、および gold の名前が使用されます。
metadata.name space	string	アドレスプールの namespace を指定します。MetalLB Operator が使用するものと同じ namespace を指定します。
metadata.label	string	オプション: IPAddressPool に割り当てられたキーと値のペア を指定します。これは、BGPAdvertisement および L2Advertisement CRD の ipAddressPoolSelectors によっ て参照され、IPAddressPool をアドバタイズメントに関連付 けることができます。

フィールド	型	説明
spec.addresses	string	MetalLB Operator がサービスに割り当てる IP アドレスのリスト を指定します。1つのプールで複数の範囲を指定できます。それ らはすべて同じ設定を共有します。CIDR 表記で各範囲を指定す るか、開始および終了の IP アドレスをハイフンで区切って指定 します。
spec.autoAssig n	boolean	オプション: MetalLB がこのプールから IP アドレスを自動的に割 り当てるかどうかを指定しま す。 metallb.universe.tf/address-pool アノテーションを使 用してこのプールから IP アドレスを明示的に要求する場合 は、 false を指定します。デフォルト値は true です。
spec.avoidBugg yIPs	boolean	オプション: これを有効にすると、.0 および .255 で終わる IP ア ドレスがプールから割り当てられなくなります。デフォルト値 は false です。一部の古い消費者ネットワーク機器は、.0 およ び .255 で終わる IP アドレスを誤ってブロックします。

33.4.2. アドレスプールの設定

クラスター管理者は、クラスターにアドレスプールを追加して、MetaLLB がロードバランサーサービスに割り当てることのできる IP アドレスを制御できます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 以下の例のような内容で、ipaddresspool.yaml などのファイルを作成します。



- IPAddressPool に割り当てられたこのラベルは、BGPAdvertisement CRD の ipAddressPoolSelectors によって参照され、IPAddressPool をアドバタイズメントに関 連付けることができます。
- 2. IP アドレスプールの設定を適用します。



検証

アドレスプールを表示します。

\$ oc describe -n metallb-system IPAddressPool doc-example

出力例

Name: doc-example Namespace: metallb-system Labels: zone=east Annotations: <none> API Version: metallb.io/v1beta1 Kind: **IPAddressPool** Metadata: ... Spec: Addresses: 203.0.113.1-203.0.113.10 203.0.113.65-203.0.113.75 Auto Assign: true Events: <none>

doc-example などのアドレスプール名と IP アドレス範囲が出力に表示されることを確認します。

33.4.3. アドレスプールの設定例

33.4.3.1. 例: IPv4 および CIDR 範囲

CIDR 表記で IP アドレスの範囲を指定できます。CIDR 表記と、ハイフンを使用する表記を組み合わせて下層と上限を分けることができます。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: IPAddressPool metadata: name: doc-example-cidr namespace: metallb-system spec: addresses: - 192.168.100.0/24 - 192.168.200.0/24 - 192.168.255.1-192.168.255.5

33.4.3.2. 例: IP アドレスの予約

MetalLB がプールから IP アドレスを自動的に割り当てないように **autoAssign** フィールドを **false** に 設定できます。サービスを追加する場合は、プールから特定の IP アドレスを要求するか、そのプール から任意の IP アドレスを要求するためにアノテーションでプール名を指定できます。

apiVersion: metallb.io/v1beta1

kind: IPAddressPool
metadata:
name: doc-example-reserved
namespace: metallb-system
spec:
addresses:
- 10.0.100.0/28
autoAssign: false

33.4.3.3. 例: IPv4 および IPv6 アドレス

IPv4 および IPv6 を使用するアドレスプールを追加できます。複数の IPv4 の例と同様に、addresses 一覧で複数の範囲を指定できます。

サービスに、単一の IPv4 アドレス、単一の IPv6 アドレス、またはその両方を割り当てるかどうかは、 サービスの追加方法によって決まります。spec.ip Familiesフィールドとspec.ip Family Policyフィー ルドでは、IP アドレスをサービスに割り当てる方法を制御します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: IPAddressPool
metadata:
name: doc-example-combined
namespace: metallb-system
spec:
addresses:
- 10.0.100.0/28

- 2002:2:2::1-2002:2:2::100

33.4.4. 関連情報

• L2 アドバタイズメントとラベルを使用した MetalLB の設定

33.4.5. 次のステップ

- BGP モードについては、MetalLBBGP ピアの設定 を参照してください。
- MetalLB を使用するためのサービスの設定

33.5. IP アドレスプールのアドバタイズメントについて

IP アドレスがレイヤー2プロトコル、BGP プロトコル、またはその両方でアドバタイズされるように MetalLB を設定できます。レイヤー2では、MetalLB ではフォールトトレラントな外部 IP アドレスを 使用できます。BGP を使用すると、MetalLB で外部 IP アドレスに対するフォールトトレランス機能お よび負荷分散が提供されます。

MetalLB は、同じ IP アドレスのセットに対して L2 と BGP を使用したアドバタイズをサポートします。

MetalLB は、ネットワーク上のノードのサブセットに対して、特定の BGP ピアにアドレスプールを効 果的に割り当てる柔軟性を提供します。これにより、たとえばノードの分離やネットワークのセグメン テーションを容易にするなど、より複雑な設定が可能になります。

33.5.1. BGPAdvertisement カスタムリソースについて

bgp Advertisements オブジェクトのフィールドは、次の表に定義されています。

表33.2 BGPAdvertisementsの設定

フィールド	型	説明
metadata.name	string	BGP アドバタイズメントの名前を指定します。
metadata.name space	string	BGP アドバタイズメントの namespace を指定します。MetalLB Operator が使用するものと同じ namespace を指定します。
spec.aggregatio nLength	integer	オプション: 32 ビット CIDR マスクに含めるビット数を指定しま す。マスクが複数のサービス IP アドレスのルートに適用され、 speaker は集約されたルートをアドバタイズし、speaker が BGP ピアにアドバタイズするルートを集約します。たとえば、 集約の長さが 24の場合は、speaker は複数の10.0.1.x/32サービ ス IP アドレスを集約して、10.0.1.0/24ルートを1つアドバタイ ズできます。
spec.aggregatio nLengthV6	integer	オプション: 128 ビット CIDR マスクに含めるビット数を指定し ます。たとえば、集約の長さが 124 の場合は、speaker は複数の fc00:f853:0ccd:e799::x/128 サービス IP アドレスを集約し て、 fc00:f853:0ccd:e799::0/124 ルートを1つアドバタイズ できます。
spec.communiti es	string	オプション:1つ以上の BGP コミュニティーを指定します。各コ ミュニティーは、16 ビット値2つをコロン文字で区切って指定 します。一般的なコミュニティーは、16 ビット値として指定す る必要があります。 • NO_EXPORT: 65535:65281 • NO_ADVERTISE: 65535:65282 • NO_EXPORT_SUBCONFED: 65535:65283 注記 文字列とともに作成されたコミュニ ティーオブジェクトを使用することも できます。
spec.localPref	integer	オプション: このアドバタイズメントのローカル設定を指定しま す。この BGP 属性は、Autonomous System 内の BGP セッショ ンに適用されます。
spec.ipAddress Pools	string	オプション: 名前で選択された、このアドバタイズメントでアド バタイズする IPAddressPools のリスト。

フィールド	型	説明
spec.ipAddress PoolSelectors	string	オプション: このアドバタイズメントでアドバタイズされる IPAddressPools のセレクター。これは、名前自体ではな く、IPAddressPool に割り当てられたラベルに基づいて IPAddressPool をアドバタイズメントに関連付けるためのも のです。これやリストで IPAddressPool が選択されていない 場合、アドバタイズメントはすべての IPAddressPools に適 用されます。
spec.nodeSelec tors	string	オプション: NodeSelectors を使用すると、ロードバランサー IP のネクストホップとしてアナウンスするノードを制限できま す。空の場合、すべてのノードがネクストホップとしてアナウ ンスされます。
spec.peers	string	オプション: ピアは、選択したプールの IP をアドバタイズする BGP ピアを制限します。空の場合、ロードバランサー IP は設定 されているすべての BGP ピアにアナウンスされます。

33.5.2. BGP アドバタイズメントと基本的なユースケースを使用する MetalLB の設定

MetalLB を次のとおり設定し、ピア BGP ルーターが、MetalLB がサービスに割り当てるロードバラン サー IP アドレスごとに、203.0.113.200/32 ルート1つ、fc00:f853:ccd:e799::1/128 ルート1つを受信 するようにします。local Prefおよびcommunitiesフィールドが指定されていないため、ルートはlocal Prefをゼロに設定して BGP コミュニティーなしでアドバタイズされます。

33.5.2.1. 例: BGP を使用する基本的なアドレスプール設定のアドバタイズメント

IPAddressPool が BGP プロトコルでアドバタイズされるように、MetalLB を次のように設定します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. IP アドレスプールを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: IPAddressPool metadata: namespace: metallb-system name: doc-example-bgp-basic spec: addresses: - 203.0.113.200/30 - fc00:f853:ccd:e799::/124 b. IP アドレスプールの設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool.yaml

- 2. BGP アドバタイズメントを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、bgpadvertisement.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: BGPAdvertisement metadata: name: bgpadvertisement-basic namespace: metallb-system spec: ipAddressPools: - doc-example-bgp-basic

b. 設定を適用します。

\$ oc apply -f bgpadvertisement.yaml

33.5.3. BGP アドバタイズメントと高度なユースケースを使用する MetalLB の設定

MetalLB を次のように設定し、MetalLB が 203.0.113.200 と 203.0.113.203、fc00:f853:ccd:e799::0 と fc00:f853:ccd:e799::f の範囲の IP アドレスを割り当てるようにします。

MetalLB が **203.0.113.200**の IP アドレスをサービスに割り当てる例について見ていき、これら2つの BGP アドバタイズメントを説明します。この IP アドレスを例にとると、speaker は2つのルートを BGP ピアにアドバタイズします。

- localPref が 100 に、コミュニティーが NO_ADVERTISE コミュニティーの数値に設定されている 203.0.113.200/32。この仕様は、ピアルーターにこのルートを使用できることを指定していますが、このルートに関する情報を BGP ピアに伝播しないようにします。
- MetalLBで割り当てられたロードバランサーの IP アドレスを1つのルートに集約する 203.0.113.200/30。MetalLB は、コミュニティー属性が 8000:800に設定された BGP ピアに集約ルートをアドバタイズします。BGP ピアは、203.0.113.200/30ルートを他の BGP ピアに伝播します。トラフィックが speaker のあるノードにルーティングされる場合に は、203.0.113.200/32ルートを使用して、トラフィックがクラスターに転送され、サービスに 関連付けられている Pod に転送されます。

さらにサービスを追加し、MetalLB でプールからより多くのロードバランサー IP アドレスを割り当て ると、ピアルーターはサービスごとにローカルルート203.0.113.20x/32 を1つと、 203.0.113.200/30 集 約ルートを受け取ります。追加する各サービスは/30ルートを生成しますが、MetalLB は、ピアルー ターと通信する前に、ルートの重複を排除して1つの BGP アドバタイズにします。

33.5.3.1. 例: BGP を使用する高度なアドレスプール設定のアドバタイズメント

IPAddressPool が BGP プロトコルでアドバタイズされるように、MetalLB を次のように設定します。

前提条件

OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

• cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. IP アドレスプールを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool.yaml などのファイルを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: IPAddressPool
metadata:
namespace: metallb-system
name: doc-example-bgp-adv
labels:
zone: east
spec:
addresses:
- 203.0.113.200/30
- fc00:f853:ccd:e799::/124
autoAssign: false
```

b. IP アドレスプールの設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool.yaml

- 2. BGP アドバタイズメントを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、bgpadvertisement1.yaml などのファイルを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: BGPAdvertisement
metadata:
name: bgpadvertisement-adv-1
namespace: metallb-system
spec:
ipAddressPools:
- doc-example-bgp-adv
communities:
- 65535:65282
aggregationLength: 32
localPref: 100
```

b. 設定を適用します。

\$ oc apply -f bgpadvertisement1.yaml

c. 以下の例のような内容で、bgpadvertisement2.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: BGPAdvertisement metadata: name: bgpadvertisement-adv-2 namespace: metallb-system spec: ipAddressPools: - doc-example-bgp-adv communities: - 8000:800 aggregationLength: 30 aggregationLengthV6: 124

d. 設定を適用します。

\$ oc apply -f bgpadvertisement2.yaml

33.5.4. ノードのサブセットからの IP アドレスプールのアドバタイズ

特定のノードセットのみから IP アドレスプールから IP アドレスをアドバタイズするには、 BGPAdvertisement カスタムリソースで **.spec.nodeSelector** 仕様を使用します。この仕様は、IP アド レスのプールをクラスター内の一連のノードに関連付けます。これは、クラスター内の異なるサブネッ ト上にノードがあり、特定のサブネット (パブリックに面したサブネットのみなど) のアドレスプールか ら IP アドレスをアドバタイズしたい場合に役立ちます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. カスタムリソースを使用して IP アドレスプールを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: IPAddressPool
metadata:
namespace: metallb-system
name: pool1
spec:
addresses:
- 4.4.4.100-4.4.4.200
- 2001:100:4::200-2001:100:4::400

2. BGPAdvertisement カスタムリソースで **.spec.nodeSelector** 値を定義することにより、**pool1** からの IP アドレスがアドバタイズするクラスター内のノードを制御します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: BGPAdvertisement metadata: name: example spec: ipAddressPools: - pool1 nodeSelector: - matchLabels: kubernetes.io/hostname: NodeA - matchLabels: kubernetes.io/hostname: NodeB この例では、pool1 の IP アドレスは NodeA と NodeB からのみアドバタイズします。

33.5.5. L2Advertisement カスタムリソースについて

I2Advertisements オブジェクトのフィールドは、次の表に定義されています。

表33.3 L2 アドバタイズメント設定

フィールド	型	説明
metadata.name	string	L2 アドバタイズメントの名前を指定します。
metadata.name space	string	L2 アドバタイズメントの namespace を指定します。MetalLB Operator が使用するものと同じ namespace を指定します。
spec.ipAddress Pools	string	オプション: 名前で選択された、このアドバタイズメントでアド バタイズする IPAddressPools のリスト。
spec.ipAddress PoolSelectors	string	オプション: このアドバタイズメントでアドバタイズされる IPAddressPools のセレクター。これは、名前自体ではな く、IPAddressPool に割り当てられたラベルに基づいて IPAddressPool をアドバタイズメントに関連付けるためのも のです。これやリストで IPAddressPool が選択されていない 場合、アドバタイズメントはすべての IPAddressPools に適 用されます。
spec.nodeSelec tors	string	オプション: NodeSelectors は、ロードバランサーIPのネクス トホップとしてアナウンスするノードを制限します。空の場 合、すべてのノードがネクストホップとしてアナウンスされま す。

33.5.6. L2 アドバタイズメントを使用した MetalLB の設定

IPAddressPool が L2 プロトコルでアドバタイズされるように、MetalLB を次のように設定します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. IP アドレスプールを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool.yaml などのファイルを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: IPAddressPool
metadata:
namespace: metallb-system
name: doc-example-I2
spec:
addresses:
- 4.4.4.0/24
autoAssign: false
```

b. IP アドレスプールの設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool.yaml

2. L2 アドバタイズメントを作成します。

a. 以下の例のような内容で、I2advertisement.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: L2Advertisement metadata: name: l2advertisement namespace: metallb-system spec: ipAddressPools: - doc-example-l2

b. 設定を適用します。

\$ oc apply -f l2advertisement.yaml

33.5.7.L2 アドバタイズメントとラベルを使用した MetalLB の設定

BGPAdvertisement および L2Advertisement カスタムリソース定義の ipAddressPoolSelectors フィールドは、名前自体ではなく、IPAddressPool に割り当てられたラベルに基づいて IPAddressPool をアドバタイズメントに関連付けるために使用されます。

この例は、**ipAddressPoolSelectors** フィールドを設定することにより、**IPAddressPool** が L2 プロト コルでアドバタイズされるように MetalLB を設定する方法を示しています。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. IP アドレスプールを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1b	oeta1
metadata:	
namespace: metallb-sys	tem
name: doc-example-I2-la	abel
labels:	
zone: east	
spec:	
addresses:	
- 172.31.249.87/32	

b. IP アドレスプールの設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool.yaml

- 2. **ipAddressPoolSelectors** を使用して IP をアドバタイズする L2 アドバタイズメントを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、I2advertisement.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: L2Advertisement metadata: name: l2advertisement-label namespace: metallb-system spec: ipAddressPoolSelectors: - matchExpressions: - key: zone operator: In values: - east

b. 設定を適用します。

\$ oc apply -f I2advertisement.yaml

33.5.8. 関連情報

コミュニティーエイリアスの設定

33.6. METALLB BGP ピアの設定

クラスター管理者は、ボーダーゲートウェイプロトコル (BGP) ピアを追加、変更、および削除できま

す。MetalLB Operator は、BGP ピアカスタムリソースを使用して、MetalLB **speaker** Pod が BGP セッションを開始するために接続するピアを識別します。ピアは、MetalLB がサービスに割り当てる ロードバランサー IP アドレスのルートアドバタイズメントを受信します。

33.6.1. BGP ピアカスタムリソースについて

次の表で、BGP ピアカスタムリソースのフィールドについて説明します。

表33.4 MetalLB BGP ピアカスタムリソース

フィールド	型	説明
metadata.name	string	BGP ピアカスタムリソースの名前を指定します。
metadata.name space	string	BGP ピアカスタムリソースの namespace を指定します。
spec.myASN	integer	BGP セッションのローカルエンドの Autonomous System 番号 を指定します。追加するすべての BGP ピアカスタムリソースに 同じ値を指定します。範囲は 0 ~ 4294967295 です。
spec.peerASN	integer	BGP セッションのリモートエンドの Autonomous System 番号 を指定します。範囲は 0 ~ 4294967295 です。
spec.peerAddre ss	string	BGP セッションを確立するために接続するピアの IP アドレスを 指定します。
spec.sourceAd dress	string	オプション: BGP セッションの確立時に使用する IP アドレスを 指定します。値は IPv4 アドレスである必要があります。
spec.peerPort	integer	オプション: BGP セッションを確立するために接続するピアの ネットワークポートを指定します。範囲は 0 から 16384 です。
spec.holdTime	string	オプション: BGP ピアに提案するホールドタイムの期間を指定 します。最小値は3秒 (3s)です。一般的には、 3s、1m および 5m30s など、秒および分単位で指定します。パス障害をより迅 速に検出するには、BFD も設定します。
spec.keepaliveT ime	string	オプション: キープアライブメッセージを BGP ピアに送信する 間の最大間隔を指定します。このフィールドを指定する場合 は、 holdTime フィールドの値も指定する必要があります。指 定する値は、 holdTime フィールドの値よりも小さくする必要 があります。
spec.routerID	string	オプション: BGP ピアにアドバタイズするルーター ID を指定し ます。このフィールドを指定する場合は、追加するすべての BGP ピアカスタムリソースに同じ値を指定する必要がありま す。
spec.password	string	オプション: TCP MD5 認証が済んだ BGP セッションを実施する ルーターのピアに送信する MD5 パスワードを指定します。

フィールド	型	説明
spec.password Secret	string	オプション: BGP ピアの認証シークレットの名前を指定しま す。シークレットは metallb namespace に存在し、basic-auth タイプである必要があります。
spec.bfdProfile	string	オプション: BFD プロファイルの名前を指定します。
spec.nodeSelec tors	object[]	オプション: 一致式と一致ラベルを使用してセレクターを指定 し、BGP ピアに接続できるノードを制御します。
spec.ebgpMulti Hop	boolean	オプション: BGP ピアがネットワークホップ数回分を離れるように指定します。BGP ピアが同じネットワークに直接接続されていない場合には、このフィールドが true に設定されていないと、speaker は BGP セッションを確立できません。このフィールドは 外部 BGP に適用されます。外部 BGP は、BGP ピアが別の Autonomous System に属する場合に使用される用語です。



注記

passwordSecret フィールドは、**password** フィールドと相互に排他的であり、使用するパスワードを含むシークレットへの参照が含まれています。両方のフィールドを設定すると、解析が失敗します。

33.6.2. BGP ピアの設定

クラスター管理者は、BGP ピアカスタムリソースを追加して、ネットワークルーターとルーティング 情報を交換し、サービスの IP アドレスをアドバタイズできます。

前提条件

- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。
- BGP アドバタイズメントを使用して MetalLB を設定します。

手順

1. 次の例のようなコンテンツを含むbgppeer.yamlなどのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta2 kind: BGPPeer metadata: namespace: metallb-system name: doc-example-peer spec: peerAddress: 10.0.0.1 peerASN: 64501 myASN: 64500 routerID: 10.10.10.10 2. BGP ピアの設定を適用します。

\$ oc apply -f bgppeer.yaml

33.6.3. 指定されたアドレスプールに対して特定の BGP ピアセットを設定 これは、以下を実行するための手順です。

- アドレスプールのセット (pool1 および pool2) を設定します。
- BGP ピアセット (peer1 および peer2) を設定します。
- pool1 を peer1 に、pool2 を peer2 に割り当てるように BGP アドバタイズメントを設定します。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. アドレスプール pool1 を作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool1.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: IPAddressPool metadata: namespace: metallb-system name: pool1 spec: addresses: - 4.4.4.100-4.4.4.200 - 2001:100:4::200-2001:100:4::400

b. IP アドレスプール pool1 の設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool1.yaml

- 2. アドレスプール pool2 を作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool2.yaml などのファイルを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: IPAddressPool
metadata:
namespace: metallb-system
name: pool2
spec:
addresses:
- 5.5.5.100-5.5.5.200
- 2001:100:5::200-2001:100:5::400
```

b. IP アドレスプール **pool2** の設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool2.yaml

- 3. BGP peer1 を作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、bgppeer1.yaml などのファイルを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta2
kind: BGPPeer
metadata:
namespace: metallb-system
name: peer1
spec:
peerAddress: 10.0.0.1
peerASN: 64501
myASN: 64500
routerID: 10.10.10.10
```

b. BGP ピアの設定を適用します。

\$ oc apply -f bgppeer1.yaml

- 4. BGP peer2 を作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、bgppeer2.yaml などのファイルを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta2
kind: BGPPeer
metadata:
namespace: metallb-system
name: peer2
spec:
peerAddress: 10.0.0.2
peerASN: 64501
myASN: 64500
routerID: 10.10.10.10
```

b. BGP peer2 の設定を適用します。

\$ oc apply -f bgppeer2.yaml

- 5. BGP advertisement 1 を作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、bgpadvertisement1.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: BGPAdvertisement metadata: name: bgpadvertisement-1 namespace: metallb-system spec: ipAddressPools: - pool1 peers: - peer1 communities: - 65535:65282 aggregationLength: 32 aggregationLengthV6: 128 localPref: 100

b. 設定を適用します。

\$ oc apply -f bgpadvertisement1.yaml

- 6. BGP advertisement 2 を作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、bgpadvertisement2.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: BGPAdvertisement metadata: name: bgpadvertisement-2 namespace: metallb-system spec: ipAddressPools: - pool2 peers: - peer2 communities: - 65535:65282 aggregationLength: 32 aggregationLengthV6: 128 localPref: 100

b. 設定を適用します。

\$ oc apply -f bgpadvertisement2.yaml

33.6.4. BGP ピア設定の例

33.6.4.1. 例: BGP ピアに接続するノードの制限

ノードセレクターフィールドを指定して、BGP ピアに接続できるノードを制御できます。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta2
kind: BGPPeer
metadata:
name: doc-example-nodesel
namespace: metallb-system
spec:
peerAddress: 10.0.20.1
peerASN: 64501
myASN: 64500
nodeSelectors:
- matchExpressions:
```

 key: kubernetes.io/hostname operator: In values: [compute-1.example.com, compute-2.example.com]

33.6.4.2. 例: BGP ピアの BFD プロファイル指定

BGP ピアに関連付ける BFD プロファイルを指定できます。BFD は、BGP のみの場合よりも、ピア間の通信障害をより迅速に検出して、BGP を補完します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta2
kind: BGPPeer
metadata:
name: doc-example-peer-bfd
namespace: metallb-system
spec:
peerAddress: 10.0.20.1
peerASN: 64501
myASN: 64500
holdTime: "10s"
bfdProfile: doc-example-bfd-profile-full
```



注記

双方向転送検出 (BFD) プロファイルを削除し、ボーダーゲートウェイプロトコル (BGP) ピアリソースに追加された **bfdProfile** を削除しても、BFD は無効になりません。代わり に、BGP ピアはデフォルトの BFD プロファイルの使用を開始します。BGP ピアリソー スから BFD をディセーブルにするには、BGP ピア設定を削除し、BFD プロファイルな しで再作成します。詳細は、BZ#2050824 を参照してください。

33.6.4.3. 例: デュアルスタックネットワーク用の BGP ピア指定

デュアルスタックネットワーキングをサポートするには、IPv4 用に BGP ピアカスタムリソース1つと IPv6 用に BGP ピアカスタムリソースを1つ追加します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta2
kind: BGPPeer
metadata:
 name: doc-example-dual-stack-ipv4
 namespace: metallb-system
spec:
 peerAddress: 10.0.20.1
 peerASN: 64500
 myASN: 64500
apiVersion: metallb.io/v1beta2
kind: BGPPeer
metadata:
 name: doc-example-dual-stack-ipv6
 namespace: metallb-system
spec:
 peerAddress: 2620:52:0:88::104
 peerASN: 64500
 myASN: 64500
```

33.6.5. 次のステップ

• MetalLB を使用するためのサービスの設定

33.7. コミュニティーエイリアスの設定

クラスター管理者は、コミュニティーエイリアスを設定して、さまざまなアドバタイズメントで使用できます。

33.7.1. コミュニティーカスタムリソースについて

community カスタムリソースは、コミュニティーのエイリアスのコレクションです。ユーザー は、**BGPAdvertisement** を使用して **ipAddressPools** をアドバタイズするときに使用される名前付き エイリアスを定義できます。次の表で、**community** カスタムリソースのフィールドについて説明しま す。



注記

community CRD は BGPAdvertisement にのみ適用されます。

表33.5 MetalLBコミュニティーカスタムリソース

フィールド	型	説明
metadata.name	string	community の名前を指定します。
metadata.name space	string	community の namespace を指定します。MetalLB Operator が使用するものと同じ namespace を指定します。
spec.communiti es	string	BGPAdvertisements で使用できる BGP コミュニティーエイリ アスのリストを指定します。コミュニティーエイリアスは、名 前 (エイリアス) と値 (番号:番号) のペアで構成されま す。 spec.communities フィールドのエイリアス名を参照し て、BGPAdvertisement をコミュニティーエイリアスにリンク します。

表33.6 CommunityAlias

フィールド	型	説明
name	string	community のエイリアスの名前。
value	string	指定された名前に対応する BGP community 値。

33.7.2. BGP アドバタイズメントとコミュニティーエイリアスを使用した MetalLB の設定

MetalLB を次のように設定し、**IPAddressPool** が BGP プロトコルでアドバタイズされ、コミュニ ティーエイリアスが NO_ADVERTISE コミュニティーの数値に設定されるようにします。 次の例では、ピア BGP ルーター doc-example-peer-community は、MetalLB がサービスに割り当て るロードバランサー IP アドレスごとに1つの 203.0.113.200/32 ルートと1つの fc00:f853:ccd:e799::1/128 ルートを受信します。コミュニティーエイリアスは、NO_ADVERTISE コ ミュニティーで設定されます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

- 1. IP アドレスプールを作成します。
 - a. 以下の例のような内容で、ipaddresspool.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: IPAddressPool metadata: namespace: metallb-system name: doc-example-bgp-community spec: addresses: - 203.0.113.200/30 - fc00:f853:ccd:e799::/124

b. IP アドレスプールの設定を適用します。

\$ oc apply -f ipaddresspool.yaml

2. community1 という名前のコミュニティーエイリアスを作成します。

```
apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: Community
metadata:
name: community1
namespace: metallb-system
spec:
communities:
- name: NO_ADVERTISE
value: '65535:65282'
```

- 3. doc-example-bgp-peer という名前の BGP ピアを作成します。
 - a. 次の例のようなコンテンツを含むbgppeer.yamlなどのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta2 kind: BGPPeer metadata: namespace: metallb-system name: doc-example-bgp-peer spec: peerAddress: 10.0.0.1



```
b. 設定を適用します。
```



\$ oc apply -f bgpadvertisement.yaml

33.8. METALLB BFD プロファイルの設定

クラスター管理者は、双方向フォワーディング検出 (BFD) プロファイルを追加、変更、および削除でき ます。MetalLB Operator は、BFD プロファイルのカスタムリソースを使用して、BFD を使用する BGP セッションで、BGP だけの時よりも障害検出のパスを素早く見つけ出すセッションを特定しま す。

33.8.1. BFD プロファイルカスタムリソースについて

次の表で、BFD プロファイルのカスタムリソースのフィールドについて説明します。

表33.7 BFD プロファイルカスタムリソース

フィールド	型	
metadata.name	string	BFD プロファイルカスタムリソースの名前を指定します。

フィールド	型	説明
metadata.name space	string	BFD プロファイルカスタムリソースの namespace を指定しま す。
spec.detectMult iplier	integer	パケット損失を決定するための検出乗数を指定します。リモー ト送信間隔にこの値を乗算して、接続損失検出タイマーを決定 します。 たとえば、ローカルシステムの検出乗数が3に設定され、リモー トシステムの送信間隔が300に設定されている場合に、ローカ ルシステムはパケットを受信せずに900ミリ秒後にのみ障害を 検出します。 範囲は2から255です。デフォルト値は3です。
spec.echoMode	boolean	エコー送信モードを指定します。分散 BFD を使用していない と、エコー送信モードは、ピアが FRR でもある場合にのみ機能 します。デフォルト値はfalseで、エコー送信モードは無効に なっています。 エコー送信モードが有効になっている場合は、制御パケットの 送信間隔を増やして、帯域幅の使用量を減らすことを検討して ください。たとえば、送信間隔を2000ミリ秒に増やすことを検 討してください。
spec.echoInterv al	integer	このシステムがエコーパケットの送受信に使用する最小送信間 隔 (ジッターの軽減) を指定します。範囲は 10 から 60000 で す。デフォルト値は 50 ミリ秒です。
spec.minimumT tl	integer	着信制御パケットに最小限必要な TTL を指定します。この フィールドは、マルチホップセッションにのみ適用されます。 最小 TTL を設定する目的は、パケット検証要件をより厳しく し、他のセッションからの制御パケットの受信を回避すること です。 デフォルト値は 254 で、システムでは、システムとピアの間の ホップ数が1回のみとすると指定しています。
spec.passiveMo de	boolean	セッションをアクティブまたはパッシブとしてマークするかど うかを指定します。パッシブセッションは接続の開始を試行し ません。代わりに、パッシブセッションは、応答の開始前にピ アからの制御パケットを待機します。 セッションをパッシブとしてマークすることは、スターネット ワークの中央ノードとして機能するルーターがあり、システム が送信する必要のない制御パケットの送信を避ける場合に役立 ちます。 デフォルト値は false で、セッションをアクティブとしてマーク します。

フィールド	型	説明
spec.receiveInte rval	integer	このシステムが制御パケットを受信できる最小間隔を指定しま す。範囲は 10 から 60000 です。デフォルト値は 300 ミリ秒で す。
spec.transmitInt erval	integer	このシステムが制御パケットの送信に使用する最小送信間隔 (ジッターの軽減)を指定します。範囲は 10 から 60000 です。 デフォルト値は 300 ミリ秒です。

33.8.2. BFD プロファイルの設定

クラスター管理者は、BFD プロファイルを追加し、そのプロファイルを使用するように BGP ピアを設 定できます。BFD は、BGP のみよりも、パスの障害検出が高速になります。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- cluster-admin 権限を持つユーザーとしてログインしている。

手順

1. 次の例のようなコンテンツを含む bfdprofile.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1 kind: BFDProfile metadata: name: doc-example-bfd-profile-full namespace: metallb-system spec: receiveInterval: 300 transmitInterval: 300 detectMultiplier: 3 echoMode: false passiveMode: true minimumTtl: 254

2. BFD プロファイルの設定を適用します。

\$ oc apply -f bfdprofile.yaml

33.8.3. 次のステップ

• BFD プロファイルを使用するようにBGP ピアを設定します。

33.9. METALLB を使用するためのサービスの設定

クラスター管理者は、タイプ **LoadBalancer** のサービスを追加するときに、MetalLB が IP アドレスを 割り当てる方法を制御できます。

33.9.1. 特定の IP アドレスの要求

他のロードバランサーの実装と同様に、MetalLB はサービス仕様の **spec.loadBalancerIP** フィールド を受け入れます。

要求された IP アドレスが任意のアドレスプールの範囲内にある場合、MetalLB は要求された IP アドレ スを割り当てます。要求された IP アドレスが範囲外の場合、MetalLB は警告を報告します。

特定の IP アドレスのサービス YAML の例

```
apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: <service_name>
annotations:
metallb.universe.tf/address-pool: <address_pool_name>
spec:
selector:
<label_key>: <label_value>
ports:
- port: 8080
targetPort: 8080
protocol: TCP
type: LoadBalancer
loadBalancerIP: <ip address>
```

MetalLB が要求された IP アドレスを割り当てることができない場合、サービスの **EXTERNAL-IP** が <pending> を報告し、oc describe service <service_name> の実行には、以下の例のようなイベント が含まれます。

MetalLB が要求された IP アドレスを割り当てることができない場合のイベントの例

... Events: Type Reason Age From Message

Warning AllocationFailed 3m16s metallb-controller Failed to allocate IP for "default/invalid-request": "4.3.2.1" is not allowed in config

33.9.2. 特定のプールからの IP アドレスの要求

特定の範囲から IP アドレスを割り当てても、特定の IP アドレスを気にしない場合 は、metallb.universe.tf/address-pool アノテーションを使用して、指定したアドレスプールから IP ア ドレスを要求できます。

特定プールからの IP アドレスのサービス YAML の例

apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: <service_name>
annotations:
metallb.universe.tf/address-pool: <address_pool_name>
spec:
selector:
 <label_key>: <label_value>
ports:
 - port: 8080
 targetPort: 8080
 protocol: TCP
type: LoadBalancer

<address_pool_name> に指定するアドレスプールが存在しない場合、MetalLB は、自動割り当てを許可する任意のプールから IP アドレスを割り当てようとします。

33.9.3. 任意の IP アドレスを許可します。

デフォルトでは、アドレスプールは自動割り当てを許可するように設定されます。MetalLBは、これらのアドレスプールから IP アドレスを割り当てます。

自動割り当て用に設定されたプールから IP アドレスを受け入れるには、特別なアノテーションや設定 は必要ありません。

任意の IP アドレスを受け入れるサービス YAML の例

33.9.4. 特定の IP アドレスを共有

デフォルトでは、サービスは IP アドレスを共有しません。ただし、単一の IP アドレスにサービスを配 置する必要がある場合は、**metallb.universe.tf/allow-shared-ip** アノテーションをサービスに追加する ことで、選択的な IP 共有を有効にできます。

apiVersion: v1
kind: Service
metadata:
name: service-http
annotations:
metallb.universe.tf/address-pool: doc-example
metallb.universe.tf/allow-shared-ip: "web-server-svc"
spec:
ports:
- name: http

port: 80 (2) protocol: TCP targetPort: 8080 selector: <label key>: <label value> 3 type: LoadBalancer loadBalancerIP: 172.31.249.7 4 apiVersion: v1 kind: Service metadata: name: service-https annotations: metallb.universe.tf/address-pool: doc-example metallb.universe.tf/allow-shared-ip: "web-server-svc" (5) spec: ports: - name: https port: 443 6 protocol: TCP targetPort: 8080 selector: <label key>: <label value> 7 type: LoadBalancer loadBalancerIP: 172.31.249.7 8

15 metallb.universe.tf/allow-shared-ip アノテーションに同じ値を指定します。この値は 共有キー と呼ばれます。

26サービスに異なるポート番号を指定します。

3 7 externalTrafficPolicy: local を指定し、サービスが同じ Pod のセットにトラフィックを送信でき るようにするために、同じ Pod セレクターを指定します。cluster の外部トラフィックポリシー を使用する場合、Pod セレクターは同じである必要はありません。

48オプション:上記の3つの項目を指定すると、MetalLBは同じ IP アドレスにサービスを配置する 場合があります。サービスが IP アドレスを共有することを確認するには、共有する IP アドレス を指定します。

デフォルトで、Kubernetes はマルチプロトコルロードバランサーサービスを許可しません。この制限 は通常、TCP と UDP の両方をリッスンする必要がある DNS などのサービスを実行できなくなりま す。MetalLB を使用して Kubernetes のこの制限を回避するには、2 つのサービスを作成します。

- 1つのサービスには TCP を指定し、2 番目のサービスには UDP を指定します。
- 両方のサービスで、同じ Pod セレクターを指定します。
- 同じ共有キーと spec.loadBalancerIP 値を指定して、TCP サービスと UDP サービスを同じ IP アドレスに配置します。

33.9.5. MetalLB を使用したサービスの設定

アドレスプールから外部 IP アドレスを使用するように、負荷分散サービスを設定することができます。

前提条件

- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。
- MetalLB Operator をインストールして、MetalLB を起動します。
- 1つ以上のアドレスプールを設定します。
- トラフィックをクライアントからクラスターのホストネットワークにルーティングするように ネットワークを設定します。

手順

- <service_name>.yaml ファイルを作成します。このファイルで、spec.type フィールドが LoadBalancer に設定されていることを確認します。 MetalLB がサービスに割り当てる外部 IP アドレスを要求する方法については、例を参照してく ださい。
- 2. サービスを作成します。

\$ oc apply -f <service_name>.yaml

出力例

service/<service_name> created

検証

サービスを記述します。

\$ oc describe service <service_name>

出力例

Name:	<service_nam< th=""><th>ie></th><th></th><th></th></service_nam<>	ie>		
Namespace:	default			
Labels:	<none></none>			
Annotations:	metallb.univ	erse.tf/addres	s-pool: doc-example <	:.>
Selector:	app=service_r	name		
Туре:	LoadBalancer	<.>		
IP Family Policy:	SingleStack	<		
IP Families:	IPv4			
IP:	10.105.237.254			
IPs:	10.105.237.254			
LoadBalancer In	gress: 192.168	8.100.5 <.>		
Port:	<unset> 80/TC</unset>	Р		
TargetPort:	8080/TCP			
NodePort:	<unset> 305</unset>	50/TCP		
Endpoints:	10.244.0.50:8	8080		
Session Affinity:	None			
External Traffic F	Policy: Cluster			
Events: <.>				
Type Reason	Age	From	Message	

Normal nodeAssigned 32m (x2 over 32m) metallb-speaker announcing from node " <node_name>"

<.> 特定のプールから IP アドレスを要求すると、アノテーションが表示されます。<.> サービス タイプは LoadBalancer を示す必要があります。<.> サービスが正しく割り当てられている場 合、ロードバランサーのイングレスフィールドは外部 IP アドレスを示します。<.> events フィールドは、外部 IP アドレスを通知するために割り当てられたノード名を示します。エラー が発生した場合、events フィールドはエラーの理由を示します。

33.10. METALLB のロギング、トラブルシューティング、サポート

MetalLB 設定のトラブルシューティングが必要な場合は、次のセクションで一般的に使用されるコマン ドを参照してください。

33.10.1. MetalLB ログレベルの設定

MetalLB は、デフォルト設定の **info** を使用してコンテナーで FRRouting (FRR) を使用し、大量のログ を生成します。この例に示すように **logLevel** を設定することにより、生成されるログの詳細度を制御 できます。

次のように **logLevel** を **debug** に設定することで、MetalLB についてより深い洞察を得ることができます。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. 以下の例のような内容で、setdebugloglevel.yaml などのファイルを作成します。

apiVersion: metallb.io/v1beta1
kind: MetalLB
metadata:
name: metallb
namespace: metallb-system
spec:
logLevel: debug
nodeSelector:
node-role.kubernetes.io/worker: ""

2. 設定を適用します。

\$ oc replace -f setdebugloglevel.yaml



注記

metallb CR はすでに作成されており、ここではログレベルを変更していることを理解たうえで、**ocr eplace**を使用します。

3. speakerPod の名前を表示します。

\$ oc get -n metallb-system pods -l component=speaker

出力例

NAME	READY	STATUS	RES	TARTS	AGE
speaker-2m9pm	4/4	Running	0	9m19	S
speaker-7m4qw	3/4	Running	0	19s	
speaker-szlmx	4/4	Running C)	9m19s	



注記

スピーカー Pod とコントローラー Pod が再作成され、更新されたログレベルが 確実に適用されます。MetalLB のすべてのコンポーネントのログレベルが変更さ れます。

4. speaker ログを表示します。

\$ oc logs -n metallb-system speaker-7m4qw -c speaker

出力例

{"branch":"main","caller":"main.go:92","commit":"3d052535","goversion":"gc / go1.17.1 / amd64","level":"info","msg":"MetalLB speaker starting (commit 3d052535, branch main)","ts":"2022-05-17T09:55:05Z","version":""} {"caller":"announcer.go:110","event":"createARPResponder","interface":"ens4","level":"info","m sg":"created ARP responder for interface","ts":"2022-05-17T09:55:05Z"} {"caller":"announcer.go:119","event":"createNDPResponder","interface":"ens4","level":"info","m sg":"created NDP responder for interface","ts":"2022-05-17T09:55:05Z"} {"caller":"announcer.go:110","event":"createARPResponder","interface":"tun0","level":"info","ms g":"created ARP responder for interface","ts":"2022-05-17T09:55:05Z"} {"caller":"announcer.go:119","event":"createNDPResponder","interface":"tun0","level":"info","m sg":"created NDP responder for interface","ts":"2022-05-17T09:55:05Z"} 95 request.go:665] Waited for 1.026500832s due to client-side 10517 09:55:06.515686 throttling, not priority and fairness, request: GET:https://172.30.0.1:443/apis/operators.coreos.com/v1alpha1?timeout=32s {"Starting Manager":"(MISSING)","caller":"k8s.go:389","level":"info","ts":"2022-05-17T09:55:08Z"} {"caller":"speakerlist.go:310","level":"info","msg":"node event - forcing sync","node addr":"10.0.128.4", "node event":"NodeJoin", "node name":"ci-In-qb8t3mb-72292-7s7rhworker-a-vvznj","ts":"2022-05-17T09:55:08Z"} {"caller":"service_controller.go:113","controller":"ServiceReconciler","enqueueing":"openshiftkube-controller-manager-operator/metrics","epslice":"{\"metadata\":{\"name\":\"metricsxtsxr\",\"generateName\":\"metrics-\",\"namespace\":\"openshift-kube-controller-manageroperator\",\"uid\":\"ac6766d7-8504-492c-9d1e-4ae8897990ad\",\"resourceVersion\":\"9041\",\"generation\":4,\"creationTimestamp\":\"2022-05-17T07:16:53Z\",\"labels\":{\"app\":\"kube-controller-manageroperator\",\"endpointslice.kubernetes.io/managed-by\":\"endpointslicecontroller.k8s.io\",\"kubernetes.io/service-name\":\"metrics\"},\"annotations\": {\"endpoints.kubernetes.io/last-change-trigger-time\":\"2022-05-17T07:21:34Z\"},\"ownerReferences\": [{\"apiVersion\":\"v1\",\"kind\":\"Service\",\"name\":\"metrics\",\"uid\":\"0518eed3-6152-42beb566-0bd00a60faf8\",\"controller\":true,\"blockOwnerDeletion\":true}],\"managedFields\": [{\"manager\":\"kube-controller-

 $\label{eq:linear} manager\,\"operation\':\"Update\',\"apiVersion\':\"discovery.k8s.io/v1\',\"time\':\"2022-05-17T07:20:02Z\',\"fieldsType\':\"FieldsV1\'',\"fieldsV1\'':\"fieldsV1\''':\"fieldsV1\''':\"fieldsV1\''':\"fieldsV1\'':\"fieldsV1\$

{},\"f:endpointslice.kubernetes.io/managed-by\":{},\"f:kubernetes.io/service-name\":

 $\label{eq:linear} \label{eq:linear} \label{eq:$

 $\label{eq:linear_line$

operator\",\"name\":\"kube-controller-manager-operator-6b98b89ddd-

8d4nf\",\"uid\":\"dd5139b8-e41c-4946-a31b-

1a629314e844\",\"resourceVersion\":\"9038\"},\"nodeName\":\"ci-In-qb8t3mb-72292-7s7rhmaster-0\",\"zone\":\"us-central1-a\"}],\"ports\":

[{\"name\":\"https\",\"protocol\":\"TCP\",\"port\":8443}]}","level":"debug","ts":"2022-05-17T09:55:08Z"}

5. FRR ログを表示します。

\$ oc logs -n metallb-system speaker-7m4qw -c frr

出力例

Started watchfrr 2022/05/17 09:55:05 ZEBRA: client 16 says hello and bids fair to announce only bgp routes vrf=0 2022/05/17 09:55:05 ZEBRA: client 31 says hello and bids fair to announce only vnc routes vrf=0 2022/05/17 09:55:05 ZEBRA: client 38 says hello and bids fair to announce only static routes vrf=0 2022/05/17 09:55:05 ZEBRA: client 43 says hello and bids fair to announce only bfd routes vrf=0 2022/05/17 09:57:25.089 BGP: Creating Default VRF, AS 64500 2022/05/17 09:57:25.090 BGP: dup addr detect enable max moves 5 time 180 freeze disable freeze time 0 2022/05/17 09:57:25.090 BGP: bgp_get: Registering BGP instance (null) to zebra 2022/05/17 09:57:25.090 BGP: Registering VRF 0 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Router Id update VRF 0 Id 10.131.0.1/32 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: RID change : vrf VRF default(0), RTR ID 10.131.0.1 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF br0 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF ens4 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF ens4 addr 10.0.128.4/32 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF ens4 addr fe80::c9d:84da:4d86:5618/64 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF lo 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF ovs-system 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF tun0 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF tun0 addr 10.131.0.1/23 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF tun0 addr fe80::40f1:d1ff:feb6:5322/64 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF veth2da49fed 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF veth2da49fed addr fe80::24bd:d1ff:fec1:d88/64 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF veth2fa08c8c

2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF veth2fa08c8c addr fe80::6870:ff:fe96:efc8/64 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF veth41e356b7 2022/05/17 09:57:25.091 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF veth41e356b7 addr fe80::48ff:37ff:fede:eb4b/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF veth1295c6e2 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF veth1295c6e2 addr fe80::b827:a2ff:feed:637/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF veth9733c6dc 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF veth9733c6dc addr fe80::3cf4:15ff:fe11:e541/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF veth336680ea 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF veth336680ea addr fe80::94b1:8bff:fe7e:488c/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF vetha0a907b7 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF vetha0a907b7 addr fe80::3855:a6ff:fe73:46c3/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF vethf35a4398 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF vethf35a4398 addr fe80::40ef:2fff:fe57:4c4d/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF vethf831b7f4 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF vethf831b7f4 addr fe80::f0d9:89ff:fe7c:1d32/64 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf add VRF 0 IF vxlan sys 4789 2022/05/17 09:57:25.092 BGP: Rx Intf address add VRF 0 IF vxlan sys 4789 addr fe80::80c1:82ff:fe4b:f078/64 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: 10.0.0.1 [FSM] Timer (start timer expire). 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: 10.0.0.1 [FSM] BGP_Start (Idle->Connect), fd -1 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: Allocated bnc 10.0.0.1/32(0)(VRF default) peer 0x7f807f7631a0 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: sendmsg_zebra_rnh: sending cmd ZEBRA NEXTHOP REGISTER for 10.0.0.1/32 (vrf VRF default) 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: 10.0.0.1 [FSM] Waiting for NHT 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: bgp fsm change status : vrf default(0), Status: Connect established peers 0 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: 10.0.0.1 went from Idle to Connect 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: 10.0.0.1 [FSM] TCP connection open failed (Connect->Active). fd -1 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: bgp_fsm_change_status : vrf default(0), Status: Active established_peers 0 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: 10.0.0.1 went from Connect to Active 2022/05/17 09:57:26.094 ZEBRA: rnh register msg from client bgp: hdr->length=8, type=nexthop vrf=0 2022/05/17 09:57:26.094 ZEBRA: 0: Add RNH 10.0.0.1/32 type Nexthop 2022/05/17 09:57:26.094 ZEBRA: 0:10.0.0.1/32: Evaluate RNH, type Nexthop (force) 2022/05/17 09:57:26.094 ZEBRA: 0:10.0.0.1/32: NH has become unresolved 2022/05/17 09:57:26.094 ZEBRA: 0: Client bap registers for RNH 10.0.0.1/32 type Nexthop 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: VRF default(0): Rcvd NH update 10.0.0.1/32(0) - metric 0/0 #nhops 0/0 flags 0x6 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: NH update for 10.0.0.1/32(0)(VRF default) - flags 0x6 chaflags 0x0 - evaluate paths 2022/05/17 09:57:26.094 BGP: evaluate paths: Updating peer (10.0.0.1(VRF default)) status with NHT 2022/05/17 09:57:30.081 ZEBRA: Event driven route-map update triggered 2022/05/17 09:57:30.081 ZEBRA: Event handler for route-map: 10.0.0.1-out 2022/05/17 09:57:30.081 ZEBRA: Event handler for route-map: 10.0.0.1-in

2022/05/17 09:57:31.104 ZEBRA: netlink_parse_info: netlink-listen (NS 0) type RTM_NEWNEIGH(28), len=76, seq=0, pid=0 2022/05/17 09:57:31.104 ZEBRA: Neighbor Entry received is not on a VLAN or a BRIDGE, ignoring 2022/05/17 09:57:31.105 ZEBRA: netlink_parse_info: netlink-listen (NS 0) type RTM_NEWNEIGH(28), len=76, seq=0, pid=0 2022/05/17 09:57:31.105 ZEBRA: Neighbor Entry received is not on a VLAN or a BRIDGE, ignoring

33.10.1.1. FRRouting (FRR) ログレベル

次の表で、FRR ログレベルについて説明します。

表33.8 ログレベル

ログレベル	説明
all	すべてのログレベルのすべてのログ情報を提供します。
debug	診断に役立つ情報。詳細なトラブルシューティング情報を提供するに は、 debug に設定します。
info	常にログに記録する必要がある情報を提供しますが、通常の状況ではユー ザーの介入は必要ありません。これはデフォルトのログレベルです。
warn	ー貫性のない MetalLB 動作を引き起こす可能性のあるもの。通 常、MetalLB はこのタイプのエラーから自動的に回復します。
error	MetalLB の機能に対して致命的なエラー。通常、これらのエラーの修正に は管理者の介入が必要です。
none	すべてのロギングをオフにします。

33.10.2. BGP の問題のトラブルシューティング

Red Hat がサポートする BGP 実装は、**speaker**Pod のコンテナーで FRRouting (FRR) を使用します。 クラスター管理者は、BGP 設定の問題をトラブルシューティングする場合に、FRR コンテナーでコマ ンドを実行する必要があります。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (**oc**) がインストールされている。

手順

1. speakerPod の名前を表示します。

\$ oc get -n metallb-system pods -l component=speaker

出力例

```
NAME READY STATUS RESTARTS AGE
speaker-66bth 4/4 Running 0 56m
speaker-gvfnf 4/4 Running 0 56m
```

2. FRR の実行設定を表示します。

\$ oc exec -n metallb-system speaker-66bth -c frr -- vtysh -c "show running-config"

出力例

!

Building configuration...

Current configuration:

frr version 7.5.1_git frr defaults traditional hostname some-hostname log file /etc/frr/frr.log informational log timestamp precision 3 service integrated-vtysh-config

router bgp 64500 1 bgp router-id 10.0.1.2 no bap ebap-requires-policy no bgp default ipv4-unicast no bgp network import-check neighbor 10.0.2.3 remote-as 64500 (2) neighbor 10.0.2.3 bfd profile doc-example-bfd-profile-full (3) neighbor 10.0.2.3 timers 5 15 neighbor 10.0.2.4 remote-as 64500 (4) neighbor 10.0.2.4 bfd profile doc-example-bfd-profile-full 5 neighbor 10.0.2.4 timers 5 15 address-family ipv4 unicast network 203.0.113.200/30 6 neighbor 10.0.2.3 activate neighbor 10.0.2.3 route-map 10.0.2.3-in in neighbor 10.0.2.4 activate neighbor 10.0.2.4 route-map 10.0.2.4-in in exit-address-family address-family ipv6 unicast network fc00:f853:ccd:e799::/124 7 neighbor 10.0.2.3 activate neighbor 10.0.2.3 route-map 10.0.2.3-in in neighbor 10.0.2.4 activate neighbor 10.0.2.4 route-map 10.0.2.4-in in exit-address-family ! route-map 10.0.2.3-in deny 20



<.> ルーターの bgp セクションは、MetalLB の ASN を示します。<.> 追加した各 BGP ピアカス タムリソースに対して、neighbor <ip-address> remote-as <peer-ASN> 行が存在することを 確認します。<.> BFD を設定した場合は、BFD プロファイルが正しい BGP ピアに関連付けられ ていること、および BFD プロファイルがコマンド出力に表示されることを確認します。<.> network <ip-address-range> 行が、追加したアドレスプールカスタムリソースで指定した IP アドレス範囲と一致することを確認します。

3. BGP サマリーを表示します。

\$ oc exec -n metallb-system speaker-66bth -c frr -- vtysh -c "show bgp summary"

出力例

IPv4 Unicast Summary: BGP router identifier 10.0.1.2, local AS number 64500 vrf-id 0 BGP table version 1 RIB entries 1, using 192 bytes of memory Peers 2, using 29 KiB of memory Neighbor AS MsgRcvd MsgSent TblVer InQ OutQ Up/Down State/PfxRcd V PfxSnt 10.0.2.3 4 64500 387 389 0 0 0 00:32:02 0 1 10.0.2.4 64500 0 0 0 0 0 never Active 4 0 2 Total number of neighbors 2 IPv6 Unicast Summary: BGP router identifier 10.0.1.2, local AS number 64500 vrf-id 0 BGP table version 1 RIB entries 1, using 192 bytes of memory Peers 2, using 29 KiB of memory Neighbor AS MsgRcvd MsgSent TblVer InQ OutQ Up/Down State/PfxRcd V

PfxSnt 10.0.2.3 389 0 0 0 00:32:02 NoNeg 4 64500 387 0 0 0 never 10.0.2.4 4 64500 0 0 Active Ω Total number of neighbors 2 1113追加した各 BGP ピアカスタムリソースの行が出力に含まれていることを確認します。

2424 出力に、受信したメッセージと送信したメッセージが**0**が表示されている場合に は、BGP ペアに BGP セッションがないことを示します。ネットワーク接続と BGP ピアの BGP 設定を確認します。

4. アドレスプールを受信した BGP ピアを表示します。

\$ oc exec -n metallb-system speaker-66bth -c frr -- vtysh -c "show bgp ipv4 unicast 203.0.113.200/30"

ipv4をipv6に置き換えて、IPv6 アドレスプールを受信した BGP ピアを表示しま す。203.0.113.200/30 は、アドレスプールの IPv4 または IPv6IP アドレス範囲に置き換えま す。

出力例

BGP routing table entry for 203.0.113.200/30 Paths: (1 available, best #1, table default) Advertised to non peer-group peers: 10.0.2.3 <.> Local 0.0.0.0 from 0.0.0.0 (10.0.1.2) Origin IGP, metric 0, weight 32768, valid, sourced, local, best (First path received) Last update: Mon Jan 10 19:49:07 2022

<.> 出力に BGP ピアの IP アドレスが含まれていることを確認します。

33.10.3. BFD の問題のトラブルシューティング

Red Hat がサポートする双方向フォワーディング検出 (BFD) の実装では、**speaker**Pod のコンテナーで FR Routing (FRR) を使用します。BFD の実装は、BFD ピアに依存しており、このピアは、BGP セッ ションが確立されている BGP ピアとして設定されています。クラスター管理者は、BFD 設定の問題を トラブルシューティングする場合に、FRR コンテナーでコマンドを実行する必要があります。

前提条件

- cluster-admin ロールを持つユーザーとしてクラスターにアクセスできる。
- OpenShift CLI (oc) がインストールされている。

手順

1. **speaker**Pod の名前を表示します。

\$ oc get -n metallb-system pods -l component=speaker

出力例

NAME READY STATUS RESTARTS AGE speaker-66bth 4/4 Running 0 26m speaker-gvfnf 4/4 Running 0 26m ...

2. BFD ピアを表示します。

\$ oc exec -n metallb-system speaker-66bth -c frr -- vtysh -c "show bfd peers brief"

出力例

Session count: 2PeerAddressStatusSessionId LocalAddressPeerAddressStatus3909139637 10.0.1.210.0.2.3up <..>

<.> PeerAddress 列に各 BFD ピアが含まれていることを確認します。出力に含まれると予想される BFD ピア IP アドレスが出力にリストされていない場合は、ピアとの BGP 接続のトラブル シューティングを行います。ステータスフィールドがdownと表示されている場合は、ノードと ピア間のリンクと機器の接続を確認します。speaker Pod のノード名は、 oc get pods -n metallb-system speaker-66bth -o jsonpath='{.spec.nodeName}' などのコマンドで判断でき ます。

33.10.4. BGP および BFD の MetalLB メトリック

OpenShift Container Platform は、MetalLB および BGP ピアと BFD プロファイルに関連する以下のメ トリックをキャプチャーします。

- metallb_bfd_control_packet_inputは、各 BFD ピアから受信した BFD 制御パケットの数をカウントします。
- metallb_bfd_control_packet_outputは、各 BFD ピアに送信された BFD 制御パケットの数を カウントします。
- metallb_bfd_echo_packet_inputは、各 BFD ピアから受信した BFD エコーパケットの数をカウントします。
- metallb_bfd_echo_packet_outputは、各 BFD ピアに送信された BFD エコーパケットの数を カウントします。
- metallb_bfd_session_down_eventsは、ピアとの BFD セッションがdown の状態になった回数をカウントします。
- metallb_bfd_session_upは、BFD ピアとの接続状態を示します。1はセッションがup である こと、0は down であることを示します。
- metallb_bfd_session_up_eventsは、ピアとの BFD セッションが up の状態になった回数をカウントします。
- metallb_bfd_zebra_notificationsは、各 BFD ピアの BFD Zebra 通知の数をカウントします。

. . . .

- - -
- metallb_bgp_announced_prefixes_totalは、BGP ピアにアドバタイズされるロードバラン サーの IP アドレス接頭辞の数をカウントします。接頭辞 と 集約ルート という用語は同じ意味 です。
- metallb_bgp_session_upは、BGP ピアとの接続状態を示します。1はセッションがup である こと、0は down であることを示します。
- metallb_bgp_updates_totalは、BGP ピアに送信された BGP更新メッセージの数をカウントします。

関連情報

• 監視ダッシュボードの使用については、メトリックのクエリーを参照してください。

33.10.5. MetalLB データの収集について

oc adm must-gather CLI コマンドを使用して、クラスター、MetalLB 設定、および MetalLB Operator に関する情報を収集できます。次の機能とオブジェクトは、MetalLB と MetalLB Operator に関連付け られています。

- MetalLB Operator がデプロイされている namespace と子オブジェクト
- すべての MetalLB Operator カスタムリソース定義 (CRD)

oc adm must-gatherCLI コマンドは、Red Hat が BGP および BFD 実装に使用する FR Routing (FRR) から次の情報を収集します。

- /etc/frr/frr.conf
- /etc/frr/frr.log
- /etc/frr/daemons 設定ファイル
- /etc/frr/vtysh.conf

上記のリストのログファイルと設定ファイルは、各speaker Pod の frr コンテナーから収集されます。

ログファイルと設定ファイル以外に、**oc adm must-gather** の CLI コマンドは、次の**vtysh**コマンドからの出力を収集します。

- show running-config
- show bgp ipv4
- show bgp ipv6
- show bgp neighbor
- show bfd peer

oc adm must-gather CLI コマンドを実行する場合、追加の設定は必要ありません。

関連情報

クラスターに関するデータの収集

第34章 セカンダリーインターフェイスメトリクスのネットワーク 割り当てへの関連付け

34.1. モニタリングのためのセカンダリーネットワークメトリックの拡張

セカンダリーデバイス (インターフェイス)は、各種の用途に合わせて使用されます。セカンダリーデバ イスのメトリックを同じ分類で集計するために、それらを分類する方法を確保する必要があります。

公開されるメトリクスにはインターフェイスが含まれますが、インターフェイスの出所は指定されません。これは、追加のインターフェイスがない場合に実行できます。ただし、セカンダリーインターフェ イスが追加された場合、インターフェイス名だけを使用してインターフェイスを識別するのは難しいた め、メトリックの使用が困難になる可能性があります。

セカンダリーインターフェイスを追加する場合、その名前は追加された順序によって異なります。また、異なるセカンダリーインターフェイスが異なるネットワークに属し、これらを異なる目的に使用できます。

pod_network_name_infoを使用すると、現在のメトリクスをインターフェイスタイプを識別する追加 情報を使用して拡張できます。このようにして、メトリクスを集約し、特定のインターフェイスタイプ に特定のアラームを追加できます。

ネットワークタイプは、関連する NetworkAttachmentDefinition の名前を使用して生成されます。こ の名前は、セカンダリーネットワークの異なるクラスを区別するために使用されます。たとえば、異な るネットワークに属するインターフェイスや、異なる CNI を使用するインターフェイスは、異なるネッ トワーク割り当て定義名を使用します。

34.1.1. Network Metrics Daemon

Network Metrics Daemon は、ネットワーク関連のメトリックを収集し、公開するデーモンコンポーネントです。

kubelet はすでに確認できるネットワーク関連のメトリックを公開しています。以下は、これらのメト リックになります。

- container_network_receive_bytes_total
- container_network_receive_errors_total
- container_network_receive_packets_total
- container_network_receive_packets_dropped_total
- container_network_transmit_bytes_total
- container_network_transmit_errors_total
- container_network_transmit_packets_total
- container_network_transmit_packets_dropped_total

これらのメトリックのラベルには、とくに以下が含まれます。

- Pod の名前
- Pod の namespace

• インターフェイス名 (例: eth0)

これらのメトリックは、たとえば Multus を使用して、新規インターフェイスが Pod に追加されるまで 正常に機能します。

インターフェイスのラベルはインターフェイス名を参照しますが、そのインターフェイスの用途は明確 ではありません。多くの異なるインターフェイスがある場合、監視しているメトリックが参照するネッ トワークを把握することはできません。

これには、以降のセクションで説明する新規の pod_network_name_info を導入して対応できます。

34.1.2. ネットワーク名を持つメトリック

この daemonset は、固定の値が 0 の pod_network_name_info 測定メトリクスを公開します。

pod_network_name_info{interface="net0",namespace="namespacename",network_name="nadname
space/firstNAD",pod="podname"} 0

ネットワーク名ラベルは、Multus によって追加されるアノテーションを使用して生成されます。これ は、ネットワークの割り当て定義が属する namespace の連結と、ネットワーク割り当て定義の名前で す。

新しいメトリクスだけではあまり価値がありませんが、ネットワーク関連の container_network_*メ トリクスと組み合わせると、セカンダリーネットワークの監視に対するサポートが強化されます。

以下のような promql クエリーを使用すると、k8s.v1.cni.cncf.io/networks-status アノテーションか ら取得した値とネットワーク名を含む新規のメトリクスを取得できます。

(container_network_receive_bytes_total) + on(namespace,pod,interface) group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_receive_errors_total) + on(namespace,pod,interface) group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_receive_packets_total) + on(namespace,pod,interface)

group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_receive_packets_dropped_total) + on(namespace,pod,interface)

group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_transmit_bytes_total) + on(namespace,pod,interface) group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_transmit_errors_total) + on(namespace,pod,interface) group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_transmit_packets_total) + on(namespace,pod,interface)

group_left(network_name) (pod_network_name_info)

(container_network_transmit_packets_dropped_total) + on(namespace,pod,interface) group_left(network_name)